KAIZO

改造

九月號

1930

朝鮮篇

日本地理大系 第八回配本 豫告

朝鮮！ 地理的、歴史的に、政治的、經濟的に七千萬同胞は朝鮮を知れ!! 國家の前途を思ふ者、人類の幸福を祈る者、全てが朝鮮を知れ!! 吾等は玆に何等の成心なく而も科學の利刀を以て赤裸の朝鮮を發く。 金剛山、鴨綠江は勿論國境警備隊の活動、漂筏人夫の生活、原始人火田民の移動生活、日清役の古蹟、仁川沖の蜃氣樓、更に幽艷の妓生と怪奇な天下大將軍が釀し出す詩と獵奇の世界等、果然本篇は學術最高の資料たるは勿論、銷夏絕好の讀物!!!

内容一斑

□滯鮮十年、足跡全鮮に遍き地學雜誌「地球」主宰、京都帝國大學教授中村新太郎氏指導の下に計畫、更に編輯部員が今初夏地質調査の爲渡鮮せる中村教授に隨行し、その親しき指導の下に全鮮に活躍し、總督府、京城大學等の絕大の應援を得て此一篇は完成した。

□**寫眞** 六百餘面、特刷グラビヤ版三十二頁、ダブルトン二十四頁、其他上質アートペーパー網目銅版四百數十頁、天然色印刷四面等美麗鮮明。

□**地圖** 二百五十萬分一地勢交通大地圖。地質圖。產業分布圖。人口分布圖。氣候圖。火田民聚落分布圖。水利組合耕地面積分布圖。古地圖三面。プロツタダイヤグラム四面。主要都市名勝古跡圖二十面。其他。

□**本篇執筆者** 京都帝大教授中村新太郎、理學博士中井猛之進、京城大學教授大內武次、同教授安倍能成、同教授小田省吾、同教授文學博士高橋亨、同教授理學博士小林晴治郎、朝鮮總督府文書課長萩原彥三、同技師三井榮長、同鐵道局技師澤崎修、今村鞆其他在鮮知名諸家三十餘氏。

(配本期日八月下旬！)

東京市芝區愛宕下町 **改造社** 振替東京八四〇二番

現代日本文學全集

第三十九篇（第四十六回）九月上旬 配本豫定

社會文學集

明治大正――新興日本の文學界に思想的最尖端を歩んだ先驅者の業績は此一巻に集大成された！これこそ社會思想混沌の現代に於て思ひを將來のより世界的日本にひそむる一切の日本人の、正に熟讀、檢討、以て心の糧とすべき絶大の資料だ！

内容

中江兆民篇 一年有半

酒井雄三郎篇 「クー・デ・ター」及國安 社會問題 社會黨の運動 五月一日の社會黨運動會に就いて 五月一日及び總擧同盟罷工 『社會問題』と『近世文明』との關繫に就きて

矢野龍溪篇 新社會

安部磯雄篇 地上の理想國瑞西

幸德秋水篇 （社會主義に關する論文、其他、選定中）

堺利彦篇 堺利彦傳

木下尚江篇 火の柱

大杉榮篇 日本脫出記 自敍傳

發行所 東京芝區愛宕下町 改造社 振替東京八四〇二



改造九月號目次

軍縮、減税を必ず斷行せ

政府が政道を行ふには自己の政策、政綱としてかかげたる所を眞面目に斷行すれば可。民衆の前に掲げたる政策大綱の履行不能を招來したるときは卒直に潔く辭職を斷行する勇氣がなくては國民の信頼に打克つことは出來ないのである。自己の内閣が一日でも壽命の長からんことを祈るのは全黨員の至情であらふが、しかも自己の内閣の命脈を保つ上に全然自分の政策政綱と違つた道までも歩かうとするのは政治を邪道に陷れ、立憲政治を片つ端から轉覆する行爲である。民政黨内閣の看板は軍縮によりて生じたる費額を以つて直に減税に充當する誓約であつたから海軍なり、陸軍なりの軍縮は斷じて行はなければならない。そして減税も斷行せねばならない。歳入見積減のために減税實行を延期してはならぬのだ。民政黨十大政綱のうち民衆に一番直映するのは何と云つても軍縮と減税の實行にある。この二つの事業を斷行ができねば失業救濟もできないのである。我々は濱口内閣が詭辯を弄せずして必ずこの問題に邁進するだらふことを信ずる。だが閣僚のうちにも民政黨内部にも餘技的な事業に走らふとする人々が多く、またその勢力も無視のできぬ状態にあるから聊か懸念にたへぬものがある。我々は返す返すも玆に言ふ。斷片的なる事業は顧慮するな。政治家はいつでも眞ッ正面を戰ふべきものだ。眞ッ正面を戰はないものには眞の勇氣が出ない、眞の力が出ない。眞の味方が出ない、强い輿論が味方せない。海軍問題で樞府を恐るる必要はない、そんな三百的な老耄者どもが、いかにジタバタしたところで國民的な、國際的な問題を阻止することができるものでない。國民の負擔を輕減するのは軍縮以外に道がないではないか、國民を敵としてどうして老耄者が戰ひ勝つことができるか。それよりは陸海にわたる軍縮を此際目をつぶつて斷行すべきである。それを斷行ができねば民衆は離反するばかりである。民政黨が生きるも、死するもこの一途の解決如何による。さうでなかつたらいくらでも政策ばかり並べ立てて一向に實行せず、そして民衆より見離されて野垂死した政友會内閣と何の異るところがあらふ。濱口内閣でも民政黨でも大悟一番せなくてはならぬ秋である。



非女性主義者(アンチ・フエミニスト)としてのバーナード・ショウ

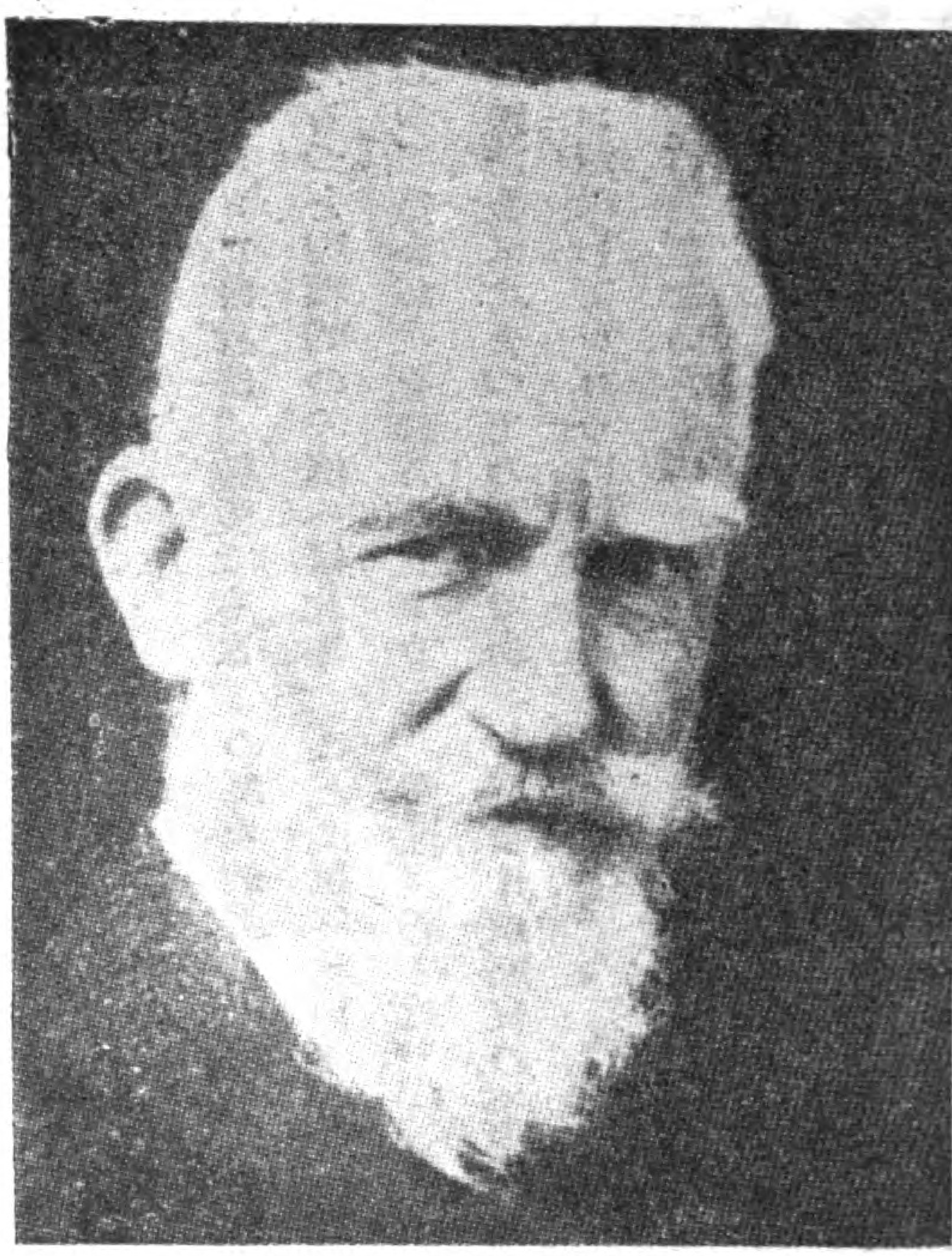
長谷川如是閑

一

ジョージ・バーナード・ショウは決して燕尾服を着ないといはれた。一九一〇年にショウは、時の陸軍大臣であつたハルデーン卿に晩餐に招かれたことがあつた。その時ハルデーンはショウに、『われ〳〵の晩餐會には誰れも燕尾服を着て來るものはないから、そのつもりで』と云つたので、ショウは普通の黒地の服で出掛けた處が、來て見ると燕尾服を着ないのはショウばかりであつた。ショウは、燕尾服はもつてゐたのだが、ハルデーンに誰れも燕尾服を着て來るものはないといはれたので、態々洋服屋に黒い服を拵へて着て行つたのであつた。ショウは黒地の平生着などはもつてなかつたので態々新調しなければならなかつたのだ。

これと同じやうな間違ひは、ショウが女性主義者(フエミニスト)であるとい

はれてゐることである。いかにもショウは社會主義者としては、あらゆる女性運動の加擔者ではあるが、劇作家としてのショウは頑强な男性中心主義である。われ〳〵は、ショウ自身が頑强に主張するにも拘らず、彼れをエコノミストであるよりはより多く劇曲家であるとするものだから、彼れが女性主義者であるや否やは、かれの劇そのものによつて判斷すべきであつて、彼れの經濟學や社會主義やまたは彼れの女權運動に對する態度やで判斷すべきものではない。更らに劇そのものから判斷するといつても、われ〳〵の意味は、チエスタートンが云つてゐるやうに、ショウの劇が性的動機を中心として發展してゐないといふことによつて彼れをアンチ・フエミニストとするのではない。



バーナード・ショウ氏

チエスタートンはショウの『惡魔の弟子』を例にとつてそれをいつてゐる。この劇で主人公のダッジョンはアンダソン牧師の身代になつて絞殺されやうとするのだが、普通の作家ならば、屹度牧師の妻に對する愛情をその犧牲の動機にしさうな所だが、ショウはさうでなく全くその時のダッジョンのたゞ何といふことなしに全く神秘的な出來心から我れにもなく犧牲となるといふ解釋をもつてゐる。それをチエスタートンは『彼れ（ショウ）はすべての熾烈な狂熱の源は性慾にありとする性慾主義の偶像崇拜に反對する』『彼れは政治的にはフエミニストだが感情に於てはアンチ・フエミニスト』云々といつてゐる。

ショウが性慾主義に反對してゐるといふチエスタートンの斷

定もいさゝかをかしいが、然しさうであつたとしても、フエミニズムといふ意味を性慾の偶像崇拜と同視して、それにショウが反對するから彼れはアンチ・フエミニストであるといふのは、フエミニストにとつては迷惑千萬の解釋である。フエミニストとはチエスタートンの考へる如き穴守稻荷の信者のやうな、性慾偶像の崇拜者のことではない。

元來ショウの有名な『性の力』をショウ自身は、戀愛でもなく、性慾でもなく、獸慾でもなくもつと物理的の、例へば化學的親和力のやうなものだなどゝ云つてゐるが、それこそショウ一流の『神秘的物質主義』の言ひ艸たるに止まつてゐるのであつて、その實それはチエスタートンが決してショウにはないといつた性慾の偶像崇拜の一つの様式に過ぎないともいへるのである。ショウは、男女が、性慾からでもなく、戀愛からでもなく、肉慾からでもなく、經驗からでもなく、空想からでもなく、あらゆる人間的のまたは動物的の何ものからでもなく、たゞ全く、物と物とをくつゝけてゐるやうな力でくつゝいてゐるのだといふだけで、それによつて彼れを性中心主義でないとはいはれない。だから、女性主義とは、性中心主義のことであるといふ解釋に從へば、ショウは立派なフエミニストなのである。

われ／＼がショウを女性主義者でないといふのは、彼れの劇が性慾を中心としてゐないといふことではなく、彼れの劇が、女性を中心とする歴史を展開せしめてゐないといふことである。彼れの劇に於ては、社會は女性を又は女性的なるものをその歴史的發展の効力としてゐることが餘りよく現はれてゐないことは拒み難い事實である。

女性主義とは、一言でいへば、男性を中心として發展しつゝある今日の歴史の否定であらねばならぬ。社會が男性の獨裁の下に、女性を、又生活の女性的の方面を不自然に壓迫して、世界が男のみから出來てゐるものゝやうに發展しつゝある事實の變革を要求するのが女性主義である。さればそれは女性を性中心主義から見ることではなくその正反對を主張するものである。性中心主義は、女性をたゞ性的の生物として見るといふ傳統的見地であつて、即ち男性主義の社會組織に於ける女性の地位に立脚する意識である。チエスタートン流のフエミニズムの解釋は藝術家の好んで採るらしい見地であるが、それは今日の意味

のフェミニズムとは正反對の『男性主義』の他の半面を示してゐるものに過ぎない。

女性主義は、現在の社會構成そのもの又は政治組織そのものに於て、女性の『權威』を擴大せしめんとする要求ではなく、全然それと異る構成と組織とをもち來すの要求である。それは今日の社會史や政治史に於ける女性の勢力を伸展せしめることを求めるのではなく、女性の生活史がそのまゝ社會史であり政治史であるところの組織を求めるのである。それはたとへば武門の社會に於ては女性の勢力を北條政子のそれのやうなものたらしめんとする運動ではなく、武士といふ男性職業者を中心とする社會組織の打破を求めるものである。

この意味で、藝術上の女性主義は、やはり今日の歴史に現はれた矛盾の暴露の一樣式であらねばならぬ。この場合の矛盾とは特に男性獨裁のための社會的缺陷である。而して一般の矛盾が然る如くそれは一面に於ては、現在の歴史に於てその進化が起りつゝある事實の認識である。言ひかへれば、それは女性の存在が、社會的構造とその發展との條件を決定する要素として男性のそれと同樣の水準にまで上らうとしてゐる事實の認識である。

かゝる社會的事實の發生しつゝある領域が即ち女性主義の發祥地なのである。藝術上の女性主義はこの事實の成立を基底とした創造であらねばならぬ。それは性の問題ではなく、もつと廣汎の社會生活一般の問題である。女性主義は、男女關係に於ける主義ではなく、社會關係に於ける主義である。

ショウの劇は、以上の意味によれば、女性主義であるよりは寧ろ男性主義である。ショウ劇の歴史は、今日の歴史が男性のそれであることとの根本事實に對する批判であるよりは、その歴史のうちに於ける女性の努力の擴大を示してゐるものである。それは女性擴張主義であり、北條政子主義であるが、女性主義者ではない。その意味に於て彼れは男性主義者である。

二

ショウを女性主義者にするに有力であつた彼れの作品は、その傑作の一に數へられてゐる『キャンデイダ』である。この劇の主人公のキャンデイダはクリスチン・ソーシャリストのモレルといふ牧師の妻であるが、劇に現はれた六人の中、破綻の

ない性格の持主はこのキャンデイダだけで、他の五人は何づれも『多少狂氣じみてゐる』連中で職業的にか、思想的にか生理的にか因習的にか本能的にか、それ〲缺陷をもたないものはないのである。モレルはイギリス固有の傳統的の道德や宗教に反逆して、正義人道の鬪士としての覺悟もあり、技倆もあり、寧ろその方面に成功を收めてゐるが、それだけその社會主義は彼れが打ち破らうとしてゐる傳統的の、因習的の、道德宗敎とたいした變りのない、型にはまつた平凡極まる說敎になつてゐるのにちつとも氣がつかずに得意になつてゐる紳士型の人格である。それに對してユージン・マーチバンクスといふ靑年詩人がある。彼れは全く世間知らずの、ちつとも實行力のない、全く子供じみた空想家で『散文的の人間からは害物視され詩人的の人間からは天使とも見られる』といつたやうな人間で、キャンデイダに對する子供らしい戀をするために世の中にまた此の劇に產れて來た男である。キャンデイダはそれを彼女の可愛い情人のやうに取扱ひ、ユージンは眞劍に彼女に對する戀を發展させやうとする。それがつひにモレルとの間の葛藤となつて、二人の間に腕力沙汰の爭ひまでやつた揚句、二人はキャンデイダ自身に二人を自由に選擇させろといふことになる。而してキャンデイダは結局モレルを選び、聰明そのもののやうに、二人を說明し自分を說明する。

この劇には男はモレルとユージンとの外にはキャンデイダの父親のバージスと、モレルの弟子のレクシーとがあり、女はキャンデイダの外にはモレルのタイピストのガーネットがゐるだけだが、バージスは我利〲の實業家であり、レクシーはモレルの奴隸のやうな全く意味のない男であり、ガーネットはこの劇ではたゞモレルに對して淡い性的感覺をもつてゐるだけの女である。即ちこの劇で自分自身を全く自由な、獨立の、周圍の條件から拘束されずに周圍の條件を支配する、解放された個人としてもつてゐるものはキャンデイダ一人である。そのことが作者たるショウによつて念入りに高調され、そこから劇の結末が導かれてゐるのである。而してそのキャンデイダは、自分の夫モレルとプラトニックの情人ユージンとを選擇せねばならぬ破目になつた時に、自分は弱い方を選ぶといふ。モレルは自分でなしに敵方の詩人が選ばれたのかと思つてがつかりする。その前にキャンデイダは、二人で自分を競爭するやうだが

何んな値をつけるつもりかと二人に問ふと、モレルは自分の腕力、才能、權威、地位その他、すべて男子が婦人を守るために必要なもの婦人に捧げるもののすべてだと答へ、ユージンは、たゞ自分の弱々しさと寂しさと自分の憧憬とだけだと答へる。だからモレルは弱いものを撰ぶとキャンディダに云はれて、相手の詩人が撰ばれたものと早合點したのである。けれどもショウの解釋によれば弱いものは詩人でなく、この社會改革家なのである。さうして最も强いのはこの詩的なるものと散文的なるものとの上に、天上的なるものと地上的なるものとの上に、空想的なるものと現實的なるものとの上に、堂々と君臨する女性であるといふのである。蓋し彼女は、ノラのやうに人形の家を出るべく『餘儀』なくされた境遇の奴隷ではなく、出やうと思へば出る事が出來、出まいと思へば出ずに居られ、詩人を撰ばうと説教家を撰ばうと又双方を撰ぶまいと、それを彼女に强制する何物もなく全く自己の自由な人間だからである。

といふ所からこのキャンディダによつてフェミニストたる刻印がショウの額に捺されたのである。尤も一方ではこの劇によつてショウが傳統的の家や母性愛やに執着をもつ、案外『健全』な安全思想家であるといふやうな説も出たのであつたが、然しそれはむしろショウが女性の機能に對してやゝ具體的の見地をもつてゐたからで、それはまたイギリスでは既にイプセン式の抽象的な『解放』の時代を經過してゐたからでもあつた。

然し此劇はキャンディダの性格や地位を説明するよりももつと外の目的があるやうに、少くとも劇の構成の上からは考へられる。それは即ちキリスト敎社會主義の批判である。それのブルジョア的内面の暴露である。さうしてそれの解釋に二人の人間が使はれてゐるのである。始めはモレルと爭つて今はそれと和解し、彼れの演説の成功のためにシャンパンをぬくといふキャンディダの親爺バージスと詩人ユージンとがそれであるが、バージスはこの社會主義寺院の機構と彼れ自からの資本主義組織との融合のためにシャンパンをぬいたのであり、ユージンはモレルの主義の、思想と道德と腕力との虚僞と因襲と、無力と、これを要するにその社會改革主義が血と肉とを失つた骸骨になつてゐることを、星や菫や戀愛をかりて喋舌つてゐるのである。

所がキャンディダに至つて血ばかりで肉のない幽靈のやうに

腰から下のない、空想家と、形式ばかりで、口先きばかりで、ちつとも空想のないおかげで人間のことも世間のことも、男の事も女の事もわかつてゐない實際家とを二つ列べて撰擇することゝなつたが、それはたゞ二つの抽象的の人間の種類を撰擇するのであつて、それらの人間の組織してゐる社會を撰擇するのではなかつた彼女は、この組織に於ける人間としてどちらが妥當してゐるかといふ判斷によつてモレルを撰んだのであつた。この組織には適しない詩人が撰ばれなかつたのは當然である。

　これはイプセン時代のノラのそれに比べて遙かに革命的意義の乏しい問題である。ノラは解放された女ではなく、これから解放されんことを求めた女だが、彼女は『人間』を問題としたのではなく又人間の『性格』を問題としたのではなく『組織』を問題としたのであつた。その反逆は『人形の家』に對するそれで誰れ一人の個人に對するものではなかつた。故に彼女は歴史に對して消極的になりと働きかけた女であつた。

　反之キャンディダは墮落したキリスト教社會主義の思想にも組織にも反逆せずに、モレルその人の『人間』によつて彼れを愛し彼れに執着し、彼れに安定してゐるのである。解放された女も現在のこの組織に於ては、キャンディダ其人であることが最も妥當的であり、聰明であり健全であり、從つて幸福であるに相違ないが、社會劇の生命は人間の性格を求める所にあるのではなく、組織の崩壊即發展——一方に崩壊があれば他方に必ず發展があり、一方に發展があれば他方に必ず崩壊がある——を解釋するにある。然るにキャンディダ劇はその反對に折角意圖された組織の批判は　解放された女の、この組織に於ける個人的性格の完成によつて終了してゐる。

　かゝる劇が女性に對する革命的解釋であるかの如く傳唱されてゐるのはむしろ不思議である。それは恐らくこの劇が最も具體的に且つ適切に當時のイギリスの解放された女の地位を具象してゐたからではあるまいか。さういふ意味では、この劇は時代の傑出した作品の一であるに相違ないが、これによつてシヨウをフエミニストにする意味内容をもつた劇ではない。

三

『ウオーレン夫人の職業』は『キャンディダ』に比べればやゝ嚴格な意味に於ける女性主義的作品である。この劇ではイギリ

スの貴族が國際的な賣笑業の資本主であるといふことになつてゐるので檢閲官のために上演禁止になつたものであるが、この劇も、現はれる男性の悉くは缺陷ある性格の持主で、さうでないのは女性だけといふ點はキャンデイダと同じである。主人公たるウォーレン夫人とその私生子ヴイヴイとは境遇と時代とによつてそれ〴〵全く違つた方向をとつたゝめに相互の分離を來したが然し性格的には、共に『解放』された叛逆兒である。母は資本主義組織に於ける奴隷階級に生れたが、偶然の機會とその境遇との協同の下に賣笑婦となり女衒となり、多年の辛酸を甞めてつひに國際的の賣笑業を起しイギリスの貴族と協同してヨーロッパ大陸の大都會にその意味の『ホテル』を澤山に建設するに至つた女である、娘のヴイヴイは母のこの事業の利益によつて高等教育をうけた現代女性の典型であつた。大陸にばかりゐて、自分の素性と商賣を娘にかくしてゐた母は、娘の卒業後にイギリスの別莊に久しぶりで戻つて來た時、娘のためにその職業を發見され、その時は自分の生ひ立ちとその過去の奮闘とを娘に語つてその同情を得たが、今は財産もありそんな職業をつゞけなくとも立派な生活が出來る身分であるにも拘らずなほそれを廢業しないといふので、娘は全く母をすてゝ獨立の職業婦人となるのである

この劇に出て來る男性にはモレルほどの人間もなく、放蕩貴族で夫人の情婦であり、出資者であるクロフツ、夫人の昔の情人でヴイヴイの父親たる墮落牧師のサミュル・ガードナー、その伜の、容貌で婦人の心を惹きつける外に仕事も能力もないフランク、『藝術家らしい』プレード、といつたやうな自分からも他人からも何うでもいゝやうな人間ばかりで、たゞウォーレン夫人と關係するためにこの世に生れて來たものに過ぎない。その中で最もやくざなフランクをショウは比較的人間らしく作つて丁度キャンデイダに於けるユージンのやうな役割をそれに與へてゐる

ヴイヴイは母親から始めてその職業をきかされた時には、その時の母親が自分の幼時の悲慘な貧乏人生活を具體的に直寫する力強い言葉に魅せられて、母が憤を發してその職業に突き進んで行く徑路の自然さとその道德性とに深い同情をもつことが出來、それまでは互に疎んじ合はねばならなかつた親子の仲が、これからすつかり融合すると大に喜んだ矢先きに、既に

閉ぢられた過去の歴史であると思つた母の話は、すべて現在にかゝつてゐることで、ヴイヴイ自身の生活もそれによつてゐるものであることを知つた彼女は、苦しみ惱むことの代りに手取り早く腹を立て、憤然として、ロンドンに出て友人と協同の事務所をもつて職業に沒頭することゝなるのである。

　ヴイヴイが自分の惱み悶える代りに、母を煩悶させて、『お袋から大學教育を盜んだ』お蔭で獨立獨歩の職業婦人となつて、『お袋の白髮頭に唾をひつかける』ことによつて大團圓となるのは、老父を急死させてピタともしないマグダのそれに似てゐるが、然しこれも遺憾ながらフエミニズム的立脚地からは、マグダのそれに比べて少し見當が違つてゐるのである。何となればヴイヴイの場合は彼女の母はマグダの父と違つて、當時の社會形態に於ける女性の傳統的地位からは立派に解き放されてゐるのである。この女街の女親分は、決してこの娘を家族主義の傳統によつて縛らうといふのではなく、たゞ母たる娘たる自然の關係の連續を要求してゐるのである。それを娘は母がなほ汚れた商賣をやめないといふことによつて、母がその姉のやうにその職業で儲けた金の利子で『清い』生活をしてゐないといふことを怒つてゐるのである。『何んで姉さんのやうに足を洗はないのです』と母を怒鳴りつけてゐるのである。一つの汚らはしさから他の汚らはしさに足を入れかへないことを怒つてゐるのである。これに對して母は、自分は金が出來たとて遊んでゐることは出來ない性分で、何か仕事をしなければゐられないのだが、現にやつてゐる仕事の外に自分に出來る仕事は何もないからこれをやるより仕方がないのだといふ。それは立派に解放された女の態度である。それはたゞ內容の歪められた然し立派なフエミニズムである。キヤンディダのやうに、自分の亭主を詩人に比べて、より實際的で亭主の資格があるといつて、危うく追ん出そこなつた家庭に收まり返へるやうな女よりは遙かに强硬なフエミニストである。

　然るにわがバーナード・ショウはこのお袋を叩き伏せて『もうたんまり出來たらうから利子でお喰べなさい』などゝいふことを慫慂する娘に凱歌をあげさせてゐるのである。『汚らはしい商賣で儲けたお金からは小遣も貰うまい、利子で喰べてゐるなら私もそれで喰はして貰ふ』といふのも隨分妙なフエミニストだが、その汚らはしい商賣に取り縋つたゝめに生きることができ

て、つひにそれから離れゝば退屈で生きてゐられないといふやうな必然に陥つた母親に、貴族主義の叔母のやうになれといつて、それをきかないので絶交するとは、大學卒業生にも似合はずロジックの合はない現代娘である。

されば此の劇はイギリス政府からばかりでなくあらゆる政府から上演を禁止される處のある劇である。貴族主義の政府からは、貴族が女衒の金主であるといふことの暴露のために禁止されねばならず、ブルジョア政府からは人身賣買の公行を暴露するものとして禁止されるであらうし、社會主義政府からは利潤生活を肯定するものとして禁止されねばならぬ。

女性の不正な職業に對してたゞその制度を惡んで、その必然性にふれず、辛うじてその空氣から脱れ出るといふことは、決してフエミニストの態度ではない。ショウは此の劇において、ウオーレン夫人に對してよりは、寧ろその娘ヴイヴイに對してもつと強く批判的態度をとるべきであつた。

四

賢明な婦人とそれに嚴重に教育された子供と、反對に不賢明なそれらの夫であり父である人を役者とした『ユー・ネヴアー・キヤン・テル』も亦ショウをフエミニストと呼ばしめるに至つた罪を負ふべき劇の一つである。

クランプトンといふ善良で、然しながら理窟もわからずむかつ腹を立てるロンドンの實業家の妻であつた婦人が、夫が子供を打つために鞭を購つたことに憤慨して別居を申出て、子供をつれてマデイラ島に移り、クランドン夫人と名をかへて、『二十世紀の料理法』『二十世紀の信仰』『二十世紀の服裝』『二十世紀の何何』といふ叢書を著してマタイラ島を震駭せしめたが子供が年頃になるので、十八年ぶりでイギリスに渡つて海濱のホテルに滞在中、その土地の齒科醫の家で偶然その家主である、夫のクランプトンに逢つて、又々波瀾を起すが、つひに辯護士が仲直りをさせるといふのである。

この劇のフエミニズムは、教養ある理性的の女性と、成上りの單純な感情家の夫との對照によつて表現されてゐるが、然しショウは此劇に於て、全く無遠慮に彼れ一流の男性主義をもつてその女性主義をたゝき伏せてゐる。この劇に出て來る女性の最も賢明なるあるものはいふ迄もなくクランドン夫人である

が、彼女は子供達に對して最も理想的の教育を授けたといふ堅い確信をもつてゐるに拘らず、その教育を最も充分に享樂した宅の長女のグローリアから『おゝ、お母さんは私に何も教へない、何にも教へない』と頭ごなしにやられてしまうのである。蓋しそれは『二十世紀の何々』の叢書のうちには『二十世紀の性的生活』といふ最も肝心な一冊を缺いてゐることの結果であつた。さうして育てられた子供のうち、ショウが殊にそれに優越を與へたのは、賢明な女性の『二十世紀の教育』を最も少くうけ、且つそのうけた部分を痛烈に然し無邪氣に茶化してゐるヒリツプ、ドーリーの二人の少年兄妹であつた。姉のグローリアは、母の賢明に極度に追從しようと努めてゐたが、『二圓五十錢齒醫者』と稱する若い才子に出會つてからは、そのセコンドハンドの賢明はすつかり光を失つて、つひにその尊敬する母に對して『あなたは何も教へてくれなかつた』と叫ぶに至つたのである。

然るに此劇に現はれて來る男といふ男はそれ〴〵何かの特徴をもつた、さうしてその特徵をもつて、それ〴〵そこにゐる女性共を征服してしまうやうな男であつた。第一に齒醫者のヴアレンタインは、『無教育』のグローリアを擒縱自在に取扱つて、つひに彼れ自身の征服したグローリアにその征服の完成を强制されて悄氣返るのである。辯護士のマクマスはその雄辯をもつてクランドン夫人を征服して、夫との妥協の端を開かしめ、同じく辯護士のブーンはその法律家的才能をもつて一同を大團圓に導いた。

この劇でショウは標本的なる叡智そのものをマリン・ホテルの無給仕ブーンに具體化させた。ブーン給仕は『ユー・ネヴアー・キヤン・テル』といふ劇の名づけ親であるが、彼れはその給仕としての職務の遂行に於て、即ち飲食物の註文をうけること、それをテーブルに排列すること、適當の時期に不用の用事を辯じ、不用の時期に適當の會話を挾むこと等々によつて絕えず事局の終了を準備するのであつたが、つひに彼れの息子の有名なる辯護士ブーンに於て、それが法律的に纒められるのである。

善意にして、野蠻の言語擧動の外に何等事局を進展させる役割をもち得ないクランプトン老人でさへも、彼れが男性である事のために、ショウによつて彼れの賢明な妻クランドン夫人よりも、尊敬されないまでも飜弄を免れることが出來た。それは

彼れが『二十世紀云々』のやうな大部數を費つた大著述をもたない故でもあらうが、十八年前に引離された子供等の感情も最後に何うやら母へよりはこの父の方へと傾きかけるやうに、ショウはこの頑固老爺に同情した。

さうしてショウは論理的なグローリアを論理的に克服した。生き馬の目をぬくやうな、然しながら無一文の齒醫者ヴアレンタインとこの頑迷不靈の、石に躓けば石が割れるやうな親爺とを最も親密な友達にして、ヴアレンタインの果てしなく滯る家賃を火のやうに催促しながら、一文の支拂をうけないことに大滿足を感じさせた。

ショウはこの劇に於てもまた彼れの他の多くの劇に於ける如く、女性をして男性に對して、絶えずイギリス傳來の女性の權威による高壓的態度を發揚せしめながら、それが結局、男性を中心とする歷史の展開に對して何の效果をも持たないといふことを強く示してゐる。クランドン夫人のガラスのやうな透明な理性も彼女が病犬のやうに排斥してゐる夫クラムプトンに彼女自身を復歸せしめるに至つた歷史の進展を刎ね返すことが出來ず、また子供らに彼等の父はたゞ子供らを打つための鞭を購入した動物に過ぎないと教へて、彼等に自分の父をクラムプトン氏などゝ呼ばしめたにも拘らず、子供等がつひに『お父さん』と懷しげの叫び聲を發することをどうすることも出來ないのであつた。

五

それはフェミニストの劇としては、餘りに殘酷である。

ショウは好んで女性が終極の勝利を占めるか、さうでなければ、どの女性かがその中で勝ち誇る劇をつくる。『キャンディダ』然り『ウォーレン夫人の職業』然り『ユー・ネヴアー・キヤン・テル』然り『ピグメリオン』然り『聖ジョン』然り、『ジッタの贖罪』然り、その代り彼れの劇の殆んどすべては全體的にか部分的にか女性の勝利をもつてゐないものはないといつてもいいであらう。それにも拘らず、ショウの女性の勝利は、より大きい男性の勝利の廻りに跡つてゐるものである場合が更らに多い『聖ジョン』は全く女性の勝利を中心としてゐるもので、その最後に於てそれを徹底させるエピローグまでつけ加へられてゐるが、然しこの劇の主人公は女性と呼ぶには余りに抽象的

な、象徴的の存在であるからフェミニズムとは必ずしも交渉があるとはいはれない。

ショウのフェミニズムは、彼れがイプセン主義に於てそれを見逃したといふ『女性は、彼女の女らしさを拒否するにあらざれば又、彼女の夫や彼女の子供や社會や法律や彼女以外のあらゆる物やに對する義務を拒否するにあらざれば決して解放されることは出來ない』否彼女自身に對する義務などゝいふことは、債務者と債權者とが同一人であるといふことだから意味をなさない。それ故に『女性はすべての義務といふ義務を拒否すべきである』『理想の破壞は社會の敵といはれても何でも、世界から虛僞を拭ひさるものだ。』といふ所から出立してゐるのであるがショウ自身の劇に於ては、この義務の拒否に、ややもすれば中心があつて、そこに男性があり、その關係をめぐつて甚だ圓滿に終了することが鮮くない。

結婚制度に對する反抗の樣式として『壓迫されて(オパアールールド)』がある。二組の夫婦が互に暫時分かれて、ある期間夫婦關係を『休戰』する約束で、互に反對の方向に世界旅行に出たところが、その二組の夫婦の各が交互に知り合ひとなつて甲組の夫は乙組の妻に、乙組の夫は甲組の妻に××××ことゝなつたが、やがてそれが偶然ホテルで出喰はして、互に露見した。然しその場で討議の結果、夫婦は休戰狀態からもとの交戰狀態に返るが、然し休戰中×××××××××××××××××××××××××といふことになる。即ち彼女は『もし貴女が御親切に私のセンチメンタルの夫を私の手から時々おひきとり下さいますと、私は大變ありがたいと存じますし、……私も亦貴女の御立派な旦那樣を、貴女が時々御倦き遊ばした時には、御機嫌をとつてあげるといふことに致さうぢやありませんか』といふのである。彼女の亭主はそこで『それを私は「一妻多夫主義」といふのだよ』と抗議するのだが、自分もその主義の實行に加擔してゐるものである以上、形勢を如何ともすることが出來ない。

女性等はかくして結婚制度を拒否するが、それはお互の亭主が互に『私は貴下の妻君を愛してゐます。それ切りの話です。』『私だつて貴下の妻君を愛してゐます。それが何うしたといふのです。』といふ相對性原理に立脚してゐる形勢の下に可能の事實である。さうして此連中は『世界から虛僞を拭ひ去る』手間を惜んで、この二組の夫婦が互ひ違ひに手を組んで仲よくホテ

ルの食堂に入つて行くのである。

かゝる關係は、現在イギリスの上流中流の社會に『圓滿に』進行しつゝある事情で、女性の義務の拒否がちつとも現在の制度を妨げない微妙の狀態である。ショウのフェミニズムは何うもかういふ形態をとつて、フェミニズムそのものが、彼れのコメディの『笑ひ』の動因となつてしまう。悲劇作家と喜劇作家とはそこに多少の損得があることを免れない。

『ジッタの贖罪』は、その心理學的興味の多い劇である。フェミニズムの見地からはやはり男性を廻つて圓滿に終了する喜劇である。老年のプロフェッサー・ブルイがホテルで自分の弟子であり同僚であるプロフェッサー・レンカイムの妻ジッタと×××××××病疾の心臟病で頓死する。この老教授は自分の長い間の運命のとう／＼やつて來たことを悟つてその日は××××××××××覺悟の自然死を遂げたのであつた。ジッタがそのまゝ姿を隠したゝめに、老教授の女の誰れであるかは秘密に埋れてゐたが、老教授が自分の罪惡の賠ひとして自著の論文をレンカイムの論文のやうにして、それをレンカイムに遺して彼れの業蹟として發表させやうとしたのが、レンカイムにヒントを與へることになつて、彼れは自分の妻が老教授の情婦であることを知つてそれを妻に自白させてしまつた。妻は自分の方をそれを世間に暴露すると脅迫して夫を屏息させたが、老教授の未亡人と娘とは、誰れが老教授の情婦であつたかを知らうと努め、つひにジッタにそれを話してゐる際に、もしさうまで老教授を幸福にもした女がもしもジッタであつたならどんなに嬉しいことだらうと未亡人がいふのを、ジッタは否定しなかつたので、未亡人は急に今までの陰欝から回復して、歌を唄つたりし出す。ジッタは今度はそれを、自分の娘同樣に可愛がつてゐる老教授の娘エディスに自白する。エディスは有頂天になつて喜んで、そのすぐ前、父に關する意見の相違から婚約を破壞した若いドクトルに、直ちに破約の破約を申し出でる。レンカイムはジッタ夫人に脅迫されて、老教授から讓られた遺物を自分の名で出版しろといはれるが、何うしてもそれは出來ないといつて、それは老教授の名で出すことにする。未亡人はそれをきいて止め度なく喜んで、自分の夫の情婦であつたジッタを『私達の善良なエンゼル』と呼ぶ

この劇は、恐ろしく傳統の桎梏の利いてゐる構造で、ここに

何のフェミニズムがあるかと思はれるが、然し、ショウは、老教授ブルノとその夫人との間の不幸な結婚の缺陷を、彼れとジツタとの結合によつて塡補したことが何の罪惡でもなく、而して何の弊害でもなく、當の關係者の間に於ても、寧ろ歡迎されることであり、現にすべての關係者は、そこに現在の結婚制度といふ事實上廢たれた約束を即ち廢物を利用しやうとする不必要にして弊害のある企てをさへ敢てしないならば、——さうしてこの場合は誰れもそれをしなかつた——そこにかくの如き歡びこそあれ、何の殃もないのであるといふ解釋を下したのである。

このフェミニズムは婦人の勝利の形で現はれてゐるが、やはり純粹に女性主義的のものではなく、そこに男性の立場からのより強い要求があるのである。さうしてそれはその不幸な老博士を中心とする周圍のすべてのものの協力となつてゐるのである。少くともこの劇に於てはすべての叛逆は男性の主人公をめぐつて起されてゐるのである。

六

われ／＼はショウが彼れ自身をアンチ・フェミニストとして彼れ自身の劇に現はしてゐることを見た。社會主義としてフェミニストを標榜する彼れとしてはそれは矛盾のやうだが、然しそれを彼れの社會主義の非革命主義的の性質によると斷定することは當つてゐる何うかが疑はれる。理論上の非革命主義者も、その藝術の態度でそれを裏ぎることは出來る。それは理論上の革命主義者が藝術では案外そのイデオロギーを發揚し得ないことのあり得るのと同じである。兩者の一致は最上であるが、常に可能であるとはいはれない。それは藝術的衝動と科學的意識との性質と方向とが必ずしも一致してゐないところから來る結果である。いひかへれば、無意識的と意識的との不一致である

ショーの女性主義が、理性的性格を基調としながら、その理性的女性のいつも必ず征服することを得る盲目的な男性の方に、彼れ自身の、從つて讀者の同情をむけさせることが珍らしくないのである。その事情を私は彼れの家の歷史に『附會』して考へて見たこともある。

ショウの父は意氣地のない、從つて能力もない、善良な凡庸人であつて、禁酒主義者といひながら好んで盗み酒をのみ、子

供等に對して何のいゝ感化を與へたとも思はされない人間であつた。これに反してショウの母は、聰明な、有能な從つて自主的な、七十何歳まで音樂の教師をやめることを承知しなかつたといふ立派な女性であつた。ショウはクランドン夫人の子供等のやうに、この賢明な母親に育てられたものであつて、彼れにとつて父親はやはりクラムプトン其の人であつた。

かゝる關係は、ショウをしてその兩親に對する理性的の態度と感情的の態度とを自から差別させること、またかのクラムプトン一家の場合に似たものがあつたのではないか。父親に對するショウの理性的の交渉は薄いが、同時に母親に對するのとは違つた感情的の交渉があつたのではないか。ショウがその劇に於て、無能な、わからずやの、時には飲んだくれの老人に、殊にそれが人の親である場合にそれに對してどこまでも貶しつけながら、なほ隱されない溫情をむけてゐることがあるのは、そこに原因してゐるのではあるまいか。

同時にショウのフェミニズムが、彼れ自身固い信念でありながら、どうやらいつもそれを斜めに視たがる皮肉を禁じ得ないのではないか。その點ではショウがいつも恐ろしく奇拔なことを云はう〳〵としてゐるのも、彼れがやゝもすれば、右のやうな普通人的性質をもつてゐることを白狀する危險を感ずるためではあるまいか。彼れの眼は、百人の中に十人あるかないかといふほどの『普通の眼』であるといふことだが、彼れの性格は恐らくもつとパーセンテージの多い『普通の性格』であるのではなからうか。(完)

合同政黨の成立とその展望

山川均

(一)

『社會運動往來』の八月號には、『全無産政黨の合同がまんまと俗流ジャーナリズムの波に乘つて恰も大衆の翹望するところであるかの如く』になつたこと、内々は全合同の成立を怖れながらの全合同論、あはよくば之に取つて代はらうとする『指導部乘取り』のため全合同の主張、地方無産政黨による統一協議會の『賣込み主義』と『割込み運動』、『各無産政黨幹部による狐と狸の化かし合ひ』、『合同取引』、『利潤爭奪戰の展開』——すべてかうした合同運動の過程における内幕といきさつを細かに物語つた『三黨合同始末記』が載つてゐる。かういふ觀點から見れば、合同政黨はまさに狐と狸の化かし合ひ、政黨幹部と幹部との思惑と野合から産み落された私生兒にほかならぬ。無産政黨の合同をかういふ見地から眺めることも、慥かに一つの見方であり、しかもいろ〳〵な示唆を與へる點で、有用な見方である。吾々は曾ても、同じ見地から合同運動に指針を與へられようとした本誌五月號の森戸辰男氏の論文に、多くの負ふところがあつた。

(二)

しかし私は、こゝでは合同政黨の成立を、異つた見地から見たいと思ふ。

わが國の勞働者と農民とその他の無産者分子が獨立した政治勢力を形成する長い過程——それは大正十年十一年の頃に初め

てそのきざしを現はし、今なほ終了してゐない長い過程である――の一部面として見れば、三黨合同の成立は、この過程を貫いて流れてゐる一定の方向を代表した出來事であると云ふことが出來る。大正十四年の無産政黨準備委員會の成立から勞働農民黨の分裂（十五年）にいたるまでは、統一の要求が、數回の危機に出逢つたにも拘らず、分裂の傾向に打ち克つて來た。しかし勞働農民黨の分裂から昭和四年の七黨合同による日本大衆黨の成立にいたる時期の特徴は、分裂に次ぐ分裂であつて、勞働者と農民の政治勢力は、多數の小中心において聚積せられた。この時期には、統一戰線、單一無産政黨などゝいふ旗印までも、分裂政策を包む包裝に用ひられた觀があつた。

七黨合同はこの分裂への傾向が終りを告げ、統一への傾向が一歩を踏み出したものとして、大なる期待をもつて迎へられた。けれども間もなくこの合同政黨が分裂すると、その跡には、合同の對立以前よりも寧ろ一そう統一に取つて望みの少ない狀態が殘された。無産政黨の分野は、少なくとも當分の間、その狀態のまゝで安定するかのやうに見えた。この靜止しようとする水面に一石を投じたものは、勞働總同盟と社會民衆黨の分裂、全國民衆黨の成立であつた。この新要素の投入によつて、無産政黨の分野には再び運動が起り、無産政黨の分野は再び動搖的なものとなつた。かうして惹き起された運動の到達したところが、三勢力の合同による全國大衆黨の成立であつた。

（三）

七黨合同の失敗から今日に至るまで、大衆は合同運動に對して、比較的に、消極的だつたことは爭ふことができぬ。この事實は、或る觀點に立つ人々の眼には、三派合同の過程のうちから謂ゆる『幹部の取引』や『狐と狸の化かし合ひ』なるものだけを、特に擴大して映ぜしめ、また某黨の幹部、指導者、顧問ないしは黨師の『策動』、『思惑』、感情や行掛りを、合同運動の背景を成すところの『情勢』の一切であるかのやうに映ぜしめたかも知らぬ。けれどもこの間においてさへも、大衆の要求が、合同の拍車でなかつたとは云はれない。もし大衆が、合同を積極的に叫ばなかつたとするならば、少なくとも大衆は、對立と抗爭とを積極的に嫌惡して居つた。七黨合同の直後には、大衆は對立抗爭を極度に恐れたゝめに、却つて分裂後の狀態に

固定しようとさへもした。かやうに大衆は、分裂抗爭の狀態に對する積極的な嫌惡によつて、少なくとも消極的には、合同に投票してゐたものであつた。

三派合同の成立は、一般的には、昭和二年末から三年末に至つて動き始めた統一への傾向が、若干の實を結んだものである。この間には、七黨合同の分裂、社會民衆黨の分裂があつたにも拘らず、この時期の特徴は統一への傾向であつた。今度の三派合同の成立は、この傾向があらゆる障害に打ち克つて、或る高さに達したことを意味してゐる。ことに實際の『情勢』なるものが、合同を大衆＝全民兩黨の單獨合同以上に押し擴げることを不可能にしてゐたと云はれてゐたにも拘らず、そして合同の範圍を擴大しようとする一切の空想に對して、この『情勢』に基づいて合同範圍を兩黨の單獨合同の範圍内に局限しようとする、着實な、そして必死の努力が、意識的にも行はれたに拘らず、實際の合同はこの『情勢』を突破し、十一地方の政黨を包容する合同政黨の成立したことによつて、この傾向が如何に底力のある流であつたかを知ることができる。

分裂は最も容易な道を、急轉直下的に行はれた。これに反して統一への傾向――一切の反ブルジョア要素が、一つの政治勢力を結成する作用――は、常に迂廻とジグザグの途を取つて、喘へぎつゝ坂道を登つてゐる。その進路が一直線でないことのために、やゝもすれば、それが確乎として一定の方向を指して進んでゐる作用であることが見失はれてゐる。それにも拘らず、單一無產政黨を標語として起こつた運動の發端から今日に至るまで、統一への傾向は、あらゆる障害や『情勢』と鬪ひつゝ、全運動を貫いて流れてゐた。そして大衆＝全民＝地方無產十一黨の合同の成立は、この過程の一部面として見た所に、初めて眞實にその意義を評價することができる。

（四）

同時に特別には、合同政黨の成立は、共同戰線黨の立場によつてのみ、合同の可能であることを立證したものであつた。戰線の統一と合同を主張したものは（そして或る範圍の合同を實際にも希望してゐたものは）、大衆黨と全民黨と十一地方政黨だけではなかつた。社會民衆黨もこれを主張した。しかしながら、合同によつて生れる政黨は、社會民主主義黨であるとい

ふ條件の下においてであつた。勞農黨もまたこれを主張した。けれども合同によつて形成せられる政黨が、社會民主主義を克服するところの他の指導原理を基礎とするものでなければならぬ、といふ條件の下にであつた。社會民主主義を條件とする合同も、社會民主主義を克服する指導原理を條件とする合同も實現されないで、たゞ指導原理を條件とせぬ合同のみが實現せられたことは、共同戰線黨の立場のみが、合同を可能とする立場であることを雄辯に物語つてゐる。

社民＝勞農黨との合同が出來ないで、三派の合同が出來たのは、三派の指導精神が似寄つてゐたからではないか？――或る人はかう主張するかも知れぬ。合同によつて生まれる政黨は、一定の指導原理を結合の條件とする政黨ではないといふ理解においては、またかゝる性質の政黨を成立せしめることが、わが國の無產階級運動の現在の段階においては必要欠くべからざるものだといふ見解においては、合同三派には、見解の一致ないしは近似があつたに違ひない。言葉を換へて云へば、共同戰線黨の立場を取るといふ一點では、三派の合同を可能にしたものは、僅かに見解の一致ないしは近似であつたらう。そこで若し、或る政黨が共同戰線黨の立場を取るといふ事實をも、社會民主主義の黨であるとか共產主義の黨であるとかいふのと同じやうに、一つの指導理論の上に立つてゐるものだと解釋を取るならば、初めて三派合同は、同一または近似の指導原理の上に立つ政黨の合同であつたといふことにもなる。けれどもこの場合には、指導原理といふ言葉が全く異つた意味で用ひられてゐることを忘れてはならぬ。指導原理といふ言葉を、或る時には或る意味に、他の時には他の意味に用ひることによつて、言葉の上には變化を生ずるが、事態の上には何らの變化をも生じない。

(五)

けれども――と恐らく或る人々は、懷疑的な眼をみはつて云ふ――けれども三派合同によつて、政治戰線の統一が、實際どれほど達成せられたらうか？　この合同が成功した後には、依然として社民、勞農、全國大衆の三黨が對峙してゐるとしたならば、合同後の無產政黨の新分野は、昭和二年に初めて合同運動の起こつた當時の狀態から、統一に向つて一歩も進んでゐないのではないか？　當時も社民勞農日勞、の三黨があつた。そ

して今日も——さうだ輝やかしい合同の成立した今日も！——精密に同じやうに、社民、勞農、大衆（舊日勞を主要構成分子とするところの）がある！

昭和二年の末から今日に至る時期においても、わが國の無產政黨運動は、それ以前の時期における分裂主義の當然の果實を收穫しなければならなかつた。これは地方政黨の大多數が、この時期の所產であつたことによつても知ることができる。これらの地方政黨は、過去における分裂主義の不可避の結果として、または戰線統一の任務に對する全國的政黨の無能力の結果として起こつたものであつた。かやうに昭和二年以後の時期においては、統一への傾向が明確に動き出してゐたにも拘らず、分裂主義の影響は、なほその作用を續けてゐた。そこで二年半後の今日、無產政黨の分野は、精密に二年半前の狀態まで引戻されたに過ぎなかつたと假定しても、すでにこのことだけでも、合同政黨の成立は、統一への傾向に取つての大なる成果であつたと云ふことができる。

けれども無產政黨の新分野は、精密に、二年半前の狀態に引戻されたものだらうか？決してさうではない。

三派合同前の日本大衆黨は、二年半前の日勞黨と精密に同じであつたと假定する（もちろん、實際にはさうではないが）。しかし合同政黨を構成する第二の要素は、社民黨の一半が分れて來た分子である。舊勞農黨の構成要素は、最も複雜な分解作用を受けた。その一大部分は、無產階級の合法政黨一般を原理的に否定する見地から、新黨準備會を離れ去つた。他の一大部分は、新黨準備會が合法政黨を是認するが如く否定するが如き動搖的な態度に反對し、または少なくとも共同戰線黨の組織に反對する新黨準備會の態度に反對して、同じく準備會から離れ去つた。三派合同政黨の構成要素となつた地方十一政黨の多くは、これらの分子を中心として組織せられたものであつた。そして舊勞農黨の構成分子のうちの、その跡に留まつた殘餘によつて組織せられたものが、現在の勞農黨なのである。

そこでバランスシートは、どうなつたらうか？　同じく三派鼎立といふ言葉で言ひ表はすことのできる二年半前の四分野と二年半後の新分野とを較らべて見て、事實上合同を不可能ならしめるやうな指導原理を代表する勢力と、統一戰線への傾向を代表する勢力との相對的な割合は、どのやうに變化したらう

か。二年半前の舊分野と二年半後の新分野とを比較したならば、何人といへども、大衆の一大部分が、統一と合同とを不可能ならしめてゐる指導から、急速に離れ去つたといふ事實を否定することは出來ぬ。

それ故に私は、三派合同の成立は、たゞに無産政黨の分野を二年半前の舊狀態に引戻したものではなくて、新たな形勢を開いたものであり、そしてこの新狀態においては、統一への傾向は決定的に力を増大したと云ふことに躊躇せぬ。たゞ然しながら、それは新合同政黨が今日以後においても、統一と合同への傾向を代表する勢力として働らくといふ條件の下においてである。

そこで問題は、新合同政黨の展望に懸つてゐる。

（六）

反ブルジョア政治鬪爭の組織形態として見た共同戰線政黨は、最も自然發生的な組織形態としてか、または最も意識的な組織形態として現はれる。無産階級の階級的成熟の幼稚な時代には、共同戰線黨は、最も自然發生的な組織形態として現はれる。これに反して無産階級の成熟したところでは、それは最も意識的な組織形態としてのみ現はれる。わが國のやうに、無産階級の先進部分が急速に成熟を遂げ、そして勞働者と農民が、この時期に至つて初めて政治の舞臺に現はれたところにおいて、共同戰線黨は自然發生的に生まれる代りに、共同戰線黨の問題が最も意識的に取り扱はれたことは、當然のことであつた。かやうにわが國においては、少なくとも無産階級の先進分子に取つては、共同戰線黨は、反ブルジョア政治鬪爭の最も意識的な組織形態としてのみ、實現せられるものである。

從つて、新合同政黨の將來は、これを構成する諸要素、ことにその指導的な要素によつて、この新合同政黨の共同戰線黨たる性質が、どの程度に明確に把握せられてゐるか、そしてこの性質が、如何に明確な意識によつて擁護せられるかといふ事實によつて左右せられることが、頗る多いと云はなければならぬ。

昭和三年の七黨合同は、「しかしながら眞に大衆の要望するものは、全無産政黨による單一無産政黨の樹立である。いま吾々無産諸黨はこれが實現の具體的な第一步として、こゝに先づ

可能なる範圍の合同を決行したものである。從つて、吾々無産諸黨は、更に殘された幽餘の無産政黨をも含めた全合同による單一、無産政黨、の實現を期しつゝ、これが拍車たらんとするものである』ことを宣言した。單一無産政黨は、たゞ共同戰線黨としてのみ、實現することが出來る。從つて七黨合同が、共同戰線黨の方向を指してゐたことは云ふまでもないが、尙ほ明確には、その黨を共同戰線黨と規定してはゐなかつた。

しかるに新合同政黨が、『……そして我々の要求する全合同による單一なる共同戰線實現の方向が、かゝる客觀的情勢の下に如何に正しい戰術であるかを決定的に實證したものに外ならぬ』と云ひ、『我が合同政黨は、獨斷的な指導原理を大衆の上に强制し、これによつて大衆の鬪爭の必要と意欲とを抑壓する一握の指導者の黨派ではなくて、金融資本を中心とする反動的＝帝國主義的ブルジョアジーの政治支配と有効に鬪爭する爲めに、合同の瞬間から、活潑な日常鬪爭の展開によつて、資本家階級と地主の必死の攻勢に對して、無産大衆の生活の擁護に邁進することを宣言すると同時に、大會はあらゆる分裂主義的傾向に反對して、飽くまで共同戰線黨たる我黨の本質を擁護し、戰線統一の完全なる實現に努力することを宣言する』と云つたのは、この方向への大なる進歩であつたといふことができる

かやうに新合同政黨は、自らの本質を、明確に『共同戰線黨』と規定したばかりでなく、大衆の前に、飽くまでこの本質を擁護し、かくすることによつて、戰線統一の完全な實現のために努力することを誓約したのである。この誓約が一片の反古とならぬといふ條件の下において、合同政黨の成立は、統一への傾向によつて達成せられた大なる成果であつたこと、そして合同政黨の成立によつて生じた無産政黨の新分野においては、統一への傾向は、それ以前の如何なる時期よりも、一そう强大になつたと云ふことができる。

（七）

しかし──と、他の人は聰明にも答へるだらう──無産階級の運動が、社會民主主義と共産主義といふ兩立すべからざる指導理論によつて截然と二つに分かれることは、世界的＝歷史的事實ではないか。なるほど わが國の無産諸政黨は、現在はま

だ、精密にこの二つの指導理論のそれぞれに固定化してゐるものではない。だがわが國の無產政黨の分野も、社會民主主義黨と×××との對立といふこの世界的な定型に向つて急速に整理され、固定化しつゝある。かゝる情勢を前にして、一定の指導原理（即ち社會民主主義か××××）を條件とせぬ共同戰線黨なるものは、單なる空想ではないか。であるから三派合同の新政黨は、明確には一定の指導原理を條件として成立したものではないにもせよ、暗默のうちには、同一または近似の指導原理を持つてゐなければならぬ。そして合同政黨は、急速にこの指導原理の上に固定化する。なほその上に、この合同政黨に似合はしい指導原理は——云ふまでもなく世界的＝歷史的な無產階級政黨分野の定型に從つて——左翼社會民主主義でなければならぬだらう……。

自らを共同戰線黨と規定し、そして共同戰線黨たる性質の擁護を約束した合同政黨は、左翼社會民主黨に變質しないだらうか？　私はこの疑問に對しては、何らの否定的な保證をする大膽もない。少なくとも、合同政黨自らが共同戰線だといふ自己保證をしてゐるからといふ理由だけでは、さういふ變質をする危險がないといふ證書に連判をするわけにはゆかぬ。否、危險を云へば、たゞに左翼社會民主主義黨ばかりでなく、右翼社會民主主義黨に變質する危險をさへも持つてゐる。それ故にこそ、合同政黨の先進分子の任務は、合同政黨の存在の意義と共に存在の可能性をさへも失はしめるところの、この種の變質作用に對して、共同戰線黨たる本質を擁護することにある。

けれども一個人が結婚するためには世間並みの調度仕度が要るように、無產政黨の結婚にも、世界並みの指導精神の調度が入り用だ、共產主義では張り過ぎるし、唯だの社會民主主義では吝ち臭い、そこで左翼社會民主主義くらゐのところが、新合同黨に身分相應だといふことなら、それはおのづから別問題となる。

（八）

さきに七黨合同が成立した當時には　この新合同黨を、左翼民主主義黨と見做さうとする人々があつた。社會民衆黨は社會民主主義黨であつて、新黨準備會が共產主義黨だといふ假想の下に、そのいづれでもない日本大衆黨は、當然に左翼民主主義

であるといふのが、卑俗な見方であつた。當時私は、この見解を次の如く批評したことがある。

『第一の見解は、舊勞農黨およびその傳統を繼承するところの運動を共産主義の直接の影響下に立つ政黨であるといふ理由をもつて、これを左翼と見、社會民衆黨を社會民主主義の政黨と規定して、これを右翼と見、これらの二つの政黨のいづれでもない日本大衆黨は、それ故に社會民主主義よりは左に立ち、共産主義よりは右に立つところの「中間派」政黨と見る。しかしながら、二つのものの何づれにも屬しないことは、必ずしも常に二つのものの中間にあることを意味しない。（共同戰線黨は決して中間黨を意味しない。いな中間黨は如何なる場合にも、共同戰線黨ではあり得ない。）現に日本大衆黨は、社會民主主義と共産主義との中間に屬する或る一定の中間的な理論を有しない。日本大衆黨をもつて、共産黨と社會民主黨との中間に獨自の立場を求めようとした往年のドイツ獨立社會民主黨（即ち、左翼社會民主主義黨）に擬することは、滑稽である』（昭和三年一月、『勞農』第三卷第二號）。

共産黨と社會民主黨との中間黨としての左翼社會民主黨が將來の發展性を持ち、右の方からは社會民主黨の一部分、左の方からは共産黨の一部分を奪ひ取り、その中間黨を中心とする大合同が實現せられることによつて、社會民主黨と共産黨とが急速に小さくなるといふやうな事が、どこの世界の無産政黨分野の方面に一致してゐるだらうか。過去と將來とは別として、今日世界の唯だの一國においてさへも、左翼民主主義政黨が將來の發展性を持つて急速に固定化しつつある所があるだらうか。事實はまさに正反對であつて、一九二二年の四月、第二、第二半、および第三インタナショナルの代表者がベルリンに會同した當時からこの方、何人も見落すことのできない太陽ほどに明らかな事實は、左翼社會民主主義黨が急速に固定する代りに、急速に沒落したことであつた。ドイツ獨立社會民主黨と第二半インタナショナルはどうなつたか？

そこで若し、新合同政黨が、左翼社會民主主義黨として、發展性を持つて固定化するとしたならば、明らかにわが國の無産政黨の分野は、二つの指導精神の世界的な對立狀態といふ定型によつては、方向づけられてゐないといふことになる。

これに反して、わが國の無產政黨の分野は、社會民主主義と共產主義との世界的な對立の定型に向つて急速に整理され固定化されて居り、またさるべきものだとするならば、今更ら三派にせよ二派にもせよ、共產黨と社會民主主義黨との外にもう一つの中間政黨――おまけに、將來の發展性を持つといふ厄介な政黨――を造らうと努力することほど、時代後くれにしてしかも世界的＝歷史的方向に逆行した精力の浪費は無かつたらう。さういふことを本當に信じてゐる人は、三派のうちのせめて一黨なりとも引具して、社會民衆黨との合同に努力すべきであつた。ドイツの左翼社會民主主黨が右翼社會民主黨と合同したやうに。

昭和五年の日本にドイツ獨立社會民主黨と第二半インタナショナル黨をこしらへることが無意義であるとしたならば、新合同政黨の存在の意義は、中間黨としてゞはなくて、たゞ共同戰線黨たることに求めなければならぬ。

全國大衆黨は、共同戰線黨の性質を、如何に確乎として防衛するだらうか？　新合同政黨の展望は、このことをめぐつて轉回する。（八月四日）

世界恐慌の發展

——昭和五年上期の世界經濟——

小島精一

序

米國の恐慌のばく發から世界經濟は深刻な一般的恐慌狀態に陷つてしまひ、本年に入つてから、その危機は各方面へ鋭く前進してゐる。國によつて、危機の成熟とその深刻さの程度とは決して一樣ではないが、最近では、殆ど例外なしに、世界各國が此の危機に沈んでゐるといふことができる。

米國を始め、カナダ、ポーランド、オーストリア、チエコスロバキヤ、獨逸、日本等では恐慌狀態は、も早餘程奥深く進行してゐるが、フランス、スカンヂナビア諸國、チリ、その他の若干の植民地的農業國ではそれはまだ、始まつたばかりだ。

これらの諸國では特殊の好況的原因が世界的影響を相殺してゐたのだが、今では、も早抵抗出來ずに急テンポで恐慌の深淵へ引きづり込まれてゐるのだ。

紙面がないからこゝではたんに一般的な狀勢の發展を述べるに止めねばならぬ。

第一、國際物價の崩落——

一九一三年ヲ一〇〇トスル金物價

	米國	英	獨	佛	イタリー	日本
一九二九・七	(二六年＝一〇〇)九八	一三七	一三八	一二七	一三〇	一五二
一〇	九六	一三六	一三七	一二二	一二八	一五七
三〇・一	九三	一三一	一三二	一一七	一二三	一五〇
三	九一	一二五	一二六	一一五	一一九	—
四	—	一二四	一二七	—	一一七	—

—景氣研究所四半季報・三〇・第一—

一層最近の狀勢は次の如き崩落の進行だ。

一九一四年七月ヲ一〇〇トスル指數

	米國	英國	日本
一九三〇・一月	一三二	一三〇	一六〇
三月	一二八	一二六	一五六
五月	一二四	一二二	一五一
六月	一二一	一一九	一四四

（イ）一般的崩落の中でも特に落勢の大なるは、農産物と原料品であり、原料品では就中纖維材が目立つてゐる。

（ロ）一般に生產手段は消費財に比べて、遙に低いレベルに落ち込んでゐる。合理化による過剩生產と大衆的消費の缺乏の反映だ。

（ハ）恐慌の發展と共にカルテル的統制は、その威力を鮮明にあらはしてきた。

一般的落勢の中にあつて、カルテル價格と自由價格とは明白な區別ができる。

兩者は全く異つた步調を示してゐる。

價格の均等化はカルテルによつて頑强に阻止され、恐慌の重壓は强く自由競爭部門へと轉嫁されてゐる。

それは勿論恐慌による淸算過程を人爲的に遲らせてゐるのだ。

が、これらの點先月の經濟往來（八月）に稍や詳しく述べたから、こゝでは、說明を省略する。

第二、過剩生產と生產制限

此の物價の崩落は根本的には過剩生產を反映するものだ。

過剩生產の大なるもの程物價は强く低落してゐることが立證される。

先づ大表は生產の增大と價格の低落とを對比的に示すものだ。

	世界的生產				世界市場ノ價格			
	單位	1925年	29年	增率	1925平均	同29	增減率	1929年1月ト30年4月トノ增減率
				%	マーク	マーク	%	%
石炭	百萬トン	1214	1383	+11	14.5	14.4	−1	−9
石油	同上	149	206	+38	10.9	11.1	+1	−33
銑鐵	同上	77.0	98.7	+28	75.5	70.8	−6	−1
粗鋼	同上	91.9	121.5	+32	98.2	102.7	+5	−13
壓延材	同上	27.4	37.4	+37	113.5	120.5	+6	−11
銅（冶金）	同上	1.40	1.94	+39	132.3	169.8	−34	−30
亞鉛	同上	1.15	1.45	+27	72.3	50.1	−31	−33
棉花	同上	6.73	6.46	−4	2.2	1.8	−18	−20
羊毛	同上	1.26	1.43	+14	4.2	3.3	−23	−42
生糸	百萬斤	40.7	45.4	+12	52.3	47.1	−20	−13
人絹	同上	87.9	197.5	+127	11.6	6.1	−48	+3
ゴム	千トン	510	858	+68	6.4	1.9	−70	−31
砂糖	百萬トン	25.1	27.2	+8	40.2	34.9	−30	−4
カフヱー	同上	1.4	2.4	+70	2.3	2.0	−10	−41

（四半季報. 1930.1）

これによつて最近數年間の生産增加がいかに物價低下をひき起したかを推察できる。

が、これでは、不充分だ。それは、たゞ生産增加を示すだけで消費の狀勢を示さないから。

だから、物價の低下は決して生産增加の程度と比例してはゐないのだ。

問題は單純な生産增加ではなくして、過剩生産にあるのだ。

過剩生産は滯荷の增加によつて知ることができる。卽ち、次表の通りだ。

年末滯荷量(主要中心地合計)

	一九二八年	二九年
棉花	七、七六六千俵	八、〇九八
生糸	七二千俵	一一八
銅(精製)	六五千トン	一七一
亞鉛	四五千トン	七七
原油	四八四千バレル	五三五
ゴム	一七八千トン	二八〇
小麥	六一、三三〇千クオター	六七、四四〇

――英・エコノミスト・三〇・五・三一――

これらは原油を除けば、いづれも、特に著しい價格崩落をみた商品だが、その滯荷の增加も大きいことが分る。

そこで、世界的に生産制限が始まり、實生産は本年に入つてから、急テンポで萎縮してしまつた。

景氣のバロメーターとなる基礎的原料の世界的生産を示すと……

世界生産(百萬噸―銅ノミ八千噸)

	石炭	銑鐵	鋼鐵	銅
一九二八年(月平均)	九九	七・〇	八・八	一四五
二九年〃	一〇六	七・八	九・四	一六二
二九・一月	一一五	七・六	九・五	一六二
二月	一〇六	六・九	八・九	一五二
三月	一〇二	七・八	一〇・〇	一七五
七月	一〇二	八・二	九・九	一五八
十月	一一九	八・〇	九・七	一五九
三〇・一月	一一六	七・一	八・六	一四〇
二月	九七	六・七	八・七	一二六
三月	―	七・五	九・二	一三三

――四半季報・三〇・第一――

主要國の綜合的生産指數は……

	獨逸	英國	佛國	米國	カナダ	ロシア
一九二八年平均	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇
二九年〃	一〇二	一〇八	一〇九	一〇六	一一二	一二四
二九・一月	九五		一〇八	一〇五	一二一	一一五
二月	九一	一〇六	一〇七	一〇五	一一八	一一二
三月	九九		一〇九	一〇六	一一六	一二〇

七月	一〇五	一〇九	一一二	一一一	一一二
一〇月	一〇一	一一一	一〇五	一一三	一三五
三〇・一月	九五	一一三	九三	一〇八	一四三
二月	九三	一一三	九六	九四	一五二
三月	九三	一一三		九七	一七一
(一月—三月)	一〇七				

——四半季報——

これでは米、カナダ、獨逸等と佛、英等との間に相違があらはれてゐる。後者にはまだ生産減退はあらはれてゐない。

そして、ロシアでは、めざましき飛躍が行はれてゐる。

第三、農業品の過剩滯荷——

工業國での生産制限は農業國でも必然に減産を要求するのだが、こゝでは事業の性質上人爲的調節の困難があるために、思ふやうに狀勢に順應出來ないでゐる。

(イ)小麥——本年三月末現在の世界的在荷は約四億ブッシェルで昨年同期と大差ない。

だが、此部門では一九二九—三〇年度の凶作が自然的に過剩滯貨を減少させてくれる筈だつた。

年初に行はれたスタンフォード大學食料研究所の豫測では次の如き狀勢が示された。

	期初滯荷(百萬ブシエル)		新生産		消費(輸出ヲ含ム)		期末滯荷	
	一九二八—二九年	一九二九—三〇年	一九二八—二九年	一九二九—三〇年	一九二八—二九年	一九二九—三〇年	一九二八—二九年	一九二九—三〇年
米國	一四二	二六二	九一五	八〇七	七九五	八五五	二六二	二一四
カナダ	七八	一〇四	五六七	二九四	五四一	三一九	一〇四	七九
アルゼンチン	九〇	一二〇	三〇七	二〇〇	二七七	二六〇	一二〇	六〇
濠洲	四三	四五	一六〇	一一三	一五八	一一九	四五	三八

(註)年度ハ米國ダケハ六月末、他ハ七月末ニ終ル一ケ年、

——英、エコノミスト・三・八——

即ち本年の收穫激減によつて滯貨も減り、價格も見直せると考へられたのだが、實際はさうは行かなかつた。

最近の同研究所の報告は本年五月に發表されたものだが、その豫想は次の通りだ。

	一九二九—三〇年度豫想(百萬ブシエル)		
	生産	消費	期末滯荷
米國	八〇七	七八九	二八〇
カナダ	三〇〇	三〇九	九五
アルゼンチン	一七五	二四〇	六五
濠洲	一二五	一一九	五一

——英・エコノミスト・六・七——

即ち、年初の豫想と對比すると生産は同樣だが、消費は著しく減じ從て、期末滯荷は著しく增加してゐる。

消費の減退は主として歐洲の輸入國の作柄がよかつたのと、熱心な自給奬勵政策の結果輸入が減退したゝめだ。

かくて、生産のかなりの減少にも拘らず、過剰滯荷はまだ餘り整理されないでゐる。

（ロ）棉花——世界的滯荷は昨年來次の如く増加した。

一九二九・三・三〇——六・二七平均……五、六三八千俵
一九三〇・三・二八——四・三　〃　……七、一五五

最近では漸減して六月初め現在六、二四〇（千俵）に下つたが、それでも昨年に比べては多い。

主産地からの荷送り高の合計は

	毎週平均荷送高
一九二九・一——三月平均	……四〇七千俵
四——六月〃	二四〇
一九三〇・一——三月〃	三七九
四——五月〃	二四八
五月第四週〃	二一四
六月第一週〃	二一〇

——ウイルトシヤフツデインスト・六・一三——

紐育の棉花取引所の最近の發表によれば米棉では次の狀勢が示される。

	七月末日デ終ル一年間 一九二八—二九年	二九—三〇年
世界的消費	一五、一六九	一三、二〇〇—一三、四〇〇千俵（豫想）
七月末日在荷	四、四七四	五、八〇〇——六、〇〇〇

——東日・七　五・電欄——

こゝでも世界的消費の減退と滯貨の激増とが強くあらはれてゐる。

（ハ）生糸——恐慌發生後一ヶ年間の米國における生糸の集散狀勢は次の通りだ。

	輸入	工場引取	月末在荷
一九二九・七月	四六・八千俵	五一・六	四二・六
十月	六六・五	五七・五	六四・一
三〇・一月	四三・二	五七・七	七六・二
三月	四〇・〇	五〇・九	五七・八
五月	二二・六	四〇・八	三五・四
六月	二二・四	二九・四	二八・五

——時事・七・四・夕刊電欄——

最近における工場消費の激減は驚くべきものだ。

就中、日本糸の需要は次の如く激減した。

	一九二八・七—二九・六月ノ一ケ年間	二九・七—三〇・六月ノ一年間	減少
全輸入高	五九一千俵	五六八	（一）二三
同日本糸	五二六	四六六	（一）六〇

米國での在荷は最近減少したが、その代り日本内地の在荷は次の如

き法外な激増だ。

常態ヲ一〇〇トスル指數(東洋經濟社)

	横・神入荷	同在荷	紐育在荷
一九三〇・一月末	一一六	一四九	一五四
三月末	一二二	二八三	一六〇
五月末	一三一	九一二	一〇九

——東洋經濟・六・一四——

之を實數で示すと

	本年五月末在荷	常態在荷	過剩在荷
横・神	一〇八千俵	一二千俵	九六千俵
紐育	三五	三三	二
合計	一四三	四五	九八

即ち常態以上の過剩在荷だけでも約九萬九千俵、日本の生糸輸出年額約六十萬俵の一六%に當つてゐる。

(ニ)砂糖——こゝでも生産制限が不充分で滞荷が異常な多量に上つてゐる。

五月末現在(千噸)

	一九二九年	一九三〇年
歐洲	二、六八八	二、九五九
米國	五五三	六三八
キユバ	二、九一一	三、七〇〇
合計	六、一五二	七、二九七

——東洋經濟・六・二八——

世界的生産は全體としては前年度より多少減少してゐるが、歐洲の甜菜糖の如き多少の増産が豫想される程で、消費の激減と均衡がとれないのだ。

歐洲消費は次の如く減少した。

一九二八・九——二九・五月ノ九ケ月間……四、二四五千噸
二九・九——三〇・五月ノ〃 ……四、一三四

米國の原糖溶解高も

一九二九・一——六月 ……二、三七七千噸
三〇・一——六月 ……二、一九二

と減少した。

(ホ)ゴム——この部門でも限産は困難で、本年第一季は前年同期と略ぼ同額を供給してゐるが主要國の輸入高は激減してゐる。即ち、

一—三月合計

	一九二九年	三〇年
産地供給	二二五千噸	二二三千噸
消費地輸入	二五七	二二一

しかも本年の輸入中には直に消費されぬ部分——即ちストックが多い。

何よりも世界的最大消費者米國の減退が大きな打撃なのは言ふまでもない。

米國の消費は世界の六割を占めるのだが、本年の消費は前年に比べて一九%減なのだ。

主要國における滯荷高は一月末の二十四萬噸から三月末には二十九萬二千噸に上つた。

これを昨年三月末と比べると實に十三萬噸の激増になるのだ。

そこで蘭、英の生産者は五月になつてから共同限産を實行し、多少の成功をみたといはれるが、その程度ではまだ／＼到底山積した滯貨を處分しつくすことは容易でない。

——東洋經濟・六・二一・——

かくの如く、農業國の主産物はいづれも限産が不徹底なために、依然として過剰生産の窮狀に陷つて居り、滯荷は多く、價格は極度の崩落にさらされてゐる。

最近外電の報告によれば、上記の農産物の價格は紐育市場では……

一九二六年ヲ一〇〇トスル指數

	一九二九・六月末	三〇年五月末	六月末
小麥	七七	七〇	五九
棉花	一〇五	九三	七七
生絲	八一	六五	五四
砂糖	四四	三二	三二
ゴム	四三	二八	二五

——東日、七・三・夕刊——

農業國の慘狀想見すべきである。

かくて、農業國の不振は凶作と工業國の消費不足から生じ、それは更に反作用して工業品の需要減退となつてるのだ

第四、失業增加——

合理化運動の結果として、好況期でさへ、巨大な慢性的失業群が發生してゐたのだから、恐慌ぼく發後には勿論異常な大失業群が溢水的に高まつてきた。

組合員又ハ失業保險參加員中失業者ノ割合

	英	獨	オランダ	ベルギー	デンマルク	スエーデン	カナダ
一九二九年六月	%九・八	%八・五	%二・六	%〇・四	%一〇・〇	%七・二	%二・九
十月	一〇・四	一〇・九	三・五	〇・五	一〇・二	八・六	六・〇
十二月	一一・一	二〇・一	一三・三	二・四	一九・九	一六・六	一一・四
三〇年一月	一二・六	二二・〇	一五・九	三・五	二〇・二	一四・二	一〇・八
二月	一三・一	二三・五	一三・五	二・六	二一・三	一三・二	一一・五
三月	一四・〇	二一・七	七・五	二・二	一六・九	一三・二	一〇・八
四月	一四・六	二〇・四	六・六	—	一二・〇	一二・〇	—
五月	一五・三	—	—	—	—	—	—

——英・エコノミスト・六・二八・月附錄——

米國の數字はないが盛況期でさへ三、四百萬人の失業者があるといはれたから、今では五百萬人は確に超えてゐるに違ひない。

世界的には失業者は一千七百萬人から正に二千萬人へと近づきつゝあるとさへいはれる程だ。

第五、國內市場の萎縮――

(イ)先づ生産手段に對する需要は前途不安のため企業の手控へによつて激減した。

金融緩漫にも拘らず、新規資本發行は次の通り停頓してゐる。

月平均	米國 百萬ドル	英國 百萬ポンド	獨逸 百萬マーク	佛國 百萬フラン	伊國 百萬リラ
一九二七年	六四九	二九・六	一一四	六二六	二六四
二八年	六七六	三〇・八	一一〇	八九六	四五〇
二九年	八五〇	二三・八	八〇	一、二五〇	六〇七
二九年一―三月	九三一	三二・三	一一九	一、〇七二	四九二
四―六月	八五九	二五・八	一一三	一、一九九	七九四
七―九月	六七七	六・二	五五	九九三	五四六
一〇―一二月	五六六	三〇・六	三五	一、七三七	五九四
三〇年一―三月	七一五	三一・三	七四	一、七四一	四七四
四月	―	二二・八	―	八七二	―

――英・エコノミスト・五・三一・月附錄――

こゝでも米、獨、英等は既に前年下期の沈滞から幾分上昇し始めたが、佛、伊、等は漸く減衰に向ひ始めたばかりだ。

だが、全體として前年第一季に比べれば、まだ著しく低いレベルにしか達してゐない

但し、世界的市場の海外投資額は稍や注目すべき增加をなしつゝある。(後述)

(ロ)消費財の需要は何よりも勞働大衆の購買力の減少で萎縮してゐる。

その最も大きな打撃は既に繁榮期の間に合理化自體によつて勞働者階級の收入が相對的に削減されたことから始まつてゐる。

合理化は勞働者の生産能率を向上せしめることによつて多數の過剩勞働者を工場から街頭へ放り出した。近年の慢性的失業群はこのためだつた。

それに就業してゐる勞働者もその賃銀率は決して生産能率の上昇と釣り合ふ程には高められなかつた。

だから、全體として勞働者階級の購買力は既に恐慌の發生以前から相對的には低減してゐたのだ。

處が一旦恐慌が始まるや、どこでも失業者は勿論激增したし、又賃銀率の切り下げが斷行されだした。

いはゞ資本家は合理化によつて市場の狹化をひき起し、延いて、恐慌を、激成させておきながら、一旦恐慌が始まるや、更らに、

又、一層合理化を强行して、苦境から脱却しようとするのである。けだし、恐慌による市場の狹化は競爭の激化を助成し、それを乘り越えるには、生産費を切り下げて敵手を撃破するの外に途はないと考へられるからだ。そして、生産費の切り下げは勿論合理化と、そしてなによりも先きに賃銀切り下げが要件とされるからだ。

主要國における勞働者の購買力減退は……

(i)米國——では

	工場就業率	賃銀支拂率
一九二九・七月	一〇四	一〇九
一〇月	一〇二	一〇五
三〇・一月	九六	九六
四月	九三	九四

——アンナリスト・五・三〇——

(ii)獨逸——では、

工場作業率を全能力に對する割合で示すと……

	勞働者數ニテ	勞働延時間ニテ
一九二九・七月	七六%	七三%
一〇月	七三	七一
三〇・一月	六六	六二
四月	六四	六〇

失業者數は本年上四ヶ月平均を前年同期と比べて約六十萬人の増加。

それに就業者一人當りの實質賃銀は次の如く低落してゐる。

	名目賃銀	生計費	實質賃銀
	一九二七年ヲ一〇〇トスル指數		
一九二九・六月	一一四	一〇四	一〇九
十月	一一一	一〇四	一〇六
三〇・一月	九五	一〇三	九三
三月	九五	一〇一	九五

——フイナンツポリチッシュ・コレスポンデンス・四・二五——

之を勞働者の生産能率と比較すると、彼等が恐慌後の合理化で相對的に一層貧困化せしめられつゝあることが分る。

	工業就業者	生産高	一人當生産
	一九二七年ヲ一〇〇トスル指數		
一九二九年十月	一〇〇	一〇一	一〇一
十二月	八九	九五	一〇七
三〇年一月	八八	九五	一〇八
二月	八六	九五	一一〇

——上掲ト同ジ——

即ち、恐慌以來、一人當り生産高は著しく増加しながら、實質賃銀は反て激減してゐることが鮮明に示されてゐる。

大衆の購買力の削減にとつて、更に見逃すことのできないのは卸賣物價が崩落してゐるにも拘らず、小賣物價は下らず、從て生活費は下

らないことだ。

それは次表で明白に示される。

卸賣物價(金物價)ト生活費指數

	獨逸 (1)金物價	獨逸 (2)生活費	英國 (1)	英國 (2)	米國 (1)	米國 (2)	佛國 (1)	佛國 (2)(四半季平均)
一九二八年平均	一四〇	一三三	一四〇	一六六	九八	一七一	一二九	五一九
二九年〃	一三七	一五四	一三七	一六四	九七	一七一	一二六	五五六
二九・一月	一三九	一五五	一三八	一六七	九七		一三三	五四七
四月	一三七	一五四	一三九	一六二	九七		一三〇	
三〇・一月	一三二	一五三	一三一	一六六	九三	△一七一	一一七	五六五
四月	一二七	一四七	一二四	一五七	×九一		×一一五	

×一九三〇・三月分　△一九二九・十二月分

──四半季報・三〇・第一──

これらの現象の必然の結果はなにか？

勿論生活費の低下！　しかし、同時に國內市場の著しき狹化、そして(若し、國外に吐け口がないとすれば、)生產と消費との不均衡の激成！　矛盾の激化！

(八)國內市場の狹化は獨占資本の專橫によつても激成される。卽ち獨立、中、小企業家の沒落によつて資本家的利益が益々少數大企業へ集中するからである。

恐慌の發展が、いかに、中、小企業の沒落を促進するかは、吾々が眼前に身近く見聞してゐるところであるから、別に說明を加へる必要はあるまい。

獨占的大企業は恐慌によつて動搖せざるのみか、これを機會として危機に直面せる劣弱企業を安値に踏み倒して劃期的大擴張をなすことができるのだ。

要するに、恐慌は獨占資本を大に肥滿せしめ、國民的購買力を、彼等の囊中に集中せしめることによつて、一方に過剩資本化を、他方に大衆的購買力の缺乏を激成しつゝあるのだ。

(二)最後に鐵道の荷動き狀況によつて國內市場の閑散化を示しておかう。

鐵道荷動キ狀勢（單位百萬）

	英國 トン哩	獨逸 トン粁	米國 トン哩	カナダ トン哩	イタリー トン粁	日本 トン哩
一九二九・一月	一、五九〇	五、二二六	三九、二二〇	三、四三六	九〇一	六一五
四月	一、五一九	五、七四六	三八、三三四	三、三四三	一、〇〇九	六八七
七月	一、五八〇	五、九七六	四一、九九一	三、二九五	一、一一四	五八六
十月	一、六九五	六、三六七	四七、八一四	三、九二四	一、一八一	七二六
三〇・一月	一、六三六	四、七六三	三六、六六四	二、四四七	一、〇〇〇	五七二
三月	一、六二二	四、八八七	三五、三〇一	──	九六六	(二月)五七三(二月)
四月	──	四、三八二	──	──	──	──

──國際聯盟・統計月報・五月──

第六、國際貿易の萎縮──

國內市場が狹化してゐるので、各國共極力海外市場の擴張を企圖してゐる。

獨占體の發展は此點でも特殊の中心的役割をつとめる。殊に、國內市場の釣り上げと海外市場への組織的投賣政策とが、强力な獨占體の出現によつて可能になる。

合理化政策は勿論、周知の通り、この種の團結運動の發展を最も重要なる中心題目の一として奬勵してゐたが、恐慌以來それは特に焦眉の急務として熱烈な官民一致の援助を得るに到つた。

かくて各國共極力輸出增進を企圖しつゝあるにも拘らず、それは決して思ふやうな効果をもたらしてゐない。

（イ）國際貿易は世界的にみて次の如く減少してゐる。

	四十八ヶ國貿易額（百萬マーク）		
	全貿易	輸入	輸出
(1) 一九二九・第一、四半季	六二・六	三二・五	三〇・一
(2) 二九・第四、四半季	六四・六	三三・二	三一・四
(3) 三〇・第一、四半季	五六・五	二九・七	二六・九
(1)ニ對スル(3)ノ減少率	(一)九・六%	(一)八・七%	(一)一〇・七
(2)ニ對スル(3)ノ減少率	(一)一二・四	(一)一〇・四	(一)一四・五

──景氣研究所・四半季報──

之を歐洲とその他とに別けて示すと

	歐洲二十五ヶ國分			ソノ他二十三國分		
	全貿易	輸入	輸出	全貿易	輸入	輸出
(1) 二九・第一季ニ對スル三〇・第一季ノ減少率(%)	(一)一三・一	(一)一五・〇	(一)一〇・六	(一)一七・四	(一)一四・〇	(一)二〇・五
(2) 二九・第四季ニ對スル三〇・第一季ノ減少率(%)	(一)一三・五	(一)一一・五	(一)一五・八	(一)一〇・九	(十)一・七	(一)六・九

即ち歐洲諸國は前年第一季と比べれば減少率は小さいが、前年第四季と比べれば非常に大きい。

又前年第一季と比べれば歐洲は輸入は減じたが、輸出は殆んど減じてゐないのに、その他の諸國では輸出の減少が著しく大きい。が、第四季と比べれば、輸出の減少率も歐洲の方が反て大きい。

これは歐洲以外では米國を中心とする恐慌の影響が既に前年第四季には波及してゐたのに反し、歐洲ではまだ繁榮を續ける國が多く、本年に入つて漸くその打撃を強くうけてきたことを反映するものだ。

進んで、主要國の最近の狀勢を對比的に示すと次の如く、萎縮過程はまだ〳〵進んでゐる。

主要國貿易表（月額──百萬マーク）

	米國		英國		獨逸		佛國		オランダ	
	輸入	輸出	輸入	輸出	輸入	輸出	輸入	輸出	輸入	輸出
一九二九・一月	一五二〇	二〇二二	二二七八	一三六五	一三一七	一二〇一	八四二	六〇八	三九五	二五七
二月	一五三四	一八三〇	一六四七	一一三八	一〇一五	九七一	八四七	六七七	二九九	二〇九
三月	一三六五	二〇三〇	一八一二	一一九九	一〇二三	九八二	八一八	六八七	三六四	二九六
四月	一六七三	一七六三	一九二〇	一二三三	一二五五	一三二七	八四八	七二八	三九六	二八六

二〇・一月	一三二六	一六九五	一九一〇	一一八八	一三〇五	一〇九二	七八六	六一一	三七二	二五六
二月	一二八九	一四三七	一六二〇	一〇五七	九八二	一〇二六	七八九	六五九	三三四	二四三
三月	一二五七	一五六八	一七四八	一〇九九	八八三	一一〇四	七二七	六四九	三八一	二六二
四月	──	──	一五五〇	九五五	八八八	九七七	七四九	六三八	三四四	二三九

──四半季報──

殊に、季節的に三月から四月へかけて増加するのが常態であり、それは前年度には、はつきりあらはれてるが、本年は増加どころか、反て大きな萎縮なのだ。だから、この萎縮の實際の意味は數字以上に評價されねばならぬのだ。

且つ又、特に輸出の萎縮が著しいのも閑却されてはならないだらう。

(ロ)貿易の萎縮につれて、海運界の不振は實に悲慘を極めてゐる。が、餘白がないから、こゝには單にエコノミスト(英)の運賃指數を示すに止めておく。

一八九八──一九一三年ヲ一〇〇トスル指數

	歐洲向	北米向	印度向	極東・太平洋	總體平均
一九二九・一月	一一九	一二九	一二四	一二六	一二八
四月	一一八	一二一	一〇六	一一五	一一五
七月	一三一	一〇〇	一〇六	一〇五	一一〇
十月	一三〇	九八	一一七	九五	一〇九

三〇・一月	一〇四	九四	一〇〇	八五	九四
四月	九四	九一	九五	七六	九〇
五月	九五	八九	九二	七五	八九

即ち一般物價はまだ戰前より二、三割増しなのに、運賃では實に戰前十五ヶ年平均の九割以下にさへ落ち込んでしまつてるのだ。苦境想見すべきである。

第七、關税と投資戰の激化──

内外市場がかく狹化すれば必然に猛烈な市場爭奪が展開する。

一方に關税壁や輸入制限によつて國内市場を擁護しながら、他方に投資で海外市場を侵蝕しようとする。

だが、どの國でも一樣に、かうした敵對的戰略を採用する結果、關税と投資との效果は相殺され、關税は愈々高く、投資は益々露骨になる。

(イ)最近の關税運動で最も注目されねばならぬのは米國だ。一體米國は廣大な内地市場を持つてるから關税鬪爭でも、他國に氣兼ねしないですむだけの強味がある。

それで從來も幾度びか税壁を高めてきた。

	輸入額ニ對スル關税ノ割合
一九一六年(參戰ノ前年)……	九・一%
二〇年	六・四

二五年	一三・二
二八年	一五・九

——エコノミスト・日本・七・一——

處が、今度更に農業救濟を口實にして、實は廣汎な範圍に亘る大增税を斷行した。(本年六月から實施)

その中主要品目別に新舊税率を對比すれば……

	一九一三年	二二年	新税率 下院案	新税率 上院案
化學品	一六・一%	二八・九%	三一・八%	三一・〇%
金屬品	一四・三	三三・七	三六・三	三二・四
砂糖	三九・二	六七・九	九二・四	七七・二
農産物	九・八	二二・四	三三・四	三六・〇
綿製品	三〇・五	四〇・三	四三・二	四〇・六
羊毛類	二〇・九	四九・五	五八・一	五七・四
絹製品	四六・四	五六・六	六〇・二	五八・〇
人絹	三四・四	五二・七	五三・四	四九・二
有税品合計平均	二一・一	三四・六	四三・二	三九・〇

——通商局・海外經濟事情・六・二・出淵大使報告——

實際は此の下院案と上院案との中間で決定されたらしいが詳報を得ない。

かく税率を引き上げる外、米國では輸入品の評價法に就て、いはゆる米國販賣價格といふ橫暴な規定を强要してゐるのだ。

これで名目以上遙に高い課税が行はれるのだ。

(ロ)米國の法外な關税引き上げは世界的に敵對心を刺激した。就中歐洲では報復的な引き上げが各國で準備され、實行されつゝある。最も露骨な關税鬪爭は佛國との間に戰はされてゐる。

佛國では米國からの自動車輸入を從來の四五%から一擧に約九〇%の禁止的税率へ引き上げようとして居り、これに對して米國では更に佛國のレースやダンテルを九〇%から更に一五〇—三〇〇%—といふ高率へ引き上げることにしたといはれる。

——海外經濟事情、六・二・河合駐佛代理大使——

既に四十數ヶ國から米國へ抗議が送られたし、カナダ、ベルギイ、スペイン、その他では着々報復的引上げを企圖してゐる。

(ハ)恐慌の發展は先進國の投資的進出を激化させたので植民地的後進國の側でも敵對的な關税が盛んになつた。

(Ⅰ)濠洲——一九二九年八月に奢侈品引き上げ、同十一月百餘種に亘る廣汎な一般的引上げ、翌十二月にもその追加的引き上げ。

產業恐慌の深刻化と共に本年四月には更に七十餘種の禁止的高率を設け、又多數の品目には本税の五割に當る附加税さへ重課した。

(Ⅱ)印度——殊に紡績業の自主的擁護が中心題目となつてる。一九二七年綿糸關税を引き上げて日本の進入を阻止したが、今度は、本年

に入つてから綿布の防止を計つた。(一一%から二〇%へ)

(Ⅲ)蘭領印度、支那等が恐慌後に注目すべき改正をなした。

(Ⅳ)その他、此の二三年以來、ペルシヤ、シヤム、佛領印度支那、トルコ、エジプト、日本、等々……すべて强烈な保護政策を發展せしめた。

(ニ)恐慌の發展と共に關税同盟運動が注目されるやうになつてきた。

英國の帝國内自由貿易(外國には勿論税壁を廻らして)、佛國の提唱する中歐關税同盟、又チリとアルゼンチンを中心とした南米經濟同盟等がしきりに論議されてゐる。南阿には稍や小さな關税同盟が成立しつゝある。

分裂した小區域だけの獨占では、も早、大規模な合理化には不充分なことが痛感されたからだ。

それに、恐慌後、特に米國からの精鋭な攻撃が開始されたからだ。

だが、これらの諸計畫はたゞ狹隘な國家的自主運動の矛盾を暴露するだけで、敵對的な利益關係が到底實効ある同盟を成立せしめないのだ。

(ホ)かうして自由市場は愈々狹化するので、投賣的闘爭は凄じい勢ひで行はれてゐる。

先進國の輸出が、ともかくも支持されてゐるのは、この法外な投賣の御蔭だ。それだけ、價格の切り下げは烈しく、從て、中、小企業では到底此の犧牲に堪へられないのだ。

歐洲大陸の鐵鑛業は組織的投賣の本家だが、本年からは國際カルテルを高級なシンヂケートと改めた。

英國の重工業でさへ、最近には全國的な輸出カルテルが成立した。炭坑業のカルテルでは輸出奬勵金を組合から支出してゐるものがある。

餘白がないから、こゝには目下日本で問題となつてる硫安トラストの投賣の例を示すに止めよう。

硫安肥料は獨、英、米いづれも超大トラストに獨占化されてゐるが、なほ國際統制が行はれぬため、最近世界的に異常な過剰生産に陥つてゐる。

世界的生産

	千噸
一九二七年	三・五四三
二九年	四・九七四
三〇年(豫想)	六・一七〇

——東洋經濟・三・二二——

生産はかく増産したが、需要は農業不振の影響をうけて、これに追隨しない。

そこで海外市場の激烈な爭奪戰が展開した。

本年二月の日本市場における投賣は次の通りだ。

	内地價格ニ基イテ計算シタ日本沽値	實際ノ投賣値段	差額
獨逸品	一二〇円	九〇円	三〇円
英國品	一一九	九〇	二九
米國品	一一〇	八五	二五

——ダイヤモンド・四・十一——

注目すべきことは此の法外な投賣りが、一般的不景氣の外に、特に後進國日本の硫安工業獨立運動に刺戟され、それを阻止する目的で採算を無視して行はれてゐるといふ點だ。

かういふ現象は後進國の熱狂的な關稅引き上げと正に照應して到る處に行はれてゐるもので、最近の恐慌以來特に露骨な敵對關係の切迫を語るものに外ならぬ。

第八、國際カルテル運動——

第九、金融及び資本市場の緩漫——

（イ）事業界の停頓を反映して、世界的に金融市場は稀有の低金利時代である。（次頁圖表參照）

此低金利化はまだ進行し、紐育聯銀の如き六月十九日には更に公定割引率を二・五％にさへ引き下げた程だ。これは實に聯銀創立以來の低記錄だ。金融市況は益々緩漫で六月中のコールは二分歩に落ちた。

（ロ）かゝる金利安にも拘らず、株價は一向反撥しない。

一九二四—六年ヲ一〇〇トスル指數

	米國	英國	獨逸	佛國	伊太利	オランダ	ベルギー
一九二九・一月	二一〇	一二八	一四六	一五七	九八	一二五	一五二
四月	二一三	一二五	一四一	一四四	八八	一二三	一五九
七月	二三七	一二七	一三六	一四〇	九一	一二二	一三八
十月	二五七（九月）	一二六	一二五	一二九	八九	一一六	一三八
三〇・一月	一七九	一一五	一三〇	一三九	八八	一〇四	一〇七
四月	二〇七	一一六	一二二	一四七	九〇	一〇四	一〇四

——四半季報・三〇・第一——

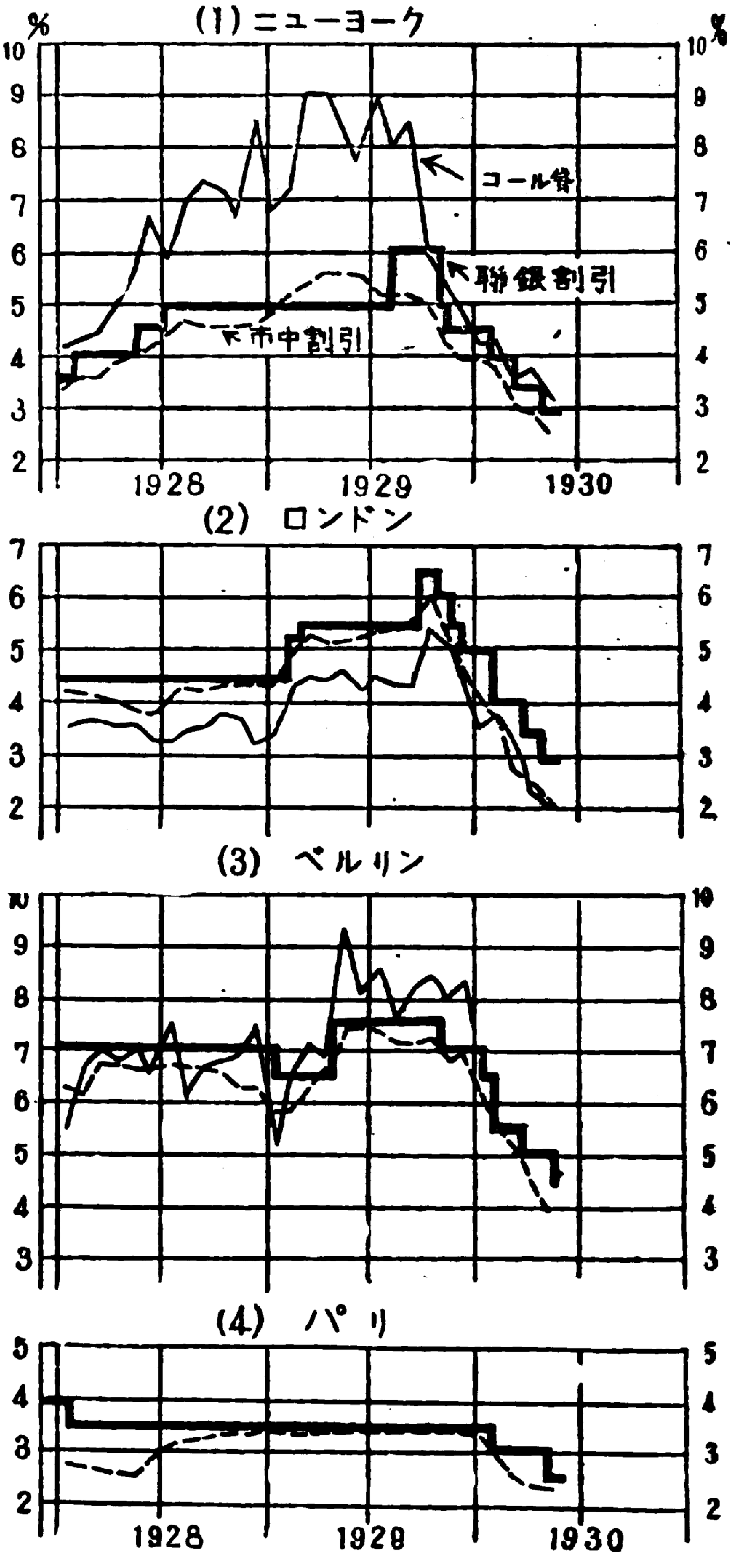
これでみると本年四月には米國を始め、かなりの反騰がみられ、下落は一應底を突いたかと思はれたが、これは浮動的な中間景氣であつて、すぐ、その後に再び激烈な崩落が引きつゞいたのだ。

米國株價表

	鐵道株二十種平均	工業株三十種平均
一九三〇・一月	一四九弗——一四四	二六七弗——二四六
四月	一五七——一四五	二九四——二七七
六月	一四四——一三一	二七四——二三〇

スチール株とアナコンダとは

	スチール株	アナコンダ株
一九三〇・四・一四	一九三弗	七一弗
六・一四	一六三	五二
七・一四	一六三	四九・五



(四半季報　1930. I.)

註　——　コール利子率

——　中央銀行公定割引率

----　市中銀行割引率

倫敦取引所でも……

工業株三十種平均相場指數（一九二八年＝一〇〇）

一九三〇・三・四（本年最低）……八二・〇

四・一七（最高）　九〇・六

五・二二　八五・五

五・二九　八四・九

——英、エコノミスト、五・三一——

これは要するに事業界の水増し資本の整理が完成されず、その眞實の立ち直りが尚早と考へられてゐる證左だ。

（ハ）その事業界の恢復にとつて特に重要視されるのは短期金融市場よりは長期資本市場の動きでなくてはならぬ。

此の長期資本市場も勿論緊張は緩んだが、前述の如く各國の新規發

行額はまだ前年の高潮には及ばない（但し、佛、スエデンは然らず）。

長期資本の條件はまだ短期ものに比べて甚だ割高を唱へてゐるが、これは漸次低下して短期に接近しつゝある。

世界的資本市場では國內需要が閑散だから、海外投資は增勢を示してゐる。

（I）米國――の新規發行と海外證券發行とを示すと……

	上四ヶ月分合計（百萬弗）一九二八年	二九年	三〇年	五月分 二八年	二九年	三〇年
新發行（全體―借換ヲ除ク）	二、五二八	三、五二七	三、〇四九	八七〇	一、一二一	一、一〇九
內譯 (1) 會社證券	一、七四六	三、一五一	二、三五七	六〇八	九二三	八六四
(1) 公債	七七二	三七六	六九二	二六二	一九八	二四五
(2) 內地證券	二、〇二四	三、一八一	二、五七六	六二三	一、〇七四	八四七
(2) 外國證券（賠償ノ分ヲモ含ム）	四九四	三四六	四七三	二四七	四七	二六二

――フィナンシアル、クロニクル、五・一七及六・一四――

沸騰的な前年同期に比べれば、本年上四ヶ月の發行額は全體としては少いが、外國向發行は著しく超過してゐる。

二八年に比べると、全體としては多いが、海外向はまだ及ばなかつた。

が、五月に入ると全體としても增加したが、海外向きも激增して、遂に二八年度をさへ超過するに到つた。

ともかく、投機的な內地證券への資金吸收熱からは解放されてきたことが分る。

（II）英國――の上五ヶ月分の狀勢は次の通りだ。

	上五ヶ月分合計（百萬ポンド）一九二八年	二九年	三〇年
內地證券	一〇五	九八	六五
植民地	四二	四一	三八
外國	二七	二八	三二
（植民地・外國計）	六九	六九	七〇
合計	一七三	一六八	一三六

――スタチスト・六・一四――

全體としては前二ヶ年のどちらよりも少いが、それは專ら內地向きの減少のためで、海外向きは多少の增加さへみられる。

殊に五月に入つてから發行高は激增してゐるのも注目されねばならぬ。卽ち

月別發行高

	全體百萬ポンド	國內向	植民地向	外國向
一九三〇・一月	一七・二	一〇・五	三・六	三・一
二月	二六・八	八・一	一〇・七	八・〇
三月	二八・四	一九・一	五・六	三・七
四月	二一・四	九・六	一・九	九・八
五月	四一・九	一八・〇	一六・五	七・四

――スタチスト・七・一四――

(Ⅲ)米、英兩國の外、佛國の資本市場が最近著しく活躍し出したのも注目すべきだ。

前述の如く佛國の證券發行高は前年上四ヶ月分合計の四十六億フランに對して、本年上四ヶ月分は既に七十八億フランに上つてゐる。

しかも、同國は從來巨額の資本を擁しながら、人爲的に海外投資を抑壓して居り、そのために、國内に過剩退藏の傾向をひき起したゞけでなく、同國への金の吸收政策が國際資本市場の人爲的硬化を發生してゐたのだが、最近には、此退藏政策を放棄して、積極的に國際投資に進出してきたから、後進國の資金難は、これによつても大に救助されるであらう。殊に外債に對する課税を引き下げて發行條件を有利にしたのも時節柄注目されねばならぬ。

×

凡そ今日の如き高度獨占期には先進國の貿易發展は主として後進國への輸出増進に依存してゐるのだが、それは周知の通り先進國からの資本輸出と併行するものだ。

殊に、目下、後進國は農業及び原料品の不振──その値下りと凶作とによつて一様に異常な資金難に陷つてゐるのだから、先進國の資本市場が緩和されることは彼等の安定に非常に好都合であるに違ひない。

この見地から、主要農業國の經濟狀態を吟味し、先進國の海外投資の發展を、も少し詳細に檢討することは興味ある題目なのだが、既に餘白がつきてゐるから、こゝでは、それに迄立ち入らない。

第十、綜括──景氣の見透し

一體金融及び資本市場の閑散、──從て金利の低下といふことは、それ自體は、事業界の不振を反映するだけで、それから、直に、景氣恢復の糸口をみ出す譯には行かぬ。

同じやうに物價の崩落殊に原料の値下りも、たゞ生産的需要の萎縮を反映するだけで、それだけをみて、直に景氣の立ち直りを考へることはできない。

もし、景氣が恢復するとすれば、先づ、そこには、合理的な生産計畫が確立されねばならぬ。

かういふ合理的な計畫を持つ者にとつては、金利の低下や原料の崩落は實にその計畫を實行するに好都合となるし、從て、そこから潑剌たる新活動が開始されるだらう。

勿論かゝる新計畫は多種多樣だらう。

が、技術上の變革と未開地の開拓との二つこそ──天變地異的の出來事を除けば──最も重要な題目でなくてはならぬ。

では、大規模な生産活動を刺戟するやうな技術上の變革は豫期され

るか？　又、大規模な新地開拓の計畫は進められつゝあるか？
　この點で又稍や注目されるのは最近各國政府が熱心に大規模な土木事業を計畫しつゝあることだが、從來の規模では、之はまだ〳〵景氣轉換劑としては甚だ頼り少ないものであらう。
　最後に、まだ一つ、資本家的に正常的と考へられる、有力な景氣轉換法があることを忘れてはならぬ。
　それは外でもない。××だ。
　事實、恐慌の發展につれて益々切迫しつゝある國際鬪爭の激化は此の××――×××××××××日々濃厚ならしめつゝあるのだ。
　現に、フイナンシアル・クロニクルでさへ、米國の新關税を批判していつてゐる。……
「この關税率は、どんなに純潔無垢にみせかけようとも……廣い全世界の横つ腹を突き刺す棘だ。制限と罰則とでかためたかゝる關税率は疑惑と敵意との培養者ではないか？　吾々は平和を讃美し、平和を祈りながら關税壁を設けるのだ。そして、あらゆる國民は今同じことをやつてゐる。……もし××が命がけの鬪爭だとすれば、關税率は××を刺戟するものではないか？　目にみえない××といふものもある。……全世界は今や××のまつたゞなかにあるのだ」。（一九二九・六・二）
……

×

　根本的なことは姑くおいて、目先き景氣は轉換しつゝあるか？
　私は、これから、米、英、獨、佛及び植民地諸國の各國別に景氣狀勢の展開振りを檢討してみる豫定だつたが、今はそれを斷念せねばならぬ。
　(イ)世界經濟の動きを支配する主要國の中、佛國とベルギイとイタリイとはまだ漸く不況の端初に立ち入つたに過ぎない。そこでは不況はこれから深刻化して行くであらう。
　(ロ)既に恐慌の奧深く沈んでゐる米國では不況は、もう底を突いたらうか？
　これは最も重要な題目だが、アンナリスト誌の專門觀測者さへ豫測至難なりと告白してゐる程の難問だ。
　が、本年春期の季節的な上昇が極く微弱な――正常以下の――小反撥を示したのち、六月に入つてから狀勢は再び惡化しつゝある。
　ナショナル・シチイ銀行の六月情報は物價の底入れ、好況への轉機の接近を樂觀してゐるけれども、この世界的の萎縮――生産と消費との異常に深刻な不均衡を考へれば、注目すべき程の反撥はさう容易には來ないのではなからうか？
　參考のためにアンナリストの生産指數を示しておかう。

アンナリスト生産指數

	一九二九年 七月	一九二九年 十月	三〇年 一月	三〇年 二月	三〇年 三月	三〇年 四月	三〇年 五月	二九年 四月
銑鐵生産	一二七	一一三	九〇	九六	九五	九五	九六	一一〇
粗鋼生産	一三一	一〇五	八七	九九	九一	九三	八八	一一六
鐵道輸送	一〇二	九八	九二	九二	八九	九二	九〇	一〇四
電力生産	一〇四	一〇三	九八	九六	九四	九六	九五	一〇四
自動車生産	一三七	一二二	一〇〇	一〇七	九八	一〇二	九四	一四二
木棉消費	一〇五	一〇九	九三	八七	八四	九一	七八	一一一
羊毛消費	一一七	一一八	八六	八一	七八	八二	―	一〇八
綜合指數	一〇九	一〇四	九三	九三	九〇	九三	八九	一〇八

―アンナリスト、六・一三―

本年五月の生産指數はかくも慘めな低落を示してゐる。殊に景氣恢復の先驅者たるべき粗鋼の指數がなんとひどい慘狀ではないか？

しかもこれでさへ大獨占體が投資によつて辛じて作業を維持してゐる狀態なのだ。即ち

鐵鋼業作業率(アンナリスト)

	ユー・エス・トラスト	獨立會社	全會社平均
一九三〇・三、三日	八六%	七三%	七七%
四、七日	七九	七〇	七五
五、一九日	八〇	七〇	七五
六、三〇日	六九	五九	六四

ユー・エス・トラストの手持ち註文高も最近に減少しつゝある。

	一九二九年	一九三〇年
一月	四、一〇九 千噸	四、四六九
三月	四、四一一	四、五七一
五月	四、三〇四	四、〇五九

―クロニクル・六・一四―

鐵鋼業がかうした不安な狀態では、恐らく一般的立ち直りは、さう容易には來るまい。

(ハ)歐洲では、英國の生産狀態は最近になつてから、著しい惡化があらはれてゐる。

商務院の指數をみると三月から四月にかけて顯著な萎縮が一般的にみ出される。

英國(商務院)の生産指數

	一九二九年 第一季	一九二九年 第二	一九二九年 第三	一九二九年 第四	一九三〇年 第一季	一九三〇年 三月	一九三〇年 四月	二九年 四月
石炭	九九	九二	九四	一〇〇	一〇二	一〇一	八九	九三
銑鐵	九二	一〇五	一一一	一〇八	一〇五	一〇九	一〇二	一〇〇
粗鋼	一一七	一二一	一一七	一一五	一一六	一二〇	一〇二	一一八
電機器	一〇四	一〇五	一〇八	一一一	一一六	一一九	一一四	一〇五
造船(季末建造中)	九四	一〇一	一〇一	一〇八	一一二	―	―	―
木棉消費	一一四	一一〇	八四	一一四	一〇二	九四	八三	一一〇
羊毛(賃銀支拂高)	八九	九三	八九	九一	八四	八三	八四	九四

人絹生産	二〇三	二〇八	二四八	二四〇	二〇三	一八三	一五二	一八八
ゴム消費	二八五	二六四	三五〇	三五四	三〇九	三六七	二一四	二五三

—ボールド・オブ・トレード・ジョーナル・五・二九—

(二)獨逸は益々ひどい恐慌狀態に陷りつゝある。景氣研究所の報告も、まだ當分は立ち直りを否定してゐる。

主要部門の作業率は次の如く下落しつゝある。

可能勞働時間ニ對スル實際作業率(%)

	全體平均	基本原料×	動力部門△	建設部門#
一九二九・七月	七六%	七九%	九〇%	七二%
十月	七三	七八	九二	六九
三〇・一月	六六	七六	九一	六五
四月	六四	七〇	七八(三月)	六二

×鐵鋼、ソノ他金屬、紙、革ノ諸部門
△石炭、褐炭
#鑛物、機械、電機、造船

—四半季報—

生産手段の部門は、五—六月にかけて更に一層萎縮してきたことが報告されてゐる。

こゝでも極端な投賣で辛じて作業の最低率を保持するに苦心してゐる。(以下省略)

—獨逸、エコノミスト、六・五・及六・十二—

×

かくて、世界恐慌は今尙ほ愈々深刻化しつゝあることが斷言される。世界的生産は驚くべき大制限をうけてゐるけれども、全體として生産能力と購買力との開きが餘りに大きくなり過ぎてゐるので、滯荷は、仲々整理されやうとしない。そのために物價の崩落、金利安等も活況への轉換をひき起し得ないでゐる。

更に、注目すべきは本年農作物の作柄が豫期したやうな減作とならず、それに來年度のための植付けが、これ又、豫期したやうな減退を示さないことだ。

だから、今日、豫測的報道が利用される限りでは、農産物方面の立ち直りは長びくものと考へられる。

現に本稿校正の際入手した、ロンドン・エコノミストは世界的農作狀況が、今考へられるやうな狀況に推移すれば、米國の不景氣はまだ〱これから深刻化するだらうといつてゐる。

——以上、三〇・七・九・脫稿・八・二・加筆——

支那赤軍の現勢と今後の發展

鈴江言一

はしがき

赤軍が七月二十九日長沙を占領した。それは非常に重大な事件である。だが此の「重大」の意味は人々によつて解釋が異る。そして一般には只だ突如として現はれた表面の事態のみが注意を支配する。隨つて人々の多くは數日後長沙が奪回されたと聞いた時、何とはなしに「一と安心」の感じをもつたであらう。だが、這ふした人々は一九二七年十二月の廣州ソヴイエト宣言當時、無雜作に驚駭し、そして其失敗と共に事件を無雜作に忘れ去つた人々である。最近、自分は屢ゝ長沙事件は何うなるかの質問を受けた。其たびに自分は「長沙はすぐ奪回されるでせう。赤軍は簡單に一時のそして軍事的の退却をするでせう、だがそれは文字通りの一時であり軍事的であります。」と答へた。

一、何故事態は被はれて居たか？

此の三月から四月にかけて暫く南昌の危險が傳へられ、五月には湖北の宜昌が前後三回に亘つて包圍され……と云つた事態が公けになり、世人は、はじめて赤軍に關して注意し出した。そして長沙が赤軍の手に陷ちたとの報道で事の意外に迅速なのに一驚した。

だが、赤軍今回の長沙占領は、要するに農村に於ける土地××の非常な發展を示す一端に過ぎない。換言すれば、それは現在長江以南の一帶に普遍しつゝあるソヴイエト鬪爭の一つの現はれであり、擴大された赤軍の遊擊戰（ゲリラ戰）の一つの現はれに過ぎない。只だ此事件が今更らの樣に一般に重大なショックを與へたのは、それが湖南省の首都であり、南京政府の死命に關する土地であり、又直接外國資本の利益と接觸する商埠地である長沙に發生したが故にほかならない。事態は長沙占領で一驚するには餘りに前進し過ぎて居る。然らば何故、今迄で之れが問題とならなかつたか？

國民黨の名を中心として不斷に反覆される軍閥戰爭の中に、自ら跳

つて居るブルジョア通信員は、國民革命の意義を知らず、その發展を知らず、支那××の新しい進行を表現する土地××を知らず、又その發展を知らない。彼等は只だ、ナショナルブルジョアヂーと封建地主の結合體である國民黨による內亂の解決や和平統一を夢みつゝ戰爭や妥協やボイコットや新條約を熱心に通信して居た。そして彼等自身がその爲めに立ち働いて居るブルヂョアジーにとつて最も重大な問題に就ては此の三年間何ん等の報道をして居ない。時たま、「△△に現はれた共匪は既に〇〇方面に潰走した」とか「××地方で放火掠奪を擅にした共匪は何某の軍隊に包圍され、大部分は捕はれ或は戰死し……」と云つた支那新聞は出鱈目な六號活字——一九二八年來支那新聞に現はれた共匪討伐の報告を合計すると朱毛軍の損害だけで十萬に達する。然るに朱毛軍は今日に於てすら實力一萬に到らず、赤軍全體を云ふも十萬を僅か超過するに過ぎない——を斷片的に傳へた以外には。

其結果、赤軍の急激な發展はブルヂョア通信員により、地方に出沒する單なる土匪の類として久しい間、一般の眼の前に蔽はれて居た末、今や一躍「突如として現はれた恐るべき勢力」の待遇を受けることになつたのである。然らば實際では事態はどう進行して居たか？吾人は此の問題——赤軍の內容、其戰術、其鬪爭の發展等々——をば、所謂共產軍活躍の現狀と今後の展望を云々する爲めの前提として簡單に述べて見やう。

二、所謂ゲリラ戰の發端

農村に於ける土地××の新鬪爭は一九二七年八月の武漢政府沒落に出發する。

一九二七年四月、蔣介石に代表されたナショナルブルヂョアジーの一部が封建地主の武裝と妥協し、革命戰の矛先きを逆轉して昨日までの同盟者に向けた時、ナショナルブルジョアジーと勞働者農民との聯合戰線の一部面は、尙ほ武漢政府の上に支持されて居た。勿論その「支持」は極めて危かしいものであつた。蓋しそれは(一)小ブルヂョアの上層を有力な背景とするナショナルブルヂョアの一部と軍閥との南京政權に對する結合(二)勞働者農民の鬪爭の發展が刻々とブルヂョアジーと地主を反動同盟に追ひやりつゝある形勢をば、勞働者農民の鬪爭に制限を加へることによつて繫ぎ留めやうとする。即ち前者の鬪爭の階級的發展を抑制することによつて國民黨の上層份子との結合を繫ぎ留めやうとする當時のプロレタリアの機會主義的リーダーの努力……此の二つによつて僅かに支持されて居たに過ぎなかつたのである。

然し「前世紀的富豪——藏に貯藏された農民の貢納物で表現された

――の中から、帝國主義資本の影響下に釀造されたナショナルブルヂョアジーの特殊な經濟的地位は、國民革命の發展過程に於て彼等を農民の封建的掠奪者、卽ち地主階級と對立せしめないで反對に被搾取農民と對立せしめた。一方、同じ鬪爭の發展過程に於て、半植民地支那の農民と勞働者は封建地主の搾取に對する――卽ち土地××の遂行に對する――徹底的な鬪爭、帝國主義及びブルヂョアジーの支配に對する徹底的な鬪爭にのみ自己の解放を見出した……拙稿、四・一二以後に於ける支那の勞働運動（批判八月號十六頁）そして彼等の鬪爭は彼等のリーダーの困惑と懸命の抑制にも拘はらずグン〳〵發展して行つた。かくて「先づ北京を……それから吾人の××へ」と大聲叱呼して居たプロレタリアのリーダー達ちの努力は完全に失敗し、武漢は南京と同じ軌道に合流した。ナショナルブルヂョアジーは全體として完全に、ブルヂョアデモクラシーへの革命領導權を放棄した。同時に、勞働者農民の鬪爭は徹底的にアンダーグラウンドに押やられた。だが、そのかはり彼等の鬪爭を抑制して居た一切の妥協的スローガンが放棄され、國民黨の政權に對する彼等の武裝鬪爭が宣言された。その具體的な發展は一九二七年八月の南昌決議である。卽ち武漢國民黨――當時南京討伐の爲め南昌に集中して居た――の所謂反革命が曝露した時、勞働者農民は南昌に會議し

一、農村の××は農民協會に歸する
二、土豪劣紳、重利剝奪者其他一切の反動份子の××を××し、農村中の貧民の生活改善に充てる
三、大、中地主の土地、其他公產廟宇の土地を×××××××××する
四、高利の債務及苛酷な小作契約の××、地主の武裝の××と農民の××、傭農の生活と勞働條件の改善、失業救濟等？
五、一切の新舊軍閥に對する抗租

のスローガンと、各地に於けるソヴイエト鬪爭の開始を決議した。彼等は此の決議に於て、ソヴイエト鬪爭とは「一切の××を勞農兵及貧民代表會議に」を農村の武裝鬪爭のゼネラルスローガンとする鬪爭だと說明し、且つ此の鬪爭を通じてのみ支那現在の環境の解放卽ち、

一、外國資本の壓迫よりの完全な解放（不平等條約其他帝國主義の特權廢棄、關稅自主、外債取消、外人の占有する生產資料及交通機關の國有等々）
二、全國的市場の建設（一切の封建遺毒の肅淸、土地國有、××的民權的政府の建設等）
三、勞働者農民の政治的、經濟的、法律的地位の急激な改善

が達し得られると附加して居る。之れが卽ち發展今日に到つたゲリラ

戰の發端である。

三、過去に於けるゲリラ戰の經過

各地農村に於ける彼等の鬪爭は反覆する失敗の中にしきりに繼續された。例へば湖北湖南に於ける大規模な暴動計畫、南昌から福建を經て汕頭に進出した葉賀軍の活動等々。そして一時六十餘のソヴイエトが湖北、湖南、江西、廣東の各地に宣言された。勿論此の間に地主と農民とは想像以上に激戰して居る。國民黨は明かに失敗であつた彼れのテラー政策に於て甚だ短い時日の間——武漢沒落から五ヶ月の間——に二萬九千の勞農の生命を斷ち四萬五千を傷つけ五萬八千を逮捕し或は追放した。だが、地方の鬪爭は彈壓の度に比例して擴大した。そしてそれ等はやがて廣州ソヴイエトの宣言(一九二七、一二、一一)に結晶した。

廣州ソヴイエトは勞働者農民の鬪爭の密接な聯絡の缺如、彼等の政治的組織の基礎薄弱を主要な原因として、僅々三日を支持し得たのみで倒壞した。然し此の事件は深刻に國民黨の政權を脅かした。國民黨のテラー政策は益々極端化し、然かもそれは一九二八年七月の全國統一宣言と共に文字通り全國的となつた。その結果地方農村に於ける所謂る「暴動」記事は一時新聞紙上から遠のいたかの如く見られた。

それにも拘はらず、彼等の鬪爭は、此の蔽はれた殼の内部で、驚くべき速度で展開して居たのである。それは正しく、工場勞働者の自發的經濟鬪爭が急激に反國民黨的政治鬪爭に展開しつゝあつた新風潮——一九二八年十月の上海郵便罷業を中心とする——と照應し、益々組織的統一的へと發展して居たのである。殊にそれは彼等のスローガンから、富農層を中立せしめる爲めに一九二七年來支持されて來た小地主の特別待遇政策を撤去し、一切の土地の×××××を確立したことに於て强力化されて居る。つまり、彼等は此の新しいスローガンに於て、地主に大小の區別をつけ紳士に善惡の區別をつけ、小地主の取扱ひに手加減を命じ、善い紳士と結んで惡い紳士に當れと要求する如き傳統的意識の作用を徹底的に除去し、××的勞働運動の發展とプロレタリアを領導とする農村鬪爭をより密接に結びつけやうと要求したのである。然らば、國民黨のテラー政策の蔭で、還ふした要求が如何な程度にまで目覺しい彼等の鬪爭の發展を導いたか? 之れには次の記述が明瞭に答へるであらう。

四、ゲリラ戰法、並に赤軍現在の勢力

ゲリラ戰は農村の部分的××鬪爭を漸次大規模なそれに展開し、ソヴイエト×××に導くことを目的とするもので、此の戰術の中に、

「都市勞働者の××××を廣大な大衆的××高潮に發展せしめ、勞働者の××組織を以て自發的に農民闘爭の領導者たり得る樣にする……」が××××の條件として決定されて居る。今日各地を席捲して居る赤軍の活躍は、之れを基礎とするものである。そして又、戰爭そのものに至つては極めて巧妙に行はれて居る。守備薄弱に乘じ赤軍が確實に一縣を占領した時、第一に×××××組織が行はれ、同時に×××××××××其他のスローガンがソヴイエトの名によつて實行に移される。勞働者農民の政治的××と××、彼等の自衞軍の××と××が行はれる。有力な軍隊が到着した時には、彼等は敏速に該地を離れて次の地方に轉じ同じ工作を開始する。その場合、一旦××××××土地の勞働者農民は植ゑつけられた地方×××××の基礎として殘り、赤軍が再び近づいて來た時、之れに應じて自發的に昔日の組織を恢復する任務に就く。

軍閥の傭兵は赤軍と闘ふ意志を全くもたない。普通彼等は赤軍の接近と共に退却する。時に有力な討伐隊として行動する時でも、多くは先方が退却するを待つて前進する。赤軍の秩序は一般に信頼されて居る。彼等は××××××××××無秩序な放火殺人はしない。反抗する地主劣紳の處分すら××裁判を經てやる。占領地×××を××する彼等にとつては火災は正しく彼等自身の損害である。廣州ソヴイエト事件に於ける大々的放火虐殺が政府軍によつて演ぜられたものであることは、今日では共產軍の殘虐を血眼で報道したブルヂョア新聞が承認して居る。只だ、はじめて赤軍の來訪を受ける地方では、守備軍の撤退と共に土地の貧民が無組織に發動し、燒打ち掠奪の暴動を演ずる場合が少くない。又、退却に當り軍隊が無計畫に、或は國際關係等を發生せしめんとする計畫の下に同じ行動に出ることもある。長沙占領に於て報ぜられる事件が若し事實であつたとせば、恐らくそれは前者の場合であらう。勿論かゝることは大冶の例にも明瞭なる如く、一度赤軍が來訪した處では殆んど發生しない。

かくて赤軍今日の轉戰は、客觀的にはそれが各地農民に××××××××××洗禮を與へる形式で發展して居ることを示す。勿論、之れ等の洗禮は地方ソヴイエトが一省或はより以上のものに擴大した時、此の形勢の急激な發展の根本基礎となるものである。此の點に於て長沙赤軍の退却は長沙占領に示された重大な意義——農村××發展の現狀を說明するところの——を聊かなりとも稀薄ならしめない。

＊　＊　＊　＊　＊

勞働運動が一九二七年未來の自發的經濟闘爭風潮を結束して國民黨政權に公式に宣戰し、支那の勞働運動史に一時代を劃するに至つた——本年四月、上海共同租界電車及バス罷業が代表的に說明する（前揭

書參照）――時、農村に於けるゲリラ戰の發展は次の如き勢力を確立して居た。

（一）各地に於けるソヴイエト區

江西、南昌（最近ではその危急がしきりに報ぜられて居る）一帶を除いた全部、即ち全省八十一縣中六十縣がソヴイエト區。章江西岸に沿って吉安下流の峽江縣一帶が赤軍勢力地帶。

湖北、約四十縣がソヴイエト區。武漢郊外十里內外にまで最近赤軍の出入を見る

福建、ソヴイエト區は西部七縣、南部三縣、北部四縣

廣東、東江、西江、北江及瓊崖はソヴイエト鬪爭の歷史的地域で、廣州ソヴイエト失敗後の徹底的彈壓下に依然として基礎を支持す。

廣西、西部廿餘縣がソヴイエト運動の影響下にある

湖南、彈壓の最も激しい地方にも拘はらず東部西部のソヴイエト大區域は三年來終始支持。（現には長沙に及ぶ）

河南、商城を中心として發展中

四川、一九二九年曠繼勛の旅團が全體としてソヴイエトに參集して居る。

安徽、西部に遊擊戰の進行を見る

江蘇、宜興、江陰、無錫には一九二七年來の鬪爭が反覆されて居り、南通、淸江、一帶に擴大しつゝある

浙江、最近、江山常山一帶に赤軍の進出を見る。

（二）各地赤軍基本軍の現狀

總計十四軍約十萬。貧農が全體の六〇%を占め、鐵砲六萬、砲二百、飛行機五臺、內容不明の第九軍（湖北々部）第十軍（同西部）第十三軍（浙江南部）を除いた其他の勢力は

第一軍　兵力五千三百、武裝三千、飛行機一、湖北の東北、河南の東南、安徽の西部に行動し、六〇%は貧農

第二、六軍　第二軍は賀龍軍で兵約六千。四〇%が貧農で武裝は四千六百。湖北及湖南の西部に活動。第六軍は湖北西部の農民中に生れたもので六千の八五%は貧農。武裝は約五千、軍長は曠繼勛。最近第二軍と合し賀龍を總指揮として居る。

第三、四、五軍　第三軍は江西西部の各軍を合せたもので約五千、八〇%は土地の貧農、武裝は約四千五百。廣東の北部、湖南の東部から江西の南部に亘って遊擊戰を演じつゝある。第四軍は朱毛軍（軍長朱德、政治部長毛澤東）の軍で約八千の勞働者農民の武裝から成る。湖南の東部南部、江西の西部東南部、廣東の北部、東江、福建の西部一帶に亘り鬪爭三年、約三百萬の農民を組織し幾多のソヴイエトを建設して居る。

第五軍は一九二八年平江に於ける暴動の産物で彭德懷が指揮し、湖南の東部、湖北の南部、江西の西部の遊撃に當り、七千の内七〇%は貧農、武裝約六千。最近三、四軍と連結し朱德を總指揮、毛澤東を總政治委員として長江方面に進出せんとして居たが、終に今回長沙に現はれた。

第七軍　廣西軍の一部の歸化したもので、約八千、八〇%は兵士。武裝完備、飛行機四臺、本年一月龍州を陷れ海關や銀行教會を沒收し佛國領事や外人を境外に護送したが、後佛軍と國民政府軍の聯合反攻により龍州を退いた。

第八軍　第五軍が大冶を攻めた時、防備に派遣された獨立第十五旅中の兵士の投じたもの。約五千、大部分は兵士、湖北の東南部、江西の北部に活動

第十一、十二軍　前者は葉賀の基本軍と廣東々江の農民とで組織し、惠州方面に活動。約五千、六〇%は貧農、武裝四千。後者は朱毛軍が福建西部で武裝した農民軍で約九千、八〇%は貧農。武裝約八千。現在では福建西部から韓江、東江方面に向ひ第十一軍と聯結して潮仙を進攻しやうとして居る。

第十四軍　兵力約二千、六〇%は貧農、江蘇の南通、如皐、海門一帶に活動。

＊＊＊＊＊＊

本年五月上海で第一回全ソヴイエト區代表大會が開かれた。此の大會で彼等は廣大な區域に亙る各ソヴイエト區の鬪爭と統治とに統一的基礎を得やうとした。その結果として彼等は全ソヴイエト區域に於て施行すべき勞働法の外、（一）地主、教會廟宇等に屬する一切の土地の××××××（二）土地の賣買賃貸借×××（三）從前の田賦其他一切の稅捐の××等々を規定した臨時土地法を制定し、更らに左の如きソヴイエト政綱を宣言した。

一　外國の一切の特權、既有條約、外債××××及その銀行、企業、工場×××
二　勞農の武裝、兵士に土地職業の提供、勞農兵貧民代表會議×××××
三　勞働保護法、八時間勞働（未成年の六時間）、賃銀增加及最低賃銀制定、社會保護、女工の保護
四　土地國有とその配給
五　民族自決による民族の分立と其自由聯合
六　××大衆の政治的一切の自由權
七　統一せる累進稅
八　政府の農民銀行經營、消費組合援助

九、政府の水利經營、共營農場の提唱

之れ等は、實に長沙占領に續いて長沙各處に活動しつゝある彼等目前の闘爭に與へられた新しい基準を爲すものである。

五、赤軍の活動は何う展開するか？

長沙事件の被害に對し、日本政府は早速抗議と賠償要求の豫告を南京政府に送つた。國民政府は無條件に恐縮し、賠償承認の手形を發行し、直ちに「共匪」を討伐して二度とこんな事件のない樣にしますと詫びを入れた。

尤も長沙の囘復には政府も列國も差して困難とは感じなかつたであらう。然し所謂る「共匪」討伐に至つては政府自身其の不可能性を最もよく知つて居る。列國も此のことを要求はしても何ん等の期待を政府の力量において居ない。と云つて自ら積極的に出ることも出來ないので消極的自衛の宣言で御茶を濁して居る。然かも、政府でも列國でも「共匪」の跳梁は不斷の內亂がそうさせるものであつて、內亂さへ解決すれば徹底的討伐は出來ると考へて居る。ところが「共匪」討伐が內亂の解決を前提とする限りに於て、今度は國民黨政府の下には永久に「共匪」討伐は出來ないと云ふ結論が出て來る。何故？それは國民黨政府そのものに支那の內亂を解決する資格が存在しないからである。

內亂は、今日、三民主義の忠實な信徒の割據跱立によつて演じられて居る「軍閥戰爭」に示される。だが、此の軍閥戰爭に於て、國民黨がブルヂョアジー——勞農の發展によつてブルヂョアデモクラシーの革命の領導權を放棄したところの——と封建地主の結合を表現するものである限り、何れの側にも完全にブルヂョアジーを代表する勢力なく、同樣、完全に封建地主を代表する勢力もない。彼等はつまり、互に此の二階級の結合體の或る一方を代表するグループとして對立するのである。然かも之れ等の背後には、原始的植民地侵略の繼續の中に獲得した一切の政治的經濟的特權を以て支那を支配し、且つ此支配的地位の支持に自己の存在の基礎を見出す列國帝國主義が入り組んで參加して居る。のみならず之れ等列國の利益が又、支那に於て激しく衝突し、此の衝突は更らに中央政府のヘゲモニー獲得を中心として、或は又勢力地帶の特殊地位を中心として種々な形で個々の軍閥——國民黨の名に於て存在する——の支持を展開する。其結果、互に對立する軍閥は、常に、支那に於て個々に對立する列國の利益を代表する。隨つて軍閥戰爭は、支那に巢喰ふ列國の存在を前にして不斷に反覆されねばならぬ。一歩々々ゼネラルクライヂスへの危機に近づきつゝ。

ブルヂョアジーは今日尙ほ國民革命を云々する。然し封建地主と同盟し帝國主義と妥協せねばならなかつた彼等には軍閥及帝國主義の支配と徹底的に闘ふべき何ん等の資格もない。そこで此の資格即ちブルヂョアデモクラシー革命の領導權をもつものは、只だ帝國主義と軍閥の支配に絶對的に對立する勞働者と其同盟者農民だけである、と云ふことになる。過去三年の闘爭中に早くも今日の實勢力を獲得した赤軍の前進に、×××××が考へられるのも、如何なる××××××××今後の發展が考へられるも、凡ては此の點に歸結しよう。

かくて次の樣な結論——否な想像——に達する。

列國が支那に於て直に矛盾衝突する一切の事情を抑制し合つて、支那に現存する或る勢力を共同支持し、その勢力をして內亂を平定し所謂る眞の國家統一を達成せしめることが出來れば兎も角、若し然らざる場合には、そこには益々加はり行く「共匪」の跳梁が現はれる。列國は絶えず抗議と賠償要求を出し、政府は絶えず謝罪し賠償手形を發行する……と云ふ事態が現はれる。中央政府も地方軍閥も奔命に疲れる。然し彼等には、先づ邪魔を片づけてゆつくり勝負しやうなどの洒落氣はない。「共匪」は愈よ有力に長江の重要都市に乘り出して來る。時に此の間、中央地方の傭兵軍隊の構成者たる失業農民が自發的に組織された農民×××に歸順せんとする顯著な傾向が問題となつて來る。勿論產業工場勞働者の闘爭は尖鋭化し、政治的ゼネラルストライキが擴大する。支那に於ける經濟的利益の保護の爲め列國は長江其他の海岸商埠地に軍艦を常備し、愈よ公然たる積極手段に出る。蔽はれたる「平等待遇」への好意傾向は再び逆轉し、內河航行權や駐兵權は無言の內に決定的なものとなる。這ふした傾向の中に、××××××××××××××××××××××××××再び反帝國主義への動搖傾向を帶びて來る。それは勿論反國民黨的に現はれ、且つ此の運動中に彼れ等は唯一の政治的進路をプロレタリアの指導する新國民××への參加に見出す。列國の對支政策の動搖が、相變らず展開する軍閥支配の對峙の中に益よ擴大する。かくて農村××の齎らす這ふした支那の混亂が、世界歷史の發展の上に支那自身有する役割の進行を急激に促して行く。(一九三〇、八、一一)

〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰

(取消申込)　本誌七月號中欄に掲載した田中貢太郎氏の「仁右衞門島の話」の記事中、濱波太村(現太海村濱波太區)飯高善右衞門並びに村民對平野仁右衞門の鮑採取權を繞る闘爭事件の眞相に關し、右は島主側の意見のみ採用した一方的な見解で事實と相違する旨、飯高成一氏より取消申出があつた。

KAIZO

改造

九月號

1930

朝鮮篇

日本地理大系 第八回配本 豫告

朝鮮！ 地理的、歴史的に、政治的、經濟的に七千萬同胞は朝鮮を知れ!! 國家の前途を思ふ者、人類の幸福を祈る者、全てが朝鮮を知れ!! 吾等は茲に何等の成心なく而も科學の利刀を以て赤裸の朝鮮を發く。金剛山、鴨綠江は勿論國境警備隊の活動、漂筏人夫の生活、原始人火田民の移動生活、日淸役の古蹟、仁川沖の蜃氣樓、更に幽艶の妓生と怪奇な天下大將軍が釀し出す詩と獵奇の世界等、果然本篇は學術最高の資料たるは勿論、銷夏絶好の讀物!!!

內容一斑

□滯鮮十年、足跡全鮮に遍き地學雜誌「地球」主宰、京都帝國大學敎授中村新太郞氏指導の下に計畫、更に編輯部員が今初夏地質調査の爲渡鮮せる中村敎授に隨行し、その親しき指導の下に全鮮に活躍し、總督府、京城大學等の絶大の應援を得て此一篇は完成した。

□**寫眞** 六百餘面、特刷グラビヤ版三十二頁、ダブルトン二十四頁、其他上質アートペーパー網目銅版四百數十頁、天然色印刷四面等美麗鮮明。

□**地圖** 二百五十萬分一地勢交通大地圖。地質圖。產業分布圖。人口分布圖。氣候圖。火田民聚落分布圖。水利組合耕地面積分布圖。古地圖三面。プロツタダイヤグラム四面。主要都市名勝古跡圖二十面。其他。

□**本篇執筆者** 京都帝大敎授中村新太郞、理學博士中井猛之進、京城大學敎授大內武次、同敎授安倍能成、同敎授小田省吾、同敎授文學博士高橋亨、同敎授理學博士小林晴治郞、朝鮮總督府文書課長萩原彥三、同技師三井榮長、同鐵道局技師澤崎修、今村鞆其他在鮮知名諸家三十餘氏。

（配本期日八月下旬！）

東京市芝區愛宕下町 改造社 振替東京八四〇二番



改造九月號目次

イエー・ベー・パシュカーニス著
山之内一郎譯

法の一般理論とマルキシズム

（四六判 四四六頁）
定價壹圓八拾錢
送料二十二錢

最新刊

法及び國家をそれ自體によつて、又は思辨の一般的發展によつて理解し、それ等の秘密乃至基礎を、從つてその本質たる階級性を飽くまでも隱蔽せんとするブルジョア法律學の果敢なる批判！　是現在我等に課されたる主要緊急提題の一つである。本譯に說く所の法の一般理論の概念は正に此の提題を解決し、ブルジョア法學をして眞のプロレタリア法學の地位にまで批判昂揚せしむる所の法理的體型である。現露西亞に於て得らるべきマルクス法律理論の最高權威者の著たる本書を譯するに斯學に造詣深遠の俊毫を煩らはした。けだし本譯の出現は現下日本法律學界に對する一大貢献である。

法學博士 田中耕太郎著

法と宗教と社會生活

定價貳圓五十錢
送料廿四錢

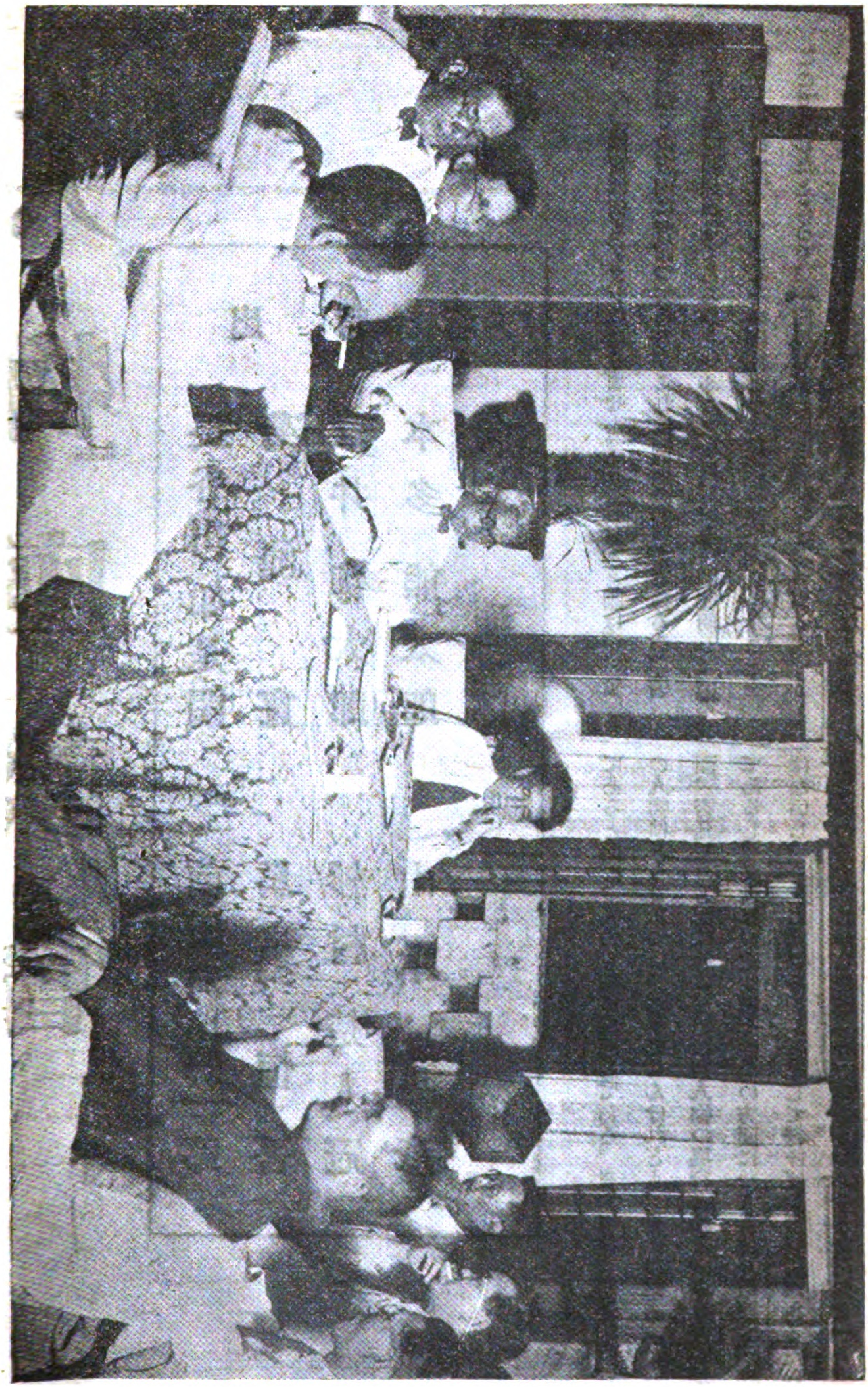
發行所 東京芝區愛宕下町 改造社 振替東京八四〇二

「人物」座談會

出席者

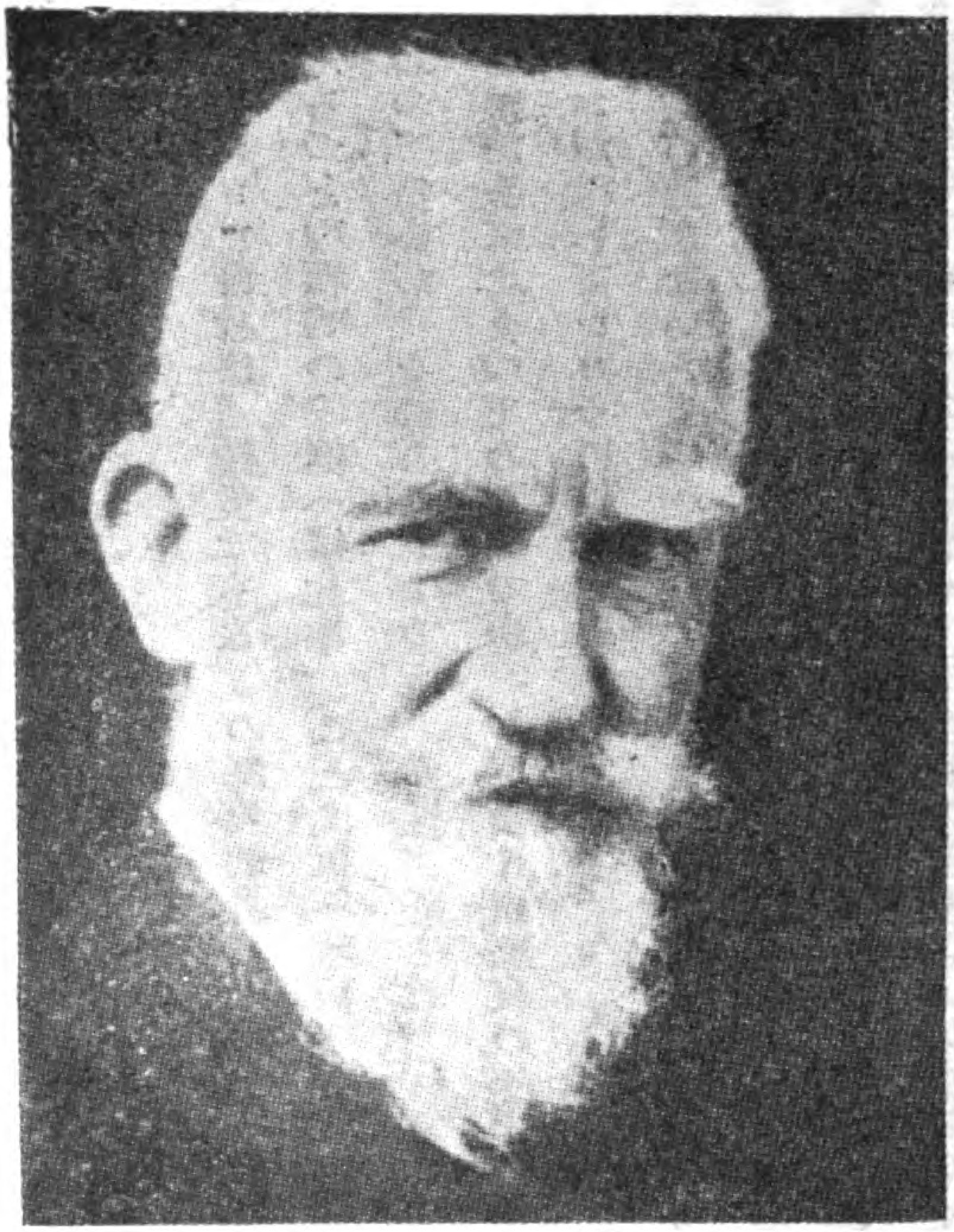
長谷川如是閑　菊池寛　永井柳太郎　本多熊太郎　向坂逸郎
前田河廣一郎　馬場恒吾　杉村楚人冠　山本實彥

山本。今夜は實は何もプランはありません。しかし日本と謂はず、世界が總ての方面に行詰つてゐる。これは制度が惡いのであるか、若くは人物の關係からであるかといふことをば、いろ〳〵究明して戴かうと思ひます。しかしその制度とか、組織とかいふやうなことをここで論じたところで、一向果しがないと思ひます。でありますから今夜は唯だ輕い意味で、日本でも世界でも、總ての方面に行詰つてゐると共に、人物も確に拂底してゐる。日本では、明治維新當時の人物はどうであつたか知りませんけれども、それ以來の政治方面、否凡ての方面に於て、兎に角人物の奧行と幅といふものが缺けてゐるし、又世界の政治家その他の方面に於ても餘り敬服すべき人はないし、それにはいろ〳〵研究して行けば面白い所があるだらうと思ふのです。しかしながら今夜はさういふやうな問題を一々究明



(左前より卓を廻りて) 永井柳太郎氏 馬場恒吾氏 山本社長 本多熊太郎氏 長谷川如是閑氏 杉村楚人冠氏 前田河廣一郎氏 向坂逸郎氏 菊池寛氏

はれてゐることである。いかにもショウは社會主義者としては、あらゆる女性運動の加擔者ではあるが、劇作家としてのショウは頑強な男性中心主義である。われ〱は、ショウ自身が頑强に主張するにも拘らず、彼れをエコノミストであるよりはより多く劇曲家であるとするものだから、彼れが女性主義者であるや否やは、かれの劇そのものによつて判断すべきであつて、彼れの經濟學や社會主義やまたは彼れの女權運動に對する態度やで判断すべきものではない。更らに劇そのものから判断するといつても、われ〱の意味は、チエスタートンが云つてゐるやうに、ショウの劇が性的動機を中心として發展してゐないといふことによつて彼れをアンチ・フエミニストとするのではない。


バーナード・ショウ氏

チエスタートンは　ショウの『惡魔の弟子』を例にとつてそれをいつてゐる。この劇で主人公のダツジヨンはアンダソン牧師の身代になつて絞殺されやうとするのだが、普通の作家ならば、屹度牧師の妻に對する愛情をその犧牲の動機にしさうな所だが、ショウはさうでなく全くその時のダツジヨンのたゞ何といふことなしに全く神秘的な出來心から我れにもなく犧牲となるといふ解釋をもつてゐる。それをチエスタートンは『彼れ（ショウ）はすべての熾烈な狂熱の源は性慾にありとする性慾主義の偶像崇拜に反對する』彼れは政治用にはフエミニストだが感情に於てはアンチ・フエミニストだ』云々といつてゐる。

ショウが性慾主義に反對してゐるといふチエスタートンの断

はり自然發生的な、衝動的な、認識でも自覺しないで自から正しいといふやうな、特別偉い人が出て來るだらうと思ふ。だが今ここで人物を要求するといふ時には、寧ろ決定的科學者を要求するといふ方がいゝと思ふ。唯ゞ社會が徹底的科學的ではあり得ないから、自然的、衝動的な態度で效果的な人間も出るだらうから、その意味では尙ほ漠然たる意味の人物がゐる譯だが、段々さういふ人物の要求は少なくなるのが大勢だと思ふのです。

馬場。僕はやはり英雄豪傑とか何とかいふものは餘り好きでないね。だからムッソリーニとか、レーニンとか、ケマルパシヤとか何とかいふ奴は、名前を聞いただけでもいやになつてしまふ。といふのはあゝいふ風な奴は、假面を被つてゐるのぢやないか知らんと思ふ。つまり或一つの時代の要求があつて、その要求に、自分は心ならずもさういふ風にやつて行つたならば人氣を博するとか、或效果的の勢力を得るとか、何とかいふ風な、一つの假面を被つて、さうして自分が心にもないことをやつてゐるやうに見えて仕樣がないですな。蔣介石なんかでも、矢張り本心はどうであるか知らぬが、前田河さんなんかあゝいふものを書いたが……

前田河。冗談言つちやいけません。今反駁しますよ。

馬場。あゝいふ風な連中、英雄豪傑といふものは昔から嫌ひだな。たから本當の人物といふものはさういふものでなくして、矢張り長谷川さんが仰つしやるやうな大して偉くもないといふやうな人間ですね。それが本當に偉いのぢやないか知らんと思ふな。

前田河。それは長谷川如是閑氏の話は非常に中農主義の話であつて、理想の話でせう。吾々現在中農主義を持つてゐないものは別として、プチブルヂョアの滿足するやうな世の中になつてゐない。さういふ理想もない。現在の所世の中はたつた二つにしか分れてない。ブルヂョアとプロレタリアと二つにしか分れてないのだから、ブルヂョアヂーに附いてゐる人はブルヂョアの觀方から言へば英雄であるかも知らん、それはいろ／＼あります。名前は何とでも言へます。一々言はんでもいゝですが、蔣介石なんぞはブルヂョアの味方であると同時に代辯者である。しかしながら吾々はさういふことに觀點を置かないで、人格とか、人間そのものの偉さとか、さういふものでなくして、本質的の偉さといふものはさういふものでないといふことを言つたのがマルクス主義なんです。そのマルクス主義が分らなければ、全然新しい人格の芽生えとか、新しい英雄とかいふものは分らぬ。それは皆が古い英雄觀から謂ふ所の偉さとか偉くなさであつて、それでなく實際世の中には貧民と富豪とこの二つしかないといふことになると、貧民の中の偉さといふものはどういふも

のであるか、富豪の中の偉さはどういふものであるか、といふ二つの分析しかないと思ふ。私は貧民の中の偉さの方にだけ賛成するのであつて、話は全然不公平になります。しかしそれでも押通すものならば何處までもその主張は貫徹する。

馬場。ちよつと甚だ幼稚な質問だけれども、マルクス主義は英雄を認めるのですか。

前田河。認めません。英雄といふ言葉がマルクス主義に入らぬ。英雄といふ言葉でなく表して居る。

長谷川。科學者といふものは、貧民とブルヂョアと分れても、共に僕の今いつたやうな意味のもので、これからの英雄といふものはブルのでもプロのでもその意味の科學者のやうなものでなければならないといふのだ。今の貧民の中に英雄があると今君が言つたらう？

前田河。それは言つた。

馬場。そこに矛盾があるぢやないか。

前田河。あつてもいゝぢやないか。

長谷川。貧民の英雄も今僕の言つたやうな人間——科學者——でなければならないと思ふ。

前田河。それは君は人格的に言ふからさうなんで……。

長谷川。人格ぢやない。つまり徹底的な科學者であることを理想としなければならない。

前田河。徹底的な科學者なんといふ純理論ぢや科學といふものは成立しない。

長谷川。僕の言ふ科學者といふのは今のサイエンテイストの定義する科學者ぢやなくして、行動の効果が學術的の、客觀的の認識に一致して居るといふことなんだ。だからそれを科學的に自覺すると、それを組織立てると否とに拘らぬといふ行動の科學なんだ。

前田河。行動とは？

長谷川。行ひ。

前田河。公の意味の？

長谷川。それが別にブルヂョアの英雄プロレタリアの英雄といふ譯ぢやないが、共に行動の科學的であることを條件とする。

前田河。その行動の科學といふことは非常に吾々に取つては惑はしい言葉だ。

長谷川。僕等はマルクス主義の英雄があるならばそれでなければならぬと思ふ。

前田河。單に行動の科學といふ言葉それ自身成立しないのだ。政治的、經濟的關係を離れて行動の科學といふものは成立しない。

長谷川。それはプロレタリアの中にはプロレタリアの行動がある。そ

の行動の科學者がこれからの英雄だ。だからブルヂョアの英雄もブルヂョアの行動の科學者である。貧民の英雄は貧民の行動の科學者でなければならぬ。

前田河。それぢやどつちもいゝといふことになるだらう

長谷川。英雄といふものがあり得るならばどちらの階級のもそれだと思ふ。

前田河。吾々は英雄ぢやなくて英雄を通じて無產階級を論じてゐるのだ。

長谷川。君はプロレタリア關係ばかりの英雄を言つてゐるが、僕等から言へばブルヂョアの英雄も出ると思ふ。

前田河。半面に於て出る。しかし人間は何處までも公平であり得ないのだ。僕は徹底的の公平であるといふ社會は見たことはない。

長谷川。僕は公平もなく不公平もない。軍國主義の英雄でもこれからのは僕の定義範圍に入らなければならない。

前田河。それはどういふ定義でもいゝが、兎に角二つの階級しかないのだ。

長谷川。それは又別の話だ。階級が二つしかないといふことを論ずるのとは……。

前田河。實際の觀方は其の階級から出る。僕のはプロレタリアの觀方から出る。僕は二つの階級からしか世の中は觀られないと主張する。

長谷川。だから僕は二つの觀方と言つたつてこれからの英雄はどちらの階級のものもその點に於て一致するといふのだ。今日の時代に於て英雄といふものがあり得るならば、ブルヂョア英雄も、プロレタリヤ英雄も、科學的な者が英雄の資格を持つといふ事になるのだ。

前田河。もちだよ。それは當り前だよ。さういふことを言つちやいかん。何でも彼でも科學者であるといふ變なことを言つちやいかぬ。

長谷川。何も彼も科學者なんて變なことを言つてやしないよ。

菊池。(前田河氏に)君はレーニンなんか英雄と認めないのか。

前田河。認めない。

菊池。普通の人間と違はないのか？

前田河。皆な普通の人間だ。

菊池。それぢや君は英雄否定論者だね。

前田河。その必要はないね。

長谷川。僕もその點に於て一致する。

菊池。普通の人間とは違ひがあると思ふ。

前田河。英雄といふものはブルヂョアのクリエートした幻影だよ。

菊池。レーニンといふ者が一人ゐる爲に、それが百人、千人の働をすれば、それは僕は英雄としてもいゝと思ふ。

何んな値をつけるつもりかと二人に問ふと、モレルは自分の腕力、才能、權威、地位その他、すべて男子が婦人を守るために必要なもののすべてだと答へ、ユージンは、たゞ自分の弱々しさと寂しさと自分の憧憬とだけだと答へる。だからモレルは弱いものを撰ぶとキャンディダに云はれて、相手の詩人が撰ばれたものと早合點したのである。けれどもショウの解釋によれば弱いものは詩人でなく、この社會改革家なのである。さうして最も強いのはこの詩的なるものと散文的なるものとの上に、天上的なるものと地上的なるものとの上に、空想的なるものと現實的なるものとの上に、堂々と君臨する女性であるといふのである。蓋し彼女は、ノラのやうに人形の家を出るべく『餘儀』なくされた境遇の奴隷ではなく、出やうと思へば出る事が出來、出まいと思へば出ずに居られ、詩人を撰ばうと説教家を撰ばうと又双方を撰ぶまいと、それを彼女に強制する何物もなく全く自己の自由な人間だからである。

といふ所からこのキャンディダによつてフェミニストたる刻印がショウの額に捺されたのである。尤も一方ではこの劇によつてショウが傳統的の家や母性愛やに執着をもつ、案外『健全』な安全思想家であるといふやうな説も出たのであつたが、然しそれはむしろショウが女性の機能に對してや、具體的の見地をもつてゐたからで、それはまたイブセン式の抽象的な『解放』の時代を經過してゐたからでもあつた。

然し此劇はキャンディダの性格や地位を説明するよりももつと外の目的があるやうに、少くとも劇の構成の上からは考へられる。それは即ちキリスト教社會主義の批判である。それのブルジョア的内面の暴露である。さうしてそれの解釋に二人の人間が使はれてゐるのである。始めはモレルと爭つて今はそれと和解し、彼れの演説の成功のためにシャンパンをぬくといふキャンディダの親爺バージスと詩人ユージンとがそれであるが、バージスはこの社會主義寺院の機構と彼れ自からの資本主義組織との融合のためにシャンパンをぬいたのであり、ユージンはモレルの主義の、思想と道徳と腕力との虚僞と内襞と、無力と、これを要するにその社會改革主義が血と肉とを失つた骸骨になつてゐることを、星や菫や戀愛をかりて喋舌つてゐるのである。

所がキャンディダに至つて血ばかりで肉のない幽靈のやうに

膝から下のない、空想家と、形式ばかりで、口先きばかりで、ちつとも空想のないおかげで人間のことも世間のことも、男の事も女の事もわかつてゐない實際家とを二つ列べて撰擇することゝなつたが、それはたゞ二つの抽象的の人間の種類を撰擇するのであつて、それらの人間の組織してゐる社會を撰擇するのではなかつた彼女は、この組織に於ける人間としてどちらが妥當してゐるかといふ判斷によつてモレルを撰んだのであつた。この組織には適しない詩人が撰ばれなかつたのは當然である。

これはイブセン時代のノラのそれに比べて遙かに革命的意義の乏しい問題である。ノラは解放された女ではなく、これから解放されんことを求めた女だが、彼女は『人間』を問題としたのではなく又人間の『性格』を問題としたのではなく『組織』を問題としたのであつた。その反逆は『人形の家』に對するそれで誰れ一人の個人に對するものではなかつた。故に彼女は歴史に對して消極的になりと働きかけた女であつた。

反之キャンディダは墮落したキリスト教社會主義の思想にも組織にも反逆せずに、モレルその人の『人間』によつて彼れを愛し彼れに執着し、彼れに安定してゐるのである。解放された女も現在のこの組織に於ては、キャンディダ夫人であることが最も妥當的であり、聰明であり健全であり、從つて幸福であるに相違ないが、社會劇の生命は人間の性格を求める所にあるのではなく、組織の崩壞即發展――一方に崩壞があれば他方に必ず發展があり、一方に發展があれば他方に必ず崩壞がある――を解釋するにある。然るにキャンディダ劇はその反對に折角意圖された組織の批判は 解放された女の、この組織に於ける個人的性格の完成によつて終了してゐる。

かゝる劇が女性に對する革命的解釋であるかの如く傳唱されてゐるのはむしろ不思議である。それは恐らくこの劇が最も具體的に且つ適切に當時のイギリスの解放された女の地位を具象してゐたからではあるまいか。さういふ意味では、この劇は時代の傑出した作品の一であるに相違ないが、これによつてショウをフエミニストにする意味内容をもつた劇ではない。

三

『ウオーレン夫人の職業』は『キャンディダ』に比べればやゝ嚴格な意味に於ける女性主義的作品である。この劇ではイギリ

スの貴族が國際的な賣笑業の資本主であるといふことになつてゐるので檢閲官のために上演禁止になつたものであるが、この劇も、現はれる男性の悉くは缺陷ある性格の持主で、さうでないのは女性だけといふ點はキャンデイダと同じである。主人公たるウオーレン夫人とその私生子ヴイヴイとは境遇と時代とによつてそれ〴〵全く違つた方向をとつたゝめに相互の分離を來したが然し性格的には、共に『解放』された叛逆兒である。母は資本主義組織に於ける奴隷階級に生れたが、偶然の機會とその境遇との協同の下に賣笑婦となり女衒となり、多年の辛酸を嘗めてつひに國際的の賣笑業を起しイギリスの貴族と協同してヨーロツパ大陸の大都會にその意味の『ホテル』を澤山に建設するに至つた女である。娘のヴイヴイは母のこの事業の利益によつて高等教育をうけた現代女性の典型であつた。大陸にばかりゐて、自分の素性と商賣を娘にかくしてゐた母は、娘の卒業後にイギリスの別莊に久しぶりで戻つて來た時、娘のためにその職業を發見され、その時は自分の生ひ立ちとその過去の奮鬪とを娘に語つてその同情を得たが、今は財産もありそんな職業をつゞけなくとも立派な生活が出來る身分であるにも拘らずなほそれを廢業しないといふので、娘は全く母をすてゝ獨立の職業婦人となるのである

この劇に出て來る男性にはモレルほどの人間もなく、放蕩貴族で夫人の情婦であり、出資者であるクロフツ、夫人の昔の情人でヴイヴイの父親たる墮落牧師のサミユル・ガードナー、その伜の、容貌で婦人の心を惹きつける外に仕事も能力もないフランク、『藝術家らしい』プレード、といつたやうな自分からも他人からも何うでもいゝやうな人間ばかりで、たゞウオーレン夫人と關係するためにこの世に生れて來たものに過ぎない。その中で最もやくざなフランクをショウは比較的人間らしく作つて丁度キャンデイダに於けるユージンのやうな役割をそれに與へてゐる

ヴイヴイは母親から始めてその職業をきかさせられた時には、その時の母親が自分の幼時の悲慘な貧乏人生活を具體的に直寫する力強い言葉に魅せられて、母が憤を發してその職業に突き進んで行く徑路の自然さとその道德性とに深い同情をもつことが出來、それまでは互に疎んじ合はねばならなかつた親子の仲が、これからすつかり融合すると大に喜んだ矢先きに、既に

閉ぢられた過去の歴史であると思つた母の話は、すべて現在にかゝつてゐることで、ヴイヴイ自身の生活もそれによつてゐるものであることを知つた彼女は、苦しみ悩むことの代りに手取り早く腹を立て、憤然として、ロンドンに出て友人と協同の事務所をもつて職業に沒頭することゝなるのである。

　ヴイヴイが自分の悩み悶える代りに、母を煩悶させて、『お袋から大學教育を盗んだ』お蔭で獨立獨歩の職業婦人となつて、『お袋の白髪頭に唾をひつかける』ことによつて大團圓となるのは、老父を急死させてビクともしないマグダのそれに似てゐるが、然しこれも遺憾ながらフエミニズム的立脚地からは、マグダのそれに比べて少し見當が違つてゐるのである。何となればヴイヴイの場合は彼女の母はマグダの父と違つて、當時の社會形態に於ける女性の傳統的地位からは立派に解き放されてゐるのである。この女衒の女親分は、決してこの娘を家族主義の傳統によつて縛がうといふのではなく、たゞ母たる娘たる自然の關係の連續を要求してゐるのである。それを娘は母がなほ汚れた商賣をやめないといふことによつて、母がその姉のやうにその職業で儲けた金の利子で『清い』生活をしてゐないといふことを怒つてゐるのである『何んで姉さんのやうに足を洗はないのです』と母を怒鳴りつけてゐるのである。一つの汚らはしさから他の汚らはしさに足を入れかへないことを怒つてゐるのである。これに對して母は、自分は金が出來たとて遊んでゐることは出來ない性分で、何か仕事をしなければゐられないのだが、現にやつてゐる仕事の外に自分に出來る仕事は何もないからこれをやるより仕方がないのだといふ。それは立派に解放された女の態度である。それはたゞ内容の歪められた然し立派なフエミニズムである。キャンディダのやうに、自分の亭主を詩人に比べて、より實際的で亭主の資格があるといつて、危うく追ん出そこなつた家庭に收まり返へるやうな女よりは遙かに强硬なフエミニストである。

　然るにわがバーナード・ショウはこのお袋を叩き伏せて『もうたんまり出來たらうから利子でお喰べなさい』などゝいふことを慫慂する娘に凱歌をあげさせてゐるのである。『汚らはしい商賣で儲けたお金からは小遣も貰うまい、利子で喰べてゐるなら私もそれで喰はして貰ふ』といふのも隨分妙なフエミニストだが、その汚らはしい商賣に取り縋つたゝめに生きることができ

ムにかけべき問題なのだ。それを斯くして回避するといふ政治組織は片跛なものだと思ふ。

山本。今夜は制度の問題とか、何とかいふものはこれで一段落にして、初から豫定が人物の話なんだから、これで打切つて貰つて、今度は豫定通り人間に對する趣味の研究、談話にして行きたいと思ふのです。どうですか菊池さん。

菊池。僕は兎に角時代といふものは必然的に動くものだと思ひますけれども、或個人が出たために、時代の動き方が一日でも二日でも早ければ、その個人は英雄と認める。だから維新の革命なんか必然的に起るにしても、矢張り相當偉い人間が澤山出た爲めに十年なり五年なり早く行はれてゐる。さういふ意味でさういふ人を英雄と認めていゝと思ふ。さうでないと英雄論は出來ない。

山本。本多さん一つ……。

本多。英雄崇拜は恰も人間の音樂詩歌に對するあれと同じだと思ふ。人間性の自然の一つであると思ふ。これは僕は理窟ぢやいかんと思ふ。それだけは僕は一言言つて置く。それから今東郷元帥のやつて居られることに付て、國民をどうして知つて居るかといふやうなことを言つて非難されてゐたが、それを言ひ出すと政治論になるから言はないが、日本國は東郷元帥といふ國寶のあることを感謝しろといふことを一言言つて置く。そこから先は議論になるから議論は避けるが、私の考へだけはつきり言つて置く。東郷あつて日本國を救ふものだと、諸君の前にはつきり一言言つて置く。

向坂。僕等は感謝することだけは御免を蒙つて置く。

長谷川。僕も東郷では今日の日本は救ひ得ないといふことを言つて置く。

前田河。救ひ得ないよ。

山本。そこらは各自の立場だけを明にして議論を打切つて……。

本多。僕は君から（山本氏に向つて）人物話でもするから來て與れといふので來たので、むづかしい議論をするのだつたら俺は來なかつたのだ。

山本。これから人物の話をするのだけれども、兎に角世界的にどういふ風に人物の觀方が變つて行くかといふことを初めにはつきりさせないといかぬから今までのことを言つたのですから……

本多。長谷川さんが言はれた議論には味ひがある。自分が會つた各國の政治家——日本で偉いと言はれてゐる人に會ひもし話もした。例へばイギリスあたりのバルフオアとか、エドワード・グレーとか云ふ人には、多少仕事の上で接觸したが、子供の時に教はつた英雄といふやうな感じを與へないね。それから長谷川君が言はれた世の中が

が、彼女は子供達に對して最も理想的の教育を授けたといふ堅い確信をもつてゐるに拘らず、その教育を最も充分に享榮した善の長女のグローリアから『おゝ、お母さんは私に何も教へない、何にも教へない』と頭ごなしにやられてしまうのである。蓋しそれは『二十世紀の何々』の叢書のうちには『二十世紀の性的生活』といふ最も肝心な一冊を缺いてゐることの結果であつた。さうして育てられた子供のうち、ショウが殊にそれに優越を與へたのは、賢明な女性の『二十世紀の教育』を最も少くうけ、且つそのうけた部分を痛烈に然し無邪氣に茶化してゐるヒリップ、ドーリーの二人の少年兄妹であつた。姉のグローリアは、母の賢明に極度に追從しようと努めてゐたが、『二圓五十錢齒醫者』と稱する若い才子に出會つてからは、そのセコンドハンドの賢明はすつかり光を失つて、つひにその尊敬する母に對して『あなたは何も教へてくれなかつた』と叫ぶに至つたのである。

然るに此劇に現はれて來る男といふ男はそれ〴〵何かの特徵をもつた、さうしてその特徵をもつて、それ〴〵そこにゐる女性共を征服してしまうやうな男であつた。第一に齒醫者のヴァレンタインは『無教育』のグローリアを擒縱自在に取扱つて、つひに彼れ自身の征服したグローリアにその征服の完成を强制されて悄氣返るのである。辯護士のマクマスはその雄辯をもつてクランドン夫人を征服して、夫との妥協の端を開かしめ、同じく辯護士のブーンはその法律家的才能をもつて一同を大團圓に導いた。

この劇でショウは標本的なる叡智そのものをマリン・ホテルの無給仕ブーンに具體化させた。ブーン給仕は『ユー・ネヴァー・キヤン・テル』といふ劇の名づけ親であるが、彼れはその給仕としての職務の遂行に於て、即ち飲食物の註文をうけること、それをテーブルに排列すること、適當の時期に不用の用事を辯じ、不用の時期に適當の會話を挾むこと等々によつて絕えず事局の終了を準備するのであつたが、つひに彼れの息子の有名なる辯護士ブーンに於て、それが法律的に纏められるのである。

善意にして、野蠻の言語擧動の外に何等事局を進展させる役割をもち得ないクランプトン老人でさへも、彼れが男性である事のために、ショウによつて彼れの賢明な妻クランドン夫人よりも、尊敬されないまでも翻弄を免れることが出來た。それは

彼れが『二十世紀云々』のやうな大部數を賣つた大著述をもたない故でもあらうが、十八年前に引離された子供等の感情も最後に何うやら母へよりはこの父の方へと傾きかけるやうに、シヨウはこの頑固老爺に同情した。

さうしてショウは論理的なグローリアを論理的に克服した。生き馬の目をぬくやうな、然しながら無一文の齒醫者ヴアレンタインとこの頑迷不靈の、石に躓けば石が割れるやうな親爺とを最も親密な友達にして、ヴアレンタインの果てしなく滑る家賃を火のやうに催促しながら、一文の支拂をうけないことに大滿足を感じさせた。

ショウはこの劇に於てもまた彼れの他の多くの劇に於ける如く、女性をして男性に對して、絕えずイギリス傳來の女性の權威による高壓的態度を發揚せしめながら、それが結局、男性を中心とする歷史の展開に對して何の効果をも持たないといふことを強く示してゐる。クランドン夫人のガラスのやうな透明な理性も彼女が病犬のやうに排斥してゐる夫クラムプトンに彼女自身を復歸せしめるに至つた歷史の進展を刎ね返すことが出來す、また子供らに彼等の父はたゞ子供らを打つための鞭を購入した動物に過ぎないと敎へて、彼等に自分の父なクラムプトン氏などゝ呼ばしめたにも拘らず、子供等がつひに『お父さん』と懷しげの呼び聲を發することをどうすることも出來ないのであつた。

それはフエミニストの劇としては、餘りに殘酷である。

五

ショウは好んで女性が終極の勝利を占めるか、さうでなければ、どの女性かがその中で勝ち誇る劇をつくる。『キヤンデイダ』然り『ウオーレン夫人の職業』然り『ユー・ネヴアー・キヤン・テル』然り『ピグメリオン』然り『聖ジヨン』然り、『ジツタの贖罪』然り、その代り彼れの劇の殆んどすべては全體的にか部分的にか女性の勝利をもつてゐないものはないといつてもいいであらう。それにも拘らず、ショウの女性の勝利は、より大きい男性の勝利の廻りに踊つてゐるものである場合が更らに多い『聖ジヨン』は全く女性の勝利を中心としてゐるもので、その最後に於てそれを徹底させるエピローグまでつけ加へられてゐるが、然しこの劇の主人公は女性と呼ぶには余りに抽象

な、象徴的の存在であるからフェミニズムとは必ずしも交渉があるとはいはれない。

ショウのフェミニズムは、彼れがイブセン主義に於てそれを見逃したといふ『女性は、彼女の女らしさを拒否するにあらざれば又、彼女の夫や彼女の子供や社會や法律や彼女以外のあらゆる物やに對する義務を拒否するにあらざれば決して解放されることは出來ない』否彼女自身に對する義務などゝいふことは、債務者と債權者とが同一人であるといふことだから意味をなさない。それ故に『女性はすべての義務といふ義務を拒否すべきである』『理想の破壞は社會の敵といはれても何でも、世界から虛僞を拭ひさるものだ。』といふ所から出立してゐるのであるがショウ自身の劇に於ては、この義務の拒否に、ややもすれば中心があつて、そこに男性があり、その關係をめぐつて甚だ圓滿に終了することが鮮くない。

結婚制度に對する反抗の樣式として『壓迫されて』(オバアールールド)がある。二組の夫婦が互に暫時分かれて、ある期間夫婦關係を『休戰』する約束で、互に反對の方向に世界旅行に出たところが、その二組の夫婦の各が交互に知り合ひとなつて甲組の夫は乙組の妻に、乙組の夫は甲組の妻に××××ことゝなつたが、やがてそれが偶然ホテルで出喰はして、互に露見した。然しその場で討議の結果、夫婦は休戰狀態からもとの交戰狀態に返るが、然し休戰中××××××××××××××といふことになる。即ち彼女は『もし貴女が御親切に私のセンチメンタルの夫を私の手から時々おひきとり下さいますと、私は大變ありがたいと存じますし、……私も亦貴女の御立派な旦那樣を、貴女が時々御倦き遊ばした時には、御機嫌をとつてあげるといふことに致さうぢやありませんか』といふのである。彼女の亭主はそこで『それを私は「一妻多夫主義」といふのだよ』と抗議するのだが、自分もその主義の實行に加擔してゐるものである以上、形勢を如何ともすることが出來ない。

女性等はかくして結婚制度を拒否するが、それはお互の亭主が互に『私は貴下の妻君を愛してゐます。それ切りの話です。』『私だつて貴下の妻君を愛してゐます。それが何うしたといふのです。』といふ相對性原理に立脚してゐる形勢の下に可能の事實である。さうして此連中は『世界から虛僞を拭ひ去る』手間を惜んで、この二組の夫婦が互ひ違ひに手を組んで仲よくホテ

ルの食堂に入つて行くのである。

かゝる關係は、現在イギリスの上流中流の社會に『圓滿に』進行しつゝある事情で、女性の義務の拒否がちつとも現在の制度を妨げない微妙の狀態である。ショウのフエミニズムは何うもかういふ形態をとつて、フエミニズムそのものが、彼れのコメデイの『笑ひ』の動因となつてしまう。悲劇作家と喜劇作家とはそこに多少の損得があることを免れない。

『ジッタの贖罪』は、その心理學的興味の多い劇である。フエミニズムの見地からはやはり男性を廻つて圓滿に終了する喜劇である。老年のプロフエッサー・ブルイがホテルで自分の弟子であり同僚であるプロフエッサー・レンカイムの妻ジッタと××××××××病疾の心臟病で頓死する。この老教授は自分の長い間の運命のとう〳〵やつて來たことを悟つてその日は×××××××××××××覺悟の自然死を遂げたのであつた。

ジッタがそのまゝ姿を隱したゝめに、老教授の女の誰れであるかは秘密に埋れてゐたが、老教授が自分の罪惡の賠ひとして自著の論文をレンカイムの論文のやうにして、それをレンカイムに遺して彼れの業蹟として發表させやうとしたのが、レンカイムにヒントを與へることになつて、彼れは自分の妻が老教授の情婦であることを知つてそれを妻に自白させてしまつた。妻は自分の方をそれを世間に暴露すると脅迫して夫を屏息させたが、老教授の未亡人と娘とは、誰れが老教授の情婦であつたかを知らうと努め、つひにジッタにそれを話してゐる際に、もしさうまで老教授を幸福にした女がもしもジッタであつたならどんなに嬉れしいことだらうと未亡人がいふのを、ジッタは否定しなかつたので、未亡人は急に今までの陰鬱から回復して、歌を唄つたりし出す。ジッタは今度はそれを、自分の娘同樣に可愛がつてゐる老教授の娘エデイスに自白する。エデイスは有頂天になつて喜んで、そのすぐ前、父に關する意見の相違から婚約を破壞した若いドクトルに、直ちに破約の破約を申し出でる。レンカイムはジッタ夫人に脅迫されて、老教授から讓られた遺物を自分の名で出版しろといはれるが、何うしてもそれは出來ないといつて、それは老教授の名で出すことにする。未亡人はそれをきいて止め度なく喜んで、自分の夫の情婦であつたジッタを『私達の善良なエンゼル』と呼ぶ

この劇は、恐ろしく傳統の桎梏の利いてゐる構造で、そこに

何のフェミニズムがあるかと思はれるが、然し、ショウは、老教授ブルノとその夫人との間の不幸な結婚の缺陷を、彼れとジッタとの結合によつて塡補したことが何の罪悪でもなく、而して何の弊害でもなく、當の關係者の間に於ても、寧ろ歡迎されることであり、現にすべての關係者は、そこに現在の結婚制度といふ事實上廢たれた約束を即ち廢物を利用しやうとする不必要にして弊害のある企てをさへ敢てしないならば、――さうしてこの場合は誰れもそれをしなかつた――そこにかくの如き歡びこそあれ、何の殃もないのであるといふ解釋を下したのである。

このフェミニズムは婦人の勝利の形で現はれてゐるが、やはり純粹に女性主義的のものではなく、そこに男性の立場からのより強い要求があるのである。さうしてそれはその不幸な老博士を中心とする周圍のすべてのものの協力となつてゐるのである。少くともこの劇に於てはすべての叛逆は男性の主人公をめぐつて起されてゐるのである。

六

われ／＼はショウが彼れ自身をアンチ・フェミニストとして彼れ自身の劇に現はしてゐることを見た。社會主義としてフェミニストを標榜する彼れとしてはそれは矛盾のやうだが、然しそれを彼れの社會主義の非革命主義的の性質によると斷定することは當つてゐる何うかが疑はれる。理論上の非革命主義者も、その藝術の態度でそれを裏ぎることは出來る。それは理論上の革命主義者が藝術では案外そのイデオロギーを發揚し得ないことのあり得るのと同じである。兩者の一致は最上であるが、常に可能であるとはいはれない。それは藝術的衝動と科學的意識との性質と方向とが必ずしも一致してゐないところから來る結果である。いひかへれば、無意識的と意識的との不一致である

ショーの女性主義が、理性的性格を基調としながら、その理性的女性のいつも必ず征服することを得る盲目的な男性の方に、彼れ自身の、從つて讀者の同情をむけさせることが珍らしくないのである。その事情を私は彼れの家の歴史に「附會」して考へて見たこともある。

ショウの父は意氣地のない、從つて能力もない、善良な凡庸人であつて、禁酒主義者といひながら好んで盗み酒をのみ、子

本多。やつちや居らぬわい。

杉村。やつちや居らんと思ふ。寧ろ今日日本の新聞總てが英雄否認の方に傾いて居る。その點に於ては僕は寧ろ反對に、もう少し人間をもり立てゝ行くといふやうな思想――人物、英雄とかいふ言葉を避けるけれども、或人のやりかけた仕事をもり立てゝ人をしてその名を成さしめるやうにするといふ雅量を、日本の新聞總てが示してもいゝと思ふ。

菊池。今の日本の新聞は可なり英雄――濱口さんのことなんかでも書き過ぎるぢやないですか。何でも彼でも書くんですからね。大臣の事なんかあんなに書く必要はちつともないと思ふ。

杉村。書き過ぎるといふことは、分量の上から言ふと多いかも知れないが、それは今言ふ通り、日本の人間が總理大臣の行動といふものを非常に興味を以て見るといふやうな所から來てゐるのですよ。その意味から言へば一時相撲の盛な時代には、力士の喧したことまで書くといつた時代もある。それと同じで、必ずしももり立てる、名を成さしめるといふやうな意味でやつてゐるのぢやないと思ふ。

山本。長谷川さん一つ……。

長谷川。詰らんことを書き立てるといふことですか。

山本。詰らんことぢやなくして英雄といふものを文字で造るといふ日本の傾向があるといふことについて……

長谷川。今の新聞は英雄を造つてやしない。今の新聞は人氣者を造る。ダグラス・フエアバンクスが來ると大衆がそれッと云つて騷ぐやうなことも大部分新聞のお蔭だ。新聞は英雄を造れないか知らんが、確に人氣者を造つて居る。それは商品新聞が、ダグラス・フエアバンクスが來たといつて往來を走る大衆と同じ心理で新聞を造ると賣れるから、それを書く、さういふ新聞が人氣者を造ることになるので、新聞が商品新聞、キャピタリズムの新聞になつた以上それをやらない譯にいかない。

杉村。プロレタリアの新聞だつてやるよ。

前田河。ダグラス・フエヤバンクスのやうなものはやらないよ。

杉村。それに似たやうなことは、プロレタリアの人間だつてやりますよ。

前田河。それは或種の宣傳の目的を以つてやるかも知れないが……。

永井。菊池君や、前田河君が戯曲を書いたり、小說を書いたりする時は、何が要求されて居る。何を面白がるだらうといふやうなことを考へずに書くことがあるか。

前田河。それは誰だつて考へるでせう。

永井。それぢや同じことだ。

合同政黨の成立とその展望

山川　均

（一）

『社會運動往來』の八月號には、『全無産政黨の合同がまんまと俗流ジャーナリズムの波に乘つて恰も大衆の翹望するところであるかの如く』になつたこと、內々は全合同の成立を怖れながらの全合同論、あはよくば之に取つて代はらうとする『指導部乘取り』のため全合同の主張、地方無産政黨による統一協議會の『賣込み主義』と『割込み運動』、『各無産政黨幹部による狐と狸の化かし合ひ』、『合同取引』、『利潤爭奪戰の展開』――すべてかうした合同運動の過程における內幕といきさつを細かに物語つた『三黨合同始末記』が載つてゐる。かういふ觀點から見れば、合同政黨はまさに狐と狸の化かし合ひ、政黨幹部と幹部との思惑と野合から産み落された私生兒にほかならぬ。無産政黨の合同をかういふ見地から眺めることも、慥かに一つの見方であり、しかもいろ／＼な示唆を與へる點で、有用な見方である。吾々は曾ても、同じ見地から合同運動に指針を與へられようとした本誌五月號の森戸辰男氏の論文に、多くの負ふところがあつた。

（二）

しかし私は、こゝでは合同政黨の成立を、異つた見地から見たいと思ふ。

わが國の勞働者と農民とその他の無産者分子が獨立した政治勢力を形成する長い過程――それは大正十年十一年の頃に初め

てそのきざしを現はし、今なほ終了してゐない長い過程である——の一部面として見れば、三黨合同の成立は、この過程を貫いて流れてゐる一定の方向を代表した出來事であると云ふことが出來る。大正十四年の無產政黨準備委員會の成立から勞働農民黨の分裂（十五年）にいたるまでは、統一の要求が、數回の危機に出逢つたにも拘らず、分裂の傾向に打ち克つて來た。しかし勞働農民黨の分裂から昭和四年の七黨合同による日本大衆黨の成立にいたる時期の特徴は、分裂に次ぐ分裂であつて、勞働者と農民の政治勢力は、多數の小中心において聚積せられた。この時期には、統一戰線、單一無產政黨などゝいふ旗印までも、分裂政策を包む包裝に用ひられた觀があつた。

七黨合同はこの分裂への傾向が終りを告げ、統一への傾向が一步を踏み出したものとして、大なる期待をもつて迎へられた。けれども間もなくこの合同政黨が分裂すると、その跡には、合同の對立以前よりも寧ろ一そう統一に取つて望みの少ない狀態が殘された。無產政黨の分野は、少なくとも當分の間、その狀態のまゝで安定するかのやうに見えた。この靜止しようとする水面に一石を投じたものは、勞働總同盟と社會民衆黨の分裂、全國民衆黨の成立であつた。この新要素の投入によつて、**無產政黨の分野には再び運動が起り、無產政黨の分野は再**び動搖的なものとなつた。かうして惹き起された運動の到達したところが、三勢力の合同による全國大衆黨の成立であつた。

（三）

七黨合同の失敗から今日に至るまで、大衆は合同運動に對して、比較的に、消極的だつたことは爭ふことができぬ。この事實は、或る觀點に立つ人々の眼には、三派合同の過程のうちから謂ゆる『幹部の取引』や『狐と狸の化かし合ひ』なるものだけを、特に擴大して映ぜしめ、また某黨の幹部、指導者、顧問ないしは黨師の『策動』『思惑』、感情や行掛りを、合同運動の背景を成すところの『情勢』の一切であるかのやうに映ぜしめたかも知らぬ。けれどもこの間においてさへも、大衆の要求が、合同の拍車でなかつたとは云はれない。もし大衆が、合同を積極的に叫ばなかつたとするならば、少なくとも大衆は、對立と抗爭とを積極的に嫌惡して居つた。七黨合同の直後には、大衆は對立抗爭を極度に恐れたゝめに、却つて分裂後の狀態に

固定しようとさへもした。かやうに大衆は、分裂抗爭の狀態に對する積極的な嫌惡によつて、少なくとも消極的には、合同に投票してゐたものであつた。

三派合同の成立は、一般的には、昭和二年末から三年末に至つて動き始めた統一への傾向が、若干の實を結んだものである。この間には、七黨合同の分裂、社會民衆黨の分裂があつたにも拘らず、この時期の特徴は統一への傾向であつた。今度の三派合同の成立は、この傾向があらゆる障害に打ち克つて、或る高さに達したことを意味してゐる。ことに實際の『情勢』なるものが、合同を大衆＝全民兩黨の單獨合同以上に押し擴げることを不可能にしてゐたと云はれてゐたにも拘らず、そして合同の範圍を擴大しようとする一切の空想に對して、この『情勢』に基づいて合同範圍を兩黨の單獨合同の範圍內に局限しようとする、着實な、そして必死の努力が、意識的にも行はれたに拘らず、實際の合同はこの『情勢』を突破し、十一地方の政黨を包容する合同政黨の成立したことによつて、この傾向が如何に底力のある流であつたかを知ることができる。

分裂は最も容易な道を、急轉直下的に行はれた。これに反して統一への傾向――一切の反ブルジョア要素が、一つの政治勢力を結成する作用――は、常に迂廻とジグザグの途を取つて、喘へぎつゝ坂道を登つてゐる。その進路が一直線でないことのために、やゝもすれば、それが確乎として一定の方向を指して進んでゐる作用であることが見失はれてゐる。それにも拘らず、單一無產政黨を標語として起こつた運動の發端から今日に至るまで、統一への傾向は、あらゆる障害や『情勢』と鬪ひつゝ、全運動を貫いて流れてゐた。そして大衆＝全民＝地方無產十一黨の合同の成立は、この過程の一部面として見た所に、初めて眞實にその意義を評價することができる。

（四）

同時に特別には、合同政黨の成立は、共同戰線黨の立場によつてのみ、合同の可能であることを立證したものであつた。戰線の統一と合同を主張したものは（そして或る範圍の合同を實際にも希望してゐたものは）、大衆黨と全民黨と十一地方政黨だけではなかつた。社會民衆黨もこれを主張した。しかしながら、合同によつて生れる政黨は、社會民主主義黨であるとい

山本。プロレタリアの代表者に就いての話を、向坂さん、一つお願ひします。

向坂。といふと、どういふことですか。

山本。つまり、無產政黨の代表者の、麻生君とか、大山君に就いての。

向坂。僕は、それらの人は餘り知らないのですよ。

菊池。向坂君は、合法黨を認めないんでせう。

向坂。認めないといふのはどういふ意味であるか知らないけれども僕は恐らく大衆黨の、今度出來た、あの黨員だらうと思ふ。だから、合法黨を認めないといふことは少しもないが、實際知らないんですよ、どういふ人がどうなんだか、餘り人に會つてもゐない。

山本。しかし、今無產黨の代表者である大山君なり、麻生君なり、若くは安部さんなり、鈴木君なりで、どうですか、人物としては、兎に角相當に黨を展開させて行くだけの、或る優れたものを持つてゐると思ひますか。

向坂。僕は、知りませんね。

菊池。僕なんか、無產政黨の黨首は、金も無いし、何もないのだから、人格的の魅力や、雄辯で、グン／＼人の心を動かして、無產政黨に惹きつける人が出なくちや駄目だと思ふんです。やはり金の無い人たちは、さういふ力で黨を開拓する必要があると思ひますねさういふ點で、今の黨首連中に相當力がある。

馬場。ところが、安部磯雄氏は、餘り活動はしないけれども、社會民衆黨は安部さんの政黨だといふので、あれが一つの財產だね。財產といふことはをかしいけれども、國寶だね。

菊池。しかし、もう少し熱があつて、もつと活動しなくちや、無產政黨の黨首としては、足りないと思ふね。

杉村。僕は、安部さんなんぞが非常に惜しいと思ふのは、ユニテリアンをやつてゐる、あの時分には熱もあり、活氣もあつたから、あの時分に無產黨の首領になつてやつたら、非常にやれたらうと思ふ。やはり年のせゐだね。

前田河。あの時分にはやれませんよ。

杉村。やれないけれども、あの元氣のあつた時分に、無產政黨の運動をやつたら、餘程やれたらうと思ふ。

馬場。しかし、無產政黨は社會民衆黨だつて、東京はいゝだらうが、田舍へ行くと危險視せられる。その危險視せられるのに對して、危險ではないぞといふ風に、消極的の役目だけれども、さういふ役目が、田舍へ行くと、重要な効果があるのだよ。だから、その爲に社民黨に取つては、安部さんといふ人は國寶だね。

して今日も——さうだ夥やかしい合同の成立した今日も！——精密に同じやうに、社民、勞農、大衆（舊日勞を主要構成分子とするところの）がある！

昭和二年の末から今日に至る時期においても、わが國の無産政黨運動は、それ以前の時期における分裂主義の當然の果實を收穫しなければならなかつた。これは地方政黨の大多數が、この時期の所產であつたことによつても知ることができる。これらの地方政黨は、過去における分裂主義の不可避の結果として、または戰線統一の任務に對する全國的政黨の無能力の結果として起こつたものであつた。かやうに昭和二年以後の時期においては、統一への傾向が明確に動き出してゐたにも拘らず、分裂主義の影響は、なほその作用を續けてゐた。そこで二年半後の今日、無產政黨の分野は、精密に二年半前の狀態まで引戾されたに過ぎなかつたと假定しても、すでにこのことだけでも、合同政黨の成立は、統一への傾向に取つての大なる成業であつたと云ふことができる。

けれども無產政黨の新分野は、精密に、二年半前の狀態に引戾されたものだらうか？決してさうではない。

三派合同前の日本大衆黨は、二年半前の日勞黨と精密に同じであつたと假定する（もちろん、實際にはさうではないが）。しかし合同政黨を構成する第二の要素は、社民黨の一半が分れて來た分子である。舊勞農黨の構成要素は、最も複雜な分解作用を受けた。その一大部分は、無產階級の合法政黨一般を原理的に否定する見地から、新黨準備會を離れ去つた。他の一大部分は、新黨準備會が合法政黨を是認するが如く否定するが如き動搖的な態度に反對し、または少なくとも共同戰線黨の組織に反對する新黨準備會の態度に反對して、同じく準備會から離れ去つた。三派合同政黨の構成要素となつた地方十一政黨の多くは、これらの分子を中心として組織せられたものであつた。そして舊勞農黨の構成分子のうちの、その跡に留まつた殘餘によつて組織せられたものが、現在の勞農黨なのである。

そこでバランスシートは、どうなつたらうか？　同じく三派鼎立といふ言葉で言ひ表はすことのできる二年半前の四分野と二年半後の新分野とを較らべて見て、事實上合同を不可能ならしめるやうな指導原理を代表する勢力と、統一戰線への傾向を代表する勢力との相對的な割合は、どのやうに變化したらう

か。二年半前の舊分野と二年半後の新分野とを比較したならば、何人といへども、大衆の一大部分が、統一と合同とを不可能ならしめてゐる指導から、急速に離れ去つたといふ事實を否定することは出來ぬ。

それ故に私は、三派合同の成立は、たゞに無產政黨の分野を二年半前の舊狀態に引戻したものではなくて、新たな形勢を開いたものであり、そしてこの新狀態においては、統一への傾向は決定的に力を增大したと云ふことに躊躇せぬ。たゞ然しながら、それは新合同政黨が今日以後においても、統一と合同への傾向を代表する勢力として働らくといふ條件の下においてである。

そこで問題は、新合同政黨の展望に懸つてゐる。

（六）

反ブルジョア政治鬪爭の組織形態として見た共同戰線政黨は、最も自然發生的な組織形態としてか、または最も意識的な組織形態として現はれる。無產階級の階級的成熟の幼稚な時代には、共同戰線黨は、最も自然發生的な組織形態として現はれる。これに反して無產階級の成熟したところでは、それは最も**意識的な組織形態としてのみ現はれる**。**わが國のやうに**、**無產**階級の先進部分が急速に成熟を遂げ、そして勞働者と農民が、この時期に至つて初めて政治の舞臺に現はれたところにおいて、共同戰線黨は自然發生的に生まれる代りに、共同戰線黨の問題が最も意識的に取り扱はれたことは、當然のことであつた。かやうにわが國においては、少なくとも無產階級の先進分子に取つては、共同戰線黨は、反ブルジョア政治鬪爭の最も意識的な組織形態としてのみ、實現せられるものである。

從つて、新合同政黨の將來は、これを構成する諸要素、ことにその指導的な要素によつて、この新合同政黨の共同戰線黨たる性質が、どの程度に明確に把握せられてゐるか、そしてこの性質が、如何に明確な意識によつて擁護せられるかといふ事實によつて左右せられることが、頗る多いと云はなければならぬ。

昭和三年の七黨合同は、「しかしながら眞に大衆の要望するものは、全無產政黨による單一無產政黨の樹立である。いま吾々無產諸黨はこれが實現の具體的な第一步として、こゝに先づ

オン・シユーバートに、キユールマンは今どうしてゐるかといつて訊いたら、今遊んでゐる、妻君の方の關係の事業をやつてゐるが、君は御承知だらうと言ふから、實はよく知らないのだが、一度會ひたいと言つて、頼んで、それから二三日して會つたが、私はその時キユールマンに、どうも君の外務大臣時代の政策は良かつたが、惜しいかな、二年前まではイギリスの大使館附の參事官だつたといふので、參謀本部に向つて押しが利かない。けれども、君のあの政策は非常に良かつたのだ。あれで行きさへすれば、フランスも大分惹きつけられたのだと言つて、非常に同情したが、どうもいゝ考へを持つて居つても、やはり條件が備はらぬと、出來ないのだね。それで軍閥に押へられて、ブレストリトウスクの條約に、キユールマンが判を捺した。だから、どんなにいゝ頭と腕とを持つて居つても、そこに一つの特殊な條件が要るのだね。かういふ風に條件が備はらない爲に、腕を十分に發揮できなかつたことは、ずゐぶんあるだらうと思ふ。

前田河。それはさうと、本多さん、あなたに伺ひたいのは、ブレストリトウスク講和談判、あれは外交上どういふ風に考へますか。全然失敗だつたと思ひますか。

本多。ロシアの立場から見れば、大成功ですよ。

前田河。ブルヂヨアの方から見ると、どうですか。

本多。ブルヂヨアの方からかどうか知らないが、あれはキユールマンが軍閥から餘儀なくさせられた條約です。主な意味は、ウクラインの穀物やら食物、軍需材料をドイツに取らなければならぬ事情にあつた。さうしてウクラインの軍事占領で、何も彼も取つて來なければならぬ所へ、あのゼネラル、リヴオルトが起つたといふわけになる。あれは軍閥がキユールマンを抑壓して作らせたものなんです。

前田河。つまりあの社會運動といふものを知らないでやつたんですね。

本多。ドイツの參謀本部ぢや知らなかつた。

山本。日本の今度の問題と、昔の小村さんたちの時の海軍條約と、軍閥とのいろ／＼な關係に就いて、感じたことがありますかね。

本多。私は今日本に軍閥があるかといふことを疑問に思ふ。國防方面の人達を悉く軍閥だといふのは、非常に無茶で、僕は軍閥といふものに一つの定義を持つてゐる。軍閥とは何ぞやと言へば、國防機關内に於ける自己、若くは自己の屬するグループの勢力を以て背景として、政治的に、己れ、若くは己れの屬するグループの權威を張らうとするのが軍閥で、それはもう田中君でお仕舞ひだと思ふ。それ

だから、軍閥々々と言つたつて、國防は國民が皆兵義務でやつてることだし、みんなそれで奉公してゐる人間だから、一把一束的に軍閥々々と言ふのは、少しターミノロジーがエクザクトでないと思ふのだ。私は、今度の問題の如きは、國務の處理問題で、軍部と膝をつき合せてやればやるべき途があつた。あれが時事新報の所謂ターン・コーナーをやつたんだ。若槻君であつたら、あんなやり方をやらなかつたらうと私は思つてゐる。

山本。若槻さんだつたら、もつとうまくやつてゐるといふのですか

本多。私はさうだと思ふ。トクと議論もし、協議もしたらうと思ふあれが西洋の政治家なら、堂々と議論をする。さうしていけない時、頑張る時には、辭表を出す。それが立憲政治家のやることで、さうしたら何とかまとまつたかも知れぬ。あの狀態で、面倒臭いからまアやつちまへといふ、あそこに一つ無理があつた。その無理をした上に、また無理をやつたんだね。若槻君なら、まだ別のやり方に出たらうと思ふね。これは政治論になるから餘り言はないが、兎に角、あれが、なぜ内閣を投げ出すことを恐がるかといふのだ。ドン〳〵總辭職々々々で行く度びに、議院政治家の地位が強くなつて行く筈だ。

杉村。それが日本ぢやどうも投げ出せない。軍閥と喧嘩をしても、投げ出すといふ覺悟でやればいゝと、われ〳〵は始終思つてゐるが、どうも總理大臣になるといゝものと見えるね。

本多。そこになると、藩閥官僚時代は、黒田、伊藤でも、西園寺でも、堂々と投げ出したよ。

馬場。しかし、今投げ出して、政友會の内閣が出來ちや、何をやるかわからぬといふこともあるだらう。

本多。この間、民政黨の或る少壯政治家が、私の所へやつて來たから、さう言つてやつた。君達は早く投げ出す方が得だ。投げ出せば、必ず復た捲土重來の機會といふものが自然に早く來るものだ。最後までやつて、壇の浦まで來てしまふと、なか〳〵再び機會は來ない。それから、若い奴は、政變が早く來る方がいいぢやないか。内閣に入つてゐる人は、此次なれるかなれないか、もうなれない人もあるから、君等の番も早く廻つて來るんぢやないかと、これは冗談ですが、私は、なぜもう少し綺麗にサッサと投げ出さないかと言つてやつた。

向坂。一體、なぜ投げ出さないのですか。

本多。黨首自身として、さういふ意思はあつても、黨のシステムの一部たる總裁でせう。選擧費用も黨の人が工面するし、何も本人が偉くて、なつたんぢやない。黨の總裁で、廻つて來た政權を拾つて、

であるといふのが、卑俗な見方であつた。當時私は、この見解を次の如く批評したことがある。

『第一の見解は、舊勞農黨およびその傳統を繼承するところの運動を共産主義の政黨、ないしは共産黨の直接の影響下に立つ政黨であるといふ理由をもつて、これを左翼と見、社會民衆黨を社會民主主義の政黨と規定して、これを右翼と見、これらの二つの政黨のいづれでもない日本大衆黨は、それ故に社會民主主義よりは左に立ち、共産主義よりは右に立つところの「中間派」政黨と見る。しかしながら、二つのものの何づれにも屬しないことは、必ずしも常に二つのものの中間にあることを意味しない。(共同戰線黨は決して中間黨を意味しない。いな中間黨は如何なる場合にも、共同戰線黨ではあり得ない。)現に日本大衆黨は、社會民主主義と共産主義との中間に屬する或る一定の中間的な理論を有しない。日本大衆黨をもつて、共産黨と社會民主黨との中間に獨自の立場を求めようとした往年のドイツ獨立社會民主黨(即ち、左翼社會民主主義黨)に擬することは、滑稽である』(昭和三年一月、『勞農』第三卷第二號)。

共産黨と社會民主黨との中間黨としての左翼社會民主黨が將來の發展性を持ち、右の方からは社會民主黨の一部分、左の方からは共産黨の一部分を奪ひ取り、その中間黨を中心とする大合同が實現せられることによつて、社會民主黨と共産黨とが急速に小さくなるといふやうな事が、どこの世界の無産政黨分野の方面に一致してゐるだらうか。過去と將來とは別として、今日世界の唯だの一國においてさへも、左翼民主主義政黨が將來の發展性を持つて急速に固定化しつつある所があるだらうか。事實はまさに正反對であつて、一九二二年の四月、第二、第二半、および第三インタナショナルの代表者がベルリンに會同した當時からこの方、何人も見落すことのできない太陽ほどに明らかな事實は、左翼社會民主主義黨が急速に固定する代りに、急速に沒落したことであつた。ドイツ獨立社會民主黨と第二半インタナショナルはどうなつたか？

そこで若し、新合同政黨が、左翼社會民主主義黨として、發展性を持つて固定化するとしたならば、明らかにわが國の無産政黨の分野は、二つの指導精神の世界的な對立狀態といふ定型によつては、方向づけられてゐないといふことになる。」

これに反して、わが國の無産政黨の分野は、社會民主主義と共産主義との世界的な對立の定型に向つて急速に整理され固定化されて居り、またさるべきものだとするならば、今更ら三派にせよ二派にもせよ、共産黨と社會民主主義黨との外にもう一つの中間政黨――おまけに、將來の發展性を持つといふ厄介な政黨――を造らうと努力することほど、時代後くれにしてしかも世界的＝歴史的方向に逆行した精力の浪費は無かつたらう。さういふことを本當に信じてゐる人は、三派のうちのせめて一黨なりとも引具して、社會民衆黨との合同に努力すべきであつた。ドイツの左翼社會民主主黨が右翼社會民主主黨と合同したやうに。

昭和五年の日本にドイツ獨立社會民主黨と第二半インタナショナル黨をこしらへることが無意義であるとしたならば、新合同政黨の存在の意義は、中間黨としてゞはなくて、たゞ共同戰線黨たることに求めなければならぬ。

全國大衆黨は、共同戰線黨の性質を、如何に確乎として防衞するだらうか？　新合同政黨の展望は、このことをめぐつて轉回する。（八月四日）

世界恐慌の發展

——昭和五年上期の世界經濟——

小島精一

序

米國の恐慌のばく發から世界經濟は深刻な一般的恐慌狀態に陷つてしまひ、本年に入つてから、その危機は各方面へ鋭く前進してゐる。國によつて、危機の成熟とその深刻さの程度とは決して一樣ではないが、最近では、殆ど例外なしに、世界各國が此の危機に沈んでゐるといふことができる。

米國を始め、カナダ、ポーランド、オーストリア、チエコスロバキヤ、獨逸、日本等では恐慌狀態は、も早餘程奧深く進行してゐるが、フランス、スカンヂナビア諸國、チリ、その他の若干の植民地的農業國ではそれはまだ、始まつたばかりだ。

これらの諸國では特殊の好況的原因が世界的影響を相殺してゐたのだが、今では、も早抵抗出來ずに急テンポで恐慌の深淵へ引きづり込まれてゐるのだ。

紙面がないからこゝではたんに一般的な狀勢の發展を述べるに止めねばならぬ。

第一、國際物價の崩落——

一九一三年＝一〇〇トスル金物價

	米國（一九二六年＝一〇〇）	英	獨	佛	イタリー	日本
一九二九・七	九八	一三七	一三八	一二七	一三〇	一五二
一〇	九六	一三六	一三七	一二二	一二八	一五七
三〇・一	九三	一三一	一三二	一一七	一二三	一五〇
三	九一	一二五	一二六	一一五	一一九	―
四	―	一二四	一二七	―	一一七	―

景氣研究所四半季報・三〇・第一―

一層最近の狀勢は次の如き崩落の進行だ。

一九一四年七月ヲ一〇〇トスル指數

	米國	英國	日本
一九三〇・一月	一三二	一三〇	一六〇
三月	一二八	一二六	一五六
五月	一二四	一二二	一五一
六月	一二一	一一九	一四四

(イ)一般的崩落の中でも特に落勢の大なるは、農產物と原料品であり、原料品では就中纖維材が目立つてゐる。

(ロ)一般に生產手段は消費財に比べて、遙に低いレベルに落ち込んでゐる。合理化による過剩生產と大衆的消費の缺乏の反映だ。

(ハ)恐慌の發展と共にカルテル的統制は、その威力を鮮明にあらはしてきた。

一般的落勢の中にあつて、カルテル價格と自由價格とは明白な區別ができる。

兩者は全く異つた步調を示してゐる。

價格の均等化はカルテルによつて頑強に阻止され、恐慌の重壓は強く自由競爭部門へと轉嫁されてゐる。

それは勿論恐慌による淸算過程を人爲的に遲らせてゐるのだ。

が、これらの點先月の經濟往來(八月)に稍や詳しく述べたから、こゝでは、說明を省略する。

第二、過剩生產と生產制限

此の物價の崩落は根本的には過剩生產を反映するものだ。

過剩生產の大なるもの程物價は強く低落してゐることが立證される。

先づ次表は生產の增大と價格の低落とを對比的に示すものだ。

	世界的生產			世界市場ノ價格			
	1925年	29年	增率	1925平均	同29	增減率	1929年1月ト30年4月トノ增減率
		百萬トン	%	マーク	マーク	%	%
石炭	1214	1383	+11	14.5	14.4	−1	−9
石油	149	(同上) 206	+38	10.9	11.1	+1	−33
銑鐵	77.0	(同上) 98.7	+28	75.5	70.8	−6	−1
粗鋼	91.9	(同上) 121.5	+32	98.2	102.7	+5	−13
壓延材	27.4	(同上) 37.4	+37	113.5	120.5	+6	−11
銅(冶金)	1.40	(同上) 1.94	+39	132.3	169.8	−34	−30
亞鉛	1.15	(同上) 1.45	+27	72.3	50.1	−31	−33
棉花	6.73	(同上) 6.46	−4	2.2	1.8	−18	−20
羊毛	1.26	(同上) 1.43	+14	4.2	3.3	−23	−42
生糸	40.7	(百萬瓩) 45.4	+12	52.3	47.1	−20	−13
人絹	87.9	(同上) 197.5	+127	11.6	6.1	−48	+3
ゴム	510	(千トン) 858	+68	6.4	1.9	−70	−31
砂糖	25.1	(百萬トン) 27.2	+8	40.2	34.9	−30	−4
カフェー	1.4	(同上) 2.4	+70	2.3	2.0	−10	−41

(四半季報. 1930.1)

らないのがよくある。あゝいふ風に口で言ふことを筆で現してしまつて、それで間に合はせるといふことで、速記錄とか新聞に委せるやうになつて來て、口で言ひ表す演說といふものゝ力が餘程減つた。そこで、雄辯といふやうなことは前代のことであつて、これから先きはさう雄辯といふものゝ必要はないのぢやないかといふことを一時考へたんですが、ところが、ラヂオが出來てから、これが再轉してたゞ筆に表したものばかりでなく、やはり口で全國に傳へるといふことが出來るやうになつて來たので、これから先きの雄辯なるものは、やはり一つの演說會若くは議會內の聽衆ばかりを相手にするに非ずして、全國の人間を相手にする演說でなければならぬやうになつた。それで、初めに小さい會場內の聽衆のみを相手にして來た演說から、今度は全國民を相手にして、全國民に訴へるといふ趣旨の演說が發達して來るんぢやないかといふことを考へますね。

菊地。僕は、演說で、實感のない演說は嫌ひですね。實感があるか無いかで演說が決まる。僕は實感のない演說はどんなに上手でも聽いてゐられないですね。此處にゐる人を賞めるのは變だけれども、馬場君の演說は新時代の雄辯だと思ふ。

馬場。僕が問題になつたから言ふんぢやないけれども、演說の效果は、今杉村君が言つた如く、速記錄とか、ラヂオとかいふものは第二義的のものであつて、本當の效果は、だん／＼かういふ風な社會になつて、モッブを如何に動かすかといふことにあると思ふ。それは幾ら文章をうまく書いても、それでモッブは起らないのだ。それ等のモッブはやはり、演說で、直ぐその場で聽く演說だ。それには僕等が不適當なので、永井君の演說なんか、それがモッブ化する點に於て、永井君の演說はうまいと思ふね。僕は、此處で永井君に面と向つて褒めるのはをかしいけれども、永井君はやはり雄辯家としては第一流だと思つてゐるんだ。議會で以て演說するなんて、そんなことはどつちでもいゝんだ。野天でやつてゐる時なんか、調子が上つて行つて、聽いてゐる者はヂッとしてはゐられなくなる。僕等は、ずゐぶん演說を自分もするし、人のも聽いたし、演說を聽くことに於てはすれつからしなんだ。どんな大抵の演說を聽いても拍手したことがないんだ。それが永井君の演說を聽くと、ウッカリ拍手してしまふ。あとで馬鹿々々しいと思ふことがあるんだけれども、調子が高調して行く所は、どうしたつて、これなら千人とか二千人とか日比谷公園に集まつて、永井君が出て來て、これを引つぱつて行かうと思へば、行くことが出來る。その演說の本質的の效果、意識といふものが其處にあると思ふのだ。やはりその點に於ては、永

井君みたいのアジ氣味な……アジ氣味と言つちやをかしいけれども、まあアジのあるものでなくちや面白くないと思ふのだ。

前田河。トロツキーが四時間も五時間も聽衆に向つてやる。さうしてそれを倦きないで聽くロシア民衆も亦大變なものださうですよ。これは會場に出る花道から喋つて行く。さうして五時間くらゐ喋る。その聲たるや、所謂J・O・A・Kの聲よりももつと間隔は大きい。「ワ、タ、ク、シ、ハ」とユツクリやる。それで二三萬の群集を相手にしてやつてゐる。たゞそれは自分の立場から喋るのです。永井さんは永井さんの立場から言ふんですが、トロツキーはトロツキーの立場で言つてゐる。

馬場。永井君の前に於ては、尾崎行雄が雄辯家だつたね。

前田河。あれはフオルマリズムだ。

菊池。僕はいつか加藤高明や原敬の演説を聽いたんですが、僕は聽いて居られたですね。さうして感心した。餘計なことを少しも言はないで、理路整然としてゐる。僕はあゝいふ演説が好きだね。

馬場。君は理智的だから。

水井。僕は菊池君と同じやうに考へる。やはり雄辯といふものは技術ぢやないと思ふ。やはり理智的に、又感情的に、その云ふ所が大衆の要求に觸れなければ、大衆を動かすことは出來ぬと思ふ。

前田河。それは藝術的だと思ひますか。

永井。藝術的だと思ふね。僕自身は、いつでも馬場君の演説に非常に動かされる。僕は屡ゝ馬場君にもさう言つたのであるが、馬場君の演説には、他の人々の演説より深いものがある。それで演説會に辯士を頼まれると、よく馬場君を褒めてゐる。

長谷川。お互ひに褒め合ふのはをかしいね。

馬場。だが永井君のは定評があるのだから、これは別だと思ふ。僕は本當に褒めるんだが、しかし、さういふ意味で、大衆に愬へることは、これは書いたものでも何でも出來るけれども、感覺に愬へて飛び出させるといふのは、そこに一つの演説のアレがある。

山本。長谷川さん、どうです。今後民衆政治に於ける辯力といふものに對する意見を一つ。

長谷川。今の馬場君のは感覺派だね。つまり、感覺に訴へる性質が强い、モツブに愬へるやうな感覺を持つてゐる演説がいゝと言つてゐる。菊池君の方は理智派で、理智に愬へるやつがいゝと言ふ。これはどうも聽衆と、時代とでいろ〲でせう。藝術が、やはり感覺的な藝術が榮えた時代と、理智的な藝術が榮えた時代とあるから、それ〲場合によつて兩方ともいゝんだらうと思ふがね。ところが今後の、今の山本君の話で言ふ、これからの演説といふやつはどつち

になるか、單純に感覺的のやつは餘りに藝術的になつてしまふ。さうしてつまりその時の感覺は非常にいゝんだけれども、あとで腹が立つ。さういふ演說を聽かされると、それに動かされたことに反感を持つんだ。だから、これからのやつは、大衆に訴へる場合はその訴へてゐる階級の理智に對しても同時に訴へなければならぬ。やはり藝術もさうだらう。プロレタリアの藝術でも單純に感覺派の藝術でないのだから、だから演說も感覺と理智に、訴へて、時と場合どちらを主とするかといふことになるだらう。それは感覺も持つてゐないといけないが、やはり階級的理智に訴へてゐないと駄目だと思ふ。永井君の演說も感覺的だらうが確かにブルヂョア階級の理智にも訴へてゐるだらうと思ふのだ、つまりさういふブルヂョア社會のモップを動かす力があるならば、それは單純に感覺的のものぢやないと思ふ。

永井。やはり思想と熱意が必要だと思ふね。

長谷川。自分が階級的意識を或る意味までシッカリ持つてゐなければならぬと思ふ。だから、これはどつちとも言へないだらうと思ふのです。やはり菊池說も馬場說も、兩方必要ぢやないかね。

山本。向坂さん。どうです、あなたのマルキシズムの立場から。

向坂。僕は演說が下手なんで・・・・

山本。辯舌が政治に於けるどれだけの重要さを持つかといふことを・・・・・・

向坂。辯舌は自分の考へてゐる意思をハッキリ民衆に訴へるといふ意味でなら・・・・

菊池。しかし、この頃の議會で演說が効果があつたといふのは、新渡戶さんだけぢやないですか。ほかの演說で、議事の決定が動いたといふ演說はチットモないぢやないか。

永井。先程、馬場君が大山君の演說が、議會の中よりも議會外の大衆を目標にしたといふことを言つたけれども、大體今日の議會の演說は、みんな議會外の大衆を目標にしてゐる。それは今菊池君の言ふたやうに、議會內の採決は、演說に依つて動かないといふが、それは議會が開會になる前に、幹部會か代議士會で大體決定してゐる。それだから、議會の演說が採決を左右するといふことは、事實に於て殆どあり得ないことです。

本多。新渡戶さんの演說も、衆議院ぢやあの効果は現せない。

永井。それで議會內の演說は大體その黨派の決定が正しいといふことを院外の大衆に訴へる爲に行はれる演說だ。だから、その點に於て、大山君の演說も、ほかの代議士の演說も同じだと思ふ。

馬場。大山君は議會外の勞働大衆に對して演說をしたんだね。

永井。大山君の演説はやはり理智的の演説だ。同時に詩人でもあつたんだから、詩人的の情熱も多分に持つてゐる。僕は大學時代、大山君と同級生だつたが、學生時代は、新體詩も書いたし、熱心なクリスチヤンでね。日曜日に試驗をすると言つたら、私は日曜は教會に行かなければならぬから、落第しても、試驗は受けませんと言つたくらゐの熱情家だつた。さういふ熱情がやはり大山君の演説に現れてゐると思ふ。

山本。永井さんは、議會政治家になつてから、反對黨の辯説に感心したのは、誰れですか。

永井。政友會よりも、無産黨の代議士に多い。

向坂。尾崎行雄なんといふ人はどうですか。

本多。うまいが、型は決まつてゐるね。

永井。尾崎さんの演説は、たしかに上手だ、感心する。然し此頃は思想的に、どうもピッタリ合はぬことが多い。

山本。永井さんが無産黨の演説に感心するといふその根本には、既成政黨に感心しないといふ反對の氣持があるのですか。

永井。既成政黨にも雄辯家は澤山居るが、社會の缺陷を指摘するやうな時は、無産黨の演説は的中してゐる。それであるから、聽いて居つてどうしても感動させられることが多い。

前田河。國際的にはどうですか。ありませんか。

永井。僕はやはりマクドナルドの演説は、非常に感動した。

前田河。國際的に、無産黨の演説に感心しませんか。

永井。それは現代の社會組織の缺陷を、國際的にも、國内的にも、もつとも深刻に指摘してゐるのはやはり無産黨の人々の演説です。それだから、それは從來の議會の演説で多く聽き得ない所だね。それで僕は聽いて感動することが一番多い。

前田河。もつとさういふ人を殖やしたくはないですか。

永井。無産黨の代議士が出ることは非常に結構と思つてゐる。

前田河。僕もさう思つてゐる。

永井。だから、われ〳〵が普通選擧を叫んだ理由の一つも其處にある。

山本。さうすると、無産黨の演説に感心するのが多いとすれば、あなたは無産黨に身を投じて自分でそれをやらうといふ氣は起らないですか。

永井。社會組織、經濟組織の缺陷を發見して、それを指摘する點に於て、無産黨は確かに深刻だと思ふが、それに對する現實の對策は、われ〳〵は無産黨の人とは違ふ。そこがわれ〳〵と無産黨と違ふ所だ。しかし、僕は今議會で演説を聽いて居つて、無産黨がいろいろ

分れて居るが、何故に分れてゐなければならぬかといふことは理解出來ないね。丁度無產黨の人々が、既成政黨はなぜ政友會と民政黨とに分れなければならぬかと奇怪に思ふと同じやうに、われ／＼もまた無產黨が、社會民衆黨とか全國大衆黨とか、勞農黨とかに分れて喧嘩しなければならぬ理由は、議會の演說を聽いたゞけではわからない。

（杉村氏退席）

向坂。それもわからぬが、しかし、既成政黨の民政黨と政友會の分れてゐる理由に就いては如何ですか。

永井。これは、やはり從來の傳統、歷史、それに感情だね。これが主要な原因になつてゐる。

向坂。政策の問題ぢやないのですね。

永井。政策の距離は比較的少いが、例へばわれ／＼が普通選擧を叫んだ時に、政友會が反對したといふ場合には、非常にハッキリしてゐる。それから政治組織や經濟組織の問題に對しても、民政黨は大體リベラル、政友會は概してコンサーヴァティヴな感じがある。

向坂。僕等はさういふ風に考へてゐませんね。

山本。どういふ風に考へてゐますか。

向坂。大體根本に於ては二つのものは同じだといふ風に考へてゐる。それは多少色合ひが違ふかも知れないが、政策を行ふ場合の、根本的な點になると、やはり同じになると思ふ。

永井。民政黨と政友會の違ひは、傾向的に見ると、リベラリズム又はラヂカリズムとコンサーヴァティズムとのやうに思ふ。

菊池。しかし結局民政黨の自由主義の人と、政友會の自由主義の人たちが集まつて、新しい政黨は出來ないですか。

永井。さういふことも將來あり得るかも知れないが、今日はまださういふ兆候は見えない。

菊池。僕はもう五六年すると、既成政黨にゐた人が、無產黨に轉換するのが、かなり出來はしないかと思ふ。さうすると、無產黨の勢力が急に大きくなるのぢやないかといふ氣がする。

永井。それはあるかも知れない。兎に角今日でも、既成政黨中にソシヤル・デモクラットがゐる。それは社會民衆黨と根本觀念に於て殆ど共通してゐるやうに見ゆる。それだから、將來何かの機會に、さういふ分野の變化が起つて來ないとも云へぬ。

向坂。しかし、さういふ所から無產黨の勢力が大きくなるとは思はれない。又望ましいかどうかも知らない。

菊池。結局、プロレタリアの自覺といふよりも、さういふ風になつて政治的に勢力を得て行くんぢやないかと思ふね。プロレタリヤの自

覺なんか遲々たるものだ。本所深川の方面なんかちつとも左傾してゐない。

前田河。それは現象ばかり言つてゐるんぢやないか。兎に角、あの本所、深川でやつてゐる社會局の施設を御覽なさい。如何にしてブルジヨアがプロレタリアに働きかけてゐるか。本所、深川はどんなに××だかといふことをわれ〳〵は感じてゐる。テントを作つて、人を休ませてゐる。何の爲にそんなことをするのか。何萬といふ人間がテントも作つて休めないでゐる。そこへ持つて來て社會局の施設であるといつて、テントを作つて、何百人かを入れて、それで濟ましてゐるんだ。かういふものは、その一端だけ見たんぢや、迚もわからない。だからさういふことを言はせて、ソシヤル・デモクラテイツクなことであると、滿足させられちや大變だ。それより寧ろ彈壓が欲しい。これが一番教訓ですからね、丁稚小僧が窘められると同じことですから。

馬場。若し、前田河君が政治小說を書くとして、日本で誰れか題材を取らうとしたら、どういふ風な人間を取りたいかね、政治小說の題目になるやうな人間は。

前田河。それは幾らもありますよ。第一、深川の小市民を取つてくればいゝ、煙草屋の親爺でも。

馬場。君が蔣介石を書いたりなんかしたやうに、或る一つの人物を中心に書くやうなさういふ題目になるやうな人間はゐませんか。

前田河。幾らもあります。深川の小市民……

菊池。もう少し有名な人物……

前田河。それは困つたね。

山本。ムツソリニを書いたやうに。

前田河。それは小市民で結構ですよ。

馬場。しかし、小市民と言つたつてピンと來ない。

前田河。待つて下さい。私は何もあゝいふ風に蔣介石やなんかのことばかり書かうとするのぢやない。私は、日本のルンペン・プロレタリアでもなんでも、「太陽の黑點」でもさうだ。あれは何にも出來ない人間を書いてゐる。あゝいふのは永遠の失業者です。

馬場。政治小說といふものは、日本にはどうですか。

菊池。これから文士連中が政治に相當に興味を持ちかければ、政治小說といふものは發達すると思ふ。今までは政治といふものと全然離れてゐたからね。

馬場。犬養氏の「走馬燈」、あれはもう少し突つ込んで書いたら面白かつたらうと思つた。

永井。警察が先程の話のやうに、無産黨の演説會でもなんでも彈壓す

るとすれば、その結果は當然脚本とか小說に、無産黨の思想がドシ〳〵表れて來ると思ふ。それはロシアが何よりも適切に證明してゐる。僕は米國で、前田河君に話したか何うか記憶せぬが、ニューヨークで片山潜君に會つた。さうして、昔の先生だから、一夕一緒に食事をした。その時に片山さんは、僕の家は國學者の家で、忠君愛國の思想は人一倍養はれてゐる。幸德秋水が大逆事件を計畫した時に、自分に內々話をしたから、諄々とその不心得を忠告してやつた。それだのに、警察は僕が非常な危險人物のやうに考へて、自分が雇はれてゐる先き先きへ來て、その雇主に自分を中傷する。それが爲に、僕は日本に居れば生活が出來なくなつて來た。それで僕は日本の政府なり、國家に××を懷くやうになつた。ニューヨークに來てからは、トロツキーがやつてゐた「クラス・ストラツグル」といふ雜誌がある。それをトロツキーがロシアに行つた後を受けて編輯をやつてゐる。今にトロツキーの革命が大成したら、僕はロシアへ行つて、ロシアの全權大使になつて、日本に出掛けて行つてやると言つて氣焰をあげたことがある。これなんかは××××××一人のコムミユニストを製造したのだと思ふ。

前田河。その片山君の話は、それは半分の話として聞かなくちやならぬ。それが××××××を說いたことは、まア×××で宜しいとして、しかしそれを取るに至つた心理といふものは私にはよくわかる。實際を言ふと、アメリカ時代の同君についても、さういふことは事實上あの人はカモフラージとして云ふことがあるが、必ずしもその一擧一動そこまで眞實を言つてゐるとは思はれない。片山さんは元からさういふことを言ふ人だつた。それで、あなたに必ずしも本當のことを言つたんぢやないと思ふ。それは後の言動が示してゐる。モスクワへ行つて以來、片山君がどういふことを言つてゐるか、それがよく示してゐる。

山本。しかし、まア何れにしても、原理から入るのと、境遇から入るのと二つあるが、境遇から入るのが多いやうだね。

前田河。それはその方が多い。

菊池。さうして境遇から入る方が强くないかね。

前田河。それはさうだね。

馬場。今、片山氏がロシアの大使として來ても、日本の國籍を脫しないから、捕まるだらう。

前田河。上海へ來ても、こつそりと歸るからね。

（長谷川氏退席）

菊池。マルキストは現在の國家といふものは認めないのですか。

前田河。認めますよ。

向坂。現にあるんですからね。しかし、その認めるといふのも意味の取り方次第でせうがね。

前田河。しかし、暫定的には認めるだらうね。

向坂。歴史的發展の一つの過程に國家があるといふことは、これは認める。その國家がどういふものかといふことは全く別問題だ。

山本。菊池さん、これは前田河さんの立場もあるだらうが、あなたの考へで、藝術的及びいろ／＼な方面で、歴史に殘ると思はれるのは誰れですか。

菊池。僕は小説家なんかの方面では、それはかなり殘る人がゐると思ひますけれども、やはりかういふ世の中ですから、どういふ人が殘るか、今チヨツトわからないし、これがプロレタリアの世の中になつても、どういふ人が殘るか、實際わからないですね。

山本。前田河さんはどうですか。

前田河。私はさうは思はぬですね。私は人が殘るんぢやなくて、階級が殘ると思ふ、若し階級があるとすれば。それで人物なんか問題ぢやないと思ふ。これがまだ殘らないからこそ、トロツキーが偉い、レーニンが偉いといふのであつて、事實上、階級が本當にプロレタリア階級のそれだけの理想のものを出してしまへば、レーニンも、トロツキーも、單なる一つの功勞者になつてしまつて、偉人とか英雄にはならぬと思ふ。

馬場。しかし、將來の社會に於ては、プロレタリアといふ階級もなくなるのだらう。

前田河。それは理想だ。しかし、そこまでは、現在のブルヂヨアの壓迫に對して、見ることは出來ない。それを今考へることは非常な反動です。だから、そんな危険は冒さうとは思はない。

馬場。しかしさういふことを實際言つてゐるんぢやないか。

前田河。さう言つてゐるのは武者小路だ。

馬場。これは武者小路ぢやない、レーニンも言つてゐるぢやないかね。

前田河。それはトロツキーだつて言ふことは言つてゐる。だが、それは將來のことであつて、現實を言つてゐるものぢやない。

永井。結局君達の階級鬪爭の目的は、總ての個性に完全なる自由を與へるやうな社會を作ることが目的だらう。

前田河。それまでは、個性をなくしても、鬪はうと言ふのだ。

永井。究局は階級が殘るのぢやなくて、解放された個性が殘る。

前田河。しかし、其處までにはかなりなストラグルがある。それをイージーな觀念を起せば、それは黨なら黨、或は團結なら團結といふものゝ規則があるのだから、それに依つて決められてゐる、これは

多年の經驗に依つて決められた規則であつて、そこまでは繰返さうとは思はない。

馬場。あの暴露小說といふものは、一體小說として價値があるものですか。

前田河。それは讀者に訊いて見なければわからない。われ〱にはチットモわかりませんよ。

馬場。價値があるやうにも思ふね、「眞理の春」でも。

前田河。價値があるなら、われ〱もやつて行かうと思ふ。それはあなた方に本當に訊かなければ、わからぬ。

菊池。それは、しかし僕等が思ふのに、やはり普通の通俗小說の方に喰ひ入つて來なければならぬと思ふね。「文戰」だとか、「戰旗」だとかいふ同人雜誌なんかは、讀ます必要のない人が讀んでゐて、讀む必要のある人には行つてゐないんだから。

前田河。ところが、あのイデオロギーを持つた人間は、君の程度にまで、大衆的に行けないのだ。それが苦しいんだよ。それは實際さうぢやないかと思ふ。――だが、作者が君の程度に行つたつて、目的は達しないんだ。世の中は×××××××の世の中にはならなければ行けないと思ふ。それ迄は鬪爭なんですよ。いまは過程ですよ。

馬場。たゞ普通の素人の讀者として見て、プロレタリア小說といふものも、この頃確かに面白くなつたね。少しは讀みよくなつたね。けれども、まださう大して、面白くないね。やはり菊池寛の小說を讀んでゐる方が面白い。

菊池。しかし、それはプロレタリア文學の方にも才能のある人がだん〱働いて來るから、プロレタリヤ小說も面白くなると思ふね。

馬場。餘り論文めいたものを並べられると、ウンザリしてしまふね。

永井。僕は前田河君の書くものは、兎に角讀まうと努めるが、實際少し難しいよ。

山本。これくらゐにして、あとは雜談にしませう。どうも有難うございました。

現代二大富豪の閨閥網

白柳秀湖

第一篇　三井閨閥網の巻

「一」三井高利及び三井高平

三井家はその中興の祖と稱せられる八郎兵衛高利の時、八家に分れ、それが連綿として幕末に及んだが、明治に入つて更に三家を加へ、明治三十三年六月二十八日を以て成立つた新家憲の第一章で、將來分家をなすものがあつても、右十一家の外、同族の列に入ることを許されざる旨が、規定された。新家憲成立の際に存在した三井十一家と當主との關係は左表の如きものである。

家格	明治三十三年（新家憲成立當時）	現在
總領家	三井八郎右衛門	同人
本家	三井元之助	同人
本家	三井源右衛門	同人
本家	三井高保	三井高精
本家	三井八郎次郎	三井壽太郎
本家	三井三郎助	三井高修
連家	三井復太郎	三井高達
連家	三井守之助	同人
新連家	三井武之助	三井高昶
新連家	三井養之助	三井辨藏
新連家	三井得右衛門	三井高光

次に右十一家の家格を知るには、三井家の歴史に遡り、三井八家の起源から尋ねなければならぬ。富豪研究は近頃の流行であり、三井十一家のことは、誰にも善く知られて居るが、巳

二五年	一三・二
二八年	一三・九

——エコノミスト・日本・七・一——

處か、今度更に農業救濟を口實にして、實は廣汎な範圍に亘る大增税を斷行した。（本年六月から實施）

その中主要品目別に新舊税率を對比すれば…

	一九一三年	二二年	新税率 下院案	新税率 上院案
化學品	一六・一%	二八・九%	三一・八%	三一・〇%
金屬品	一四・三	三三・七	三六・三	三二・四
砂糖	三九・二	六七・九	九二・四	七七・二
農産物	九・八	二二・四	三三・四	三六・〇
綿製品	三〇・五	四〇・三	四三・二	四〇・六
羊毛類	二〇・九	四九・五	五八・一	五七・四
絹製品	四六・四	五六・六	六〇・二	五八・〇
人絹	三四・四	五二・七	五三・四	四九・二
有税品合計平均	二一・一	三四・六	四三・二	三九・〇

——通商局・海外經濟事情・六・二・出淵大使報告——

實際は此の下院案と上院案との中間で決定されたらしいが詳報を得ない。

かく税率を引き上げる外、米國では輸入品の評價法に就て、いはゆる米國販賣價格といふ横暴な規定を强要してゐるのだ。これで名目以上遙に高い課税が行はれるのだ。

（ロ）米國の法外な關税引き上げは世界的に敵對心を刺激した。就中歐洲では報復的な引き上げが各國で準備され、實行されつゝある。

最も露骨な關税鬪爭は佛國との間に戰はされてゐる。

佛國では米國からの自動車輸入を從來の四五%から一擧に約九〇%の禁止的税率へ引き上げようとして居り、これに對して米國では更に佛國のレースやダンテルを九〇%から更に一五〇—三〇〇%！といふ高率へ引き上げることにしたといはれる。

——海外經濟事情、六・二・河合駐佛代理大使——

既に四十數ヶ國から米國へ抗議が送られたし、カナダ、ベルギイ、スペイン、その他では着々報復的引上げを企圖してゐる。

（ハ）恐慌の發展は先進國の投資的進出を激化させたので植民地的後進國の側でも敵對的な關税が盛んになつた。

（Ｉ）濠洲——一九二九年八月に奢侈品引き上げ、同十一月百餘種に亘る廣汎な一般的引上げ、翌十二月にもその追加的引き上げ。

産業恐慌の深刻化と共に本年四月には更に七十餘種の禁止的高率を設け、又多數の品目には本税の五割に當る附加税さへ重課した。

（Ⅱ）印度——殊に紡績業の自主的擁護が中心題目となつてる。一九二七年綿糸關税を引き上げて日本の進入を阻止したが、今度は、本年

に入つてから綿布の防止を計つた。（一一%から二〇%へ）

（Ⅲ）蘭領印度、支那等が恐慌後に注目すべき改正をなした。

（Ⅳ）その他、此の二三年以來、ペルシヤ、シヤム、佛領印度支那、トルコ、エジプト、日本、等々……すべて强烈な保護政策を發展せしめた。

（ニ）恐慌の發展と共に關税同盟運動が注目されるやうになつてきた。

英國の帝國内自由貿易（外國には勿論税壁を圍らして）、佛國の提唱する中歐關税同盟、又チリとアルゼンチンを中心とした南米經濟同盟等がしきりに論議されてゐる。南阿には稍や小さな關税同盟が成立しつゝある。

分裂した小區域だけの獨占では、も早、大規模な合理化には不充分なことが痛感されたからだ。

それに、恐慌後、特に米國からの精鋭な攻撃が開始されたからだ。

だが、これらの諸計畫はたゞ狹隘な國家的自主運動の矛盾を暴露するだけで、敵對的な利益關係が到底實効ある同盟を成立せしめないのだ。

（ホ）かうして自由市場は愈々狹化するので、投資的鬪爭は凄じい勢ひで行はれてゐる。

先進國の輸出が、ともかくも支持されてゐるのは、この法外な投資の御蔭だ。それだけ、價格の切り下げは烈しく、従て、中、小企業では到底此の犠牲に堪へられないのだ。

歐洲大陸の鐵鑛業は組織的投資の本家だが、本年からは國際カルテルを高級なシンヂケートと改めた。

英國の重工業でさへ、最近には全國的な輸出カルテルが成立した。炭坑業のカルテルでは輸出奬勵金を組合から支出してゐるものがある。

餘白がないから、こゝには目下日本で問題となつてる硫安トラストの投資の例を示すに止めよう。

硫安肥料は獨、英、米いづれも超大トラストに獨占化されてゐるが、なほ國際統制が行はれぬため、最近世界的に異常な過剰生産に陥つてゐる。

世界的生産

	千噸
一九二七年……………	三・五四三
二九年…………………	四・九七四
三〇年（豫想）………	六・一七〇

——東洋經濟・三・二二——

生産はかく増産したが、需要は農業不振の影響をうけて、これに追隨しない。

そこで海外市場の激烈な爭奪戰が展開した。

本年二月の日本市場における投賣は次の通りだ。

	内地價格ニ基イテ計算シタ日本着値	實際ノ投賣値段	差額
獨逸品	一二〇円	九〇円	三〇円
英國品	一一九	九〇	二九
米國品	一一〇	八五	二五

——ダイヤモンド・四・十一——

注目すべきことは此の法外な投賣りが、一般的不景氣の外に、特に後進國日本の硫安工業獨立運動に刺戟され、それを阻止する目的で採算を無視して行はれてゐるといふ點だ。

からいふ現象は後進國の熱狂的な關稅引き上げと正に照應して到る處に行はれてゐるもので、最近の恐慌以來特に露骨な敵對關係の切迫を語るものに外ならぬ。

第八、國際カルテル運動——

第九、金融及び資本市場の緩漫——

(イ)事業界の停頓を反映して、世界的に金融市場は稀有の低金利時代である。(次頁圖表參照)

此低金利化はまだ進行し、紐育聯銀の如き六月十九日には更に公定割引率を二・五%にさへ引き下げた程だ。これは實に聯銀創立以來の低記錄だ。金融市況は益々緩漫で六月中のコールは二分臺に落ちた。

(ロ)かゝる金利安にも拘らず、株價は一向反撥しない。

一九二四—六年ヲ一〇〇トスル指數

	米國	英國	獨逸	佛國	伊太利	オランダ	ベルギー
一九二九・一月	二一〇	一二八	一四六	一五七	九八	一二五	一五二
四月	二一三	一二五	一四一	一四四	八八	一二三	一五九
七月	二三七	一二七	一三六	一四〇	九一	一二二	一三八
十月	二五七(九月)	一二六	一二五	一二九	八九	一一六	一二八
三〇・一月	一七九	一一五	一二〇	一三九	八八	一〇四	一〇七
四月	二〇七	一一六	一二二	一四七	九〇	一〇四	一〇四

——四半季報・三〇・第一——

これでみると本年四月には米國を始め、かなりの反騰がみられ、下落は一應底を突いたかと思はれたが、これは浮動的な中間景氣であつて、すぐ、その後に再び激烈な崩落が引きつゞいたのだ。

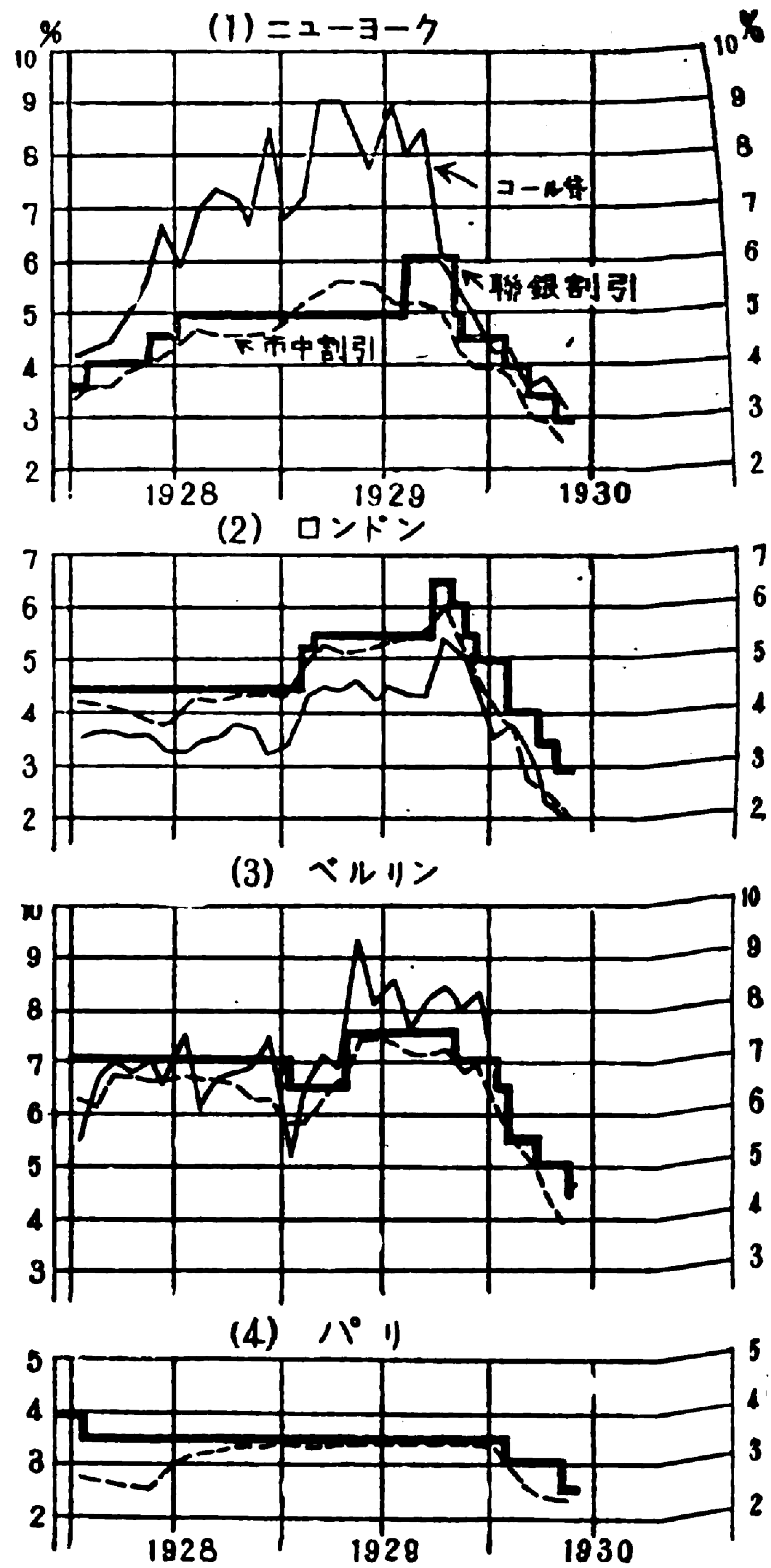
米國株價表

	鐵道株二十種平均	工業株三十種平均
一九三〇・一月	一四九弗—一四四	二六七弗—二四六
四月	一五七—一四五	二九四—二七七
六月	一四四—一三一	二七四—二三〇

スチール株とアナコンダとは

	スチール株	アナコンダ株
一九三〇・四・一四	一九三弗	七一弗
六・一四	一六三	五二
七・一四	一六三	四九・五

倫敦取引所でも…
工業株三十種平均相場指數（一九二八年＝一〇〇）
一九三〇・三・四（本年最低）……八二・〇
四・一七（最高）　九〇・六
五・二二　八五・五
五・二九　八四・九
──英、エコノミスト、五・三一──



（四半季報 1930. I.）

註 ── コール利子率
━━ 中央銀行公定割引率
---- 市中銀行割引率

これは要するに事業界の水増し資本の整理が完成されず、その眞實の立ち直りが尚早と考へられてゐる證左だ。

（ハ）その事業界の恢復にとつて特に重要視されるのは短期金融市場よりは長期資本市場の動きでなくてはならぬ。

此の長期資本市場も勿論緊張は緩んだが、前述の如く各國の新規發

行額はまだ前年の高潮には及ばない(但し、佛、スヱデンは然らず)。

長期資本の條件はまだ短期ものに比べて甚だ割高を唱へてゐるが、これは漸次低下して短期に接近しつゝある。

世界的資本市場では國內需要が閑散だから、海外投資は增勢を示してゐる。

(I)米國――の新規發行と海外證券發行とを示すと…

	上四ヶ月分合計(百萬弗) 一九二八年	二九年	三〇年	五月分 二八年	二九年	三〇年
新發行(全體―借換ヲ除ク)	二、五二八	三、五三七	三、〇四九	八七〇	一、一三一	一、一〇九
內譯 (1) 會社證券	一、七四六	三、一五一	二、三五七	六〇八	九三三	八六四
公債	七七二	三七六	六九二	二六二	一九八	二四五
(2) 內地證券	二、〇二四	三、一八一	二、五七六	六二三	一、〇七四	八四七
外國證券	四九四	三四六	四七三	二四七	四七	二六二

(屬領ノ分ヲモ含ム)

――フイナンシアル、クロニクル、五・一七及六・一四――

沸騰的な前年同期に比べれば、本年上四ヶ月の發行額は全體としては少いが、外國向發行は著しく超過してゐる。

二八年に比べると、全體としては多いが、海外向はまだ及ばなかつた。

が、五月に入ると全體としても增加したが、海外向きも激增して、遂に二八年度をさへ超過するに到つた。

ともかく、投機的な內地證券への資金吸收熱からは解放されてきたことが分る。

(II)英國――の上五ヶ月分の狀勢は次の通りだ。

	上五ヶ月分合計(百萬ポンド) 一九二八年		二九年		三〇年	
內地證券	一〇五		九八		六五	
植民地	四二	六九	四一	六九	三八	七〇
外國	二七		二八		三二	
合計	一七三		一六八		一三六	

――スタチスト・六・一四――

全體としては前二ヶ年のどちらよりも少いが、それは專ら內地向きの減少のためで、海外向きは多少の增加さへみられる。殊に五月に入つてから發行高は激增してゐるのも注目されねばならぬ。卽ち

月別發行高

	全體百萬ポンド	國內向	植民地向	外國向
一九三〇・一月	一七・二	一〇・五	三・六	三・一
二月	二六・八	八・一	一〇・七	八・〇
三月	二八・四	一九・一	五・六	三・七
四月	二一・四	九・六	一・九	九・八
五月	四一・九	一八・〇	一六・五	七・四

――スタチスト・七・一四――

（Ⅲ）米、英兩國の外、佛國の資本市場が最近著しく活躍し出したのも注目すべきだ。

前述の如く佛國の證券發行高は前年上四ヶ月分合計の四十六億フランに對して、本年上四ヶ月分は既に七十八億フランに上つてゐる。

しかも、同國は從來巨額の資本を擁しながら、人爲的に海外投資を抑壓して居り、そのために、國內に過剩退藏の傾向をひき起したゞけでなく、同國への金の吸收政策が國際資本市場の人爲的硬化を發生してゐたのだが、最近には、此退藏政策を放棄して、積極的に國際投資に進出してきたから、後進國の資金難は、これによつても大に救助されるであらう。殊に外債に對する課税を引き下げて發行條件を有利にしたのも時節柄注目されねばならぬ。

×

凡そ今日の如き高度獨占期には先進國の貿易發展は主として後進國への輸出增進に依存してゐるのだが、それは周知の通り先進國からの資本輸出と併行するものだ。

殊に、目下、後進國は農業及び原料品の不振——その値下りと凶作とによつて一様に異常な資金難に陷つてゐるのだから、先進國の資本市場が緩和されることは彼等の安定に非常に好都合であるに違ひない。

この見地から、主要農業國の經濟狀態を吟味し、先進國の海外投資の發展を、も少し詳細に檢討することは興味ある題目なのだが、茲に餘白がつきてゐるから、こゝでは、それに迄立ち入らない。

第十、綜括——景氣の見透し

一體金融及び資本市場の閑散、——從て金利の低下といふことは、それ自體は、事業界の不振を反映するだけで、それから、直に、景氣恢復の糸口をみ出す譯には行かぬ。

同じやうに物價の崩落殊に原料の值下りも、たゞ生產的需要の萎縮を反映するだけで、それだけをみて、直に景氣の立ち直りを考へることはできない。

もし、景氣が恢復するとすれば、先づ、そこには、合理的な生產計畫が確立されねばならぬ。

かういふ合理的な計畫を持つ者にとつては、金利の低下や原料の崩落は實にその計畫を實行するに好都合となるし、從て、そこから溌剌たる新活動が開始されるだらう。

勿論かゝる新計畫は多種多様だらう。

が、技術上の變革と未開地の開拓との二つこそ——天變地異的の出來事を除けば——最も重要な題目でなくてはならぬ。

では、大規模な生產活動を刺戟するやうな技術上の變革は豫期され

るか？　又、大規模な新地開拓の計畫は進められつゝあるか？

　この點で又稍や注目されるのは最近各國政府が熱心に大規模な土木事業を計畫しつゝあることだが、從來の規模では、之はまだ〳〵景氣轉換劑としては甚だ頼り少ないものであらう。

　最後に、まだ一つ、資本家的に正常的と考へられる、有力な景氣轉換法があることを忘れてはならぬ。

　それは外でもない。××だ。

　事實、恐慌の發展につれて益々切迫しつゝある國際鬪爭の激化は此の××――××××××××日々濃厚ならしめつゝあるのだ。

　現に、フイナンシアル・クロニクルでさへ、米國の新關税を批判していつてゐる。……

「この關税率は、どんなに純潔無垢にみせかけようとも……廣い全世界の横つ腹を突き刺す棘だ。制限と罰則とでかためたかゝる關税率は疑惑と敵意との培養者ではないか？　吾々は平和を讃美し、平和を祈りながら關税壁を設けるのだ。そして、あらゆる國民は今同じことをやつてゐる。……もし××が命がけの鬪爭だとすれば、關税率は××を刺戟するものではないか？　目にみえない××といふものもある。……全世界は今や××のまつたゞなかにあるのだ」。（一九二九・六・二）

……●

×

根本的なことは姑くおいて、目先き景氣は轉換しつゝあるか？

　私は、これから、米、英、獨、佛及び植民地諸國の各國別に景氣狀勢の展開振りを檢討してみる豫定だつたが、今はそれを斷念せねばならぬ。

（イ）世界經濟の動きを支配する主要國の中、佛國とベルギイとイタリイとはまだ漸く不況の端初に立ち入つたに過ぎない。そこでは不況はこれから深刻化して行くであらう。

（ロ）既に恐慌の奥深く沈んでゐる米國では不況は、もう底を突いたらうか？

　これは最も重要な題目だが、アンナリスト誌の專門觀測者さへ豫測至難なりと告白してゐる程の難問だ。

が、本年春期の季節的な上昇が極く微弱な――正常以下の――小反撥を示したのち、六月に入つてから狀勢は再び惡化しつゝある。

　ナショナル・シチイ銀行の六月情報は物價の底入れ、好況への轉機の接近を樂觀してゐるけれども、この世界的の萎縮――生産と消費との異常に深刻な不均衡を考へれば、注目すべき程の反撥はさう容易には來ないのではなからうか？

參考のためにアンナリストの生産指數を示しておかう。

アンナリスト生產指數

	一九二九年 七月	一九二九年 十月	三〇年 一月	三〇年 二月	三〇年 三月	三〇年 四月	三〇年 五月	二九年 四月
銑鐵生產	一二七	一一三	九〇	九六	九五	九五	九六	一一〇
粗鋼生產	一三一	一〇五	八七	九九	九一	九三	八八	一一六
鐵道荷送	一〇二	九八	九二	九二	八九	九二	九〇	一〇四
電力生產	一〇四	一〇三	九八	九六	九四	九六	九五	一〇四
自動車生產	一三七	一二二	一〇〇	一〇七	九八	一〇一	九四	一四二
木棉消費	一〇五	一〇九	九三	八七	八四	九一	七八	一一一
羊毛消費	一一七	一一八	八六	八一	七八	八二	—	一〇八
綜合指數	一〇九	一〇四	九三	九三	九〇	九三	八九	一〇八

―アンナリスト、六・一三―

本年五月の生產指數はかくも慘めな低落を示してゐる。殊に景氣恢復の先驅者たるべき粗鋼の指數がなんとひどい慘狀ではないか？

しかもこれでさへ大獨占體が投資によつて辛じて作業を維持してゐる狀態なのだ。即ち

鐵鋼業作業率（アンナリスト）

	ユー・エス・トラスト	獨立會社	全會社平均
一九三〇・三、三日	八六%	七三%	七七%
四、七日	七九	七〇	七五
五、一九日	八〇	七〇	七五
六、三〇日	六九	五九	六四

ユー・エス・トラストの手持ち註文高も最近に減少しつゝある。

	一九二九年	一九三〇年
一月	四、一〇九（千噸）	四、四六九
三月	四、四一一	四、五七一
五月	四、三〇四	四、〇五九

―クロニクル・六・一四―

鐵鋼業がかうした不安な狀態では、恐らく一般的立ち直りは、さう容易には來るまい。

（ハ）歐洲では、英國の生產狀態は最近になつてから、著しい惡化があらはれてゐる。

商務院の指數をみると三月から四月にかけて顯著な萎縮が一般的にみ出される。

英國（商務院）の生產指數

	一九二九年 第一季	第二	第三	第四	一九三〇年 第一季	三月	四月	二九年 四月
石炭	九九	九二	九四	一〇〇	一〇二	一〇一	八九	九三
銑鐵	九二	一〇五	一一一	一〇八	一〇五	一〇九	一〇二	一〇〇
粗鋼	一一七	一二一	一一七	一一五	一一六	一二〇	一〇二	一一八
電機器	一〇四	一〇五	一〇八	一一一	一一六	一一九	一一四	一〇五
造船（季末建造中）	九四	一〇一	一〇一	一〇八	一一二	—	—	—
木棉消費	一一四	一一〇	八四	一一四	一〇二	九四	八三	一一〇
羊毛（貨銀支拂高）	八九	九三	八九	九一	八四	八三	八四	九四

人絹生産	二〇三	二〇八	二四八	二四〇	二〇三	一八三	一五二	一八八
ゴム消費	二八五	二六四	三五〇	三五四	三〇九	三六七	二一四	二五三

—ボールド・オブ・トレード・ジョーナル・五・二九—

(二)獨逸は益々ひどい恐慌狀態に陷りつゝある。景氣研究所の報告も、まだ當分は立ち直りを否定してゐる。

主要部門の作業率は次の如く下落しつゝある。

可能勞働時間ニ對スル實際作業率(%)

	全體平均	基本原料×	動力部門△	建設部門#
一九二九・七月	七六%	七九%	九〇%	七二%
十月	七三	七八	九二	六九
三〇・一月	六六	七六	九一	六五
四月	六四	七〇	七八(三月)	六二

—四半季報—

×鐵鋼、ソノ他金屬、紙、革ノ諸部門
△石炭、褐炭
#鑛物、機械、電機、造船

生産手段の部門は、五—六月にかけて更に一層萎縮してきたことが報告されてゐる。

こゝでも極端な投資で辛じて作業の最低率を保持するに苦心してゐる。(以下省略)

—獨逸、エコノミスト、六・五・及六・十二—

×

かくて、世界恐慌は今尙ほ愈々深刻化しつゝあることが斷言される。世界的生産は驚くべき大制限をうけてゐるけれども、全體として生産能力と購買力との開きが餘りに大きくなり過ぎてゐるので、滯荷は、仲々整理されやうとしない。そのために物價の崩落、金利安等も活況への轉換をひき起し得ないでゐる。

更に、注目すべきは本年農作物の作柄が豫期したやうな減作とならず、それに來年度のための植付けが、これ又、豫期したやうな減退を示さないことだ。

だから、今日、豫測的報道が利用される限りでは、農産物方面の立ち直りは長びくものと考へられる。

現に本稿校正の際入手した、ロンドン・エコノミストは世界的農作狀況が、今考へられるやうな狀況に推移すれば、米國の不景氣はまだまだこれから深刻化するだらうといつてゐる。

——以上、三〇・七・九・脫稿・八・二・加筆——

支那赤軍の現勢と今後の發展

鈴江言一

はしがき

赤軍が七月二十九日長沙を占領した。それは非常に重大な事件である。だが此の「重大」の意味は人々によつて解釋が異る。そして一般には只だ突如として現はれた表面の事態のみが注意を支配する。隨つて人々の多くは數日後長沙が奪回されたと聞いた時、何とはなしに「一と安心」の感じをもつたであらう。だが、這ふした人々は一九二七年十二月の廣州ソヴイエト宣言當時、無雜作に驚駭し、そして其失敗と共に事件を無雜作に忘れ去つた人々である。最近、自分は屢〻長沙事件は何うなるかの質問を受けた。其たびに自分は「長沙はすぐ奪回されるでせう。赤軍は簡單に一時のそして軍事的の退却をするでせう、だがそれは文字通りの一時であり軍事的であります。」と答へた。

一、何故事態は被はれて居たか？

此の三月から四月にかけて暫く南昌の危險が傳へられ、五月には湖北の宜昌が前後三回に亘つて包圍され…と云つた事態が公けになり、世人は、はじめて赤軍に關して注意し出した。そして長沙が赤軍の手に陷ちたとの報道で事の意外に迅速なのに一驚した。

だが、赤軍今回の長沙占領は、要するに農村に於ける土地××の非常な發展を示す一端に過ぎない。換言すれば、それは現在長江以南の一帶に普遍しつゝあるソヴイエト鬪爭の一つの現はれであり、擴大された赤軍の遊擊戰（ゲリラ戰）の一つの現はれに過ぎない。只だ此事件が今更らの樣に一般に重大なショックを與へたのは、それが湖南省の首都であり、南京政府の死命に關する土地であり、又直接外國資本の利益と接觸する商埠地である長沙に發生したが故にほかならない。事態は長沙占領で一驚するには餘りに前進し過ぎて居る。然らば何故、今迄で之れが問題とならなかつたか？

國民黨の名を中心として不斷に反覆される軍閥戰爭の中に、自ら雖

つて居るブルジョア通信員は、國民革命の意義を知らず、その發展を知らず、支那××の新しい進行を表現する土地××を知らず、又その發展を知らない。彼等は只だ、ナショナルブルジョアヂーと封建地主の結合體である國民黨による內亂の解決や和平統一を夢みつゝ戰爭や妥協やボイコットや新條約を熱心に通信して居た。そして彼等自身がその爲めに立ち働いて居るブルヂョアジーにとつて最も重大な問題に就ては此の三年間何ん等の報道をして居ない。時たま「△△に現はれた共匪は既に〇〇方面に潰走した」とか「××地方で放火掠奪を擅にした共匪は何某の軍隊に包圍され、大部分は捕はれ或は戰死し……」と云つた支那新聞は出鱈目な六號活字――一九二八年來支那新聞に現はれた共匪討伐の報告を合計すると朱毛軍の損害だけで十萬に達する。然るに朱毛軍は今日に於てすら實力一萬に到らず、赤軍全體を云ふも十萬を僅か超過するに過ぎない――を斷片的に傳へた以外には。

其結果、赤軍の急激な發展はブルヂョア通信員により、地方に出沒する單なる土匪の類として久しい間、一般の眼の前に蔽はれて居た末、今や一躍「突如として現はれた恐るべき勢力」の待遇を受けることになつたのである。然らば實際では事態はどう進行して居たか？

吾人は此の問題――赤軍の內容、其戰術、其鬪爭の發展等々――をば、所謂る共產軍活躍の現狀と今後の展望を云々する爲めの前提として簡單に述べて見やう。

二、所謂ゲリラ戰の發端

農村に於ける土地××の新鬪爭は一九二七年八月の武漢政府沒落に出發する。

一九二七年四月、蔣介石に代表されたナショナルブルヂョアジーの一部が封建地主の武裝と妥協し、革命戰の矛先きを逆轉して昨日までの同盟者に向けた時、ナショナルブルジョアジーと勞働者農民との聯合戰線の一部面は、尙ほ武漢政府の上に支持されて居た。勿論その「支持」は極めて危かしいものであつた。蓋しそれは（一）小ブルヂョアの上層を有力な背景とするナショナルブルヂョアの一部と軍閥との南京政權に對する結合（二）勞働者農民の鬪爭の發展が刻々とブルヂョアジーと地主を反動同盟に追ひやりつゝある形勢をば、勞働者農民の鬪爭に制限を加へることによつて繫ぎ留めやうとする。即ち前者の鬪爭の階級的發展を抑制することによつて國民黨の上層份子との結合を繫ぎ留めやうとする當時のプロレタリアの機會主義的リーダーの努力……此の二つによつて僅かに支持されて居たに過ぎなかつたのである。

然し「前世紀的富豪――藏に貯藏された農民の貢納物で表現された

——の中から、帝國主義資本の影響下に醸造されたナショナルブルヂョアジーの特殊な經濟的地位は、國民革命の發展過程に於て彼等を農民の封建的掠奪者、即ち地主階級と對立せしめないで反對に被搾取農民と對立せしめた。一方、同じ闘爭の發展過程に於て、半植民地支那の農民と勞働者は封建地主の搾取に對する——即ち土地××の遂行に對する——徹底的な闘爭、帝國主義及びブルヂョアジーの支配に對する徹底的な闘爭にのみ自己の解放を見出した……拙稿、四・一二以後に於ける支那の勞働運動（批判八月號十六頁）そして彼等の闘爭は彼等のリーダーの困惑と懸命の抑制にも拘はらずグン／＼發展して行つた。かくて「先づ北京を……それから吾人の××へ」と大聲叱呼して居たプロレタリアのリーダー達ちの努力は完全に失敗し、武漢は南京と同じ軌道に合流した。ナショナルブルヂョアジーは全體として完全に、ブルヂョアデモクラシーへの革命領導權を放棄した。同時に、勞働者農民の闘爭は徹底的にアンダーグラウンドに押やられた。だが、そのかはり彼等の闘爭を抑制して居た一切の妥協的スローガンが放棄され、國民黨の政權に對する彼等の武裝闘爭が宣言された。その具體的な發展は一九二七年八月の南昌決議である。即ち武漢國民黨——當時南京討伐の爲め南昌に集中して居た——の所謂反革命が曝露した時、勞働者農民は南昌に會議し

一、鄉村の××は農民協會に歸する

二、土豪劣紳、重利剝奪者其他一切の反動份子の××を××し、農村中の貧民の生活改善に充てる

三、大、中地主の土地、其他公産廣守の土地を×××××××××××する

四、高利の債務及苛酷な小作契約の××、地主の武裝の××と農民の××、傭農の生活と勞働條件の改善、失業救濟等？

五、一切の新舊軍閥に對する抗租

のスローガンと、各地に於けるソヴイエト闘爭の開始を決議した。彼等は此の決議に於て、ソヴイエト闘爭とは「一切の××を勞農兵及貧民代表會議に」を農村の武裝闘爭のゼネラルスローガンとする闘爭だと説明し、且つ此の闘爭を通じてのみ支那現在の環境の解放即ち、

一、外國資本の壓迫よりの完全な解放（不平等條約其他帝國主義の特權廢棄、關税自主、外債取消、外人の占有する生産資料及交通機關の國有等々）

二、全國的市場の建設（一切の封建遺毒の肅清、土地國有、××的民權的政府の建設等）

三、勞働者農民の政治的、經濟的、法律的地位の急激な改善

が達し得られると附加して居る。之れが即ち發展今日に到つたゲリラ

戰の發端である。

三、過去に於けるゲリラ戰の經過

各地農村に於ける彼等の鬪爭は反覆する失敗の中にしきりに繼續された。例へば湖北湖南に於ける大規模な暴動計畫、南昌から福建を經て汕頭に進出した葉賀軍の活動等々。そして一時六十餘のソヴイエトが湖北、湖南、江西、廣東の各地に宣言された。勿論此の間に地主と農民とは想像以上に激戰して居る。國民黨は明かに失敗であつた彼れのテラー政策に於て甚だ短い時日の間——武漢沒落から五ケ月の間——に二萬九千の勞農の生命を斷ち四萬五千を傷つけ五萬八千を逮捕し或は追放した。だが、地方の鬪爭は彈壓の度に比例して擴大した。そしてそれ等はやがて廣州ソヴイエトの宣言(一九二七、一二、一一)に結晶した。

廣州ソヴイエトは勞働者農民の鬪爭の密接な聯絡の缺如、彼等の政治的組織の基礎薄弱を主要な原因として、僅々三日を支持し得たのみで倒壞した。然し此の事件は深刻に國民黨の政權を脅かした。國民黨のテラー政策は益々極端化し、然かもそれは一九二八年七月の全國統一宣言と共に文字通り全國的となつた。その結果地方農村に於ける所謂「暴動」記事は一時新聞紙上から遠のいたかの如く見られた。

それにも拘はらず、彼等の鬪爭は、此の蔽はれた幕の內部で、驚くべき速度で展開して居たのである。それは正しく、工場勞働者の自發的經濟鬪爭が急激に反國民黨的政治鬪爭に展開しつゝあつた新風潮——一九二八年十月の上海郵便罷業を中心とする——と照應し、益々組織的統一的へと發展して居たのである。殊にそれは彼等のスローガンから、富農層を中立せしめる爲めに一九二七年來支持されて來た小地主の特別待遇政策を撤去し、一切の土地の×××××を確立したことに於て强力化されて居る。つまり、彼等は此の新しいスローガンに於て、地主に大小の區別をつけ紳士に善惡の區別をつけ、小地主の取扱ひに手加減を命じ、善い紳士と結んで惡い紳士に當れと要求する如き傳統的意識の作用を徹底的に除去し、××的勞働運動の發展とプロレタリアを領導とする農村鬪爭をより密接に結びつけやうと要求したのである。然らば、國民黨のテラー政策の蔭で、這ふした要求が如何な程度にまで目覺しい彼等の鬪爭の發展を導いたか?之れには次の記述が明瞭に答へるであらう。

四、ゲリラ戰法、並に赤軍現在の勢力

ゲリラ戰は農村の部分的××鬪爭を漸次大規模なそれに展開し、ソヴイエト×××に導くことを目的とするもので、此の戰術の中に、

「都市勞働者の××××を廣大な大衆的××高潮に發展せしめ、勞働者の××組織を以て自發的に農民闘爭の領導者たり得る樣にする……」が××××の條件として決定されて居る。今日各地を席捲して居る赤軍の活躍は、之れを基礎とするものである。そして又、戰爭そのものに至つては極めて巧妙に行はれて居る。守備薄弱に乘じ赤軍が確實に一縣を占領した時、第一に××××組織が行はれ、同時に××××××××××其他のスローガンがソヴイエトの名によつて實行に移される。勞働者農民の政治的××と××、彼等の自衛軍の××と××が行はれる。有力な軍隊が到着した時には、彼等は敏速に該地を離れて次の地方に轉じ同じ工作を開始する。その場合、一旦××××××土地の勞働者農民は植ゑつけられた地方×××××の基礎として殘り、赤軍が再び近づいて來た時、之れに應じて自發的に昔日の組織を恢復する任務に就く。

軍閥の傭兵は赤軍と闘ふ意志を全くもたない。普通彼等は赤軍の接近と共に退却する。時に有力な討伐隊として行動する時でも、多くは先方が退却するを待つて前進する。赤軍の秩序は一般に信頼されて居る。彼等は×××××××××××無秩序な放火殺人はしない。反抗する地主劣紳の處分すら××裁判を經てやる。占領地×××を××する彼等にとつては火災は正しく彼等自身の損害である。廣州ソヴイエト事件に於ける大々的放火虐殺が政府軍によつて演ぜられたものであることは、今日では共産軍の殘虐を血眼で報道したブルヂョア新聞が承認して居る。只だ、はじめて赤軍の來訪を受ける地方では、守備軍の撤退と共に土地の貧民が無組織に發動し、燒打ち掠奪の暴動を演ずる場合が少くない。又、退却に當り軍隊が無計畫に、或は國際關係等を發生せしめんとする計畫の下に同じ行動に出ることもある。長沙占領に於て報ぜられる事件が若し事實であつたとせば、恐らくそれは前者の場合であらう。勿論かゝることは大冶の例にも明瞭なる如く、一度赤軍が來訪した處では殆んど發生しない。

かくて赤軍今日の轉戰は、客觀的にはそれが各地農民に×××××××××洗禮を與へる形式で發展して居ることを示す。勿論、之れ等の洗禮は地方ソヴイエトが一省或はより以上のものに擴大した時、此の形勢の急激な發展の根本基礎となるものである。此の點に於て長沙赤軍の退却は長沙占領に示された重大な意義——農村××發展の現狀を説明するところの——を聊かなりとも稀薄ならしめない。

＊　＊　＊　＊　＊

勞働運動が一九二七年末來の自發的經濟闘爭風潮を結束して國民黨政權に公式に宣戰し、支那の勞働運動史に一時代を劃するに至つた——本年四月、上海共同租界電車及バス罷業が代表的に説明する（前掲

書參照）――時、農村に於けるゲリラ戰の發展は次の如き勢力を確立して居た。

（一）各地に於けるソヴイエト區

江西、南昌（最近ではその危急がしきりに報ぜられて居る）一帶を除いた全部、即ち全省八十一縣中六十縣がソヴイエト區。章江西岸に沿つて吉安下流の峽江縣一帶が赤軍勢力地帶。

湖北、約四十縣がソヴイエト區。武漢郊外十里内外にまで最近赤軍の出入を見る

福建、ソヴイエト區は西部七縣、南部三縣、北部四縣

廣東、東江、西江、北江及瓊崖はソヴイエト鬪爭の歴史的地域で、廣州ソヴイエト失敗後の徹底的彈壓下に依然として基礎を支持す。

廣西、西部廿餘縣がソヴイエト運動の影響下にある

湖南、彈壓の最も激しい地方にも拘はらず東部西部のソヴイエト大區域は三年來終始支持。（現には長沙に及ぶ）

河南、商城を中心として發展中

四川、一九二九年曠繼勛の旅團が全體としてソヴイエトに參集して居る。

安徽、西部に遊擊戰の進行を見る

江蘇、宜興、江陰、無錫には一九二七年來の鬪爭が反覆されて居り、南通、靖江、一帶に擴大しつゝある

浙江、最近、江山常山一帶に赤軍の進出を見る。

（二）各地赤軍基本軍の現狀

總計十四軍約十萬、貧農が全體の六〇%を占め、鐵砲六萬、砲二百、飛行機五臺、内容不明の第九軍（湖北々部）第十軍（同西部）第十三軍（浙江南部）を除いた其他の勢力は

第一軍　兵力五千三百、武裝三千、飛行機一、湖北の東北、河南の東南、安徽の西部に行動し、六〇%は貧農

第二、六軍　第二軍は賀龍軍で兵約六千。四〇%が貧農で武裝は四千六百。湖北及湖南の西部に活動。第六軍は湖北西部の農民中に生れたもので六千の八五%は貧農。武裝は約五千、軍長は曠繼勛。最近第二軍と合し賀龍を總指揮として居る。

第三、四、五軍　第三軍は江西西部の各軍を合せたもので約五千、八〇%は土地の貧農、武裝は約四千五百。廣東の北部、湖南の東部から江西の南部に亘つて遊擊戰を演じつゝある。第四軍は朱毛軍（軍長朱德、政治部長毛澤東）の軍で約八千の勞働者農民の武裝から成る。湖南の東部南部、江西の西部東南部、廣東の北部、東江、福建の西部一帶に亘り鬪爭三年、約三百萬の農民を組織し幾多のソヴイエトを建設して居る。

第五軍は一九二八年平江に於ける暴動の産物で彭德懷が指揮し、湖南の東部、湖北の南部、江西の西部の遊撃に當り、七千の内七〇%は貧農、武裝約六千。最近三、四軍と連結し朱德を總指揮、毛澤東を總政治委員として長江方面に進出せんとして居たが、終に今回長沙に現はれた。

第七軍　廣西軍の一部の歸化したもので、約八千、八〇%は兵士。武裝完備、飛行機四臺、本年一月龍州を陷れ海關や銀行教會を沒收し佛國領事や外人を境外に護送したが、後佛軍と國民政府軍の聯合反攻により龍州を退いた。

第八軍　第五軍が大冶を攻めた時、防備に派遣された獨立第十五旅中の兵士の投じたもの。約五千、大部分は兵士、湖北の東南部、江西の北部に活動

第十一、十二軍　前者は葉賀の基本軍と廣東々江の農民とで組織し、惠州方面に活動。約五千、六〇%は貧農、武裝四千。後者は朱毛軍が福建西部で武裝した農民軍で約九千、八〇%は貧農。武裝約八千。現在では福建西部から韓江、東江方面に向ひ第十一軍と聯結して潮仙を進攻しやうとして居る。

第十四軍　兵力約二千、六〇%は貧農、江蘇の南通、如皐、海門一帶に活動。

＊　＊　＊　＊　＊　＊

本年五月上海で第一回全ソヴイエト區代表大會が開かれた。此の大會で彼等は廣大な區域に亘る各ソヴイエト區の闘爭と統治とに統一的基礎を得やうとした。その結果として彼等は全ソヴイエト區域に於て施行すべき勞働法の外、（一）地主、教會廟宇等に屬する一切の土地の××××××（二）土地の賣買賃貸借×××（三）從前の田賦其他一切の税捐の××等々を規定した臨時土地法を制定し、更らに左の如きソヴイエト政綱を宣言した。

一　外國の一切の特權、既有條約、外債××××及その銀行、企業、工場×××

二　勞農の武裝、兵士に土地職業の提供、勞農兵貧民代表會議×××××

三　勞働保護法、八時間勞働（未成年の六時間）、賃銀增加及最低賃銀制定、社會保護、女工の保護

四　土地國有とその配給

五　民族自決による民族の分立と其自由聯合

六　××大衆の政治的一切の自由權

七　統一せる累進税

八　政府の農民銀行經營、消費組合援助

九　政府の水利經營、共營農場の提唱

之れ等は、實に長沙占領に續いて長沙各處に活動しつゝある彼等目前の闘爭に與へられた新しい基準を爲すものである。

五、赤軍の活動は何う展開するか？

長沙事件の被害に對し、日本政府は早速抗議と賠償要求の豫告を南京政府に送つた。國民政府は無條件に恐縮し、賠償承認の手形を發行し、直ちに「共匪」を討伐して二度とこんな事件のない樣にしますと詫びを入れた。

尤も長沙の囘復には政府も列國も差して困難とは感じなかつたであらう。然し所謂る「共匪」討伐に至つては政府自身其の不可能性を最もよく知つて居る。列國も此のことを要求はしても何ん等の期待を政府の力量において居ない。と云つて自ら積極的に出ることも出來ないので消極的自衛の宣言で御茶を濁して居る。然かも、政府でも列國でも「共匪」の跳梁は不斷の内亂がそうさせるものであつて、内亂さへ解決すれば徹底的討伐は出來ると考へて居る。ところが「共匪」討伐が内亂の解決を前提とする限りに於て、今度は國民黨政府の下には永久に「共匪」討伐は出來ないと云ふ結論が出て來る。何故？　それは國民黨政府そのものに支那の内亂を解決する資格が存在しないからである。

内亂は、今日、三民主義の忠實な信徒の割據對立によつて演じられて居る「軍閥戰爭」に示される。だが、此の軍閥戰爭に於て、國民黨がブルヂョアジー——勞農の發展によつてブルヂョアデモクラシーの革命の領導權を放棄したところの——と封建地主の結合を表現するものである限り、何れの側にも完全にブルヂョアジーを代表する勢力なく、同樣、完全に封建地主を代表する勢力もない。彼等はつまり、互に此の二階級の結合體の或る一方を代表するグループとして對立するのである。然かも之れ等の背後には、原始的植民地侵略の繼續の中に獲得した一切の政治的經濟的特權を以て支那を支配し、且つ此支配的地位の支持に自己の存在の基礎を見出す列國帝國主義が入り組んで參加して居る。のみならず之れ等列國の利益が又、支那に於て激しく衝突し、此の衝突は更らに中央政府のヘゲモニー獲得を中心として、或は又勢力地帶の特殊地位を中心として種々な形で個々の軍閥——國民黨の名に於て存在する——の支持を展開する。其結果、互に對立する軍閥は、常に、支那に於て個々に對立する列國の利益を代表する。隨つて軍閥戰爭は、支那に巣喰ふ列國の存在を前にして不斷に反覆されねばならぬ。一歩々々ゼネラルクライヂスへの危機に近づきつゝ。

ブルヂョアジーは今日尚ほ國民革命を云々する。然し封建地主と同盟し帝國主義と妥協せねばならなかつた彼等には軍閥及帝國主義の支配と徹底的に闘ふべき何ん等の資格もない。そこで此の資格即ちブルヂョアデモクラシー革命の領導權をもつものは、只だ帝國主義と軍閥の支配に絕對的に對立する勞働者と其同盟者農民だけである、と云ふことになる。過去三年の闘爭中に早くも今日の實勢力を獲得した赤軍の前進に、××××××が考へられるのも、如何なる××××××××今後の發展が考へられるも、凡ては此の點に歸結しよう。

かくて次の樣な結論――否な想像――に達する。

列國が支那に於て直に矛盾衝突する一切の事情を抑制し合つて、支那に現存する或る勢力を共同支持し、その勢力をして內亂を平定し所謂る眞の國家統一を達成せしめることが出來れば兎も角、若し然らざる場合には、そこには益々加はり行く「共匪」の跳梁が現はれる。列國は絕えず抗議と賠償要求を出し、政府は絕えず謝罪し賠償手形を發行する……と云ふ事態が現はれる。中央政府も地方軍閥も奔命に疲れる。然し彼等には、先づ邪魔を片づけてゆつくり勝負しやうなどの洒落氣はない。「共匪」は愈よ有力に長江の重要都市に乘り出して來る。特に此の間、中央地方の傭兵軍隊の構成者たる失業農民が自發的に組織された農民×××に歸順せんとする顯著な傾向が問題となつて來る。勿論產業工場勞働者の闘爭は尖銳化し、政治的ゼネラルストライキが擴大する。支那に於ける經濟的利益の保護の爲め列國は長江其他の海岸商埠地に軍艦を常備し、屢よ公然たる積極手段に出る。蔽はれたる「平等待遇」への好意傾向は再び逆轉し、內河航行權や駐兵權は無言の內に決定的なものとなる。逼ふした傾向の中に、××××××××××××××××××××××××××××再び反帝國主義への動搖傾向を帶びて來る。それは勿論反國民黨的に現はれ、且つ此の運動中に彼れ等は唯一の政治的進路をプロレタリアの指導する新國民××への參加に見出す。列國の對支政策の動搖が、相變らず展開する軍閥支配の對峙の中に益よ擴大する。かくて農村××の齎らす逼ふした支那の混亂が、世界歷史の發展の上に支那自身有する役割の進行を急激に促して行く。（一九三〇、八、一一）

（取消申込）　本誌七月號中欄に揭載した田中貢太郎氏の「仁右衞門島の話」の記事中、濱波太村（現太海村濱波太區）飯髙善右衞門並びに村民對平野仁右衞門の鮑採取權を繞る鬪爭事件の眞相に關し、右は島主側の意見のみ採用した一方的な見解で事實と相違する旨、飯髙成一氏より取消申出があつた。

改造社版

經濟學全集（全四十七卷）

統計學

東京・芝・愛宕下町

改造社

振替東京八四〇二番

第二十三回配本

第三十五卷　八月中旬配本

—内容—

統計學總論……有澤廣已

數理統計……小倉金之助

經濟統計……藤本幸太郎

社會統計……竹下清松

- 一回　經濟學原理
- 二回　經濟學大綱
- 三回　日本社會經濟史
- 四回　唯物史觀經濟史
- 五回　各國經濟史
- 六回　經營經濟學
- 七回　經濟學前史
- 八回　マルクス經濟學說の發展（上）
- 九回　商業學（上）
- 十回　租稅論
- 十一回　現代日本經濟の研究
- 十二回　財政學（下）
- 十三回　社會政策（上）
- 十四回　經濟學特殊理論（下）
- 十五回　マルクス主義經濟學の基礎理論
- 十六回　特殊問題
- 十七回　產業革命史
- 十八回　經濟政策（下）
- 十九回　現代日本經濟の研究
- 二十回　經濟學特殊理論
- 二十一回　產業合理化
- 二十二回　日本經濟史

農學博士　小野武夫編著

◇

菊判上製總布裝
地圖寫眞數十葉入

◇

定價四圓五十錢
送料三十六錢

維新農民蜂起譚

何が良民を暴徒にするか？此の歴史的事實を見よ！

各時代を通じて社會の下層に喘いで來た農民は、時々彼等の鬱憤を一揆に洩してゐた。此人間性の發露たる一揆も、封建制度の崩壞資本主義の擡頭を見た明治初年には亦特殊の様相を持つてゐた。本書收錄の十數の騷擾はそれ〴〵型を異にし、一讀當時の社會相を窺ふに足る。各篇悉く其地方の人の筆になり事實を正鵠に傳へた點で特に貴重な文献である。各篇地圖を附し編者の解說あり、參考繪畫と附錄の研究資料亦得難きもの。興味深き讀み物たり、日本社會史の好資料である。

（内容）巻首言。解題。三河の僧侶一揆。備後の舊知事引留騷動。土佐の脂取一揆。越後の分水騷動。甲斐の大切小切騷動。日向の佐土原一揆。筑前の竹槍騷動。越中の小作一揆。相州地主の燒打。上野の秣場騷動。伊豫一揆。維新農民一揆の研究資料。（以上）

發行所　東京芝區愛宕下町　改造社　振替東京八四〇二

青野季吉著

（四六判四百五十二頁）

定價壹圓五拾錢
送料二十錢

社會は何故に惱むか

社會は何故に惱むか？　如何にして此の苦惱を脱すべきか？　此の問題に對し只だマルクス主義者のみ正當な解答を與へ得る！　今論壇の雄青野氏最近の社會評論を集め、改めて之を世に問ふ。無産政黨、サラリーマン層、新聞紙、出版事業等は、特に氏得意の論題、其の純左翼の立場よりする明暢なる論策は、多大な示唆と反響が期待される。

最新刊

〔目次〕

○二つの世界勢力の對立○政治に内在する矛盾○無産大衆黨の階級的任務○分裂主義理論の最後の一線○宗派主義者の非難について○勞働農民黨を顧みて○無産黨の認識内容○無産黨小論○一勞働者の質疑に答へる○如何に反動に答へるか○輿論製造論○出版資本主義觀○資本主義と新聞○新聞論○サラリーマンの恐怖時代とその解放○サラリーマンは如何に行動すべきか○サラリーマン論要約○大學工場から社會市場へ○學生製造企業會社論○東京帝國大學論○職業婦人に與ふる言葉○女性と社會的關心○歌舞伎王國の階級鬪爭○安部磯雄と大山郁夫を論ず○森戸辰男氏を難ず○北氏に對立して○北氏への返事○村山龍平と本山彦一○明暗社會風景○經濟學と社會の話○共同戰線黨の話○觀た生活の影から○夏の感想○小景小感○代々木夜話。

發行所　東京芝區愛宕下町　改造社　振替東京八四二〇

大衆要望の成果・現代社會の一大寶典

社會科學大辭典

暗迷の摸索より光明の科學へ!!

研究への最良の手引

社會科學辭典中で絕對的の價値を有し、その關係事項の範圍の廣汎、解說の詳細は現代の總ての事相を手に取るが如く指示す。本辭典なくして現代を正解するは至難であり、併せて現代に處する唯一無二の羅針盤である。宜なり各學校、會社、銀行、法曹家は云ふに及ばず、現代の社會學、政治、經濟、社會運動、社會思想に通曉せんと欲するものは擧つて本辭典を購求す。現代の趨勢に鑑み社會科學の百科辭典を座右に置くことの如何に依つてその成功の如何をトすべし。敢へて本辭典を江湖に推賞する所以也。

定價金拾五圓（送料四十五錢）

特價提供 **12圓**

特色

本辭典は凡百の社會諸科學の書に匹敵す。▽文章平明誰にも了解し易い。▽各項目に一々英、獨、佛等の原語を添へ必要に應じて希臘、羅典の原語を引用して淵源を剔抉し、底理を剖析す。▽各項目每に內外の參考書目を擧示し、讀者の便益を備ふ。▽各項目は、それ〴〵專門學者の又は實際執掌者之に當り、且つ責任を明らかにして署名す。▽辭典の生命たる『索引』は、親切周到を極め、實際使用上の便益を圖る。

先づ實物で見て下さい

東京芝區愛宕下町　**改造社**　振替東京八四〇二

「人物」座談會

出席者

長谷川如是閑　前田河廣一郎
菊池寛　馬場恒吾
永井柳太郎　杉村楚人冠
本多熊太郎　山本實彦
向坂逸郎

山本。今夜は實は何もプランはありません。しかし日本と謂はず、世界が總ての方面に行詰つてゐる。これは制度が惡いのであるか、若くは人物の關係からであるかといふことをば、いろ／＼究明して戴かうと思ひます。しかしその制度とか、組織とかいふやうなことをここで論じたところで、一向果しがないと思ひます。でありますから今夜は唯だ輕い意味で、日本でも世界でも、總ての方面に行詰つてゐると共に、人物も確に拂底してゐる。日本では、明治維新當時の人物はどうであつたか知りませんけれども、それ以來の政治方面、否凡ての方面に於て、兎に角人物の奥行と幅といふものが缺けてゐるし、又世界の政治家その他の方面に於ても餘り敬服すべき人はないし、それにはいろ／＼研究して行けば面白い所があるだらうと思ふのです。しかしながら今夜はさういふやうな問題を一々究明



（左前より卓を廻りて）永井柳太郎氏　馬場恒吾氏　山本社長　本多熊太郎氏　長谷川如是閑氏　杉村楚人冠氏　前田河廣一郎氏
向坂逸郎氏　菊池寛氏

することはできますまい。唯だ現時は尤も人物が拂底してゐる。しかしその拂底してゐる人間でも、やはりいろ〳〵研究して行けば面白いこともあるし、さうして又いろ〳〵人物を研究して行つて、相當日本の政治の上にも面白い結果を招來することがあるかも知れんし、又世界的にもさうか知らんと思ふのです。今晩は極く輕い意味で、最近、年代から云へばナポレオン以來、日本でも謂はゞ維新後の人物に付て面白い話をして貰ひたいといふのが今夜の會の趣旨です。現在の行詰りといふものが勿論制度の上から來てゐることも相當肯定さるゝことが多いやうでありますが、しかしながらさういふ問題は成るべく抜いて貰ひたいと思ひます。どうか長谷川さんから一つ、制度と人物と、さうして現在の總ての問題の行詰りとの關係に付ての御感想をばやつて戴きたいのです。

長谷川。それはどうも面白くない。面白い話をするといふ趣旨からいふと具體的に人物の何か面白いことを知つてゐる方が話題を提供してはどうかな、僕は理屈ならば言ふけれども、今夜の會は理屈は抜きといふのだから。

山本。一應一つ座談會の頭をつくる意味で一寸理論的なところをあなただけにお願ひしたいと思ふ。

前田河。異議なし。

長谷川。僕は唯々人物といふもの——いはゆる漠然たる人物といふものは、時代が原始的な程效果があり、隨つて現れるものだと思ふ。時代が段々發達して來て社會の組織なり制度なりが完成して來ると、人物といふものはその制度や、組織や、社會の事實やを正確に認識して、それを判斷してさうして實行するといふ一つの科學者的態度に段々移つてしまふ。さうなつて來ると勿論人物といふものは原始的ではあり得ないのだ。しかし社會といふものは決定的に科學的であり得るにはまだ遠いことだから、今日の時代でも無論謂ゆる認識の正確といふよりも衝動的で、自然的で、隨つて行動も自然的であつて、しかも非常に効果的なものもあり得ると思ひますから、今日でもその意味の人物がないとは考へられない。さういふ人物が出て大事業が出來ないとは考へられない。しかしさういふ人物が段々と企つべきものでも願はるべきものでもなくなると思ふ。判斷は科學的にならなければならないし、認識といふものは客觀的にならなければならないから、自然的な、衝動的な働きで社會をよくするとか、人間を指導するとかいふやうな原始的な偉人とか、大人物といふものは、段々出なくならなくちやならない。發明家とか、社會的科學家といふやうなものが、寧ろ人物になつて來るであらうと思ふ。然し今日でも認識の發達しない意識の發達しない方面には、や

はり自然發生的な、衝動的な、認識でも自覺しないで自から正しいといふやうな、特別偉い人が出て來るだらうと思ふ。だが今ここで人物を要求するといふ時には、寧ろ決定的科學者を要求するといふ方がいゝと思ふ。唯々社會が徹底的科學的ではあり得ないから、自然的、衝動的な態度で効果的な人間も出るだらうから、その意味では尙ほ漠然たる意味の人物がゐる譯だが、段々さういふ人物の要求は少なくなるのが大勢だと思ふのです。

馬場。僕はやはり英雄豪傑とか何とかいふものは餘り好きでないね。だからムッソリーニとか、レーニンとか、ケマルパシヤとか何とかいふ奴は、名前を聞いただけでもいやになつてしまふ。といふのはあゝいふ風な奴は、假面を被つてゐるのぢやないか知らんと思ふ。つまり或一つの時代の要求があつて、その要求に、自分は心ならずもさういふ風にやつて行つたならば人氣を博するとか、或效果的の勢力を得るとか、何とかいふ風な、一つの假面を被つて、さうして自分が心にもないことをやつてゐるやうに見えて仕様がないですな。蔣介石なんかでも、矢張り本心はどうであるか知らぬが、前田河さんなんかあゝいふものを書いたが……

前田河。冗談言つちやいけません。今反駁しますよ。

馬場。あゝいふ風な連中、英雄豪傑といふものは昔から嫌ひだな。だから本當の人物といふものはさういふものでなくして、矢張り長谷川さんが仰つしやるやうな大して偉くもないといふやうな人間ですね。それが本當に偉いのぢやないか知らんと思ふな。

前田河。それは長谷川如是閑氏の話は非常に中農主義の話であつて、理想の話でせう。吾々現在中農主義を持つてゐないものは別として、プチブルヂョアの滿足するやうな世の中になつてゐない。さういふ理想もない。現在の所世の中はたつた二つにしか分れてない。ブルヂョアとプロレタリアと二つにしか分れてないのだから、ブルヂョアヂーに附いてゐる人はブルヂョアの觀方から言へば英雄であるかも知らん、それはいろ／＼あります。名前は何とでも言へます。一々言はんでもいゝですが、蔣介石なんぞはブルヂョアの味方であると同時に代辯者である。しかしながら吾々はさういふことに觀點を置かないで、人格とか、人間そのものの偉さとか、さういふものでなくして、本質的の偉さといふものはさういふものでないといふことを言つたのがマルクス主義なんです。そのマルクス主義が分らなければ、全然新しい人格の芽生えとか、新しい英雄とかいふものは分らぬ。それは皆が古い英雄觀から謂ふ所の偉さとか偉くなさであつて、それでなく實際世の中には貧民と富豪とこの二つしかないといふことになると、貧民の中の偉さといふものはどういふも

のであるか、富豪の中の偉さはどういふものであるか、といふ二つの分析しかないと思ふ。私は貧民の中の偉さの方にだけ賛成するのであつて、話は全然不公平になります。しかしそれでも押通すものならば何處までもその主張は貫徹する。

馬場。ちよつと甚だ幼稚な質問だけれども、マルクス主義は英雄を認めるのですか。

前田河。認めません。英雄といふ言葉がマルクス主義に入らぬ。英雄といふ言葉でなく表して居る。

長谷川。科學者といふものは、貧民とブルヂヨアと分れても、共に僕の今いつたやうな意味のもので、これからの英雄といふものはブルのでもプロのでもその意味の科學者のやうなものでなければならないといふのだ。今の貧民の中に英雄があると今君が言つたらう?

前田河。それは言つた。

馬場。そこに矛盾があるぢやないか。

前田河。あつてもいゝぢやないか。

長谷川。貧民の英雄も今僕の言つたやうな人間——科學者——でなければならないと思ふ。

前田河。それは君は人格的に言ふからさうなんで……。

長谷川。人格ぢやない。つまり徹底的な科學者であることを理想としなければならない。

前田河。徹底的な科學者なんといふ純理論ぢや科學といふものは成立しない。

長谷川。僕の言ふ科學者といふのは今のサイエンテイストの定義する科學者ぢやなくして、行動の效果が學術的の、客觀的の認識に一致して居るといふことなんだ。だからそれを科學的に自覺すると、それを組織立てると否とに拘らぬといふ行動の科學なんだ。

前田河。行動とは?

長谷川。行ひ。

前田河。公の意味の?

長谷川。それが別にブルヂヨアの英雄プロレタリアの英雄といふ譯ぢやないが、共に行動の科學的であることを條件とする。

前田河。その行動の科學といふことは非常に吾々に取つては惑はしい言葉だ。

長谷川。僕等はマルクス主義の英雄があるならばそれでなければならぬと思ふ。

前田河。單に行動の科學といふ言葉それ自身成立しないのだ。政治的、經濟的關係を離れて行動の科學といふものは成立しない。

長谷川。それはプロレタリアの中にはプロレタリアの行動がある。そ

の行動の科學者がこれからの英雄だ。だからブルヂョアの英雄もブルヂョアの行動の科學者である。貧民の英雄は貧民の行動の科學者でなければならぬ。

前田河。それぢやどつちもいゝといふことになるだらう

長谷川。英雄といふものがあり得るならばどちらの階級のもそれだと思ふ。

前田河。吾々は英雄ぢやなくて英雄を通じて無産階級を論じてゐるのだ。

長谷川。君はプロレタリア關係ばかりの英雄を言つてゐるが、僕等から言へばブルヂョアの英雄も出ると思ふ。

前田河。半面に於て出る。しかし人間は何處までも公平であり得ないのだ。僕は徹底的の公平であるといふ社會は見たことはない。

長谷川。僕は公平もなく不公平もない。軍國主義の英雄でもこれからのは僕の定義範圍に入らなければならない。

前田河。それはどういふ定義でもいゝが、兎に角二つの階級しかないのだ。

長谷川。それは又別の話だ。階級が二つしかないといふことを論ずるのとは……。

前田河。實際の觀方は其の階級から出る。僕のはプロレタリアの觀方から出る。僕は二つの階級からしか世の中は觀られないと主張する。

長谷川。だから僕は二つの觀方と言つたつてこれからの英雄はどちらの階級のものもその點に於て一致するといふのだ。今日の時代に於て英雄といふものがあり得るならば、ブルヂョア英雄も、プロレタリヤ英雄も、科學的な者が英雄の資格を持つといふ事になるのだ。

前田河。もちだよ。それは當り前だよ。さういふことを言つちやいかん。何でも彼でも科學者であるといふ變なことを言つちやいかぬ。

長谷川。何も彼も科學者なんて變なことを言つてやしないよ。

菊池。（前田河氏に）君はレーニンなんか英雄と認めないのか。

前田河。認めない。

菊池。普通の人間と違はないのか？

前田河。皆な普通の人間だ。

菊池。それぢや君は英雄否定論者だね。

前田河。その必要はないね。

長谷川。僕もその點に於て一致する。

菊池。普通の人間とは違ひがあると思ふ。

前田河。英雄といふものはブルヂョアのクリエートした幻影だよ。

菊池。レーニンといふ者が一人ゐる爲に、それが百人、千人の働をすれば、それは僕は英雄としてもいゝと思ふ。

前田河。冗談言つちやいけない。君レーニンといふ者を知つてるだらうが、レーニン一人で働きやしない。萬國の同志と一緒に働いたからあれだけになつた。

長谷川。それが科學者の特長だ。協同の努力に依頼するといふ……。

菊池。レーニンがゐなくてもロシアの革命は、丁度同じ時に出來るのですか。

前田河。勿論出來ます。自然に意識的過程になつたらレーニンがゐなくても他のレーニンが出て來る。

菊池。レーニンがゐなかつたら出來なかつたと思ふな。

永井。前田河君、かういふ個人があるといふことは認めないか。或時代の精神を顯著に代表してゐる人物――個人が歴史上にあるといふことを認めないか。それは時代を指導するとか、或は時代に號令するとか云ふのぢやないが、普通人以上に時代の精神を代表してゐるといふやうな人物があるといふことを考へないかね。

前田河。認めます。それは主觀的にだけ認めます。客觀的には認められない。

菊池。しかしそれならマルクスといふ人間がゐなかつたら、同じ時にもう一人のカルクスとか何とかいふ者が出て來て同じやうなことを言つてゐるか知らん。

前田河。菊池君の言ふのは、その場合マルクスがゐなくもカルクスが出て來るのかといふのだが、英國のマンチエスターのスピニンダインダストリーがあゝいふ風になつて居れば、他のカルクスが出、エンゲルスがゐなくてもハンゲルスが出る。人類の發達から見ると、人類の中にさういふ先覺者が必ず出ることは分つてゐる。

菊池。僕はその點は十年か二十年遲れると思ふ。マルクスがゐなかつたら十年か二十年遲れるに違ひない。それでなければ、あの時代にマルクスのやうな者が四人も五人もゐたつても宜からうと思ふ。丁度同じやうな學說を唱へる人がゐてもいゝと思ふのです。マルクスだけが說いてゐる學說といふものは、マルクスのオリヂナリテイーが偉いといふので、さういふ點から謂へばマルクスが偉いと思ふ。

前田河。しかし、マルクスが何を研究したかといふことを考へて見ても、どういふ風にマルクスが彼の學說を訂正したかといふことを考へて見れば、同時にマルクスの訂正する原因が分る。マルクスを訂正してレーニンが持つて來たので、吾々はマルクスに反對するのぢやない。しかし又英雄だといふことを言ふのぢやないが、マルクスはその時に必ずゐなくちやならぬが、一人のマルクスがゐなくてもW、X、Yのマルクスがゐてもいゝぢやないか。

菊池。さういふやうに言へばマルクスと同じやうな學說を唱へる人が

十人や二十人ゐてもいゝと思ふ。然るにマルクスだけがあゝいふ働をしたといふのは、マルクスの頭の細胞がどつかゞ違つてゐたと思ふ。

前田河。それは事實ゐたんです。マルクスの前にロードベルタスといふのがゐたんですよ。しかしながらマルクスより現代の政治が分らぬからこそマルクスが綜合的になつて來た。

菊池。それだからマルクスが偉いと思ふのだ。

前田河。偉いけれども英雄とは思はぬのだよ。あつさり的に、實にあつさり的に英雄ぢやないと思ふね。

菊池。僕はさう云ふ人間を英雄だと思ふな。

前田河。さう思ふならばどんなことを言つてもいゝ。神様だと言つたつていゝのだ。しかしながらそれは英雄ぢやない。

山本。どうですか本多さん。あなたはどう思ふ。

本多。僕は知らん。別世界なんだから謹んで拜聴する。

杉村。僕は人物とか、英雄とかは見たこともないし、接したこともないから分らんが。今日英雄といふものをどういふ意味で、どういふ觀方をして英雄と謂つてゐるのか、それが分らなければどんな議論もできまいと思ふ。マルクスが英雄であるか否かといふやうなことは、英雄といふことの定義如何に依つてどういふ風にでもなるもので、その意味から言へば、吾々が空に議論してゐるのぢやなからうか、銘々の腹の中に英雄といふものの解釋を違へて居つて、英雄が出るとか出ないとか、見當違ひの議論をしてゐるのぢやないかと思ふ。

向坂。さうですね。英雄といふ言葉が悪ければ、それは傑れた個性とでも言ひますか。さういふ人は、つまり人間が皆同じぢやないのですから私はあると思ふ。だけれどもその個性の力で社會が決定的に動くとかいふ風なことは僕は考へられない。その大きな個性といふ人がその時代の進歩の方向、時代の必然性の動きを、他の比較的小さい個性に先じて觀て、さうして他の小さい個性に對して、社會はこうであり、或はかういふ風に進んで行くと思ふといふ風に言ふことは有り得る。さういふ意味で大きな個性と小さい個性との違ひはあると思ひますが、しかしそれかといつて大きな個性が社會の進展を決定するといふのではないと思ふ。社會の進展を決定するものは……まアその位で――。

山本。さういふやうな理屈の議論はまア是れ位で打切つて、現在の日本の問題、現在の政局が既成政黨の指導者、若くはさういふやうな政黨に依つてこの經濟難が果して打開され得るや否や、若し得ないといふやうな考であつたならば、どこにさういふ缺陥があるか。その指導理論に付て批評して貰つて、それからその代表者に付て御批

評を加へて貰ひたいと思ふ。

馬場。今の經濟難、これは僕等はこの間も他所でも議論したことだけれども、不景氣打開策なんといふものは愚の極だと思ふ。井上藏相が言つてゐることを口眞似するやうだけれども、世界的不景氣であるのに日本だけで幾らやつたつて、景氣が直りやしないと思つてゐる。だからここで一つ我慢して、日本アルプスで暴風に遭つたやうなものだから、ぢつとしてゐればここで死ぬかも知れないが、動けば谷の中に落ちるに定つてゐるのだから、我慢して岩に噛り附いて、この暴風の濟むのを待つよりほかないと思ふ。不景氣打開策なんてあんな愚なものはないと思ふ。だけれども各國共に關稅が撤廢して、世界的國家になり得ればそれは又別だけれども、そこまでは當分行きつこはなささうだから、現在の政治家――ここに永井君もお出でになるけれども、政府は井上が大藏大臣になつてゐるけれども、實際は濱口さんの財政政策を行つてゐるのだらうといふ評判だが、どうも弱いと思ふな。いろ〳〵な減俸案を出して引込まして見たり、生糸補償法案を出して變なことをして見たり、地方債を募ることを許すといふやうなことをやつて胡魔化して見たり、どうも強さといふものがないな。濱口さんはライオンといつて大變強さうな綽名を附けられてゐるけれども、實際は非常に弱いのぢやないかね。

政府委員に一つ。……

永井。濱口首相が強いか弱いかといふことだが、丁度馬場君が今話したやうに、濱口內閣は今行きつゝある途よりほかに、行くべき途がないと思ふ、その途を眞劍に進んでゐる濱口首相はやはり強い人といふことに結論さるゝだらうと思ふ。

本多。勇敢ぢやない、といふのだ。

馬場。時に生糸補償法案をやつたり地方債を出すのを許したりするといふ風な方面の政策から見ると、妥協してゐるのぢやないかと思ふ。あゝいふやうな妥協は止したら宜からうと思ふ。

永井。けれどもそれは先程前田河君の議論もあつたが、どんな政治家でも時代から離れて一人で行くことが出來るものでない。どんな政治家でもその時代の社會生活の要求を離れて、中々政策は樹てられない。濱口首相の今の財界救濟に對する政策の價値は、濱口首相が信ずる程まだ〳〵國民には徹底してゐないと思ふ。そこで濱口首相の樹てゝゐる財政々策の外に今の日本の行くべき途はないといふことは、馬場君は確信して居るやうだが、馬場君程に一般の國民がまだ確信して居らん。それだから政策を遂行する上に於ても、非常な困難を感ずる。それは必ずしも弱きが故でない。例へばロシアのレーニンがコムミユニズムを實現しやうとしてさうして革命を斷行し

た。レーニンが英雄であるかないかは別として、兎に角彼は勇者であつたに相違ない。レーニンの如き勇者でも、矢張り大衆がコムミユニズムの眞價を解しなければ、一時途中で新經濟政策を樹てゝコムミユニズムの實現の方法を、急進主義から漸進主義に一變してゐる。それは必ずしもレーニンが弱いとか、レーニンが怯懦であるとかいふためぢやないと思ふ。それは矢張り理想を實現せんとして、その時代の人々の理解がまだレーニンの理解に達してゐないといふことを認めた場合に、政治家としてその實現の方法を一時緩和することはあり得る。レーニンが新經濟政策に逆轉したからレーニンは弱者であるといふことは出來ない。同時に濱口首相が、時にその政策の遂行の方法を緩和することがあつても、それは必ずしも濱口首相が弱者であるといふことの結論には達しない。

向坂。馬場さんの御說ですが、打開策がない。打開策は出鱈目であるといふことは別問題としても、僕等がそれを忍ぶ必要はないと思ふ。不景氣を忍んで、よくなるのは僕等ではない。僕等は僕等の要求をすればいい。濱口さんは要するに資本家階級の利益を代表した政治家であつて、その意味に於て私共は濱口內閣に對しても他の內閣に對しても、資本家階級を代表する內閣に對して僕等の要求をすればいゝので、更に今の濱口內閣の政策が國民に徹底しないから濱口さんは妥協せざるを得ないと永井さんは仰つしやるが、しかし僕等も理解しない一人なんで、分らないのです。實際分らないのが道理だ。民衆の利益は始から顧られない。だから吾々國民の大部分には分らない政策しか行ひ得ないものは今の內閣である。同時にその他の內閣ではないかといふ風に私は考へて居る。だから濱口さんが妥協されたとすれば、僕等民衆が、もつと正確に言へばプロレタリアート其他被壓迫階級が分らないから妥協するのでなく、分らないのが當然だといふやうに僕等は考へて居る。

馬場。もう一つロンドン協約なんかでも、早く樞密院にかけたがいい。何をしてゐるのか、頭だか尾だか海軍の云つてゐることは分らぬ。早くやればいゝのだ。

前田河。僕が思ふのに、日本の政府は一體レフレンダムといふものをちつとも採用しない。斯く日本は封建主義的であるかといふとさうでもない。實に迎合主義的資本主義に相當してゐるのだ。然るに日本の國防に對しては、何時も封建主義的に臨んでゐるが、一旦國家の大事になるとさうでなく、元老會議とか、樞密院會議といふものを持出すが、一體元老が國のことを考へて居るか、樞密院が何をして居るか、國情などを彼等が知つてゐますか、あの東鄉大將そのものがどうして國民のことを知つてゐますか。是は立派にレフレンダ

ゝにかけべき問題なのだ。それを斷くして回避するといふ政治規範は片跛なものだと思ふ。

山本。今夜は制度の問題とか、何とかいふものはこれで一段落にして、初から豫定が人物の話なんだから、これで打切つて貰つて、今度は豫定通り人間に對する趣味の硏究、談話にして行きたいと思ふのです。どうですか菊池さん。

菊池。僕は兎に角時代といふものは必然的に動くものだと思ひますけれども、或個人が出たために、時代の動き方が一日でも二日でも早ければ、その個人は英雄と認める。だから維新の革命なんか必然的に起るにしても、矢張り相當偉い人間が澤山出た爲めに十年なり五年なり早く行はれてゐる。さういふ意味でさういふ人を英雄と認めていゝと思ふ。さうでないと英雄論は出來ない。

山本。本多さん一つ……。

本多。英雄崇拜は恰も人間の音樂詩歌に對するあれと同じだと思ふ。人間性の自然の一つであると思ふ。これは僕は理窟ぢやいかんと思ふ。それだけは僕は一言言つて置く。それから今東郷元帥のやつて居られることに付て、國民をどうして知つて居るかといふやうなことを言つて非難されてゐたが、それを言ひ出すと政治論になるから言はないが、日本國は東郷元帥といふ國寶のあることを感謝しろといふことを一言言つて置く。そこから先は議論になるから議論は避けるが、私の考へだけはつきり言つて置く。東郷あつて日本國を救ふものだと、諸君の前にはつきり一言言つて置く。

向坂。僕等は感謝することだけは御免を蒙つて置く。

長谷川。僕も東郷では今日の日本は救ひ得ないといふことを言つて置く。

前田河。救ひ得ないよ。

山本。そこらは各自の立場だけを明にして議論を打切つて……。

本多。僕は君から（山本氏に向つて）人物話でもするから來て呉れといふので來たので、むづかしい議論をするのだつたら俺は來なかつたのだ。

山本。これから人物の話をするのだけれども、兎に角世界的にどういふ風に人物の觀方が變つて行くかといふことを初めにはつきりさせないといかぬから今までのことを言つたのですから……

本多。長谷川さんが言はれた議論には味ひがある。自分が會つた各國の政治家——日本で偉いと言はれてゐる人に會ひもし話もした。例へばイギリスあたりのバルフオアとか、エドワード・グレーとか云ふ人には、多少仕事の上で接觸したが、子供の時に教はつた英雄といふやうな感じを與へないね。それから長谷川君が言はれた世の中が

ちゃんと組織立つて來て――原始的時代には個性は非常にインプレッスするのです。ところが秩序あり、組織された狀態になると、民衆一般の程度が高くなつてその國の偉い人といふのは東洋流の謂ゆる英雄といふものはなくなる。却て新興國の政治家なんかに、日本外史や三國志で見るやうな英雄が出てゐる。まア組織立つた國には、今後は英雄豪傑といつたやうな巨人は出ますまい。この點は長谷川君とそこまでは同感だ。

永井。僕は段々歷史を見ると、同じ時代に類似の非凡な人物が各國に出てゐるやうに思ふ。例へば宗教改革を要求するやうな時代になるとルーテルとか、ノックスとか、ウイックリフとかいふやうな者が出て來る。それから貴族專制が極端になつて自由思想が勃興しなければならぬやうな時代になると、グラッドストーンとか、リンコルンとかカヴールとかいふやうな者が輩出する。やはり僕は各々の時代はその獨特の社會生活から起る獨特の要求を持つて居ると思ふ。その時代精神を普通人以上の程度に代表して居る個性が自然に各國に起つて來る。それを顯著に代表してゐる人物が謂ゆる英雄だ。それは英雄といつても、何といつても、それは唯々名稱の相違だ。僕はさういふものが、同じやうな社會狀態になると同じやうに起つて來るやうに思ふ。それだから先に前田河君が言つたやうに、その時代の社會生活の要求から、革命とか、改革とかいろ〳〵な運動が起つて來るので、必ずしも特殊の個人がそれをクリエートするのぢやないといふことが事實である。と同時にその時代の精神を普通人以上の程度に、顯著に代表する非凡の個性が存在する。その點は菊池君とか、向坂君とかの言はれた言葉に僕は眞理があると思ふ。但し向坂君が先つき濱口首相の政策は、吾々國民が理解出來ないやうなブルヂョア階級の政策であるから、それで國民多數の共鳴も得られないのだ。それだから逆轉するのぢやないかと言はれるが、それは君等の思想からさういふ觀察も出來るか知らぬが、レーニンだつて、矢張りコムミユニズムを實現したいと努力したけれども、無產階級がそれを理解しないために、遂に逆轉しなければならなかつた。それはブルヂョア階級の政治家だから逆轉する。無產階級に利益を與へる政治家は逆轉しないといふ論理にはならない。

向坂。レーニンの場合はプロレタリアート――被壓迫階級が理解しなかつたから逆轉したんぢやないと思ふ。

永井。僕はさうぢやないかと思ふが……。

向坂。反對的勢力が强かつた爲に一定の妥協したんだ。

永井。反對的勢力の根據は何處にあるか。

前田河。フランスですよ。

向坂。フランスといひますか、前のロシアに支配した諸階級です。だから濱口内閣の場合は、別のことを言へる。濱口内閣が色々のブルヂヨアの利益と妥協するといふことは吾々にも分つてゐるのだが、それが民衆の爲ぢやないといふ風に僕等には理解される。

永井。それは向坂君がさういふ風に考へるのだ。

本多。レーニンの話になると、西にレーニン、東に濱口といふ風になつても面白くないから止さうぢやないかハヽヽ（笑）

山本。では、濱口と犬養の批評に移るか。

本多。そんなことならお互が寄つて此席で論ずるまでもないだらう。

山本。どちらが偉いといふのぢやなく、兎に角それから來る現實の政治の方に入つて行つたらどうだらうかね。

本多。論ずる價値がない。

菊池。現實的に言へば日本に於て英雄といふものはないと思ふな。

本多。現實的に言へば普通のレベルまでの政治家がゐない。何ぞ況んや英雄おやだ。

前田河。英雄がゐないのにしろといふのは無理だ。

本多。それは今日エキヂスチング、レヂームの既成政黨の輪廓内に於て誰がどうだ、斯うだといふのは、幕末に於て水野越前守とか、田沼とか、老中政治家の下に於て、敏腕であるとか、利け者であるとかいふのと同じやうなものだ。けれど日本の現狀はどうしても展開しなければならぬ。これはあなた方と私共は解決の仕方――頭の向け方は違つても何とか展開しなければならぬのは明白です。これを救ふ者が出なければならぬ。この間も民間の國士とか何とかいふ者が私共の所へ來て、重臣會議を開いて貰はなければならぬといふから、「君重臣とは何だい」といふたら、「それは西園寺さんそれから前首相級の連中」と言ふから、そんな人たちは皆試驗濟みだ。七十越した老人共が寄つて何になるか。國家を救ふのは君等自ら救ふといふ覺悟がなければならぬ。吾々も勿論その力がないのだ。どうしても今日は若い者の中から出て來なければ――私はインターナショナルは大嫌ひだが、どうしても若い連中から出なければならぬ。時勢が英雄を造るんだから、今日の既成政治家の床次君とか、犬養なんといふ人は自分も懇意であり、いろ〳〵話もしてゐるが、あゝいふ先生はもうもつとオールドボーイ……。

菊池。時代の要求で英雄が出るといふのだけれども、時代が要求しないやうな英雄も出ると思ふな。ナポレオンは時代が要求したといふことは疑問だと思ふ。ムッソリニなども時代が要求してゐるのぢやないと思ふ。

本多。ナポレオンは別問題だが、イタリーの國情に於ては、當然あゝ

いふ英雄を時代が要求してゐる。それは日本にも出て來ませう。

向坂。一般的抽象的に時代なんといふものはない、今の時代は階級的な構成を持つて居る、社會が分れて居る。だから進歩的な階級、僕等に言はせればプロレタリアなんだが、さういふ立場を代表する大きな個性、ブルヂョアヂーの利益を代表する大きな個性といふ風に出る。ムッソリーニなんかも兎に角イタリーの一定の階級の要求、それを充して居る。だからあの仕事が出來る。それかといつてイタリー全社會の崇高なる利益を代表してゐるムッソリーニといふ風には言へない。

菊池。時代の要求に依つて出る人と、出て來て要求を造る人とあると思ふ。ムッソリーニなんか出て來たために、初めてかういふ人間がいゝといふ要求が出て來ると思ふ。それからかういふ人が時代の要求に依つて出るなと思はれるのと兩方あると思ふ。

馬場。どうも英雄業者があつて鼻についていやだな。例へば明治維新の際に於ても、大隈さんと西郷といふのはそれは似寄つたものだけれども、西郷といふ人は何だか英雄業をやつてゐるやうで、大隈さんの方は矢張り自分が本當に國の爲にといふ正直な所があるが、西郷なんか英雄であつたかないか知らないが、あんな多勢の人に擔がれて、肚にもない謀叛を起したとすれば尙更馬鹿だし、あれを以て本當に日本を救ふといふのならそれも馬鹿だし、英雄業者といふ類は總ての職業の中で一番惡いと思ふ。ムッソリーニなんかその嫌ひがある。ケマルパシヤなんかも英雄だ英雄だと祭り上げられて謂ゆる英雄業者、豪傑業者になつたし、あんなものは仕樣がない。僕はさういふ連中は嫌ひなんだ。

菊池。西郷の惡口を言ふと鹿兒島に行つて叱られるよ。

馬場。東郷さんなんかでも國寶に傷がついたやうに思ふが、さうぢやないのかね。

本多。それは人各々見る所ありだ。

山本。それはその通り、……。

前田河。日本の中で文筆勞働者がさういふことを特別に祭り上げて書くといふことは、日本の人間をそれだけ惡く指導するといふことを僕は菊池君などに言ひたい。さういふ馬鹿氣たことをやつて困るといふのだ。見た所將棋倒しに行つてゐる人間なんだ。唯ゝ周圍に集つた勢力がさせるのであつて何でもないのだ。それを偉さうに書いてやるのは、抑ゝ日本國民をして自負心を起さして、一種のプール運動を起させるたつた一つの動機にする、封建主義の遺制なんだ。實に惡いことだと思ふ。

永井。大體さういふ風な觀察も出來るが、同時に其時代の勢力が集つ

て來る中心になる人物が矢張り自然に起つて來るやうに思ふが…。

本多。それはさうだね。

永井。例へば英國の總理大臣のマクドナルドなんか、僕は英國に留學して居つた時代から彼を知る機會があつた。マクドナルドが普通の人間なら非常に寒貧のドン底に居るやうな時代に會つたこともある。子供を失ひ、お母さんを失ひ、妻君を失ひ、家庭には悲劇が續出する。その中戰爭になつた。世界戰爭の時には彼の同志の、例へばヘンダーソンとか、ジョージ・バーンスなどいふ人間は戰時內閣に入つて閣僚となる。それだのに彼一人は、戰爭に對する反對論を、眞摯に、眞劍に叫んだ。そのために新聞からは葬られやうとする。演說會には暴行される。彼自身の鄕里のスコットランドのロッシーマスのゴルフ、クラブまで彼を除名して彼の趣味生活までも破壞せんとする。地上に枕する所もない孤獨の狀態に陷つても、矢張り彼は彼が信ずる如く叫んだ。その眞實なる精神が矢張、彼の周圍に徹底して、さうしてその時代を代表する勢力が自然に彼を中心とするやうに集つて來て、それがマクドナルドをして今日のやうに勞働黨內閣の首班として政策を行はしむるやうになつて來たのだ。そこに矢張り時代の勢力といふものが働いてゐるが、その中心にマクドナルドの非凡な個性の存在を認めない譯にいかぬやうに思ふがね。

前田河。僕は永井君とは久し振だけれども反駁する。實際言ふと、マクドナルドは、さういふ決死の政策を行つて居ればあなたと同じやうに握手します。然らば、英國の植民地であるところの印度を見給へ。印度に於てどんな叛亂が起つて居るか。あそこは民衆が武裝的に忌避してゐます。內地へ／＼と喰入つて、既に收支償はない程の彼等は叛亂を行つて居る。それはマクドナルドも恐れてゐるが、總督アルビンがどんなことを言つても駄目です。あなた方は印度の爭鬪をよく御覽になつたでせう。あれは決して武裝の解決ぢやない。況んや平和の解決では尙更ない。マクドナルド內閣立つてから、何を彼等が平和の中に濟ましたか。斯くして植民地を壓迫することが、唯一つの英國の解決策であるといふならば、マクドナルドは自分の意志に依つて動いて居るのではない。英國の資本主義に依つて動いてゐる、マンチエスターの紡績業者の意思に依つて動いて居るといふことは、明々白々である。

永井。マクドナルドは第二インターナショナルの見地に立つてゐるから、君達から言へば反對すべきものがあるかも知れない。それはしかし政策に對しての所見の相違だ。僕は、彼自らは、今日の英國の勞働黨に屬してゐる人々の中で、比較的眞實な人だ、比較的勇氣のある人だと思ふ。彼が勞働黨の中心の總てぢやないが、そこに彼自

身の個性の非凡な力がある。君が個性を全然認めないやうに言ふから、それは認めない譯にいかぬぢやないかといふのだ。

前田河。認めてもあゝいふ風になつちや困る。

本多。一國の運命を責任を以て背負はうといふのに、階級的利害に即してのみの政治は出來ませんよ。

前田河。それはブルヂョア階級から言へばさうですよ。

本多。あなたの謂ゆるブルヂョア政治家の、フランスのミルーラントでも、ブリアンでも、皆な本來はラヂカルなソシアリストですよ。

前田河。あんなものはさうぢやないか……。

本多。私は國際聯盟の軍備縮小會議のミックストコムミッション、つまりシビリアンと軍人と一緒にした會なんですが、そこに聯盟の委員の一人として、一年半ばかり毎月一回位宛出た。私の隣席がスエデンのブランテイングなんだが、私が大國だから上席に座るべきだがブランテイングは總理大臣でもあるので、席を讓つて私の上席に座らしてゐた。一體私は非常な一種の智識欲といふか――が動いて、ブランテイングの議事に對する態度を終始氣をつけて見てゐた。當時フランスは安全保障々々々々といふので、フランスを抑へるためにロバートセシルが相互保險保障條約を出した。所がブランテイング先生、事一度條約案がスカンデイナヴイヤ三國に適用されるやうなポシヴイリテイーがあるといふ箇條になると、なか／＼入ケ間敷い。自國に關係のないことになると頗る理想論を出す。私は多くのインターナショナリストはなる程これだなと思つた。だから僕は日本の無産黨の勃興なんぞ恐れない。民政黨位と聯合內閣を組織して政治に與つて來ると、第一回のマクドナルドが第二回のマクドナルドと違ふやうに、大變に違つて來ますよ。だから僕はあなた方の階級專門のあれに對して格別の危惧も感じなければ何等の惡感も持たない。いろ／＼のアングルから國政を論ずる人が議院に出て政治に關係すれば、丁度いゝことになると思ふ。

前田河。それがそれと全く反對なんだからね。

本多。第二回內閣のマクドナルドは大變なナショナリストだ。

山本。杉村さん。前田河さんが、日本の文筆に携はる人が英雄を造つてしまふといふやうに言はれたが、果してさうであるか。國民の傾向といふものがさういふやうな考があるから、文筆に携はる人がさういふやうな英雄を造るやうなことをするのですか。新聞記者が意識的にそれをやつてゐるのか……新聞記者がそれの責任を負はなければならぬか……。

杉村。日本の新聞が今日英雄を造るといふやうなことをやつてゐるだらうか。

本多。やつちや居らぬわい。

杉村。やつちや居らんと思ふ。寧ろ今日日本の新聞總てが英雄否認の方に傾いて居る。その點に於ては僕は寧ろ反對に、もう少し人間をもり立てゝ行くといふやうな思想——人物、英雄とかいふ言葉を避けるけれども、或人のやりかけた仕事をもり立てゝ人をしてその名を成さしめるやうにするといふ雅量を、日本の新聞總てが示してもいゝと思ふ。

菊池。今の日本の新聞は可なり英雄——濱口さんのことなんかでも書き過ぎるぢやないですか。何でも彼でも書くんですからね。大臣の事なんかあんなに書く必要はちつともないと思ふ。

杉村。書き過ぎるといふことは、分量の上から言ふと多いかも知れないが、それは今言ふ通り、日本の人間が總理大臣の行動といふものを非常に興味を以て見るといふやうな所から來てゐるのですよ。その意味から言へば一時相撲の盛な時代には、力士の嚔したことまで書くといつた時代もある。それと同じで、必ずしももり立てる、名を成さしめるといふやうな意味でやつてゐるのぢやないと思ふ。

山本。長谷川さん一つ……。

長谷川。詰らんことを書き立てるといふことですか。

山本。詰らんことぢやなくして英雄といふものを文字で造るといふ日本の傾向があるといふことについて……

長谷川。今の新聞は英雄を造つてやしない。今の新聞は人氣者を造る。ダグラス・フエアバンクスが來ると大衆がそれッと云つて騷ぐやうなことも大部分新聞のお蔭だ。新聞は英雄を造れないか知らんが、確に人氣者を造つて居る。それは商品新聞が、ダグラス・フエアバンクスが來たといつて往來を走る大衆と同じ心理で新聞を造ると賣れるから、それを書く、さういふ新聞が人氣者を造ることになるので、新聞が商品新聞、キャピタリズムの新聞になつた以上それをやらない譯にいかない。

杉村。プロレタリアの新聞だつてやるよ。

前田河。ダグラス・フエヤバンクスのやうなものはやらないよ。

杉村。それに似たやうなことは、プロレタリアの人間だつてやりますよ。

前田河。それは或種の宣傳の目的を以つてやるかも知れないが……。

永井。菊池君や、前田河君が戲曲を書いたり、小說を書いたりする時は、何が要求されて居る。何を面白がるだらうといふやうなことを考へずに書くことがあるか。

前田河。それは誰だつて考へるでせう。

永井。それぢや同じことだ。

前田河。皆さう思つてゐますよ。特にそれを書いたといふことは吾々に取つて重大なことで。讀者が自分のイデオロギーになるといふことは大切なことで。それを考へなければ吾々は書きませんよ。

永井。新聞が人氣者を造るのと同じことになる。

前田河。だから私は改造の山本君が嫌ふことまでも書いてゐるのだから、それはそれでも仕樣がないのです。仕樣がないといふのは仕樣がないのだから辨證法的に解釋しなければならぬ。世の中がかうやつて移つて行くのだから、個人が忌み嫌はうと、好き嫌はうと、そんなことはどうもないのだ。世の中といふものはかういふ風に移つて行く。それを考へてゐるから私は個人の主張といふことはちつとも問題にしない。私は賣れなくなつても結構です。私の次に來る奴が必ずゐますから安心してゐます。山本君がゐなくなつても又明日の山本君が出來るんだから仕樣がない。かういふやうに資本家と勞働者がこんぐらかつて行くので、斯くして矛盾が生じ、斯くしていろ〳〵なことが生じて世の中が生れて來るだらう。そんなことを最初からはつきり言ふのは――マルキストが……。

山本。菊池さんから日本の各方面の階級殊に政治界でも非常に面白い人だとか、非常に興味を持つてゐるといふやうな人を一つ擧げて下さい。」

菊池。現在の政治家では本當に尊敬出來るやうな人はゐないと思ふ。濱口さんのやうな、幾らか學問的に政治をやる人は良い方だらうと思ふが――あゝいふのが總理大臣としたらいゝのぢやないかと思ふですが。もつと力があるとか、個人的の力で押通すといふ人よりも、あゝいふ人の方が現代の政治家として一番いゝのぢやないかと思ふ。

山本。政治家以外はどうですか。總て文藝家でも……。

菊池。英雄といふのはちよつと考へられないな。いろ〳〵な方面で後世には殘るか知らんけれども……。

山本。杉村さんは趣味を以つて見てをられる人がありますか。

杉村。僕等にもないな。どの方面を見ても自分でこれが偉いと思ふ人は日本にはないな。

山本。世界ではどうですか。

杉村。世界で言へば、謂ゆる英雄の意味如何にもよりますが……。

菊池。ガンヂとか、ムツソリーニとかいふやうな人は後世に殘りはしないかと思ふ。

本多。殘らざるを得ない。

菊池。殊にガンヂなどは殘ると思ふな。

杉村。その點から言へばムツソリーニだつて……。」

永井。英雄とかいふ言葉は別として、レーニン、ガンヂとかいふ獨特な個性が世界のそこここに存在するが、日本には、菊池君が言ふやうにそれ程大きな個性が見えんといふことはどういふ原因なんだらう。

前田河。さういふ觀方が全然いかんと思ふ。それはブルヂョア社會—新興ブルヂョア社會、或はケマルパシヤの新しい國を造るにはいゝが、しかし新しい無産階級の運動を起すには、さういふ知名な人がどん／＼出たら運動を損ふ。それだからこそ僕等は抗議を申込むのだ……。

永井。いゝか惡いかは別として……。

前田河。ちよつと待つて下さい。——吾々はさういふものを養成するために運動をやつてゐるのではない。諸君と反對の立場に立つてゐることを自覺してゐる。それで初めて議論が分つたでせう。

永井。英雄の出ない社會がいゝか惡いかは別として、さういふものが今日の日本に出ないのは、日本のマッスが非常に進歩してゐるといふことが理由であるのか、前田河君が考へてゐるやうな……。

前田河。私の言ふことはさうぢやない。皆が平凡になつて、皆が同じ常識で分つて呉れゝばもう英雄は要らなくなる。ところが皆が分らん時は英雄が要るのです。さういふと、その時代が封建主義であるから英雄が要るといふことは、一つの片輪なんだ、皆さん特に御存知の叢作家を御覽なさい。何故彼の片輪にして片輪の支那に當て嵌つたかといふことが分る。だから日本にそんなものは要らん。日本にはもう少し分る人が多いのだから、運動が起れば英雄はなくなるといふことを言ひたい。

山本。原理としては不必要であるが、しかし現在はそれ程進んでゐないのだから……。又現在さういふものが、兎に角人氣者が存在するのだから、現在の形の上でそれを話をすればいゝので、さう根本的に全然否定するといふと話にならんから……。

前田河。否定も出來ないね。

永井。片輪者を要求しない程度に日本の大衆が皆な凡人として發達してゐるかどうかね。

前田河。しないのだ。

永井。さうして片輪も出て來ないのか。

前田河。あるのだけれどもそれを言ふと矢張り面白くないのだ。だから言はない。

馬場。しかしマルキシストとして現在の日本が愛すべき——總て憎むだらうけれども、その中に比較的先づ愛すべき政治家といへば誰れ？　マルキシストから見て……。

前田河。僕は堺利彥……。

杉村。あれは愛すべき男だね。

馬場。ブルヂョア政治家の中にはないかね。

前田河。それは知らん。

本多。自己の欲せざるものだらう。

前田河。知つてゐても言はんよ。

菊池。無産政黨がもつと發達すれば、無産政黨の中から英雄が出て來るかも知れない。

前田河。それは駄目ですよ。自然的に、歷史的に英雄が出る。謂ゆる英雄ぢやない英雄が出て來る。それは社會の形勢に依つて出る。決して英雄は拵へたつて出來ないのだ。主觀と相俟つて客觀的に出なければ駄目だ。それ以外は英雄は出ない。それは平凡な英雄だ。

馬場。けれどもあゝいふ風な堺君でも……。

前田河。あんな平凡な英雄はないよ。

馬場。堺君でも代議士になると英雄化するね。大山さんでも、安部さんでも、麻生氏でも、それは選擧區へ行くと英雄化してゐるね。あゝいふ風な連中に對してどう思ひますかね。

前田河。適評なんだけれども、その問題は局部々々に解決すべきものでそんなことは一般投票に依らないと思ふ。

永井。僕が、さつき質問した意味は、かうだ。——前田河君の言つたやうに、凡人が十分に發達しない社會に於て、片輪者、英雄といふものが出て來る、それだから、凡人の發達した社會に於て、英雄の必要はないといふ、その見方は面白いと思ふが、今の日本人はどうも凡人としては十分に發達してゐない。

前田河。それはさうだ。

永井。それから、一方、英雄、片輪者、さういふ特殊な人間も出てゐない。それはどういふ譯だと言ふのだ。

前田河。日本には、封建主義的思想がずゐぶん殘存してゐる。それでゐて、事實上、ヴオーツといふものを肯定されてゐる。これを自由討議すれば、これは普通のブルヂョアデモクラシーの發達した國に於ては、勿論いゝのですが、ところが、日本では或る程度まで、公然と發達してゐる。かゝる國に於て、一般レフエレンダムを行つたところで、必らず封建主義的な買收が行はれる。必らずそこには封建主義的のヴオーツの箝口令が行はれる。かういふところで、どうしてブルヂョアーデモクラシーが行はれるか。それでブルヂョアデモクラシーの發達しない所では、プロレタリアが發達しないといふことが第一段階になつてゐる。それはヒストリカリーに決まつてゐる。

山本。プロレタリアの代表者に就いての話を、向坂さん、一つお願ひします。

向坂。といふと、どういふことですか。

山本。つまり、無産政黨の代表者の、麻生君とか、大山君に就いての。

向坂。僕は、それらの人は餘り知らないのですよ。

菊池。向坂君は、合法黨を認めないんでせう。

向坂。認めないといふのはどういふ意味であるか知らないけれども、僕は恐らく大衆黨の、今度出來た、あの黨員だらうと思ふ。だから、合法黨を認めないといふことは少しもないが、實際知らないんですよ、どういふ人がどうなんだか、餘り人に會つてもゐない。

山本。しかし、今無産黨の代表者である大山君なり、麻生君なり、若くは安部さんなり、鈴木君なりで、どうですか、人物としては、兎に角相當に黨を展開させて行くだけの、或る優れたものを持つてゐると思ひますか。

向坂。僕は、知りませんね。

菊池。僕なんか、無産政黨の黨首は、金も無いし、何もないのだから、人格的の魅力や、雄辯で、グン／＼人の心を動かして、無産政黨に惹きつける人が出なくちや駄目だと思ふんです。やはり金の無い人たちは、さういふ力で黨を開拓する必要があると思ひますね さういふ點で、今の黨首連中は相當力がある。

馬場。ところが、安部磯雄氏は、餘り活動はしないけれども、社會民衆黨は安部さんの政黨だといふので、あれが一つの財産だね。財産といふことはをかしいけれども、國寶だね。

菊池。しかし、もう少し熱があつて、もつと活動しなくちや、無産政黨の黨首としては、足りないと思ふね。

杉村。僕は、安部さんなんぞが非常に惜しいと思ふのは、ユニテリアンをやつてゐる、あの時分には熱もあり、活氣もあつたから、あの時分に無産黨の首領になつてやつたら、非常にやれたらうと思ふ。やはり年のせゐだね。

前田河。あの時分にはやれませんよ。

杉村。やれないけれども、あの元氣のあつた時分に、無産政黨の運動をやつたら、餘程やれたらうと思ふ。

馬場。しかし、無産政黨は社會民衆黨だつて、東京はいゝだらうが、田舍へ行くと危險視せられる。その危險視せられるのに對して、危險ではないぞといふ風に、消極的の役目だけれども、さういふ役目が、田舍へ行くと、重要な効果があるのだよ。だから、その爲に社民黨に取つては、安部さんといふ人は國寶だね。

本多。それは確かにさうらしいね。

馬場。實際の働き、活動はしなくても、一つの……

本多。アセットだね、看板にいゝ。

山本。どうですか、長谷川さん、今の無産政黨の黨首に就いての御感想は。

長谷川。どのくらゐの程度まで、さういふ國寶が要るのか、日本の無産政黨にさういふ看板といふやうなものが、いつまで要るか、いつになつたら、看板といふものは要らなくなつて、黨首でも、實際に闘爭するといふ、闘爭の實力で行くといふ風な時代が來るか。これは獵て來なければならぬと思ふが。

馬場。それは現在に於ても、闘爭の實力といふものは、まだそれだけ効力があるのだ。例へば、麻生君なんかは闘爭の實力があると思ふね。實際、話をしても身體も強さうだし、太つてもゐるし、腕力もあるし、辯舌もうまいし、本當に無産政黨の黨首らしいのは、麻生君が黨首らしいよ。大山氏の學者肌よりは、麻生君の方が僕はいゝと思ふね、無産政黨の黨首としては。

長谷川。これからはとにかく實力のある人が黨首になるといふことになるだらうね。

馬場。けれども、黨が大きくなるに隨つて、やつぱり……

長谷川。社民黨くらゐになると、國寶が要るのかね。

前田河。長谷川氏は政治を否定するんぢやないか。

長谷川。それは、政治といふものに僕の學術的の定義を下して其政治組織、政治行動を否定する。

前田河。現在の無産政黨の政治運動を否定しませんか。

長谷川。それは否定しない。今日の歴史の過程に於て取つてゐる政治運動といふものを否定してゐるのぢやない。

馬場。永井君、大山氏の演説を聽いたかね。

永井。僕は病氣で、缺席中で聽けなかつた。

馬場。大山氏の演説が、議會内では非常に評判が惡いのだ。僕はあの速記録を讀んで、非常にいゝと思つた。非常にいゝと思つたんだけれども、實際の演説を聽いた連中に聞くと、どうも非常に評判が惡いのだ。

向坂。何處が惡いんですか。

馬場。チヨツト言へば、新しい言葉「これ以外の何者でもありません」といふ風な言葉は、あそこの聽衆は議員だから、議員の頭にはピツと來ないといふのだ。その點になると、片山哲君の演説の方が餘つ程議會化してゐるのでね、ピンと來て、なか／＼シツカリしてゐて、いゝと言つてゐたんだ、既成政黨の連中が……。

長谷川。あれは、大山君は議員に言つてゐる氣持はないのだ。議院外のプロパガンダなんだから、議員に評判が惡くても、打撃にはならぬと思つてゐる。

馬場。演説の筆記を見た所が非常に感心した。僕等が今言はむと欲する所をスッカリ言つて呉れたと思ふのだ。だけれども、あれなら別に勞農黨といふ黨派を拵へてゐる必要はないと思ふ。社民黨だつて、大衆黨だつていゝだらうと思つてゐるんだがね。

杉村。僕はアメリカの公使館に居つた時分に、議會の演説筆記の飜譯をやらせられたことがある。その時に、人の名は言はれないけれども、丸で文を成して居らぬやうな演説をした人が多くて、僕は屢々飜譯に困つちやつた。サブヂエクトが何處にあるかわからぬやうな日本語を使つて居る。實に下手糞の演説をして、これでよくやつてゐるものだと思つた。それから、これは褒める方だから言つてもいゝが、竹越與三郎君の演説は、これほど飜譯のしやすい演説はなかつた。それは先生は文章家だから、文章がチヤンとなつてゐる。けれども、先生の演説が、議會の名演説であるといふことを聞いたことがない。その時分には、だから、速記錄を見るといふことで、演説のうまいと言ふことは出來ないね。内容は、大山君の演説なんぞは、非常な早口で、聽いて居つて聽き苦しかつたといふことを言つてゐる。

山本。これから一つ、本多さん、あなたが外交社會にはいつてから、日本人でも、外國人でも、外交家で非常に出色だつたと思ふさういふ人の話をして下さい。

本多。いろ／＼な人に會ひましたが、世界戰爭中に、僕は天才的な男だなと思つたのはドイツのフオン・キユールマンといふ男です。これは杉村君も知つてゐるだらうと思ふが、戰爭開始當時には、ロンドンの參事官だつた。さうしてキユールマンはいろ／＼な陰謀をやつたといふ、非常な惡黨になつてゐるが、ところが、戰爭から引揚げて歸つて來て、オランダの公使になり、十六年には外務大臣になつたんだが、その男のやるのは非常に要領のいゝ、政策なんだ。僕等が見てゐると、先づベルギーは無條件還附をする。フランスに向つては、メッツの要塞くらゐまでは渡してやらうといふ、國境修正くらゐの意思を持つて居つた。フランスの方ぢや、大分それを頼りにしてゐたんだ。それで、ハッキリそこでやれたら、恐らく、フランスが單獨媾和まで行かぬでも、媾和論が非常に勢力を得て、クレマンソーが盛々上つて來るといふことが不可能になつたかも知れない。それから後になつて、ドイツの外務總務長官のフオン・シユーバートといふのが一緒にロンドンに行つて居つたんだが、私はそのフ

オン・シユーバートに、キユールマンは今どうしてゐるかといつて訊いたら、今遊んでゐる、妻君の方の關係の事業をやつてゐるが、君は御承知だらうと言ふから、實はよく知らないのだが、一度會ひたいと言つて、頼んで、それから二三日して會つたが、私はその時キユールマンに、どうも君の外務大臣時代の政策は良かつたが、惜しいかな、二年前まではイギリスの大使館附の參事官だつたといふので、參謀本部に向つて押しが利かない。けれども、君のあの政策は非常に良かつたのだ。あれで行きさへすれば、フランスも大分惹きつけられたのだと言つて、非常に同情したが、どうもいゝ考へを持つて居つても、やはり條件が備はらぬと、出來ないのだね。それで軍閥に押へられて、ブレストリトウスクの條約に、キユールマンが判を捺した。だから、どんなにいゝ頭と腕とを持つて居つても、そこに一つの特殊な條件が要るのだね。かういふ風に條件が備はらない爲に、腕を十分に發揮できなかつたことは、ずゐぶんあるだらうと思ふ。

前田河。それはさうと、本多さん、あなたに伺ひたいのは、ブレストリトウスク講和談判、あれは外交上どういふ風に考へますか。全然失敗だつたと思ひますか。

本多。ロシアの立場から見れば、大成功ですよ。

前田河。ブルヂヨアの方から見ると、どうですか。

本多。ブルヂヨアの方からかどうか知らないが、あれはキユールマンが軍閥から餘儀なくさせられた條約です。主な意味は、ウクラインの穀物やら食物、軍需材料をドイツに取らなければならぬ事情にあつた。さうしてウクラインの軍事占領で、何も彼も取つて來なければならぬ所へ、あのゼネラル、リヴオルトが起つたといふわけになる。あれは軍閥がキユールマンを抑壓して作らせたものなんです。

前田河。つまりあの社會運動といふものを知らないでやつたんですね

本多。ドイツの參謀本部ぢや知らなかつた。

山本。日本の今度の問題と、昔の小村さんたちの時の海軍條約と、軍閥とのいろ／＼な關係に就いて、感じたことがありますかね。

本多。私は今日本に軍閥があるかといふことを疑問に思ふ。國防方面の人達を悉く軍閥だといふのは、非常に無茶で、僕は軍閥といふものに一つの定義を持つてゐる。軍閥とは何ぞやと言へば、國防機關内に於ける自己、若くは自己の屬するグループの勢力を以て背景として、政治的に、己れ、若くは己れの屬するグループの權威を張らうとするのが軍閥で、それはもう田中君でお仕舞ひだと思ふ。それ

だから、軍閥々々と言つたつて、國防は國民が皆兵義務でやつてゐることだし、みんなそれで奉公してゐる人間だから、一把一束的に、軍閥々々と言ふのは、少しターミノロジーがエクザクトでないと思ふのだ。私は、今度の問題の如きは、國務の處理問題で、軍部と膝をつき合せてやればやるべき途があつた。あれが時事新報の所謂ターン・コーナーをやつたんだ。若槻君であつたら、あんなやり方をやらなかつたらうと私は思つてゐる。

山本。若槻さんだつたら、もつとうまくやつてゐるといふのですか

本多。私はさうだと思ふ。トクと議論もし、協議もしたらうと思ふ　あれが西洋の政治家なら、堂々と議論をする。さうしていけない時、頑張る時には、辭表を出す。それが立憲政治家のやることで、さうしたら何とかまとまつたかも知れぬ。あの狀態で、面倒臭いからまアやつちまへといふ、あそこに一つ無理があつた。その無理をした上に、また無理をやつたんだね。若槻君なら、まだ別のやり方に出たらうと思ふね。これは政治論になるから餘り言はないが、兎に角、あれが、なぜ內閣を投げ出すことを恐がるかといふのだ。ドン〳〵總辭職々々々で行く度びに、議院政治家の地位が强くなつて行く筈だ。

杉村。それが日本ぢやどうも投げ出せない。軍閥と喧嘩をしても、投げ出すといふ覺悟でやればいゝと、われ〳〵は始終思つてゐるが、どうも總理大臣になるといゝものと見えるね。

本多。そこになると、藩閥官僚時代は、黒田、伊藤でも、西園寺でも、堂々と投げ出したよ。

馬場。しかし、今投げ出して、政友會の內閣が出來ちや、何をやるかわからぬといふこともあるだらう。

本多。この間、民政黨の或る少壯政治家が、私の所へやつて來たから、さう言つてやつた。君達は早く投げ出す方が得だ。投げ出せば、必ず復た捲土重來の機會といふものが自然に早く來るものだ。最後までやつて、壇の浦まで來てしまふと、なか〳〵再び機會は來ない。それから、若い奴は、政變が早く來る方がいいぢやないか。內閣に入つてゐる人は、此次なれるかなれないか、もうなれない人もあるから、君等の番も早く廻つて來るんぢやないかと、これは冗談ですが、私は、なぜもう少し綺麗にサッサと投げ出さないかと言つてやつた。

向坂。一體、なぜ投げ出さないのですか。

本多。黨首自身として、さういふ意思はあつても、黨のシステムの一部たる總裁でせう。選擧費用も黨の人が工面するし、何も本人が偉くて、なつたんぢやない。黨の總裁で、廻つて來た政權を拾つて、

そして黨の利益を代表してゐるといふのが、今の總理大臣の立場ぢやないかと思ふ。これは政友會でも、民政黨でも同じことだ。だから、どうしても個人的の意思で發動することは出來ないのだらう。

杉村。それはイギリスだつてさうだが、イギリスはパッと投げ出す時には投げ出す。

永井。それはレーニンが共產黨の獨裁政治を樹立するのも、それからムッソリニがファシストの獨裁政府を維持してゐるのも皆同じ心理です。外から見ると、早く投げ出して、別人が取つて代る方が宜さように思ふけれども、本人自身は行ふべき或るものを持つてゐる、又、自分が行はなければならぬといふ信念があるので、それはさう簡單には行かない。

本多。それはわれ〳〵のフレンドたる永井君自身の心事として聽いて置かう。

前田河。永井君の議論には異論がある。これに無產階級と有產階級と混同した議論は成立せぬと思ふ。――レーニンのプロレタリアの獨裁と、ムッソリニのファシスト獨裁とが、傾向的に言つて、永井君の言ふやうに、その現象は決して同論すべきものぢやないと思ふ。兩方出現する動機はあるが、しかし主觀的に、理論的に違ふ。

向坂。客觀的に違ふ。

前田河。それは辯證法的に解釋されなければならない。

永井。それはさうだらう。兩方とも獨裁政治を維持して行かうとする、動機も違ふ、理論も違ふ、それから基礎勢力も違ふ。しかし、自分の獨裁政治が時代の要求に對する最適の政治形態だと云ふ主觀に異りはないと思ふね。

向坂。問題は、どつちが正しいかといふのです。

永井。それは各自の意見の相違だ。

向坂。議會なら意見の相違で通るけれども。

本多。これは正しいとか、正しくないとかいふ問題ぢやない。

永井。大衆の利害の爲に、國家の存立意義のために、自分が闘ふて居るといふ根本精神は同じだ。しかし、それをどう闘ふべきかゞ人に依つて違つてゐる。

向坂。根本精神が同じでも、何んでもない。或る社會の、或る集團の利益を代表してやつてゐるが、その社會の進步を齎らす集團、階級の利益を代表してゐるかどうかといふことに依つて、つまりどつちが正しいかといふ問題にひつかゝつて來るんです。

馬場。それは誰れが判斷するのかね。

向坂。僕等が科學的研究によつて、僕等が客觀的判斷をする。話が馬鹿に理窟つぽくなりますが、それは僕等が判斷するより外ない。つ

まり客觀的の事實と一致してゐるかどうかといふことが決定される。問題はそこだ。例へば、濱口さんが日本の全民衆の利益を代表して自分は闘つてゐるとされても、しかし全民衆の利益を代表してゐないといふ客觀的の事實が出て來る事をどうにも出來ない。

永井。それは君等の立場からそれを指摘して、濱口内閣とレーニン政府と、その政策の根本となる理論に多大の相違がある、といふことを批判することは自由だが、各々自分達の政府が大衆の生存と幸福との爲に闘つてゐるといふ信念を持つてゐることは同じだ。それで内閣を投げ出さないのだ。

馬場。信念だけぢや何の役にも立たない。それはつまり大衆がそれに贊成するか、しないか。それは二百七十餘名の多數を持つてやるから、やれるけれども。

永井。その議會の多數で、その信念が、裏書きされてゐるぢやないか。

前田河。それは濱口が投げ出す、投げ出さないの問題ぢやなくて、日本の無産階級がどんなに苦んでゐるかといふことに依つて、決定されるだらうと思ふ。

本多。永井君は信念論で行つてゐるが、私もその點は諸君と同じことです。濱口君の主觀と客觀と一致するや否やといふ問題がまだ殘つてゐるぞといふことを言ひたい。

永井。その批判は、諸君の自由だ。

本多。われ／＼は局外の國民の立場にゐると思ふが、日本の今の議會政治も、まだ創造の初期なんだから、これからだん／＼良くなるでせうが、今のやり方で、我々が憲政のチヤムピオンだと言はれちや堪らぬ。私は中野正剛君は友人だが、いつか或る若い代議士を連れてやつて來たから、言つてやつたんだが、君等は憲政常道々々々々と言ふけれども、日本に憲政の常道が行はれてゐると思ふかい。私は熟々感じてゐることがあるのだ。それは、日本は、世界に無比なる警察國だといふことを日々に見せつけられてゐる。國民生活の如何なる表現でも、ポリスのコントロールを受けないことはない。子供が自轉車を買ふ。直ぐに淀橋署とか目黒署へ行つて、鑑札を受けなければならぬ。床屋へ行つて見ると、巡査がやつて來て、君の所ぢや消毒をしてゐるだらうなと言ふ。これは一種の脅迫です。まア丸山君はイギリスにゐた時から懇意にして、親切も盡したんで、あれはわかつた警視總監だと思ふのだが、如何です。この間蕎麥屋を集めて、十錢は高すぎる。五錢にしたらどうだと、どうも弱い者の商品の相場までも警察力で干渉するといふやうな國に、外にはありません。それから選擧となれば、選擧の自由といふものは日本には

ありませんね。それで營業でも何でも、みんな警察一つ……郡役所といふものが無くなつた爲に、警察が國民生活の殆ど全部を監理することになつてゐる。それからもう一つ中野君に言つてやつた。憲政の常道が行はれてゐると言ふが、銀ブラをやつてゐると、背後から變な奴がやつて來て、中野先生ですか。誠に恐れ入りますが、警視總監があなたにぜひお目に懸かりたいことがあります。あそこに自動車が待つてゐますから、一緒に來て下さいと、自動車で連れ込まれて行つて、二十四時間ぶち込まれたら、それつきりだらう。そんなことが憲法國で行はれてゐるんだ。君等の憲政常道といふのは、政友會と民政黨とが交互に内閣を取るプラクチイスが行はれてゐれば、それでいゝんだらうが、憲法の保障する自由も財産も、法律の規定に依らずして侵されるといふことでは憲法政治に成つて居らぬ。それから營業の自由の制限も無闇に行政命令で日本はやる。私は日本の憲政常道なんといふのはまだなつちや居らぬ。今の帝國憲法で與へられた個人の權利、自由は勝手に制限されて居る。これが政黨政治になつて、警察が政黨化したので、弊が一層酷くなつてゐる。

山本。これはかういふ意味になりはしませんか。警察が干渉して仕様がないといふことは、國民の總てが自己批判をもたないと云ふこと……だから批判と見識とを養つて行けば干渉なぞといふことはなくなる、また眼中におく必要もないと云ふことになる……。

本多。政黨方面で氣をつけて、警察政治の弊を直して貰はければならぬ。一體行政警察なんぞは、六大都市あたりは市でやつていゝ。

前田河。僕等は無産階級の立場から見ると、さう思はない、それは早すぎた資本主義の發達と、それから日本の官僚主義と結び附いた一つの現象だと思ふ。ファスシスト化の一つの實に早い現象だと思ふ。

本多。日本の政黨政治の現狀は無意味な天下取りの爭覇戰に過ぎない。

前田河。官僚主義の態度、官僚政治の今までやつて來た「治むべし、知らしむべからず」といふ、それとの結び附きから斯くして民衆を××× ことに依つて、ます〳〵××××××××××して行くより外はない。それは一つの彈壓だ。その癖、日本の資本主義は根本的には發達してゐない。御承知の通り、あさはかなものです。三井、三菱だつて、外國へ行つたら三流どころです。漸く二流くらゐにはなれるかも知れないが、さう威張れるものぢやない。これほど淺薄な資本主義が、斯く××を全うし得るといふのは、實際日本は小さな島であつて、ポリスが間斷なく看守つてゐるからで

す。これは非常に安全なことであつて、×××××××××××××××。これを徹底的にやつたら、××××。

長谷川。本多さんは、アメリカなんぞは、かなり憲政が發達してゐると見てゐますか。

本多。日本の人は大體さう見てゐるでせう。

長谷川。あなたはどうですか。日本よりは發達してゐると見ますか。

本多。さうです。

長谷川。ところが、アメリカはコムミユニズムに對しては、日本以上にやつてゐます。

本多。コムミユニズムはバチルスと見てゐる。バチルスは除かなければならぬといふ、アメリカのコムミユニズム觀がそれです。

長谷川。アメリカもイギリスも、ファシスト政府もそれをやつてゐるぢやないですか。だから、同じことを、日本もやつてゐるので、特に日本が官僚主義だからやつてゐるといふ譯ではない。もつと自由主義の國もやつてゐる。

本多。思想のアレぢやない。われ〳〵の日常國民生活の殆んど全部が警察のコントロールを受けて居るといふことだ。明治時代よりは、警察の力が非常に擴がつてるやうだ。

長谷川。向坂君の質問が、問題が外れてしまつたから、もう一ペン質問し直したらどうだ。

向坂。もう止めます。

山本。さつきの雄辯論を展開しよう。大山郁夫氏の演説は速記の上では良かつたが、議會内では評判が悪かつたといふ。然らば、今後の雄辯といふものは、果してどういふやうな種類の雄辯といふものが國民を率ゐて行くことが出來るか。今までの所謂指導的の雄辯といふものがどれほどまでに今後力を持つて行くことが出來るかといふことに就いて、雄辯の研究をしたら面白いね。

本多。それは永井君の専門だ。

杉村。僕はもう歸りたいから、その前に一言したいと思ふ。演説とか舌の力といふものは、これは日本に限らないが、世界はだん〳〵變化して來てゐる。最初は演説を聴く人だけに聴かせて、その聴衆さへ感動させればいゝといふ時代であつた。それは日本の議會でも、イギリスの議會もみんなさうだつた。ところが、新聞雑誌の發達と共に議會の中ばかりで聴いてゐる人を感動させるに非ずして、更に全國民に對して感動させるやうなものでなければならぬといふことになつて來て、議會の演説も議會内に止まらずして、全國に行き亘るやうになつて來た。そこで、その意味から言ふと、今でもよく衆議院あたりで速記録へ載せるから、これは省略するといふので、喋

らないのがよくある。あゝいふ風に口で言ふことを筆で現してしまつて、それで間に合はせるといふことで、速記錄とか新聞に委せるやうになつて來て、口で言ひ表す演說といふものゝ力が餘程減つた。そこで、雄辯といふやうなことは前代のことであつて、これから先きはさう雄辯といふものゝ必要はないのぢやないかといふことを一時考へたんですが、ところが、ラヂオが出來てから、これが再轉してたゞ筆に表したものばかりでなく、やはり口で全國に傳へるといふことが出來るやうになつて來たので、これから先きの雄辯なるものは、やはり一つの演說會若くは議會内の聽衆ばかりを相手にするに非ずして、全國の人間を相手にする演說でなければならぬやうになつた。それで、初めに小さい會場内の聽衆のみを相手にして來た演說から、今度は全國民を相手にして、全國民に訴へるといふ趣旨の演說が發達して來るんぢやないかといふことを考へますね。

菊地。僕は、演說で、實感のない演說は嫌ひですね。實感があるか無いかで演說が決まる。僕は實感のない演說はどんなに上手でも聽いてゐられないですね。此處にゐる人を賞めるのは變だけれども、馬場君の演說は新時代の雄辯だと思ふ。

馬場。僕が問題になつたから言ふんぢやないけれども、演說の效果は、今杉村君が言つた如く、速記錄とか、ラヂオとかいふものは第二義的のものであつて、本當の效果は、だん／＼かういふ風な社會になつて、モッブを如何に動かすかといふことにあると思ふ。それは幾ら文章をうまく書いても、それでモッブは起らないのだ。それ等のモッブはやはり、演說で、直ぐその場で聽く演說だ。それには僕等が不適當なので、永井君の演說なんか、それがモッブ化する點に於て、永井君の演說はうまいと思ふね。僕は、此處で永井君に面と向つて褒めるのはをかしいけれども、永井君はやはり雄辯家としては第一流だと思つてゐるんだ。議會で以て演說するなんて、そんなことはどつちでもいゝんだ。野天でやつてゐる時なんか、調子が上つて行つて、聽いてゐる者はヂッとしてはゐられなくなる。僕等は、ずゐぶん演說を自分もするし、人のも聽いたし、演說を聽くことに於てはすれつからしなんだ。どんな大抵の演說を聽いても拍手したことがないんだ。それが永井君の演說を聽くと、ウッカリ拍手してしまふ。あとで馬鹿々々しいと思ふことがあるんだけれども、調子が高調して行く所は、どうしたつて、これなら千人とか二千人とか日比谷公園に集まつて、永井君が出て來て、これを引つぱつて行かうと思へば、行くことが出來る。その演說の本質的の效果、意義といふものが其處にあると思ふのだ。やはりその點に於ては、永

井君みたいのアジ氣味な……アジ氣味と言つちやをかしいけれども、まあアジのあるものでなくちや面白くないと思ふのだ。

前田河。トロツキーが四時間も五時間も聽衆に向つてやる。さうしてそれを倦きないで聽くロシア民衆も亦大變なものださうですよ。これは會場に出る花道から喋つて行く。さうして五時間くらゐ喋る。その聲たるや、所謂J・O・A・Kの聲よりももつと間隔は大きい。「ワ、タ、ク、シ、ハ」とユツクリやる。それで二三萬の群集を相手にしてやつてゐる。たゞそれは自分の立場から喋るのです。永井さんは永井さんの立場から言ふんですが、トロツキーはトロツキーの立場で言つてゐる。

馬場。永井君の前に於では、尾崎行雄が雄辯家だつたね。

前田河。あれはフオルマリズムだ。

菊池。僕はいつか加藤高明や原敬の演説を聽いたんですが、僕は聽いて居られたですね。さうして感心した。餘計なことを少しも言はないで、理路整然としてゐる。僕はあゝいふ演説が好きだね。

馬場。君は理智的だから。

水井。僕は菊池君と同じやうに考へる。やはり雄辯といふものは技術ぢやないと思ふ。やはり理智的に、又感情的に、その云ふ所が大衆の要求に觸れなければ、大衆を動かすことは出來ぬと思ふ。

前田河。それは藝術的だと思ひますか。

永井。藝術的だと思ふね。僕自身は、いつでも馬場君の演説に非常に動かされる。僕は屢ゝ馬場君にもさう言つたのであるが、馬場君の演説には、他の人々の演説より深いものがある。それで演説會に辯士を頼まれると、よく馬場君を褒めてゐる。

長谷川。お互ひに褒め合ふのはをかしいね。

馬場。だが永井君のは定評があるのだから、これは別だと思ふ。僕は本當に褒めるんだが、しかし、さういふ意味で、大衆に愬へることは、これは書いたものでも何でも出來るけれども、感覺に愬へて飛び出させるといふのは、そこに一つの演説のアレがある。

山本。長谷川さん、どうです。今後民衆政治に於ける辯力といふものに對する意見を一つ。

長谷川。今の馬場君のは感覺派だね。つまり、感覺に訴へる性質が強い、モツブに愬へるやうな感覺を持つてゐる演説がいゝと言つてゐる。菊池君の方は理智派で、理智に愬へるやつがいゝと言ふ。これはどうも聽衆と、時代とでいろ／＼でせう。藝術が、やはり感覺的な藝術が榮えた時代と、理智的な藝術が榮えた時代とあるから、それ／＼場合によつて兩方ともいゝんだらうと思ふがね。ところが今後の、今の山本君の話で言ふ、これからの演説といふやつはどつち

になるか、單純に感覺的のやつは餘りに藝術的になつてしまふ。さうしてつまりその時の感覺は非常にいゝんだけれども、あとで腹が立つ。さういふ演說を聽かされると、それに動かされたことに反感を持つんだ。だから、これからのやつは、大衆に愬へる場合はその愬へてゐる階級の理智に對しても同時に愬へなければならぬ。やはり藝術もさうだらう。プロレタリアの藝術でも單純に感覺派の藝術でないのだから、だから演說も感覺と理智に、愬へて、時と場合どちらを主とするかといふことになるだらう。それは感覺も持つてゐないといけないが、やはり階級的理智に愬へてゐないと駄目だと思ふ。永井君の演說も感覺的だらうが確かにブルヂョア階級の理智にも愬へてゐるだらうと思ふのだ、つまりさういふブルヂョア社會のモップを動かす力があるならば、それは單純に感覺的のものぢやないと思ふ。

永井。やはり思想と熱意が必要だと思ふね。

長谷川。自分が階級的意識を或る意味までシッカリ持つてゐなければならぬと思ふ。だから、これはどつちとも言へないだらうと思ふのです。やはり菊池說も馬場說も、兩方必要ぢやないかね。

山本。向坂さん。どうです、あなたのマルキシズムの立場から。

向坂。僕は演說が下手なんで‥‥

山本。辯舌が政治に於けるどれだけの重要さを持つかといふことを‥‥‥。

向坂。辯舌は自分の考へてゐる意思をハッキリ民衆に愬へるといふ意味でなら‥‥

菊池。しかし、この頃の議會で演說が効果があつたといふのは、新渡戸さんだけぢやないですか。ほかの演說で、議事の決定が動いたといふ演說はチットモないぢやないか。

永井。先程、馬場君が大山君の演說が、議會の中よりも議會外の大衆を目標にしたといふことを言つたけれども、大體今日の議會の演說は、みんな議會外の大衆を目標にしてゐる。それは今菊池君の言ふたやうに、議會內の採決は、演說に依つて動かないといふが、それは議會が開會になる前に、幹部會か代議士會で大體決定してゐる。それだから、議會の演說が採決を左右するといふことは、事實に於て殆どあり得ないことです。

本多。新渡戸さんの演說も、衆議院ぢやあの効果は現せない。

永井。それで議會內の演說は大體その黨派の決定が正しいといふことを院外の大衆に愬へる爲に行はれる演說だ。だから、その點に於て、大山君の演說も、ほかの代議士の演說も同じだと思ふ。

馬場。大山君は議會外の勞働大衆に對して演說をしたんだね。

永井。大山君の演說はやはり理智的の演說だ。同時に詩人でもあつたんだから、詩人的の情熱も多分に持つてゐる。僕は大學時代、大山君と同級生だつたが、學生時代は、新體詩も書いたし、熱心なクリスチヤンでね。日曜日に試驗をすると言つたら、私は日曜は教會に行かなければならぬから、落第しても、試驗は受けませんと言つたくらゐの熱情家だつた。さういふ熱情がやはり大山君の演說に現れてゐると思ふ。

山本。永井さんは、議會政治家になつてから、反對黨の辯說に感心したのは、誰れですか。

永井。政友會よりも、無產黨の代議士に多い。

向坂。尾崎行雄なんといふ人はどうですか。

本多。うまいが、型は決まつてゐるね。

永井。尾崎さんの演說は、たしかに上手だ、感心する。然し此頃は思想的に、どうもピッタリ合はぬことが多い。

山本。永井さんが無產黨の演說に感心するといふその根本には、既成政黨に感心しないといふ反對の氣持があるのですか。

永井。既成政黨にも雄辯家は澤山居るが、社會の缺陷を指摘するやうな時は、無產黨の演說は的中してゐる。それであるから、聽いて居つてどうしても感動させられることが多い。

前田河。國際的にはどうですか。ありませんか。

永井。僕はやはりマクドナルドの演說は、非常に感動した。

前田河。國際的に、無產黨の演說に感心しませんか。

永井。それは現代の社會組織の缺陷を、國際的にも、國內的にも、もつとも深刻に指摘してゐるのはやはり無產黨の人々の演說です。それだから、それは從來の議會の演說で多く聽き得ない所だね。それで僕は聽いて感動することが一番多い。

前田河。もつとさういふ人を殖やしたくはないですか。

永井。無產黨の代議士が出ることは非常に結構と思つてゐる。

前田河。僕もさう思つてゐる。

永井。だから、われ〱が普通選擧を叫んだ理由の一つも其處にある。

山本。さうすると、無產黨の演說に感心するのが多いとすれば、あなたは無產黨に身を投じて自分でそれをやらうといふ氣は起らないですか。

永井。社會組織、經濟組織の缺陷を發見して、それを指摘する點に於て、無產黨は確かに深刻だと思ふが、それに對する現實の對策は、われ〱は無產黨の人とは違ふ。そこがわれ〱と無產黨と違ふ所だ。しかし、僕は今議會で演說を聽いて居つて、無產黨がいろいろ

分れて居るが、何故に分れてゐなければならぬかといふことは理解出來ないね。丁度無産黨の人々が、既成政黨はなぜ政友會と民政黨とに分れなければならぬかと奇怪に思ふと同じやうに、われ／＼もまた無産黨が、社會民衆黨とか全國大衆黨とか、勞農黨とかに分れて喧嘩しなければならぬ理由は、議會の演説を聽いたゞけではわからない。

(杉村氏退席)

向坂。それもわからぬが、しかし、既成政黨の民政黨と政友會の分れてゐる理由に就いては如何ですか。

永井。これは、やはり從來の傳統、歴史、それに感情だね。これが主要な原因になつてゐる。

向坂。政策の問題ぢやないのですね。

永井。政策の距離は比較的少いが、例へばわれ／＼が普通選擧を叫んだ時に、政友會が反對したといふ場合には、非常にハッキリしてゐる。それから政治組織や經濟組織の問題に對しても、民政黨は大體リベラル、政友會は概してコンサーヴアテイヴな感じがある。

向坂。僕等はさういふ風に考へてゐませんね。

山本。どういふ風に考へてゐますか。

向坂。大體根本に於ては二つのものは同じだといふ風に考へてゐる。それは多少色合ひが違ふかも知れないが、政策を行ふ場合の、根本的な點になると、やはり同じになると思ふ。

永井。民政黨と政友會の違ひは、傾向的に見ると、リベラリズム又はラヂカリズムとコンサーヴアテイズムとのやうに思ふ。

菊池。しかし結局民政黨の自由主義の人と、政友會の自由主義の人たちが集まつて、新しい政黨は出來ないですか。

永井。さういふことも將來あり得るかも知れないが、今日はまださういふ兆候は見えない。

菊池。僕はもう五六年すると、既成政黨にゐた人が、無産黨に轉換するのが、かなり出來はしないかと思ふ。さうすると、無産黨の勢力が急に大きくなるのぢやないかといふ氣がする。

永井。それはあるかも知れない。兎に角今日でも、既成政黨中にソシヤル・デモクラットがゐる。それは社會民衆黨と根本觀念に於て殆ど共通してゐるやうに見ゆる。それだから、將來何かの機會に、さういふ分野の變化が起つて來ないとも云へぬ。

向坂。しかし、さういふ所から無産黨の勢力が大きくなるとは思はれない。又望ましいかどうかも知らない。

菊池。結局、プロレタリアの自覺といふよりも、さういふ風になつて政治的に勢力を得て行くんぢやないかと思ふね。プロレタリヤの自

覺なんか遲々たるものだ。本所深川の方面なんかちつとも左傾してゐない。

前田河。それは現象ばかり言つてゐるんぢやないか。兎に角、あの本所、深川でやつてゐる社會局の施設を御覽なさい。如何にしてブルジョアがプロレタリアに働きかけてゐるか。本所、深川はどんなに××だかといふことをわれ〱は感じてゐる。テントを作つて、人を休ませてゐる。何の爲にそんなことをするのか。何萬といふ人間がテントも作つて休めないでゐる。そこへ持つて來て社會局の施設であるといつて、テントを作つて、何百人かを入れて、それで濟ましてゐるんだ。かういふものは、その一端だけ見たんぢや、迚もわからない。だからさういふことを言はせて、ソシヤル・デモクラテイックなことであると、滿足させられちや大變だ。それより寧ろ彈壓が欲しい。これが一番教訓ですからね、丁稚小僧が窘められると同じことですから。

馬場。若し、前田河君が政治小說を書くとして、日本で誰れか題材を取らうとしたら、どういふ風な人間を取りたいかね、政治小說の題目になるやうな人間は。

前田河。それは幾らもありますよ。第一、深川の小市民を取つてくればいゝ、煙草屋の親爺でも。

馬場。君が蔣介石を書いたりなんかしたやうに、或る一つの人物を中心に書くやうなさういふ題目になるやうな人間はゐませんか。

前田河。幾らもあります。深川の小市民……

菊池。もう少し有名な人物……

前田河。それは困つたね。

山本。ムッソリニを書いたやうに。

前田河。それは小市民で結構ですよ。

馬場。しかし、小市民と言つたつてピンと來ない。

前田河。待つて下さい。私は何もあゝいふ風に蔣介石やなんかのことばかり書かうとするのぢやない。私は、日本のルンペン・プロレタリアでもなんでも、「太陽の黑點」でもさうだ。あれは何にも出來ない人間を書いてゐる。あゝいふのは永遠の失業者です。

馬場。政治小說といふものは、日本にはどうですか。

菊池。これから文士連中が政治に相當に興味を持ちかければ、政治小說といふものは發達すると思ふ。今までは政治といふものと全然離れてゐたからね。

馬場。犬養氏の「走馬燈」、あれはもう少し突つ込んで書いたら面白かつたらうと思つた。

永井。警察が先程の話のやうに、無產黨の演說會でもなんでも彈壓す

るとすれば、その結果は當然日本とか小說に、無產黨の思想がドシ〳〵表れて來ると思ふ。それはロシアが何よりも適切に證明してゐる。僕は米國で、前田河君に話したか何うか記憶せぬが、ニューヨークで片山潛君に會つた。さうして、昔の先生だから、一夕一緒に食事をした。その時に片山さんは、僕の家は國學者の家で、忠君愛國の思想は人一倍養はれてゐる。幸德秋水が大逆事件を計畫した時に、自分に內々話をしたから、諄々とその不心得を忠告してやつた。それだのに、警察は僕が非常な危險人物のやうに考へて、自分が雇はれてゐる先き先きへ來て、その雇主に自分を中傷する。それが爲に、僕は日本に居れば生活が出來なくなつて來た。それで僕は日本の政府なり、國家に××を懷くやうになつた。ニューヨークに來てからは、トロツキーがやつてゐた「クラス・ストラッグル」といふ雜誌がある。それをトロツキーがロシアに行つた後を受けて編輯をやつてゐる。今にトロッキーの革命が大成したら、僕はロシアへ行つて、ロシアの全權大使になつて、日本に出掛けて行つてやると言つて氣焔をあげたことがある。これなんかは××××××一人のコムミユニストを製造したのだと思ふ。

前田河。その片山君の話は、それは半分の話として聞かなくちやならぬ。それが×××××を說いたことは、まア××で宜しいとして、しかしそれを取るに至つた心理といふものは私にはよくわかる。實際を言ふと、アメリカ時代の同君についても、さういふことは事實上あの人はカモフラージとして云ふことがあるが、必ずしもその一擧一動そこまで眞實を言つてゐるとは思はれない。片山さんは元からさういふことを言ふ人だつた。それで、あなたに必ずしも本當のことを言つたんぢやないと思ふ。それは後の言動が示してゐる。モスクワへ行つて以來、片山君がどういふことを言つてゐるか、それがよく示してゐる。

山本。しかし、まア何れにしても、原理から入るのと、境遇から入るのと二つあるが、境遇から入るのが多いやうだね。

前田河。それはその方が多い。

菊池。さうして境遇から入る方が強くないかね。

前田河。それはさうだね。

馬場。今、片山氏がロシアの大使として來ても、日本の國權を脫しないから、捕まるだらう。

前田河。上海へ來ても、こつそりと歸るからね。

(長谷川氏退席)

菊池。マルキストは現在の國家といふものは認めないのですか。

前田河。認めますよ。

向坂。現にあるんですからね。しかし、その認めるといふのも意味の取り方次第でせうがね。

前田河。しかし、暫定的には認めるだらうね。

向坂。歴史的發展の一つの過程に國家があるといふことは、これは認める。その國家がどういふものかといふことは全く別問題だ。

山本。菊池さん、これは前田河さんの立場もあるだらうが、あなたの考へで、藝術的及びいろ〱な方面で、歴史に殘ると思はれるのは誰れですか。

菊池。僕は小説家なんかの方面では、それはかなり殘る人がゐると思ひますけれども、やはりかういふ世の中ですから、どういふ人が殘るか、今チョットわからないし、これがプロレタリアの世の中になつても、どういふ人が殘るか、實際わからないですね。

山本。前田河さんはどうですか。

前田河。私はさうは思はぬですね。私は人が殘るんぢやなくて、階級が殘ると思ふ、若し階級があるとすれば。それで人物なんか問題ぢやないと思ふ。これがまだ殘らないからこそ、トロツキーが偉い、レーニンが偉いといふのであつて、事實上、階級が本當にプロレタリア階級のそれだけの理想のものを出してしまへば、レーニンも、トロツキーも、單なる一つの功勞者になつてしまつて、偉人とか英雄にはならぬと思ふ。

馬場。しかし、將來の社會に於ては、プロレタリアといふ階級もなくなるのだらう。

前田河。それは理想だ。しかし、そこまでは、現在のブルヂョアの壓迫に對して、見ることは出來ない。それを今考へることは非常な反動です。だから、そんな危險は冒さうとは思はない。

馬場。しかしさういふことを實際言つてゐるんぢやないか。

前田河。さう言つてゐるのは武者小路だ。

馬場。これは武者小路ぢやない、レーニンも言つてゐるぢやないかね。

前田河。それはトロツキーだつて言ふことは言つてゐる。だが、それは將來のことであつて、現實を言つてゐるものぢやない。

永井。結局君達の階級鬪爭の目的は、總ての個性に完全なる自由を與へるやうな社會を作ることが目的だらう。

前田河。それまでは、個性をなくしても、鬪はうと言ふのだ。

永井。究局は階級が殘るのぢやなくて、解放された個性が殘る。

前田河。しかし、其處までにはかなりなストラグルがある。それをイージーな觀念を起せば、それは黨なら黨、或は團結なら團結といふもの丶規則があるのだから、それに依つて決められてゐる、これは

多年の經驗に依つて決められた規則であつて、そこまでは繰返さうとは思はない。

馬場。あの暴露小說といふものは、一體小說として價値があるものですか。

前田河。それは讀者に訊いて見なければわからない。われ〳〵にはチットモわかりませんよ。

馬場。價値があるやうにも思ふね、「眞理の春」でも。

前田河。價値があるなら、われ〳〵もやつて行かうと思ふ。それはあなた方に本當に訊かなければ、わからぬ。

菊池。それは、しかし僕等が思ふのに、やはり普通の通俗小說の方に喰ひ入つて來なければならぬと思ふね。「文戰」だとか、「戰旗」だとかいふ同人雜誌なんかは、讀ます必要のない人が讀んでゐて、讀む必要のある人には行つてゐないんだから。

前田河。ところが、あのイデオロギーを持つた人間は、君の程度にまで、大衆的に行けないのだ。それが苦しいんだよ。それは實際さうぢやないかと思ふ。――だが、作者が君の程度に行つたつて、目的は達しないんだ。世の中は××××××××の世の中にはならなければ行けないと思ふ。それ迄は鬪爭なんですよ。いまは過程ですよ。

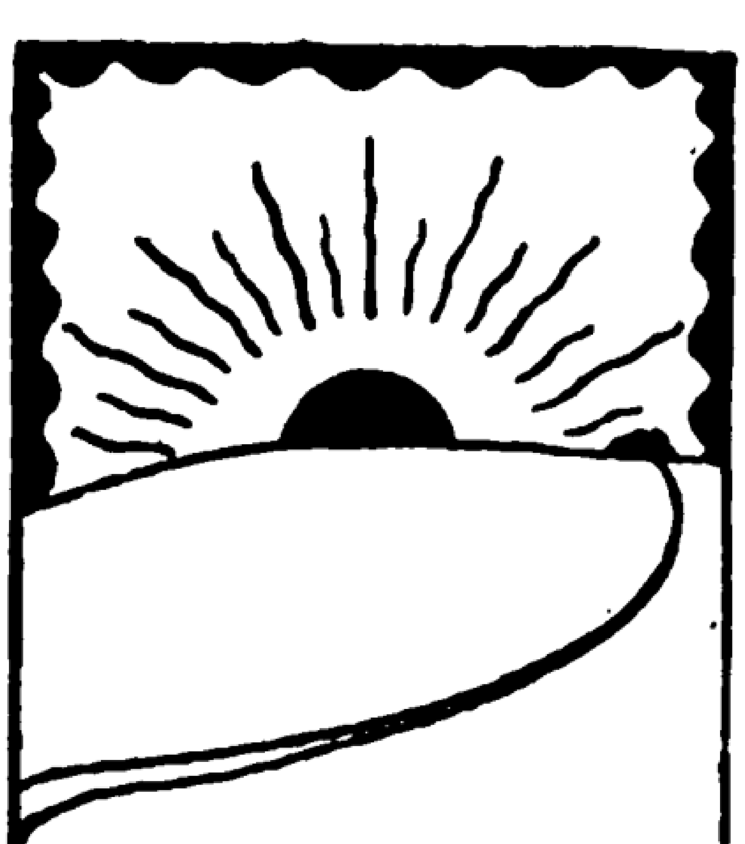
馬場。たゞ普通の素人の讀者として見て、プロレタリア小說といふものも、この頃確かに面白くなつたね。少しは讀みよくなつたね。けれども、まださう大して、面白くないね。やはり菊池寬の小說を讀んでゐる方が面白い。

菊池。しかし、それはプロレタリア文學の方にも才能のある人がだん〳〵働いて來るから、プロレタリヤ小說も面白くなると思ふね。

馬場。餘り論文めいたものを並べられると、ウンザリしてしまふね。

永井。僕は前田河君の書くものは、兎に角讀まうと努めるが、實際少し難しいよ。

山本。これくらゐにして、あとは雜談にしませう。どうも有難うございました。



現代二大富豪の閨閥網

白柳秀湖

第一篇　三井閨閥網の巻

『一』三井高利及び三井高平

三井家はその中興の祖と稱せられる八郎兵衛高利の時、八家に分れ、それが連綿として幕末に及んだが、明治に入つて更に三家を加へ、明治三十三年六月二十八日を以て成立つた新家憲の第一章で、將來分家をなすものがあつても、右十一家の外、同族の列に入ることを許されざる旨が、規定された。

新家憲成立の際に存在した三井十一家と當主との關係は左表の如きものである。

	總領家	本家					連家		新連家		
明治三十三年（新家憲成立當時）	三井八郎右衛門	三井元之助	三井源右衛門	三井高保	三井八郎次郎	三井三郎助	三井復太郎	三井守之助	三井武之助	三井養之助	三井得右衛門
現在	同人	同人	同人	三井高精	三井壽太郎	三井高修	三井高達	同人	三井高昶	三井辨藏	三井高光

次に右十一家の家格を知るには、三井家の歴史に遡り、三井八家の起源から尋ねなければならぬ。富豪研究は近頃の流行であり、三井十一家のことは、誰にも善く知られて居るが、巳

を壓迫してこれを放棄させようとする徴候が次第に著るしくなつて來た」と不安を感じはじめた。その具體的な現はれは、ソヴエト國民經濟の發展と共に熟練勞働者の缺乏が起り、そのため外國利權企業にたいする勞働者供給を制限し、賃銀の引上げを要求しだした――等々。

すべて「五ケ年計畫」が冗談でないことは事實の上で判つてきた。だが、資本主義の世界にまはりから圍まれてゐるソヴエト聯邦では、いつ何ういふ形で共産制社會が建設されるであらうか？

○

レニンは「新經濟政策へ退却するのは新らしい力と共に社會主義の建設へ――また社會主義のもつとも完成された形態としての共産制社會の實現に向つてすゝむ準備のためだ」――と言つた。が、凡そ何年の後にどういふ範圍で共産制社會を實現することが出來る――とは豫言しなかつた。

その後になつてスターリンは「一國内社會主義建設可能論」を唱へた。――現在ソヴエト聯邦を圍繞してゐる世界資本主義列國は、地球のどこかで社會主義國が存在することを喜ばないのは無論だが、資本主義列國がその特徴としてもつ帝國主義政策といふ相矛盾する利害關係と資本主義國内にゐる勞働階級の支持とのお蔭で、たとへ一國だけであつても社會主義國は資本主義諸國の包圍のもとに自分の存在をつゞけることが出來る、といふのである。××××が起らないでも、ソヴエト聯邦は單獨で――一國内で社會主義の社會を建設することが出來る、といふのである。このスターリンの理論によるとソヴエト聯邦における社會主義社會の實現といふ展望がやゝ近くに見えてくる。なぜなら「××××」を「社會主義社會建設」の不可分條件としないからである。

五ケ年計畫は、このスターリンの「一國内社會主義建設可能論」から出發してゐる。

が、スターリンも何年後にソヴエト聯邦一國内の社會主義建設を完成してそこに共産制社會を實現することが出來る、といふ豫言はしてゐない。今度の第十六回共産黨大會でも、彼れは「社會主義化に向つて異常なテンポで進みつゝある」――と言つてゐるが、この先何年間でこの進擊の目的地へ到達するか、を豫言してゐない。

けれどもソヴエト聯邦が社會主義化に向つて計畫的に進んで行つてゐる以上、そこではどういふ風に、何時までに社會主義化が完成して、共產制社會——または共產制國家が建設されるのであるか？といふ問題が立てられない筈はないと思ふ。

○

ソヴエト聯邦の「國家計畫委員會（ゴスプラン）」はこの意味において、現在非常に興味のある仕事に着手してゐる。

それは、「ゲネラリヌイ・プラン」——又は略して「ゲン・プラン」(大計畫案)——の作製である。

この「大計畫案（ゲンプラン）」は現在進行中の第一次五ケ年計畫の最初の二ケ年間の實積に立脚して、次の第二次五ケ年計畫とさらに第三次五ケ年計畫までを包括する前後十五ケ年間にソヴエト聯邦を「何處まで到達させるか？」——といふ詳細な計畫案である。丁度、レニンの大電化計畫を、國民經濟の全般に擴大する事になる。

この「大計畫案（ゲン・プラン）」は未だ完成されてゐない。未だ國家計畫委員會の內部で、學者專門家の間であらゆる方面からこの「大計畫案」、問題について活潑な討論が行はれてゐる最中である。(大計畫案は來春までに完成發表の豫定である)

現在論議の中心となつてをり、また最も强く我々の興味を惹くのは「十年——十五年の期間內にソヴエト聯邦內に共產制社會を建設し且つ技術と生產の方面でアメリカ合衆國を追ひ越す」——といふエヌ・コワレツスキーの案である。

○

コワレフスキーは「大計畫」案の結論で次のやうに言つてゐる。

一、技術と生產の方面で世界資本主義國中の最先進國に追ひつき且つ追ひ越す。

二、第一次五ケ年計畫(一九二八・九年度——一九三二・三年度)が終る迄即ち十月革命から十五ケ年間にレニンの立てた協同組合計畫を遂行して新經濟政策（ネップ）の目的を完了する。

三、第二次五ケ年計畫(一九三三・四年度——一九三七・八年度)で社會主義經濟形態に進展し漸次により完成した共產主義形態に轉向する。

四、十年——十五年間の再組織の結果として資本主義と共產主義の兩勢力が世界に共存するといふ條件のもとに許され

る範圍内で共産制社會の完成された形態を建設する。

この結論は、現在の第一次五ケ年計畫の二年間の經驗とソヴエト聯邦のもつ天然富源、技術的進歩、勞働力等を基礎としてそこに可能な發展過程を考察し、これをアメリカ合衆國の經濟發展と比較することによつて抽き出されてゐる。

例へばコワレフスキーは——アメリカ合衆國が一八五〇年から一九二五年までの七十五年間に達成した約二十一倍といふ生産増加を、ソヴエト聯邦は十月革命の日から二十五年間に達成する可能性があると指摘してゐる

また——第二次五ケ年計畫の終りの年である一九三七・八年度にはソヴエト聯邦の石炭、石油、鐵、機械工業、電氣工業、その他輕工業各部門の生産高は現時（一九二九年度）のアメリカ合衆國の生産高を凌駕する、そして次の第三次五ケ年計畫の終りの年までには、ソヴエト聯邦の生産増加率が爾後のアメリカ合衆國の生産増加率に比べて遙かに高度なことによつてこれを追ひ越すことが出來る、と指摘してゐる。

こゝではアメリカの生産が最新式技術の完成されたものと共に多くの舊式技術を併存してゐるのにソヴエト聯邦の生産技術が殆んど總て最新式のものを以て新規に裝置されること、勞働生産力の大きいこと等が强調されてゐる。

○

最後にこのコワレフスキーの案は、ソヴエト聯邦はこの大計畫期において、無階級の共産制社會を建設するけれども、世界ではまだ、舊い資本制と新らしい共産制とが共存する、だから、この共産制社會は、その最終形態たる××××に導かれるのでなく、外國からの間斷なき壓迫に抗爭するため必要な國家機構を保存するであらうといふことを指摘してゐる。これはスターリンの「一國内社會主義建設可能論」と全然一致してゐる。

かういふ大計畫案は、すべて第一次五ケ年計畫の實績を基礎としてゐる。そこで五ケ年計畫の實績はどんなものであるかを具體的に概觀しよう。

○

スターリンは第十六回共産黨大會でソヴエト聯邦と主要な資本主義國とにおける最近三年間の生産狀態を對照して次のやうに說明してゐる。

「最近ドイツの景氣研究所が發表した鑛業及び大工業を一括する工業生產統計によると、一九二八年の生產水準を一〇〇とし一九三〇年第一期のアメリカ合衆國の生產水準は九五・五であり、ドイツは九三・四、イギリスは一〇七・四であるが、ソヴエト聯邦は一五五・五を示してゐる。ソヴエト聯邦の工業生產が異常な速度で發展してゐるはこれで判る」

他の國家計畫委員會（ゴス・プラン）の調査をとつて見ると一九二六・七年度のソヴエト聯邦の國民總收入は二百三十一億留餘であるが、今年度――一九二九・三〇年には三百四十億留以上に達する。かく每年平均一五%の國民收入增加率を示してゐる國は、現在もつとも進步した資本主義國のうちにも例がない。

○

農業國から工業國への轉化といふ五ケ年計畫のプログラムはどういふ實績をあげてゐるか？

五ケ年計畫の第二年たる今年度に――ソヴエト聯邦では工業生產額が農業生產額を追ひ越した！　これはこの國の歷史に特筆さるべきことである。

戰前のロシアでは國民收入中の工業生產額は四一・一%であつた。五ケ年計畫の第一年――一九二八・九年度にもまだ工業生產額は四八・七%で僅かではあるが農業生產額の方が多かつた。ところが一九二九・三〇年度には工業生產額五三%弱――農業生產額四七%弱といふ比率を示すに至つたのである。

ソヴエト聯邦はもはや「農業國」とは言へない。「工業國への轉化」――の第一步に入つたのである。この年の農業の生產高は戰前の一一四%を示すに過ぎないが、工業生產高は一八〇%に增加してゐる。

○

五ケ年計畫の最重要問題である生產の社會主義化といふ過程はどういふ狀態で進んでゐるか？

まづ工業の方面について觀察しよう。――國の工業化に重心をおいてゐる五ケ年計畫では、生產手段の生產（重工業）に全力が注がれてゐる。

一九二七・八年度には――ソヴエト聯邦の工業生產中で生產手段の生產が占める比率は二七・二%に過ぎなかつた。他は悉く消費品の生產であつた。五ケ年計畫の第二年までにこれを三

二・七%に高めた。

ところで工業生産を社會主義化するといふ問題はどういふ狀態で進展してゐるか？

一九二六・七年度に社會主義化工業に投下された資本總額は――十二億七千萬留餘であつた。今年度は四十二億留餘――約三倍の増加を示した。私營工業への投下資本額はこの期間に六千三百萬留から五千百萬留に減少してゐる。社會主義化工業が、躍進的に勃興する反面に私營工業は凋落の傾向を辿つてゐることが判る。社會主義化工業の正味生産額はこの期間に百二十億留から二百四十億留に二倍以上も増加してゐるが、私營工業の生産額は四十億四千萬留から三十三億留に減少してゐる。

○

農業社會主義化の過程はどう進んでゐるか？

ソヴエト聯邦農業の社會主義化といふ問題は、現在やかましく傳へられてゐる「官公營農業（ソフホズ）」と「集團農業（コルホズ）」の組織と密接な連關をもつてゐる。「集團農業」は――ソヴエト聯邦特有の貧・中農の組合農業である。

ソヴエト聯邦の農業は今日まで――殊に新經濟政策以來ますます分散的・個人主義的經濟形態を持續してゐた。この農業狀態は國民經濟社會主義化の途上に横はる大きな障害だと見做されてゐた。事實、工業の方面ではその大部分が漸次に社會主義化された時に、農業の方面では壓倒的な大部分が個人經營のまゝで殘されて來たのである。

一九二八年に非常なパンの缺乏が起つた。穀産地方の一部の凶作にもよるが、他の大きな原因は、私營農民中の富裕層――いはゆる搾取農階級がソヴエト穀物買付機關の公定相場買上げにボイコツトした點にある。

そこで、官公營農業を擴張し、中・貧農の分散的な私營小農經營を大規模な集團農業に再組織して農業を社會主義化し、これを國家機關の中に統制するといふことが穀物問題解決の唯一の鍵だといふ結論に達した。

だから五ケ年計畫では官公營農業（ソフホズ）の擴張と集團農業（コルホズ）組織の獎勵に全力が注がれた。官公營農業はトラストその他の形で經營される非常に大規模な農業組織である。集團農業は中・貧農が農具や機械やその他の生産手段を共有として一種の株式組織でこれに加入し勞働單位と持株とにしたがつて收穫からあがる收

入の分配をうけるといふ組織である。

○

五ケ年計畫がこの二つの農業形態の發展にいかに盡したかは次の事實でわかる。

一九二七・八年度に、ソヴエト政府が官公營(ソフホズ)農業のために融資した額は六千五百七十萬留であつたが、今年度は――八億五千六萬留の融資をした。最近三年間に官公營農場の手へ新たに供給された耕作用トラクターの數は一萬八千台（三十五萬馬力）に達する。官公營農業機關の耕作面積は五ケ年計畫の豫定よりも遙かに激增した。五ケ年計畫によると――官公營農業の耕作面積は五年目の終り（一九三二・三年度）に五百萬ヘクター、穀物正味生產高は五千四百萬セントナーと計上されてゐるが、實際では第三年目たる來年度（一九三〇・三一年度）には八百萬ヘクターの耕作面積と七千百七十萬セントナーの穀物を生產することゝなつた。官公營農業機關のうちの代表的なもの――「穀粒(フレボ)トラスト」、「官公營農業中央組合(ソフホズ・ツエントル)」、「ウクライナ官公營農場聯合(ソフホズ・オブエヂネニエ)」、「砂糖聯盟(レソニズ・サーハラ)」等は、現在いづれも既に各百萬ヘクター內外の穀物耕地をもち「穀粒(フレボ)トラスト」の如きは一九三二・三年までに千四百萬ヘクターの耕地を一手に經營する豫定計畫をしてゐる。

○

集團農業化の過程はどうか？

この問題は近來日本の新聞等にもしばしば報道されてゐる。農民は非常な勢ひで集團農業經營(コルホズ)に轉向しはじめた。現在――五ケ年計畫の第二年目において既に五ケ年間に達成する豫定の一倍半といふ暴風的な發展を遂げたほどである。

一九二七・八年度に政府が集團農業化のために融資した額は七千六百萬留である。今年度一九二九・三〇年度には四億七千三百萬留といふ巨額が集團農業化のために融資された。ほかに搾取農(クラーク)退治の結果として富農から沒收された四億留以上に相當する農具その他の財產が集團農業組合の利用に移された。この事實のうちには集團農業化運動と農村における階級鬪爭がいかに尖銳な形で行はれてゐるかゞ鮮明に描きだされてゐる。

今年度中に集團農業用に充てられたトラクターの數はトラクター中央組合の七千台と官公營農場から集團農場のために供給された三萬台といふ多數に上つてゐる。また百三十萬頭といふ

馬匹を配屬する七千ケ所以上の農業機械・馬匹供給所が集團農業のために開設された。ソヴエト聯邦内の集團農業耕作面積は一九二七年の八十萬ヘクターから一九三〇年には三千六百萬ヘクターに――實に三年間に四十倍以上に激增した。戰爭や革命以上の大變革がソヴエト農村の到る所に捲きおこつてゐる有樣が想像される。

（このソヴエト農村變革の姿を一層親しく眺めたく思はるゝ讀者は近く刊行の筈である山内光氏の「アイゼンシュタイン作（古きものと新らしきもの）映畫物語」を讀まれることをおすゝめする）

五ケ年計畫のプログラムによると一九三二・三年度に集團農業から收穫される穀物正味生產高は一億九千萬セントナーの豫定であつたが、第二年目において既に二億五千萬セントナーに上つた。

その結果、官公營農業と集團農業――社會主義化農業が商品として市場へ賣りだす穀量は私營農業の商品穀量の五二％を占めるに至つた。

この點を指摘してスターリンは「曾て我々の五ケ年計畫を嘲笑した者は、今では自分の不明を自から嘲笑することになつた。我々は工業發展の五ケ年計畫を四年間で遂行し、農業社會主義化の五ケ年計畫を二年――二年半で遂行する！」――と言つてゐる。

○

かういふ經濟的變化過程のうちで勞農階級の物質的、文化的狀態はどういふ方向に進みつつあるか。それは可なり興味のあることだし、重要なことでもある。

國民經濟が社會主義化されるにつれて、國民收入のうちから××××××××××××勤勞階級の取前か增加するのは自然である。この勤勞階級の取前の增加は、現在のソヴエト聯邦の立て前では、一部は勤勞階級自身の私生活の向上に、一部は社會主義的生產機關の擴張に振りむけられる。五ケ年計畫では國民收入の非常に多くの部分が經濟發展のために動員されることになつてゐる。

現在世界各國は經濟恐慌のために生產の停頓や衰退と共に失業者の激增に惱んでゐる。ソヴエト聯邦ではそれと正反對の現象が起つてゐる。前に記すやうな生產の激增は主として生產

技術の改良によつて行はれてゐる。が、それでも勞働者の數はますます増加し、失業者の數は減少してゐる。殊に熟練勞働者の不足に惱んでゐる。　何らかの形で生産に從事する賃勞働者（智能勞働者を含む）の數は、最近三年間に一千〇九十九萬人から一千三百十二萬人に増した。この中で筋肉勞働者は七百〇六萬九千人から八百五十三萬三千人に増加した。更に大工業に從事する勞働者（事務員等を除く）だけについて見ると、二百四十四萬人から三百〇三萬人に増してゐる。一般賃銀勞働者は一九・五％、筋肉勞働者は二〇・七％、大工業勞働者は二四・二％の増加で、大工業勞働者の増加率が一番高い。生産にたづさはりうる者の失業者は極めて少ない。中央職業紹介所の調査によると、各種の企業からくる熟練勞働者に對する求人申込の八割まではこれを滿たすことが出來ない、と言つてゐる。熟練勞働者が非常に缺乏してゐることが判る。

○

國民收入の分配狀態にも最近數年間に可なり興味のある變化が起つてゐる。國家計畫委員會の調査によると、國民總收入のうち（一）他人の勞働を搾取しない勞働者及び農民の取前は一九二七・八年度の七五・二％から一九二九・三〇年度には七七・一％に増した。（二）この期間に搾取農(クラーク)と都市資本家の取前は八・一％から一・八％に減少した。殊にこの搾取農都市資本家の取前は一九二八・九年度の六・五％から今年度に至つて急激に減つたことは、特徴的な現象だと言へる。（三）手工業者の取前六・五％から四・四％に減少（四）國營事業の取前八・四％から一五・二％に増加した。

この統計は資本家的分子にたいする鬪爭と社會主義化の過程をもつとも雄辯に語つてゐる。ソヴエト聯邦では都市と農村の資本家的分子が國民總收入の中から取つて行く分量は最近三年間に四分の一に減少した。現在資本主義諸國では國民收入中の資本家の取前が××％乃至はそれ以上に達してゐる時に、この國ではそれが僅々××％であるにすぎない。

○

勞働者の實質賃銀の増加がどの程度に行はれてゐるか、といふことも社會主義化の過程のうちで重要な問題である。

企業側の負擔による勞働者社會保險、勞働階級の生活改善に對する國家の支出、母性及び嬰兒保護事業、文化教育施設等の

豫算增加と勞働時間の短縮は——勞働者實賃銀の增加を意味する。これ等の全體を計算すると現在ソヴエト聯邦勞働者の實賃銀は戰前の一六七％に增加したことになつてゐる。

勞働者社會保險の總豫算額は最近三年間（一九二七・八年度——一九二九・三〇年度）に九億八千萬留から十四億留に增加した。

母性及び嬰兒保護のために最近三年間に支出された額は約五億留に上つてゐる。嬰兒の死亡率はこの期間に四二・五％減少した。年に三百萬人づゝの人口增加が行はれてゐるが將來の經濟發展のために勞働力の過剩はおこらない……。

勞働者住宅の建築資金としてこの三年間に支出された額は十八億八千萬留である。モスクワその他の工業都市で近代樣式の宏壯な勞働者住宅が續々新築されつゝあることは、ソヴエト聯邦の經濟發展に今でも尙ほ疑惑の眼を向けてゐるツーリストの不思議の種になつてゐる。

○

とは言へ、茲に一つ社會主義化過程のうちに存在する重要な矛盾と缺陷を指摘することが出來る。それはソヴエト聯邦では今でも消費品の物價が割合に高いといふことである。

勞働者の生活消費品の配給狀態について言へば、國家計畫委員會の調査によると一九二九・三〇年度には既に內國市場の卸賣の九九％以上小賣の八九％以上が消費協同組合の手に統一されてゐる。コワレッスキーのいふ「レニンの協同組合計畫」は外形的には既に達成されてゐる。殘る不幸は唯だ內容にある。最近、消費組合機關の內部では商業獨占の結果として最近ますます官僚主義と、出來るだけ多くの利益を生む商品を賣りつけようとするネツプマン氣質が根を張つてきた。そのため勞働者は消費品の幾割かを比較的高い値段で私營商人の手から買ひ入れて需要を滿たすことになり、實賃銀の增收が或る程度まで減殺されてゐる。

○

七時間勞働日制と一週五日制は次第に工業勞働者の廣い層に擴大されて行つてゐる。一九三〇年五月までに一日七時制によつて働らく工業勞働者の數は約八十萬人に達した。また一週五日制で働らいてゐる勞働者の數は百五十萬人である。

○

五ケ年計畫の第二年目において達成された實績は概略右に述べたやうな狀態である。これ等の發展過程のうちでは古いものから新しいものへ進んで行く途中で必然的に起る色々な惱みや一時的な障害や缺陷にぶつかつてゐる事であらうと思はれる。一たび集團農業に組織された農民の一部が脫落して行つたり、資本家的分子の最後の抗爭が行はれたり、訓練のある幹部指導者の不足や素質の惡いことから仕事が部分的に失敗に終つたり……等々。

それにしても五ケ年計畫の力强い進行と本文の冒頭にあげたコワレフスキーの「大計畫」案に表現されてゐる「十年――十五年の期間內にソヴエト聯邦內で共產制社會を建設し且つ技術と生產の方面でアメリカ合衆國を追ひ越す」――といふ展望とを結びつけて考へて見ると、我々の眼の前へはもう何か「新らしいもの」が迫つて來てゐるやうな氣がする。（八月八日）

新刊紹介

◇**ソヴエト經濟建設五ケ年計畫**　大竹博吉編著・本書はソヴエト聯邦國家計畫委員會刊行の「ソヴエト聯邦國民經濟建設五ケ年計畫」の譯業で、現在世界的注目の焦點たる五ケ年計畫は日本でも興味の對象となつてゐる時、本問題の要約な好資料である。（東京麴町內幸町一ノ五・ロシア問題研究所・定價壹圓）

◇**日本經濟年報**　日本經濟最近の推移及日本を中心として見た世界經濟の推移を鳥瞰的に綱述し、今後三ケ月目每に發行するといふ本年鑑は時を得た好き企てである。（東京牛込天神町・東洋經濟新報社・定價壹圓）

◇**鹽と人生**　平林敏滋集　鹽全般に亘り其の原理應用を說いたもので特に鹽療法鹽の榮養價値に主力を注ぐ鹽に關する綜合的な最初の研究である。（東京神田區表神保町二・栗田書店發行定價八拾錢）

◇**社會主義か資本主義か？**　小池四郎譯・スノーデン・ロイドジョーヂ・マクドナルド等英議會大論戰の譯。（東京京橋第一相互館・千倉書房・價一圓二十錢）

◇**肥料問題研究**　佐藤寬次著・農村經濟の重大問題たる肥料問題は近代の資本主義產業經濟の特徵を備へて來たのは勿論であるが本書は之が經濟研究は農民の側からなさるべきであり、終局に於て肥料生產に關する資本と農民との利害關係は互に對立せるものであることを明かにせんとした前人未踏の研究。（東京丸ノ內昭和ビル日本評論社・價二圓五十錢）

治二十年十二月生れである。

(十一)三井得右衞門(初代)維新の初め大阪の兩替店を管して高福、高喜と新政府の爲に働いた三井元之助高生の次男で、今の元之助氏はその兄に當る。明治四年十月十一日の生れで、一たび三越正次の養子となつたが、明治二十六年元姓に復して一家を立てた。妻錢子(明治八年八月生)は伯爵松平直亮の妹である。大正十一年に歿し、長男高光氏(二代)が家督を相續した。氏は明治三十一年三月の生れである。

以上述べ來つた三井十一家の由來と、その三井王國の事業管理者としての地位とを纏めて、序列を作ると、正に前表の如きものとなる。(前頁參照)



三井合名會社々長　三井八郎右衞門氏

『六』　三井家閨閥網の解剖

御堂關白道長から出て、近江源氏の流れを汲む三井家ではあるが、二百餘年の久しきに亘り、三都の兩替店を通じて日本の金融を統制して來た三井家ではあるが、幕末までは依然として一個の町人三井に過ぎなかつた。金貴族三井と、血貴族(公卿)土貴族(大名)及び新興權力階級(閥族)との間に水も洩らさぬ閨閥網の完成したのは最近のことである。高福、高生、高喜の代までは、まだ姻戚關係が同族若しくは京阪地方に於ける素封家との間に限られて居た。

今、同族間の內的姻戚網を除き、三井家と現代支配階級との

閥に於ける外的姻戚網を列記すると次の如き關係となる。

○三井八郞右衞門家

(一)伯爵、前田利男──三井八郞右衞門氏の妻苞子(明治二年十一月生)の實家である。利男氏は、舊富山藩主(十萬石)前田利同の養嗣で其妻鞆子(明治二十六年十二月生)は利同の女、卽ち八郞右衞門氏夫人苞子は利同の養妹で、利男の叔母に當る。

(イ)公爵、山縣伊三郎──山縣有朋の養嗣。長男辰吉氏の妻鞭子(明治二十一年二月生)は前田利男氏の妻鞆子の姉で、三井八郞右衞門氏夫人苞子はその叔母に當る。

(ロ)子爵、岩倉具明──維新の元勳、岩倉具視の三男、具經から起る。具明氏は具經の長男、その室知子(明治二十年二月生)は前田利男の叔母に當る。

(ハ)子爵、石川濟秀──舊伊勢國龜山藩主、石川成之(六萬石)の孫、成德の長男、妻尙子(明治二十二年八月生)は、前田利男氏の叔母に當る。

(ニ)男爵、前田利功──前田齊泰の第十二子利武より起る。前田利聲の二男で利男氏の叔父に當る。その妻艶子(明治三十年一月生)は三井家の同族、元之助の女である。當家と三井家との閨閥網は二つの結目で繋がれて居る。

(ホ)子爵、內藤信利──舊越後村上藩主、內藤信普(五萬九千石)の養孫。先代信任の養嗣。前田利聲の男で、利男氏の叔父に當る。

(へ)子爵、前田利滿──舊加賀大聖寺藩主、前田利鬯(十萬石)の養孫。先代利行の養嗣、前田齊泰の七男で、利男氏の叔父に當る。

(二)侯爵、松平康莊──三井八郞右衞門氏の嗣子、高公氏(明治二十八年八月生)の室、銀子(明治三十四年三月生)の實家である。康莊氏は舊越前福井藩主松平慶永(三十二萬石)の孫で先代茂昭の二男。銀子は康莊氏の二女。

(イ)侯爵、德川義親──舊尾州名古屋藩主、德川義勝(六十一萬九千五百石)の養孫。先代義禮の養子である。松平慶永の五男で康莊氏の叔父に當る。

(ロ)子爵、松平慶民──德川義親氏の兄、松平康莊氏の叔父に當る。其夫人幸子(明治二十四年一月生)は井上馨の養嗣、勝之助氏の養女である。

の一滴たりとも喉にはしない。而も博士は巧妙にその理由を發見する。四方拜、天長節を始めとして、神嘗祭、明治節、新嘗祭、大正天皇祭等の祭日は勿論、陸海軍記念日、自己の誕生日、妻の誕生日、子供の誕生日、著書出版記念日、父母の命日、カント・アーベント、さてはニュートンの萬有引力發見記念日、佛蘭西革命記念祭、それからそれへと、博士は一年の始めに於いて、その日記帳に、赤く正當に飲める日をば、――博士はそれを「左傾日」と前から呼んでゐられたさうである、そしてその「左傾日」をば、――書込んで行かれる。若し不幸にして、七月、八月の如く記念日手薄の月に於いて、徒にその白き日即ち「右傾日」が續くならば、珍しき友人をば招待するといふ「久濶日」が、所々に插入されて來るのである。

然し今考へて見るならば、それは要するに飲むことではないか、吾吾は博士がその「左傾日」をば、適度に配置される御手際に感心するよりも、「唯、何となく飲みたいから飲むまでだ」と放語し得ないで、カントを引合に出し、ニュートンにお酌を強ひられねばならない、その合理癖に先づ憎悪とそして憐憫の情とを痛感せねばならなくなる。人間は本來左樣に合理的に生活してゐるものでは決してない、然るに現代人はそれを合理的に彌縫しようと絶えず努めてゐる。そして吾々は又そこに息苦しさをば感ぜねばならない。

×

吾々は又時間を喧しく云ふ、規則を喧しく云ふ。一秒の百分の一でも遲刻するならば、それはそれだけボーナスの袋に輕減作用を及して來る。だから今そのボーナスを氣にしながら、出勤時刻に間に合す爲に、バスに飛乗するならば、「どうぞ、停留場から」と、切角命を的に飛乗し得てホッとしたものを、又命を的に飛降せねばならない。では停留場へと急いで逆戻しようとすれば、交通巡査は「左側通行」と怒鳴る。忌々しさに唾を吐かんとすれば、「痰唾無用、吾等の町を美化しませう」と云ふビラが鼻先につきつけられてゐて、その唾の道場に窮せざるを得ない。そこで吾々は益々あせり氣味になる、電車に飛込めば、そこには掏摸の危害があり、急いで道を横切れば、そこに轢逃げの危險がある。犬を飼つて「小彌太」と名づけ、猫を飼つて「謙太郎」と呼び、「時々は蹴飛して見るが、ヒーと云ひ、ニヤンと云ふまでである」と得意然として友人間に披露をすれば、そこには裏切物がある、重役は必ず彼の首を切ることによつて、彼に悲鳴をあげさせ、ヒーと云ひ、ニヤンと云はせるに違ひない。全く油斷も隙もならない時勢となり、何もかも癪の種子ならざるはない。

だから吾々はこの憤慨と、この緊張と、この煩悶と、そして餘りのいかいかしさと、せゝこましさと、餘りの理屈と、必然と、營利と

(一)男爵、前田利功――當家と三井家との關係は總本家の姻戚關係に於いて述べた。利功氏の室艶子は、三井元之助の庶子で、母は木村清とある。

(二)醫學博士、土肥慶藏――三井元之助氏の妹タオ子(明治十年一月生)を妻として居る。

○三井源右衛門家

(一)伯爵、寺嶋誠一郎――先代宗則の長男で明治二十六年父の死によりて、家督を相續した。夫人きやう子(明治十三年三月生)は先代三井源右衛門(高辰)の女で、當主源右衛門氏の義妹に當る。

(二)藤田德次郎――大阪の富豪、男爵藤田平太郎の弟で、同彦三郎の兄、久原房之助氏の從弟である。大正九年分家して一家を立てた。夫人治子(明治二十年十一月生)は先代三井源右衛門の女で、寺島伯爵夫人きやう子の妹に當る。

(三)殿村平右衛門――大阪の資産家である。先代平右衛門の長男で、明治三十一年七月に生れ、大正十年家督を相續した。夫人敏子(三十八年十二月生)は、三井源右衛門氏の三女である。

○三井高精家

(一)男爵、鴻池善右衛門――大阪の門閥富豪である。山中鹿之助幸盛の二男善右衛門幸元に九人の子があつて、其中の三人が大阪に出て家を起した。今橋通りの鴻池家は八男善右衛門正成の後である。當主善右衛門は先代善右衛門(十一代善右衛門)の長男で、明治十七年家督を相續した。其夫人ミチ子(明治二年正月生)三井高保の女で、當主高精氏の姉に當る。

(二)鴻池新十郎――和泉町の鴻池家と呼ばれるものである。善右衛門幸元の四男、又右衛門之政の立てた家である。當主新十郎氏は、十一代鴻池善右衛門の子で、當代善右衛門氏の弟である。明治三十三年先代サチ子(明治十二年一月生)の入夫となつて家督を相續した。サチ子は三井高精氏の姉に當る。

(三)男爵、荒尾之茂――荒尾家は代々鳥取藩の家老であつた。先代成富が、維新の際國事に奔走した功によつて、明治三十九年當主之茂が男爵を授けられた。成富の夫人行子

（明治二十一年九月生）は三井高精氏の妹である。

○三井壽太郎家

（一）侯爵、伊達彰――舊伊豫國宇和島藩主、伊達宗城（十萬石）の曾孫に當る。宗城の養嗣宗徳が明治十七年男爵に列し、明治二十四年父宗城の功によつて侯爵に陞叙せられた。彰氏は宗徳の子宗陳の養嗣で、其弟伊達紀隆の三男である。三井壽太郎氏の先代、八郎次郎の繼室照子（萬延元年二月生）は宗城の妹で、彰氏には大叔母に當る。

（二）子爵、田村丕顯――舊陸中國一關の藩主田村崇顯（二萬七千石）の孫に當る。明治二十年當主丕顯が先代邦秀の後を承けて襲爵した。三井壽太郎氏の夫人鐮子（明治十三年六月生）はその妹に當る。又鐮子の妹邦子（明治十八年六月生）は長閥の一人として知られた杉孫七郎の嗣子竹二郎に嫁し、當主七郎氏の母となつた。

尚ほ此外に三井壽太郎家の姻戚としては（三）子爵牧野忠良氏（四）子爵鳥居忠一氏、白木屋の主人として知られた大村彦太郎の長男、（五）大村彦一郎氏等を擧ぐべきであるが省略する。

○三井高修家

（一）男爵、島津長丸――舊鹿兒島藩主、島津忠義の一門で代代宮地（一萬七千石）を領した島津久治の長男である。長女廣子（明治三十年六月生）が三井高修氏の夫人となり、二女恭子（明治三十二年二月生）が、公爵二條厚基氏の夫人となつて居る。

（二）高木舜三――男爵高木喜寛氏の弟で、その未亡人多都雄（明治十九年十一月生）は、三井高修氏の姉に當る。

○三井守之助家

（一）男爵、住友吉左衛門――三井守之助の夫人桁光子（明治十三年五月）は先々代住友吉左衛門（友親）の三女である。友親の嗣子友忠が早く世を去つたので、住友家では徳大寺公純の第六子、隆麿を迎へて長女滿壽子（明治七年十月生）に配した。之が先代住友吉左衛門で西園寺公望氏の實弟である。三井守之助氏夫人は當主住友吉左衛門の叔母に當る。かくて三井家は、住友家を通じて徳大寺、西園寺家と姻戚であるばかりでなく、子爵加藤泰通家を通しても、兩家と姻戚であり、男爵鷹司家を通じても、兩家と姻戚

するものがございますわ」詩人「それは、何だね一體？」女中「鹽鮭を食つたあとの水でございます」簡單のことを強いて意味深長に表現しようとする、詩人に吾々の底深き嘲りがある。女中の平凡の答に吾吾の凱歌がある。

晦日の夜、橋の下に焚火をして暖をとつてゐる乞食の夫婦がある。乞食の女房「この寒いのに旦那樣方は、掛取に忙しさうにあちらこちらと、走つておあるきになる、だのにおらはまア、取る金とてないので、かうやつて焚火にあたつてゐられる」乞食すツくりと立ち上つて、女房を見下し樣に、「それも皆な誰のお蔭だと思ふ」と誇らかに云ふ。そのとんちんかんの誇に笑がある。親爺がどこまでも女房に恩を着せ、威張つて見たいといふ、男の女に對するイデオロギーに放たれた皮肉がある。

外交員「奧樣、盗難豫防器は如何でせう」奧樣「宅では不用よ」外交員「さうで御座いませうとも」奧樣「え？」外交員「何にお隣で買つて頂きました時に、お宅へ行つても駄目よ、何も盗まれる品物なぞないんですからつて、伺つて參りましたんですけれど、まさかと思ひまして……」奧樣「さう、隣でそんなことを云つたの、まア失禮な、一ついくら、安いのね、五つばかり置いて行つて頂戴……」女の虚榮心に對する哄笑がある、外交員のしてやつた狡猾さに對する冷笑がある。吾々が常に言はんとしてゐる冷嘲を、吾々に代つてナンセンスは、あらゆる徳の種子といふ種子に、遠慮なく振掛けて呉れてゐる、そしてそこに愉快がある。

×

亞弗利加の森林での話である。二匹の大きな蛇が喧嘩をやつた。やがて二匹は噛み合ひをやめて、お互に對手方の尾から呑み始めて來た。蛇は同じい大さである。青い蛇が黒い蛇を一寸呑むと、黒い蛇も劣らずに青い蛇の尾を一寸呑んで來る、二寸呑むならば又二寸呑んで來る、とうとう青い蛇が黒い蛇を全部呑んで了つたその瞬間に、又黒い蛇は青い蛇を全部呑込んで了つた、そしてそれと同時に二匹の蛇は消えて無くなつて了つた。といふ呑まれて胃腑の中にある蛇が、その胃腑を以つてゐる蛇を呑んで了つたといふやうな、ナンセンスの話は、合理論者に對する諷刺である、總てが論理的に進行するものだと獨斷してゐる男への教訓であり、皮肉である。

強盗をやつた囚人が、刑務所で十字架のキリストを見て、「看守さん、あすこにブラ下つてゐる男は、この刑務所でやられたんですかね」「あの男？　この刑務所で、馬鹿野郎！　あれはな、イエス・キリスト樣だ、この罰當り奴が」と怒鳴られた彼は、病氣になつて出獄が許可されて、ある町の慈善病院に入れられた。そこで彼は立派な室を

生してゐるキリストの額を見て、「看護婦さん、あれはこの病院の院長さんですかな」「まア、あの方を御存知ないんですて、この世をお創になつた天のお父樣ですわ、吾等の主、キリストのお父樣ぢやありませんか」「ぢやキリストのおやぢぢやね」「さうよ、お父樣よ」彼は病も癒えて久方ぶりで娑婆の風に當り、ある所に遊びに出かけた。するとその女の部屋に、子供を抱いて、おそろしく上品な婦人の繪が壁にかゝつてゐた。「こいつア此家のお神さんか、まさかおめえぢやあるまえ」と女に問うた、「なんですつて、まア馬鹿だね、これはマドンナぢやないの」「何んだね、そいつは」「キリスト樣のお母樣よ、主イエス・キリスト樣を處女で身ごもり給ひし、やんごとなき方なんぢやないの」「さうか、ぢやキリストのおふくろだね」そこで彼は考へた、どんなにキリストは偉いか知れないが、息子は刑務所で、親爺は病院に、おまけにおふくろはあいまい屋にゐるなんて、何とみじめな一家なんだらうと。そしてそこにはその强盜囚の無智にかこつけたる宗教の冒瀆がある、キリストの冒瀆がある。勞農ロシヤが、マリヤの像を賣り、十字架を鑄潰して馬蹄鐵を造り、教會を無神論者の學校に改造し、聖徒のミイラと、豚及び土鼠のミイラとを、宗教博物館に並列してゐると同樣なる、宗教威權に對するずるき反逆であり、そのずるさに吾々は微笑を持つのである。

×

近代人彼等は、總ての點に於いてずるさを學んでゐる、トリックを好愛してゐる、故に瞞着し、ペテンに掛けることによつて、自己の聰智の儁英さを自負しようとし、私に享樂し、誇示しようとする。だから又近代人は總ての出來事をもナンセンスに化することによつて、輕快に皮肉らうと企圖し、攻擊しようとする。だから又人々は、そこに嚴しき超等級の顏に、全く空虛の頭を乘せ運んでゐる、ナンセンス型の男を主役として、彼等は如何にして三つの男爵を拾つたか、といふナンセンス劇を、容易に書下すことが出來るといふ、或はさうかも知れないと私も思ふ。

たものでなくして何であらう。加賀家、越前家、尾州家、宇和島家は、薩州家と土州家とを除外し、主筋の毛利家を避けて三井家に金箔をつける上から云へば、當然落ちつくべき家柄であつたといふことも考へて見る必要がある。

第七　薩州藩若しくは薩州人で三井家と姻戚關係を結んで居るものも二三はあるけれども、それは何れも權力の中心に關係のない、超閥族的のものである。寺島誠一郎氏の先代、宗則の如きも、殆ど藩臣と云つてよいほどの超閥的人物であつたことは人の善く知る所である。

第八　住友家、鴻池家、藤田家等、第二流若しくはそれ以下の富豪、又は素封家と婚姻を結ぶことは、三井家獨特の家風で、三菱には斷じて見られぬことである。之は三井家の祖先が商業資本家として起り、物産の仲次を主なる仕事の一として來た事に伴ふ現象と考へられる。

以上八項は更に細説を要する。細説を俟ちて幾分でも此筆者の考察に、發見のあることを知つて貰ひ、又、讀者の興味をそそることの出來るものと思ふ。但しそれは三菱の閨閥網と對比して更に一段の精細と明瞭とを加ふべきものである。次號以下轉じて三菱の閨閥網を説明し、最後に最も興味ある、財界、政界の逸事、逸話によつて、此二大閨閥網の構成に史的考察と、批評とを加へて見たいと思ふ。

（註の三）　舊福井藩（越前家）と三井家との間には維新の際、福井藩から徵されて參與に任じ、御用金穀取締方を命ぜられた由利公正との間に尙ほ重大の關係がある。慶應三年十二月二十六日京都の三井組に對し、御所内の金穀出納所から召命が下つたのは由利の畫策に基くもので、爾來由利と三井家との間には深い關係があつた。その邊の興味ある觀察は纏めて後に述べる。

浅草『歌劇』華かなりし頃

高田保

一

樂屋の入口に、こんな文句が麗々と貼出されてあつたものだ。

「刑事その他官憲關係の者一切無斷立入るを許さず、これを犯すものは頭の上から水をぶつ掛けられるべし」

しかもこれに、堂々と署名して「獏與太平」――この獏さんといふのは、いま映畫界でしきりにイデオロギー映畫を作り出しては檢閲當局と喧嘩をしてゐる古海卓二君である。

大正八年の二三月の頃で、公園六區、觀音劇場にとても妙な歌劇一座が現はれた。その名は何と言つたか忘れてしまつたが、とにかくその顔觸れの中に、澤田柳吉、竹内平吉、大津賀八郎はいゝとして、辻潤、佐藤惣之助、陶山篤太郎、小生夢坊、その他舞臺には到底緣の無かりさうな連中が、ずらりと盾看板をあげたものだつた。

オペレットで「トスキナア」といふものを出した。筋は何でも、一人のスリがゐて、これが赤と黑のマントか何かを羽織つて、盛んに懷中物をスつて歩く。スるのは人間の自由でスられるのが馬鹿なのだといふ「哲學」をそいつが唄つて、合唱の女達が彼に贊成し、彼を取卷いて、彼の名を讃え「トスキナアこそわれらが英雄」といふやうな事を唄ひ出すのだつた。

ところで讀者諸君、この奇怪な英雄の名を、試みに倒さまにして讀んでみなさるがいゝ。――アナキスト。

これが彼等の「洒落」だつたのか「本氣」だつたのかは僕は知らない。がみんなは一端アナキストだつた。樂屋中こぞつて酒を飲んで、こぞつて醉拂つて、そしてこぞつて貧乏した。

貧乏しながら、泡を吹いて議論をした。

「なぜタキシードを着なければならないんだ？　タキシードがピアノ

を彈くんぢやない。俺が彈くんだ、俺の指が叩くんだ。」

その頃は、「大衆」と言はずに「民衆」と言つた。

「さうだ、タキシードは民衆を侮辱する！」

オペレットと芝居の間で、澤田柳吉君がピアノの獨奏をしたのだつた。選ばれた曲目がベエトオヴエンの「ムーンライト・ソナタ」だつた。到底淺草の見物に素直に受け入れられる筈はなかつた。ガンガン叩いてるのはきつと調子を合せか何かしてるんだらう。いゝ加減にして早く始めろい！　さう思つてる中にひよくり澤田君は立上るのだ、そしてお辭儀もせずに引込むんだ。なあんのこつた！——だが彼等は問題をベエトオヴエンの上には置かなかつたのだ。借物の衣裳の似違なタキシードの上に置いた。

そこでこれからピアニストは、着流しの兵兒帶姿で現はれたのだつたが、しかし問題はもつともつと進展した。

「君！　駄目だよ！　俺達アナキストにとつては、半纏着にまでベエトオヴエンを引下すことが必要だよ！」

恐らく僕は、今後とても生涯、あの愉快な風景を眺める事は出來ないに違ひない。大道具方から借りた古半纏が、華麗なグランド・ピアノの前に腰をかけて、白いキイの上をば、名だたるベエトオヴエンが馳つたのである！

辻潤、佐藤惣之助一派は、歌を唄つたのではなかつた。彼等は芝居をした。選んだのはゴルキイの「どん底」だつた。

「あゝあ、ほんとにあたし詰んない。早く天國へ往つちまひたい。」とナタアシヤが言つた。

「面白くないのはこゝばかりぢやないよ、それが人生なんだよ」と男爵が彼女をなぐさめた。

がこれは芝居の中の事ではない。樂屋で、ナタアシヤ役の女優が、寢そべりながら窓の外を見上げて言つたのだ、それに對して男爵役の辻潤がおつとりとして答へたのだ。私は今だに覺えてゐる。みんながみんな、一日中「人生」を語つてゐたことを。「眞實」を說いてゐたことを——あのルカのやうに、ペペルのやうに、錠前屋のやうに、——で舞台の「どん底」は、樂屋の「どん底」のその儘でもあつた。

詩人佐藤惣之助は、眞赤なルパシユカを着て泥棒のペペルだつた。彼は朝から晚までそれを脫がなかつた。

「ロシアには人生があるよ。眞實があるよ。」

いや、誰も彼もが、一日中、その扮裝のまんまで暮した。カツラさへも脫がずに、

「かうしてゐると嬉しいよ、俺達はロシアで暮してゐるやうだ。」

「これでウオツカさへあれはねえ」

ウオツカの代りに、シヨウチウを飲んだ。

夜でも晝でも
牢屋はくらい
いつでも鬼めが
………

やがてこの唄が、樂屋から流れ始まる時は、表で見物が、
「早く幕を開けろい！　風邪を引いつちまふぞ！」
と怒鳴る時であつた。でみんなどや〱と舞台へ降りて行くのだつたが、實際この時の場内は、風邪を引いちまふほどにガランとして、數へるほどの人影がちらりほらり、あとは行儀よく椅子が居並んで、――だから勿論、この一座は、またゝく間に解散した。

二

芥川龍之介の小品に「キユウピッド」といふのがある。――ある晩春の午後に、あるオペラ小屋の樂屋を訪ねた。するとその隅の方に、キユウピッドが一人萎れてゐたといふのだ。そこで案内役のマネジヤアのN君に、
「あのキユウピッドは悄氣てゐますね、舞臺監督にでも叱られたやうですね」
するとN君が無造作に、
「ああ、あれですか、あれは失戀してゐるのですよ」
と答へたといふのだ。
芥川龍之介と、江口渙と、それからもう一人は廣津和郎だつたと思ふ。その頃僕は何ともつかずに金龍館の樂屋裏につとめてゐたのだつたが、一度覗かせてくれないかといふので、案内した事がある。細い階段を二つほど折つて、大部屋の一番奥に、コーラスの女達の大部屋があつた。
「こゝを地獄部屋つていふんですよ」
それから三人とも、珍らしげにそこに坐り込んだのだが、やがて廣津和郎が、
「こりや君、谷崎の「鮫人」以上だよ」
すると芥川龍之介が、彼特有の微笑で、一方の隅に近い鏡臺前を指さした。そこにはみつ豆のコップが一つ、紙で蓋をされて置いてあつた。
「いま出て行つたキユウピッドが、喰べかけて行つたのだよ。」
何故かこの事を瞭りと僕は覺えてゐる。だからN君といふのも僕の事に違ひない。――が僕ならば、悄氣てゐたキユウピッドについて、
「失戀してゐるのですよ」とは言はなかつた筈だ。
「ああ、あいつ？　あいつはいま斷食してゐるんですよ。」

十四日の寒い夜の出來事であつた。餘りにも悲劇の多き有色拳闘選手の末路よ。

斯くして世界の拳闘熱は、大なる人種、國別を背景にして世界的潮流のなかに躍進しつゝある時、斯界には未だ日尚淺き歴史の頁を有するに過ぎない日本の拳闘界とは曰へ、近來著しき發達をその內容と共に遂げ、本年の極東オリンピック競技にはオープン競技として加へられ、又プロフエショナル試合に、アマチユア、學生選手權試合等にフワンの血を湧かせて居る有様である。

又紐育には帝拳の若き選手木村久がノックアウト木村として斷然活躍して居り、大平洋岸に於ても白黒各人種の中に黄手の選手として精進の努力を續けて居る選手は我が拳闘界をして益々光輝あらしむる將來の道程を建設する尊い先驅者であり、日本のデムプシイ、タニーを出す可き階程の犧牲者でなければならない事である。

（一九三〇、七、六）

參　考

ノックアウト（倒れて十秒間起き上れない場合）

ポイントアウト（點で勝つ）

體重に依る階級

一、フライウエイト（一一二斤以下）

一、バンタムウエイト（一一七斤以下）

一、フエザーウエイト（一二六斤以下）

一、ライトウエイト（一三五斤以下）

一、ウエルターウエイト（一四七斤以下）

一、ミドルウエイト（一六〇斤以下）

一、ライトヘビーウエイト（一七五斤以下）

一、ヘビーウエイト（一七五斤以上）

尙世界權ニ右ノ外次ノ階級アリ

一、ジユニア・ライトウエイト（自一二六斤至一三〇斤）

さうだつたか？

まこと彼等の間に常例の「道德」は無かつた。昨日までのAとBの組合せは、今日はBとCの熱中だつた。が明日はCとDかもしれなかつた。

僕はMといふ一人のふしぎな情熱家を覺えてゐる。彼はあるとき、眉をあげて僕に鬱憤を洩らした。

「ねえ君、僕はあのTを、世にも憎むべき妖婦だと思ふんだ。あの女は僕の胸の中の清純な戀愛觀を、めちやくちやに踏み碎いつちまふんだ。で僕は心からあいつの存在を憎むでるんだ、」

しかし、このMがそのT子と同棲した。

「ねえ君、これは僕の憎惡からなんだよ。君にはこれが理解できるかい？　僕には憎惡が嵩れば嵩るほど、彼女の存在を手近かな處に置かずにはゐられなくなつたんだ。」

僕はまたHといふ青年を覺えてゐる。彼は不斷に嘘をついて歩いた。彼の言に從へば、彼は樂屋中のほとんど悉ゆる女達と關係を持つたといふのだ。彼は言つた。

「僕は、僕がいつも嘘をついてゐるといふ事だけを人に信じて貰へば、それでいゝと思つてるんだ。さうすれば誰も彼もが僕を信じなくなる。何もかもが一切嘘になるといふもんぢやないか、さうすればその結果はつまり、本當の事まで嘘になる。そこで僕は安心して本當の事が饒舌れるといふもんだから。」

三

自分の裡なる憎惡をまで一層手近かな處にまで引寄せずにはゐられなかつたMと、眞實の事まで虛僞の中に葬り去らうとしたHと。この二つは恐らく生活の兩極端であらう。がいづれにしてもそれは月並な道德的性格ではあり得ない。がしかし何が彼等をかうはさしたのか？――僕はいま振返つて、あの頃の、一種の文學的生活思潮を感ぜざるを得ない。前に述べた觀音劇場の「トスキナア」一派は、謂つてみれば一群の文學青年であつた。ナチュラリズム末期の動搖の中に人生の目的を失ひつゝ、「眞實」を求めていつか虛無に陷らざるを得なかつた、ふさぎの虫が、合唱して舞臺の上を跳ねまはつたのだといつていゝ。常例の生活に破産した彼等は、異例の生活の中で蘇生した。この事はMの場合でもHの場合でもまた同樣だつた筈である、なぜならば二人とも、幾分づゝか「文學青年」であつたから――いや、かくいふ僕自身も！

「……大正七年以降十一年に到るまで、僕は全く漂々として風來の徒となつた。就中、九年前後の二ケ年間を僕は淺草公園に暮した。人生落伍浮浪の徒は僕の親しき友となつた。夜を晝とし晝を夜とする放埒

が僕の安らかな生活となつた。この間に依食したところは金龍館即ち淺草歌劇の世界である。讀者よ。諸君はかの谷崎潤一郎氏が曾てその世界を描いた「鮫人」の一篇を讀んだことがあるか。しかしこれはその描かれたよりも更に奇異なる人情の世界、常例の人情の世界に破産した僕はその奇異なる人情によつて強かに沈靜劑を呷らせられた。おゝ今は空しきあの世界よ。あの人情よ、そしてそこに握手した多くの友人達よ。……」

感傷的な文句であるが、これはその後の僕がその世界を出て、自分の戯曲集に自ら序した中の一節である。

誰も彼もが、幾分づゝか文學青年であつたといふ事について、僕はまたしてもあの芥川龍之介その他が樂屋を訪うた晩の事を想ひ出す。當時その訪問者達はすでに新進の人氣作家達だつた。だからその事は、樂屋にとつて一つの「出來事」だつた。

肺を病んでゐたSといふ青年があつた。彼は作者部屋にゐてよく詩を書いてゐた。その彼が來て僕の肩を叩いた。

「あいつらに判るのかね？　こゝの生活がさ。單に覗いて歸つて、それであいつらには判るといふのかね？」

ひどく彼は興奮してゐた。僕は彼を慰めて云つた。

「判りやしないさ。あいつらに有るのはたゞ好奇心だけだよ。だからあいつらは作家なんだ。だが僕達はこゝで生活を持つてゐる。判るね、君」

すると彼は、愁然としてうなづいた。

「さうだ、生活を持つてゐる。だから僕達は作家になれないんだ。」

そしてそれから彼はいつまでも僕をつかまへて、いかに彼がコーラスの中の某女を戀してゐるかを訴へるやうに話し出した。

それからその晩は、次興行のための稽古があつて、みんな樂屋へ泊つたのだつたが、僕とこの若い詩人とが一つの蒲團を引張り合つて寢やうとすると、闇の方で一人が急に聲を擧げたのだ。啜り泣きさへしながら。

「駄目だ、駄目だ。彼女はどうしても僕を信用しちやくれないんだ。……僕にはつまり、才能が無いつていふんだ。……そして僕には、言はれてみると、それが本當のやうに思はれて來るんだ。」

「止せやい！　才能なんて！　誰にだつてそんなものはありやしないんさ！　いゝかい？　例へばよ、」誰かゞそれに答へた、そして頓狂に大きな聲で、ド、レ、ミ、フア、とやり出した。「これがよ、この聲がよ、お客様に氣に入られるか入られねえか、たゞこれだけの事なんだ。」

が泣き出した彼は答へなかつた。やがて彼は默つて立上つて外へ出た。やがて舞臺の方からピアノを叩くのが聞えた。續いて彼の唄

い聲の、ド、レ、ミ、ファが聞えた。（午前の二時三時である）。

「あいつは馬鹿だよ。唄さへうまくなりや人生が幸福なんだと思つてる」

こゝでは、誰も彼もが誰かしらに戀してゐる。——と若い詩人のSは僕の方に顏を向けた。しかし彼の眼はもう最前のやうに光つてはゐなかつた。彼は言つた。——今日來た小說家達はきつと俺達の事を書くだらう、そしてみんなが面白がつてそれを讀むよ。たゞそれだけなのだ。俺達はたゞそれだけなのだ。

おなじく「文學青年」的といつても、もしこれがあの「トスキナア」一派の樂屋でであつたなら、きつとこの場合、一齊に絕望的哄笑が爆發し、そしてきつと誰かが外へ飛出して、何處からか酒精を都合して來て、徹宵飲んで、醉つて、そして疲れて、明日は明日と唄ひもしたであらう。

だがSはまだ、若かつた。（そしてこれが、この世界での、もう一つの型だつた）彼もまたむくりと起直つて、

「俺は明日から勉强するよ。正式に勉强を始めて……例へば僕は正則へ通つてうんと英語をやるんだ……そして俺は小說を書く、」

しかし、このSに應へて、突嗟に次のやうに言ふものがあつた。

「小說を書く人間と、その中へ書かれる人間と、君、どつちが本當に人生を生きてると思ふかね？」

それはあのHの聲であつた。

四

筆を轉じよう。こんなことをだら〳〵書いて行つては、それこそきりがない。いろんな人間がゐて、いろんな生活があつた。克明に綴つただけで優に一篇の長い小說になる。そしてそれは必ずや、近頃のエロチック・ナンセンス物などよりは遙かに面白く、惻々としてまた切々として——いや、止さう。

さて、この世界へ伊庭孝が入つて來た。

その頃には珍らしかつたトウ・ダンサアの日本女性、高木徳子に戀をして、何處までもと彼女について、つまりは「意氣」でこの泥沼に落込んで來た彼である。だから彼はかの「トスキナア」一派とは自ら其の類を異にしてゐた。つまり彼には、野心もあれば、功名心もあつて、つねに「徳子のために何か一仕事を」であつたからである。今こそ肥つてしまつたが、その頃は精悍なる瘦身、不斷に銳い眼を光らせてゐた。

この「徳子のために」が、いつか彼女と別れることになつた。だがそこは流石に、往年の新劇勃興時代、ショウの「チョコレート兵隊」で鳴

らした事のあつた人なだけ、悄氣もせねば引込みもせず、こんどは「淺草オペラ」のために、といふ事になつた。インチキなものから本格なものへ。即ちチヤンチヤンと覺醒の警鐘を鳴らしはじめたのである。

まづ基礎的にコーラスの養成をしようといふ事になつた。ユニソンから二部へ、二部から四部へ、そして伊庭孝自身は樂屋へセロを一挺擔ぎ込んで、その頃觀音劇場から移つて來た竹内平吉を師匠にして、僕もやがてはオルケストラの一員に加はるよとばかり、とても猛然として始めたものだが——あゝ僕はこゝで、やゝ感傷的に想ひ出す、破れ襖の物置のやうな稽古場で、ある時竹内平吉が何やらの曲を奏で始めた。いつか彼自身が醉つたやうになり、その周圍を若いコーラスの男達女達がとりまいた、幽玄清麗の旋律、みんなひつそりとして、やがて涙ぐんで、最後に溜息をついて、午前二時、三時、とう〳〵その晩の肝腎な稽古を休めてしまつた、外にはチヤルメラの音も聞えず、いつか明けた朝空に窓を開いて、それからそこにみんなして、默りこくつて寢てしまつたことを。

午前二時三時はついぞ珍らしくもなかつた事だつた。朝十時開幕の夜十時閉幕、十二時間の勤行を濟ませて、十時半からの毎夜の稽古、夏の夜は明け易く、プリンシパルの連中は俥でも歸れたが、コーラスの連中はみんな樂屋へ寢泊りした。毎夜と續けばこゝは懷かしの我家となる。それを喧しく事務所が追立てゝ、歸れと言はれたところで何處へ行く、こつそりとピアノの蔭に隱れ、衣裳部屋の棚に潜み、その頃あつた「國勢調査」に、こゝの役者だけは三十人からが洩れてゐた。がこの洩れた三十人がやがて立派なコーラス團となつた。やがて本格歌劇の第一聲、拔粹摘出といふ變則な演出だつたが、ともかくもグウノオの「フアウスト」をといふ時、斷然舞臺を押えて、その頃の樂屋川柳に「コーラスがプリンシパルを監督し」今はジヤズ唄ひの花形、蓄音器小唄レコードの人氣男、二村定一も、その頃はこの三十人の中の一人だつた。

だがこの「熱心な」コーラスも、時には一つ處に住み飽きて來る。でよくドロンを決め込んだものだ。Aの一座からBの一座へ、それも無斷で移轉してしまふのである。それが初日の前の日まで平然と、自分の役を受取つて、極めて熱心に稽古を續けてゐるのだから愉快だつた。そしていよ〳〵明日からはといふときに、

「僕は君、暫らくあつちへ行つて來るよ」

「さうか、で荷物は？」

鏡臺前のものを、小さなバスケット一つに入れて、氣輕に、爽かに、一座の誰彼に握手さへして、

「ぢや、元氣でな。」

これが、荷物が一寸運び出しにくい時には、よし來た、と誰かゞ三階の樂屋の窓から、細引で吊して下して、それを下にゐて悠然と受取つて、帽子を振つて出かけて行つたものである。誰も怪しまず、誰も憤らず、だから表の事務所の方で「俳優道德」といふやうなことを高唱してみても、結局この世界だけは別天地だつた。

「どうせ、表の奴等には僕達のこと、理解できやしないよ！」

事實、理解出來なかつた。例へば、一日僕は表の事務所から呼びに來られたものである。支配人は憤然としてから言つた。

「君、怪しからんよ！　不埒だよ！　うちのオーケストラ、あれは何ていふ態だ。見給へ。ラッパを吹いたり止めたり、ヴァイオリンを彈いたり止めたり、だらし無さ加減呆れるばかりだ。みつともないつてありやしない。……柿岡の曲馬の樂隊だつて、みんな始めつから終ひまでちゃんとやつてゐる！」

樂長を呼んで來い！

折角、インチキから本格へと、夫々のパートに專心しだした樂手諸君達だのに、とは思つたが、いかにしてこの忠實なる支配人に、オーケストラの何であるかを言ひ說く術が無かつたので、僕はおとなしく引下つた。そして、いまはＪＯＡＫでバンドの指揮放送をしてゐる奧山貞吉が、溫良な顏に苦笑を浮べながら出て行つた。そして――いや、彼が何と答へ、何と諭したかそれは知らない。歸つて來て彼はたゞから言つた。

「コロッケしか喰つたことの無い男に、正式の晩餐を理解させやうつたつて、そいつは無理といふもんだよ。

今日もコロッケ
明日もコロッケ

………

そこで大勢が愉快に哄笑した。

五

この哄笑の仲間に、佐々紅華がゐた、西本朝春がゐた。次々と出る新しいオペレットの節付役として、振付役として、みんな樂屋での「先生」だつたのである。

よく事務所へ借金を申込んだ。斷はられると佐々紅華は、無理に一杯呷つて、眞紅な顏で三味線を彈いた。さびのあるいゝ聲で、それが聞えると、妙にみんな鄉愁を感じた。舞台の上にこそ西洋の樂器に合せ、西洋風に聲を眞似て唄つてゐたのであるが、たまさかにしめやかな音締など聞かされると、やはりその年代の僕達だつた。だから、後年藤原義江となつた當時の戸山英二郎など、しきりに歌澤の師匠の

許へ逃つて、粹や通やに身を入れてゐたものである。

アメリカ仕込み新歸朝者、舞踊の本を出したり、松井須磨子にその指導をしたりした西本朝春は、その世界へ來ても博覽强記で、暇さへあれば講釋しかつ議論した。しかし彼はあまりに澤山の抽斗を頭の中に持ち過ぎてゐたゝめに、ともすればそれを引違へて、「ワーテルローの戰ひの時に、ネルソンは」となつたり、「マスカニが「パリアッチ」を書いた時分」になつたりする事があつた。けれどもこれは決して彼の智識がそんな風に曖昧だつたといふ意味ではない。たゞ餘りに豐富だつたためについ混雜したに過ぎなかつたといふ風に見る方が正しかつたらう。よしんば彼の書いた何だかの喜歌劇の中に次のやうな文句があつたにしても

　　われはナイルの豚なれや

この朝春も、借金を申込んではよく事務所に斷はられた。すると彼はいつも憤然として、

「不合理だ。こつちが返すといふ時分には、奴等いつも默つて返させるぢやないか！」

だから貸すときも默つて貸すのが至當である——といふ彼の論理だつたのである。

しかしこれらの誰にしても彼にしても、淺草歌劇を、インチキから本格へ、と希ふ向上心に於ては遜劣の無かつたものである。いつまでもロオシイの殘したコミック「天國と地獄」や「マスコット」でもないではないか。われ〳〵の手で——さうだ、われ〳〵の手で國産のグランド・オペラ！

最近山田耕作が歌劇運動を創めて「椿姫」その他を演つた。新聞紙はその首途を祝して「日本人による最初の歌劇演出」と書いたやうである。がこゝに——と言ひ出せば、いや君等のあれは、オペラでなくて、とかう言はれるかも知れない。事實僕達は「オケラ團」と呼ばれてゐた。けれども——と僕はいま最後に、正面を切つて、僕達の「カルメン」について語らう。

熱心な、半年間の稽古があつた。コーラスもプリンシパルも、暇さへあれば自分のパートの練習をして、さてそれから——

全員そろつて、午後の十時半から午前の五時六時まで、それが十日間續いた。

舞臺を飾つて、衣裳をつけて、午後の十時半から午前九時まで、これが初日前二日續いた。

僕等は烈しい勞働の舞臺つとめである、午前九時といふのは、はや打込みの客入れ時間、十時となれば化粧をして、十時半になれば踊らねばならぬ彼等彼女達であつたことを思つてくれるがいゝ。

初日が開いた。樂長篠原正雄がタクトを振つた。あの優麗な前奏曲——

とこゝで僕は忘れずに言つて置かなければならない。この時、見物の一人が、この光榮ある樂長の後から、襟髮とるやうにして引張つたものである。幕はまだ上げられない。音樂ばかりやつてゐる。不埒だ、早くしろ、といふのである。こんな時代だつたといふことを。しかし……

幕がやがて靜かに下された時、それこそ文字通り萬雷のやうな拍手だつた、けれどもなんと幕の此方の舞臺では、しめやかに、ひそやかに、ひつそりとして誰一人聲をも立て得なかつたことよ！ しんとして、……まあよかつた！ やり終せた！ うれしい！ 部屋に歸りながらコーラスも泣いた。プリンシパルも眼を拭いた。女優達は聲を擧げた。美しい興奮だつた、と僕はこれを生涯の記憶としてゐる、成功か不成功か、それはみんなの論ずる處ではない、たゞ、みんなして、一つの事が、一つの大きな仕事が、ともかくも「やり終せた！」

その後僕は、いろ〳〵な劇團の烈しい稽古や、良心的な初日やを觀た事はある。けれども以後、曾てこのやうな場景を觀得たことは無い。

六

が、すべては旣に、遠い、遠い、それは遠い昔の事とはなつてゐる。

「あの頃は愉しかつた」あの頃の仲間と會へば誰もがいふ。銀座で、公園のベンチで、旅の停車場で、ひよつこり合つても、すぐと話は「あの頃」に飛んで「愉しかつた」といふ、

藤原義江に會つても

「もう一度、あの頃の生活が……」

であつた。

ある時信州の山深く、田舍町の舞臺で、それこそゆくりなく劍劇一座の中に、昔仲間のなにがし子に會つた。その彼女も亦、やつれた頰に袖口をあてながら

「あの頃は、ねえ」

であつた。

一九三〇年、淺草——そのアサクサに、カジノ・フォーリーズがある。この尖端的存在を訪れてみれば、それを主宰してゐる人達がみんな昔の仲間だつた。で僕は、

「あの頃と、如何だね？」

すると彼等も亦、そのむかし十二階凌雲閣の聳えてゐた方角に、うつとりとした眼を投げながら

「あゝ、あの時分はなあ。」

（今になつて氣付いた。僕は「昔の淺草歌劇を偲びつゝ、いまのレヴウ演藝について」を書けと課せられてゐた筈だつた。では發端を此處に置くべきだつたのに！ 編輯者よ、許し給へ、つい僕の昔日の—）

いや、懷しんだところで無駄であらう。「時代」が變つたのだ。



モダン・マダム氣質

三宅やす子

離婚挿話

——あたし、もしかすると近いうちに別れるかも知れないの

……え？

——そんなにびつくりしなくても可いわ。だつて今のまんまぢや、あんまり退屈でせう。何も素晴らしい事がないんですもの——當然だつて？　さうよ當然に極つてるわ。だつて當然だから我慢できるつてことないわ。

——でも急に——少し變ね。しかし他に深い理由がありさうね。

——そんなもの何もないの。それや、あの人に誰か出來たとか、何とか、さういふ三角關係でも起つたんなら——私だつてからも退屈しなかつたかしれないんだけど。

——ぢや、さうすれやいゝぢやないの。

——駄目よ。こつちからとりもつたんぢや、面白くありやしないわ

——やつぱし別れるわ。さうする事が、今の場合、一等の刺戟だと思ふの。

——そいで？　どうするの？

——あとの事なんか今から心配しなくても、どうでもするのよ。

——御主人がお氣の毒よ。

——氣の毒かしら。そんなこと無いと思ふわ。第一、獨身になれや、女の人から忽ち好意を寄せられるんですもの。それや待遇が大ちがひよ——私だつて御同様よ。

——でも、別れるなんておよしなさいよ。第一面倒ぢやないの。

——面倒かしら。

——厄介よそれや——それよか面白い活動でも見て氣をまぎらせてらつしやい。

——ところが近頃さつぱり面白いのなんかありやしないんですもの。兎も角何も面白いことが無いのよ。

――同感ね、でも私は何か面白いことはめつけたら有るやうな氣がする。
――さういふ人はみつけれやいゝわ――私は今云つたやうにするの。獨りになつたらしよつちう遊びに行くことよ。
――あら、職業でも持つんぢやないの？
――莫迦ね、職業が手をあけて離婚女を待ちうけてやしないわ。
（十日許り後）
――どうした、此間の話？ やつぱし無事圓滿にやつてるんでしよ。
――いゝえ、もうとつくに別れちまつたわ。
――…………？
――驚かなくても可いわよ。私この十日間てものそれや幸福だつたの。
――一體あの方はすぐに承知したの。
――えゝ、すぐ同意してくれたわ。そいでお金も相當にくれたわ。だつて私なんかお金でも呉れなきや何をしだすかわからないと思つたらしいの。私久し振りに毎日獨りで勉強してたのよ。
――まあ、寂しかない？
――ちつとも――それに寂しくなりさうな時分には、あの人きつと、やつて來るんですもの。
――…………？
――間違へちやいけないわ。私達はお互に自由になつたんだから、誰とお友達になつたつて可いのよ。私、あの人を、やつぱり今んとこぢや一等親しいお友達にしてるの。
――たら、つまり、一つ家に住まないだけの事ぢやないの。
――いゝえ違ふは、大違ひよ。だつて、お友達たつて今云つたぢやないの。
――わかつてますよ。
――わかつてないらしいわ、あなたには――なら云ふわ、二三日前、急に大雨が降つた晩ね、歸れないから泊つてつて可いかつて訊くの。でも私斷つたわ。若い女一人のところに、男の方が泊つてくのは迷惑しますつて。
――本氣で云つたの？
――勿論よ――そしたら、さうだつたねつて、いきなり傘もさゝずに表に飛び出したの。通りでタクシを拾ふつもりだつたんだらうけど
――私、其晩は少しあとで憂鬱になつたのよ。あんなにして外に出て、自棄を起さなきやいゝがつて――そしたらほんの少し燒けて來たの。私あの時はじめてやきもちみたいなもの燒いたと思ふわ。

―我儘ね。さつさと元の通りに生活すれやいゝんだわ。

―それも考へないんぢやないのよ。だつて折角くれたお金なのに、あの人しよつちう借りに來るのよ。此節お客が來ても、外に連れ出して御飯を食べるから小遣が要るつていふの。大げさなんだわ。そんなに毎日御飯を出すお客なんか、來ない筈だ。私に無駄使ひさせないやうにみんな取り上げてゆく氣なんだわ。

―斷ればいゝのに。

―友人だから金の貸借位當然だつて―あ、私んとこ、遊びに來て頂戴ね、いつ？ 來週の水曜がいゝの？ ぢやきつとよ。

(五日後)

―ぢきわかつて？ 割りに靜かでいゝとこでせう。氣に入つたつて？ 氣に入つたらあなた、當分こゝ借りてくれない？ 別莊にいゝわ。

―………？

―だつてね。今月はもう部屋代やつてしまつたの。日割で戻させるのもしみつたれてるでしよ。どうせ借りたもの、使つた方がいゝわ。

―また引越すの？

―え、先のうちによ。やつぱし一緒に居た方が退屈ぢやなかつたわ。新らしい友達も出來たけど、どれも腑拔けで面白くないの。第一階下のおかみさんが、もとの家の良人より、よつぽど監視するのよ。窮屈ぢやないの。

―ひどい人。そんな二階を借りろなんて。

嫉妬の話

「市子さんはハンモンしてるんですつて。新らしい若い女に愛を奪はれたのが口惜しいんだつて―毎日泣いてるんですつて―」

「嫉妬やいてるのね。そんなこと醜態だからよせばいゝのに―私だつたら決してやかないわ」

「君は全く感心だよ」

「おだてないで頂戴―だから市子さんに私云つたのよ。ほつといた方がいゝと思ふつて」

「ウン」

「でも市子さんにはそれが出來ないらしいのね。とても口惜しいらしいのね。妬くほどあなたの負けになるから、つて云つても―かまはずほつとけばいゝのに。そして自分の好きな人をめつければいゝのにね」

「全くだよ」

「一寸、他人の事だと寛大ね。あなたのX子さん、御健在？」

「オイ、市子さんのことなんか並べて、自分の浮氣の云譯にすると承知しないぞ」

「痛快、痛快、とう〱白狀しちやつたのね」

モダン・マダムの群

隣の話を覺え書きしたもの。

（聲がまち〱で誰と判然しない。顏の美醜もわからない。年齡もはつきりわからない。話の內容で察しるよりほかはない。郡下で料理屋の有名な家だつたから、隣室の婦人連の味覺は發達して居るのかも知れない。五六人の聲が順序なく入れ交つてる。）

――友愛結婚がどうだの、コロンタイズムがどうのつて――一體あんなもの、まだるつこしいわね。

――さうよ。コロンタイの小說に出て來る女の人、どれもどれも、とても古い型の戀愛に齒ぎしり立つてるんだもの、おれつたくつて讀んでられやしない。

――あんなに男の我儘を通させて惚れてるなんてねえ。

――でも可いわ。男に惚れるうちが仕合せかもしれないわ。惚れて見たい男がなくなつちや、もうおしまひ。

――あなたの戀人どうしたの？

――居るわ。

――濟ましたもんね。まだ獨身？

――勿論、何故？

――だつて、訪問結婚がいゝの何のつて、なか〱あなたは結婚しないから。

――訪問結婚が一番理想ね。でも男はそれを嫌ひらしいのね。住みいゝアパートなんか、日本には無いから。

――傳統の旦那樣根性がどうしても拔けないのよ。女を傍に置いて、こま〱した用を足させる習慣がね。

――なら女中でいゝぢやないの。

――つまり女中兼用の女房が理想なんでしよ。

――訪問結婚が實現出來ないとなると、仕事を持つてる女は、とても困るわね。

――まだ五年や七年はそこまで男の進步覺束なしよ。

――女の方がさきに進んぢやつたわけ？

――進んでますとも。女の方がとても大人よ。

――子供なんて、骨が折れるばかりで、大きくなれば薄情なもんね。

――子供の話だけはおよしなさいよ、興がさめるわ。

──あら私は子供が大好きなの。あれが居たから、今まであんな夫とでも一緒に暮して來られたの。
──恐ろしく時代ねえ。こゝは子供の話なんか禁制よ。ぢや早く歸つていゝマヽさんになつて上げるといゝわ。
──あゝ戀人がほしい。
──誰、そんな謹みのないことを人前で云ふのは。
──オヤ戀人のほしくない人が、こゝに一人だつて居るかしら。
──さうね、ないだけね。
──作らないだけと訂正なさいよ、人聞きが惡いから。
──不良マダム。あなたは極左の鬪士が一等いゝつて云つたわね。
──私も不思議にキビ〳〵したあゝいふ人達には惚れて見たいのよ
──でも折角の好きな人がつかまつた時はたまらないわ。
──意氣地のないことをいふのね。
──だから十年一日の如く、月給袋を持つて歸る男と、どうでも可い月日を送つてりや、張合もなきや、心配もない。
──お旦那樣たら、首を長くして待つてやしない？
──そして子供たちも。
──また子供に落ちが來るのね。やり切れない。文部省の良妻賢母主義時代に教育を受けた方々は、助からないわね。
──あなたみたいに子供を生まない女は天下の女王よ。幾度でも結婚が出來るから羨ましいわ。
──此間新聞に出て居たでせう。百になつて山登りをするお婆さん。六十までに十三度御婚禮したんだつて。
──隨分モダンお婆さんねえ。
──行つて敬意を表して來ませうか。
(あと雜然と話が混線して、一向判らず。)

典型的なマダムの記載

部屋

簞笥は桐でない、洋簞笥型。
鏡台の上にはブラシと櫛と(つげの櫛はどこにも見當らない)白粉入と、香水吹きと。
小さな繪、
お人形(フランスの切れの顏の中から、眼をパチッとあけて居る)
新刊書──文藝評論、新人の小說集(三十錢か五十錢の小型)數册
思想的なもの二三册。改造、中央公論、他に婦人雜誌一册
破き忘れたカレンダア

外川先

丸善、松屋、白木屋、高島屋等、サヱグサ、フタバは通りがゝりに覗く。

銀座の喫茶店、朝日講堂、邦樂座、など

（彼女は五十錢で圓タクに乘る事が上手だ）

以上、第一公式。第二公式以下非公式に至つては、大抵な尾行も及ばない。まして、筆者の知る限りでない。

着物

これは各人いろ〳〵だが、共通の特徴は、百貨店の陳列會で赤札の澤山下つた着物などは、どんなに好きでも買はないこと。

髮

あまり深くウエーブをかけない束髮。

（丸まげよりは銀杏返しを結つて見たい趣味だけある。但しそれは空想で。）

持物

大體着物と調和させる。但し、モダン・マダムの服飾全體は、金のかかつて居ないのが特徴である。金をかけずに服裝を整へるといつた方が當つてるかもしれない。

容姿

男の品さだめを盛にするけれど——尤も鏡を御覧といふことは女にだけ云ふべきでない。それに、彼女達には、教養と機智とがあつて、時代に一歩——但し百貨店の流行に對しての一歩——先立つた好みを持つて居るのだから。

料理

モダン・マダムは台所が嫌ひだ。其替りに、若し料理をするとなると、なか〳〵おいしいものを作ること、世帶女房の比に非ず。即彼女の感覺を語るもの。

附記

一般に有閑夫人との違ひは彼女等は働けば何かしらやれさうなこと。或は現在たまにはお小遣もとること。

普通マダムとの違ひは、良人或は愛人を天下一の男と崇拜して居ないこと。異性の友人がビオヘエルミンに見えたり、良人がカルモチンに見えたりすると云つたつて、別に氣が違つて居るわけに非ず。

（一九三〇、六）

揚子江上に立つて

室伏高信

一

上海へやつてきました。この二三年來たまらなく憧れてゐた上海へ。私をして、先づこの上海が私の期待に裏切らなかつたといふことを、日本の友人たちに告げることの喜びをもたせてください。

私はいふであらう、こゝには矢張り一つのたしかな望みがあると。

不景氣の、失業の、小さい、息づまるやうな、そして、あらゆる點において行詰まつてゐる日本からやつてきたものが、一樣に思ふであらうやうに、こゝでは窓が開かれてゐる！　世界は廣い！　そしてあらゆるものが秘密に包まれてゐる！

古るい世界は、ヨオロッパはもちろんのことだ、「古い」といはれた日本でさへも、掘りつくされた鑛坑といふの感じしか與へることのできないのに、こゝにはまだ深い秘密によつて世界が包まれてゐる。そしてまたわれ〳〵は見る、どこからともなく一つの光が、この包まれた秘密のうちにと、のぞきこんできたといふことを。

二

私が如何に少く支那を知つてゐるかは、斷るまでもないことである。恐らくは大膽にも支那を語るものの間にあつて、私は最も少く支那を知るものの一人であらう。

こゝにきてからまだ二十日にも滿たない。私は、上海にとつても、支那にとつても、一個の「外國人」――ホテルの窓と、料理屋と、ダンス・ホオルと、賣女と、競狗場とによつて、支那を「理解」しつゝある、通りがゝりの、一個の「外國人」であるにしか過ぎないであらう。けれども、凡ての東方的自覺にまで彼等の意識を進めたものが、今日は一樣に感じないではゐられないであらうやうに、それからまた彼等の心から忌まはしい帝國主義的精神のあらゆる殘物を清算しつくしたものが等しくさうであらうやうに、われ〳〵はこの支那――取り

のぞかれつゝある古るき支那に對しても、また新興の支那に對しても、一個の「外國人」以上の、何ものかゞあつて、たえずわれ〳〵の意識を内部から刺戟しつゝあるのを覺えないではゐられないのだ。

同情から理解が生れる。支那に對して、心からの、友達としての手を差しのばすことのできるものだけが、眞實に支那を理解したと主張するの權利を許されるであらう。

三

再び揚子江のうへに立つ。私は再びである、ヨオロッパからの歸り途にこゝに立ちよつた時からして七、八年目であらうか、私は再び揚子江上に立つ。

七、八年前の私が如何にヨオロッパに世界の中心を置いてゐたことであらう！　文明の沒落を叫びながらも尙ほ常にヨオロッパの地平線ばかりを見てゐた私が。――私は自白するであらう、七、八年前の私が、上海についても、支那についても、興味の一滴をもつてはゐなかつたといふことを。

けれども時代は變つた。時代がわれ〳〵の意識をつくつてゆくことを、誰れだつてどうすることもできない。アメリカ・マニイのやうに、支那マニイの時代がきたのだと、私はもとよりいはないではあらう。支那の興味はまだ甚だしく限られてゐる。「支那通」は世界を知らないし、世界を知るものは支那を知らない。支那はまだ謎の國であり、秘密の國であり、未來の國であり、それからしてまた〳〵われわれの生活からして、どこか遠いところに位置を占めてさへゐるやうではある。けれども昔の支那の聖者がそのはじめをつゝしむといつたやうに、この時である、われ〳〵の目が秘密の支那にと向けられることによつて、限りない重要さをもつであらうのは。

支那へと眼を開け！　私はかうした願ひをもつて今日は再び揚子江上に立つた――支那の「重要」さを口にする多くの人たちが、果して眞に支那の「重要」さを、認識してゐるかどうかを疑ひながら。

四

揚子江の流に聽かう。楊柳の長い一列の彼方に無限に橫る大地を見つめながら、一人心靜にこゝの神秘の流れに耳を傾けるだけの餘裕をもたう――この萬古に易ることのない、それから何千里か知らない、遠い〳〵奥地から運ばれてくる、この悠久の、恐らくは大自然が人類に與へてくれた最も偉大な贈物の一つである、この果てしもない長江のうへに立つて、われ〳〵をしてしばらく內的理解の方法によらしめよ。

マックス・シエラアのいひあらはしたやうに、人間こそは實に「內的

に全世界に開かれてゐる唯一の「動物」であるのだ。支那の凡ての歴史と運命とが——この偉大な支那、「地大物博」の支那、そして秘密の支那の秘密が、われ〳〵の前に、裸體のまゝに置かれてゐるのを、われ〳〵はこゝに見ることはできないか。

それぱかりではない、こゝに世界の明日をさへも、われ〳〵は見ることはできないだらうか。——ヨオロツパや、アメリカや、日本やの代りに、新しい世界の都が、こゝに約束されつゝあることさへも、見ることはできないだらうか。

五

支那を理想化するために、私は、もとよりこゝに來たのではない。支那についての、あらゆる偏見から、われ〳〵を解放せしめよ——恐支的な支那マニイからも、また日清戰爭以來のチヤンコロ的な支那觀からも。

支那の近代化の遲れたことが、如何なる理由によるかはこゝには問はない、けれども支那の近代化が遲々として進まなかつたことだけは事實である。われ〳〵はこれを日本に比べて見よう、日本の「模倣の天才」たちに比べて、支那の猿猴たちが如何に支那の近代化において手間どつてゐたかを。

「ヨオロツパの數世紀前の歴史をわれ〳〵は今日支那において見ることができる。」新しい支那といはれるものにおいて、われ〳〵はまた數世紀前のヨオロツパを、百年前のアメリカを、それから五十年前の日本の光景を目のあたりに見ることができるであらう。——否、それよりも一層に古るい〳〵傳統の拔くべくもなく存在してゐることを。

今日の支那がまだ如何に古るいかについて疑ひを抱いてゐるものには、次の一事、——紀元前一〇三二年からの青銅貨が今日も尙はこの國の奧地において流通してゐるといふの一事を記憶せしめよ、咄に袁世凱や、浙江財閥やの通貨とともに、遠い三千年も昔の聖人の手になつたものが、ともに並び行はれてゐるといふことの。

それからして今日の支那において行はれてゐる養蠶の法にしても、度量衡にしても、もしくは支那劇場において徒に騷音を發してゐるとしか思はれない、あの騷々しい樂器にしても、遠く黃帝の時に發明されたものから、恐らくは幾何の隔りもないであらうことを、私は恐れる。

六

私のホテルはこゝの有名な競馬場に面してゐる。競馬場——二十五萬弗の果敢ない夢を追うて、世界の各國から集まつてくる、多くの小

さい野心家たちの憧憬の都である、この大競馬場を中心として、「新しい世界」の俗惡から、カアルトン、南京劇場、永安公司、ザブリング・ウエル、「東洋一」のカセイ・ホテル、等々、あらゆる近代文明の一列がこの界隈に集まつてゐる。倫敦の五月のコンモンスにおいて見るやうに、こゝの競馬場では、テニス、野球、ホツケ、ゴルフ、ポロ、あらゆる近代的なスポオツが、たゞこれだけでも、上海をして最も近代的な都會としての資格をもたせるのに充分である。この上海、そして上海のうちの上海である、われ／＼の競馬場の周圍には何ごとが起つてゐるか。

私がこのホテルに移つてきてからまだ三日にしかならないのに、私はもう幾つかの葬式を見た。東京に住むこと二十年、近來たえて葬式らしいものを見たことがない私は、こゝにきてから三日の間に、「葬式の社會學」を組み立てた。

燒場が文明を象徴するやうに、葬式は祖先崇拜を象徴する。われわれはわれ／＼の窓下を、鐘を鳴らし、笛を吹きながらに通つてゆく葬式のうちに、支那の社會が如何なる「進化」の道程にあるかを見ることができるであらう。中には簡單に二人の男が棺をかつぎ、數人の親族らしいものが前後についてゆくといふのもあるが、またしば／＼何十百人かの小癟三と稱する、乞食とも、苦力ともつかない、窮貧の葬式によつて衣食してゐる人たちの群に、旗や、花や、鳥籠なぞの幾つかをもたせ、幾組かの樂隊を配置しながら、長い龍頭のついた棺を中央にして、支那人の所謂張旗打鼓しつゝ、扮犯儀戲の一大行列をなしてゐるのを、われ／＼は見るであらう。

纏足のいた／＼しい女を見ることは、こゝでは、むしろ稀れではある。けれども、自動車の、電車の、人波の、雜踏する中にあつて、悠悠鳥籠を手にしながら、心靜に、街頭に小鳥の鳴く音に聽きとれつつ步を移してゆく人たちが、あとから／＼と、つゞいてくるのを見よう、この機械文明に對する、東方文化の、永久的な彈劾の象徴を。

七

一九三〇年、世界の最も新しい町の一つであるこの上海において、一輪車がまだかうまでに殘つてゐようとは！ 夜明けの上海を見よ、こゝはまだ一輪車の世界だ！（上海だけで一萬台の一輪車がある！）支那において、今日もまだ人間の肩が如何に重要な交通機關の一つであるかは、こゝの上海においてさへも、直に理解ができる。「十二人の苦力は一台の荷車よりも安い。」奥地の勞働者は、百八十封度の小麥を、一日十錢の割合で運ぶとさへいはれる。

人間の價の如何に安價なものであるかは、この町に群がつてゐる人

力車――彼等が黄包車といつてゐるものの如何に多いかによつて、想像に餘られてゐる。北京には五萬五千人の人力車夫があつたといはれてゐるが、こゝの上海においても尚ほ二萬の人力車がこの町を占領してゐる。夜明けの上海は一輪車の都であるやうに、夜の上海は、完全にまでも黄包車の世界だ、それからダンス・ホオルと、野鷄と、遊蕩兒との。

夜の銀座街頭に往來する朦朧自動車の、あの物々しい光景を見たもののだけが、上海における黄包車の盛んな光景を想像することができるであらう。そしてまた伯林においてのあの古るめかしい馬車の時代錯誤を樂しむだものだけが、こゝの黄包車上の時勢後れを享樂するの特權をもつことができるであらう。

自動車の數は必ずしも少ないとはいへない、こゝには既に一萬二千五百の登錄がある。けれどもこゝの往來をゆくものの誰れでもが注意するであらうやうに、こゝの自動車の大部分は自家用である。――自動車はこゝではまだパヴリング・ウエル街に住むでゐる人たちの贅澤品なのだ。

何ゆゑにアメリカのフオドは尚ほ上海をさへも自動車化することができないで、彼は實業界を隱退したか？　支那ではまだ機械よりも人間が强い！　こゝでは人間が機械よりも――一週間に何萬台もつくり出すフオオドの大量生産よりも、人間が多量に生産されてゐる。そして人間の物質的生活がT型の理想のやうに、こゝでは單純化の理想をそのまゝに實現してゐる！

一哩十錢――日本の金にして一哩五錢と規定されてゐる、こゝの黄包車夫の價の、如何なるガソリンよりも安價なのを見よ。それから一食二錢か三錢で暮らしてゐる、こゝの勞働者たちの生活の維持が、如何なる機械の油よりも安價であるといふことを。

八

支那にはまだろく／＼道路がないといつても、われ／＼の言葉には何んの誇張もない。南船北馬と昔からいつてはゐるが、ジャンクの時代後れが、今日も支那の所謂南船の代表的なものであるやうに、支那の奧地には道路と名づけるに足るものが殆んどない。この廣大な支那の全體を通じて、たつた一千七百哩の道路が存在してゐるだけだといふことの一事を、われ／＼は先づ記憶しよう。――アメリカでは紐育州だけで八千哩以上もあるといふのに、あの素晴らしいアスファルトの道が。汽車の缺乏もまた支那の現狀を語つてあまりある――汽車の缺乏からして、今日の支那の殆んどあらゆる問題を理解することさへもできるであらう、内亂も、軍閥も、不統一も、「進步」の遲々たること

も。實にアメリカが人口一萬人について二百四十哩の鐵道をもつてゐるのに對して、支那は僅に三哩そこ〳〵である——孫逸仙が鐵道計畫にあのやうな重きを置いたことの動機を、理解するに少しも苦しまないであらう。

九

支那はまだ封建時代のうちにある。その人口の八割は農民であり、農民經濟は支那の、支那人の、それからあの匪や、馮や、等々の、打ちつゞく軍閥と軍閥戰爭の、基礎をなしてゐる。

支那の都會人口は、今日では一億近いといはれてゐる。十萬以上の人口をもつてゐる都市でさへも百十二を算し、その人口總數は僅に三千萬を超えてゐるといふ。けれどもこれ等の都市はもとより大部分田舍都市である。國民的都市と名づけることのできるものは殆んどなく、その大部分は田舍都市とわれ〳〵の名づけるものである。上海のやうな世界都市でさへも、支那の內地に對しては、一個の「外國」である。

近代工業がこゝに勃興しつゝあることはもとより事實、そして最も恐るべき事實ではある。けれどもこれ等の近代的工業と並んで、手工業がまだ支那において、如何に大きな役割を演じてゐるかは、上海の商店街を一瞥しただけでも明瞭である。否、々、上海それ自體のうちで、店と仕事場とを、共同にしてゐるもの如何に多いかを見よ。

都市の經濟それ自體においてさへ、われ〳〵は尙ほ見逃すことはできないものがある、買辦や、錢莊や、等々の金貸經濟の行はれてゐることがそれなのだ。それからして、マルクスが、商人資本の尙ほ支配してゐる地方では、われ等は常に落伍せる狀況を見るといつた、あの時代後れの商人資本が、尙ほ到るところにおいて支配的でさへあるといふことを。

一〇

宗法的な社會と共に、宗法的なイデオロギイが支配する。農民の多數のものにとつては、土匪と「共匪」との區別はないのであらうし、往來に爭つてゐる黃包車夫にとつては、二十錢銀貨の爭奪のほかには何の目的もないであらう。誰れやらが夜の四馬路に出沒する賣女の存在が支那にだけ宗法社會の缺陷を語るものであるといつたが、上海に住む六萬の乞食は、今も尙ほ四人の親分——乞頭の命令のもとに、唯々として、何一つ不平をいふものさへもない。試に、大都會から一步を踏み出して見ようか、四棟から出來てゐる、そしてこの四棟のものが中庭を挾んで一つの小さい城廓をなしてゐる、支那特有の家屋

の散在するのを見るであらう。それからこれ等の一個の聚落の中に、祖父母、父母、子、孫の一列が、——一群の祖父母から出た凡ての卑族たちが、日本でいふならば、兄弟や、伯叔姪甥、もしくはいゝとこ同志のものが、一つの大家族をなして、一つの經濟のもとに、もしくは別經濟のもとに、生活してゐる狀態を見ることができよう。そして老班といはれてゐる、大家族の長老が、今日も尚は家庭内においての主權をもつてゐるといふことを。

二

阿片戰爭の時からしてはもう一世紀にも近い。上海呉淞間にはじめて鐵道が敷かれた時からでさへ半世紀以上を過ぎた。それから支那近代化の旗印のもとに結合してきた、あの孫逸仙の國民黨が組織された時からでさへ、今は二十年にならうとする。そして、今に至つて支那の社會と人口との大部分のものは、封建的生活と、封建的イデオロギイとから、脱却しきらないでゐる。

それのみかは、こゝに——揚子江上を往來する大汽船の殆んど悉くのものと、それからこゝを脅威する砲艦の大部分の旗印とを見よ、一つの國家内においての、この異様の光景を——外國資本主義の侵入と、そして、帝國主義的侵略のほかの、何ものを意味しよう。支那はまだ〳〵宗法的・封建的・農業的社會の域を脱しきらないでゐるばかりか、これはまだ〳〵不幸にも植民地としての域を脱しきらないでさへゐるのだ。

陳獨秀の言葉に聽かう、支那は資本主義發達の害惡ではなくして、資本主義不發達の害惡に苦るしんでゐると——外は列強の帝國主義と、内は各地の軍閥との、二重の害惡のために。

三

支那の近代化が遲かつたか、早かつたか、それからして支那における謂ふところの「打倒帝國主義」の成功が、はか〴〵しかつたかどうかの問題は、私にとつては、二重の矛盾した答をもつてゐる。

これはあまりに遲かつたともいへるが、またあまりに早かつたとさへも。——日本の模倣の天才たちに比べて、支那の猿猴たちが如何に遲かつたかと、私はいうた。けれどもまた支那の廣大さと、人口と、それから何千年の昔から傳統してきた、彼の世界無比の一大文化とについて見よう。

支那の全面積の如何なるものであるかはこゝに指摘するまでもない。われ〳〵はこゝにはたゞ次の一事を記憶しよう、これが全ヨオロッパに匹敵するものであり、またその廣大さを世界に誇つてゐる、あ

のアメリカ合衆國の一倍半にも近いものだといふことの。

それから支那の人口だ。最近の統計は四億八千萬を告げてゐる。支那の人口が四億五千萬であるか、四億八千萬であるかは、もとより私の知るところではない。けれどもその何れでもいゝ。アメリカの四倍であり、そしてまた正に全ヨオロッパのそれに匹敵する。

また、それから、支那がもつてきた、あの古るい／＼文化について考へて見よう。そして、アテネやロオマやにおいてのやうに、その文化が單なる市民的文化ではなくして、全支那のあらゆる階級にまでも浸透しきつた、大衆的文化であつたことの事實について。われ／＼の注意を喚起せしめよ。そしてまたそれが何千年となくつゞいてきたものだといふことの、驚くべき事實について。

こゝで、われ／＼は再び同じ問ひをくりかへして見よう、支那のヨオロッパ化は遲かつたのか、早かつたのかと。

ヨオロッパの近代化が數世紀を要したことの事實について思へ、それからアメリカのやうな時代の最先端を誇るものであつても、六七十年前には、こゝに一大內亂があり、グラッドストオンをしてジェフアスン・デビスが一つの新しい國民を創造したとまでもいはしめたことの事實について思へ。またそれからしてピイタアから今日のボルシエキキまでのロシヤの近代化が、如何なる年月を費しつゝあるかについても。

支那の近代化は遲かつたどころではない、支那はあまりに廣大でもあり、偉大でもあり、複雜でもあり、重くもあり、またあまりに深くもあつた——われ／＼は次のやうに答へよう、近代的機械の力をもつてしても、支那を近代化するためには、優に數世紀を要するであらうし、それからしてまた今日のアメリカ的意味からするならば、支那が最後に近代化するであらうか否かさへも、遂に一つの疑問であると。

一三

支那の文化が傳統的な文化であつたことも一つの事實であり、またこの傳統的文化が支那の「進歩」を如何に妨げてきたかといふことも想像にあまりある。けれどもまたわれ／＼をして如何なる文化が嘗つて傳統的でなかつたかについて、またそれから如何なる文化が進歩的であつたかについて、一考せしめよ。

凡ての眞正な文化が「宇宙的全」への適應だといふことの事實について、われ／＼はわれ／＼の反省を促して見よう、それからしてまた、悠久なものへの憧憬と、認識と、承認とがなくしては、文化なるものがありえないといふことの事實について。

文化には進歩がない。あらゆる文化には進歩がない。進歩のあると

ころには文化はなく、文化のあるところには進歩はない。——こゝにアメリカには文化がなくして進歩があり、支那には進歩がなくして文化がある。

文化か、進歩か。人類は常に文化か進歩かの岐路に立つてきた。歷史の平衡が破壞されるのは、常にかくのごとき撰擇においてである。

アメリカは進歩を追うてきた。その過去において文化の片鱗をもたなかつたアメリカ人は幸か不幸か、彼等自身を常に靑年の若さにおいて見た。或は野蠻人の無智において。過去の存在をもたなかつたアメリカ人は、未來の存在だけを知つたのである。彼等は未來へ〳〵、發展へ發展へ、それから繁榮へ〳〵と急いだ。この時である。彼等が彼等自身の哲學をもつことができたのは。——人類も、世界も、國家も、永久に進歩するものだといふことの、それからしてアメリカには不景氣も、行詰まりも、沒落もないものだといふことの。

アメリカから一轉して支那の社會を見よう。アメリカ人が子孫を崇拜するのに對して、支那が祖先を崇拜することを。アメリカ人が若さにおいて誇りをもつてゐるのに對して、支那人が彼等の老耻の教育と指導とに甘んじてきたことを。アメリカ人が機械を崇拜し、機械によつて彼等の生活の悉くをつくりあげてきたのに對して、支那人が天に則り、天を崇拜し、また天を恐れてきたことについて。

支那には進歩がなかつたばかりではない。支那人は進歩を知らなかつたのだ。古代のギリシヤが進歩の觀念を知らなかつたやうに、ウパニシヤツドの印度がそれであつたやうに、凡ての眞正な文化をもつてゐたものの悉くがさうであつたやうに。支那の社會こそは、進歩的社會であることの代りに、これは正に一つの、そしてまた最も安定的な、傳統的社會であつたのだ。

一四

私は既に今日の支那において如何に封建的要素が強いかを述べた。我々をして、一轉して、支那の新しい方面について、一瞥せしめよ。この近代的大建築の一群はどうだ。東洋一のマーケットは、カセイ・ホテルの壯觀は、カピトルのトーキイは、バスは、無軌道電車は、アスファルトは、デパアトは、アパアトは、ダンス・ホールは、スポーツ狂は、カクテルの愛好は、「猥褻」と、「風韓」と、「イット」の氾濫は。性的生活における變化によつて文明の段階を知ることができると考へた、フウリエの社會學は、今日の支那において、最も多く具體的な意味をもつてゐる。

女は解放された。

[illegible]においてのやうに、カフエや、ダンス・ホオルや、デパアトや

働く女はまだ〳〵少ないであらう。支那においての革命的な運動が、昨日までは、學生運動の範圍から脱却することができなかつたやうに、今日の支那においての婦人の解放なるものも、まだ〳〵一部の知識階級、そして都會の有產階級の間に限られてはゐる。けれどもそれ等の有識、もしくは有產階級の間においての、若き婦人たちの躍進ぶりを見よう。

黄包車に乘つてゐる支那人の半ば近くのものが、それからして自用自動車――支那では自動車を汽車と呼ぶ――に乘つてゐるものの多くが、婦人、若き婦人、良家の婦人であることの事實を見よう。

日本の料理屋でも、カフエでも、そこに出入するものの殆んど凡てのものが、男であるのに對して、支那では、――少くともこゝの上海においては、男と女とが相半ばする。正にヨオロツパのそれのやうであり、またアメリカのそれのやうである。支那においては、新しい女たちは、男との同權を獲得した！ 日本の新しい女たちがまだ口舌以上に出でることができないでゐるのに。

一五

支那の改造運動に働いてゐるものの如何に若いかについては、多くの人たちがこれを語つてゐる。蔡元培や、譚延闓や、等々の、元老派と稱せられるものが、まだ五十代であることの一事を見ても、――日本なら政務次官級の年配だ――今日の支那の權力が如何に若き人々の手に移りつゝあるかを知ることができるであらう。

蔣介石と汪精衛との、支那においての二大立物がまだ四十初代の若者であることを、それから陳公博、周佛海なぞの國民黨からして、李立三、瞿秋白、等々の共產黨に到るまで、それからまた鄭伯奇、郁達夫等々のプロ文士の一群に至るまで、支那における改革運動の意氣の盛んなのを見よ。

こゝには若さがある、氣力がある、エナアジイがある――ポテンシヤル・エナアジイが、またそれだから豐かな未來が。

支那は若返りを始めたのだ。明治維新の日本が一つの若返りをしたやうに、今日の支那は一つの若返りを始めた。如何なる國民ももつことのできない長い準備と、無數の人口と、無限の自然とをもつて。

支那の近代化が、早かつたか遲かつたかなぞは、最早何んの問題にもなりえない――大なる變化には常に大なる準備が必要であつた！

一六

何千年來の傳統的な一大社會の平衡が破れた。過去と現在と未來とへの、新しい比例が、それからまた物質と靈魂との間における新しい

比例が、要求されてきた。

古るき傳統の代りに、新しい「進歩」が、また「進歩」の觀念が、新支那においての、新しい生活形態と、また新しい生活の理想たらんとす。

南北の戰爭なぞはどうでもよい。馮が勝つも、蔣が勝つも、誰れが勝つてもいゝ。戰爭以上の大きな變化が、戰爭の方向を定めてゆく。何人も、如何なる勢力も、傳統と進歩との、新しい平衡へのほかの、如何なる方向をも撰むことはできない。社會の力は、もしくは歷史の力は、如何なる個人よりも、團體よりも、軍閥よりも、官僚よりも、政黨よりも、土豪劣紳よりも、强い。支那においての方向は既に決定されたのだ。

一七

新しい生活から新しい意識が生れる。一つの新しい意識が生れてきた、新しい生活とともに實に一つの新しい意識が。

國民黨といはず、また右翼といはず、中央といはず、左派といはず、それからまた共產黨、第三黨、陳獨秀の一派といはなくてもいい、新しい意識が生れてきた。

ジョン・デュイが「新しい意識」といつた時に、彼がどのやうなものを意味してゐたかを私は知らない。けれども新しい意識は新しい生活への適合である。傳統と進歩との鬪爭の間において、新しい比例が、新しい意識をつくつてきた。この新しい意識である、今日の支那を支配しはじめたのは。そして何人も、何ものも、打ち克つことのできない——一つの打ち克ちがたいものとして存在しはじめたのは。

世界の人口の四分の一のルネサンスだと、誰れかゞいうたことがある。ヨオロッパの全面積に當るほどの、そして全人類の四分の一に當るものの、ルネサンスが起つてきたのだ。

一八

今日も尙ほ傳統の威力は重いに違ひない。傳統と進歩とが並び立つてゐる。一輪車と自動車と、纏足と斷髮と、軍閥と浙江財閥と、土匪と共匪と、特別市と租界と、並び立つてはゐる。共產黨と雖も、こゝでは、民族主義を無視することができないではゐる。あらゆる型の喪失と、そしてまた理論の喪失とは、こゝから、かゝる時代の混亂から生れる。けれども方向は既に決定された。

「過去と斷て」！　ベエコンや、デカルトや、あらゆる近代主義の哲學者の時代のやうに、過去との斷絕が、到るところに宣言された。アトポスの剪斷器も、支那の偉大な傳統を、一鋏みに鋏みきることはで

きないではあらう。けれども時代は、今日は、急激にも變つてきた。傳統が能率を犧牲にするといはれた時代からして、能率が傳統を犧牲にするの時代にと。

能率の無慈悲さが、支那の偉大な傳統を、喰ひつゝある。新しい方向とともに、新しいエナアジイが組織されつゝある。無限にまでも存在してゐる大支那のポテンシャル・エナアジイが、アメリカ的組織のうちに、世界の現實的な勢力とならんとす。

歷史の大なる轉回だと、私はいふだらう。たゞに支那の歷史においての轉回だけではない。世界の歷史が支那において、轉回をはじめたと、私はいふ。そして支那の方向轉換とともに、世界の今日までの均衡が破れつゝあると。またそして世界の均勢と、われ／＼の考へてゐるものが、明日はあとかたもなく破壞されてしまふであらうと。

一九

われ／＼をして再び楊子江上に身を置かしめよ。そして、支那を、日本を、アメリカを、また全世界を振りかへつて見よう。

先づこの支那はどうなりつゝあるか。楊子江上に夜は明けた。砲艦も、商船も、あらゆる外國の帝國主義的魑魅魍魎がその影を薄くしてきた。帝國主義の牙城は一歩々々拔かれた。世界戰爭を境として、支那においての帝國主義は、年一年と、その跡を沒してきた。「自轉車と、犬と、支那人」といはれたものは、今日は、力に滿ちてゐる、上らうとするものの力に、理想に、自覺に、支那は支那自身の力を感じてきたのだ、楊子江の偉大のやうに、彼等自身の偉大な力を。

楊子江の流れは一千六百哩もの上流にまで汽船を浮べることができるばかりではない、こゝの流域には二億の人類が住むでゐる、一つの流域に二億の人類が！ アメリカの二倍に近いほどの人類が！ 何んといふ偉大な存在だ！ そしてこの偉大な存在ではなかつたか、大支那そのものの存在を象徴するのは。

二〇

支那の歷史は、黃河の流域にはじまつた。盤古氏から、天、地、人、伏羲、神農、堯舜、禹、文、武、周公、孔子、昔の支那の文化は黃河の流域に生れ、育ち、そして花咲き、また年老いた。黃河はそれの使命と運命とをもつたのだ。そして黃河から楊子江へ！ 支那の歷史は不斷にこの方向をとつてきた。黃河の支那が傳統の支那を代表してゐるのに對して、楊子江のそれは新しい意識を代表しようとす。盤古氏が黃河の文化をつくり、黃河の文化が眞に中華の名に價ひしたやうに、楊子江の流域から、新しい盤古氏が生れ、そして楊子江上の新しい經濟と、政治と、意識とが、世界の平衡を打ち破るであらうの時が、近づきつゝあるのだと、私には思はれる。再びいふ楊子江に夜が明けた。(六月廿六日、江上、一品季にて)

「繫船時代」出現

——海上勞資戰の激化——

檜六郎

プロ作家葉山嘉樹君の傑作『海に生くる人々』にまつまでもなく、歐洲大戰の頃には、どんなボロ船でも、よしんばカチ〳〵山に出てくる狸の土舟でも、いやしくも船と名のつくもの なら、百パーセントのドル箱 であつた。船成金の輩出は、まだ吾々の生々しい記憶として殘つてゐる。同時に、吾々は、かうした船成金の犧牲となつてボロ船に乘組んだばかりに、あえなく海の藻屑となつた無數の海上勞働者を知つてゐる。

一九三〇年代の海運界は、俄然、形勢を一變させた。ボロ船は愚か、そのかみ優秀船と謳はれたのさへ、續々繫船の憂目に遭ふ始末となつた。文字通り『繫船時代』の出現にある。郵船、商船のごとき大資本を擁するものもその大部分は中・小資本をバックとする、いはゆる社外船主も、ひとしく、海運界闇黑時代の前に戰慄してゐる。

しかし、この場合でも、海運資本家は、他の產業資本家と同樣、あらゆる損失・犧牲を海上勞働者の肩に轉嫁させんと血眼の努力をつゞけてゐるのだ。海上勞働者にとつては、實に、海運界の成金時代も恐怖時代もあつたものではない。

さて、繫船の實狀はどうか。

七月末現在の調査によると、ザット次の通りである。（中外商業新報による）

A日本郵船所屬

（イ）すでに繫船せるもの

阿波丸	六、〇二八トン	伊豫丸	五、九六一トン
長野丸	五、八二四	セイロン丸	四、九〇三
天洋丸	一三、四〇一		

（ロ）繫船と決定せるもの

コレア丸	一一、八〇九	サイベリア丸	一一、七九〇
佐渡丸	五、八九八	丹波丸	五、八四四
安藝丸	六、〇三三		

合計七五、四八二

B社外船主所屬

		繫船地	航主
平和丸	二、〇一五トン	笠戸島	勝田汽船
菊丸	二、四三五	大阪	鹽崎與吉
銅山丸	二、六七〇	因島	橋本汽船
加賀丸	三、五五〇	因島	荻布海商
第十七眞盛丸	四、〇五〇	相生	原商事
鶴丸	四、二八〇	大阪	原田汽船
第六多聞丸	四、六五二	神戸	八馬汽船
雄山丸	四、五三〇	小樽	橋本汽船

御船丸	五、二〇七	江尻	三上株式
瑞光丸	六、六五〇	神戸	町田商業
遼海丸	七、四〇〇	因島	山本汽船
淺間丸	七、五〇〇	因島	山本汽船
大有丸	八、四〇〇	笠戸島	日出汽船
廣祐丸	八、四六二	神戸	廣海商事
幸喜丸	八、五三〇	相生	橋本汽船
麗洋丸	八、六九一	相生	東洋汽船
香洋丸	八、七〇九	相生	東洋汽船
旺洋丸	八、七五八	相生	東洋汽船
廣進丸	八、七六九	神戸	廣海商事
朝洋丸	八、八一一	相生	東洋汽船
關洋丸	八、八一七	相生	東洋汽船
靜洋丸	一〇、二八〇	相生	萬成汽船
陽光丸	一〇、六七五	因島	日本共同
陽南丸	一〇、六七九	因島	日本共同
海久丸	一三、〇六六	神戸	勝田汽船
合計	一七七、五八六		
(A)(B)總計	二五三、〇六八		

右のうち社外船主所有船舶トン數は重量トン數だが、日本郵船所有船舶の夫は總トン數だから、之を重量トンに引き直すと、總計約廿七萬トンに達するだらうといふのである。

思ふても見給へ。これだけの船が赤腹を出して、港々に繋がれてゐるのだ。而も船主の團體たる日本船主協會は、會員の要求によつて近く繋船費用として一隻に對し三千圓、合計八萬圓乃至十萬圓を貸付け、更に、足りない分は、例の手で政府から低利資金を借り出して大々的に繋船を奬勵し、彼等の當面の理想たる──海運賃引上の爲の──百萬トン繋船案を實行しようといふのだから、今に、日本の目星しい港といふ港には、薄氣味の惡い何かの死骸のやうな空船で一杯になるだらう。

だが、採算で生きてゐる「賢明な」海運資本家は、すでに、繋いである船の安賣りを始めてきた。現に日本郵船では、前掲の阿波丸(六、〇二八トン、明治三十二年建造)を因ノ島直渡十四萬一千圓で坂田組へ、同じく佐渡丸(五、八九八トン明治三十年建造)を大阪八月渡十三萬五千圓で大阪海事へそれぞれ賣り飛ばしたさうだ。目下長崎の三菱ドックに繋船されてゐる天洋丸(一三、四〇一トン、明治四十年代建造)も四十萬圓とかで身賣りの交渉があつた樣だが、まだ決定しないらしい。

天洋丸といへば當時の最優秀船で、一度でもアメリカ洋行の經驗あのものには、至つて馴染みの深いもので、久しく桑港航路の覇權を握つてゐたものだが、本年に入つて超優秀船龍田、秩父、淺間丸の三船の出現でスッカリ邪魔物扱ひにされたのである。なにしろ、秩父丸のごときは、一航海に、船客數だけでも最近一等百五十名、二等八十七名、三等五百八十四名を數へたのに、天洋級の例へば春洋丸のごときは、一等十三名、二等四十七名、三等百十五名といふ閑散振りで、このさき思ひ切つて運賃でも引下げねば春洋、大洋の二船の運命も天洋丸と同じだらうといふ話だ。

シヤトル航路就航のコレア丸、サイベリヤ丸も一時は巨船として鳴らしたものだが、本

誰が讀者の目に觸れる頃には、とつくに横濱港に繋がれてゐる時分だらう。

◇

繋船二十七萬トンとしても、約三百八十萬トンといふ内地在籍船舶トン數の七パーセント强に當る。愈々百萬トン繋船となれば二六・六パーセント强となる勘定だ。イギリスでは七月一日現在で、約九十二萬トンの繋船があり、總船舶トン數二千萬トンの五パーセント近い數字を示してゐるが、昨年の七月一日に比しては五十四萬トンの增加だとある。

更に、世界的にみると、總繋船數はザット五百萬トンだが、航海中のものでも滿腹どころか片腹さへガラ空だから、實際の船腹過剩高は專門家の推算では約千六、七百萬トンで、世界總船舶トン數約六千八百萬トンとして略二五パーセントは遊んでゐる譯である。

この世界的海運恐慌の最大原因は、何かといふと、ごく簡單に云へば、小麥その他の農產物の輸送量が激減した爲である。何人も知つてゐるやうに、一九二七――二八年度は、世界的に、主要農產物の大豐作時代であつた。就中、船腹の需要に最も關係の深い小麥は、一九二八年度に於てその以前五ヶ年平均收穫高に比て一割一分餘の增產であつた。それに一九二九年度の小麥收穫高が又も大豐作を傳へられて小麥相場は大崩落を始めた。然るに、一九二九年にいたると、小麥主要生產國に大旱魃が襲ひ、小麥は世界的に大減收となつたが、例の一九二九年秋のアメリカ取引所恐慌から『恐慌』は文字通り全世界化し、小麥等の農產物に限らず凡ゆる生產物は消費の激減のため一樣に生產過剩となり、荷動きは世界的に不活潑となり、それだけ船腹は過剩となり、加ふるに、海運界の世界的流行たる優秀旅客船やデイゼル貨物船の建設競爭は、速力增進、輸送能力增加となつて現はれて、逆に船腹の過剩を益々激くしたのである。

日本の海運界は、一面金解禁、緊縮政策といふ打擊に、他面先進國の海運競爭に重壓されて、二重三重の痛手を負ひ、つひに『繋船時代』の出現となつたのである。

◇

小麥にかぎらず、棉花、羊毛、ゴム、大豆、砂糖、肥料、鑛產物、生糸、木材その他一切のものの荷動きが不活潑となつたことは、世界各國における本年上半期の貿易と昨年上半期のそれと比較すると極めて明瞭である。商工省貿易局の調査によると、本年上半期中のイギリス輸出入額は昨年同期中に比し一割二分一厘、同じくドイツは一割一分、フランスは一割六厘、アメリカは二割一分二厘、日本は驚くなかれ二割七分一厘の激減となつてゐる。これではいかに日本の海運界がジタバタしたところで、追ひつくわけはない。

なにしろ、昨今の空前の運賃安では、船を動かせば動かすほど損がつく。例へば、北洋

材の積取りを例にとると、現在北洋材運賃はトン五十錢見當だが、船費はトン一圓二、三十錢につくから明かにトン七、八十錢の損となる。ところが、繋船をするとトン約三十錢で濟むから、差引き、四五十錢だけ損失が輕くなるといふのが、繋船者の腹なのだ。

それなら、どん／＼繋船すればいいわけだが、大資本を背景とするものはともかく、群小の社外船主にあつては、それさへ容易でないのだ。といふのは

第一に、假りに繋船費を調達し得たとしても、群小の社外船主は大概所有船を擔保として銀行から金を借りてゐるのだから停船してしまふと金利さへ支拂へなくなる。そこで、厭々ながらも船を動かして金の遣り繰りをつけなければならない。

第二に、大概の社外船主は、繋船費さへ自力では調達し得ないのである。繋船してからの費用どころか、さしあたり必要な船員の解雇手當さへ調達し得ないものがザラにある。船主は、海商法によつて、船員を解雇する場合は二ケ月分の給料を支給しなければならないが、これの遣り繰りがつかなくて、船主のなかには、海員組合に借用證文を入れて金を借りこれで解雇手當を支拂つて漸く繋船したものさへあるといふ有樣だ。

◇

だが、繋船は、さうした事實上の障害にも不拘今後益々增加することは大勢である。すでに、約二十七萬トンの繋船によつて、高級および普通船員を合して約六千名以上の失業者が出てゐよう。彼等は、法定の解雇手當さへ滿足に支給されぬため、下船と同時に大部分は路頭に迷つてゐる。海上勞働者は、ひとたび失業すれば、陸上勞働者よりもなほ再就業が困難であることを忘れてはならない。

日本海員組合は、三十萬圓と稱する積立金を擁し、場合によつては失業者救濟のため一部積立金を投げ出す覺悟ださうだが、全部を投げ出したところでたかが知れてゐる。もつと／＼積極的な要求を掲げて船主なり政府なりにぶつかつて行くべき時ではなからうか。

日本船主協會は、海上勞働者の大衆的解雇を目的とする繋船運動と共に、さらに資本攻勢を組織的に一歩を進めて、昭和三年五月日本海員組合が海上ゼネ・ストの決行で獲得した最低賃銀制撤廢運動に邁進せんとしてゐる。すでに、食糧手當減額や航海手當減額を組合幹部の『讓步』によつて、海上勞働者は否應なしに『強制』されてゐる。組合幹部は、最低賃銀制のみは斷乎として死守すると豪語してゐるさうだが、嵐のごとき資本攻勢の前に、彼等は果して成算ありやいなや。

『繋船時代』の出現は、海運勞働者にとつても、はたまた、海運資本家にとつても、新なる闘爭場面を提供したものにほかならぬ。（三〇・八・四）

農民損失補償と教員俸給の地主負擔

片山哲

失業の大群の怒濤はトウ／＼行くべき處へ行つた。政府は現下の失業者三十七萬餘に過ぎずと强辯した處が、大正十四年の國勢調査以來毎年の新勞働力供給量と生產部門への吸收狀態及び最近に於ける經濟界の實情とに照して、現下の失業者數は實に百三十萬人を下らないであらうとは目下の定說であらう。大正十二年より昭和三年迄の社會局統計に依れば工場勞働者の三割乃至四割、鑛夫の一割乃至一割五分が歸農したことゝなつてゐる。昨年と本年上半期にかけて更にその率が上つたのみならず解雇が暫く仕事を探してゐたが結局歸農しなければならくなつた失業者は可なり多くなつてゐるに相違あるまい。この歸農失業者は果して農村に於て仕事を見出し得たかと謂ふに決してさうでない。この失業者の狙つてゐる耕地面積は極めて狹少であるから到底細分化しても、この失業者を吸收する能力をもつてゐない。歸農者の數はドン／＼增加する、しかし仕事は相變らず無いとすれば農民生活の窮乏を告げ、ドン底の疲弊狀態に陷るのは當然なわけである。

これは一部分の現象であるとしても、元來現在の農村經濟關係は不合理矛盾だらけであつて、一時的胡塗化し政策では到底之を解決することの出來ない狀態におかれてあつたのである。處が時の政府も政黨も又自治制關係者も何等根本的治療を考へることなくして一時の膏藥でその日／＼を過してきた結果、遂に今日の破綻と爆發を見るに至つたものである。現下農村窮乏、農民餓死の狀態は、資本主義經濟組織の矛盾とそれから來る世界的不景氣恐慌のあふりを食つてゐることに原因があるであらう。又舊平價による金解禁の結果、債權者を極度に利得せしめたに拘らず、金がなく、債務を負つてゐて且つ生產者たる地位に居る農民を窮乏の谷底にタヽキ陷したことも重大なる原因をなすであらう。更に又現政府の採つてゐる消極緊縮節約政策は大金融資本家を安全地帶に導いて保護したけれども、大衆に犧牲を强いると共に凡ゆる責任を大衆に轉嫁せしめ、資本主義發展期に於て唱へられてをつた景氣循環論をそのまゝ平氣で述べ立て、何等無產階級福利增進の積極政策を採らざる結果、茲に矛盾撞着の化身た

る農村がこの深刻なる不景氣の大暴風に一溜りもなく倒れさうになつてゐるはこれ又當然の歸趨と謂はなければならぬ。

そこで繭價は急激に暴落する、農産物は又馬鹿〳〵しい程の安値で而も殆んど賣れない、各地の製糸業者の休業破産に依つて男女工が失業し歸農する、實に現時の農村は暗憺たる狀況を呈し、、、、、、、、、、、、、ゐる。、、、、、、、、、、、、、、、、、、、。この窮乏打破のために何等かの非常時的緊縮對策を採る必要に押し詰められてゐるのである。在來戰爭の時は戰時非常特別税をとつてをつた。且又財界動亂に際してはモラトリウムを發布し且つ一部金融資本家の破綻を救濟するために十億圓の大金を融通し、又糸價下落の傾向あるや銀行家並びに製糸業者の强請に盲從して極めて簡單に糸價補償法を發動せしめる等の資本家屈從振りを敢てしてゐたではないか。それ等と殆んど段違ひの農村窮乏に當面しながら政府は徒らに袖手傍觀してゐる。彼等が自然放任主義をとつてゐる間に地主は自己防衛のためにドン〳〵攻勢をとつて遠慮なく小作人を虐める。小作料を減免する處ではなくして直ちに土地返還の訴訟を提起する、殊に養蠶家の小作料支拂問題に關し本年末は必ず深刻なる法廷戰が展開することゝ思はれる。更に又現下の緊急事件は小學校教員減俸と納税延期問題とである。國税地方税共に高くなる、しかし窮乏のために如何しても支拂ふことが出來ない、納められないとせば差し當り小學教員俸給を削減しなければならぬといふ板挾みの狀態となる。これも地方經濟制矛盾の致す處であつて今日の現狀が續けば勿論弱い小學教員虐めとなり教育の不振となる。それ故我々はこの矛盾より來る當然の窮乏打破のために非常手段としての對策を積極的に講ずる必要があることを痛感しこれの即時斷行を高唱するものである。これを要約說明して見れば

一、耕作農民の、、、

二、養蠶農民の損失補償

製糸業者と融通銀行家とを保護し又は保證せんとした既成兩黨は果して無産養蠶農民のこの慘酷なる損失を積極的に補償救濟するであらうか、補償すべきが理論上當然である故彼等と雖もこれをさう簡單に排撃し得られぬであらう。農家にとつて唯一の現金收入たる養蠶が斯樣に慘落し一貫目一圓と謂ふ狂相場を現はしてゐる狀態は、社會的事情に依つて罪なき農民を極度に苦しめてゐるのであるから國家が之を補償救濟するは當然であらう。現に政府は養蠶を奬勵した、その産額は五千二百七十萬貫となり昨年より四割二歩增とはなつたが不幸にもその結果餘計に安くなつた。養蠶家二百三十萬戸一戸平均二十三貫である故三圓とすれば六十九圓しかならない、生産費どころの騒ぎではなく全く慘澹たる狀

額である、この二百三十萬戸に對する損失補償は政府のさきの態度から謂つても當然の責任と謂はなければならぬ。在來政府のなし來りたる助成金及び補助金政策は百害あつて何等の效果がない。それ故この補償金は生産に從事する農民に直接補償主義によるべきことを主張するものである。

三、小作料の減免又は支拂猶豫

繭の生産費を低減せしめやうと思へば如何しても養蠶小作農の小作料を引下げせしめなければならぬ。生産費の半分以下に下つてゐる繭を持ちあぐんでゐる小作養蠶家にとつては本年は小作料の減免又はその支拂猶豫が不可避的なことになつてゐるであらう。政府は小作料の問題を地主の自由に放任することなく須らく大いに干渉し、繭及び農産物の慘落によつて苦しむ小作農民を救濟するために敢然として小作法制定に到るまでの緊急案として減免及びその支拂猶豫令を發布すべきであらう。

四、農村生産資金の融通

五、肥料公營による無償配給

六、耕作農民の負債に對する支拂猶豫

等は何れも即時實施しなくてはならぬ緊急對策のみである。

時に農民の負債は驚くなかれ五十億圓と謂ふのであるから、生産的の活動をなす餘力殆んどなく生活費のやり繰りに追はれてゐるの慘狀である。

七、教育財源としての臨時地主税の設定

以上六個對策の即時斷行に依つて窮迫農民を幾分か救ふことが出來る。救ふことが出來るけれども、、、、、、、、自治體の財政は猛烈な打撃を受けるであらう。差し當り問題の焦點たる小學教員の俸給に關しては義務教育の重要性を考慮し、緊急非常手段として地方税たる地主税を課しその收入をもつて教員又は地方公吏の俸給等に宛てることゝせばよからうと考へるのである。根本策としては我等義務教育の公費制徹底のために色々の案をもつてゐる。しかしながらそれには相當の時日を要する、今日は極めて容易にして且つ簡明直截なる收入の途を考察するより他に方法がない、それで私は地主税即ち土地を所有するのみならずその土地を小作に附してゐる所謂大地主階級（當然自作農を除く）に對し臨時税を課し、その税收入を以て義務教育の窮況打破を計るべしと主張するものである。租税延納による教育の不振を防止するため租税能力ある者にその責任を擔當せしめることが當然のことであらう。小作地の面積小作高、小作人數等により高率累進賦課せんとする、今日の資本利子税の一分派として即時斷行を主張する。これが前記要綱と相まつて農村窮乏打破のために效果あることを信ずるものである。

ロシアは何年後に共産制社會を實現する？

（五ケ年計畫の實績と次の大計畫(ゲネプラン)の話）

大竹博吉

○

「新經濟政策へ退却したソヴエト聯邦の共産黨がいつ何ういふ風に共産制社會を建設するか？」――といふことは非常に興味の深い問題である。

ソヴエト聯邦はいま「五ケ年計畫」の第二年目を經過しつゝある。

スターリンは最近開かれた第十六回共産黨大會（本年六・七月）で、追擊戰を指揮する常勝將軍のやうに「五ケ年計畫の進行速度をもつと早めろ！　資本主義的分子にたいする攻勢を全戰線にわたつてもつと强めろ！」――と號令してゐる。

この「ソヴエト聯邦經濟建設五ケ年計畫」とは何か？　それは新經濟政策への退却時代から社會主義的攻勢時代に轉ずる重要な戰略だといへる。一九二八・九年度――一九三二・三年度を包括する第一次の五ケ年計畫は極度に緊張した戰時氣分でソヴエト聯邦の國民經濟を急速に發展させながら次ぎの根本方針を遂行してゆくのを目的としてゐる。

一、今まで農業國であつたソヴエト聯邦を工業化する。

二、個人主義的な小農經營が主體をなしてゐるソヴエト農村を大農經濟經營に再組織してこれを社會主義化する。

三、國の經濟組織のうちに殘存する資本主義的分子を克服し

て社會主義的分子を强化する。

この過程が進行するにしたがつて第二次、第三次の「五ケ年計畫」を立てゝ之を押しすゝめて行く。するとそこには——(一)工業の非常に發達した(二)大農式に社會主義化された農業組織をもつ(三)資本主義的分子の存在しない——新らしい社會が描きだされる。共産黨が終局の目的とする共産制社會が實現する！ といふ事になる。

○

「五ケ年計畫はボリシエヴイキ流の空想だ」——。

五ケ年計畫案が發表された當時には、さう言つて嘲笑する者が多かつた。ブルジョア文筆家ばかりではない。共産黨内の代表的な理論家ブハリン等は右翼から「攻勢に轉ずるのは時期尚早だ」と言ひ、トロツキー派は「五ケ年計畫はスターリンのおもちやだ」——と冷笑をあびせた。

スターリンのおもちやはどういふ作用をしたか？

まづトロツキーとブハリンは門出の血祭りといふ形で右と左に薙ぎ倒されておもちやの犧牲になつた。——それからどうなつたか？

五ケ年計畫は多くの方面で最初のプログラム以上の成功と共に進展してゐるといふことが、近頃になつてだんだん判つてきた。今まで嘲笑してゐた世界各國の資本家は急に不安と共に「ボリシエヴイキの空想——スターリンのおもちや」に注意を拂ひだした。

アメリカでは——「ボルシエヴイキが强制と掠奪によつて人民から捲きあげた物資を自由の祖國アメリカへ輸入させてはならない」と言ひだした。最近アメリカの港で起つてゐるソヴエト商船の抑留事件やソヴエト商品の輸入禁止事件がその具體的なあらはれである。

日本ではまづ露領漁業家の一團が——「ソヴエト漁業五ケ年計畫の進出に對抗するため力を合せて日本人の血と汗で獲得した極東露領の漁業權益を擁護せねばならぬ」と騒ぎだした。もともと利己一徹の露領漁業家が五ケ年計畫對抗策として「日本人の血と汗で購つた權益」の名において最近企業合同をするに至つたのはその具體的なあらはれである。

ソヴエト聯邦内に利權企業を持つてゐる世界各國の利權家は——「ソヴエト政府は五ケ年計畫の發展と共に外國人利權企業

を壓迫してこれを放棄させようとする徵候が次第に著るしくなつて來た」と不安を感じはじめた。その具體的な現はれは、ソヴエト國民經濟の發展と共に熟練勞働者の缺乏が起り、そのため外國利權企業にたいする勞働者供給を制限し、賃銀の引上げを要求しだした——等々。

すべて「五ケ年計畫」が冗談でないことは事實の上で判つてきた。だが、資本主義の世界にまはりから圍まれてゐるソヴエト聯邦では、いつ何らいふ形で共產制社會が建設されるであらうか?

○

レニンは「新經濟政策へ退却するのは新らしい力と共に社會主義の建設へ——また社會主義のもつとも完成された形態としての共產制社會の實現に向つてすゝむ準備のためだ」——と言つた。が、凡そ何年の後にどういふ範圍で共產制社會を實現することが出來る——とは豫言しなかつた。

その後になつてスターリンは「一國內社會主義建設可能論」を唱へた。——現在ソヴエト聯邦を圍繞してゐる世界資本主義列國は、地球のどこかで社會主義國が存在することを喜ばないのは無論だが、資本主義列國がその特徵としてもつ帝國主義政策といふ相矛盾する利害關係と資本主義國內にゐる勞働階級の支持とのお蔭で、たとへ一國だけであつても社會主義國は資本主義諸國の包圍のもとに自分の存在をつゞけることが出來る、といふのである。×××が起らないでも、ソヴエト聯邦は單獨で——一國內で社會主義の社會を建設することが出來る、といふのである。このスターリンの理論によるとソヴエト聯邦における社會主義社會の實現といふ展望がやゝ近くに見えてくる。なぜなら「××××」を「社會主義社會建設」の不可分條件としないからである。

五ケ年計畫は、このスターリンの「一國內社會主義建設可能論」から出發してゐる。

が、スターリンも何年後にソヴエト聯邦一國內の社會主義建設を完成してそこに共產制社會を實現することが出來る、といふ豫言はしてゐない。今度の第十六回共產黨大會でも、彼れは「社會主義化に向つて異常なテンポで進みつつある」——と言つてゐるが、この先何年間でこの進擊の目的地へ到達するか、を豫言してゐない。

けれどもソヴエト聯邦が社會主義化に向つて計畫的に進んで行つてゐる以上、そこではどういふ風に、何時までに社會主義化が完成して、共産制社會——または共産制國家が建設されるのであるか？といふ問題が立てられない筈はないと思ふ。

○

ソヴエト聯邦の「國家計畫委員會(ゴスプラン)」はこの意味において、現在非常に興味のある仕事に着手してゐる。

それは、「ゲネラリヌイ・プラン」——又は略して「ゲン・プラン」（大計畫案）——の作製である。

この「大計畫案(ゲンプラン)」は現在進行中の第一次五ケ年計畫の最初の二ケ年間の實績に立脚して、次の第二次五ケ年計畫とさらに第三次五ケ年計畫までを包括する前後十五ケ年間にソヴエト聯邦を「何處まで到達させるか？」——といふ詳細な計畫案である。丁度、レニンの大電化計畫を、國民經濟の全般に擴大する事になる。

この「大計畫案(ゲンプラン)」は未だ完成されてゐない。未だ國家計畫案委員會の内部で、學者專門家の間であらゆる方面からこの「大計畫案」問題について活潑な討論が行はれてゐる最中である。（大計畫案は來春までに完成發表の豫定である）

現在論議の中心となつてをり、また最も强く我々の興味を惹くのは「十年——十五年の期間内にソヴエト聯邦内に共産制社會を建設し且つ技術と生産の方面でアメリカ合衆國を追ひ越す」——といふエヌ・コワレフスキーの案である。

○

コワレフスキーは「大計畫」案の結論で次のやうに言つてゐる。

一、技術と生産の方面で世界資本主義國中の最先進國に追ひつき且つ追ひ越す。

二、第一次五ケ年計畫（一九二八・九年度——一九三二・三年度）が終る迄即ち十月革命から十五ケ年間にレニンの立てた協同組合計畫を遂行して新經濟政策(ネップ)の目的を完了する。

三、第二次五ケ年計畫（一九三三・四年度——一九三七・八年度）で社會主義經濟形態に進展し漸次により完成した共産主義形態に轉向する。

四、十年——十五年間の再組織の結果として資本主義と共産主義の兩勢力が世界に共存するといふ條件のもとに許され

る範圍内で共産制社會の完成された形態を建設する。」

この結論は、現在の第一次五ヶ年計畫の二年間の經驗とソヴエト聯邦のもつ天然富源、技術的進步、勞働力等を基礎としてそこに可能な發展過程を考察し、これをアメリカ合衆國の經濟發展と比較することによつて抽き出されてゐる。

例へばコワレフスキーは――アメリカ合衆國が一八五〇年から一九二五年までの七十五年間に達成した約二十一倍といふ生産増加を、ソヴエト聯邦は十月革命の日から二十五年間に達成する可能性があると指摘してゐる

また――第二次五ヶ年計畫の終りの年である一九三七・八年度にはソヴエト聯邦の石炭、石油、鐵、機械工業、電氣工業、その他輕工業各部門の生産高は現時（一九二九年度）のアメリカ合衆國の生産高を凌駕する、そして次の第三次五ヶ年計畫の終りの年までには、ソヴエト聯邦の生産増加率が爾後のアメリカ合衆國の生産増加率に比べて遥かに高度なことによつてこれを追ひ越すことが出來る、と指摘してゐる。

こゝではアメリカの生産が最新式技術の完成されたものと共に多くの舊式技術を併存してゐるのにソヴエト聯邦の生産技術が殆んど總て最新式のものを以て新規に裝置されること、勞働生産力の大きいこと等が强調されてゐる。

○

最後にこのコワレッスキーの案は、ソヴエト聯邦はこの大計畫期において、無階級の共産制社會を建設するけれども、世界ではまだ、舊い資本制と新らしい共産制とが共存する、だから、この共産制社會は、その最終形態たる××××に導かれるのでなく、外國からの間斷なき壓迫に抗爭するため必要な國家機構を保存するであらうといふことを指摘してゐる。これはスターリンの「一國内社會主義建設可能論」と全然一致してゐる。

かういふ大計畫案は、すべて第一次五ヶ年計畫の實績を基礎としてゐる。そこで五ヶ年計畫の實績はどんなものであるかを具體的に概觀しよう。

○

スターリンは第十六回共産黨大會でソヴエト聯邦と主要な資本主義國とにおける最近三年間の生産狀態を對照して次のやうに説明してゐる。

「最近ドイツの景氣研究所が發表した鑛業及び大工業を一括する工業生産統計によると、一九二八年の生産水準を一〇〇とし一九三〇年第一期のアメリカ合衆國の生産水準は九五・五であり、ドイツは九三・四、イギリスは一〇七・四であるが、ソヴェト聯邦は一五五・五を示してゐる。ソヴェト聯邦の工業生産が異常な速度で發展してゐるはこれで判る」

他の國家計畫委員會（ゴス・プラン）の調査をとつて見ると一九二六・七年度のソヴェト聯邦の國民總收入は二百三十一億留餘であるが、今年度——一九二九・三〇年には三百四十億留以上に達する。かく毎年平均一五％の國民收入增加率を示してゐる國は、現在もつとも進歩した資本主義國のうちにも例がない。

○

農業國から工業國への轉化といふ五ケ年計畫のプログラムはどういふ實績をあげてゐるか？

五ケ年計畫の第二年たる今年度に——ソヴェト聯邦では工業生産額が農業生産額を追ひ越した！　これはこの國の歷史に特筆さるべきことである。

戰前のロシアでは國民收入中の工業生産額は四一・一％であつた。五ケ年計畫の第一年——一九二八・九年度にもまだ工業生産額は四八・七％で僅かではあるが農業生産額の方が多かつた。ところが一九二九・三〇年度には工業生産額五三％強——農業生産額四七％弱といふ比率を示すに至つたのである。

ソヴェト聯邦はもはや「農業國」とは言へない。「工業國への轉化」——の第一歩に入つたのである。この年の農業の生産高は戰前の一一四％を示すに過ぎないが、工業生産高は一八〇％に增加してゐる。

○

五ケ年計畫の最重要問題である生産の社會主義化といふ過程はどういふ狀態で進んでゐるか？

まづ工業の方面について觀察しよう。——國の工業化に重心をおいてゐる五ケ年計畫では、生産手段の生産（重工業）に全力が注がれてゐる。

一九二七・八年度には——ソヴェト聯邦の工業生産中で生産手段の生産が占める比率は二七・二％に過ぎなかつた。他は悉く消費品の生産であつた。五ケ年計畫の第二年までにこれを三

二・七%に高めた。

　ところで工業生產を社會主義化するといふ問題はどういふ狀態で進展してゐるか?

　一九二六・七年度に社會主義化工業に投下された資本總額は——十二億七千萬留餘であつた。今年度は四十二億留餘——約三倍の增加を示した。私營工業への投下資本額はこの期間に六千三百萬留から五千百萬留に減少してゐる。社會主義化工業が、躍進的に勃興する反面に私營工業は凋落の傾向を辿つてゐることが判る。社會主義化工業の正味生產額はこの期間に百二十億留から二百四十億留に二倍以上も增加してゐるが、私營工業の生產額は四十億四千萬留から三十三億留に減少してゐる。

○

　農業社會主義化の過程はどう進んでゐるか?

　ソヴエト聯邦農業の社會主義化といふ問題は、現在やかましく傳へられてゐる「官公營農業(ソフホズ)」と「集團農業(コルホズ)」の組織と密接な連關をもつてゐる。「集團農業(コルホズ)」は——ソヴエト聯邦特有の貧・中農の組合農業である。

　ソヴエト聯邦の農業は今日まで——殊に新經濟政策以來ますます分散的・個人主義的經濟形態を持續してゐた。この農業狀態は國民經濟社會主義化の途上に橫はる大きな障碍だと見做されてゐた。事實、工業の方面ではその大部分が漸次に社會主義化された時に、農業の方面では壓倒的な大部分が個人經營のまゝで殘されて來たのである。

　一九二八年に非常なパンの缺乏が起つた。穀產地方の一部の凶作にもよるが、他の大きな原因は、私營農民中の富裕層——いはゆる搾取農階級がソヴエト穀物買付機關の公定相場買上げにボイコットした點にある。

　そこで、官公營農業を擴張し、中・貧農の分散的な私營小農經營を大規模な集團農業に再組織して農業を社會主義化し、これを國家機關の中に統制するといふことが穀物問題解決の唯一の鍵だといふ結論に達した。

　だから五ケ年計畫では官公營農業(ソフホズ)の擴張と集團農業(コルホズ)組織の奬勵に全力が注がれた。官公營農業はトラストその他の形で經營される非常に大規模な農業組織である。集團農業は中・貧農が農具や機械やその他の生產手段を共有として一種の株式組織でこれに加入し勞働單位と持株とにしたがつて收穫からあがる收

入の分配をうけるといふ組織である。

○

五ヶ年計畫がこの二つの農業形態の發展にいかに盡したかは次の事實でわかる。

一九二七・八年度に、ソヴエト政府が官公營農業（ソフホーズ）のために融資した額は六千五百七十萬留であつたが、今年度は――八億五千六萬留の融資をした。最近三年間に官公營農場の手へ新たに供給された耕作用トラクターの數は一萬八千台（三十五萬馬力）に達する。官公營農業機關の耕作面積は五ヶ年計畫の豫定よりも遙かに激增した。五ヶ年計畫によると――官公營農業の耕作面積は五年目の終り（一九三二・三年度）に五百萬ヘクター、穀物正味生產高は五千四百萬セントナーと計上されてゐるが、實際では第三年目たる來年度（一九三〇・三一年度）には八百萬ヘクターの耕作面積と七千百七十萬セントナーの穀物を生產することゝなつた。官公營農業機關のうちの代表的なもの――「穀粒トラスト」（フレボ）、「官公營農業中央組合」（ソフホズ・ツエントル）、「ウクライナ官公營農場聯合」（ソフホズ・オブエヂネニエ）、「砂糖聯盟」（ソユーズ・サーハラ）等は、現在いづれも既に各百萬ヘクター內外の穀物耕地をもち「穀粒トラスト」（フレボ）の如きは一九三二・三年までに千四百萬ヘクターの耕地を一手に經營する豫定計畫をしてゐる。

○

集團農業化の過程はどうか？

この問題は近來日本の新聞等にもしばしば報道されてゐる。農民は非常な勢ひで集團農業經營（コルホーズ）に轉向しはじめた。現在――五ヶ年計畫の第二年目において既に五ヶ年間に達成する豫定の一倍半といふ暴風的な發展を遂げたほどである。

一九二七・八年度に政府が集團農業化のために融資した額は七千六百萬留である。今年度一九二九・三〇年度には四億七千三百萬留といふ巨額が集團農業化のために融資された。ほかに搾取農（クラーク）退治の結果として富農から沒收された四億留以上に相當する農具その他の財產が集團農業組合の利用に移された。この事實のうちには集團農業化運動と農村における階級鬪爭がいかに尖銳な形で行はれてゐるかゞ鮮明に描きだされてゐる。

今年度中に集團農業用に充てられたトラクターの數はトラクター中央組合の七千台と官公營農場から集團農場のために供給された三萬台といふ多數に上つてゐる。また百三十萬頭といふ

馬匹を配屬する七千ケ所以上の農業機械・馬匹供給所が集團農業のために開設された。ソヴエト聯邦内の集團農業耕作面積は一九二七年の八十萬ヘクターから一九三〇年には三千六百萬ヘクターに——實に三年間に四十倍以上に激增した。戰爭や革命以上の大變革がソヴエト農村の到る所に捲きおこつてゐる有樣が想像される。

（このソヴエト農村變革の姿を一層親しく眺めたく思はるゝ讀者は近く刊行の筈である山内光氏の「アイゼンシュタイン作（古きものと新らしきもの）映畫物語」を讀まれることをおすゝめする）

五ケ年計畫のプログラムによると一九三二・三年度に集團農業から收穫される穀物正味生産高は一億九千萬セントナーの豫定であつたが、第二年目において既に二億五千萬セントナーに上つた。

その結果、官公營農業と集團農業——社會主義化農業が商品として市場へ賣りだす穀量は私營農業の商品穀量の五二%を占めるに至つた。

この點を指摘してスターリンは「曾て我々の五ケ年計畫を嘲笑した者は、今では自分の不明を自から嘲笑することになつた。我々は工業發展の五ケ年計畫を四年間で遂行し、農業社會主義化の五ケ年計畫を三年——二年半で遂行する！」——と言つてゐる。

○

かういふ經濟的變化過程のうちで勞農階級の物質的、文化的狀態はどういふ方向に進みつつあるか。それは可なり興味のあることだし、重要なことでもある。

國民經濟が社會主義化されるにつれて、國民收入のうちから××××××××××××××勞働階級の取前か增加するのは自然である。この勤勞階級の取前の增加は、現在のソヴエト聯邦の立て前では、一部は勤勞階級自身の私生活の向上に、一部は社會主義的生産機關の擴張に振りむけられる。五ケ年計畫では國民收入の非常に多くの部分が經濟發展のために動員されることになつてゐる。

現在世界各國は經濟恐慌のために生産の停頓や衰退と共に失業者の激增に惱んでゐる。ソヴエト聯邦ではそれと正反對の現象が起つてゐる。前に記すやうな生産の激增は主として生産

技術の改良によつて行はれてゐる。が、それでも勞働者の數はますます增加し、失業者の數は減少してゐる。殊に熟練勞働者の不足に惱んでゐる。何らかの形で生產に從事する賃勞働者（智能勞働者を含む）の數は、最近三年間に一千〇九十九萬人から一千三百十二萬人に增した。この中で筋肉勞働者は七百〇六萬九千人から八百五十三萬三千人に增加した。更に大工業に從事する勞働者（事務員等を除く）だけについて見ると、二百四十四萬人から三百〇三萬人に增してゐる。一般賃銀勞働者は一九・五%、筋肉勞働者は二〇・七%、大工業勞働者は二四・二%の增加で、大工業勞働者の增加率が一番高い。生產にたづさはりうる者の失業者は極めて少ない。中央職業紹介所の調査によると、各種の企業からくる熟練勞働者に對する求人申込の八割まではこれを滿たすことが出來ない、と言つてゐる。熟練勞働者が非常に缺乏してゐることが判る。

○

國民收入の分配狀態にも最近數年間に可なり興味のある變化が起つてゐる。國家計畫委員會の調査によると、國民總收入のうち（一）他人の勞働を搾取しない勞働者及び農民の取前は一九二七・八年度の七五・二%から一九二九・三〇年度には七七・一%に增した。（二）この期間に搾取農(クラーク)と都市資本家の取前は八・一%から一・八%に減少した。殊にこの搾取農都市資本家の取前は一九二八・九年度の六・五%から今年度に至つて急激に減つたことは、特徵的な現象だと言へる。（三）手工業者の取前六・五%から四・四%に減少（四）國營事業の取前八・四%から一五・二%に增加した。

この統計は資本家的分子にたいする鬪爭と社會主義化の過程をもつとも雄辯に語つてゐる。ソヴエト聯邦では都市と農村の資本家的分子が國民總收入の中から取つて行く分量は最近三年間に四分の一に減少した。現在資本主義諸國では國民收入中の資本家の取前が××%乃至はそれ以上に達してゐる時に、この國ではそれが僅々××%であるにすぎない。

○

勞働者の實質賃銀の增加がどの程度に行はれてゐるか、といふことも社會主義化の過程のうちで重要な問題である。

企業側の負擔による勞働者社會保險、勞働階級の生活改善に對する國家の支出、母性及び嬰兒保護事業、文化教育施設等の

豫算增加と勞働時間の短縮は――勞働者實質銀の增加を意味する。これ等の全體を計算すると現在ソヴエト聯邦勞働者の實質銀は戰前の一六七%に增加したことになつてゐる。

勞働者社會保險の總豫算額は最近三年間(一九二七・八年度――一九二九・三〇年度)に九億八千萬留から十四億留に增加した。

母性及び嬰兒保護のために最近三年間に支出された額は約五億留に上つてゐる。嬰兒の死亡率はこの期間に四二・五%減少した。年に三百萬人づゝの人口增加が行はれてゐるが將來の經濟發展のために勞働力の過剩はおこらない……。

勞働者住宅の建築資金としてこの三年間に支出された額は十八億八千萬留である。モスクワその他の工業都市で近代樣式の宏壯な勞働者住宅が續々新築されつゝあることは、ソヴエト聯邦の經濟發展に今でも尙ほ疑惑の眼を向けてゐるツーリストの不思議の種になつてゐる。

○

とは言へ、茲に一つ社會主義化過程のうちに存在する重要な矛盾と缺陷を指摘することが出來る。それはソヴエト聯邦では今でも消費品の物價が割合に高いといふことである。

勞働者の生活消費品の配給狀態について言へば、國家計畫委員會の調査によると一九二九・三〇年度には既に內國市場の卸賣の九九%以上小賣の八九%以上が消費協同組合の手に統一されてゐる。コワレッスキーのいふ「レニンの協同組合計畫」は外形的には既に達成されてゐる。殘る不幸は唯だ內容にある。最近、消費組合機關の內部では商業獨占の結果として最近ますます官僚主義と、出來るだけ多くの利益を生む商品を賣りつけようとするネツプマン氣質が根を張つてきた。そのため勞働者は消費品の幾割かを比較的高い値段で私營商人の手から買ひ入れて需要を滿たすことになり、實質銀の增收が或る程度まで減殺されてゐる。

○

七時間勞働日制と一週五日制は次第に工業勞働者の廣い層に擴大されて行つてゐる。一九三〇年五月までに一日七時制によつて働らく工業勞働者の數は約八十萬人に達した。また一週五日制で働らいてゐる勞働者の數は百五十萬人である。

○

五ケ年計畫の第一年目において達成された實績は概略右に述べたやうな狀態である。これ等の發展過程のうちでは古いものから新しいものへ進んで行く途中で必然的に起る色々な惱みや一時的な障害や缺陷にぶつかつてゐる事であらうと思はれる。一たび集團農業に組織された農民の一部が脫落して行つたり、資本家的分子の最後の抗爭が行はれたり、訓練のある幹部指導者の不足や素質の惡いことから仕事が部分的に失敗に終つたり……等々。

それにしても五ケ年計畫の力強い進行と本文の冒頭にあげたコワレフスキーの「大計畫」案に表現されてゐる「十年——十五年の期間內にソヴエト聯邦內で共產制社會を建設し且つ技術と生產の方面でアメリカ合衆國を追ひ越す」——といふ展望とを結びつけて考へて見ると、我々の眼の前へはもう何か「新らしいもの」が迫つて來てゐるやうな氣がする。(八月八日)

新刊紹介

◇ソヴエト經濟建設五ケ年計畫　大竹博吉編著・本書はソヴエト聯邦國家計畫委員會刊行の「ソヴエト聯邦國民經濟建設五ケ年計畫」の譯纂で、現在世界的注目の焦點たる五ケ年計畫は日本でも興味の對象となつてゐる時、本問題の要約な好資料である。(東京麴町內幸町一ノ五・ロシア問題研究所・定價壹圓)

◇日本經濟年報　日本經濟最近の推移及日本を中心として見た世界經濟の推移を鳥瞰的に綱述し、今後三ケ月目毎に發行するといふ本年鑑は時を得た好き企てである。(東京牛込天神町・東洋經濟新報社・定價壹圓)

◇鹽と人生　平林敏滋著　鹽全般に亘り其の原理應用を說いたもので特に鹽療法鹽の榮養價値に主力を注ぐ鹽に關する綜合的な最初の研究である。(東京神田區表神保町二・栗田書店發行定價八拾錢)

◇社會主義か資本主義か?　小池四郎譯・スノーデン・ロイドジョーヂ・マクドナルド等英議會大論戰の譯。(東京京橋第一相互館・千倉書房・價一圓二十錢)

◇肥料問題研究　佐藤寬次著・農村經濟の重大問題たる肥料問題は近代の資本主義產業經濟の特徵を備へて來たのは勿論であるが本書は之が經濟研究は農民の側からなさるべきであり、終局に於て肥料生產に關する資本と農民との利害關係は互に對立せるものであることを明かにせんとした前人未踏の研究。(東京丸ノ內昭和ビル日本評論社・價二圓五十錢)

ナンセンスの社會學

赤神良讓

×

來りつゝあるものは明に反逆時代である。だから現代社會の餘りに窮屈な、餘りに總てを意味附けて考へ、意味附けらるることなくしては、何事も行はない、といふ時代精神に反抗して、反逆の狼烟をあげ來たるものは、それはその反對物たるナンセンスの思潮であらねばならない。それ故にナンセンスは、現代人にとつて、決して單なる無意義ではない、それは寧ろ「無意味の有意味」であることを考へねばなるまい。

又現代人は「必然」に飽滿せしめられてゐる。一つの出來事があれば、必ず彼等はその因果の關係をば調べあげ、その必然性を檢證しようと努力する。そしてそれを彼等は、「科學的」であると誇稱してゐる。然るに考へ直して見ると、實際社會は「偶然」であり、パイチヤンスの無數の相乘積である。だから又一つの社會現象は、このパイチヤンスとパイチヤンスとの平行四邊形の關係であり、偶然と偶然とのゴッタ返しであり、二乘であり、三乘四乘の關係である。たゞ人々はその科學的錯覺によつて、この無數のパイチヤンスの裡に、――それを個々に觀察するならば、そこに何等の法則はない、然し無數回の現象に就いて觀察をなすならば、それを支配する一定の法則がある、――といふ、パイチヤンスの法則性を發見して、「大數の法則」と名づけ、無理やりに總てを法則化し、必然化さうとしてゐる。だから又現代に倦怠する人々は、その法則化に對して法則無視の希望を持ち、その必然づくめに對して偶然を讃美しようとする。一切の人巧をば退けて、自然のパイチヤンスに歸らうとする。苦心慘憺條理整然たる過程を辿る所の探偵物語よりも、「彼はどうして女を拾つたか」に百パーセントの興味を持ち、數理を超越してゐる「錢話」に夢中にならうとする。數理人はそれを「馬鹿らしい話」だと云ひ、「氣狂沙汰だ」といふ。然り、倦怠人は、その馬鹿にならうとし、その氣狂沙汰を羨望してゐる。餘りに小利口であることに、充分の反感を持つことによつ

て、偶然から偶然へと自由の飛躍を試みようとしてゐる。堅苦しい人生の鎚に、ナンセンスのポスターをペタ〳〵と貼附けることによつて、その反逆心に幾分の滿足を與へようとしてゐる。

×

又現代社會は何から何までをも、その營利的の機制によつて縛りあげてゐる。だから現代人は、その全身の末梢神經をいらだゝせて、一厘一錢の損得にまで、餘りに怖ろしき緊張振りをば示してゐる。會計學や簿記の先生は、「一厘一毛の誤算でも、その誤算たるや矢張り誤算で、百億千億の誤算と、その誤算たる點に於いては變りはない」とその尊敬すべき數理の精確さをば、熱心に彼等の生徒に教込まうとしてゐる。又吾々が銀行に行くならば、幾人かの銀行員が、「何度その紙幣を數へたなら氣がすむのか」と何時も溜息が吐ける程、右から數へ、左から數へ、そして表から、裏から、はてはそれをば一枚づゝ彈き、そして捻り出して見る。又それと同樣に、不熟練な機關手が、泥汽車をば急停車する時の樣な、雜音をたててゐるデパートの金錢登錄器は、タイプライターと共に、近代的雜音の發聲器として雙璧であるばかりではなく、そのせゝこましさ、その惡意的なる監督性、その神經衰弱的なる猜疑性に、吾々は決して好感を抱き得る者ではない。吾々はそのせせこましさに呪を發し、その猜疑性に嘲笑を作らねばならない。

×

又現代生活は餘りに合理化され過ぎてゐる、機械論的になり過ぎてゐる。そして現代人はさうならねばならぬものと思込んでゐるらしい。人間の胃腑と硝子の試驗管とを同一視して、何でも三千八百カロリーの品物をば胃袋に叩込むならば、それで人間は生きて行かねばならぬ必然性にあるかの如き、生理經濟論をば構築して、酒を飲んでさへ、或者は赤くなり、或者は青くなり、又或者は笑ひ、或者は泣き、或者は怒り、そして或者は多辯となり、又或者は默々然として考込むといふが如き、雜多にして複雜なる生理的心理的反應を呈する人間現象をば、悉く消去し閑却して、そこにリトマス反應の如き、簡單一律なる法則をば打立て、それによつて人間の生活をば化學的に又物理的に統御せねばならぬ、と考へ出してゐるらしい。だから如何なる場合に於いても、現代人は理屈を要求する、如何なる行爲に際しても現代人は主義を標榜する。

洵に現代人は餘りに哲學者であり、そして餘りに道德家としての假面を裝ふに專念的である。

×

K博士は有名なる大酒家である。けれども博士は理由なしには、そ

の一滴たりとも喉にはしない。而も博士は巧妙にその理由を發見する。四方拜、天長節を始めとして、神嘗祭、明治節、新嘗祭、大正天皇祭等の祭日は勿論、陸海軍記念日、自己の誕生日、妻の誕生日、子供の誕生日、著書出版記念日、父母の命日、カント・アーペント、さてはニュートンの萬有引力發見記念日、佛蘭西革命記念祭、それからそれへと、博士は一年の始めに於いて、その日記帳に、赤く正當に飲める日をば、――博士はそれを「左傾日」と前から呼んでゐられたさうである、そしてその「左傾日」をば、――書込んで行かれる。若し不幸にして、七月、八月の如く記念日手薄の月に於いて、徒にその白き日即ち「右傾日」が續くならば、珍しき友人をば招待するといふ「久濶日」が、所々に挿入されて來るのである。

然し今考へて見るならば、それは要するに飲むことではないか、吾吾は博士がその「左傾日」をば、適度に配置される御手際に感心するよりも、「唯、何となく飲みたいから飲むまでだ」と放語し得ないで、カントを引合に出し、ニュートンにお酌を強ひられねばならない、その合理癖に先づ憎悪とそして憐憫の情とを痛感せねばならなくなる。人間は本來左樣に合理的に生活してゐるものでは決してない、然るに現代人はそれを合理的に彌縫しようと絶えず努めてゐる。そして吾々は又そこに息苦しさをば感ぜねばならない。

×

彼等は又時間を喧しく云ふ、規則を喧しく云ふ。一秒の百分の一でも遲刻するならば、それはそれだけボーナスの袋に輕減作用を及して來る。だから今そのボーナスを氣にしながら、出勤時刻に間に合す爲に、バスに飛乘するならば、「どうぞ、停留場から」と、切角命を的に飛乘し得てホッとしたものを、又命を的に飛降せねばならない。では停留場へと急いで逆戻しようとすれば、交通巡査は「左側通行」と怒鳴る。忌々しさに唾を吐かんとすれば、「痰唾無用、吾等の町を美化しませう」と云ふビラが鼻先につきつけられてゐて、その唾の逃場に窮せざるを得ない。そこで吾々は益々あせり氣味になる、電車に飛込めば、そこには掏摸の危害があり、急いで道を横切れば、そこに轢逃げの危險がある。犬を飼つて「小彌太」と名づけ、猫を飼つて「善次郎」と呼び、「時々は蹴飛して見るが、ヒーと云ひ、ニャンと云ふまでである」と得意然として友人間に披露をすれば、そこには裏切物がある、重役は必ず彼の首を切ることによつて、彼に悲鳴をあげさせ、ヒーと云ひ、ニャンと云はせるに違ひない。全く油斷も隙もならない時勢となり、何もかも癪の種子ならざるはない。

だから吾々はこの憤慨と、この緊張と、この煩悶と、そして餘りのしかつめらしさと、せゝこましさと、餘りの理屈と、必然と、營利と

でこれあげられてゐる人生に對する一按性を、その內心にだいて醇化せざるを得ない。

長い緊張に次いで來るべき弛緩を求めざるを得ない。總てを合理化し、總てを目的化し、有意義的に構築されてゐる思惟の殿堂の眞唯中に、無意義の偶像をば安置して、世人に鼻をあかしてやらねばならない。そしてそこに吾々は、ナンセンスの社會性を發見し、その流行性を見出し得ると思ふ。

×

又吾々はナンセンスの屬性として、簡潔性のあげられてゐるのを聞く。ロンブローゾーの云ふが如く、文明は常に多少に拘らず病的である、殊に現代の文明は變態的であり頹廢的である、從つてそれは神經衰弱症的である。

吾々が朝新聞紙を開くならば、先づ三段抜きの大見出しに目を落し、次いで直に六號活字の「その日その日」の短評に、又は「青鉛筆」に目を轉ずることであらう。現代人は氣根を失ひかけてゐる、寸鐵人を刺すの刺戟を求めてゐる。或博士が、その著書の厖大さを誇示して、一萬數千頁の著作をなしたと云ふや、原勝郎博士は、「奴は馬鹿だからさ、自分の意見を述べるのに、一萬數千頁も書かなきや述べられないとは、馬鹿の證據ぢやないかな」と酷評を投げてゐる。眞理は常に簡單である、だから吾々はそれを簡潔に把持し、簡明に表現せねばならぬ、と世の神經衰弱症患者は云ふ。そして吾々も亦その近代人として、充分なる共鳴をそこに見出すことが出來る。

昔ペルシヤの若き王子ゼミイルが、父の後を繼いで王位に即いた。さて、國中の學者を集めていふ。「王者たる者、もし過去の歷史に通ぜば、過つ事少からむとは、わが師の敎へだ。卿等はわが爲に世界史を作り、その完備を期せよ」と。それから二十年を經て學者は、十二頭の駱駝の一隊を率ゐて、一頭に五百卷宛を積み、すべて六千卷の書を王に獻じた。國政に忙殺されてゐる王は、深く學者の勞を謝して後いふには、「朕は既に中年である、たとひ老ゆる迄生きようとも、此浩瀚な歷史は讀めぬ、之を短縮せよ」と。それからまたもや刻苦精勵の二十年を經て、學者は之を千五百卷に縮め、王に捧げて要點は毫も省いてないと申しあげた。王は、「さうであらう、然し朕は既に老いた、更に之を縮め、出來得るだけ早く仕上げよ」と命じた。今度は十年を經て、學者は一頭の若き象に僅に五百卷を積んで持つて來た。王は、「まだ不十分だ、朕の餘命は幾何も無い、更に縮めよ」といふ。また五年經つた、今度は學者が杖にすがつて、一匹の驢馬に大きな書物一册を載せて持つて來た。王は此時臨終の床に在はすと、或官人が告げる。王の云はるゝには、「朕はいま逝く、遂に人間の歷史を知らずして」

と。老いたる學者は、「陛下よ、否、臣はこれを約めて三語となさむ、曰く、生と苦と滅と」とアナトオル・フランスが書いてゐる。そしてそれは吾等近代人の洵に云はんとする所であり、「それ見よ」とばかりに、厖大なる著書に得意となり、長たらしく且つ難解の哲學と論文とに慢心してゐる學者に、投與される諷刺と冷笑とで、それはあらねばならない。

×

大笑は心理的に發達しない野蠻人のやることで、文明人は大笑をやらない。彼等は微笑をやる、冷笑をやり、嘲笑をやる、そしてその冷笑によつて、大笑以上の滿足を心ひそかに味つてゐる。だからナンセンスは、又その感性に後者の笑の合成物をば包有してゐる。一體ナンセンスの持つ笑は、心の思惟をば一旦やりすごす、そしてそれに尻餅をつかせる所に孕まれて來る笑である。心の作用はいつも先走りをする。

今、徴兵檢査官があつて、壯丁の一人を騎兵に採用しようと考へた。檢査官「君は何にか、馬が好きかな？」壯丁「ハイ、葱があれば五斤もたべます」といふ答のもつ笑は、「君は、馬が好きか？」と聞はれたのに對して、讀者の心は、「馬は好きです」と答へるだらうとか、或は「馬はまだ乘つたことがないので怖くあります」と答へるであらうとか、既にその答を先走つて豫想してゐるのに、壯丁の答は全く脫線的であり、その豫想に尻餅をつかせ、逆戻りし、轉轍せねばならなくならしめる。若しそれを心理學者のリップスに言はせるならば、その心のまごつきと落ちとに、笑があると云ふことになるであらう。そしてそれは單なる笑ではない、その答の馬鹿らしさに對する微笑がある。威儀振つて嚴しく構へてゐる檢査官が、「葱があれば五斤もたべます」といふ答に、どんなに面喰つたか？「樣見ろ」といふ痛感に對する反感の慰めから起る冷笑がある。そして又その壯丁の愚鈍さ加減に、嘲笑と憫笑とを讀者諸君は味ひ得るのである。

牧師「トムさん、その瓶の中に入つてゐるのは何ですか？」トム「あゝこれですか、ウイスキーです、半分は弟ので、あとの半分は俺のです」牧師「いけません、酒は惡魔の飲物です、貴方の分だけでも、今ここでお捨てなさい」トム「それがどうも。弟の分が上の方にあるので、俺のは底の方にあるので……」吾々は牧師のいつもいやに道德家面をしてゐるのに反感を以つてゐる、だからトム公うまく斷つた、と微笑を持つことが出來るか、さもなくば上の半分、下の半分同じではないか、とトム公の馬鹿正直に嘲笑を持つことが出來る。

詩人「ある者は名譽を、又あるものは富を、更にある者は戀を、人は何かを渴望するものである」女中「それよりか、世間の誰もが渴望

するものがございますわ」詩人「それは、何だね一體？」女中「金魚を食つたあとの水でございます」簡單のことを強いて意味深長に表現しようとする、詩人に吾々の底奥き嘲りがある。女中の平凡の答に吾吾の凱歌がある。

晦日の夜、橋の下に焚火をして暖をとつてゐる乞食の夫婦がある。乞食の女房「この寒いのに旦那樣方は、掛取に忙しさうにあちらこちらと、走つておあるきになる、だのにおらはまア、取る金とてないので、かうやつて焚火にあたつてゐられる」乞食すツくりと立ち上つて、女房を見下し樣に、「それも皆な誰のお蔭だと思ふ」と誇らかに云ふ。そのとんちんかんの誇に笑がある。親爺がどこまでも女房に恩を着せ、威張つて見たいといふ、男の女に對するイデオロギーに放たれた皮肉がある。

外交員「奥樣、盗難豫防器は如何でせう」奥樣「宅では不用よ」外交員「さうで御座いませうとも」奥樣「え？」外交員「何にお隣で買つて頂きました時に、お宅へ行つても駄目よ、何も盗まれる品物なぞないんですからつて、伺つて參りましたんですけれど、まさかと思ひまして……」奥樣「さう、隣でそんなことを云つたの、まア失禮な、一ついくら、安いのね、五つばかり置いて行つて頂戴……」女の虚榮心に對する哄笑がある、外交員のしてやつた狡猾さに對する冷笑がある。吾々が常に言はんとしてゐる冷罵を、吾々に代つてナンセンスは、あらゆる種類の種子といふ種子に、遠慮なく振掛けて呉れてゐる、そしてそこに愉快がある。

×

亞弗利加の森林での話である。二匹の大きな蛇が喧嘩をやつた。やがて二匹は噛み合ひをやめて、お互に對手方の尾から呑み始めて來た。蛇は同じい大さである。青い蛇が黒い蛇を一寸呑むと、黒い蛇も劣らずに青い蛇の尾を一寸呑んで來る、二寸呑むならば又二寸呑んで來る、とうとう青い蛇が黒い蛇を全部呑んで了つたその瞬間に、又黒い蛇は青い蛇を全部呑込んで了つた、そしてそれと同時に二匹の蛇は消えて無くなつて了つた。といふ呑まれて胃腑の中にある蛇が、その胃腑を以つてゐる蛇を呑んで了つたといふやうな、ナンセンスの話は、合理論者に對する諷刺である、總てが論理的に進行するものだと獨斷してゐる男への教訓であり、皮肉である。

強盗をやつた囚人が、刑務所で十字架のキリストを見て、「看守さん、あすこにブラ下つてゐる男は、この刑務所でやられたんですかね」「あの男？ この刑務所で、馬鹿野郎！ あれはな、イエス・キリスト樣だ、この罰當り奴が」と怒鳴られた彼は、病氣になつて出獄が許可されて、ある町の慈善病院に入れられた。そこで彼は立派な[illegible]を

生してゐるキリストの額を見て、「看護婦さん、あれはこの病院の院長さんですかな」「まア、あの方を御存知ないんですて、この世をお創になつた天のお父様ですわ、吾等の主、キリストのお父様ぢやありませんか」「ぢやキリストのおやぢぢやね」「さうよ、お父様よ」彼は病も癒えて久方ぶりで娑婆の風に當り、ある所に遊びに出かけた。するとその女の部屋に、子供を抱いて、おそろしく上品な婦人の繪が壁にかゝつてゐた。「こいつア此家のお神さんか、まさかおめえぢやあるまえ」と女に問うた、「なんですつて、まア馬鹿だね、これはマドンナぢやないの」「何んだね、そいつは」「キリスト様のお母様よ、主イエス・キリスト様を處女で身ごもり給ひし、やんごとなき方なんぢやないの」「さうか、ぢやキリストのおふくろだね」そこで彼は考へた、どんなにキリストは偉いか知れないが、息子は刑務所で、親爺は病院に、おまけにおふくろはあいまい屋にゐるなんて、何とみじめな一家なんだらうと。そしてそこにはその强盗囚の無智にかこつけたる宗教の冒瀆がある、キリストの冒瀆がある。勞農ロシヤが、マリヤの像を賣り、十字架を鑄潰して馬蹄鐵を造り、教會を無神論者の學校に改造し、聖徒のミイラと、豚及び土鼠のミイラとを、宗教博物館に並列してゐると同様なる、宗教威權に對するずるき反逆であり、そのずるさに吾々は微笑を持つのである。

×

近代人彼等は、總ての點に於いてずるさを學んでゐる、トリックを好愛してゐる、故に瞞着し、ペテンに掛けることによつて、自己の慧智の儁英さを自負しようとし、私に享樂し、誇示しようとする。だから又近代人は總ての出來事をもナンセンスに化することによつて、輕快に皮肉らうと企圖し、攻撃しようとする。だから又人々は、そこに嚴しき超弩級の顏に、全く空虛の頭を乘せ運んでゐる、ナンセンス型の男を主役として、彼等は如何にして三つの男爵を拾つたか、といふナンセンス劇を、容易に書下すことが出來るといふ、或はさうかも知れないと私も思ふ。

くづれた汗もと股ずれ

汗もや股ずれも、輕いうちなら天瓜粉とか打粉位で癒るが、ジクジクと水をもち或は化膿したり、おできになつたりすれば仲々始末が悪いものである。かやうな場合、一番よい手當と云はれるのはデシチン軟膏又は撒布粉の應用である、何れも五十錢位で大抵の藥店にあるが、初期のものは粉末を撒布すればわけなく癒り、化膿してくづれたものでも軟膏を塗つて繃帶を取替へれば二、三日で乾燥し、健全な表皮が氣持ちよく出來て來る。汗もにしろ股ずれにしろ普通の粉の撒布で捗々しく癒らぬときは何を措いてもデシチンをお奨めし度い。

拳闘漫筆

荻野貞行

近代味多分な尖端的スポーツとして、拳鬪、乃ち、ボクシングが、今や世界的寵兒となり、各國が、其の體重に依り八階級に分たれて居る各クラスの世界撰手權を奪取す可く、久しく拳鬪王國として、これら總ての世界選手權を把握する事に依て、斯界に君臨せる、アメリカに肉薄せんとしつゝある時代である。

思つても見給へ。

試合開始のガングの響き。素晴しい迄に發達した肉體と肉體の線の交錯。力とスピードの瞬間的躍動。血と汗。ストレートとスウイングの相打つ音、そして觀客の怒號喧騷。むせかへる葉卷の香と熱のどよめき。

人間の持つ爭鬪の潜在意識を完璧に迄共鳴せしめたければ止まないスポーツたるこの拳鬪が、世界人種爭鬪の大舞台の渦中に抛り出されたとしたならば、勢ひ流行が物凄い迄に四角のリングを中心に廣く大きく躍進して行くのは當然ではあるまいか。

決鬪の手段として皮テープやペアナックルで倒れる迄、乃ちフイニッシュフワイトで戰つた拳鬪も次第に科學的に研究され、回數時間等も制限された最も合理的なスポーツとして發達して來たのである。

而してこれら世界撰手權爭奪戰の最大人氣はヘビーウエイト（一七五ポンド以上）の試合に集まる。乃ち世界最強の人たらん事を證する爲の試合である。

近かきその拳鬪界の頁を開けば、一九二六年九月二十三日、ヒラデルヒヤのエリナに於て、水兵上りのジエン・タニーに十回戰に破れる迄七ケ年間光輝あるヘビーウエイトの撰手權を固守せしジヤック・デムプシイ。彼はマサツセチユ州より出でた一介の若き浮浪者に過ぎなかつたが、グローブを彼の兩手に握るに及んでフワイターとしての價値は忽ち現れ、その當時天下無敵、彼に向ふ敵なしとリング上に豪語せしヘビーウエイトチヤムピオン、ジエス・ウイラードを巨木を倒す如く無造作にマットにたゝき伏せて撰手權を獲得してより、南米の猛

牛として恐れられた、力の巨人フイルポと闘ひ彼の猛烈なスウイングの爲にリング外に抛り出されたにも拘らず、忽ち彼をしてマツトの上に眠らしめ、次いで當時歐洲に於てライトヘビーウエイト（一六〇斤以上一七五斤）チヤムピオンにして、サイエンテフイツクた技倆と秀麗な容姿とを持てる、英國ヘビーウエイトチヤムピオン、ジヨウベケツトを一回戰にして夢の國に送り、斯界の王者として歐洲にその名輝く佛人チヨウジ・カウペンテアを紐育近傍ジアシイシテーに迎へて四回目にノツクアウトし、歐洲拳闘界を呆然たらしめた彼。

リングより毆り出し得た巨萬の富と名聲、尚又その上に性的魅力莫大な女優エステル・テーラーを贏ち得た彼。又偉大なるかな拳闘なるかなである。

ヒラデルヒヤに於てジエン・タニーとの試合に於ける觀衆十一萬五千人、入場料の上り高百八十余萬弗、デムプシイの受けた所得は百萬弗であつた。

彼のリタンマツチは翌一九二七年シカゴのソルヂアスフイルドで行はれたが、大勢既にデムプシイに利あらず、七回目にデムプシイの強打にタニーがノツクダウンされた時のレフリーのカウント十三秒を要したと物議を釀したが天運彼に利あらず、選手權はタニーの手に歸したのであつた。

この時の觀衆十四萬五千人、入場料二百六十八萬弗、タニーが此の試合に於ては百萬弗の報酬を受けたのであつた。

彼タニーが拳闘界に入つた最初は、先づボツプ・マーテンをデシイジヨンで破りてより始まり、一九二二年米國ライトヘビーウエイトチヤムピオン、バトリング・レビンスキヰを破て、同選手權を獲得し、同年ハリー・クレツプに勝て、タイトルを奪回し、二十四年には、フランスのカアペンテアをテクニカルノツクアウトし、二十五年にはトム・ギボンを十二回戰に、パトリー・マツデンをノツクアウトし、同年に再びハリー・グレツプ、ジヨニー・リスコを破て居る。

彼が拳闘界に殘した七十回の試合に只一回アウトポイントされて勝を失つたのみで、未だ嘗つて夢の國に彷徨した事のない彼であつた。

彼がデムプシイに勝つた夜は、タニイの生れた紐育のグリニツチ村では徹夜で、教會の鐘を打ち鳴らし、群集はアメリカ軍隊屯營所の建築の二階窓に掲げられた大國旗の下で、踊り狂うた。婦人の觀衆二萬五千、中に、アリス・ルーズベルト、アン・モルガン、ノルマ・タルマツチ等が居た。

デムプシイの愛妻エステル・テーラーは汽車の中でラウドスピーカーに向て愛人の戰勝を祈て居た。米國の海軍陸軍の兵隊は踊り狂ふ群が、夜の明けるのを知らなかつた程である。

タニーは一九二九年、ニユージーランドのトム・ヒニーを紐育でテクニカルノツクアウトしたのを最後として、斯界を引退し、千萬長者ロツクフエラーの孫娘と結婚し、歐洲に蜜月の旅行に出發した事は餘りに世人周知の事實である。

タニーの引退によりヘビーウエイトの王座は久しくブランクになつて居たが、本年二月二十七日、米國フロリダ州マイアミ海岸に於て世界選手權爭奪戰の前哨戰とも云ふ可き試合が、英のフイル・スコツトと米のジヤツク・シアキイとの間に行はれたが、シアキイはスコツトを三回目にノツクアウトし、遂に六月十二日、ドイツのデムプシイと云はれ若き闘志に燃ゆるマツクス・シユメリングとの間に行はれる、爭奪戰に出場する權利を得た。

獨逸のプライド、マツクス・シユメリング。

今や獨逸國民は、ツエツペリン飛行船の世界一週の成功よりも歡呼を擧げて、若き世界の强者、我等がシユメリングを出した事を狂喜して居る。

彼シユメリングは一九〇五年に生れ、本年二十五才の若冠、高さ六呎一吋、一昨年迄は歐洲の當時ヘビーウエイトチヤムピオン、スペインのパウリー・ウスウダンに破れて居たが、昨年二月一日紐育に於てジヨニー・リスコをテクニカルノツクアウトし、六月二十七日には、ウスウダンをポイントアウトして復讐して居る。

一方、ジヤツク・シアキイは一九〇二年紐育ピンカムトンに生れ本年二十八才、高さシユメリングと同じく六呎一吋。一九二七年には、デムプシイの爲七回目に彼の强打ボデイ・ブロウの爲ノツクアウトされたとは曰へ、一九二九年一月にはノツクアウトクリスナーを紐育に十回戰に破り、二月にはヤング・ストリブリングにフロリダ・マイアミ海岸に於て勝ち、九月二十六日にはトミイ・ローランを同じく紐育に於てテクニカルノツクアウトして居る。

斯くして最后のワールド・ヘビーウエイト選手權爭奪戰は世界の白熱的興味の裡に開始されたが、三回戰迄はシユメリング屢々攻勢に出づる機會を得たが、シアキイの實力、到底シユメリングの如何ともする能はず、四回戰の終りには、シアキイの左手の猛烈なフツクをジヨウに喰ひグロツキイとなり綱を握つた儘リングに倒れたが、ゴングに助かり(三分間の試合の開始と終り一分間の休みを知らせる鐘を云ふ)五回目の始まるや、シユメリングのセカンド(介添人)シヤアキイのフワウル(下腹部を打つ)を主張し、レフリーのジミイ・クロレイ此を否認して觀衆の轟々裡に、シユメリングの勝を宣した。斯くして榮あるヘビーウエイトの世界選手權は常勝國アメリカより始めて獨國人の手に歸したのである。

同夜の觀衆七萬人、總收入百五十萬圓と報ぜられて居る。

フワウルに破れたシアキイは涙をのんで、直ちに委員會にシュメリングとの再試合を申し込み右試合の條件として、第二回戰の總收入の內、當然自分の手に入る可き、二割七分五厘の內、一割二分五厘を返還して、シュメリングに、總收入の三割七分五厘を提供する契約に調印を申し出で、シュメリング又之を承諾し、來たる九月二十五日、同じくヤンキー・スタデアムに於てこのリタン・マッチの行はれる事に決定された。斯くの如く短期間に選手權チャレンヂフワイトが行はれるのは世界選手權試合始まつて以來の事である。

之が爲フワウル問題は拳鬪界の非常なる問題となり、紐育州では、今度低部打擊のフワウルに依り試合は中止されない事になつた。

此の決定はこの十七日に行はれる世界ライトウエイト選手權保持者サミー・マンデルに對して、近時破竹の勢にあるアル・シンガーの選手權試合に適用せらるゝ事になつた。

斯くしてヤンキーの手より彼等が世界選手權を掠奪す可く、各國のプライズフワイターの群は黃金とジヤズの波を潜つてその王座に突進せんと懸命に努力を續けて居るのである。

既にして、黑人ヤング・ジヤック・タムソンはジヤキイフイルドを去月ポイントアウトして、ウエルター・ウエイトの選手權を把握し、フエザー・ウエイトに於ては玖馬の土人キッド・チョコレートが百戰百勝、アマチュアレコード百回の試合にノックアウト八十六、ポイントの勝ち十四。プロフエショナルとして試合數六十回、ノックアウト四十一、ポイントアウト十八、引分け一といふ驚異的レコードを保持し、一年の彼が拳よりの稼ぎ高數十萬弗に達するのを見ても、彼のクレバーにしてセンセイショナルなフワイトの如何に人氣の有るかを察し得られるではないか。

而かも、彼にしてフエザーウエイトの選手權を得られない理由は如何。

幾十人かの彼等の所謂白鬼をして、血に塗れたマットにキスせしめた黑人拳鬪家としてヘビーウエイトチヤムピオンとして餘りにも有名を馳せた、ジヤック・ジヨンソン、ハーリー・ウイルスの彼等が悲慘なる末路は、人種的僻見の暗い影が常にこのフワイトに赤裸々に現れて居る事實を示すものではあるまいか。

一九二二年九月二十四日巴里に於てカルパンチコよりライトヘビーウエイト世界選手權を奪た黑人シキが二十三年三月十七日には既にアイルランドのダブリンに於てマイク・マクテイグの爲に破れ遂に酒の上の喧嘩の結果ピストルで射たれ、而かも短刀で肩を突かれた儘「惡魔の町」といふ街路に彼の死骸が横たわつたのが一九二五年十二月二

十四日の寒い夜の出來事であつた。餘りにも悲劇の多き有色拳闘選手の末路よ。

斯くして世界の拳闘熱は、大なる人種、國別を背景にして世界的潮流のなかに躍進しつゝある時、斯界には未だ日尚淺き歴史の頁を有するに過ぎない日本の拳闘界とは曰へ、近來著しき發達をその內容と共に遂げ、本年の極東オリンピック競技にはオープン競技として加へられ、又プロフエショナル試合に、アマチユア、學生選手權試合等にフワンの血を湧かせて居る有樣である。

又紐育には帝拳の若き選手木村久がノックアウト木村として斷然活躍して居り、太平洋岸に於ても白黒各人種の中に黄手の選手として精進の努力を續けて居る選手は我が拳闘界をして益々光輝あらしむる將來の道程を建設する尊い先驅者であり、日本のデムプシイ、タニーを出す可き階程の犠牲者でなければならない事である。

（一九三〇、七、六）

參考

ノックアウト（倒れて十秒間起き上れない場合）

ポイントアウト（點で勝つ）

體重に依る階級

一、フライウエイト（一一二斤以下）

一、バンタムウエイト（一一七斤以下）

一、フエザーウエイト（一二六斤以下）

一、ライトウエイト（一三五斤以下）

一、ウエルターウエイト（一四七斤以下）

一、ミドルウエイト（一六〇斤以下）

一、ライトヘビーウエイト（一七五斤以下）

一、ヘビーウエイト（一七五斤以上）

尙世界權ニ右ノ外次ノ階級アリ

一、ジユニア・ライトウエイト（自一二六斤至一三〇斤）

文藝運動における社會民主々義

貴司山治

一

文藝戰線一派の小堀甚二君が「改造」八月號に書いた「プロレタリア運動の左翼か、チャーナリズムの左翼か？」と稱する「論文」は、丁度蟹が甲羅に似せて穴を掘るやうに、小堀君の屬する「文藝戰線」の――「文藝戰線」の屬する「日本社會民主々義」の――非階級的見解の程度を暴露した美事な「論文」である。

雜誌「文藝戰線」は勞農藝術家聯盟と銘うつ二三十人のグループによつて、その階級的基礎を、當時の「無産大衆黨」によつて表明せられるところの社會民主々義左翼におき、直接には無産大衆黨の、間接には日本の社會民主々義的政治運動の影響を文藝運動の領域内において擴大强化するために大いに「プロレタリアートのために」戰はれてきた機關雜誌である。

彼等の母體の無産大衆黨がさきに「七黨合同」によつて「日本大衆黨」となり、仲間われによつて「東京無産黨」となり、「戰線統一協會」となり、最近やつと「三黨合同」が實現して「全國大衆黨」といふ新しい看板がかれらのために出來上つた。

今ではこの「全國大衆黨」が「文藝戰線」の政治黨である。

日本の社會民主々義黨は最近この「全國大衆黨」の出現によつて大いに整頓して來た。即ち右翼の「社會民衆黨」中間派の「全國大衆黨」、左翼の「勞農黨」と、大體三大分野に統一されたが、將來は更に「統一」されるであらう。

そしてこの「右翼」「中間」「左翼」の三種類は、各よりあつまりの事情、發生と歴史の差からくる色わけであつて、その本質がおの〱社會民主々義政黨であることに間違ひはない。

社會民主々義政黨が、階級鬪爭の激化を中和せんとする巧妙なる資本階級の新鋭行動隊であることは、理論的に（辯證法的に）は既に早く暴露され、現實的には世界戰爭における各國社會民主々義黨のおの

の自國プロレタリアートに對する徹底的裏切り(××參加による××主義への轉換)によつて證據立てられた。そして英國と獨逸における社會民主々義黨政府の實現により、全世界のプロレタリアートは、社會民主々義黨の執政がプロレタリアートの解放のためになされるものどころか、その古き器を解き去り新しい太綱を以てブルジョア權力の許に、改めて大衆を縛りつける新なるブルジョア政黨であることを見せつけられた。

最近、社會民主々義者の國際的結集は、プロレタリアートの國際的組織(コンミンタン・プロフインタン)を當面の敵として、ブルジョア攻勢の重要なるブロツクを承はりつつ、特に顯著となりつゝある。これは、資本主義第三期が必然的に直面してゐる世界經濟恐慌を前にして、資本階級がその決死的産業合理化、避難しがたい××××××の逼迫に具へるべく、彼等を自己階級の新しい前衛として動員しつゝある姿なのだ。

このために、資本階級は、各自帝國内の分裂せる社會民主々義諸政黨をその統一に趣かしめる必要がある。

「三黨合同」によつて日本に「全國大衆黨」の産れたことは、かゝる國際的狀勢の一部として諒解されるので、決して之が「無産運動の進展」などではありえないのだ。成程、「全國大衆黨」の結成はあながち直接資本家政府の指令によるものではなからう。しかしすべての物は世界的關係の中につながると見る唯一の客觀的見地からのみ、一國内の現象も亦正しく諒解することができるのである。

第三期的矛盾を進二無二突破して第××××における陣容を有利にしようと焦る日本帝國主義は、例へば帝國主義外交の段階においては軍縮會議に參加を必要とするのと同樣の意味において、一九二八年以來急速に高まり來つた國内プロレタリアートの激化を解消すべく、その當面の役割を課するために國内社會民主々義諸黨の大同團結を必要とする段階を持つ。

即ち「三黨合同」は、かゝる段階に於いて日本帝國主義の意志を反映し、その新しい動員部隊として立ち現はれたものである。

で、彼等の固有の役割は、彼等をしてまづ無産大衆の中へとかり立てる。さうしてそこで彼等はプロレタリアートの名において、獨自の活動を始めるのである。

彼等は、資本主義社會の生活の、現在の、諸條件によつて、自然發生的に、必然的に亢揚してくる大衆の階級意識に對して、大衆が自らを解放する唯一の非妥協的な道——マルクス、レーニンの指導した道——を、マルクス、レーニンの名において僞り語ることによつて大衆を獲得する。そして大衆を改良主義的陷穽の中におとし、ブルジョアジ

ーの新しい桎梏の下につなぎとめるのである。

この職能は右から左までの社會民主々義者の內、俗にいふ左翼社會民主々義者の著しい役割となつてゐる。意識の低い大衆はかゝる左翼社會民主々義――エセ・マルクス主義と、眞のマルクス主義とをたやすく識別しえないためにともすれば彼等に追隨するのである。

二

ところで、雜誌「文藝戰線」の思想的（？）指導者たる元の「無產大衆黨」はこゝにいふ左翼社會民主々義者の一派である。

彼等は「戰線統一協議會」といふものを作り、これによつて今度の「全國大衆黨」の中に流れ込んでゐる。そして、雜誌「文藝戰線」―序手に思ひ出した、並に「文戰劇團」――は、「全國大衆黨」の旗の下に新しく展開された大衆的視野の前に登場し、文藝運動の領域において左翼社會民主々義的宣傳煽動を開始せんとする時期に際會したのである。

「文藝戰線」一派は常にたえず彼等自身を「マルクス主義者」とよび、レーニンの言葉等を剽窃引用することその他によつて本來の姿を大衆の前にかくして來た。未だに彼等の雜誌のあらゆる頁にこの「欺瞞」は充滿してゐる。

だが一體レーニンは如何なる人であつたらうか？　又今日の例へばコンミンテルンの世界的組織、×××の××等はマルクスの學說の實現したものに外ならないが、彼等はこれらの×××××の根據を否定し、又は回避し、日本におけるその現實に對しては極力無關を恣にしてゐるのだが、凡そ世の中にさやうな「マルクス主義者」が存在するものだらうか？

レーニンは社會民主々義を敵として戰ひ、之を倒してソウェート・ロシアを實現した指導者である。もしレーニンを今日×××生かすならば、レーニンは必ず「文藝戰線」を倒し、その背後の「全國大衆黨」を倒さなければやまないだらう。

日本に於けるマルクス・レーニンの敵、ソ××××の敵、然もきわどいその一小敵「文藝戰線」は、かれ自身の敵の名を利用する左翼社會民主々義者の傳統的やり口を用ゐて今日若干の大衆を獲得してゐる。否、それは獲得でなくて欺瞞なのだ。

「文藝戰線」一派の文藝運動上のかやうな社會民主々義的本質は、一方において正しい非妥協的な唯一の道をすすむナップの××主義文藝の確立の仕事が具體化してくるに從つて、明瞭に暴露され始めた。去年から今年へかけて、ナップは苦難の中にその仕事をとり上げてゐる。藝術大衆化の問題にしても、それが何故それ程重要な問題として

我々の間に取り上げられなければならなかつたかといふことは、其の階級的立場に立たない彼等には到底諒解されないのである。

かつて前田河廣一郎は我々の間の「藝術大衆化の問題」を指し「馬鹿の一つ覺えの大衆化」といふ漫罵を放つてその敗北的無恥の完全さを我々の前にさらけ出したが、今亦小堀甚二君が同じ問題を指して「支離滅裂な理論」と唱へてゐるのである。けれどもさういふことを吹聽する同君の「プロレタリア運動の左翼か、ヂヤーナリズムの左翼か？」の一文が凡そ「支離滅裂な理論」なのである。

同君の一文は、少くともその前半は、同君が冒頭に引用してゐる私の東京朝日新聞に書いた「文學大衆化の明日」といふ一文をよんで、非常な思ひつきを發見して書き立てたものらしい。

私のあの一文は作家同盟内部で大衆化問題の討論の始まる前に、私の主張のプランとして書いた。それは「私」のプランであつて、ナツプのテーゼでも何でもない。そしてあの一文が發表された時は、討論の内容はよほど先きへ進んでをり、「私」の意見は訂正されなければならなくなつたことを、急に末尾に附記した位である

私はその「附記」において作家同盟が決定した「文學大衆化の問題」は戰旗誌上に發表される旨をことわつてある。そしてそれは戰旗七月號に十頁に亘る「藝術大衆化に關する決議」と題する長論文となつて發表されてゐるのである。

これをよめば大衆化問題が小堀君のお望み通り果して「支離滅裂」なものかどうかわかる筈である。同君に例へそれがわからないとしても、何なりとくつてかゝりたいならばこのわれ／＼の共同の意見として公然發表されてゐる同盟の決議にこそくつてかゝるべきである。所が同君はたま／＼私の一文をおぞくも「文藝戰線」的曲解の中へねぢまげ、その「曲解」を以てナツプ全體を誣ひようとするのだ。小堀君の「プロレタリア運動の左翼か、ヂヤーナリズムの左翼か？」は思ひつきの議論にしてもかういふ小人奸計をひそめてゐるのだ。

これは、彼等が正當に我々の側の理論的進展を理解しえず、正面よら理論的に對抗することによつて彼等自身の階級的立場の暴露を怖れるための狡猾なる常套手段である。ナツプの最近における××主義文學確立への努力が彼等の文藝運動上の社會民主々義的本性を暴露しつゝゆく／＼決して兩者相容れぬものたることが我々の側から明らかにされるにつれ、彼等は抗争の途を失ひ、やがてこの種の理論的フアシズムを以て對抗し始めるやうになつたのである（このフアツシ化の萌芽についてはいつか詳述する積りだ。

三

最後に直接に、小堀甚二君の「論文」に答へなければなるまい。

同君がその「論文」中に引用してはないが私のあの一文中「我々は——書いたものが何の新聞、何の雜誌によつて、即ちチヤーナリズムのどんな種類によつて大衆の間に送りこまれるかといふ考慮をまで持たなければならない。」とあるのは、當時の私の誤謬なのである。

我々はこんな風にチヤーナリズム（ブルジョア・ジアーナリズム）を利用すべきではない。それについて、私のこの考へは作家同盟の「ブルジョア出版に對する我々の態度」として戰旗六月號に發表されたテーゼにより十分に訂正されてゐる。

即ち、マルクス主義文藝家にとつてブルジョア出版物への參加は極めて條件的、例外的である。大衆をアヂ・プロするためにブルジョア出版物を積極的に利用するといふことは階級的原則の上から絶對にありえない。

我々はまづ我々に對して明白に敵對的な新聞雜誌から手を引かなければならない。

だが自由主義的なブルジョア出版物に對しても事情は決してよりよくはない。自由主義的出版物は現在檢閲制度に對して全く無力であり、我々の原稿はたゞそれが現在秩序に抵觸しない範圍においてのみ歡迎されるだけで、もしそれが眞實に階級的である時には掲載は拒絶され、書き直しを要求され、あるひは目もあてられぬ伏字によつて歪曲されてしまふ。いひかへれば我々の作品は××主義的な角をとられて丸くなり、社會民主々義的なものと本質上何の變りもないものとなるのである。

これを作家側からいふならばこれらの新聞雜誌にのみ書きつゞけることによつて自然その筆を枉げることに習慣づけられ、わがプロレタリアートによつてナップの作家藝術家に要求されてゐるその最大の任務への進展を妨げられる。

だが我々は今千遍一律にブルジョア出版への參加を拒否してはならない。その理由として、各作家の生活の糧を得る手段として、又極めて制限的にではあるが、我々は之を通じて大衆に何等かを知らしめ、或はその讀者の一部を我々に近づけることが出來る——からである。

しかしこれとて、常に第二義的なものであり、主として機械的利用の對象であつて、我々の文藝闘爭の重要舞臺としては、飽迄も我々自身の配布網——プロレタリア・チヤーナリズムを確立しなければならない。

——以上がナップの正しい意見であつて、既に我々はブルジョア・チヤーナリズムに對してこれだけの見究めをつけ、その我々の場合における（プロレタリア文藝運動における）階級的意義を明瞭に限定して

ゐる。折角ながら私の古い一小文によつてナップの藝術運動の左翼的立場を「チャーナリズムの左翼」にすりかへんとする小堀甚二君の思ひつきは手遅れである。

同君は、私が「我々の作品行動が勞働者農民を正しいマルクス主義的現實へ誘導するために役立つやうに書かれなければならないとすれば、凡そ今日の、日本の、勞働者農民に役立つやうに書かれなければならない。必然的に明日は役に立たない作品でなければならない。」といつたのを「今日役に立つて、明日役に立たない物を歡迎するものはチャーナリズム（ブルジョア・チャーナリズム）だ。だから貴司山治のこの主張はプロレタリア文學の左翼的主張とみせかけて實はそれのチャーナリズム化だ。」といふ風に解釋するのである。

——實に厄介千萬な、粗笨なる卓見（！）である。

私の言つた「今日の日本の勞働者農民に役立つやうに書く」といふ意味は決して「今月の何雜誌の讀者大衆に役立つやうに書く」といふ小堀甚二的意味ではないので、その本當の意味は「——國際プロレタリアートの世界的な單一の、有機的な機構に自からを結びつけ、廣汎な農民を同盟者としてプロレタリアートの××を目標として進みつつある日本の××的プロレアリアートのイデオロギイを内容とし」「重要産業の大工場勞働者及び貧農を對象として」（作家同盟藝術大衆化問題決議）書くといふ意味に發展する考へなのである。

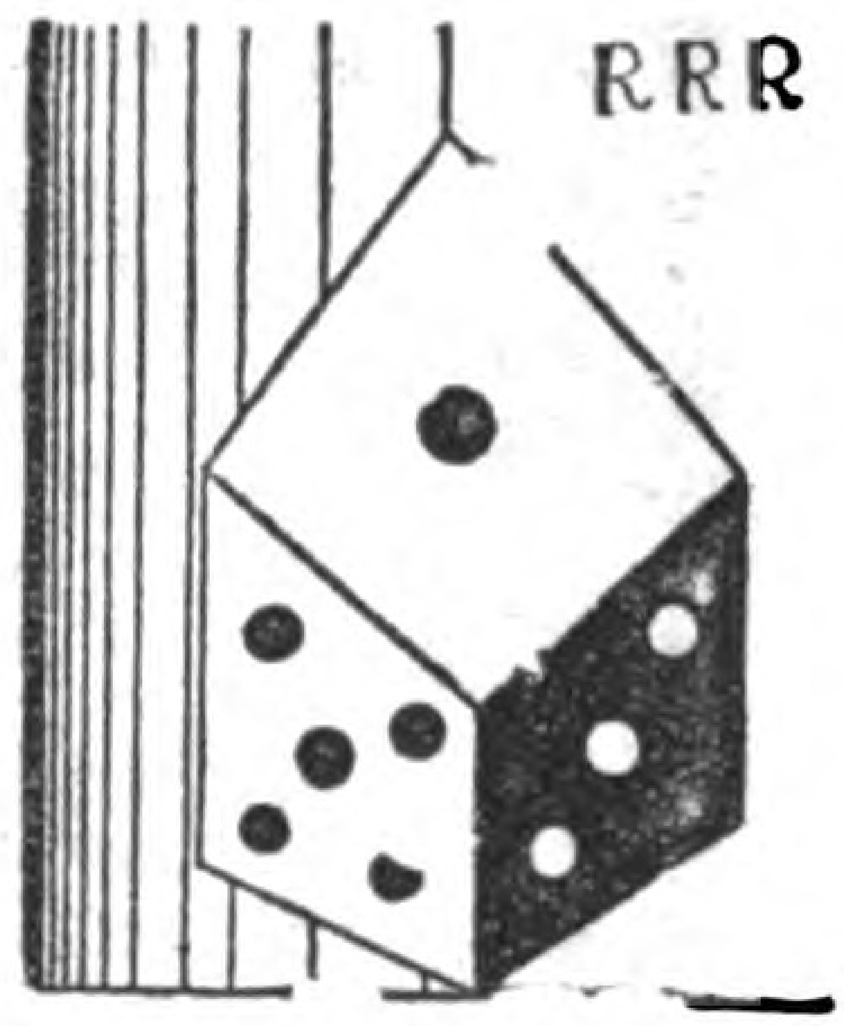
さうして、我々の對象たる——刻々にはげしく生長するわがプロレタリアートの前にはたえず重要な現實が置かれつゝある。我々は具體的な、その重要なる問題を取り上げ、それに我々の作品行動を集中しなければならぬ、「必然的に、明日は役に立たない作品」をといふ呼びかけは、あらゆる困難を排して、そこに主力を注ぐべき我々の態度を強調するもので、これをあはれにも單にたゞ機械的にチャーナリズムの今月號に役立ち來月號には役立たない作品を——といつてゐるやうにしかきゝとれず又わざとさうきゝとる小堀甚二君などは、かゝる階級的必要の上に立脚して文藝行動を行つてをらず又行はふともしない人間だから、かういふノンセンスな解釋を立てるのである。

即ちこゝに文藝社會民主々義の理論的終えんを見出すことができるのである。そして彼等が今日以後遮二無二ブルヂョア・チャーナリズムの畑に生き延びんがためには、政治的分野において社會民主主義者が、ブルジョアジーの新しい爪となり、プロレタリアートに向つて一切のファシズム政策を敢行し始める瞬間を、文藝理論の上において經驗しなければならなくなつてくるのである。

尙くはしいことを九月に創刊する我々の機關誌「ナップ」が更に痛烈に暴露剔抉する筈だが、正しいプロレタリア文藝運動から脫落し、かの代作問題などでわかる通りむしろブル・チャーナリズムの新しいドレイの地位に自己を見出しつゝある文藝戰線の社會民主々義の立場を、我々は最後まで追ひつめ、これを文藝の領域から驅逐しなければやまないだらう。

（一九三〇年七月）

街頭ヴァラエティ



何うして彼の洋服に口紅がついてゐるのか

（ダンスこれだけは心得おくべし）

楢崎勤

1

私立N・大學で、英文科を擔當してゐる若き講師・中山信雄は謹嚴な獨身者として評判だつた。彼は、洋書の一杯つまつた本箱に取圍れた下宿の一室で、ちよつとの暇があつても書物をひろげた。およそ彼には、讀書のほかには趣味といふものがなかつた。外出するのも、その勤めてゐる學校の往復と、丸善に新着の書籍をみにゆくくらゐだつた。

　それにもかかはらず、彼はなかなか近代明色に富んだ、そして、新鮮な色彩と、陰影の濃い筆觸で、最も氣の利いた小說を聰明に書いた。だから、彼の名は、「近代風景」を愛する、ある一部の人々に記憶されてゐた。勿論のこと、彼の日常生活を知つてゐる人々は、何うしてさういふ才情の溢れた小說が作り出されるか、奇異な感さへもつた。しかも、この頃、彼はよくダンス・ホオルを背景にした小說、ダンサアを主人公にした小說を書いてゐた。

　それは、彼が誰にも知られないやうにダンスを習ひ出してからだつた。彼はダンスを始めてから、急に世の中が明るくなり出した。一日に一度は、ダンス・ホオルに出掛けなければ、何んだか氣持が落着かないやうになつた。ジヤズの音樂の中に浸つてこないことには、書物をひろげ、ものを書く氣持になれなかつた。

　それ故に、彼は授業が終ると、以前のやうに、直ぐそのまま下宿に歸らうとはしなかつた。以前のやうに、屢々のこと丸善を覗くことを怠るやうになつた。彼は、むしろ、むさ苦しい、そして孤獨な下宿の室を想像するだけでも、嫌惡な感情に囚はれるのだつた。

しかし、彼はまだダンスのすべてを踊る自信がなかつた。だから、ワルツやタンゴの曲がかゝると、彼はホオルの隅で何時もぼんやりして、そのワルツの踊り方を、タンゴの踊り方を、煙草をふかしながら見てゐるのだつた。

タンゴとワルツの曲の時には、明るく點つてゐる花電燈のいくつかが消されて、ホオルは暗くなつた。つまり「藝術的氣分」を出すつもりらしかつた。しかし、誰も彼もホオルが暗くなると、そのワルツのゆるやかな典雅な曲を、そのタンゴの情熱のこもつた曲を踊つた。だから、折角のことにものものしい「藝術的氣分」も、多くの踊る人々のためにかき消されてしまつた。かへつて、さういふ風に暗くなると、おなじみの客と、ダンサアとは、はばかりなく愉しい語らひの時をもつことも出來るわけだつた。彼は、だから何故「その筋」が、ワルツとタンゴの曲がかかる時に、ホオルを暗くすることに注意をしないのだらうと思ふこともあつた。さういふことを思ふのは、彼がN・大學の講師であるせゐかも知れない――

3

フオツクス・トロツトの時には、吸ひかけた煙草もそのままにして、彼は必ず踊るために起上つた。彼は、いつの間にか、きまつたパアトナアとしてのダンサアをもつた。しかも、彼女はそのホオルでも、踊りの上手な、そして美貌な踊り子だつた。彼はそのダンサアのほかには踊らなかつた。自然ダンサアもまた、彼のかはることのない熱意に酬いるために、つねに愛嬌をみせることを惜まなかつた。その愛嬌のために、彼は惹かれるものをかんじてゐたのだ。

しかし彼は、ラストの一回をダンサアは必ずなじみのひとと踊るといふことを知らなかつた。それで、彼はバンドから、「ラアスト！」と大きな聲で叫ばれると、日頃よく愛嬌をみせてくれる、そしてよく踊つてくれるそのダンサアに向つて起つた。彼女の前と前までに行つた時に、彼女は「ごめんなさい！」さう云つて彼に詫びた。そして、彼女は微笑をもつて、ほかのなじみの客を迎へながら手を組んだ。

そこで、彼は今までの自負心を慘酷にふみつけられながらも、いそいで他に、パアトナアとしての踊り子をもとめなければならなかつた。しかし、幸運にも彼はいつも踊るダンサアの傍に腰をおろしてゐる踊り子を見出した。

彼は、いそいでパアトナアであつて欲しいことの表示として、ぺこんと頭をさげた。ラストにさへも殘つてゐたそのダンサアは、微笑をみせながら起上ると、彼と組んだ。彼は、それで幾分かふみつけられた自負心を、平靜な常態におくことが出來た。

彼は踊つた。

しかし、ホオルを一迴りするかしないかのうちに、パアトナアの踊り子は、決して踊りは上手でないことがわかつた。ただ、何うい ふ譯なのか、彼女の薄い服をとほして、彈力のある、しかしふつくらした腹部の感觸を、彼ははつきりかんじないわけにはいかなかつた。

彼は彼女の腹部の感觸を意識しながらも、眞面目な表情を浮べて踊つてゐる。曲が終つて、一齊にアンコオルの拍手がバンドに送られると、また奏樂がはじまつた。

彼は慌ててそのダンサアに、ふたたび踊ることを申込んだ。彼女は、ぴたりと腹部をくつつけて、そして、いかにも親しき感情をもつてゐるやうに、彼の胸に顔を埋めて踊つた。彼は、これからこの踊り子とばかり踊らうと思つた。ワルツの時も、タンゴの時も。

4

翌る朝――

私立・N大學の英文科擔當の若き講師・中山信雄は、鏡にむかつてネクタイの結び目をただした。その時に、彼は純白な麻の洋服の右肩のちよつと下に、唇のかたちのままで、はつきり口紅のついてゐるのを見出した。

待合室風景

吉行エイスケ

罷業狀態にはいつてから三日目の朝だ。江東の勞働者と、昨夜の厚化粧の斑點を首に卷きつけた日本髮の女の集散場であるべきはづの手垢のついた待合室に、今朝は白い警官服が、腐敗した鎖に白いペンキをかけたやうにつづくのだ。さながら亂雜のあとのやうに、ピラと威嚇する金屬の音がかちあつて、下降したアスフアルトのプラットホームに隊列が從行してゐる。ここが京成電車、押上驛の淺黄の待合室だ。

その、白いペンキの鎖に包圍されて、昨夜から會社側へ罐詰にされた灰色の凝聚力を失つた從業員が、産婦人科の粉飾された看板の下の從業員だまりに蝟れた集團をつくつてゐる。こいつらは既に旺盛な活動力を失つたルンペンプロレタリアだ。電流の綫が切斷される少しまへになると、英語が漏斗菜のやうに點々と染められた浴衣をきて、長靴をはいた職人風の男がやつてくる。曉のなかに子供を脊負つた男。

海岸行の行商人。蒼白い女工の列、不器量だが女の汚濁の香を武器とする昨夜の女。彼等は右側の灰色の壁にそつた赤い食慾の陳列棚の硝子の底で崩れた、腐敗してしまつた獻立のまへを苦痛を感じながら通り過ぎると、改札口からアスフアルトのプラツト・ホームに下降して行くのだ。最初の、罷業におけるコンビネイションが破られたけたたましい電鈴が鳴る。初發の最終の客、背廣の鴨脚の男

を非難すると、高架に[illegible]堂々たる[illegible]の手警備本部と書かれた本城にむかつて、科學的なブルジョワジイの攻撃を開始して車體が動搖した。

　待合室に坐つてゐる私の背後から、不潔物を湛えて太陽の光線が場内の汚れた足跡に殘された暗影をぬぐひとる。作戰と作戰の夜がまつたく明けて、江東の工場地帶の喧噪が裏街の細い露地をつたつて律動をここまでつたへる。東京勞働交通組合の背廣の男が突如ここにあらはれる。この電鐵會社は例の市疑獄で巷間を騒がした札つきの社長の勢力下にあるのだ。だが、勞働者と農民がお客のこの會社のサービスは一見善良だ。乃ち料金を値下げしたが、從業員の給料を合理化の名目によつて低下した。津田沼へは改札口にエロチックな改札口を置いたが、同時に解雇された改札人の給金の半額をもつてエロチシズムを支配することができた。その他。

　しかし、背廣の男はそのとき號笛を聞いた。だがそれはホームに到着した鑵詰の車體から吐き出される群集のざわめきだ。その一群が洪水のやうにアスファルトの發着場から待合室に殺到してくる。彼等は玉ノ井の魔窟からやつてきた。長浦の貧民長屋からやつてきた。向島の汚濁と貧窮と飢餓をたへしのんでやつてきた。曳舟から乘こんだ勞働者のために身動きもしないで――彼等は何處へ行くか？

　職業紹介所をめがけて先を爭ふ失業者、富川町へ行く自由勞働者達、龜戸の工場地帶へ河ぞひに行く熟練工の群れ、會社勤めの給仕女たちが、待合室の鏡のまへで營養不良の蒼い顔に紅をさしてゐる。彼等は寄場へ工事場へ、河底へ、勞働者街に近代の蠱惑的なサービス・ガール、彼女たちはトラックの荒らくれ男を相手にするがためにガソリン供給所へ。そして、瞬間、ふたゝび場内に靜寂がおとづれる。待合室にある賣店に掲示されたニユースを取卷いた人々が、會社側が從業員にたいして高壓手段に出たこと、そのために昨夜のうちに裏切者が續出したことについて話しつゞけてゐる。背廣の男は私の側に腰を下すと獨言のやうに言つた。

――ストライキは、おれたちにとつて、古い戰術になつてしまつた。

　そして彼はふたたび騒しくなりかけた場内から立去つて行く男親に抱かれた赤兒の泣聲を背後に浴びながら……。

　新宿驛――こゝはウルトラ・モダンの娘さんが、場末のネオンサイン戀しくて、日夜地獄を歩むやうに二等待合室から、戀愛告知板、三等待合室の入口を埋める。ここで下車したわれわれはまづこの華麗な凱旋門をくぐらなければならない。すると斷髪女にはセーラッボンの優男が、洋服肥滿の未亡人には洋

服代を稼ぐつもりだらう、若いサラリーマンが。厚化粧の女給はそこいらの課長級と自稱する中年の男を待つてゐる。紫の袴に手を入れた女學生は、學校當局にたいしてストライキを決行する勇敢なエロ・ボーイに可憐な瞳をおくる。彼等は待合室に架けられた特別車のポスターを指さして、その化粧室、マホガニーの卓子、それをとりまく廻轉椅子、そして展望車の豪奢に見惚れる。やがて彼等は空想の裡に、彼等の婚禮車を夢みる。だが甘い空想も瞬間にはラウド・スピーカーのうなり聲に破壞される。しかし二等室の人々はインスピレエションの負債でも感じたのか、改札口には行かないで吐切れ、吐切れの時計の分秒を睨んだまま立去らうとはしない。ここは剃り立ての、愛情の取引所だ。しかし、ここまでは諸君の、もとより百見の情景だ。

午後六時二十六分の韮崎行が發車して三等待合室は閑散としてゐた。鋼鐵のやうな固い意志と、彼女を象徴するラウド・スピーカーが沈默してしまうと、私はすでに廢墟のやうになつた、近く新館落成とともに千人風呂になるといふ三越の建物を背負つて、廣場のオルゴンガスとネオンガスの反映と、場末の盛場の騒音に都會人らしい快感を衝けて青い苔の生えた椅子に座つてゐた。ここで私は情婦のレビュー女優の幕間を利用して別れ話をするつもりだ。もし附近のホテルで彼女と會へばふたたび戀の團欒を自然は要求するかも知れぬ。この街のメインストリートの狂燥さのなかでは個人のプラトニックな生理的現象をみたすわけに行かない。この空胴は東洋一の乘降客が室外の切符賣場から改札口へ、人波は靡いてゐるにもかかはらず、私の眼前にはスカートの短い支那の女が恐らく、彼女の同胞を待つてゐるのであらう、玲瓏たるものがあるのみ。その隣りに腰かけた三十前後の厚化粧の女は、バスケットのなかから化粧道具を取出すと縞になつた滸地をグロテスクに裝飾してゐたが、彼女は附近にねころんだ勞働者風の男に近づくと、冥想から覺めたやうにどん底の男女が騒いた。——おまい銀玉一個と、旭街の木賃宿の部屋代があるかい、そいつあ豪勢、妾についておいでよ。明日になつたら親方にたのんでよ、妾しは龜戸でも身を沈めやうさ。そのときは、おまいのやうな色男を見棄てる妾ではないさ。そこで妾のつきものにおまいなつておくれ、どう？　まさか嫌とは云ふまいね。

このあぶれた勞働者に話しかける女について私は知つてゐる。もと十二社で商賣してゐたが新宿が殷盛になるとともに街頭に出てきた女、この街の經濟狀態が膨脹し、驛の乘降客が増加するごとに彼女の預金帳の重量が加はつて行つた。三等待合室と旭街の貧民窟と十二社を巢窟にした地獄を糞で汚す種類の都會の新景物だ。そのとき、屍のやうに長椅

子に蹲くまつてゐた勞働者がむくむく起きあがつた。まづ、これで萬事は解決だ。もつとも、レビュー女優の、素足にアンクル・サツクスをはいた脚線美時代のやつてくるまでの話………背後ではジヤヅの音樂が悲鳴をあげてゐる。

東京驛――三等待合室にソーダ・フアウンテンができた。ウーロン・テイが一杯五錢だ。或る人々はここをプロレタリアの寢室だといふ、ラウンド・スピーカーをみていつも群集が二つに割れる。私は足もとに落ちてゐた小型の財布を拾つた。白銅貨四個に銅貨がいくらかと三島の宿屋の勘定書が一枚。掏摸にご用心。一、二等婦人待合室、男子覗くべからず。その隣の一、二等待合室はプチ・ブルが赤切符でゐるところと相場がきまつてしまつた。正面のスクリーンに廣告映畫が映る。

その他、櫻田本郷町の飛行館。大阪、福岡、大連方面行の乘客の待合室について書くつもりだつたがすでに紙數を超過した。

安エンタク物語

川島文郎

「オイ! 酒井! 起きろ、起きろ!!」

熟睡中の耳朶に觸れる怒號は、一種のメロデーだ。半睡半醒の魂を、更らに遠い國へ連れて行く。

エンゼルの顏だ。サタンの聲だ。

「オイ! 起きんか!!」

僕は、高い所から投げ落されたやうな痛さを感じて目を覺ました。横腹を蹴られたのだ。

「何時ですか?」僕は澁い目を上げた。

運轉手小林の顏が歪んでゐた。

「八時過ぎてらア!」

嚙んで吐き出すやうな罵聲だ。

僕は飛び起きた。泣きたい思ひだ。

「一日中二百哩も乘り廻しやがつて、今朝三時半に寢たんぢやアないか」けれども、そんなことを口には出せない。顏も洗はずに、車臺の洗滌だ。車輛主にとつては、助手の顏などより、車の方が大切なのだ。

どんなに急いでも、車輛主の氣に入るやうに洗ふには四十分乃至一時間はかゝる。車臺の掃除を終ると、近所の安食堂へ驅けて行くのだ。

睡眠不足と疲勞した喉を、飯の固りがゴクリゴクリと胃の腑へ落ちて行く。追ひ立てられるやうな時間の忙しさに、味覺神系などは、知らない世界へ消し飛んでゐた。

食堂から歸つて運轉手を呼び起す。彼は、僕を起してから、更らにグッスリと睡つてゐるのだから――

運轉手の食事が終れば直ぐ『拾ひ』だ。

僕等の社會では、お客を求めて市中を流し

て廻ることを『拾ひ』と云ふのである。

一九三〇年型の新フォードだ。

「シッカリ拾つてくれよ！」と、車輛主の言葉に送られて、ガレーヂを出る。

街は人の波、車の波だ。

運轉手と僕との四つの目玉が、その波浪を潜つて客を物色する。

「オイ！」と、運轉手が、ハンドルを持つた肘で僕の脇腹を突く。

「何ですか？」

「向うから來る顔の宜い女を拾ふんだ」

此の會話は瞬間だ。

前方を見ると素敵なシヤンが歩いて來る。

行き合ふ自動車を撰擇してゐるやうだ。

彼女の眼と僕の眼が、空間でカッチリと交叉する。僕は手をあげて帽子を脱る。微笑を送る。

僕は、自分で自分を賞讃する。

「何だ、その態度は！　妓夫にも劣るぢアないか！」

けれども仕方がない。免許證を把握するまでは、之れが僕に課せられた過程なのだ。

僕は彼女に聲を掛ける。

「お供いたしませうか？」

「アノ、××まで五十錢で行つて下さる？」

女の微笑と、甘つたるい聲だ。

僕は、彼女運轉手の顔を見る。

「チエッ！」彼は輕い舌打ちをした。が、それは百パーセントの承諾であつた。

「オーライ！　チヤージだ」

僕は、彼を理解してドアを開けた。

「アラ？　行つて下さるの？」

彼女は、驚愕と半疑の中に車へ乗つた。

ゴー！

車は快速に飛ぶ。時速三十哩、勿論ポリスを警戒しながらである。

×

近頃の圓タクは實質上總て半圓タクの状態である。

「××まで五十錢で行かないか？」

「馬鹿野郎！　飯い喰ふ人間が運轉してんだ。出直して來やがれ！」斯うした罵聲を浴びせた時代は、過去の夢である。

近頃の圓タクは、時には三十錢で飛ばすことさへある。何故、そんなに安く行けるか？　左表によつて知ることが出來るであらう。

ガソリン一ガロンの走破哩數

新フォード	約三〇哩	四氣筒
シボレー	約二五哩	六氣筒
ナッシュ	約二〇哩	八氣筒

車が高級車になり、氣筒が多くなる程、ガソリンを多く喰ふのである。兎に角、ガソリン一ガロンの價額は、赤貝黒貝、小倉石油等孰れにしても四十二錢乃至四十五錢である。故に新フォードの場合は、三哩一圓とすれば一ガロンのガソリンは十圓を獲得することになるのである。が、此の計算が正確でないの

は勿論である。けれども、その半數を流して廻る爲めに消費したとしても五圓になる。

此の外に餘程原因がある。何か？　チャージである。

運轉手は、殆んど自分の車を持つてゐない。車輛主と步合による雇傭關係にあるのだ。此の步合が、普通稼ぎ高の二割乃至四割である。だから、十圓の收入で二圓乃至四圓の給料となる。が、之れを眞正直に車輛主へ報告する者は殆んど無い。中間搾取をする。

此の中間搾取をチャージと云ふのである。

運轉手の心理狀態がチャージを目的としてゐる時にブツかれば、男でも、女でも安く乘れる譯である。

麻雀ガール

菅忠雄

○

確かな記憶ではない。

大正十年頃、田端の芥川龍之介氏邸の二階で小島政二郎氏なども一緒だつた。支那から歸つて來た和田と云ふ人が、麻雀といふ遊びだと紫檀の箱に入つた麻雀を、卓の上に打ちあけた。勿論その人以外は誰も皆目分らぬ連中ばかりなので、和田氏の説明で卓を圍んで、ガラ／＼掻廻はして、タド／＼しい手付で始めたもの丶、吃も碰もうまく發音できず、今考へると隨分滑稽なものであつた。それが私をして始めて麻雀を知らしめ、手に觸れたのであつたが、たゞの一度なので、魅力を感ずるまでにはゆかず、結局、不思議な遊びだ位で終つたのであつた。色々の熟語からしても、到底、日本には、流行する遊びと考へられなかつた。

それが今日の流行ぶりである。

○

震災の翌年の秋、私は神樂坂のプランタンで、いつか田端で手にした事のある麻雀を盛んにやつてゐる故、行つてみないかと誘はれた。其處は松山省三氏經營するレストランの二階を使用してゐて、極く親しい仲間だけが集つてガラ／＼やつて騒つてゐた。佐々木茂索氏などは、既に仲々の達者だつた。田端の一度の手ほどきが役だつて、自分も直く仲間に入つた。冬の寒い夜を、あの二階でボコボコなる不完全な瓦斯ストウブ一つを頼りに、麻雀で夜明しした事など、もう古い話だ。久米正雄、田中純氏等と廣津和郎氏の神樂館一派はよくまあ毎晩集つたものだつた。

今にして思へば、その頃、何處の映畫會社にも身賣り出來ず、そこの二階でゴロ／＼してゐた松井千枝子と潤子の姉妹は、つまり今の麻雀ガールといへば、いへる者だつたとも考へられる。別に何もある譯ではなかつたが、全く此二人の姉妹がゐる爲めに出掛けて行つて、麻雀を知らず／＼覺えた連中も事實少なくなかつた。麻雀ガールの元祖だといつてもいへると思ふ。

序でといつては可笑しいが山田順子が此頃よく矢張二階に姿を現はしては、誰かれなしに、

「ねえ、先生―」

と、秋田訛りで、甘つたるく呼び掛けては、自分の家に夜もをそく送つてゆかした。それでゐてあの人、別に麻雀を覺えたらしくもなかつた。

此二階も警察問題が起つてからは、自然に集まる人もなく、解散して了つた。

○

それから後に、銀座の今の博品館の二階を倶樂部として會員組織で麻雀やトランプをやつてゐたが、死んだKといふ人の細君が夫婦喧嘩の上句に、夫がその倶樂部から歸つて來ない理由を種々書きたてて、警察に密告したらしく、警察から手が入つて、集つてゐる連中があげられて了つた。そんなこんなで、此處も長つづきせずに、消えたのであつた。併し、前のプランタンといひ、此博品館の二階といひ、現在あるが如き倶樂部とは違ひ、一ゲームにいくらと料金をとる制度にはなつてゐなかつた。

○

大正十五年の春頃かに、麻布の霞町に麻雀倶樂部といつた形の家が始めて出來た。無論、別に認可をとつてどうといふ程にチヤンと營業してゐるものではなかつたらうが、一ゲーム毎にいくらと金をとつたのは此處が麻雀倶樂部の嚆矢だらう。

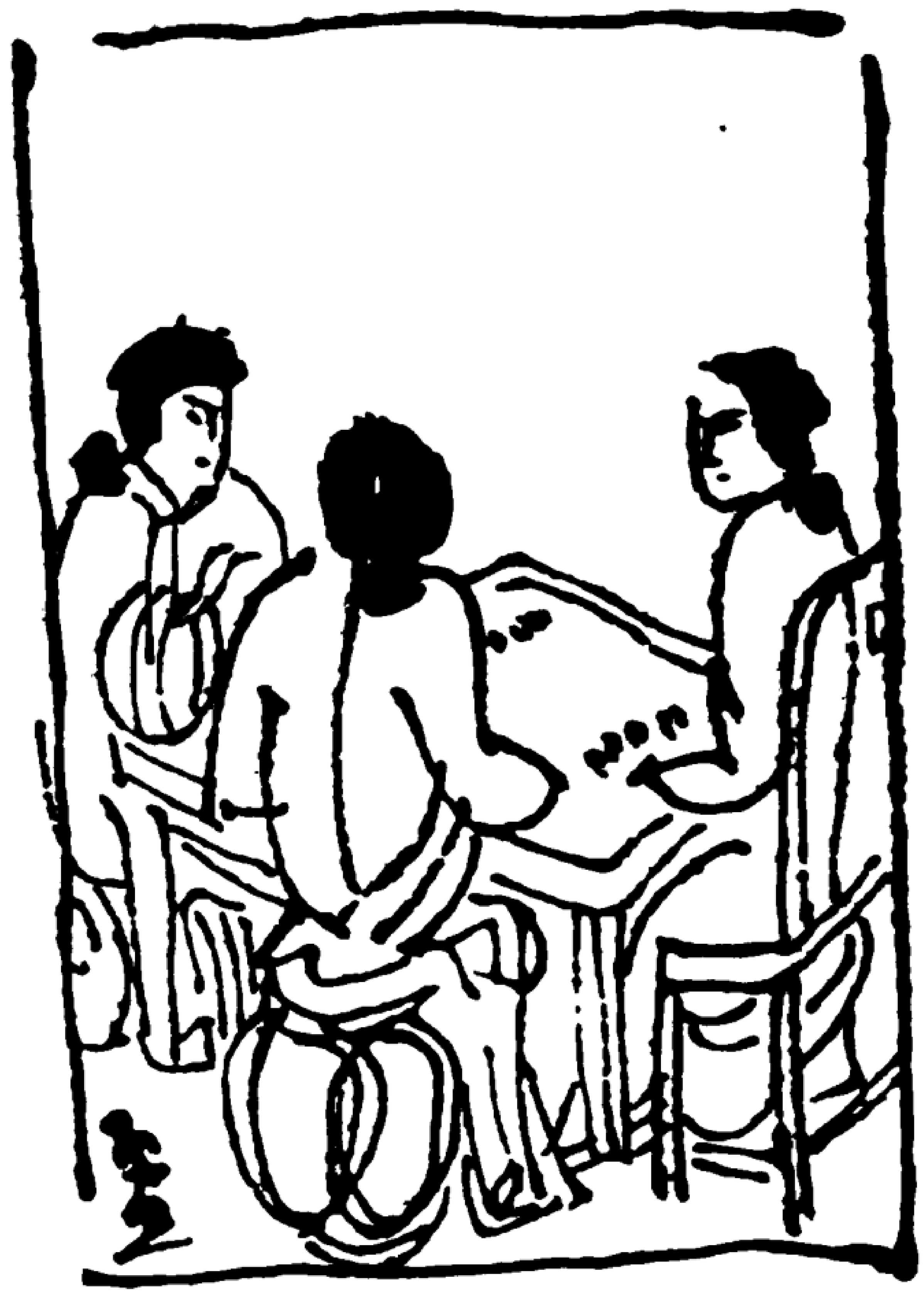
その家では、細君が出て、客の對手をした。しかも乳のみ子を膝において卓に向つてゐた。その乳のみ子がまさぐる若い母親の乳房などが、大いに若い學生連を招んだわけだ。是が麻雀マダムのそも〳〵草分けであつた。實際、乳のみ子をかかへてゐる處など、最も進歩した客寄せの手段だつた。併し此家なども、未だ麻雀が今日の如く流行を極めてゐないので、たちゆかず半年も經ずに看板ををろして了つた。今日を知る明のなかつた事は氣の毒の至りである。

○

現在、東京市内と郊外には千何百軒の倶樂部があるが、チヤンと成績をあげてゐるのは、その内何軒あるか疑はしい。

六十錢から最高一ゲーム一圓二十錢のゲーム料をとつてゐるが、四圓を一時間半位でやつて呉れればいいが、二時間半から三時間半くらゐかかるので、仲々卓が動かず、それでは商賣にならぬ。それでも倶樂部は殖える一方なので、當局が、新しい許可をせぬ事になつた。それで、足場の悪い流行らぬ倶樂部でも權利がついたりしてゐるのだから、滑稽である。

麻雀ガールと稱するのは、球突場にゐるゲーム取りの女と違ひないのだが、ただあれ程女中といふ感じのないのは確かだ。斷髮なのや洋裝なのは珍らしくない。客の對手をしても、別にチツプが出るわけでもない。月給を貰つてゐるといふだけだ。併し、非常に美人を置いたクラブが或程度客を集め得られる事は事實らしい。客と共に歸途姿を消すと云つた所謂麻雀ガールは私が歩いた處では、未だないやうだ。



關ケ原御屏風

直木三十五

一

島津維新が、退却防禦をしてゐるらしく、山麓の方に、銃聲が立ちこめた。

だが、鬼頭には、それは、耳から入つてくる音響ではなく、頭の底に蠢いてゐる、疲れの虫の聲だつた。對手の、眉庇の下から、剝出てゐる、興奮と、狂亂と、鹽の汗とで眞赤になつた眼球――それは、明瞭と、鬼頭の網膜に映つてはゐたが、自分の眼で見てゐるのか、他人の眼で見てゐるのか？　判斷が、つかなかつた。

地の底から、空一面にも擴がつて、どよめいてゐる音。唸り聲。絶叫。吼號。悲鳴。時々、ぴゆーんと、空氣を裂いて行く流れ弾丸――さういふものは、鬼頭にとつて、在ると思へば在るし、無いと思へば無いものであつた。

歪んだ白絹の差物、折れた鳥毛の大差物、血の滲んだ、どす黒い血塊のこびりついた鎧、血と脂とで曇つた刀――さう云ふ物も、見えてゐたが――ちらつと、掠めた、古い記憶のやうにも思へた。

何も、かも、砕けた鏡に寫る影のやうなものだつた。耳に、眼に、ちら〱するだけで、すぐ消へて去る水の影のやうなものだつた。

たゞ、渇ゑと、鎧の重さと、腕の痛みと、呼吸の苦しさと

が、自分のものだつた。

二

夜來の大雨に打たれた赭土は、馬蹄と、草鞋とに蹂躪されて、深い、滑り易い泥濘になつてゐた。

草叢の草は、その泥濘の下に、くちやくちやになり、林の中の灌木の類は、刀で斬られたり、折られたりして、枝も、葉も無くなつてゐたし、大きい樹の幹は、銃丸と、刀痕とで、所々赤く、白く剝けてゐた。

泥の上には、中には、刀、槍、鐵砲、草摺、甲、矢などの外に、蒼黒い顔をした、血塗れの死體、濁つた白い眼球、砕けた頭から、血の塊で、顔中どす黒くなつた者。剝出した歯、切落された手、切口の肉の巻上つて骨の白く見えてゐる頰から額——それが、どれも、泥と血とでこね返されて、醜悪な塊になつて轉がつてゐた。

血と、泥とで、口も、眼も埋まつてゐる死者の顔は、醜く、滑稽な——時には、腹の立つ塊だつた。それを踏つけて、躓いたり、滑つたりすると、人々は

(邪魔な)

と、本氣に、憤つて、蹴飛ばした。そして、

(何うして、こんな所へ、轉がりやがつたのだらう)

と、石突で、突きとばした。

三

誰も、自分が、死ならうとは思はなかつた。死體を蹴つたり、踏んだりして、死體の手足が動くと、人々は、

(生きてやがるので無いだらうか)

と、さへ感じた。そして、それが、敵方のだと、

(死んだ振りをしてやがる)

と、感じて、槍で、突いてみたりした。そして、全く、無慙た死體に對しては、それを、人間と感じるより、醜悪な塊と、感じる方が強かつた。だから、誰も死ぬとは感じ無いで前進した。

戰が始まつてから、もう七時間の餘になつた。彼等の友人は、呻いて、叫んで、或は默つて、次々に倒れて行つたが、それが、これが、一體、何ういふ事なのか——自分の周圍に、倒

が起つてゐるのか、鬼頭は、もう、動かなくなつてゐた。機械的に、反射的に、狂犬のやうに、對手の眼をみると、躍りかゝつて行つた。たゞ、その間にも、時々、

(負け戰にきまつたらしいが、治部少輔殿は、何うなさつたゞらう)

と、ほんの瞬間だが、思ふ事はあつた。

泥の中で、起上らうとする者、這ひかけてる者、それを斬り、突き、蹴りして、驀進してくる敵――鬼頭が、石田三成の本陣から、島左近の指揮の下に、突撃してから、もう一時間の餘は、經つてゐた。

四

指も、掌も、固く、痛くなつて、槍を握り直すことも、離す事もできなかつた。身體中、灼くて、ずきん〳〵神經へ響いた。

(可成り、手傷を受けた)

と、頭の隅で感じたが、少しも、恐ろしくは無かつた。呼吸が苦しくなつて、口を開けたまゝであつた。舌は、水のない砥石のやうに、乾き上つてゐた。膝は、曲らないやうになつて、一寸した物に躓いた。だが、決して倒れなかつた。幾度か、

(もう、いけない)

と、思つたが、さういふ思ひと、死とは、少しも連絡が無かつた。駄目だ、と、感じても、死ぬ――泥の中に轉がつてゐる血の塊となるとは思へなかつた。少しも、死が恐ろしくなかつた。

甲は、ずり落さうになつて傾いてゐた。草鞋は、いつの間にか無くなつてゐた。鎧がすつかり重くなつて、草摺が、かた〳〵當るのさへ、身體へ響くやうだつた。

もう、腕は利かなくなつてゐた。槍を突出すにも、振廻すにも、腰から、腹から、全身で、突出し、振廻さぬと、動かなかつた。

汗が眼に入ると、開いてをれぬやうに、きつくしんだ。敵が、途切れて、佇むと、泥を掬つて呑みたい位に、咽喉が干いてゐた。そして、槍を立てゝ、槍に縋つてゐると、そのまゝ突倒されてもいゝと思つた。

鬼頭が槍に縋つて振向くと、三成の本陣のあつた所には、少

しばかりの人影が、動いてゐるだけであつた。戦の中心は、南宮山の方へ移つてゐた。

（完全に敗北した）

さう思つた瞬間、地が、急激に降り始めて、はつとした刹那、天地が轉倒した。鬼頭はその中へ、安らかに、吸込まれて行つた。

五

（屍だ）

と、思つた。だが、すぐ眼を閉ぢた。身體中、灼れてゐる。

（呼吸はある——然し、このまゝ死ぬのだらう）

右手の指を動かすと、泥が觸つた。その瞬間、堪へ切れぬ渇が、全身に感じた。鬼頭は、脚を動かした。何か、脚に、重いものがぶら下つてゐた。もう一度動かすと、自分の脚で無いやうに重かつた。左手を動かさうとすると、全身を突き抜くやうな痛みが、走つた。

「水だ」

鬼頭は、眼を閉ぢたまゝ呟いた。だが、起上らうともしなかつた。そして、

（治部少殿は？）

と思つた。だが、主君の、生死の不明なのを、心配すると同時に、自分の戦つた有樣が、殘りの夢のやうに——すぐ、次の瞬間には、全身が冷たく成るやうに感じた。それは、人間の世界で無かつた。人間の想像の世界でも無かつた。何んな慘忍な猛獸の世界でもなかつた。

鬼頭は、自分が戦つた——自分の神經で、自分の腕で、自分の眼に見、耳に聞いて、戦つた事では無いやうに感じた。しようとも考へなかつた事でもあるし、しろと云はれて、もう一度働ける事でも無かつた。彼處の血は、たゞの血で無く、泥濘と、剝出した牙と、血みどろの腸と、こね返したやうな血だと思へた。

一人の兵の顏に、叩きつけられた肉塊——それは、内臟を引きちぎつて、踏躙つて、腦味噌にまざして、叩きつけたやうに感じられる肉塊だつた。

（よく戦つた。よくも、あんなに戦へた）

と、鬼頭は、思つた。そして、

「水」
と、又、呟いた。もう一度、眼を開くと、篝火が、點々と並んでゐるのが眼に入つた。
(徳川の陣地だ)
さう思ふと、三成が生きて、佐和山へ逃げたか、大阪へ行つたか、或は戰死したか——一言でいゝから聞きたくなつてきた。もし、三成が生きてゐたら、誰かゞ、自分の戰振りをして、誰かゞ、それを三成に話して——どんなに三成が喜ぶか——鬼頭は、いろ〳〵の幸福な空想をした。
(死ぬものか——疵は淺いらしい。逃げられるだけ逃げよう。三成は、死なない人だ。きつと生きてゐる)
と、思ふと、急に、周圍の暗が、暗の中の臭氣が、恐ろしくなつてきた。
(大阪には——さうだ、鈴木の妻も、子もゐる。鈴木の死んだ事を知らしてやりたい——そして、三成に逢へたら——俺は、足輕大將になれるだらう)
鬼頭は、重い鎧が、自分の身體を、泥濘の中へ吸つけてゐるやうに感じた。右手で、鎧の腹帶を解いた。太刀を外した。脇差を外した。胴の紐を解いた。さうしてゐる間にも、どうしてか、不安と、焦燥とが、周圍から、ひし〳〵迫つてきた。
(何うして、かう怯けづいてきたのか)
鬼頭は、自分を押へたが、何う押へても、毒瓦斯のやうに、臆病心が、全身へ擴がりかけた。
鬼頭は、鎧下着一つになつて、太刀と、脇差と、金と、薬と、守札とをもつて、虫のやうに這出した。泥の中を、死骸の間を、川を求めて——水を求めて、病犬のやうに、泥まみれになり、口を開いて、舌を出して、追はれるやうに、四つ這ひに、脚を引ずつて這出した。

六

大津にも、京の入口にも、淀にも、伏見にも、關ケ原の落人の首が曝されてゐた。それは、獄門臺の上へで無く、木の柱を道傍へ立てゝ、その柱から柱へ渡した竹竿に、髻を結びつけて、ぶら下げた獄門であつた。
何の首も少しづゝ、白眼を剝いて、紫灰色に——髮が脫け落ちて 今にも竿から落ちさうなのもあつたし、眉から頸まで、

大きく切口が裂けてゐて、灰色の骨の見えてゐるのもあつた。腐敗しかけた首は、眉も、睫毛も脱れて、頸の下から繩で、竿に縛りつけられてゐた。口を開いたの、齒を剝き出したの――それから、中には、大きく剝出した眼球が、飛出してゐるやうな首もあつた。

烏が、その上を、高く舞つたり、その近くを、狡るさうに歩いたりして、人々の去るのを待つてゐた。

群集は、毎日増えて行く首の數の計算で、爭つてみたり、三成の批判をしたり、大阪に起る戰の噂、その結果、落人を召捕へ損じて殺された百姓の話。落武者を詐して、鎧と、刀と、首とを取つて大儲けした話――などを、大聲で、小聲で話合つてゐた。

獄門の右手に、假小屋があつて、番人が、土間で、焚火をしてゐた。その小屋の前に、新らしい、だが、もう少し雨晒しになつた建札が立つてゐて、

定

石田方謀叛人詮義之事

召捕者　百貫

首級差出者　五十貫

訴人　三十貫

謀叛人を、於隱匿者同罪也

忠勤者與褒美長く可稱之者也

月日　奉行

と、書いてあつた。

鬼頭は、土臭い、垢と、汗との滲み出したどんつく布子をきて、髮を百姓風に、藁で結んで、ちらつと獄門を見たまゝ、通りすぎた。

鬼頭は、最初の獄門をみた時、その首の中に、自分の知人が居ないだらうか、と、人相の變つた首を、一つ／＼眺めたが――眺めてゐる内に、後悔に似たものと、恐怖に似た感情とが、油汗のやうに滲出してきた。

首になつて、ぶら下つてゐる、何の人々も鬼頭と同じやうに、或は、鬼頭以上に働いた人々だつた。それが、皆、かうして、烏のくちばしにかゝるのかと思ふと、自分の運のよさを喜ぶよりも、その首の一つ／＼が、自分を臆病者とあざけり、卑怯者と罵り――生きてゐる上に、未だ立身さへ考へてゐる利

己的な態度を呪つてゐるやうに思へた。

鬼頭は、急ぎ足に歩き乍ら、その人々の魂魄が、番人に、鬼頭のゐる事を告げて、今にも、番人が、追つてくるやうに感じた。

(もう、大阪は、近いが――この大阪近くまで――大阪の見える所まで、俺を來させておいて、そして捕へるのぢやあるまいか――あいつらは、俺を喜ばしておいて、もう、大阪へ一足、といふ所で、捕まへさせて、あの首同志が、笑つて頷き合ふのではあるまいか)

鬼頭は、懐の脇差へ手をかけて、わざと、ゆつくりと歩いた。旅人が、急ぎ足に追抜くたびに、神經を鋭くした。歩いてゐるのが判ら無い位に、往來してゐる人々へ、注意をしてゐた。

七

「大六」

鬼頭は、陽に燒けた、髭の延びた顔を、一杯の笑にして、一人の子供の顔をのぞいた。子供は大勢、竹切れ、木刀をもつて、戰ごつこをしてゐた。大六は、ちらつと、鬼頭の顔を見上げたが、不審さうな眼をしたきりで、

一人の子供に、

「さあ、來いよ」

と、叫んで、木劍を構へた。足を割つて、臂を張つて父から敎へられた型を守つてゐた。

「忘れたか? 大六、そら、隣りの、甚吾の小父さんだ。大六」

鬼頭は、腰をかゞめて、膝へ手を當てゝ、覗きこんだ。

「ふん」

大六は、頷いたが、そのまゝ、對手に、

「さあ、來い」

と、聲をかけた。鬼頭は、腰を延して、腕組して、悄く笑ひながら、大六の遊ぶのを眺めてゐた。

子供達は、懸聲をして、得物を振りながら、軒下から軒下へ、路次から、街路へ、快活に、勇敢に、駈け廻つた。

「やあーい、石田つ、謀叛人、逃げよつた。卑怯もん」

鬼頭は、笑を消して、その子供を見た。大六は、

「何？」

と、叫んで、その子供に、打ちかゝつた。子供は、

「御前、無茶する。」

と叫んで、露路の中へ、走込んだ。

「大六ッ、――大六ッ」

鬼頭が呼止めた。そして、大股に、大六の側へ行つて、

「かあさんは？」

「居る」

「何處にゐる？」

「うむ――かあさんは、彼處にゐる」

大六は、紺の暖簾を、軒下に引廻して、表の間に、五領の鎧を飾りつけ、刀劍、槍、鞍の類を、いろ〳〵陳列してある店を指した。

「小父さんを覺えてゐるか？」

「うん」

大六は、面倒臭さうに頷いて、又、駈け出した。鬼頭は、睫毛に、微かな涙をためながら、

（生きてゐる方がいゝ。もし、大六が、俺の子供だつたら？）

鬼頭は、昨日まで、人間らしくも見てゐなかつた町人の屋ならびを、羨ましく、新らしく眺め廻した。

八

武具商の暖簾には、近喜と印が入つてゐた。表土間から、中格子を入ると、すぐ上に、大きい黒い、煤けた梁が、高々とかゝつてゐて、廣々とした台所へつゞいた土間があつた。その土間に、米俵が、轉がつてゐて、紺の腹當をした小僧が、その俵の中から、鎧だの、甲だのを撰つてゐた。

鎧の草摺の切れかゝつた物、血に染つた物。穴のあいた甲、切り傷のついた甲、血やら、肉やら判らない黒い物のこびりついた頬當――さういふ物が、小僧の手で撰出されて、中の間の上り口の、廣々とした板敷に坐つてゐる女、番頭へ渡された。

女達は、淺い桶に、大根卸しだの、酒だのを入れて、草摺の糸を浸したり、布につけて拭つたり――男共は、鎖の切れたのをかゞつたり、鐵砲穴へ裏から鋲を打ちつけたり――忙がしく、手を動かしてゐた。

米俵の中のさうした品物は、悉く、戰場から盜んだり、落武者を殺して剝取つたりしたものであつた。戰近くの百姓達は、田畑を荒された報復として、夜に入るとすぐ、鎧だの、槍だの、竹槍だのをもつて、戰場へ出て行つて、さうした物を盜んだ。

京、大阪の武具商は、手代や人足をつけて、すぐ、その盜んだ品物を買ひに廻つた。そして、踏倒しては、米俵に隱くして、運んで歸つた。關ケ原の次には、すぐ、つゞいて、大阪にも戰があるといふので、武具商達は、ありつたけの資力で、盜品を買集めてゐた。

近喜が、眼の上に、影がさしたので、客であらうと、煙管を置いて顏を上げると、

「鈴木源太兵衞の、御內室はをられるかな」

横柄な、侍風の言葉であつたが、汚い百姓姿であつた。近喜は、煙管を取上げて、

「あんたは？」

冷淡な、咎めるやうな口吻であつた。

「同じ御馬廻りで、鬼頭甚吾と申すが、御意を得たいと、傳へてくれ」

近喜は、もう一度、膝の上で、くるく〱廻してゐた煙管を、下へ置いた。そして、笑顏になつて、御辭儀した。

「えらい、お見外れ申しまして――よく、まあ御無事で――」

近喜は、振向いて、

「これよ」

と、女中を呼んだ。そして、中格子を、自分で立つて、開けながら

「取込んどりますので――えらい幕の內を見せますけど、何うぞ、こつちへ。これ、おすゝぎ――それから、離れへ行つて、幾彌さんに、鬼頭さんちゆう御仁が見えましたさかいと云うて來い――さあ、旦那、どうぞ」

さう云つて、近喜は、中格子をくゞらうとする鬼頭へ、

「今度は、えらい、御苦勞をかけました。然し、御無事で――」

と、上り口へ膝を突いて、丁寧に頭を下げた。鬼頭は、いくらか、得意らしい氣持ちがした。

（矢張り、武士だ）

と、思つた。そして、自分の臭い百姓姿が、却つて、自分を、

えらい者に見せてゐるやうに感じた。

九

二人は、挨拶をしたまゝ、默つてゐた。幾彌は、

(默つてゐるのは、夫が、討死したからであらう)

と思つた。それで、

「覺悟は致してをります。夫は——討死を致しまして御座りませうか」

鬼頭は、未だ、默つてゐた。近喜の貸してくれた平島の着物、青い髭のあと、手入した頭——かうして座つてゐると、隣同志で交際してゐた時分の二人と、少しもちがひが無かつた。

親から、先輩から、すゝめられて、鈴木の許へ嫁入をして、すぐ子供を擧げた夫婦仲であつたが、幾彌は、鈴木を大して好いてゐなかつたらしかつた。勿論、幾彌が一人で、鬼頭に、夫の亂行を云ひには來なかつたが、鬼頭が、鈴木の所へ行つて、鈴木が便所へでも立つと、言葉短かに、そして、つゝましく、尤もな愚痴を洩らした。それは、極めて、簡單であつたが、その顏色から、深い悶えと、それが、眞實である事とを語つてゐた。そして、鬼頭は、戰場で、ちらつと、

(鈴木の女房)

と、思ふ位に、心の底の方に、その心を、面影を沈澱させてゐた。

鬼頭は、湯上りの顏を少し赤くして、時々、唇をなめながら、久しく女に觸れないで鋭く成つてゐる嗅覺へ入つてくる枸杞の油の香、白粉の匂に、情慾が、毒素のやうに、素早く、血管の中へ溢れてくるのを、眺めてゐた。邸風の濃化粧。滑かな、光澤のある、白い手、その手を置いてゐる張り切つた太腿、典雅な乳のあたり、濃い、反つた睫毛と、その下に伏せてゐる蠱惑的な眼——鬼頭は、俯いたまゝで、さういふものを一つ一つ、想像して行つた。そして、毒素が、血管から、肉の中へ、眼の中へまで侵滲してきたのを、自分で感じた。頭は、その毒素で、呆然としてゐた。咽喉が、熱をもつてきた。

「夫は?」

鬼頭は、顏を上げた。

「もし、鈴木殿に萬一の事があれば?」

「覺悟は——」

「いや、此後の——再縁なされるか、それとも——」
幾彌は、ちらつと、上目に、鬼頭をみて、俯いてしまつた。
「御覺悟の通り、討死で御座らう——此の上は——拙者の所存は、再縁を爲さる事、その美しさで、若さで、子供をもたれて、下らぬ操を立てる要も御座るまい。及ばず乍ら、拙者が——
——」
鬼頭は、自分で、何を云つてゐるのか、判ら無いで、ちつと、幾彌の濃化粧の頸筋を眺めてゐた。麝素が、身體から迸濫する位に感じられた。
「鬼頭樣、妾は——」
幾彌は、正面から、鬼頭を見た。鬼頭は、
（貴方に、御任せします）
と、一ども云つたなら——いや、さう云ふだらう、さう云つたなら、——云はぬかも知れぬ、云は無いでも——鬼頭の灼けるやうな頭へ、幾彌の、淡紅色の粘膜、濕つた肌が、暴風のやうに、擴がつた。
「妾は——大六の爲に、町人に——」
鬼頭は、自分の感情を自制する努力に、怒りつぽい表情になつてゐた。そして
「町人に？——」
「町人に成りたいと存じます」
「町人に成りたい？」
「然し、大六だけは、是非、一人前の武士に——これを、御願ひ申します」
近京が、靜に、足音をさせて、
「御邪魔させて頂きます」
と、襖外に、膝を突いて云つた。

十

（幾彌、拙者など、三國一の聟で無いか）
と、云つたのも憶へてゐたし、幾彌の手を握つて、酌をさせたのも、判つてゐたが、それ以外の、話も、出來事も、考へ出せなかつた。
鬼頭が、醒めると、二階らしい、床の間のついた部屋の、金屏風の中に、寢てゐた。枕元に、朱骨の絹行燈が、ほのかに灯をつてゐて、黑繪に金蒔繪した水差、同じ模樣の湯呑、片輪車の

ロシアは何年後に共産制社會を實現する？

（五ケ年計畫の實績と次の大計畫（グネーブラン）の話）

大竹博吉

○

「新經濟政策へ退却したソヴエト聯邦の共産黨がいつ何ういふ風に共産制社會を建設するか？」——といふことは非常に興味の深い問題である。

ソヴエト聯邦はいま「五ケ年計畫」の第二年目を經過しつゝある。

スターリンは最近開かれた第十六回共産黨大會（本年六・七月）で、追擊戰を指揮する常勝將軍のやうに「五ケ年計畫の進行速度をもつと早めろ！　資本主義的分子にたいする攻勢を全戰線にわたつてもつと强めろ！」——と號令してゐる。

この「ソヴエト聯邦經濟建設五ケ年計畫」とは何か？　それは新經濟政策への退却時代から社會主義的攻勢時代に轉ずる重要な戰略だといへる。一九二八・九年度——一九三二・三年度を包括する第一次の五ケ年計畫は極度に緊張した戰時氣分でソヴエト聯邦の國民經濟を急速に發展させながら次ぎの根本方針を遂行してゆくのを目的としてゐる。

一、今まで農業國であつたソヴエト聯邦を工業化する。

二、個人主義的な小農經營が主體をなしてゐるソヴエト農村を大農經濟經營に再組織してこれを社會主義化する。

三、國の經濟組織のうちに殘存する資本主義的分子を克服し

て社會主義的分子を强化する。

この過程が進行するにしたがつて第二次、第三次の「五ケ年計畫」を立てゝ之を押しすゝめて行く。するとそこには——(一)工業の非常に發達した(二)大農式に社會主義化された農業組織をもつ(三)資本主義的分子の存在しない——新らしい社會が描きだされる。共產黨が終局の目的とする共產制社會が實現する! といふ事になる。

○

「五ケ年計畫はボリシエヴイキ流の空想だ」——。

五ケ年計畫案が發表された當時には、さう言つて嘲笑する者が多かつた。ブルジョア文筆家ばかりではない。共產黨內の代表的な理論家ブハリン等は右翼から「攻勢に轉ずるのは時期尙早だ」と言ひ、トロツキー派は「五ケ年計畫はスターリンのおもちやだ」——と冷笑をあびせた。

スターリンのおもちやはどういふ作用をしたか?

まづトロツキーとブハリンは門出の血祭りといふ形で右と左に薙ぎ倒されておもちやの犧牲になつた。——それからどうなつたか?

五ケ年計畫は多くの方面で最初のプログラム以上の成功と共に進展してゐるといふことが、近頃になつてだんだん判つてきた。今まで嘲笑してゐた世界各國の資本家は急に不安と共に「ボリシエヴイキの空想——スターリンのおもちや」に注意を拂ひだした。

アメリカでは——「ボルシエヴイキが强制と掠奪によつて人民から捲きあげた物資を自由の祖國アメリカへ輸入させてはならない」と言ひだした。最近アメリカの港で起つてゐるソヴエト商船の抑留事件やソヴエト商品の輸入禁止事件がその具體的なあらはれである。

日本ではまづ露領漁業家の一團が——「ソヴエト漁業五ケ年計畫の進出に對抗するため力を合せて日本人の血と汗で獲得した極東露領の漁業權益を擁護せねばならぬ」と騷ぎだした。もともと利己一徹の露領漁業家が五ケ年計畫對抗策として「日本人の血と汗で購つた權益」の名において最近企業合同をするに至つたのはその具體的なあらはれである。

ソヴエト聯邦內に利權企業を持つてゐる世界各國の利權家は——「ソヴエト政府は五ケ年計畫の發展と共に外國人利權企業

を壓迫してこれを放棄させようとする徴候が次第に著るしくなつて來た」と不安を感じはじめた。その具體的な現はれは、ソヴエト國民經濟の發展と共に熟練勞働者の缺乏が起り、そのため外國利權企業にたいする勞働者供給を制限し、賃銀の引上げを要求しだした——等々。

すべて「五ケ年計畫」が冗談でないことは事實の上で判つてきた。だが、資本主義の世界にまはりから圍まれてゐるソヴエト聯邦では、いつ何ういふ形で共產制社會が建設されるであらうか？

○

レニンは「新經濟政策へ退却するのは新らしい力と共に社會主義の建設へ——また社會主義のもつとも完成された形態としての共產制社會の實現に向つてすゝむ準備のためだ」——と言つた。が、凡そ何年の後にどういふ範圍で共產制社會を實現することが出來る——とは豫言しなかつた。

その後になつてスターリンは「一國內社會主義建設可能論」を唱へた。——現在ソヴエト聯邦を圍繞してゐる世界資本主義列國は、地球のどこかで社會主義國が存在することを喜ばないのは無論だが、資本主義列國がその特徴としてもつ帝國主義政策といふ相矛盾する利害關係と資本主義國內にゐる勞働階級の支持とのお蔭で、たとへ一國だけであつても社會主義國は資本主義諸國の包圍のもとに自分の存在をつゞけることが出來る、といふのである。××××が起らないでも、ソヴエト聯邦は單獨で——一國內で社會主義の社會を建設することが出來る、といふのである。このスターリンの理論によるとソヴエト聯邦における社會主義社會の實現といふ展望がやゝ近くに見えてくる。なぜなら「××××」を「社會主義社會建設」の不可分條件としないからである。

五ケ年計畫は、このスターリンの「一國內社會主義建設可能論」から出發してゐる。

が、スターリンも何年後にソヴエト聯邦一國內の社會主義建設を完成してそこに共產制社會を實現することが出來る、といふ豫言はしてゐない。今度の第十六回共產黨大會でも、彼れは「社會主義化に向つて異常なテンポで進みつつある」——と言つてゐるが、この先何年間でこの進擊の目的地へ到達するか、を豫言してゐない。

けれどもソヴエト聯邦が社會主義化に向つて計畫的に進んで行つてゐる以上、そこではどういふ風に、何時までに社會主義化が完成して、共産制社會――または共産制國家が建設されるのであるか？といふ問題が立てられない筈はないと思ふ。

○

ソヴエト聯邦の「國家計畫委員會(ゴスプラン)」はこの意味において、現在非常に興味のある仕事に着手してゐる。

それは、「ゲネラリヌイ・プラン」――又は略して「ゲン・プラン」(大計畫案)――の作製である。

この「大計畫案(ゲンプラン)」は現在進行中の第一次五ケ年計畫の最初の二ケ年間の實績に立脚して、次の第二次五ケ年計畫とさらに第三次五ケ年計畫までを包括する前後十五ケ年間にソヴエト聯邦を「何處まで到達させるか？」――といふ詳細な計畫案である。丁度、レーニンの大電化計畫を、國民經濟の全般に擴大する事になる。

この「大計畫案(ゲン・プラン)」は未だ完成されてゐない。未だ國家計畫案委員會の内部で、學者専門家の間であらゆる方面からこの「大計畫案」問題について活潑な討論が行はれてゐる最中である。

(大計畫案は來春までに完成發表の豫定である)

現在論議の中心となつてをり、また最も強く我々の興味を惹くのは「十年――十五年の期間内にソヴエト聯邦内に共産制社會を建設し且つ技術と生産の方面でアメリカ合衆國を追ひ越す」――といふエヌ・コワレツスキーの案である。

○

コワレフスキーは「大計畫」案の結論で次のやうに言つてゐる。

一、技術と生産の方面で世界資本主義國中の最先進國に追ひつき且つ追ひ越す。

二、第一次五ケ年計畫(一九二八・九年度――一九三二・三年度)が終る迄即ち十月革命から十五ケ年間にレーニンの立てた協同組合計畫を遂行して新經濟政策(ネップ)の目的を完了する。

三、第二次五ケ年計畫(一九三三・四年度――一九三七・八年度)で社會主義經濟形態に進展し漸次により完成した共産主義形態に轉向する。

四、十年――十五年間の再組織の結果として資本主義と共産主義の両勢力が世界に共存するといふ條件のもとに許され

る範圍内で共産制社會の完成された形態を建設する。

この結論は、現在の第一次五ヶ年計畫の二年間の經驗とソヴエト聯邦のもつ天然富源、技術的進步、勞働力等を基礎としてそこに可能な發展過程を考察し、これをアメリカ合衆國の經濟發展と比較することによつて抽き出されてゐる。

例へばコワレフスキーは——アメリカ合衆國が一八五〇年から一九二五年までの七十五年間に達成した約二十一倍といふ生產增加を、ソヴエト聯邦は十月革命の日から二十五年間に達成する可能性があると指摘してゐる

また——第二次五ヶ年計畫の終りの年である一九三七・八年度にはソヴエト聯邦の石炭、石油、鐵、機械工業、電氣工業、その他輕工業各部門の生產高は現時（一九二九年度）のアメリカ合衆國の生產高を凌駕する、そして次の第三次五ヶ年計畫の終りの年までには、ソヴエト聯邦の生產增加率が爾後のアメリカ合衆國の生產增加率に比べて遙かに高度なことによつてこれを追ひ越すことが出來る、と指摘してゐる。

こゝではアメリカの生產が最新式技術の完成されたものと共に多くの舊式技術を併存してゐるのにソヴエト聯邦の生產技術が殆んど總て最新式のものを以て新規に裝置されること、勞働生產力の大きいこと等が強調されてゐる。

○

最後にこのコワレフスキーの案は、ソヴエト聯邦はこの大計畫期において、無階級の共產制社會を建設するけれども、世界ではまだ、舊い資本制と新らしい共產制とが共存する、だから、この共產制社會は、その最終形態たる××××に導かれるのでなく、外國からの間斷なき壓迫に抗爭するため必要な國家機構を保存するであらうといふことを指摘してゐる。これはスターリンの「一國内社會主義建設可能論」と全然一致してゐる。

かういふ大計畫案は、すべて第一次五ヶ年計畫の實績を基礎としてゐる。そこで五ヶ年計畫の實績はどんなものであるかを具體的に概觀しよう。

○

スターリンは第十六回共產黨大會でソヴエト聯邦と主要な資本主義國とにおける最近三年間の生產狀態を對照して次のやうに說明してゐる。

「最近ドイツの景氣研究所が發表した鑛業及び大工業を一括する工業生産統計によると、一九二八年の生産水準を一〇〇とし一九三〇年第一期のアメリカ合衆國の生産水準は九五・五であり、ドイツは九三・四、イギリスは一〇七・四であるが、ソヴエト聯邦は一五五・五を示してゐる。ソヴエト聯邦の工業生産が異常な速度で發展してゐるはこれで判る」

他の國家計畫委員會（ゴス・プラン）の調査をとつて見ると一九二六・七年度のソヴエト聯邦の國民總收入は二百三十一億留餘であるが、今年度――一九二九・三〇年には三百四十億留以上に達する。かく毎年平均一五％の國民收入增加率を示してゐる國は、現在もつとも進歩した資本主義國のうちにも例がない。

○

農業國から工業國への轉化といふ五ケ年計畫のプログラムはどういふ實績をあげてゐるか？

五ケ年計畫の第二年たる今年度に――ソヴエト聯邦では工業生産額が農業生産額を追ひ越した！　これはこの國の歴史に特筆さるべきことである。

戰前のロシアでは國民收入中の工業生産額は四二・一％であつた。五ケ年計畫の第一年――一九二八・九年度にもまだ工業生産額は四八・七％で僅かではあるが農業生産額の方が多かつた。ところが一九二九・三〇年度には工業生産額五三％強――農業生産額四七％弱といふ比率を示すに至つたのである。

ソヴエト聯邦はもはや「農業國」とは言へない。「工業國への轉化」――の第一歩に入つたのである。この年の農業の生産高は戰前の一一四％を示すに過ぎないが、工業生産高は一八〇％に增加してゐる。

○

五ケ年計畫の最重要問題である生産の社會主義化といふ過程はどういふ狀態で進んでゐるか？

まづ工業の方面について觀察しよう。――國の工業化に重心をおいてゐる五ケ年計畫では、生産手段の生産（重工業）に全力が注がれてゐる。

一九二七・八年度には――ソヴエト聯邦の工業生産中で生産手段の生産が占める比率は二七・二％に過ぎなかつた。他は恐く消費品の生産であつた。五ケ年計畫の第二年までにこれを三

二・七％に高めた。

ところで工業生產を社會主義化するといふ問題はどういふ狀態で進展してゐるか？

一九二六・七年度に社會主義化工業に投下された資本總額は——十二億七千萬留餘であつた。今年度は四十二億留餘——約三倍の增加を示した。私營工業への投下資本額はこの期間に六千三百萬留から五千百萬留に減少してゐる。社會主義化工業が、躍進的に勃興する反面に私營工業は凋落の傾向を辿つてゐることが判る。社會主義化工業の正味生產額はこの期間に百二十億留から二百四十億留に二倍以上も增加してゐるが、私營工業の生產額は四十億四千萬留から三十三億留に減少してゐる。

○

農業社會主義化の過程はどう進んでゐるか？

ソヴエト聯邦農業の社會主義化といふ問題は、現在やかましく傳へられてゐる「官公營農業(ソフホズ)」と「集團農業(コルホズ)」の組織と密接な連關をもつてゐる。「集團農業(コルホズ)」は——ソヴエト聯邦特有の貧・中農の組合農業である。

ソヴエト聯邦の農業は今日まで——殊に新經濟政策以來ますます分散的・個人主義的經濟形態を持續してゐた。この農業狀態は國民經濟社會主義化の途上に橫はる大きな障害だと見做されてゐた。事實、工業の方面ではその大部分が漸次に社會主義化された時に、農業の方面では壓倒的な大部分が個人經營のまゝで殘されて來たのである。

一九二八年に非常なパンの缺乏が起つた。穀產地方の一部の凶作にもよるが、他の大きな原因は、私營農民中の富裕層——いはゆる搾取農階級がソヴエト穀物買付機關の公定相場買上げにボイコットした點にある。

そこで、官公營農業を擴張し、中・貧農の分散的な私營小農經營を大規模な集團農業に再組織して農業を社會主義化し、これを國家機關の中に統制するといふことが穀物問題解決の唯一の鍵だといふ結論に達した。

だから五ケ年計畫では官公營農業(ソフホズ)の擴張と集團農業(コルホズ)組織の奬勵に全力が注がれた。官公營農業はトラストその他の形で經營される非常に大規模な農業組織である。集團農業は中・貧農が農具や機械やその他の生產手段を共有として一種の株式組織でこれに加入し勞働單位と持株とにしたがつて收穫からあがる收

入の分配をうけるといふ組織である。

○

五ケ年計畫がこの二つの農業形態の發展にいかに盡したかは次の事實でわかる。

一九二七・八年度に、ソヴエト政府が官公營農業(ソフホーズ)のために融資した額は六千五百七十萬留であつたが、今年度は――八億五千六萬留の融資をした。最近三年間に官公營農場の手へ新たに供給された耕作用トラクターの數は一萬八千台(三十五萬馬力)に達する。官公營農業機關の耕作面積は五ケ年計畫の豫定よりも遙かに激增した。五ケ年計畫によると――官公營農業の耕作面積は五年目の終り(一九三二・三三年度)に五百萬ヘクター、穀物正味生產高は五千四百萬セントナーと計上されてゐるが、實際では第三年目たる來年度(一九三〇・三一年度)には八百萬ヘクターの耕作面積と七千百七十萬セントナーの穀物を生產することゝなつた。官公營農業機關のうちの代表的なもの―「穀粒トラスト(フレボ)」、「官公營農業中央組合(ソフホズ・ツエントル)」、「ウクライナ官公營農場聯合(ソフホズ・オブエヂネニエ)」、「砂糖聯盟(ソユーズ・サーハラ)」等は、現在いづれも既に各百萬ヘクター內外の穀物耕地をもち「穀粒トラスト(フレボ)」の如きは一九三二・三年までに千四百萬ヘクターの耕地を一手に經營する豫定計畫をしてゐる。

○

集團農業化の過程はどうか？

この問題は近來日本の新聞等にもしばしば報道されてゐる。農民は非常な勢ひで集團農業經營(コルホーズ)に轉向しはじめた。現在――五ケ年計畫の第二年目において既に五ケ年間に達成する豫定の一倍半といふ暴風的な發展を遂げたほどである。

一九二七・八年度に政府が集團農業化のために融資した額は七千六百萬留である。今年度一九二九・三〇年度には四億七千三百萬留といふ巨額が集團農業化のために融資された。ほかに搾取農(クラーク)退治の結果として富農から沒收された四億留以上に相當する農具その他の財產が集團農業組合の利用に移された。この事實のうちには集團農業化運動と農村における階級鬪爭がいかに尖銳な形で行はれてゐるかゞ鮮明に描きだされてゐる。

今年度中に集團農業用に充てられたトラクターの數はトラクター中央組合の七千台と官公營農場から集團農場のために供給された三萬台といふ多數に上つてゐる。また百三十萬頭といふ

馬匹を配屬する七千ヶ所以上の農業機械・馬匹供給所が集團農業のために開設された。ソヴエト聯邦內の集團農業耕作面積は一九二七年の八十萬ヘクターから一九三〇年には三千六百萬ヘクターに――實に三年間に四十倍以上に激增した。戰爭や革命以上の大變革がソヴエト農村の到る所に捲きおこつてゐる有樣が想像される。

(このソヴエト農村變革の姿を一層親しく眺めたく思はるゝ讀者は近く刊行の筈である山內光氏の「アイゼンシュタイン作(古きものと新らしきもの)映畫物語」を讀まれることをおすゝめする)

五ヶ年計畫のプログラムによると一九三二・三年度に集團農業から收穫される穀物正味生產高は一億九千萬セントナーの豫定であつたが、第二年目において既に二億五千萬セントナーに上つた。

その結果、官公營農業と集團農業――社會主義化農業が商品として市場へ賣りだす穀量は私營農業の商品穀量の五二%を占めるに至つた。

この點を指摘してスターリンは「曾て我々の五ヶ年計畫を嘲笑した者は、今では自分の不明を自から嘲笑することになつた。我々は工業發展の五ヶ年計畫を四年間で遂行し、農業社會主義化の五ヶ年計畫を二年――二年半で遂行する!」――と言つてゐる。

○

かういふ經濟的變化過程のうちで勞農階級の物質的、文化的狀態はどういふ方向に進みつつあるか。それは可なり興味のあることだし、重要なことでもある。

國民經濟が社會主義化されるにつれて、國民收入のうちから××××××××××××××勞働階級の取前か增加するのは自然である。この勤勞階級の取前の增加は、現在のソヴエト聯邦の立て前では、一部は勤勞階級自身の私生活の向上に、一部は社會主義的生產機關の擴張に振りむけられる。五ヶ年計畫では國民收入の非常に多くの部分が經濟發展のために動員されることになつてゐる。

現在世界各國は經濟恐慌のために生產の停頓や衰退と共に失業者の激增に惱んでゐる。ソヴエト聯邦ではそれと正反對の現象が起つてゐる。前に記すやうな生產の激增は主として生產

技術の改良によつて行はれてゐる。が、それでも勞働者の數はますます增加し、失業者の數は減少してゐる。殊に熟練勞働者の不足に惱んでゐる。何らかの形で生產に從事する賃勞働者（智能勞働者を含む）の數は、最近三年間に一千〇九十九萬人から一千三百十二萬人に增した。この中で筋肉勞働者は七百〇六萬九千人から八百五十三萬三千人に增加した。更に大工業に從事する勞働者（事務員等を除く）だけについて見ると、二百四十四萬人から三百〇三萬人に增してゐる。一般賃銀勞働者は一九・五%、筋肉勞働者は二〇・七%、大工業勞働者は二四・二%の增加で、大工業勞働者の增加率が一番高い。生產にたづさはりうる者の失業者は極めて少ない。中央職業紹介所の調査によると、各種の企業からくる熟練勞働者に對する求人申込の八割まではこれを滿たすことが出來ない、と言つてゐる。熟練勞働者が非常に缺乏してゐることが判る。

○

國民收入の分配狀態にも最近數年間に可なり興味のある變化が起つてゐる。國家計畫委員會の調査によると、國民總收入のうち（一）他人の勞働を搾取しない勞働者及び農民の取前は一九二七・八年度の七五・二%から一九二九・三年度には七七・一%に增した。（二）この期間に搾取農（クラーク）と都市資本家の取前は八・一%から一・八%に減少した。殊にこの搾取農都市資本家の取前は一九二八・九年度の六・五%から今年度に至つて急激に減つたことは、特徴的な現象だと言へる。（三）手工業者の取前六・五%から四・四%に減少（四）國營事業の取前八・四%から一五・二%に增加した。

この統計は資本家的分子にたいする鬪爭と社會主義化の過程をもつとも雄辯に語つてゐる。ソヴエト聯邦では都市と農村の資本家的分子が國民總收入の中から取つて行く分量は最近三年間に四分の一に減少した。現在資本主義諸國では國民收入中の資本家の取前が××%乃至はそれ以上に達してゐる時に、この國ではそれが僅々×%であるにすぎない。

○

勞働者の實質賃銀の增加がどの程度に行はれてゐるか、といふことも社會主義化の過程のうちで重要な問題である。

企業側の負擔による勞働者社會保險、勞働階級の生活改善に對する國家の支出、母性及び嬰兒保護事業、文化教育施設等の

豫算增加と勞働時間の短縮は——勞働者實賃銀の增加を意味する。これ等の全體を計算すると現在ソヴェト聯邦勞働者の實賃銀は戰前の一六七％に增加したことになつてゐる。

勞働者社會保險の總豫算額は最近三年間（一九二七・八年度——一九二九・三〇年度）に九億八千萬留から十四億留に增加した。

母性及び嬰兒保護のために最近三年間に支出された額は約五億留に上つてゐる。嬰兒の死亡率はこの期間に四二・五％減少した。年に三百萬人づゝの人口增加が行はれてゐるが將來の經濟發展のために勞働力の過剩はおこらない……。

勞働者住宅の建築資金としてこの三年間に支出された額は十八億八千萬留である。モスクワその他の工業都市で近代樣式の宏壯な勞働者住宅が續々新築されつゝあることは、ソヴェト聯邦の經濟發展に今でも尙ほ疑惑の眼を向けてゐるツーリストの不思議の種になつてゐる。

○

とは言へ、茲に一つ社會主義化過程のうちに存在する重要な矛盾と缺陷を指摘することが出來る。それはソヴェト聯邦では今でも消費品の物價が割合に高いといふことである。

勞働者の生活消費品の配給狀態について言へば、國家計畫委員會の調査によると一九二九・三〇年度には既に內國市場の卸賣の九九％以上小賣の八九％以上が消費協同組合の手に統一されてゐる。コワレフスキーのいふ「レニンの協同組合計畫」は外形的には既に達成されてゐる。殘る不幸は唯だ內容にある。最近、消費組合機關の內部では商業獨占の結果として最近ますます官僚主義と、出來るだけ多くの利益を生む商品を賣りつけようとするネツプマン氣質が根を張つてきた。そのため勞働者は消費品の幾割かを比較的高い値段で私營商人の手から買ひ入れて需要を滿たすことになり、實賃銀の增收が或る程度まで減殺されてゐる。

○

七時間勞働日制と一週五日制は次第に工業勞働者の廣い層に擴大されて行つてゐる。一九三〇年五月までに一日七時間制によつて働らく工業勞働者の數は約八十萬人に達した。また一週五日制で働らいてゐる勞働者の數は百五十萬人である。

○

五ヶ年計畫の第二年目において達成された實績は概略右に述べたやうな狀態である。これ等の發展過程のうちでは古いものから新しいものへ進んで行く途中で必然的に起る色々な惱みや一時的な障害や缺陷にぶつかつてゐる事であらうと思はれる。一たび集團農業に組織された農民の一部が脫落して行つたり、資本家的分子の最後の抗争が行はれたり、訓練のある幹部指導者の不足や素質の悪いことから仕事が部分的に失敗に終つたり……等々。

それにしても五ヶ年計畫の力強い進行と本文の冒頭にあげたコワレフスキーの「大計畫」案に表現されてゐる「十年――十五年の期間内にソヴエト聯邦内で共産制社會を建設し且つ技術と生産の方面でアメリカ合衆國を追ひ越す」――といふ展望とを結びつけて考へて見ると、我々の眼の前へはもう何か「新らしいもの」が迫つて來てゐるやうな氣がする。(八月八日)

新刊紹介

◇**ソヴエト經濟建設五ヶ年計畫**　大竹博吉編著・本書はソヴエト聯邦國家計畫委員會刊行の「ソヴエト聯邦國民經濟建設五ヶ年計畫」の譯纂で、現在世界的注目の焦點たる五ヶ年計畫は日本でも興味の對象となつてゐる時、本問題の要約な好資料である。(東京麹町内幸町一ノ五・ロシア問題研究所・定價壹圓)

◇**日本經濟年報**　日本經濟最近の推移及日本を中心として見た世界經濟の推移を鳥瞰的に綱述し、今後三ヶ月目毎に發行するといふ本年鑑は時を得た好き企てである。(東京牛込天神町・東洋經濟新報社・定價壹圓)

◇**鹽と人生**　平林敏滋著　鹽全般に亘り其の原理應用を說いたもので特に鹽療法鹽の榮養價値に主力を注ぐ鹽に關する綜合的な最初の研究である。(東京神田區表神保町二・栗田書店發行定價八拾錢)

◇**社會主義か資本主義か?**　小池四郎譯・スノーデン・ロイドジョーチ・マクドナルド等英議會大論戰の譯。(東京京橋第一相互館・千倉書房・價一圓二十錢)

◇**肥料問題研究**　佐藤寛次著・農村經濟の重大問題たる肥料問題は近代の資本主義産業經濟の特徴を備へて來たのは勿論であるが本書は之が經濟研究は農民の側からなさるべきであり、終局に於て肥料生産に關する資本と農民との利害關係は互に對立せるものであることを明かにせんとした前人未踏の研究。(東京丸ノ内昭和ビル日本評論社・價二圓五十錢)

ナンセンスの社會學

赤神良讓

×

來りつゝあるものは明に反逆時代である。だから現代社會の餘りに窮屈な、餘りに總てを意味附けて考へ、意味附けらるることなくしては、何事も行はない、といふ時代精神に反抗して、反逆の狼煙をあげ來たるものは、それはその反對物たるナンセンスの思潮であらねばならない。それ故にナンセンスは、現代人にとつて、決して單なる無意義ではない、それは寧ろ「無意味の有意味」であることを考へねばなるまい。

又現代人は「必然」に飽滿せしめられてゐる。一つの出來事があれば、必ず彼等はその因果の關係をば調べあげ、その必然性を檢證しようと努力する。そしてそれを彼等は、「科學的」であると誇稱してゐる。

然るに考へ直して見ると、實際社會は「偶然」であり、パイチヤンスの無數の相乘積である。だから又一つの社會現象は、このパイチヤンスとパイチヤンスとの平行四邊形の關係であり、偶然と偶然とのゴッタ返しであり、二乘であり、三乘四乘の關係である。たゞ人々はその科學的錯覺によつて、この無數のパイチヤンスの裡に、——それを個々に觀察するならば、そこに何等の法則はない、然し無數回の現象に就いて觀察をなすならば、それを支配する一定の法則がある、——といふ、パイチヤンスの法則性を發見して、「大數の法則」と名づけ、無理やりに總てを法則化し、必然化さうとしてゐる。だから又現代に倦怠する人々は、その法則化に對して法則無視の希望を持ち、その必然づくめに對して偶然を讃美しようとする。一切の人巧をば退けて、自然のパイチヤンスに歸らうとする。苦心慘憺條理整然たる過程を辿る所の拵物語よりも、「彼はどうして女を拾つたか」に百パーセントの興味を持ち、數理を超越してゐる「錢話」に夢中にならうとする。數理人はそれを「馬鹿らしい話」だと云ひ、「氣狂沙汰だ」といふ。然り、倦怠人は、その馬鹿にならうとし、その氣狂沙汰を羨望してゐる。餘りに小利口であることに、充分の反感を持つことによつ

て、偶然から偶然へと自由の乘剛を試みようとしてゐる。堅苦しい人生の醜に、ナンセンスのポスターをベタ〳〵と貼附けることによつて、その反逆心に幾分の満足を與へようとしてゐる。

×

又現代社會は何から何までをも、その營利的の機構によつて縛りあげてゐる。だから現代人は、その全身の末梢神經をいらだゝせて、一厘一錢の損得にまで、餘りに怖ろしき緊張振りをば示してゐる。會計學や簿記の先生は、「一厘一毛の誤算でも、その誤算たるや矢張り誤算で、百億千億の誤算と、その誤算たる點に於いては變りはない」とその尊敬すべき數理の精確さをば、熱心に彼等の生徒に敎込まうとしてゐる。又吾々が銀行に行くならば、幾人かの銀行員が、「何度その紙幣を數へたなら氣がすむのか」と何時も溜息が吐ける程、右から數へ、左から數へ、そして表から、裏から、はてはそれをば一枚づゝ彈き、そして捻り出して見る。又それと同樣に、不熟練な機關手が、泥汽車をば急停車する時の樣な、雜音をたててゐるデパートの金錢登錄器は、タイプライターと共に、近代的雜音の發聲器として雙璧であるばかりではなく、そのせゝこましさ、その惡意的なる監督性、その神經衰弱的なる猜疑性に、吾々は決して好感を抱き得る者ではない。吾々はその せゝこましさに呪を發し、その 猜疑性に 嘲笑を作らねばならない。

×

又現代生活は餘りに合理化され過ぎてゐる、機械論的になり過ぎてゐる。そして現代人はさうならねばならぬものと思込んでゐるらしい。人間の胃腑と硝子の試驗管とを同一視して、何でも三千八百カロリーの品物をば胃袋に叩込むならば、それで人間は生きて行かねばならぬ必然性にあるかの如き、生理經濟論をば構架して、酒を飲んでさへ、或者は赤くなり、或者は靑くなり、又或者は笑ひ、或者は泣き、或者は怒り、そして或者は多辯となり、又或者は默々然として考込むといふが如き、雜多にして複雜なる生理的心理的反應を呈する人間現象をば、悉く消去し閑却して、そこにリトマス反應の如き、簡單一律なる法則をば打立て、それによつて人間の生活をば化學的に又物理的に統制せねばならぬ、と考へ出してゐるらしい。だから如何なる場合に於いても、現代人は理屈を要求する、如何なる行爲に際しても現代人は主義を標榜する。

洵に現代人は餘りに哲學者であり、そして餘りに道德家としての假面を裝ふに專念的である。

×

K博士は有名なる大酒家である。けれども博士は理由なしには、そ

の一滴たりとも喉にはしない。而も博士は巧妙にその理由を發見する。四方拜、天長節を始めとして、神嘗祭、明治節、新嘗祭、大正天皇祭等の祭日は勿論、陸海軍記念日、自己の誕生日、妻の誕生日、子供の誕生日、著書出版記念日、父母の命日、カント・アーベント、さてはニュートンの萬有引力發見記念日、佛蘭西革命記念祭、それからそれへと、博士は一年の始めに於いて、その日記帳に、赤く正當に飮める日をば、——博士はそれを「左傾日」と前から呼んでゐられたさうである、そしてその「左傾日」をば、——書込んで行かれる。若し不幸にして、七月、八月の如く記念日手薄の月に於いて、徒にその白き日即ち「右傾日」が續くならば、珍しき友人をば招待するといふ「久濶日」が、所々に挿入されて來るのである。

然し今考へて見るならば、それは要するに飮むことではないか、吾吾は博士がその「左傾日」をば、適度に配置される御手際に感心するよりも、「唯、何となく飮みたいから飮むまでだ」と放語し得ないで、カントを引合に出し、ニュートンにお酌を強ひられねばならない、その合理癖に先づ憎惡とそして憐憫の情とを痛感せねばならなくなる。人間は本來左樣に合理的に生活してゐるものでは決してない、然るに現代人はそれを合理的に彌縫しようと絶えず努めてゐる。そして吾々は又そこに息苦しさをば感ぜねばならない。

×

彼等は又時間を喧しく云ふ、規則を喧しく云ふ。一秒の百分の一でも遲刻するならば、それはそれだけボーナスの袋に輕減作用を及して來る。だから今そのボーナスを氣にしながら、出勤時刻に間に合す爲に、バスに飛乘するならば、「どうぞ、停留場から」と、切角命を的に飛乘し得てホッとしたものを、又命を的に飛降せねばならない。では停留場へと急いで逆戻しようとすれば、交通巡査は「左側通行」と怒鳴る。忌々しさに唾を吐かんとすれば、「痰唾無用、吾等の町を美化しませう」と云ふビラが鼻先につきつけられてゐて、その唾の遣場に窮せざるを得ない。そこで吾々は益々あせり氣味になる、電車に飛込めば、そこには掏摸の危害があり、急いで道を横切れば、そこに轢逃げの危險がある。犬を飼つて「小彌太」と名づけ、猫を飼つて「彌次郎」と呼び、「時々は蹴飛して見るが、ヒーと云ひ、ニヤンと云ふまでである」と得意然として友人間に披露をすれば、そこには裏切物がある、重役は必ず彼の首を切ることによつて、彼に悲鳴をあげさせ、ヒーと云ひ、ニヤンと云はせるに違ひない。全く油斷も隙もならない時勢となり、何もかも禍の種子ならざるはない。

だから吾々はこの憤慨と、この緊張と、この煩悶と、そして餘りのしかつめらしさと、せゝこましさと、餘りの理屈と、必然と、營利と

でこねあげられてゐる人生に對する一揆性を、その內心において醇化せざるを得ない。

長い緊張に次いで來るべき弛緩を求めざるを得ない。總てを合理化し、總てを目的化し、有意義的に構築されてゐる思惟の殿堂の眞唯中に、無意義の偶像をば安置して、世人に鼻をあかしてやらねばならない。そしてそこに吾々は、ナンセンスの社會性を發見し、その流行性を見出し得ると思ふ。

×

又吾々はナンセンスの屬性として、簡潔性のあげられてゐるのを聞く。ロンブローゾーの云ふが如く、文明は常に多少に拘らず病的である、殊に現代の文明は變態的であり頹廢的である、從つてそれは神經衰弱症的である。

吾々が朝新聞紙を開くならば、先づ三段抜きの大見出しに目を落し、次いで直に六號活字の「その日その日」の短評に、又は「青鉛筆」に目を轉ずることであらう。現代人は氣根を失ひかけてゐる、寸鐵人を刺すの刺戟を求めてゐる。或博士が、その著書の厖大さを誇示して、一萬數千頁の著作をなしたと云ふや、原勝郎博士は「奴は馬鹿だからさ、自分の意見を述べるのに、一萬數千頁も書かなきや述べられないとは、馬鹿の證據ぢやないかな」と酷評を投げてゐる。眞理は常に簡單である、だから吾々はそれを簡潔に把持し、簡明に表現せねばならぬ、と世の神經衰弱症患者は云ふ。そして吾々も亦その近代人として、充分なる共鳴をそこに見出すことが出來る。

昔ペルシヤの若き王子ゼミイルが、父の後を繼いで王位に卽いた。さて、國中の學者を集めていふ。「王者たる者、もし過去の歴史に通ぜば、過つ事少からむとは、わが師の敎へだ。卿等はわが爲に世界史を作り、その完備を期せよ」と。それから二十年を經て學者は、十二頭の駱駝の一隊を率ゐて、一頭に五百卷宛を積み、すべて六千卷の書を王に獻じた。國政に忙殺されてゐる王は、深く學者の勞を謝して後いふには、「朕は既に中年である、たとひ老ゆる迄生きようとも、此浩澣な歴史は讀めぬ、之を短縮せよ」と。それからまたもや刻苦精勵の二十年を經て、學者は之を千五百卷に縮め、王に捧げて要點は毫も省いてないと申しあげた。王は、「さうであらう、然し朕は既に老いた、更に之を縮め、出來得るだけ早く仕上げよ」と命じた。今度は十年を經て、學者は一頭の若き象に僅に五百卷を積んで持つて來た。王は、「まだ不十分だ、朕の餘命は幾何も無い、更に縮めよ」といふ。また五年經つた、今度は學者が杖にすがつて、一匹の驢馬に大きな書物一冊を載せて持つて來た。王は此時臨終の床に在はすと、或官人が告げる。王の云はるゝには、「朕はいま逝く、遂に人間の歴史を知らずして

と。老いたる學者は、「陛下よ、否、臣はこれを約めて三語となさむ、曰く、生と苦と滅と」とアナトオル・フランスが書いてゐる。そしてそれは吾等近代人の潮に云はんとする所であり、「それ見よ」とばかりに、厖大なる著書に得意となり、長たらしく且つ難解の哲學と論文とに慢心してゐる學者に、投與される諷刺と冷笑とで、それはあらねばならない。

×

大笑は心理的に發達しない野蠻人のやることで、文明人は大笑をやらない。彼等は微笑をやる、冷笑をやり、嘲笑をやる、そしてその冷笑によつて、大笑以上の滿足を心ひそかに味つてゐる。だからナンセンスは、又その屬性に後者の笑の合成物をば包有してゐる。一體ナンセンスの持つ笑は、心の思惟をば一旦やりすごす、そしてそれに肘鐵をつかせる所に孕まれて來る笑である。心の作用はいつも先走りをする。

今、徵兵檢査官があつて、壯丁の一人を騎兵に採用しようと考へた。檢査官「君は何にか、馬が好きかな？」壯丁「ハイ、葱があれば五斤もたべます」といふ答のもつ笑は、「君は、馬が好きか？」と問はれたのに對して、讀者の心は、「馬は好きです」と答へるだらうとか、或は「馬はまだ乘つたことがないので怖くあります」と答へるであらうとか、既にその答を先走つて豫想してゐるのに、壯丁の答は全く脫線的であり、その豫想に肘鐵をつかせ、逆戾りし、轉轍せねばならなくならしめる。若しそれを心理學者のリップスに言はせるならば、その心のまごつきと落ちとに、笑があると云ふことになるであらう。そしてそれは單なる笑ではない、その答の馬鹿らしさに對する微笑がある。威嚴振つて嚴しく構へてゐる檢査官が、「葱があれば五斤もたべます」といふ答に、どんなに面喰つたか？「樣見ろ」といふ權威に對する反感の慰めから起る冷笑がある。そして又その壯丁の愚鈍さ加減に、嘲笑と憫笑とを讀者諸君は味ひ得るのである。

牧師「トムさん、その瓶の中に入つてゐるのは何ですか？」トム「あゝこれですか、ウイスキーです、半分は弟ので、あとの半分は俺のです」牧師「いけません、酒は惡魔の飲物です、貴方の分だけでも、今ここでお捨てなさい」トム「それがどうも、弟の分が上の方にあるので、俺のは底の方にあるので……」吾々は牧師のいつもいやに道德家面をしてゐるのに反感を以つてゐる、だからトム公うまく斷つた、と微笑を持つことが出來るか、さもなくば上の半分、下の半分同じではないか、とトム公の馬鹿正直に嘲笑を持つことが出來る。

詩人「ある者は名譽を、又あるものは富を、更にある者は戀を、人は何かを渇望するものである」女中「それよりか、世間の誰もが渇望

するものがございますわ」詩人「それは、何だね一體？」女中「鹽鮭を食つたあとの水でございます」簡單のことを强いて意味深長に表現しようとする、詩人に吾々の底奧き嘲りがある。女中の平凡の答に吾吾の諷歎がある。

晦日の夜、橋の下に焚火をして暖をとつてゐる乞食の夫婦がある。乞食の女房「この寒いのに旦那様方は、掛取に忙しさうにあちらこちらと、走つておあるきになる、だのにおらはまア、取る金とてないので、かうやつて焚火にあたつてゐられる」乞食すツくりと立ち上つて、女房を見下し樣に、「それも皆な誰のお蔭だと思ふ」と誇らかに云ふ。そのとんちんかんの誇に笑がある。親爺がどこまでも女房に恩を着せ、威張つて見たいといふ、男の女に對するイデオロギーに放たれた皮肉がある。

外交員「奧樣、盜難豫防器は如何でせう」奧樣「宅では不用よ」外交員「さうで御座いませうとも」奧樣「え？」外交員「何にお斷で買つて頂きました時に、お宅へ行つても駄目よ、何も盜まれる品物なぞないんですからつて、伺つて參りましたんですけれど、まさかと思ひまして……」奧樣「さう、蔭でそんなことを云つたの、まア失禮な、一ついくら、安いのね、五つばかり置いて行つて頂戴……」女の虛榮心に對する哄笑がある、外交員のしてやつた狡猾さに對する冷笑がある。吾々が常に言はんとしてゐる冷嘲を、吾々に代つてナンセンスは、あらゆる皺の種子といふ種子に、遠慮なく振掛けて呉れてゐる、そしてそこに愉快がある。

×

亞弗利加の森林での話である。二匹の大きな蛇が喧嘩をやつた。やがて二匹は嚙み合ひをやめて、お互に對手方の尾から呑み始めて來た。蛇は同じい大さである。青い蛇が黑い蛇を一寸呑むと、黑い蛇も劣らずに青い蛇の尾を一寸呑んで來る、二寸呑むならば又二寸呑んで來る、とうとう青い蛇が黑い蛇を全部呑んで了つたその瞬間に、又黑い蛇は青い蛇を全部呑込んで了つた、そしてそれと同時に二匹の蛇は消えて無くなつて了つた。といふ呑まれて胃腑の中にある蛇が、その胃腑を以つてゐる蛇を呑んで了つたといふやうな、ナンセンスの話は、合理論者に對する諷刺である、總てが論理的に進行するものだと獨斷してゐる男への教訓であり、皮肉である。

强盜をやつた囚人が、刑務所で十字架のキリストを見て、「看守さん、あすこにブラ下つてゐる男は、この刑務所でやられたんですかね」「あの男？　この刑務所で、馬鹿野郎！　あれはな、イエス・キリスト樣だ、この罰當り奴が」と怒鳴られた彼は、病氣になつて出獄が許可されて、ある町の慈善病院に入れられた。そこで彼は立派な寢を

生してゐるキリストの額を見て、「看護婦さん、あれはこの病院の院長さんですかな」「まア、あの方を御存知ないんですて、この世をお創になつた天のお父樣ですわ、吾等の主、キリストのお父樣ぢやありませんか」「ぢやキリストのおやぢぢやね」「さうよ、お父樣よ」彼は病も癒えて久方ぶりで娑婆の風に當り、ある所に遊びに出かけた。するとその女の部屋に、子供を抱いて、おそろしく上品な婦人の繪が壁にかゝつてゐた。「こいつア此家のお神さんか、まさかおめえぢやあるまえ」と女に問うた、「なんですつて、まア馬鹿だね、これはマドンナぢやないの」「何んだね、そいつは」「キリスト樣のお母樣よ、主イエス・キリスト樣を處女で身ごもり給ひし、やんごとなき方なんぢやないの」さうか、ぢやキリストのおふくろだね」そこで彼は考へた、どんなにキリストは偉いか知れないが、息子は刑務所で、親爺は病院に、おまけにおふくろはあいまい屋にゐるなんて、何とみじめな一家なんだらうと。そしてそこにはその强盗囚の無智にかこつけたる宗教の冒瀆がある、キリストの冒瀆がある。勞農ロシヤが、マリヤの像を賣り、十字架を鑄潰して馬蹄鐵を造り、教會を無神論者の學校に改造し、聖徒のミイラと、豚及び土鼠のミイラとを、宗教博物館に並列してゐると同樣なる、宗教威權に對するずるき反逆であり、そのずるさに吾々は微笑を持つのである。

×

近代人彼等は、總ての點に於いてずるさを學んでゐる、トリックを好愛してゐる、故に瞞着し、ペテンに掛けることによつて、自己の黠智の儁英さを自負しようとし、私に享樂し、誇示しようとする。だから又近代人は總ての出來事をもナンセンスに化することによつて、輕快に皮肉らうと企圖し、攻擊しようとする。だから又人々は、そこに嚴しき超弩級の顏に、全く空虛の頭を乘せ運んでゐる、ナンセンス型の男を主役として、彼等は如何にして三つの男爵を拾つたか、といふナンセンス劇を、容易に書下すことが出來るといふ、或はさうかも知れないと私も思ふ。

拳闘漫筆

荻野貞行

近代味多分な尖端的スポーツとして、拳闘、乃ち、ボクシングが、今や世界的寵兒となり、各國が、其の體重に依り八階級に分たれて居る各クラスの世界撰手權を奪取す可く、久しく拳闘王國として、これら總ての世界選手權を把握する事に依て、斯界に君臨せる、アメリカに肉薄せんとしつゝある時代である。

思つても見給へ。

試合開始のガングの響き。素晴しい迄に發達した肉體と肉體の線の交錯。力とスピードの瞬間的躍動。血と汗。ストレートとスウイングの相打つ音、そして觀客の怒號喧騷。むせかへる葉卷の香と熱のどよめき。

人間の持つ爭闘の潜在意識を完璧に迄共鳴せしめたければ止まないスポーツたるこの拳闘が、世界人種爭闘の大舞台の渦中に抛り出されたとしたならば、勢ひ流行が物凄い迄に四角のリングを中心に廣く大きく躍進して行くのは當然ではあるまいか。

決闘の手段として皮テープやペアナックルで鬪れる迄、乃ちフイニッシュフワイトで戰た拳闘も次第に科學的に研究され、回數時間等も制限された最も合理的なスポーツとして發達して來たのである。

而してこれら世界撰手權爭奪戰の最大人氣はヘビーウエイト（一七五ポンド以上）の試合に集まる。乃ち世界最强の人たらん事を證する爲の試合である。

近かきその拳闘界の頁を開けば、一九二六年九月二十三日、ヒラデルヒヤのエリナに於て、水兵上りのジエン・タニーに十回戰に破れる迄七ケ年間光輝あるヘビーウエイトの撰手權を固守せしジヤック・デムプシイ。彼はマサッセチユ州より出でた一介の若き浮浪者に過ぎなかつたが、グローブを彼の兩手に握るに及んでフワイターとしての眞價は忽ち現れ、その當時天下無敵、彼に向ふ敵なしとリング上に豪語せしヘビーウエイトチヤムピオン、ジエス・ウイラードを巨木を倒す如く無造作にマットにたゝき伏せて撰手權を獲得してより、南米の猛

牛として恐れられた、力の巨人フイルポと闘ひ彼の猛烈なスウイングの爲にリング外に抛り出されたにも拘らず、忽ち彼をしてマットの上に眠らしめ、次いで當時歐洲に於てライトヘビーウエイト（一六〇斤以上一七五斤）チャムピオンにして、サイエンテフイツクな技術と秀麗な容姿とを持てる、英國ヘビーウエイトチャムピオン、ジョウベケットを一回戰にして夢の國に送り、斯界の王者として歐洲にその名輝く佛人ヂョウジ・カウペンテアを紐育近傍ジアシイシテーに迎へて四回目にノックアウトし、歐洲拳闘界を呆然たらしめた彼。

リングより蹴り出し得た巨萬の富と名譽、尚又その上に性的魅力莫大な女優エステル・テーラーを贏ち得た彼。又偉大なるかな拳闘なるかなである。

ヒラデルヒヤに於てジエン・タニーとの試合に於ける觀衆十一萬五千人、入場料の上り高百八十余萬弗、デムプシイの受けた所得は百萬弗であつた。

彼のリタンマッチは翌一九二七年シカゴのソルヂアスフイルドで行はれたが、大勢既にデムプシイに利あらず、七回目にデムプシイの強打にタニーがノックダウンされた時のレフリーのカウント十三秒を要したと物議を釀したが天運彼に利あらず、選手權はタニーの手に歸したのであつた。

この時の觀衆十四萬五千人、入場料二百六十八萬弗、タニーが此の試合に於ては百萬弗の報酬を受けたのであつた。

彼タニーが拳闘界に入つた最初は、先づポップ・マーテンをデシイジョンで破りてより始まり、一九二二年米國ライトヘビーウエイトチャムピオン、バトリング・レビンスキヰを破て、同選手權を獲得し、同年ハリー・クレッブに勝て、タイトルを奪回し、二十四年には、フランスのカアペンテアをテクニカルノックアウトし、二十五年にはトム・ギボンを十二回戰に、パトリー・マッデンをノックアウトし、同年に再びハリー・グレッブ、ジョニー・リスコを破て居る。

彼が拳闘界に殘した七十回の試合に只一回アウトポイントされて勝を失つたのみで、未だ嘗つて夢の國に彷徨した事のない彼であつた。

彼がデムプシイに勝つた夜は、タニイの生れた紐育のグリニッチ村では徹夜で、教會の鐘を打ち鳴らし、群集はアメリカ軍隊屯営所の建築の二階窓に掲げられた大國旗の下で、踊り狂うた。婦人の觀衆二萬五千、中に、アリス・ルーズベルト、アン・モルガン、ノルマ・タルマッヂ等が居た。

デムプシイの愛妻エステル・テーラーは汽車の中でラウドスピーカーに向て愛人の戰勝を祈て居た。米國の海軍陸軍の兵隊は踊り狂ふ群が、夜の明けるのを知らなかつた程である。

タニーは一九二九年、ニュージーランドのトム・ヒニーを紐育でテクニカルノックアウトしたのを最後として、斯界を引退し、千萬長者ロックフェラーの孫娘と結婚し、歐洲に蜜月の旅行に出發した事は餘りに世人周知の事實である。

タニーの引退によりヘビーウエイトの王座は久しくブランクになつて居たが、本年二月二十七日、米國フロリダ州マイアミ海岸に於て世界選手權爭奪戰の前哨戰とも云ふ可き試合が、英のファイル・スコットと米のジャック・シアキイとの間に行はれたが、シアキイはスコットを三回目にノックアウトし、遂に六月十二日、ドイツのデムプシイと云はれ若き闘志に燃ゆるマックス・シュメリングとの間に行はれる、爭奪戰に出場する權利を得た。

獨逸のプライド、マックス・シュメリング。

今や獨逸國民は、ツエッペリン飛行船の世界一週の成功よりも歡呼を擧げて、若き世界の強者、我等がシュメリングを出した事を狂喜して居る。

彼シュメリングは一九〇五年に生れ、本年二十五才の若冠、高さ六呎一吋、一昨年迄は歐洲の當時ヘビーウエイトチャムピオン、スペインのパウリー・ウスウダンに破れて居たが、昨年二月一日紐育に於てジョニー・リスコをテクニカルノックアウトし、六月二十七日には、ウスウダンをポイントアウトして復讐して居る。

一方、ジャック・シアキイは一九〇二年紐育ピンカムトンに生れ本年二十八才、高さシュメリングと同じく六呎一吋。一九二七年には、デムプシイの爲七回目に彼の强打ボデイ・ブロウの爲ノックアウトされたとは曰へ、一九二九年一月にはノックアウトクリスナーを紐育に十回戰に破り、二月にはヤング・ストリブリングにフロリダ・マイアミ海岸に於て勝ち、九月二十六日にはトミイ・ローランを同じく紐育に於てテクニカルノックアウトして居る。

斯くして最后のワールド・ヘビーウエイト選手權爭奪戰は世界の白熱的興味の裡に開始されたが、三回戰迄はシュメリング屢々攻勢に出づる機會を得たが、シアキイの實力、到底シュメリングの如何ともする能はず、四回戰の終りには、シアキイの左手の猛烈なフックをジョウに喰ひグロッキイとなり繩を握つた儘リングに倒れたが、ゴングに助かり（三分間の試合の開始と終り一分間の休みを知らせる鐘を云ふ）五回目の始まるや、シュメリングのセカンド（介添人）シヤアキイのフワウル（下腹部を打つ）を主張し、レフリーのジミイ・クロレイ此を承認して觀衆の嘲々裡に、シュメリングの勝を宣した。斯くして榮あるヘビーウエイトの世界選手權は常勝國アメリカより始めて獨國人の手に歸したのである。

同夜の觀衆七萬人、總收入百五十萬圓と報ぜられて居る。

フワウルに破れたシアキイは涙をのんで、直ちに委員會にシュメリングとの再試合を申し込み右試合の條件として、第二回戰の總收入の内、當然自分の手に入る可き、二割七分五厘の内、一割二分五厘を返還して、シュメリングに、總收入の三割七分五厘を提供する契約に調印を申し出で、シュメリング又之を承諾し、來たる九月二十五日、同じくヤンキー・スタデアムに於てこのリタン・マッチの行はれる事に決定された。斯くの如く短期間に選手權チヤレンヂフワイトが行はれるのは世界選手權試合始まつて以來の事である。

之が爲フワウル問題は拳鬪界の非常なる問題となり、紐育州では、今度低部打擊のフワウルに依り試合は中止されない事になつた。此の決定はこの十七日に行はれる世界ライトウエイト選手權保持者サミー・マンデルに對して、近時破竹の勢にあるアル・シンガーの選手權試合に適用せらるゝ事になつた。

斯くしてヤンキーの手より彼等が世界選手權を掠奪す可く、各國のプライズフワイターの群は黄金とジヤズの波を潜つてその王座に突進せんと懸命に努力を續けて居るのである。

既にして、黒人ヤング・ジヤック・タムソンはジヤキイフイルドを去月ポイントアウトして、ウエルター・ウエイトの選手權を把握し、フエザー・ウエイトに於ては玖馬の土人キッド・チョコレートが百戰百勝、アマチユアレコード百回の試合にノックアウト八十六、ポイントの勝ち十四。プロフエショナルとして試合數六十回、ノックアウト四十一、ポイントアウト十八、引分け一といふ驚異的レコードを保持し、一年の彼が拳よりの稼ぎ高數十萬弗に達するのを見ても、彼のクレバーにしてセンセイショナルなフワイトの如何に人氣の有るかを察し得られるではないか。

而かも、彼にしてフエザーウエイトの選手權を得られない理由は如何。

幾十人かの彼等の所謂白鬼をして、血に塗れたマットにキスせしめた黒人拳鬪家としてヘビーウエイトチヤムピオンとして餘りにも有名を馳せた、ジヤック・ジヨンソン、ハーリー・ウイルスの彼等が悲慘なる末路は、人種的僻見の暗い影が常にこのフワイトに赤裸々に現れて居る事實を示すものではあるまいか。

一九二二年九月二十四日巴里に於てカルパンチエよりライトヘビーウエイト世界選手權を奪つた黒人シキが二十三年三月十七日には既にアイルランドのダブリンに於てマイク・マクテイグの爲に破れ遂に酒の上の喧嘩の結果ピストルで射たれ、而かも短刀で肩を突かれた儘「惡魔の町」といふ街路に彼の死骸が横たわつたのが一九二五年十二月二

十四日の寒い夜の出來事であつた。餘りにも悲劇の多き有色拳鬪選手の末路よ。

斯くして世界の拳鬪熱は、大なる人種、國別を背景にして世界的潮流のなかに躍進しつゝある時、斯界には未だ日尚淺き歷史の頁を有するに過ぎない日本の拳鬪界とは曰へ、近來著しき發達をその內容と共に遂げ、本年の極東オリンピック競技にはオープン競技として加へられ、又プロフエショナル試合に、アマチュア、學生選手權試合等にフワンの血を湧かせて居る有樣である。

又紐育には帝拳の若き選手木村久がノックアウト木村として斷然活躍して居り、大平洋岸に於ても白黑各人種の中に黃手の選手として精進の努力を續けて居る選手は我が拳鬪界をして益々光輝あらしむる將來の道程を建設する尊い先驅者であり、日本のデムプシイ、タニーを出す可き階程の犧牲者でなければならない事である。

（一九三〇、七、六）

參　考

ノックアウト（倒れて十秒間起き上れない場合）

ポイントアウト（點で勝つ）

體重に依る階級

一、フライウエイト（一一二斤以下）
一、バンタムウエイト（一一七斤以下）
一、フエザーウエイト（一二六斤以下）
一、ライトウエイト（一三五斤以下）
一、ウエルターウエイト（一四七斤以下）
一、ミドルウエイト（一六〇斤以下）
一、ライトヘビーウエイト（一七五斤以下）
一、ヘビーウエイト（一七五斤以上）

尙世界權ニ右ノ外次ノ階級アリ

一、ジュニア・ライトウエイト（自一二六斤至一三〇斤）

文藝運動における社會民主々義

貴司山治

一

文藝戰線一派の小堀甚二君が「改造」八月號に書いた「プロレタリア運動の左翼か、ヂヤーナリズムの左翼か？」と稱する「論文」は、丁度蟹が甲羅に似せて穴を掘るやうに、小堀君の屬する「文藝戰線」の――「文藝戰線」の屬する「日本社會民主々義」の――非階級的見解の程度を暴露した美事な「論文」である。

雜誌「文藝戰線」は勞農藝術家聯盟と銘うつ二三十人のグループによつて、その階級的基礎を、當時の「無産大衆黨」によつて表明せられるところの社會民主々義左翼におき、直接には無産大衆黨の、間接には日本の社會民主々義的政治運動の影響を文藝運動の領域内において擴大強化するために大いに「プロレタリアートのために」戰はれてきた機關雜誌である。

彼等の母體の無産大衆黨がさきに「七黨合同」によつて「日本大衆黨」となり、仲間われによつて「東京無産黨」となり、「戰線統一協會」となり、最近やつと「三黨合同」が實現して「全國大衆黨」といふ新しい看板がかれらのために出來上つた。

今ではこの「全國大衆黨」が「文藝戰線」の政治黨である。

日本の社會民主々義黨は最近この「全國大衆黨」の出現によつて大いに整頓して來た。即ち右翼の「社會民衆黨」中間派の「全國大衆黨」、左翼の「勞農黨」と、大體三大分野に統一されたが、將來は更に「統一」されるであらう。

そしてこの「右翼」「中間」「左翼」の三種類は、各よりあつまりの事情、發生と歴史の差からくる色わけであつて、その本質がおの〳〵社會民主々義政黨であることに間違ひはない。

社會民主々義政黨が、階級鬪爭の激化を中和せんとする巧妙なる資本階級の新鋭行動隊であることは、理論的に（辨證法的に）は既に早く暴露され、現實的には世界戰爭における各國社會民主々義黨のおの

ける自國プロレタリアートに對する徹底的裏切り(××參加による××主義への轉換)によつて證據立てられた。そして英國と獨逸における社會民主々義黨政府の實現により、全世界のプロレタリアートは、社會民主々義黨の執政がプロレタリアートの解放のためになされるものどころか、その古き衣を解き去り新しい太綱を以てブルジョア權力の許に、改めて大衆を縛りつける新なブルジョア政黨であることを見せつけられた。

最近、社會民主々義者の國際的結集は、プロレタリアートの國際的組織(コンミンタン・プロフインタン)を當面の敵として、ブルジョア攻勢の重要なるプロツタを承はりつつ、特に馭者となりつゝある。これは、資本主義第三期が必然的に直面してゐる世界經濟恐慌を前にして、資本階級がその決死的産業合理化、回避しがたい×××××××の通過に具へるべく、彼等を自己階級の新しい前衞として動員しつゝある姿なのだ。

このために、資本階級は、各自帝國內の分裂せる社會民主々義諸政黨をその統一に趨かしめる必要がある。

「三黨合同」によつて日本に「全國大衆黨」の産れたことは、かゝる國際的狀勢の一部として諒解されるので、決して之が「無產運動の進展」などではありえないのだ。成程、「全國大衆黨」の結成はあながち直接資本家政府の指令によるものではなからう。しかしすべての物は世界的關係の中につながると見る唯一の客觀的見地からのみ、一國內の現象も亦正しく諒解することができるのである。

第三期的破綻を遮二無二突破して第××××における陣容を有利にしようと焦る日本帝國主義は、例へば帝國主義外交の段階においては軍縮會議に參加を必要とするのと同樣の意味において、一九二八年以來急速に高まり來つた國內プロレタリアートの激化を解消すべく、その當面の役割を課するために國內社會民主々義諸黨の大同團結を必要とする段階を持つ。

即ち「三黨合同」は、かゝる段階に於いて日本帝國主義の意志を反映し、その新しい動員部隊として立ち現はれたものである。

で、彼等の固有の役割は、彼等をしてまづ無產大衆の中へとかり立てる。さうしてそこで彼等はプロレタリアートの名において、獨自の活動を始めるのである。

彼等は、資本主義社會の生活の、現在の、諸條件によつて、自然發生的に、必然的に亢揚してくる大衆の階級意識に對して、大衆が自らを解放する唯一の非妥協的な道――マルクス、レーニンの指導した道――を、マルクス、レーニンの名において僞り語ることによつて大衆を獲得する。そして大衆を改良主義的陷穽の中におとし、ブルジョアジ

ーの新しい桎梏の下につなぎとめるのである。

この職能は右から左までの社會民主々義者の內、俗にいふ左翼社會民主々義者の著しい役割となつてゐる。意識の低い大衆はかゝる左翼社會民主々義——エセ・マルクス主義と、眞のマルクス主義とをたやすく識別しえないためにともすれば彼等に追隨するのである。

二

ところで、雜誌「文藝戰線」の思想的（？）指導者たる元の「無產大衆黨」はこゝにいふ左翼社會民主々義者の一派である。

彼等は「戰線統一協議會」といふものを作り、これによつて今度の「全國大衆黨」の中に流れ込んでゐる。そして、雜誌「文藝戰線」一序手に思ひ出した、並に「文戰劇團」——は、「全國大衆黨」の旗の下に新しく展開された大衆的視野の前に登場し、文藝運動の領域において左翼社會民主々義的宣傳煽動を開始せんとする時期に際會したのである。

「文藝戰線」一派は常にたえず彼等自身を「マルクス主義者」とよび、レーニンの言葉等を剽竊引用することその他によつて本來の姿を大衆の前にかくして來た。未だに彼等の雜誌のあらゆる頁にこの「欺瞞」は充滿してゐる。

だが一體レーニンは如何なる人であつたらうか？　又今日の例へばコンミンテルンの世界的組織、×××の××等はマルクスの學說の實現したものに外ならないが、彼等はこれらの×××××の根據を否定し、又は回避し、日本におけるその現實に對しては極力黙殺を恣にしてゐるのだが、凡そ世の中にさやうな「マルクス主義者」が存在するものだらうか？

レーニンは社會民主々義を敵として戰ひ、之を倒してソウェート・ロシアを實現した指導者である。もしレーニンを今日×××生かすならば、レーニンは必ず「文藝戰線」を倒し、その背後の「全國大衆黨」を倒さなければやまないだらう。

日本に於けるマルクス・レーニンの敵、ソ×××××の敵、然もきわどいその一小敵「文藝戰線」は、かれ自身の敵の名を利用する左翼社會民主々義者の傳統的やり口を用ゐて今日若干の大衆を獲得してゐる。否、それは獲得でなくて欺瞞なのだ。

「文藝戰線」一派の文藝運動上のかやうな社會民主々義的本質は、一方において正しい非妥協的な唯一の道をすすむナップの××主義文藝の確立の仕事が具體化してくるに從つて、明瞭に暴露され始めた。去年から今年へかけて、ナップは苦難の中にその仕事をとり上げてゐる。藝術大衆化の問題にしても、それが何故それ程重要な問題として

我々の間に取り上げられなければならなかつたかといふことは、僕の階級的立場に立たない彼等には到底諒解されないのである。

かつて前田河廣一郎は我々の間の「藝術大衆化の問題」を指し「馬鹿の一つ覺えの大衆化」といふ漫罵を放つてその敗北的無恥の完全さを我々の前にさらけ出したが、今亦小堀甚二君が同じ問題を指して「支離滅裂な理論」と唱へてゐるのである。けれどもさういふことを吹聽する同君の「プロレタリア運動の左翼か、ヂヤーナリズムの左翼か？」の一文が凡そ「支離滅裂な理論」なのである。

同君の一文は、少くともその前半は、同君が冒頭に引用してゐる私の東京朝日新聞に書いた「文學大衆化の明日」といふ一文をよんで、非常な思ひつきを發見して書き立てたものらしい。

私のあの一文は作家同盟内部で大衆化問題の討論の始まる前に、私の主張のプランとして書いた。それは「私」のプランであつて、ナツプのテーゼでも何でもない。そしてあの一文が發表された時は、討論の内容はよほど先きへ進んでをり、「私」の意見は訂正されなければならなくなつたことを、急に末尾に附記した位である。

私はその「附記」において作家同盟が決定した「文學大衆化の問題」は戰旗誌上に發表される旨をことわつてある。そしてそれは戰旗七月號に十頁に亙る「藝術大衆化に關する決議」と題する長論文となつて發表されてゐるのである。

これをよめば大衆化問題が小堀君のお望み通り果して「支離滅裂」なものかどうかわかる筈である。同君に假へそれがわからないとしても、何なりとくつてかゝりたいならばこのわれ〳〵の共同の意見として公然發表されてゐる同盟の決議にこそくつてかゝるべきである。所が同君はたま〳〵私の一文をおぞくも「文藝戰線」的曲解の中へねぢまげ、その「曲解」を以てナツプ全體を誣ひようとするのだ。小堀君の「プロレタリア運動の左翼か、ヂヤーナリズムの左翼か？」は思ひつきの議論にしてもかういふ小人奸計をひそめてゐるのだ。

これは、彼等が正當に我々の側の理論的進展を理解しえず、正面より理論的に對抗することによつて彼等自身の階級的立場の暴露を怖れるための狡猾なる常套手段である。ナツプの最近における××主義文學確立への努力が彼等の文藝運動上の社會民主々義的本性を暴露しつゝゆく〳〵決して兩者相容れぬものたることが我々の側から明らかにされるにつれ、彼等は抗爭の途を失ひ、やがてこの種の理論的ファシズムを以て對抗し始めるやうになつたのである（このファツシ化の萠芽についてはいつか詳述する積りだ。

三

最後に直接に、小堀甚二君の「論文」に答へなければなるまい。

同君がその「論文」中に引用してはないが私のあの一文中「我々は——書いたものが何の新聞、何の雜誌によつて、即ちチヤーナリズムのどんな種類によつて大衆の間に送りこまれるかといふ考慮をまで持たなければならない。」とあるのは、當時の私の誤謬なのである。

我々はこんな風にチヤーナリズム（ブルジョア・ジアーナリズム）を利用すべきではない。それについて、私のこの考へは作家同盟の「ブルジョア出版に對する我々の態度」として戰旗六月號に發表されたテーゼにより十分に訂正されてゐる。

即ち、マルクス主義文藝家にとつてブルジョア出版物への參加は極めて條件的、例外的である。大衆をアヂ・プロするためにブルジョア出版物を積極的に利用するといふことは階級的原則の上から絶對にありえない。

我々はまづ我々に對して明白に敵對的な新聞雜誌から手を引かなければならない。

だが自由主義的なブルジョア出版物に對しても事情は決してよりよくはない。自由主義的出版物は現在檢閲制度に對して全く無力であり、我々の原稿はたゞそれが現在秩序に抵觸しない範圍においてのみ歡迎されるだけで、もしそれが眞實に階級的である時には撤回は拒絶され、書き直しを要求され、あるひは目もあてられぬ伏字によつて歪曲されてしまふ。いひかへれば我々の作品は××主義的な角をとられて丸くなり、社會民主々義的なものと本質上何の變りもないものとなるのである。

これを作家側からいふならばこれらの新聞雜誌にのみ書きつゞけることによつて自然その筆を枉げることに習慣づけられ、わがプロレタリアートによつてナツプの作家藝術家に要求されてゐるその最大の任務への進展を妨げられる。

だが我々は今千遍一律にブルジョア出版への參加を拒否してはならない。その理由として、各作家の生活の糧を得る手段として、又極めて制限的にではあるが、我々は之を通じて大衆に何等かを知らしめ、或はその讀者の一部を我々に近づけることが出來る——からである。

しかしこれとて、常に第二義的なものであり、主として機械的利用の對象であつて、我々の文藝鬪爭の重要舞臺としては、飽迄も我々自身の配布網——プロレタリア・チヤーナリズムを確立しなければならない。

——以上がナツプの正しい意見であつて、既に我々はブルジョア・チヤーナリズムに對してこれだけの見究めをつけ、その我々の場合における（プロレタリア文藝運動における）階級的意義を明瞭に限定して

ゐる。折角ながら私の古い一小文によつてナツプの藝術運動の左翼的立場を「チヤーナリズムの左翼」にすりかへんとする小堀甚二君の思ひつきは手遲れである。

同君は、私が「我々の作品行動が勞働者農民を正しいマルクス主義的現實へ誘導するために役立つやうに書かれなければならないとすれば、凡そ今日の、日本の、勞働者農民に役立つやうに書かれなければならない。必然的に明日は役に立たない作品でなければならない。」といつたのを「今日役に立つて、明日役に立たない物を歡迎するものはチヤーナリズム（ブルジョア・チヤーナリズム）だ。だから貴司山治のこの主張はプロレタリア文學の左翼的主張とみせかけて實はそれのチヤーナリズム化だ。」といふ風に解釋するのである。

——實に厄介千萬な、粗笨なる卓見（！）である。

私の言つた「今日の日本の勞働者農民に役立つやうに書く」といふ意味は決して「今月の何雜誌の讀者大衆に役立つやうに書く」といふ小堀甚二的意味ではないので、その本當の意味は「——國際プロレタリアートの世界的な單一の、有機的な機構に自からを結びつけ、廣汎な農民を同盟者としてプロレタリアートの××を目標として進みつつある日本の××的プロレアリアートのイデオロギイを內容とし」「重要産業の大工場勞働者及び貧農を對象として」（作家同盟藝術大衆化問題決議）書くといふ意味に發展する考へなのである。

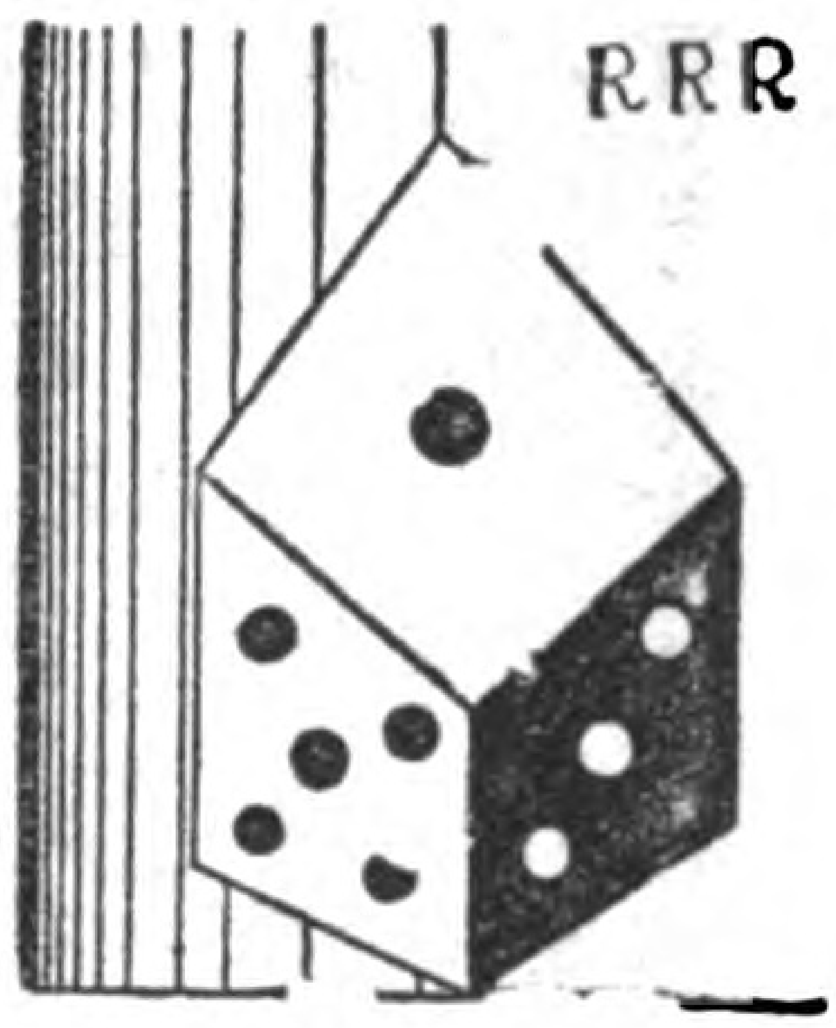
さうして、我々の對象たる——刻々にはげしく生長するわがプロレタリアートの前にはたえず重要な現實が置かれつゝある。我々は具體的な、その重要なる問題を取り上げ、それに我々の作品行動を集中しなければならぬ。「必然的に、明日は役に立たない作品」をといふ呼びかけは、あらゆる困難を排して、そこに主力を注ぐべき我々の態度を強調するもので、これをあはれにも單にたゞ機械的にチヤーナリズムの今月號に役立ち來月號には役立たない作品を——といつてゐるやうにしかきゝとれず又わざとさうきゝとる小堀甚二君などは、かゝる階級的必要の上に立脚して文藝行動を行つてをらず又行はふともしない人間だから、かういふノンセンスな解釋を立てるのである。

即ちこゝに文藝社會民主々義の理論的終えんを見出すことができるのである。そして彼等が今日以後遮二無二ブルヂョア・チヤーナリズムの畑に生き延びんがためには、政治的分野において社會民主主義者が、ブルジョアジーの新しい爪となり、プロレタリアートに向つて一切のファシズム政策を敢行し始める瞬間を、文藝理論の上において經驗しなければならなくなつてくるのである。

尙くはしいことを九月に創刊する我々の機關誌「ナツプ」が更に猛烈に暴露剔抉する筈だが、正しいプロレタリア文藝運動から脫落し、かの代作問題などでわかる通りむしろブル・チヤーナリズムの新しいドレイの地位に自己を見出しつゝある文藝戰線の社會民主々義の立場を、我々は最後まで追ひつめ、これを文藝の領域から驅逐しなければやまないだらう。

（一九三〇年七月）

街頭ヴァラエテイ



何うして彼の洋服に口紅がついてゐるのか

（ダンスこれだけは心得おくべし）

楢崎勤

1

私立N・大學で、英文科を擔當してゐる若き講師・中山信雄は謹嚴な獨身者として評判だつた。彼は、洋書の一杯つまつた本箱に取圍れた下宿の一室で、ちよつとの暇があつても書物をひろげた。およそ彼には、讀書のほかには趣味といふものがなかつた。外出するのも、その勤めてゐる學校の往復と、丸善に新着の書籍をみにゆくくらゐだつた。

それにもかかはらず、彼はなかなか近代明色に富んだ、そして、新鮮な色彩と、陰影の濃い筆觸で、最も氣の利いた小説を聰明に書いた。だから、彼の名は、「近代風景」を愛する、ある一部の人々に記憶されてゐた。勿論のこと、彼の日常生活を知つてゐる人々は、何うしてさういふ才情の溢れた小説が作り出されるか、奇異な感さへもつた。しかも、この頃、彼はよくダンス・ホオルを背景にした小説、ダンサアを主人公にした小説を書いてゐた。

それは、彼が誰にも知られないやうにダンスを習ひ出してからだつた。彼はダンスを始めてから、急に世の中が明るくなり出した。一日に一度は、ダンス・ホオルに出掛けなければ、何んだか氣持が落着かないやうになつた。ジャズの音樂の中に浸つてこないことには、書物をひろげ、ものを書く氣持になれなかつた。

それ故に、彼は授業が終ると、以前のやうに、直ぐそのまま下宿に歸らうとはしなかつた。以前のやうに、屢々のこと丸善を覗くことを怠るやうになつた。彼は、むしろ、むさ苦しい、そして孤獨な下宿の室を想像するだけでも、嫌惡な感情に囚はれるのだつた。

しかし、彼はまだダンスのすべてを踊る自信がなかつた。だから、ワルツやタンゴの曲がかゝると、彼はホオルの隅で何時もぼんやりして、そのワルツの踊り方を、タンゴの踊り方を、煙草をふかしながら見てゐるのだつた。

　タンゴとワルツの曲の時には、明るく點つてゐる花電燈のいくつかが消されて、ホオルは暗くなつた。つまり「藝術的氣分」を出すつもりらしかつた。しかし、誰も彼もホオルが暗くなると、そのワルツのゆるやかな典雅な曲を、そのタンゴの情熱のこもつた曲を踊つた。だから、折角のことにものものしい「藝術的氣分」も、多くの踊る人々のためにかき消されてしまつた。かへつて、さういふ風に暗くなると、おなじみの客と、ダンサアとは、はばかりなく愉しい語らひの時をもつことも出來るわけだつた。彼は、だから何故「その筋」が、ワルツとタンゴの曲がかかる時に、ホオルを暗くすることに注意をしないのだらうと思ふこともあつた。さういふことを思ふのは、彼がN・大學の講師であるせゐかも知れない――

3

　フォックス・トロットの時には、吸ひかけた煙草もそのままにして、彼は必ず踊るために起上つた。彼は、いつの間にか、きまつたパアトナアとしてのダンサアをもつた。しかも、彼女はそのホオルでも、踊りの上手な、そして美貌な踊り子だつた。彼はそのダンサアのほかには踊らなかつた。自然ダンサアもまた、彼のかはることのない熱意に酬いるために、つねに愛嬌をみせることを惜まなかつた。その愛嬌のために、彼は惹かれるものをかんじてゐたのだ。

　しかし彼は、ラストの一回をダンサアは必ずなじみのひとと踊るといふことを知らなかつた。それで、彼はバンドから、「ラアスト！」と大きな聲で叫ばれると、日頃よく愛嬌をみせてくれる、そしてよく踊つてくれるそのダンサアに向つて起つた。彼女の殆ど前までに行つた時に、彼女は「ごめんなさい！」さう云つて彼に詫びた。そして、彼女は微笑をもつて、ほかのなじみの客を迎へながら手を組んだ。

　そこで、彼は今までの自負心を慘酷にふみつけられながらも、いそいで他に、パアトナアとしての踊り子をもとめなければならなかつた。しかし、幸運にも彼はいつも踊るダンサアの傍に腰をおろしてゐる踊り子を見出した。

　彼は、いそいでパアトナアであつて欲しいことの表示として、ぺこんと頭をさげた。ラストにさへも殘つてゐたそのダンサアは、微笑をみせながら起上ると、彼と組んだ。彼は、それで幾分かふみつけられた自負心を、平靜な常態におくことが出來た。

彼は踊つた。

しかし、ホオルを一廻りするかしないかのうちに、パアトナアの踊り子は、決して踊りは上手でないことがわかつた。ただ、何うい ふ譯なのか、彼女の薄い服をとほして、彈力のある、しかしふつくらした腹部の感觸を、彼ははつきりかんじないわけにはいかなかつた。

彼は彼女の腹部の感觸を意識しながらも、眞面目な表情を浮べて踊つてゐる。曲が終つて、一齊にアンコオルの拍手がバンドに送られると、また奏樂がはじまつた。

彼は慌ててそのダンサアに、ふたたび踊ることを申込んだ。彼女は、ぴたりと腹部をくつつけて、そして、いかにも親しき感情をもつてゐるやうに、彼の胸に顔を埋めて踊つた。彼は、これからこの踊り子とばかり踊らうと思つた。ワルツの時も、タンゴの時も。

4

翌る朝——

私立・N大學の英文科擔當の若き講師・中山信雄は、鏡にむかつてネクタイの結び目をただした。その時に、彼は純白な麻の洋服の右肩のちよつと下に、唇のかたちのままで、はつきり口紅のついてゐるのを見出した。

待合室風景

吉行エイスケ

船醉状態にはいつてから三日目の朝だ。江東の勞働者と、昨夜の厚化粧の斑點を首に巻きつけた日本橋の女の集散場であるべきはづの手垢のついた待合室に、今朝は白い警官服が、腐敗した鎖に白いペンキをかけたやうにつづくのだ。さながら籠城のあとのやうに、ビラと威嚇する金屬の音がかちあつて、下降したアスファルトのプラットホームに隊列が從行してゐる。ここが京成電車、押上驛の淺黄の待合室だ。

その、白ペンキの鎖に包圍されて、昨夜から會社側へ罐詰にされた灰色の凝聚力を失つた從業員が、産婦人科の粉飾された看板の下の從業員だまりに窶れた集團をつくつてゐる。こいつらは既に旺盛な活動力を失つたルンペンプロレタリアだ。電流の綱が切斷される少しまへになると、英語が煙斗菜のやうに點々と染められた浴衣をきて、長靴をはいた職人風の男がやつてくる。曉のなかに子供を背負つた男。

海岸行の行商人。蒼白い女工の列、不器量だが女の汚濁の香を武器とする昨夜の女。彼等は右側の灰色の壁にそつた赤い食慾の陳列棚の硝子の底で崩れた、腐敗してしまつた獻立のまへを苦痛を感じながら通り過ぎると、改札口からアスファルトのプラットホームに下降して行くのだ。最初の、船醉におけるコンビネイションが破られたけたたましい電鈴が鳴る。始發の最終の客、背廣の彎脚の男

を新設すると、軒下に鬱蒼々たる歐神の字で警備本部と書かれた本據にむかつて、科學的なブルジョワジイの攻撃を敢行して車體が動搖した。

待合室に座つてゐる私の背後から、不潔物を纏えて太陽の光線が場内の汚れた足跡に殘された暗影をぬぐひとる。作戰と作戰の夜がまつたく明けて、江東の工場地帶の音響が裏街の細い露地をつたつて律動をここまでつたへる。東京勞働交通組合の青服の男が突如ここにあらはれる。この電鐵會社は例の市疑獄で巷間を騒がした札つきの社長の勢力下にあるのだ。だが、勞働者と農民がお客のこの會社のサービスは一見善良だ。乃ち料金を値下げしたが、從業員の給料を合理化の名目によつて低下した。津田沼へは改札口にエロチツクな改札口を置いたが、同時に解雇された改札人の給金の半額をもつてエロチシズムを支配することができた。その他。

しかし、青服の男はその時喊聲を聞いた。だがそれはホームに到着した鮨詰の車體から吐き出される群集のざわめきだ。その一群が洪水のやうにアスファルトの發着場から待合室に殺到してくる。彼等は玉ノ井の魔窟からやつてきた。長浦の貧民長屋からやつてきた。向島の汚濁と貧窮と飢餓をたへしのんでやつてきた。曳舟から乘こんだ勞働者のために身動きもしないで——彼等は何處へ行くか？

職業紹介所をめがけて先を爭ふ失業者、富川町へ行く自由勞働者達、龜戸の工場地帶へ河ぞひに行く熟練工の群れ、會社勤めの給仕女たちが、待合室の鏡のまへで營養不良の蒼い顏に紅をさしてゐる。彼等は青訓場へ工事場へ、河底へ、勞働者街に近代の蠱惑的なサービス・ガール、彼女たちはトラックの荒らくれ男を相手にするがためにガソリン供給所へ。そして、瞬間、ふたゝび場内に靜寂がおとづれる。待合室にある賣店に急配されたニユースを取卷いた人々が、會社側が從業員にたいして高壓手段に出たこと、そのために昨夜のうちに裏切者が續出したことについて話しつゞけてゐる。青服の男は私の側に腰を下すと獨言のやうに言つた。

——ストライキは、おれたちにとつて、古い戰術になつてしまつた。

そして彼はふたたび騒しくなりかけた場内から立去つて行く男親に抱かれた赤兒の泣聲を背後に浴びながら……。

新宿驛——こゝはウルトラ・モダンの娘さんが、場末のネオンサイン戀しくて、日夜地圖を歩むやうに二等待合室から、戀愛告知板、三等待合室の入口を埋める。ここで下車したわれわれはまづこの華麗な凱旋門をくぐらなければならない。すると斷髮女にはセーラッボンの優男が、洋裝肥滿の未亡人には洋

服代を稼ぐつもりだらう、若いサラリーマンが。厚化粧の女給はそこいらの課長級と自稱する中年の男を待つてゐる。紫の袴に手を入れた女學生は、學校當局にたいしてストライキを決行する勇敢なエロ・ボーイに可憐な瞬をおくる。彼等は待合室に架けられた特別車のポスターを指さして、その化粧室、マホガニーの卓子、それをとりまく廻轉椅子、そして展望車の豪奢に見惚れる。やがて彼等は空想の裡に、彼等の婚禮車を夢みる。だが甘い空想も瞬間にはラウド・スピーカーのうなり聲に破壞される。しかし二等室の人々はインスピレエションの負債でも感じたのか、改札口には行かないで吐切れ、吐切れの時計の分秒を睨んだまま立去らうとはしない。ここは剃り立ての、愛情の取引所だ。しかし、ここまでは諸君の、もとより百見の情景だ。

午後六時二十六分の韮崎行が發車して三等待合室は閑散としてゐた。鋼鐵のやうな固い意志と、彼女を象徴するラウド・スピーカーが沈默してしまうと、私はすでに廢墟のやうになつた、近く新館落成とともに千人風呂になるといふ三越の建物を背負つて、廣場のオルゴンガスとネオンガスの反映と、場末の盛場の騷音に都會人らしい快感を衝けて靑い苔の生えた椅子に座つてゐた。ここで私は情婦のレビュー女優の幕間を利用して別れ話をするつもりだ。もし附近のホテルで彼女と會へばふたたび戀の團欒を自然は要求するかも知れぬ。この街のメインストリートの狂燥さのなかでは個人のプラトニックな生理的現象をみたすわけに行かない。この空胴は東洋一の乘降客が室外の切符賣場から改札口へ、人波は犇いてゐるにもかかはらず、私の眼前にはスカートの短い支那の女が恐らく、彼女の同胞を待つてゐるのであらう、玲瓏たるものがあるのみ。その隣りに腰かけた三十前後の厚化粧の女は、バスケットのなかから化粧道具を取出すと綺になつた溝地をグロテスクに裝飾してゐたが、彼女は附近にねころんだ勞働者風の男に近づくと、冥想から覺めたやうにどん底の男女が囁いた。――おまい銀玉一個と、旭街の木賃宿の部屋代があるかい、そいつあ豪勢、妾についておいでよ。明日になつたら親方にたのんでよ、妾しは龜戸でも身を沈めやうさ。そのときは、おまいのやうな色男を見棄てる妾ではないさ。そこで妾のつきものにおまいなつておくれ、どう？　まさか嫌とは云ふまいね。

このあぶれた勞働者に話しかける女について私は知つてゐる。もと十二社で商賣してゐたが新宿が殷盛になるとともに街頭に出てきた女、この街の經濟狀態が膨脹し、驛の乘降客が増加するごとに彼女の預金帳の重量が加はつて行つた。三等待合室と旭街の貧民窟と十二社を巢窟にした地獄を糞で汚す種類の都會の新景物だ。そのとき、屍のやうに長椅

子に蹲くまつてゐた勞働者がむくむく起きあがつた。まづ、これで萬事は解決だ。もつとも、レビュー女優の、素足にアンクル・サックスをはいた脚線美時代のやつてくるまでの話…………背後ではジャツの音樂が悲鳴をあげてゐる。

東京驛——三等待合室にソーダ・フアウンテンができた。ウーロン・テイが一杯五錢だ。或る人々はここをプロレタリアの寢室だといふ、ラウンド・スピーカーをみていつも群集が二つに割れる。私は足もとに落ちてゐた小型の財布を拾つた。白銅貨四個に銅貨がいくらかと三島の宿屋の勘定書が一枚。掏摸にご用心。一、二等婦人待合室、男子覗くべからず。その驛の一、二等待合室はプチ・ブルが赤切符でゐるところと相場がきまつてしまつた。正面のスクリーンに廣告映畫が映る。

その他、櫻田本郷町の飛行館。大阪、福岡、大連方面行の乘客の待合室について書くつもりだつたがすでに紙數を超過した。

安エンタク物語

川島文郎

「オイ！ 酒井！ 起きろ、起きろ!!」

熟睡中の耳朶に觸れる怒號は、一種のメロデーだ。半睡半醒の魂を、更らに遠い國へ連れて行く。

エンゼルの聲だ。サタンの聲だ。

「オイ！ 起きんか!!」

僕は、高い所から投げ落されたやうな痛さを感じて目を覺ました。横腹を蹴られたのだ。

「何時ですか？」僕は澁い目を上げた。

運轉手小林の顏が歪んでゐた。

「八時過ぎてらア！」

嚙んで吐き出すやうな罵聲だ。

僕は飛び起きた。泣きたい思ひだ。

「一日中二百哩も乘り廻しやがつて、今朝三時半に寢たんぢやアないか」けれども、そんなことを口には出せない。顏も洗はずに、車臺の洗滌だ。車輛主にとつては、助手の顏などより、車の方が大切なのだ。

どんなに急いでも、車輛主の氣に入るやうに洗ふには四十分乃至一時間はかゝる。車臺の掃除を終ると、近所の安食堂へ驅けて行くのだ。

睡眠不足と疲勞した喉を、飯の固りがゴクリゴクリと胃の腑へ落ちて行く。追ひ立てられるやうな時間の忙しさに、味覺神經などは、知らない世界へ消し飛んでゐた。

食堂から歸つて運轉手を呼び起す。彼は、僕を起してから、更らにグッスリと睡つてゐるのだから——

運轉手の食事が終れば直ぐ『拾ひ』だ。

僕等の社會では、お客を求めて市中を流し

て廻ることを『拾ひ』と云ふのである。

一九三〇年型新フオードだ。

「シツカリ拾つてくれよ！」と、車輛主の言葉に送られて、ガレーヂを出る。

街は人の波、車の渦だ。

運轉手と僕との四つの目玉が、その波浪を潜つて客を物色する。

「オイ！」と、運轉手が、ハンドルを持つた肘で僕の脇腹を突く。

「何ですか？」

「向うから來る顔の宜い女を拾ふんだ」

此の會話は瞬間だ。

前方を見ると素敵なシヤンが歩いて來る。

行き合ふ自動車を撰擇してゐるやうだ。

彼女の眼と僕の眼が、空間でカツチリと交叉する。僕は手をあげて帽子を脱る。微笑を送る。

僕は、自分で自分を輕蔑する。

「何だ、その態度は！ 彼女夫にも劣るぢアないか！」

けれども仕方がない。免許證を把握するまでは、之れが僕に課せられた過程なのだ。

僕は彼女に聲を掛ける。

「お供いたしませうか？」

「アノ、××まで五十錢で行つて下さる？」

女の微笑と、甘つたるい聲だ。

僕は、彼運轉手の顔を見る。

「チエツ！」彼は輕い舌打ちをした。が、それは百パーセントの承諾であつた。

「オーライ！ チヤージだ」

僕は、彼女を理解してドアを開けた。

「アラ？ 行つて下さるの？」

彼女は、驚愕と半疑の中に車へ乗つた。

ゴー！

車は快速に飛ぶ。時速三十哩、勿論ポリスを警戒しながらである。

×

近頃の圓タクは實質上に於て半圓タクの狀態である。

「××まで五十錢で行かないか？」

「馬鹿野郎！ 飯い喰ふ人間が運轉してんだ。出直して來やがれ！」斯うした罵聲を浴びせた時代は、過去の夢である。

近頃の圓タクは、時には三十錢で飛ばすことさへある。何故、そんなに安く行けるか？

左表によつて知ることが出來るであらう。

ガソリン一ガロンの走破哩數

新フオード	約三〇哩	四汽筒
シボレー	約二五哩	六汽筒
ナツシユ	約二〇哩	八汽筒

車が高級車になり、汽筒が多くなる程、ガソリンを多く喰ふのである。兎に角、ガソリン一ガロンの價額は、赤貝黒貝、小倉石油等孰れにしても四十二錢乃至四十五錢である。

故に新フオードの場合は、三哩一圓とすれば一ガロンのガソリンは十圓を獲得することになるのである。が、此の計算が正確でないの

は勿論である。けれども、その半量を浪費して廻る爲めに消費したとしても五圓になる。

此の外に尚原因がある。何か？ チャージである。

運轉手は、殆んど自分の車を持つてゐない。車輛主と歩合による雇傭關係にあるのだ。此の歩合が、普通稼ぎ高の二割乃至四割である。だから、十圓の收入で二圓乃至四圓の給料となる。が、之れを眞正直に車輛主へ報告する者は殆んど無い。中間搾取をする。此の中間搾取をチヤージと云ふのである。運轉手の心理狀態がチヤージを目的としてゐる時にブツかれば、男でも、女でも安く乘れる譯である。

麻雀ガール

菅　忠　雄

○

確かな記憶ではない。

大正十年頃、田端の芥川龍之介氏邸の二階で小島政二郎氏なども一緒だつた。支那から歸つて來た和田と云ふ人が、麻雀といふ遊びだと紫檀の箱に入つた麻雀を、卓の上に打ちあけた。勿論その人以外は誰も皆目分らぬ連中ばかりなので、和田氏の說明で卓を圍んでガラ／＼掻廻はして、タド／＼しい手付で始めたもの丶、吃も碰もうまく發音できず、今考へると隨分滑稽なものであつた。それが私をして始めて麻雀を知らしめ、手に觸れたのであつたが、たゞの一度なので、魅力を感ずるまでにはゆかず、結局、不思議な遊びだ位で終つたのであつた。色々の熟語からしても、到底、日本には、流行する遊びと考へられなかつた。

それが今日の流行ぶりである。

○

震災の翌年の秋、私は神樂坂のプランタンで、いつか田端で手にした事のある麻雀を盛んにやつてゐる故、行つてみないかと誘はれた。其處は松山省三氏經營するレストランの二階を使用してゐて、極く親しい仲間だけが集つてガラ／＼やつて騷つてゐた。佐々木茂索氏などは、既に仲々の選手だつた。田端の一度の手ほどきが役だつて、自分も直ぐ仲間に入つた。冬の寒い夜を、あの二階でポコポコなる不完全な瓦斯ストウブ一つを頼りに、麻雀で夜明しした事など、もう古い話だ。久米正雄、田中純氏等と廣津和郞氏の神樂館一派はよくまあ毎晩集つたものだつた。

今にして思へば、その頃、何處の映畫會社にも身賣り出來ず、そこの二階でゴロ／＼してゐた松井千枝子と潤子の姉妹は、つまり今の麻雀ガールといへば、いへる者だつたとも考へられる。別に何もある譯ではなかつたが、全く此二人の姉妹がゐる爲めに出掛けて行つて、麻雀を知らず／＼覺えた連中も亦[illegible]少なくなかつた。麻雀ガールの元祖だといつてもいへると思ふ。

序でといつては可笑しいが山田順子が此頃よく矢張二階に姿を現はしては、誰かれなしに、

「ねえ、先生」

と、秋田訛りで、甘つたるく呼び掛けては、自分の家に夜もをそく送つてゆかした。それでゐてあの人、別に麻雀を覺えたらしくもなかつた。

此二階も警察問題が起つてからは、自然に集まる人もなく、解散して了つた。

○

それから後に、銀座の今の博品館の二階を倶樂部として會員組織で麻雀やトランプをやつてゐたが、死んだKといふ人の細君が夫婦喧嘩の上句に、夫がその倶樂部から歸つて來ない理由を種々書きたてて、警察に密告したらしく、警察から手が入つて、集つてゐる連中があげられて了つた。そんなこんなで、此處も長つづきせずに、消えたのであつた。

併し、前のプランタンといひ、此博品館の二階といひ、現在あるが如き倶樂部とは違ひ、一ゲームにいくらと料金をとる制度にはなつてゐなかつた。

○

大正十五年の春頃かに、麻布の福吉町に麻雀倶樂部といつた形の家が始めて出來た。無論、別に認可をとつてどうといふ程にチャンと營業してゐるものではなかつたらうが、一ゲーム毎にいくらと金をとつたのは此處が麻雀倶樂部の嚆矢だらう。

その家では、細君が出て、客の對手をした。しかも乳のみ子を膝において卓に向つてゐた。その乳のみ子がまさぐる若い母親の乳房などが、大いに若い學生連を招んだわけだ。是が麻雀マダムのそも〳〵草分けであつた。實際、乳のみ子をかかへてゐる處など、最も進歩した客寄せの手段だつた。併し此家なども、未だ麻雀が今日の如く流行を極めてゐないので、たちゆかず半年も經ずに看板ををろして了つた。今日を知る明のなかつた事は氣の毒の至りである。

○

現在、東京市内と郊外には千何百軒の倶樂部があるが、チャンと成績をあげてゐるのは、その内何軒あるか疑はしい。六十錢から最高一ゲーム一圓二十錢のゲーム料をとつてゐるが、四圈を一時間半位でやつて見れればいいが、二時間半から三時間半ぐらゐかかるので、仲々卓が動かず、それでは商賣にならぬ。それでも倶樂部は殖える一方なので、當局が、新しい許可をせぬ事になつた。それで、足場の惡い流行らぬ倶樂部でも權利がついたりしてゐるのだから、滑稽である。

麻雀ガールと稱するのは、球突場にゐるゲーム取りの女と違ひないのだが、ただあれ程女中といふ感じのないのは確かだ。斷髪なのや洋装なのは珍らしくない。客の對手をしても、別にチップが出るわけでもない。月給を貰つてゐるといふだけだ。併し、非常に美人を置いたクラブが或程度客を集め得られる事は事實らしい。客と共に歸途姿を消すと云つた所謂麻雀ガールは私が歩いた處では、未だないやうだ。



關ケ原御屛風

直木三十五

一

島津維新が、退却防禦をしてゐるらしく、山麓の方に、銃聲が立ちこめた。

だが、鬼頭には、それは、耳から入つてくる音響ではなく、頭の底に呟いてゐる、疲れの虫の聲だつた。對手の、眉庇の下から、剝出てゐる、興奮と、狂亂と、鹽の汗とで眞赤になつた眼球――それは、明瞭と、鬼頭の網膜に映つてはゐたが、自分の眼で見てゐるのか、他人の眼で見てゐるのか？　判斷が、つかなかつた。

地の底から、空一面にも擴がつて、どよめいてゐる音。唸り聲。絕叫。吼號。悲鳴。時々、ぴゆーんと、空氣を裂いて行く流れ彈丸――さういふものは、鬼頭にとつて、在ると思へば在るし、無いと思へば無いものであつた。

歪んだ白絹の差物、折れた鳥毛の大差物、血の滲んだ、どす黑い血塊のこびりついた鎧、血と脂とで曇つた刀――さう云ふ物も、見えてゐたが――ちらつと、掠めた、古い記憶のやうにも思へた。

何も、かも、碎けた鏡に寫る影のやうなものだつた。耳に、眼に、ちら〳〵するだけで、すぐ消へて去る水の影のやうなものだつた。

たゞ、渇ゑと、鎧の重さと、腕の痛みと、呼吸の苦しさと

が、自分のものだつた。

二

夜來の大雨に打たれた赭土は、馬蹄と、草鞋とに蹂躪されて、深い、滑り易い泥濘になつてゐた。

草叢の草は、その泥濘の下に、くちや／＼になり、林の中の灌木の類は、刀で斬られたり、折られたりして、枝も、葉も無くなつてゐたし、大きい樹の幹は、銃丸と、刀痕とで、所々赤く、白く剥けてゐた。

泥の上には、中には、刀、槍、鐵砲、草摺、甲、矢などの外に、赤黒い顔をした、血塗れの死體、濁つた白い眼球、砕けた頭から、血の塊で、顔中どす黒くなつた者。剥出した歯、切落された手、切口の肉の卷上つて骨の白く見えてゐる脛から額──それが、どれも、泥と血とでこね返されて、醜惡な塊になつて轉がつてゐた。

血と、泥とで、口も、眼も埋まつてゐる死者の顔は、醜く、滑稽な──時には、腹の立つ塊だつた。それを踏つけて、躓いたり、滑つたりすると、人々は

(邪魔な)

と、本氣に、怒つて、蹴飛ばした。そして、

(何うして、こんな所へ、轉がりやがつたのだらう)

と、石突で、突きとばした。

三

誰も、自分が、死なうとは思はなかつた。死體を蹴つたり、踏んだりして、死體の手足が動くと、人々は、

(生きてやがるので無いだらうか)

と、さへ感じた。そして、それが、敵方のだと、

(死んだ振りをしてやがる)

と、感じて、槍で、突いてみたりした。そして、全く、無慚な死體に對しては、それを、人間と感じるより、醜惡な塊と、感じる方が強かつた。だから、誰も死ぬとは感じ無いで前進した。

戰が始まつてから、もう七時間の餘になつた。彼等の友人は、唸いて、叫んで、或は默つて、次々に倒れて行つたが、それが、これが、一體、何ういふ事なのか──自分の周圍に、何

が起つてゐるのか、鬼頭は、もう、感じなくなつてゐた。本能的に、反射的に、狂犬のやうに、對手の眼をみると、躍りかゝつて行つた。たゞ、その間にも、時々、

(負け戰にきまつたらしいが、治部少輔殿は、何うなさつたゞらう)

と、ほんの瞬間だが、思ふ事はあつた。

泥の中で、起上らうとする者、這ひかけてる者、それを斬り、突き、蹴りして、躍進してくる敵――鬼頭が、石田三成の本陣から、島左近の指揮の下に、突撃してから、もう一時間の餘は、經つてゐた。

四

指も、掌も、固く、痛くなつて、槍を握り直すことも、離す事もできなかつた。身體中、灼くて、ずきん／＼神經へ響いた。

(可成り、手傷を受けた)

と、頭の隅で感じたが、少しも、恐ろしくは無かつた。呼吸が苦しくなつて、口を開けたまゝであつた。舌は、水のない砥石のやうに、乾き上つてゐた。膝は曲らないやうになつて、一寸した物に躓いた。だが、決して倒れなかつた。幾度か、

(もう、いけない)

と、思つたが、さういふ思ひと、死とは、少しも連絡が無かつた。駄目だ、と、感じても、死ぬ――泥の中に轉がつてゐる血の塊となるとは思へなかつた。少しも、死が恐ろしくなかつた。

甲は、ずり落さうになつて傾いてゐた。草鞋は、いつの間にか無くなつてゐた。鎧がすつかり重くなつて、草摺が、かた／＼當るのさへ、身體へ響くやうだつた。

もう、腕は利かなくなつてゐた。槍を突出すにも、振廻すにも、腰から、腹から、全身で、突出し、振廻さぬと、動かなかつた。

汗が眼に入ると、開いてをれぬやうに、きつくしんだ。敵が、途切れて、佇むと、泥を掬つて呑みたい位に、咽喉が干いてゐた。そして、槍を立てゝ、槍に縋つてゐると、そのまゝ突倒されてもいゝと思つた。

鬼頭が槍に縋つて振向くと、三成の本陣のあつた所には、少

しばかりの人影が、動いてゐるだけであつた。戰の中心は、南宮山の方へ移つてゐた。

（完全に敗北した）

さう思つた瞬間、地が、急激に降り始めて、はつとした刹那、天地が轉倒した。鬼頭はその中へ、安らかに、吸込まれて行つた。

五

（死だ）

と、思つた。だが、すぐ眼を閉ぢた。身體中、灼れてゐる。

（呼吸はある――然し、このまゝ死ぬのだらう）

右手の指を動かすと、泥が觸つた。その瞬間、堪へ切れぬ渇が、全身に感じた。鬼頭は、脚を動かした。何か、脚に、重いものがぶら下つてゐた。もう一度動かすと、自分の脚で無いやうに重かつた。左手を動かさうとすると、全身を突き拔くやうな痛みが、走つた。

「水だ」

鬼頭は、眼を閉ぢたまゝ呟いた。だが、起上らうともしなかつた。そして、

（治部少殿は？）

と思つた。だが、主君の、生死の不明なのを、心配すると同時に、自分の戰つた有樣が、殘りの夢のやうに――すぐ、次の瞬間には、全身が冷たく成るやうに感じた。それは、人間の世界で無かつた。人間の想像の世界でも無かつた。何んな慘忍な猛獸の世界でもなかつた。

鬼頭は、自分が戰つた――自分の神經で、自分の腕で、自分の眼に見、耳に聞いて、戰つた事では無いやうに感じた。しようとも考へなかつた事でもあるし、しろと云はれて、もう一度仕掛ける事でも無かつた。彼處の血は、たゞの血で無く、泥濘と、剝出した牙と、血みどろの腸と、こね返したやうた血だと思へた。

一人の兵の顏に、叩きつけられた肉塊――それは、內臟を引きちぎつて、踏躙つて、腦味噌にまさして、叩きつけたやうに感じられる肉塊だつた。

（よく戰つた。よくも、あんなに戰へた）

と、鬼頭は、思つた。そして、

「水」

と、又、呟いた。もう一度、眼を開くと、篝火が、點々と並んでゐるのが眼に入つた。

(徳川の陣地だ)

さう思ふと、三成が生きて、佐和山へ逃げたか、大阪へ行つたか、或は戰死したか――一言でいゝから聞きたくなつてきた。もし、三成が生きてゐたら、誰かゞ、自分の戰振りをして、誰かゞ、それを三成に話して――どんなに三成が喜ぶか――鬼頭は、いろ／＼の幸福な空想をした。

(死ぬものか――疵は淺いらしい。逃げられるだけ逃げよう。三成は、死なない人だ。きつと生きてゐる)

と、思ふと、急に、周圍の暗が、暗の中の臭氣が、恐ろしくなつてきた。

(大阪には――さうだ、鈴木の妻も、子もゐる。鈴木の死んだ事を知らしてやりたい――そして、三成に逢へたら――俺は、足輕大將になれるだらう)

鬼頭は、重い鎧が、自分の身體を、泥濘の中へ吸つけてゐるやうに感じた。右手で、鎧の腹帶を解いた。太刀を外した。脇差を外した。胸の紐を解いた。さうしてゐる間にも、どうしてか、不安と、焦燥とが、周圍から、ひし／＼迫つてきた。

(何うして、かう怯けづいてきたのか)

鬼頭は、自分を押へたが、何う押へても、毒瓦斯のやうに、臆病心が、全身へ擴がりかけた。

鬼頭は、鎧下着一つになつて、太刀と、脇差と、金と、氣藥と、守札とをもつて、虫のやうに這出した。泥の中を、死骸の間を、川を求めて――水を求めて、病犬のやうに、泥まみれになり、口を開いて、舌を出して、追はれるやうに、四つ這ひに、脚を引ずつて這出した。

六

大津にも、京の入口にも、淀にも、伏見にも、關ケ原の落人の首が曝されてゐた。それは、獄門臺の上へで無く、木の柱を道傍へ立てゝ、その柱から柱へ渡した竹竿に、髻を結びつけて、ぶら下げた獄門であつた。

何の首も少しづゝ、白眼を剝いて、紫灰色に――髪が脱け落ちて、今にも竿から落ちさうなのもあつたし、眉から顎まで、

大きく切口が裂けてゐて、灰色の骨の見えてゐるのもあつた。腐敗しかけた首は、眉も、睫毛も脱れて、頸の下から繩で、竿に縛りつけられてゐた。口を開いたの、歯を剝き出したの――それから、中には、大きく剝出した眼球が、飛出してゐるやうな首もあつた。

烏が、その上を、高く舞つたり、その近くを、狡るさうに歩いたりして、人々の去るのを待つてゐた。

群集は、毎日増えて行く首の數の計算で、爭つてみたり、三成の批判をしたり、大阪に起る戰の噂、その結果、落人を召捕へ損じて殺された百姓の話。落武者を詐して、鎧と、刀と、首とを取つて大儲けした話――などを、大聲で、小聲で話合つてゐた。

獄門の右手に、假小屋があつて、番人が、土間で、焚火をしてゐた。その小屋の前に、新らしい、だが、もう少し雨晒しになつた建札が立つてゐて、

定

石田方謀叛人詮義之事

召捕者　百貫

首級差出者　五十貫

訴人　三十貫

謀叛人を、於隱匿者同罪也

忠勤者與褒美長く可稱之者也

月　日　奉　行

と、書いてあつた。

鬼頭は、土臭い、垢と、汗との滲み出したどんつく布子をきて、髪を百姓風に、藁で結んで、ちらつと獄門を見たまゝ、通りすぎた。

鬼頭は、最初の獄門をみた時、その首の中に、自分の知人が居ないだらうか、と、人相の變つた首を、一つ〱眺めたが――眺めてゐる内に、後悔に似たものと、恐怖に似た感情とが、――油汗のやうに滲出してきた。

首になつて、ぶら下つてゐる、何の人々も鬼頭と同じやうに、或は、鬼頭以上に働いた人々だつた。それが、皆、かうして、烏のくちばしにかゝるのかと思ふと、自分の運のよさを喜ぶよりも、その首の一つ〱が、自分を臆病者とあざけり、卑怯者と罵り――生きてゐる上に、未だ立身さへ考へてゐる利

己的な態度を呪つてゐるやうに思へた。
鬼頭は、急ぎ足に歩き乍ら、その人々の魂魄が、番人に、鬼頭のゐる事を告げて、今にも、番人が、追つてくるやうに感じた。
(もう、大阪は、近いが――この大阪近くまで――大阪の見える所まで、俺を來させておいて、そして捕へるのぢやあるまいか――あいつらは、俺を喜ばしておいて、もう、大阪へ一足、といふ所で、捕まへさせて、あの首同志が、笑つて頷き合ふのではあるまいか)
鬼頭は、懐の脇差へ手をかけて、わざと、ゆつくりと歩いた。旅人が、急ぎ足に追抜くたびに、神經を鋭くした。歩いてゐるのが判ら無い位に、往來してゐる人々へ、注意をしてゐた。

七

「大六」
鬼頭は、陽に燒けた、髭の延びた顏を、一杯の笑にして、一人の子供の顏をのぞいた。子供は大勢、竹切れ、木刀をもつて、戰ごつこをしてゐた。大六は、ちらつと、鬼頭の顏を見上げたが、不審さうな眼をしたきりで、
一人の子供に、
「さあ、來いよ」
と、叫んで、木劍を構へた。足を割つて、臂を張つて父から教へられた型を守つてゐた。
「忘れたか? 大六、そら、隣りの、甚吾の小父さんだ。大六」
鬼頭は、腰をかゞめて、膝へ手を當てゝ、覗きこんだ。
「ふん」
大六は、頷いたが、そのまゝ、對手に、
「さあ、來い」
と、聲をかけた。鬼頭は、腰を延して、腕組して、暫く笑ひながら、大六の遊ぶのを眺めてゐた。
子供達は、懸聲をして、得物を振りながら、軒下から軒下へ、露次から、街路へ、快活に、勇敢に、駈け廻つた。
「やあーい、石田つ、謀叛人、逃げよつた。卑怯もん」
鬼頭は、笑を消して、その子供を見た。大六は、

「何？」

と、叫んで、その子供に、打ちかゝつた。子供は、

「御前、無茶する。」

と叫んで、露路の中へ、走込んだ。

「大六ッ、――大六ッ」

鬼頭が呼止めた。そして、大股に、大六の側へ行つて、

「かあさんは？」

「居る」

「何處にゐる？」

「うむ――かあさんは、彼處にゐる」

大六は、紺暖簾を、軒下に引廻して、表の間に、五領の鎧を飾りつけ、刀劍、槍、鞍の類を、いろ〳〵陳列してある店を指した。

「小父さんを覺えてゐるか？」

「うん」

大六は、面倒臭さうに頷いて、又、駈け出した。鬼頭は、睫毛に、微かな涙をためながら、

（生きてゐる方がいゝ。もし、大六が、俺の子供だつたら？）

鬼頭は、昨日まで、人間らしくも見てゐなかつた町人の屋ならびを、羨ましく、新らしく眺め廻した。

八

武具商の暖簾には、近喜と印が入つてゐた。表土間から、中格子を入ると、すぐ上に、大きい黑い、煤けた梁が、高々とかゝつてゐて、廣々とした台所へつゞいた土間があつた。その土間に、米俵が、轉がつてゐて、紺の腹當をした小僧が、その俵の中から、鎧だの、甲だのを撰つてゐた。

鎧の草摺の切れかゝつた物、血に染つた物。穴のあいた甲、切り傷のついた甲、血やら、肉やら判らない黑い物のこびりついた頰當――さういふ物が、小僧の手で撰出されて、中の間の上り口の、廣々とした板敷に座つてゐる女、番頭へ渡された。

女達は、淺い桶に、大根卸しだの、酒だのを入れて、草摺の糸を浸したり、布につけて拭つたり――男共は、鎖の切れたのをかゞつたり、鐵砲穴へ裏から鋲を打ちつけたり――忙がしく、手を動かしてゐたい

米俵の中のさうした品物は、悉く、戰場から盜んだり、落武者を殺して剝取つたりしたものであつた。戰近くの百姓達は、田畑を荒された報復として、夜に入るとすぐ、鎌だの、槍だの、竹槍だのをもつて、戰場へ出て行つて、さうした物を盜んだ。

京、大阪の武具商は、手代や人足をつけて、すぐ、その盜んだ品物を買ひに廻つた。そして、見倒しては、米俵に隱くして、運んで歸つた。關ヶ原の次には、すぐ、つゞいて、大阪にも戰があるといふので、武具商達は、ありつたけの資力で、盜品を買集めてゐた。

近京が、眼の上に、影がさしたので、客であらうと、煙管を置いて顏を上げると、

「鈴木源太兵衛の、御內室はをられるかな」

横柄な、侍風の言葉であつたが、汚い百姓姿であつた。近京は、煙管を取上げて、

「あんたは？」

冷淡た、咎めるやうな口吻であつた。

「同じ御馬廻りで、鬼頭甚吾と申すが、御意を得たいと、傳へてくれ」

近京は、もう一度、膝の上で、くる〱廻してゐた煙管を、下へ置いた。そして、笑顏になつて、御辭儀した。

「えらい、お見外れ申しまして——よく、まあ御無事で——」

近京は、振向いて、

「これよ」

と、女中を呼んだ。そして、中格子を、自分で立つて、開けながら

「取込んどりますので——えらい幕の內を見せますけど、何うぞ、こつちへ、これ、おすゝぎ——それから、離れへ行つて、幾彌さんに、鬼頭さんちゆう御仁が見えましたさかいと云うて來い——さあ、旦那、どうぞ」

さう云つて、近京は、中格子をくゞらうとする鬼頭へ、

「今度は、えらい、御苦勞をかけました。然し、御無事で——」

と、上り口へ膝を突いて、丁寧に頭を下げた。鬼頭は、いくらか、得意らしい氣持ちがした。

（矢張り、武士だ）

と、思つた。そして、自分の臭い百姓姿が、却つて、自分を、

えらい者に見せてゐるやうに感じた。

九

二人は、挨拶をしたまゝ、默つてゐた。幾彌は、

(默つてゐるのは、夫が、討死したからであらう)

と思つた。それで、

「覺悟は致してをります。夫は——討死を致しまして御座りませうか」

鬼頭は、未だ、默つてゐた。近京の貸してくれた平島の着物、青い髭のあと、手入した頭——かうして座つてゐると、隣同志で交際してゐた時分の二人と、少しもちがひが無かつた。

親から、先輩から、すゝめられて、鈴木の許へ嫁入をして、すぐ子供を擧げた夫婦仲であつたが、幾彌は、鈴木を大して好いてゐなかつたらしかつた。勿論、幾彌が一人で、鬼頭に、夫の亂行を云ひには來なかつたが、鬼頭が、鈴木の所へ行つて、鈴木が便所へでも立つと、言葉短かに、そして、つゝましく、尤もな愚痴を洩らした。それは、極めて、簡單であつたが、その顏色から、深い悶えと、それが、眞實である事とを語つてゐた。そして、鬼頭は、戰場で、ちらつと、

(鈴木の女房)

と、思ふ位に、心の底の方に、その心を、面影を沈澱させてゐた。

鬼頭は、湯上りの顏を少し赤くして、時々、唇をなめながら、久しく女に觸れないで鋭く成つてゐる嗅覺へ入つてくる枸杞の油の香、白粉の匂に、情慾が、毒素のやうに、素早く、血管の中へ溢れてくるのを、眺めてゐた。邸風の濃化粧。滑かな、光澤のある、白い手、その手を置いてゐる張り切つた太腿、典雅な乳のあたり、濃い、反つた睫毛と、その下に伏せてゐる蠱惑的な眼——鬼頭は、俯いたまゝで、さういふものを一つ一つ、想像して行つた。そして、毒素が、血管から、肉の中へ、眼の中へまで侵滲してきたのを、自分で感じた。頭は、その毒素で、呆然としてゐた。咽喉が、熱をもつてきた。

「夫は？」

鬼頭は、顏を上げた。

「もし、鈴木殿に萬一の事があれば？」

「覺悟は——」

「いや、此後の——所存なされるか、それとも——」

幾彌は、ちらつと、上目に、鬼頭をみて、俯いてしまつた。

「御覺悟の通り、討死で御座らう——此の上は——拙者の所存は、再縁を爲さる事、その美しさで、若さで、子供をもたれて、下らぬ操を立てる要も御座るまい。及ばず乍ら、拙者が——」

鬼頭は、自分で、何を云つてゐるのか、判ら無いで、ちろと、幾彌の濃化粧の頸筋を眺めてゐた。毒素が、身體から迸濫する位に感じられた。

「鬼頭様、妾は——」

幾彌は、正面から、鬼頭を見た。鬼頭は、

（貴方に、御任せします）

と、でも云つたなら——いや、さう云ふだらう、さう云つたなら——云はぬかも知れぬ、云は無いでも——鬼頭の灼けるやうな頭へ、幾彌の、淡紅色の粘膜、濕つた肌が、暴風のやうに、擴がつた。

「妾は——大六の爲に、町人に——」

鬼頭は、自分の感情を自制する努力に、怒りつぽい表情になつてゐた。そして

「町人に？——」

「町人に成りたいと存じます」

「町人に成りたい？」

「然し、大六だけは、是非、一人前の武士に——これを、御願ひ申します」

近習が、靜に、足音をさせて、

「御邪魔させて頂きます」

と、襖外に、膝を突いて云つた。

十

（幾彌、拙者など、三國一の聟で無いか）

と、云つたのも憶へてゐたし、幾彌の手を握つて、酌をさせたのも、判つてゐたが、それ以外の、話も、出來事も、考へ出せなかつた。

鬼頭が、醒めると、二階らしい、床の間のついた部屋の、金屛風の中に、寢てゐた。枕元に、朱骨の網行燈が、ほのかに灯をつてゐて、黑繪に金蒔繪した水差、同じ模樣の湯呑、片輪車の

高蒔繪に、金の飾をした煙草盆が置いてあつた。鬼頭は、水を呑んで、暫く、腹這ひになつてゐたが、立上つて、障子を開けた。

廊下に、金網のかゝつた柱行燈がついてゐて、その下の暗い所から、下へ行く階段がつゞいてゐるらしかつた。鬼頭は、そこから續いてゐる廊下、上便所と、描いて行つた。その便所の前の小さい石燈籠、松と、紅葉との植込み、そのつゝましい庭に面した離座敷——鬼頭は、肩で呼吸をして、足音を立てぬやうに降りかけた。

厠の前にも、柱行燈がかゝつてゐた。その下の廊下に立つと、部屋の中にも灯がついてゐるらしく、障子に、ほのかな白さが寫つてゐた。鬼頭は、情熱と、冒險心とに、顫へながら、障子の外へ立つた。

酒と、情慾とで、何の自制心も、判斷力も無かつた。肉體にも、精神にも、瓦斯が充滿してゐた。障子を、開けたが、中からは咎めなかつた。主家の方には、何の物音もしなかつた。

屏風を引廻して、低い、小さい枕行燈をつけたまゝ、繪本を伏せて、大六と、並んで寢てゐた。武家の女房の習慣のまゝに、寢化粧をして、白々と冴えた顏を仰向けて、少し、唇を——それは、却つて、親しみと、愛慾とをそゝるやうに開けて、眠入つてゐた。

肩が、少し蒲團から食み出て、襟がはだけてゐた。丸味がゝつた鎖骨のあたりが、豐滿な身體を想像させた。

十一

「かあさんは、未だ起きんか」

鬼頭は、昨日と同じやうに、中の間の板敷に座つて鎧を手入をしてゐる人々の横で、大六と二人、この甲がいゝとか、惡いとか、數へたり、遊んだりしてゐた。

「うん、頭が痛いつて」

「さうか——この小母さんが、ついてゐるか」

「うん——やあ、あの甲はえゝなあ」

大六は、今小僧が、櫃の中から取出した甲を見て、立上つて叫んだ。

「大將だ」

小僧が、

「前立が折れてしまつせ、坊ちやん」
と、女に渡した。女が、大六に、
「へえ」
と差出した。
「オ父さんのと同じだあ」
鬼頭が、裏返すと、八幡座に、天正十一年八月吉祥日、伊賀守明珍作と、彫つてあつた。鈴木のも、明珍作であつたが、これとよく似てゐた。さうで無いか、とも思つたが、さうぢや無い、と、打消した。幾彌を手込にした朝、夫の鈴木の甲が出てくるなど、鬼頭には、考へたく無い事であつた。
「大六」
鬼頭は、聲を小さくして、
「お母さんは、泣いてゐなかつたか」
「うむ?――知らん――早く、こんな甲を着たいな。馬に乗つて――」
鎧を一領買つたらしく、近喜の主人は、客を送り出してから、格子障子を開けて入つてきた。そして、
「治部少様が、二三日中に、御引廻しになるさうですな」
「引廻しに?」
鬼頭は、顏を上げた。甲を下へ置いた。
「只今の方は、御城内の七手番衆で御座いますが、話はたしかですやろ」
「引廻しとは――」
鬼頭は、自分が、白晝曬し物になつて、市中を引廻されるやうに感じた。幾彌に對して起つた絶大な、盲目的な愛慾よりも、もつと深い意地が、忠誠が、骨の中から、油のやうに滲み出てきた。大阪に落ちてきてゐる同志、大阪城にゐる有志――さういふ人々を誘つて、三成奪還の策を廻らしたなら、と、考へた。
(然し、それは、不可能だ――だが。俺は、默つて見てはをれぬ――)
鬼頭は、三成が、就刑した後の、自分の位置を考へた。
(いつまで、こゝに厄介になつてをれるか、幾彌が、一言でも喋つたなら、こゝを出なくてはならぬ。こゝを出て何うなるか? 戰が始まるといふが、いつ始まるか?)
鬼頭は、城内の友人、先輩の顏を、考へてみた。

「つい昨日まで、飛ぶ鳥を落すやうな治部少輔が——それに較べると、踏まれても、蹴られても、町人は結構だすな。鬼頭さんの前やが——幾彌さんが、町人の所へ嫁入すると仰しやるのも——」

「亭主、幾彌を見舞つてやらぬか」

「貴下は」

「わしも行く」

鬼頭は、何故か、興奮してゐた。

十二

幾彌は、鬼頭が昨夜見た、汚れた、そのまゝの夜の具、そのまゝの位置で、蒼白い額に手拭を當てゝゐた。鬼頭は、又、頭の半分、身體の半分へまで、醜い虫の這出してきたのを感じた。幾彌は、二人をみて、一寸、顏を外向けた。枕元に、近喜の内儀が座つてゐた。

「何うですな」

「ほん一寸した——今日一日臥んでおいでゞしたら癒りますやろ」

と内儀は、笑つた。

「風邪引か」

「血の病で、妾も、若い内、ようやりましたがな」

鬼頭は、兩手を膝へ置いて、

「幾彌殿、御暇に參りました。」

近喜が、

「そりや、何を仰つしやる——御暇なんて、阿呆らしい——」

「いや——」

と、云つて、近喜をみた鬼頭の眼には、決心の險しい閃きがあつた。近喜は、俯いて、

「御暇なんて——」

と、呟いた。

「せめて、大六殿を——昨夜——昨日も申した通り、大六を我子として、天晴れ、槍一筋を立てる武士に育てる所存で御座つたが、主君治部少輔殿が、近い内に御引廻しの由、拙者として、これを無視してゐる譯には參らぬ。同志があれば、同志と共に、無ければ拙者一人にても、警固の人數へ斬込んで、石田武士の名を殘したい——これが、これが、せめても、討死を遂

げた鈴木氏への御詫びでも御座らう、幾彌殿」
鬼頭は、咽喉を、少しつまらせて、言葉を切つた。そして、疊の上へ、片手を突いて、
「親しい朋輩へ——叛いた罪——お許しを願ひたい——又、大六殿は、常御城内、七手組の、薄田隼人に御賴みなされ。某より添手紙を仕らう——討死するか、腹を仕るか、何れは捨てる命——たゞ、一言——」
鬼頭は、手を擧げ、顔を上げた。近喜の眼をみた鬼頭は、涙ぐんでゐた。
「女々しいが——武士にあるまじき事で御座るが近喜殿——關ケ原の戰場を逃れて參つたのも、一目——逢ひたいばかり——鈴木殿在世の折より道ならぬ想ひをかけて——一目見たと思へば、これが、一生の別れ——」
鬼頭は、淋しさうに微笑した。そして、
（俺も、かうして喋ると、中々うまい）
と、感じた。だが、鬼頭の決心は、本當であつた。幾彌の心を得たさに、自分の戀を誇張しはしたが、三成警固の人數へ斬込む決心——斬死の決心はしてゐた。たゞ、死ぬ前に、幾彌から許されたかつた。
「幾彌殿——」
幾彌は、返事をしなかつた。
「近喜殿、これにて、某はお暇を、いろ〳〵と長の御世話、何んとも御禮申し上げ兼ねる。幾彌殿、斬死したと聞いたなら、線香を一本——はゝゝゝ、昨日少し、取亂して、すつかり、怒られてしまひましたわい」
幾彌は、執拗に、默つてゐた。身動きもしなかつた。近喜が
「止めは致しませぬ。然し、手前共も、治部少殿には、一方ならぬ御恩になつてをりますし、軍用金なら多少、それに、貴下、刀が」
「それは、御無心申さうと存じてゐた」
「さうで御座んせう。刀でも、槍でも——刀なら、相州秋廣が御座います。御餞別に差上げませう」
幾彌が、
「夫の刀が御座ります。それを差上げて下さいまし」
と、細い、美しい聲で、靜に云つた。鬼頭は、
「忝けなう御座る。幾彌殿」

といふと、膝の上へ、涙を落した。幾彌は外を向いたままであつた。

十三

群集は、狭い街路の兩側――軒下から、露次、低い柿葺の板根、瓦屋根、二階――道の見える箇所には、何處にでも、ひしめいてゐた。

足輕が、小具足を當てゝ、棒だの、槍だのをもつて、群集を軒下へ押込んでゐた。物賣は、頭へ乘せた桶が邪魔になつて見えぬと云はれて、怒り乍ら去つたし、小僧は、人の袖の下をくぐつて、頭を撲ぐられた。武士だけは、

「除け」

と、町人の肩を押して、大きい身體を、前へ出した。

「來た。」

「見えてきたッ」

と、屋根の上の人々が、一齊に立上ると共に、軒下から、群集が、雪崩れ出やうとして、足輕に、胸を突かれ、脚を擲たれて、追込まれた。

石田治部少輔三成は、新らしい小袖をきて、輕く、兩手を前で縛られて、疊一枚を置いた手車の上に乘せられてゐた。

小車の周圍にも、前後にも、小具足姿の士が、手槍を持つて固めてゐたし、車の後方には、五人の騎馬武者が、弓、鐵砲の足輕、馬丁、胡床持、草履取などを連れ、その外に三十人餘りの同じ陣笠、同じ姿の槍足輕を引率してゐた。

鬼頭は、唯一人で、群集と共に、軒下から行列の近づくのを待つてゐた。二日や、三日の日では、同志の居所をさがす暇さへ無かつた。鬼頭は、

（きつと、引廻しの日に、誰かと逢へるであらう。誰かが、斬込むであらう）

と、考へてゐた。そして、早くから、この邊を彷徨してゐたが、誰一人にも逢はなかつた。闘ふ場所として、こんないゝ所が有るのに、誰も、この邊にゐない事が、鬼頭を失望させるよりも、憤らせた。群集が、一寸、刀に觸れても、睨みつけた。

（一人では、斬込んでも、無駄だ）

と、思つたが、幾彌への手前、のめ／＼生きて戻る事は、したくなかつた。意地として、幾彌の一生の心に、自分の名を刻み

つけておきたかつた。

群集のどよめきが、だん〳〵近づいてきた。鬼頭は、いつでも草履を脱げるやうにして、袴の下の襷がけの仕度――その結び目、帯にもう一度注意した。

（主君は、きつと、疲れて、あの、利口さうな、だが、鋭い眼が、もつと、徳川への怨恨と、無念と、屈辱とで、凄く光つてゐるであらう。下痢をして、歩行もできなくたつて捕へられたと――さうにちがひない。普通の身體なら、何んなにしても、落延びる事のできる人だ。關ケ原でのあの見事な采配振り――あゝまで見事であらうとは、幼い時から仕へてきたわしにさへ判らなかつた。――だが、大阪方が、何故、こんな辱しめを受けてゐる三成を救は無いのか？ 徳川の、大阪城への面當に、一人も――一人として、男らしく奪ひ還さうとする奴は無いのか）

どよめきが、もう七八間へまで、近づいてきた。鬼頭は、前にゐる町人の肩を押して、いつでも飛出せるやうにした。すぐ、近くに、群集の囁きが起り、すぐ、四邊が沈默すると、兵の足音と、牛車の軋るのとが、聞えてきた。

（長吾が、こゝにをります。砂田の兵の總徒を斬る隙に、只今、斬死をします）

と、鬼頭は、頭の中で叫んだ。そして、左手で、鯉口を切つた。

十四

三成は、いゝ血色をしてゐた。大垣城をすてゝ、大雨の中を、關ケ原へ退却した時――その朝、その晝の、三成は、蒼白な顔をしてゐたが、牛車の上の三成は、微かに唇の上に、頬に、笑を漂はして、ちつと、前方の天を凝視めたまゝ、少しの恥かしさも、無念さも、恨みも無い表情であつた。そして、敵から與へられた新らしい小袖を着て――一人の町人が、鬼頭の耳の所で、

「えゝ、恥曝しやが――」

と、一人が囁いた。

「笑てはる」

「阿呆か、えらいのか、判れへんな」

「戦に負ける筈や。家來の獄首を、見てみいな。歯を食ひ縛

つてゐるのに、かんじんの大將が、こんな腑拔けでは、何うもなれへんやないか」

　鬼頭の、眼の中は憤怒で灼熱した。だが、彼の頭は、さうした批評を尤もだと思つた。草履を脫いで、柄へ手をかけてゐたが、微笑しながら、平然と、空を凝視めてゐる三成を見ると、

（この恥を知らない主君の爲に、今、斬込んだなら、忠臣とされるよりも、狂人と見られるだらう）

と、思つた。それでも、鬼頭は、三成が、自分を認め、自分の眼を見たなら、きつと、言葉をかけるか、表情を變へるにちがひ無いと考へた。そして、人々の前を、足輕に時々制されながら、牛車と共に——牛車の前へ、小走りに行つたり、覗込んだりした。だが、三成は、空を凝視めたまゝ、身動きもしなかつた。鬼頭は、三成に對して、

（何うなされました。そのお姿を、御無念とも、恥かしいとも思はれませぬか？　その平氣な、御祭の神輿に乘つてゐるやうな顏は）

と、思ふと、三成へ、腹立たしくなつてきた。

「無禮者。」

一人の侍が、鬼頭の袖を掴んだ。鬼頭は、立留つて、振向いた。

「突當つて、何故詫びぬ」

　鬼頭は、身體中一杯になつてゐた憤怒のはけ口を、この侍に見つけた。

「詫びる？　この大たわけ。」

　猛獸のやうな鬼頭の眼であつた。侍は、さつと赤くなつて、一足引いて、町人へ、背中をどんと、打ちつけた瞬間——侍の鼻から血が流出した。侍の側の一人が、

「うぬ。何んする」

　片手で、突いてきた手を、引つ外して、腹を蹴つた。少し、離れてゐた一人の侍が、

「やれ〳〵、いろ〳〵の阿呆をみる。三成の腰拔け阿呆、人騷がせの——」

と、まで云つた時、鬼頭が、

「禿雀。汝如きに大鵬の志が判るかッ」

「はゝゝ、卿等、碌々人によつて事を爲す者か——」

　鼻血を拭つた侍が、草履を脫棄てゝ、腰を落すと、

「えゝい。」

群集が、わーーつと、叫んで、人を突倒し、蹴倒して、逃げた。鬼頭は、身を伏せてよろめきつゝ、一髪の隙に、流れた刀を、引かうとする對手へ、

「小癪なッ」

と、大喝して、戦場鍛えの、無法の刀法、強力に任せて、右上方から、首もくだけよと打込んだ。

ぱーつと、音がして、濃い、黒く見える血が、ポンプから弾出される水のやうな勢で、四五尺も、奔騰した。そして、斬られて、よろめき乍ら、次の刀を、無意識に左手で受ける形をして、眼を閉じ乍ら倒れかゝつてゐるその侍の頭から顔へ、降りかゝつた。侍は血塗れに——それは、血で無く、粘液のやうに侍の顔へこびりついた。

もう一人の侍は、蒼白になつて、刀を構へてゐる。街路を取締つてゐた足軽が、

「狼藉者」

と、叫んで、鬼頭の腰を挨つた。鬼頭は、肌脱ぎになつて、

「かゝれ、かゝれッ、皆殺しだぞ。」

大上段に振上げて、歩みかけると、足軽も、群集も、どつと、退いた。

「狂人侍」

「やつてしまへ」

と、屋根の上の群集が叫んだ。瓦と、石とが、二つ三つ飛んできた。家は、周章てゝ戸を閉ぢた。足軽の知らせに、町を取締つてゐる人々が走つてきた。鬼頭は、三人目の侍へ、

「卑怯者。」

と、吼えて、斬りかゝつた。侍は、少し逃げてから、刀を抜いて立直つた。鬼頭は、眞赤な顔をして、剝出した眼をして

——それは、明かに、狂人であつた。

十五

わーつ、といふどよめきが、だん〳〵近づいてきた。それは、誰にも、只事でないと感じさせた。近習が、顔を上げると、向ひ側の家からも、近くからも、小僧が、大人が、軒下へ、街路へ出てゐた。

「何んです」

近喜が、店頭へ出て聞いた。
「さあ、泥棒か――」
「いゝや、刀を振廻してよる」
「泥棒やがて、振廻しよるが――」
鬨の聲が、急速度に近づいた。
「危い。」
と、いふやうな聲が、聞えてきた。人々の騒がしい叫喚と、足音とが、間近く迫つたので、近喜が、
「皆、用心してくれ」
と、使用人に、注意した、二三人の人が、棒をもつて、汗を流して、
「危いから、出たら、いかん」
と、家々へ、注意しながら、走つてきた。軒下へ出てゐた小僧が、
「あゝツ、宅のお侍や」
近喜は、跣足のまゝ、店の軒下へ飛び降りた。
鬼頭は、襟も、袴も、髪も亂して、額から、血を流してゐる。口からも血、腕にも、脚にも――そして、着物も、袴も、切り裂けて、灰土色の顏をたしてゐた。眼が据つて、よろめきながら、右手に、長い刀を、引ずつてゐた。
「鬼頭さん」
鬼頭は重さうに、頭を下げて、走るやうに、倒れかゝるやうに、軒下へよろめきかゝつて、
「一彌を――一、一期の願ひ」
群集が、わ――つと、喚聲を上げて、石が飛んできた。近喜が、
「無茶したらいかん。此の人は、俺の知つた人や」
と、叫んだ。
「一期の賴み、大六にも――逢ひたい」
近喜は、膝頭も、拳も、ぶる〱顫はせながら、
「奥へ行つて、御内儀と、大六さんとを連れて來い」
口早に、手を振つて叫んだ。
「水を――」
小僧が走つて入つた。役人が、ぢり〱棒で迫つて、
「神妙にせい」
「暫時――いま、いま――よ、餘人に亂暴はせぬと、申したて

恐いか」

鬼頭は、店の上り口の柱へ凭れて、刀を提げて立つてゐた。

大六の手を引いて、急ぎ足に出てきた幾彌が、

「あゝ。」

蒼白になつて立すくんだ。鬼頭は、その聲を聞くと、振向いて、

「幾彌殿、ゆ、許してもらひ度い——大六は——大六は、町人に、町人になされ。近喜、大六を町人に——育てゝくれ、わしが一生の頼みぢや。大六を町人に——決して、武士などにしてくれるな。幾彌殿、ゆ、許して、許して下され」

小僧のもつたまゝ、佇んでゐる水を、幾彌が、取つて、

「惡う御座りますが」

と、差出した。鬼頭の血の染つた、絶望的な顔は、笑つてゐるのか、怨んでゐるのか判らないやうに凄かつた。幾彌の差出した湯呑へ、顫へる血染の手を出して、暫く、湯呑をもたずに、ぢつと、顔を眺めてゐたが、

「忝けない」

それは、魂の奥から出たやうな聲であつた。幾彌が、

「濟まぬ事をしました」

と、いふと、唇で笑つたが、もう、視點が定まらぬらしく、湯呑をとらうとする手が、一二寸、外れた。幾彌が、手に持ち添へて水を唇へ當てると、

「大六を、町人に」

と、細い、枯れた聲で云つた。

「きつと町人に致します」

幾彌は、群集も、近喜も、大六も感じないで、鬼頭に、心の中で詫びてゐた。

（嫌ひな人では無かつた。あんな態度さへとらなかつたら、再縁したかもしれないに）

「だ、大六」

大六は、格子障子の所へ立つて、固くなつてゐた。

「大六」

と、母に呼ばれても、出て來なかつた。

「卑怯な大六、恐いか」

幾彌に叱られて、出てきた大六の手を、鬼頭の手へ當てゝ

「大六が參りました」

と、叫んだ。鬼頭は、幽鬼のやうに笑つた。

「大六」

「はい」

「大六」

「はい、と、返事をおし」

「だ、誰か、何か、云つてゐるやうだが」

と、云つた微かな鬼頭の顔をみると、もう眼を閉ぢてゐた。顫へる手先で、然し、大六の手をさぐつてゐた。

「町人に――武士になるな。暗い、灯を――」

幾彌が、

「近京さん、ま、末期の水を――」

と、叫んだ。そして、鬼頭の肩を抱いて、顔へ、頰のふれんばかりに、

「鬼頭様、しつかりなされませ」

と、叫んだ。

新刊紹介

◆**社會經濟論**　北澤新次郎著・勞働經濟問題社會經濟問題に對する全般の範圍を網羅して之を系統的に研究集大成したもの尖業問題勞働立法方面も扱はれてゐて概論的知識を得るに恰好の書。（東京麹町丸ノ内報知ビル二十二號省文社・價三圓八十錢）

◆**産業組織論**　北澤新次郎著・現代の機械生産的産業組織の解剖的考察で産業合理化問題をも檢討してゐる。（發行所同前省文社・價三圓二十錢）

◆**新しき藝術の獲得**　板垣鷹穗著・主として現代の機械美に關する諸論を集め卷頭には多數の寫眞を掲ぐ。（東京神田表神保町一〇・天人社・價二圓八十錢）

◆**怪談その他**　大佛次郎著・本誌に出た怪談「手首」「仁義以上」等を初め「宮女」「雪むすめ」等味深き讀物十數篇を收む。（發行所同前天人社・價二圓二十錢）

◆**古本の花**　窪川書店發行の古書時報特種號、珍らしい詩歌書、俳書、雜誌等の賣價目錄である。（東京小石川區白山前町五六・窪川書店・價五十錢）

◆**高所より觀る**　永田靑嵐著・著者子息と共に歐米を歴遊して其印象を無遠慮に俳味豐かに綴る。（東京京橋銀座西實業之日本社・送料一圓二十錢）

◆**Problems of the Pacific, 1929.**　本書は昨秋京都に開催された第六回太平洋問題會議の成果でシカゴで出版されて最近丸善に入荷した。重要項目を擧ぐれば、機械時代と稗史的文化、太平洋に於ける食糧並に人口、太平洋を圍繞する各國の工業化、支那の對外關係、滿洲問題、太平洋に於ける政策關係等々。（東京日本橋通二丁目丸善書店・價十圓）

ランヌの軍法會議

――ドレフユス事件――

大佛次郎

死線を守る

一

參謀本部情報局長アンリ大佐が自殺した。モン・ヴァレリアンの監獄へ收容されて自殺した。――善惡に關らず、これは晴天の霹靂であつた。

謹嚴で、剛直で、軍人の龜鑑として立てられてゐたひとだつたから殊にさうだつたのである。

この大佐がどうして監獄へ收容されたか？

自殺しなければならないやうな事情があつたとしたら、それは何故だ？

軍部は説明を與へずに周章狼狽してゐる。國粹黨は口もきけないやうに驚愕してゐる。探訪記者は血眼になつて走り廻つてゐるのである。

國の必要だ！ 事件を闇に！

それも考へなかつたのではない。たゞ、それには如何にも仕度がなかつたのである。それでもなほ、防ぐのに必死だつた。無論のことである。

國家的の機密だからである。

ところが――この第一の破綻に續いて豫期しなかつた第二のものが突發してゐた。

裏切である。

アンリ大佐の死が知れて即日のことであつた。味方に一言の斷りもなくエステラージーが出奔した。行衞を晦ましたのである。鋭敏な新

聞社の鼻が嗅ぎ出して來たのである。エステラージーは、大佐の收監の事實を知ると、倉皇として旅仕度もなく家を飛出したのである。北行の汽車へ乘つたこと、それで國境を越えて白耳義へ入つたこと。それなのである。

軍部は躍起になつてこれを否認した。否認しながら狼狽してゐるのである。

これは打撃に重ねる打撃であつた。

國粹黨諸新聞の沈默の中に、事實は漸く、はつきりした形を取つて來た。目さきの利くエステラジーは逃げたのである。ゾラの眞似をして英國へ逃げたのである。まことに軍人らしくない奴である！

袋はほころびた。アンリ大佐の收監の原因も知れわたつてゐた。反動主義の陣營は暗い影に閉ざされて沈默した。



ドレフユス

しかし、こゝも難攻不落なことは相變らずのもので、やがて、シャルル・モオラスなどが、「愛國の熱誠に依る文書僞造」と云ふ、なるほど刑法の條文に見當らない新しい熟語を振りかざして獅子のやうに叫び初めた時から、この一派が實に不死身に出來てゐることを天下に證明した。——アンリ大佐が僞造したと云ふ文書はもとのまゝ提出しては國を危くすると思はれたので、公示するに際して摘要を作つたまでだと云ふのである。

云ふまでもなくドレフエスの味方はこれを嘲笑した。ジョセフ・レイナックが「世紀」に掲げた評論で、アンリ大佐は頭初からエステラージーの共犯であつたと書いた。

反動主義の人々は、これを國士に對する侮辱と取り、アンリ大佐の

未亡人を動かしてレイナツクを告訴させ、檄を飛ばして裁判費用を全國から募つた。

募金は忽ち十三萬一千法の巨額に達した。——佛蘭西は斷じてまだ亡びないとでも云ふべきであらう。國士の悲壯な最後を紀念する日を計畫されるに至つた。

とは云へ、この事件が、一般的に輿論を搖り動かしたことは否み得ない。同時にパルテノンの圓柱のやうに居並んだ陸軍の巨星たちの間からも倒壞する者を出した。先づ參謀總長のボアデツフル將軍がアンリ大佐の文書を權威あるものと說明した責任から辭職した。次にペリウ將軍がこれを願ひ出た。「陋劣の徒の中傷するものあり」と願書に悲憤の語氣を漏らしてあつた。しかし、このペリウ將軍は慰撫されて現職にとゞまつた。部内の動搖は烈しいものがあつた。

二

自然とドレフユス再審の機が起つて來てゐた。殊に中立的な立場を採つて絕えず浮動してゐた人々までが、事件がいつまでも疑雲に閉ざされてゐるのに、痺れをきらして來た。ゾラの云ふ「眞理」が一步前進したのである。ドレフユスの再審は最早避け難いもののやうに信じられて來た。

遂にはブリツソン首相が、この決心を閣議に漏らした。

カヴエイニヤツク陸相はこれに强硬に反對した。これは陸相としては已むを得ないことだつたかも知れない、七月七日に議會でした彼の名演說が今もなほ全國の役場の前に貼り出してあるからである。「有形無形の權威を自身で確かめ、一言の批評の餘地を殘さぬ完全な」證據に立脚して、「ドレフユスは有罪」としたのである。

その信仰はその後も嘗つて動搖してゐないと放言するのであつた。アンリ大佐の僞文書事件も、カヴエイニヤクは問題にしてゐないのだつた。

しかし、首相もまた自分の主張を枉げないひとだつた。結局は、九月四日になつてカヴエイニヤツクは勇退した。代つて、それまで巴里衞戍總督であつたチユールランダン將軍が陸相になつた。

再審は、前裁判の際に知られてゐなかつた「新しい事實」が發見された際に、國璽奉持官の請求に依つて、初めて認められるのである。國璽奉持官は佛蘭西では司法大臣が兼任してゐる。ブリツソン内閣では、いよ〱再審を問題にする肚にきめて、國璽奉持官から新しい陸相に書類の移牒を請求した。チユールランダン陸相はこれを承諾したが、その際に、陸相の意見として、「ドレフユスの有罪だつたことに絕對に疑ひはない」と附加へた。これがために閣議は攪亂された。激論

の後に、再審の可否を問ふ諮問委員會を組織するように決議され、同時にヂュールランダン陸相は辭職した。これは九月十七日のことで、ヂュールランダンが陸相に就任してからまだ二週間にならなかつたのである。

反動派の希望は、この非國民内閣の後任の陸相を得られないで、瓦解することであつた。しかし、閣僚の一人の推薦でシャノワヌ將軍が就任した。反動派の新聞は口を極めて將軍を罵つた。

諮問委員會が開かれた。再審を可とする者三人、反對する者三名で決議するまでに到らなかつた。ブリッソン首相は、なほ敢然として主張を貫徹させようとして、閣議を動かし、九月二十六日になつて國璽保持官から大審院に再審の手續を採るよう請求させた。

反動派は、巣を叩かれた蜂のやうに怒り出してゐた。ドレフュスなどは最早問題でない、軍隊の名譽を擁護するために國民よ起てと云ふのだつた。十月二十五日から議會が開かれた。ファショダ事件があつて英國と開戰の危機を傳へられてゐた際だし、議會は遂にブリッソン内閣を倒壞させた。

新しい内閣は、シャルル・チュピュイを首相とし、フレエシネを陸相に、ルヴレエを法相にして組織された。しかし、失脚した前首相ブリッソンが發足して行つた仕事は大きかつた。再審手續は大審院の刑事部で引續き研究されてゐたのである。反動派はこの方角へも賑やかにも騒々しい十字軍を起してゐた。新聞は咆哮し、差出人不明の脅迫状が日々役所の郵便受に溢れてゐた。

刑事部は報告を出さなければならない。その報告者になることは攻撃の焦點に立つことなので、誰れも忌避した。家族のある者には向かない役目だと見たのである。まだ獨身者で所信に勇敢だつたバールと云ふ者がこれに當つた。この男のほかには老人だつた檢事總長マノオが職務に誠實であつた。二人は、ドレフュス夫人リュシイの再審要求の請願を「受理すべきもの」と認定した。マノオ檢事總長はドレフュスの刑を直ちに停止することまで提言したが、バールはこゝでは刑事部の認定を形式審査の範圍に限るものとした方がこの場合に寧ろ有利ではないかと云ふ意見だつたので、檢事總長もこの穩當な說を容れることになつた。

この時軍部が徐ろに牙を示して來た。

三

刑事部は軍部が保管してゐる機密書類の移牒を十一月二十四日以來度々請求してゐたが、軍部の側では斷乎としてこれを拒絶してゐた。刑事に見せれば當然に被告に見せなければならぬことになつて、國の

紛爭を醸す危險がある、と云ふのである。しかし、これはドレフュスの斷罪の基礎とせられた書類で、これを度外視して再審の問題は可否いづれとも決定出來ないわけなのである。

問題は議會にまで持出された。（十二月十九日）野に下つてゐたブリッソン前首相は、右の移牒が、云ふやうな危險を伴はないことを聲明した。既に自分が首相をしてゐた頃當時の陸相カヴェイニャックが有名な七月七日の演説の前夜この書類を卓の上にひろげて見せてくれたので、ブリッソンはかゝる性質のものでないとよく知つてゐるのである。書類中實際に事件に關係があるのは三通だけであつた。（既にその一通はアンリ大佐の僞造したものなのである。）その他の、六十通に及ぶものも、どれを見ても、何等國の安寧を紊すべき性質のものでない。かう云ふのであつた。

内閣は、これに屈服するよりほかはなかつた。已むを得ず一切の公開を禁止することを條件として初めて承諾したのである。書類は陸軍省から士官一名が毎日大審院へ携行し、夕方また持つて歸るのである。

刑事部の審査が進行するにつれ、再審は避け難いと云ふ風説が早くも擴がつた。再審反對運動が急に猛烈になつて來た。運動を指導するものはブーランジェ將軍の建てた愛國者同盟、猶太人排斥聯盟、大佛蘭西祖國擁護會であつた。最後のものは翰林院の學士フランソア・コペエ、ジュール・ルメエトルなどが千八百九十九年の正月に設立したものである。大審院の内部にもこれに呼應する者が出た。殊に民事部長のケスネエ・ボールペエルがその急先鋒である。この男は小説家としても知られてゐる。再審問題の審査に當つてゐるバール判事がピカール大佐と何か共謀してゐると云ひ立てゝ問題を起させたのもこの男なら、院長にあてゝバール判事ロウ判事を彈該して出たのもこの男であつた。審査の結果、これが全然虚構だと判明し、ボールペエルは一月八日に退職するよりほかはなくなつた。レコウ・ドウ・パリ新聞が、すぐにこの男を拾ひ上げて大審院刑事部の醜状摘發を連載し初めた。ロオ、ボールペエル一人が硬骨漢の名を謳はれ、世間の同情を集めた。バール、マノオの三人は醜漢と目された。

軍人がこの十字軍に參加しないわけはないのである。一月十五日に締切つたアンリ大佐遺族扶助基金には、全國の聯隊から競爭で義金をまとめて送つて來た。激烈なる文句を並べた投書が降るやうにあつた。猶太人を虐殺しろと云ふ者さへ出た。謀反人は猶太人で、猶太人は謀反人だときめられたやうであつた。

かうなつて來ると政府はどう見ても、刑事部が再審を可決しても、軍部が反對して、國を内亂状態に置く危險を認めずにはゐられなくなつて、進退に窮した。硬骨漢ボールペエルが毎朝唱へてゐる審査の[illegible]

限を刑事部から、大審院全體の責任に移せと云ふ說が傾聽すべく感じられて來たのもそのせいである。刑事部だけでは如何にも、輿論の反對を抑へる力がないからである。しかし、これを大審院全體の管轄として、再審に反對する結果になれば――實際に、院内の空氣も輿論を反映して大多數が再審反對だつたのでこの可能は充分あつた――ドレフエス事件はまつたく浮び上れない深い淵に沈められて終ふわけであつた。

內閣は、最早これ以外に途を考へられなくなつてゐた。一月三十日に、「刑事部が再審の請求を審査する場合、これが裁判は大審院各部聯合に依り行ふ」旨の訴訟法改正案がたうとう議會に提出された。

この議案の討議が行はれてゐる際に突然に敵味方を愕然とさせるやうな事件が起つてゐた。それは大統領フエリックス・フオールの死であつた。

四

このフエリックス・フオールは公然と反ドレフユス黨に味方してゐたとは云へないまでも、事件の眞相を知らうとする熱意を缺いてゐたせいか、あるひはこれを知りながら輿論の動く方向を見て反對を押切つて正義を守る勇氣がなかつたものか、どちらにしても紛爭の外に立たうとしてゐた點で、國粹黨愛國同盟復古主義者などの反動の陣營から見て頼もしい大統領であつた。エミール・ゾラが叩きつけた痛烈な公開狀はこのひとに宛てゝあつたのである。フオールはこれにも聞いて聞こえぬ顏をして、ゾラが罪に問はれるのを傍觀してゐたのである。

――

フオールの死んだのは二月十六日であつた。年齡はまだ五十六の男ざかりで、最後の日も午後五時頃まで平素のやうに官邸で事務を執つてをり、一緒にゐた秘書官に少し氣分が惡いからと云つて、ソフアの上に横になつたのが、夜の十時になつて死んだのである。病氣は卒中であつた。そのことが知れわたつても、誰れも最初はほんとうのこととは考へられなかつたくらゐあつけなく、また突然の死だつたので、まことしやかに様々の風說が立てられた。その一つは、大統領は最初の發作の少し前に、某國の高官の秘密な訪問を受け、その用件が佛蘭西軍部に關する重大なものであり、客は本國の元首の命令でその秘密を提げて大統領を威嚇するために訪れて來たものだつたので、それがショックとなつて死んだと云ふのだつた。その話が眞實だとすれば、誰れが考へても、その某國が復讐戰爭の對象と見てゐる獨逸だし、事件が所謂ドレフユス事件だと云ふことがすぐにわかるのである。國民の不安は絶頂に達した。殊に、反動派の陣營では、自分らの爲になつ

てゐた大統領の突然の死が、何を意味するか知つて、心を暗くしたものであつた。

しかし誰れを大統領の後任に立てるかゞ焦眉の急を要する重大の問題として迫つてゐた。國民は、この國家的の難局を切拔ける手腕のあるひとを、殊に反動派の領袖はドレフユス事件を愛國的に解決するひとを、つまり再審の問題に絶對的に反對して、非國民と猶太人の虐殺を許し、怨敵獨逸に復讐戰爭を起し、僧侶と軍人の獨裁する佛蘭西を王政の佛蘭西を作るやうな人物であることを熱心に希望してゐたのである。

そのためには、フエリクス・フオールの死はあまりに唐突に過ぎた。選擧の結果、衆望を得て大統領に當選したのは（一月七日）反動派の領袖メリヌでなく、エミール・ルーベであつた。上院議長として道義に篤く誠實な紳士として知られてゐるルーベであつた。選擧は水物であらうが、これは反動派には思ひがけない打擊であつた。ルーベがフエリクス・フオールと著しく違ふことは、自分の信じたことを萬難を排して追及して行く勇氣のあることである。殊に、從來の態度から推して反動主義の過激を嫌つてゐることである。

俄然、反動の陣營では牙を剝いて怒り出した。非難と反對の聲が喧しく揚つた。聲だけではない行動にさへ、それが現れた。ルーベが巴里に入る第一日に、この一派の率ゐる群衆は公然と侮辱の聲を揚げた。二月二十三日にフエリクス・フオールの埋葬が行はれた時、愛國黨は參列した一旅團の兵を煽動して葬儀場から、ルーベのゐる大統領官邸へ進軍する陰謀を企てた。首謀者は黨の領袖、ポオル・デルレエドとマルセル・アベールであつた。

旅團の若い士官や兵卒は、この愛國の志士の華々しい演說に動かされずにはゐなかつた。デルレエドもアベールも、旅團長のロオジエ將軍に充分期待した。行動は起された。

しかし、ロオジエ將軍が強い感動を受けてゐながら、幸ひに規律の觀念の強い人だつたので、すぐにも暴動を起しさうに熱狂してゐる全隊を途中から老巧に道を迂回させて、宿舍に收め、危く事なきを得た。

首謀者のデルレエドとアベールは逮捕されて審問に附せられた。このことは決して、二人の國士的名聲を傷付けるものでなく、反つてこれに金箔を塗り上げた感じがあつた。法廷で二人は、かはる〴〵愛國的演說をし、大見得を切つて世間を熱狂させた。二人とも恐ろしく雄辯であつた。――陪審の者まで遂に二人の放免を決議して、新大統領の前途を暗く想像させる結果となつた。

しかし、ルーベは兩院に宛てた最初の通牒の中に、自分の覺悟を明

らかにした。『憲法が大統領に認めてゐる諸權限は、自分の掌中にある限り、斷じて薄弱なものとしないつもりである。』

五

この間に改正された訴訟法の規定に依つて、大審院刑事部の審査の結果が大審院に移管され諮問委員會が組織されてゐた。リユシイ・ドレフユスは、サリアンの集めた評議員の中三人を拒否しようとした。この權能は、改正案が上院で討議された際、報告者のゲランが明白に認めたものでありながら、三人の評議員の主張に依つて却下された。諮問委員會は、刑事部の審査の結果を吟味に掛つて、新たに證人を喚問し、外交上軍事上の機密書類をも提出させた。フイガロ新聞が、どうやつて手に入れたものか、刑事部の審査の議事錄を掲載して世間を驚ろかしたのは、まだ、諮問委員會がこの議事錄を中心にして討議を進行させてゐる最中のことであつた。

フイガロ新聞は告發されて五百法の罰金を課せられた。然しながら、かうして議事錄が公示されたのは、その動機として想像せられたものとは逆に、反つて事件の眞相が世に傳へられることになつて、ドレフユスの味方の爲には有利な結果となつてゐた。これまで雲を隔てて見てゐるやうに曖昧で疑惑ばかり感じられてゐたものが、初めて明瞭な姿をあらはしたのである。各人が宣傳を排して自分の意見を持つことも可能となつたのである。ゾラの望んでゐたとほり眞理が歩み出したのである。軍部が躍起になつてこれを遮らうとしてもこれだけは遮り得ないのであつた。

至極單純なことゝゾラが云つたとほりであつた。總てが、附け足しだつたのである。軍部もまた形勢危しと見て全線の退却を試みた。最後の一線として、事件のそも〳〵の原因となつた「第一の密書」を證據として死守することであつた。これだけはまことに創作でなく眞實であつた。然しながら、この眞實も、ドレフユスの書いたものかどうかは、別の問題なのであつた。たゞ軍部は、ドレフユスの書いたものだと斷言する――これまでよりも強硬に、必死に、さう主張するのであつた。

もう一度筆蹟鑑定人が呼び出された。今度は刑事部の鑑定であつた。結果は、軍部の主張とは全然反對であつた。三人の專門家がこれをエステラージーの筆蹟と斷定した。軍部の代表者はこれもたゞの推測である、證明にはならないと云つた。刑事部では「密書」と時期の同じエステラージーの手紙を二通提出した。紙質も同じ、用紙も同じものなのだ――

そのほかの證據は? 數が澤山あるだけで、もう紙屑も同然であつた。ドレフユスの罪の證據とならずに、逆に軍部の執拗な計畫を暴露する役に立つだけだ。持出したくても、今は躊躇されるだけであつた。

五月五日になつて、陸軍大臣フレエシネ將軍が急に辭職した。これは軍部が死守して來た最後の一線の破綻を意味した。同じ月の二十九日になつて諮問委員會が報告書を提出した。報告書は千八百九十四年の軍法會議の判決を破毀して、ドレフユスを新たに軍法會議に附すべきものとした。

遂に佛蘭西の大審院はこれを嚴粛に宣告した。

同時に再審にずつと反對して來たデユプユイ内閣が總辭職した。

最後の切札

一

惡い夢を見てゐるやうな五箇年の永い月日の後であつた。鎖は斷たれた。美しい佛蘭西の土を、ドレフユスは踏むことであつた。岩ばかりで青いもの丶ない焦熱の孤島。海を見ることさへも許されなかつた狹い重苦しい監房の生活。一年三百六十五日絶えず監視の目に見まもられてゐる苦しさ。——疲れて寢てゐる間も油斷も出來ないやうに強制されてゐた五年の月日、人間と口をきくことのなかつた五年であつた。受けた侮辱の思ひ出と孤獨の苦しみとに、身をさいなまれてゐた五箇年であつた。

それらと、まつたく別れを告げ、なつかしいリユシイのゐる、子供たちのゐる、友人たちのゐる佛蘭西へ歸ることであつた。いや、それよりも眞實は遂にあらはれずにはゐなかつたと云ふことであつた。「俺れは無罪だ!」幾たびか血を吐きさうにかう訴へた聲がたうとう聞きとどけられたのだ。ドレフユス大尉、君は無罪であつた。不當の取扱ひを受けたと。

千八百九十六年六月五日、蒸暑い日ざかりの十二時半のことであつた。監房に入つて來た監守長は、本國から來た通達をドレフユスに手交した。——佛蘭西大審院は千八百九十四年十二月二十二日の軍法會議のドレフユス大尉に對する判決を破毀し無效とす。大尉はランヌに開廷せらる丶軍法會議に出廷すべきである。

——巡洋艦スファックス號は、同大尉を本國へ送還する命令を受け本日フオール・ドウ・フランスを出發し惡魔島に向へり。

ドレフユスは涙を流した。笑つた。泣きながら笑つた。これでよいのだ。自分だけの苦痛でなく、我が子我が妻にも課せられて來た迫害

が、やつとこれで終つたのだ。開かれようとしてゐるランヌの軍法會議も、手續上の形式に過ぎないのではないか？　まつたく、初めて、正義が立てられたと云つてよいのである。

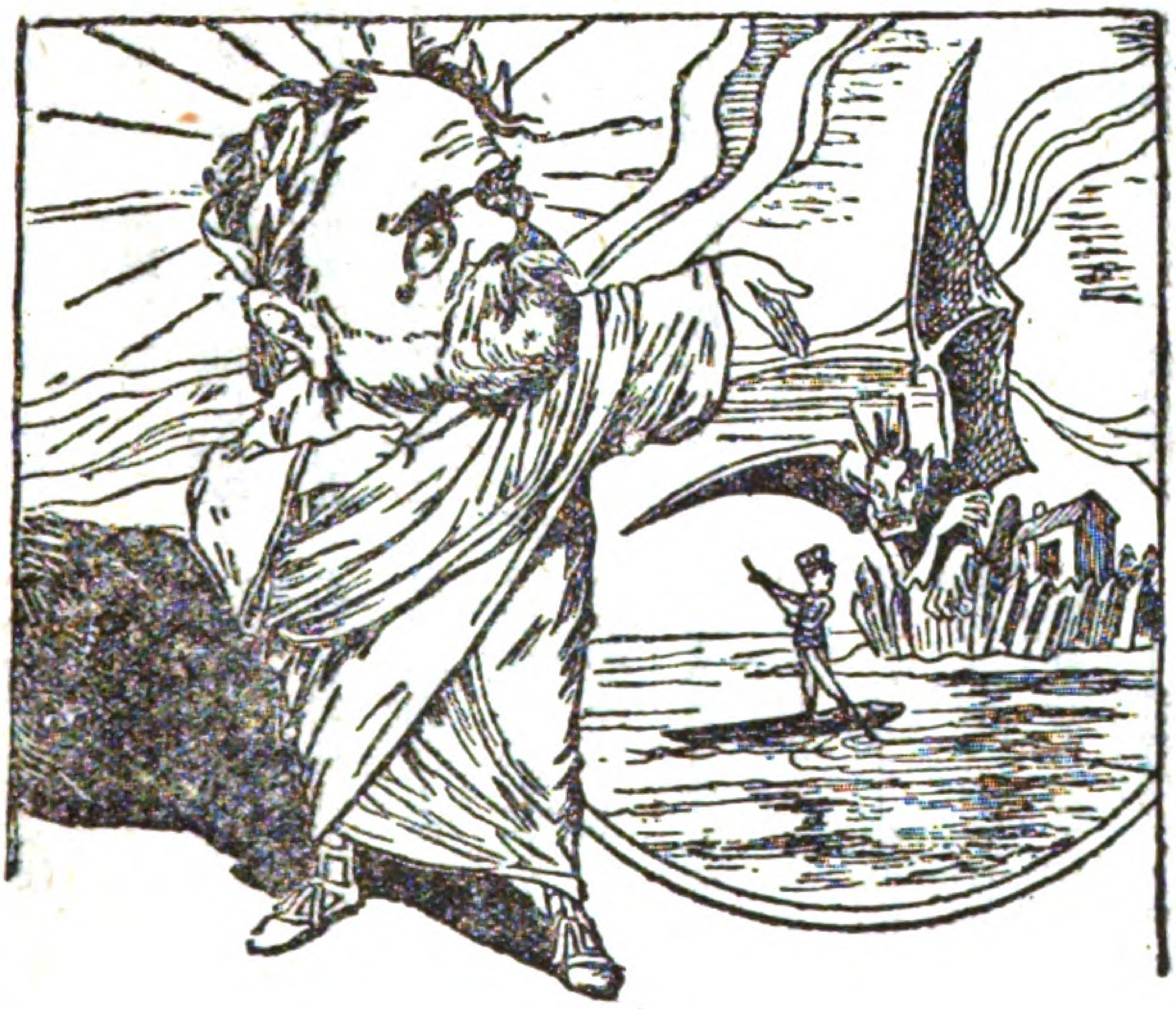
そのことを彼の回想の中に、かう書いてある。——

『私は事件の經過を何も知らなかつたのだ。私の知つてゐたのは、事件の起つた千八百九十四年當時の知識だけなのであつた。例の「密書」と、軍法會議の判決と、身ぶるひを感じるやうな恥の公開執行と、私を殺せと叫んでゐる無秩序な群集の騷擾と。——私はボアデッフル將軍の信義を確信してゐたし、フエリクス・フォール大統領をも信頼してゐた。皆が正義と眞實とを念頭に置き骨を折つてゐてくれるものに違ひないと。

その後のことは、雲がかぶさつてゐるやうで、考へれば考へるだけ、私には何のことか解らずにゐた。この數ケ月前から折々、漏れるやうに耳に入つて來た話でも、私にはまつたく意味の取れないことであつた。私はエステラージーと云ふ名を聞かされた。アンリ大佐の文書僞造のこと、自殺したと云ふことも。——數人の偉大なる精神の所有者が、眞理の光を求めて、崇高な戰鬪に從つてゐたと云ふことも、私は全然知らなかつたのである。(中略)

同じ六月五日の午後五時に、私は妻に宛てゝ次の電報を打つて貰つた。

『心も、魂も、お前と我が子らと、ともに在る。金曜日に立つ。お前をこの腕に抱く神々しい瞬間のことを思ひて、悦びに耐えず。幾千の接吻を！』



ドレフユス歸る

その夜になつて、護送に當る憲兵の一隊がケイヤンヌから到着した。これまでの監守たちはドレフユスから離れた。

『永い恐ろしい惡夢からはなれて、なほ夢の中を歩いてゐるやうな心持であつた。』

ドレフユスは、木曜日の夕方、光の露に濁つた水平線に顏が一筋あらはれたのを見詰めてゐた。ひろ〳〵として何もない海の上に軍艦が見えて來た。これは彼を迎ひに來た巡洋艦スファックスであつた。

ドレフュスは、凡そ人間と云ふ人間ならば、誰れの手でも掛けたく感じた。

二

「六月九日金曜日の朝七時にランチが迎ひに來てくれた。かくも苦痛を甞めさせられた呪ひの島をたうとう私は離れた。スファックス號は吃水が深かつたので、ずつと沖合に碇泊してゐたのである。その場所へランチは着いた。しかし、乘船を許されるまで二時間待つてゐなければならなかつた。海は荒れてゐた。外洋太西洋の巨浪にランチは胡桃の殼を浮べたも同然に翻弄された。乘員は皆醉つた。私もまたそれを免れることが出來なかつた。

十時近くなつて、乘船の命令が下つた。私はスファックス號の人となつた。副艦長が出迎えて、特に私を入れるやうに仕度してあつた下士官室へ案内してくれた。

その船室の窓は、新しく格子を附けたばかりのものだつた。私はランチで來てなかなか乘船を許されなかつた理由がこれだつたと氣がついた。出入口の扉には硝子がはめてあつた。銃をかついだ番兵が立つのである。日が暮れてから船艦の動搖する具合からスファックス號が碇をあげ航海に掛つたのがわかつた。

スファックス號での私の待遇は、[illegible]

[illegible]一時間[illegible]に限られた[illegible]は、この船室の内に閉ぢこめられてゐるのである。私はこの航海中にも、そもそも最初から採つてゐた態度を改めなかつた。自尊心を失はずに自分を誰れとも同等だと見たのである。用事のほかは、誰れとも話をしなかつた。

六月十八日日曜日にカプ・ヴェールへ船は着いた。こゝで石炭を積み込み、二十日火曜日にこゝを出た。船の速力を遲くして、時速八乃至九ノットを出てゐなかつた。

六月三十日になつてから、波の上に佛蘭西の海岸が見えて來た。五年間の迫害の後に初めて晴天白日の身になることゝなつて、私は、歸つて來た。怖ろしい夢はこれで終つたのだ。人々は自分たちの過失をさとつてくれたのだ。家族の者を見ることも出來るのだつた。家の者の後には、なつかしい友人たちが立つてゐるだらう、腕をひろげ、目は潤ぐんで──私はこれを信じてゐた。期待してゐた。

この期待は、その日の内に裏切られた。

その日の午前にスファックス號は碇をおろした。私を上陸させるように小蒸氣が來る筈だと云ふことであつた。こゝはどこだと訊ねても、何も答へてくれないのだつた。その内に小蒸氣が來た。しかしこ

れは、スファックス號にもつと外洋へ出て遊弋してゐるように命令を齎らして來ただけのものであつた。私の上陸も延期されたのだ。かう云ふ風な奇怪な注意や曖昧を極めた船の行動が、私には耐え難い不安を與へた。何か起つて來さうな豫感が働いた。

午後になつてからスファックス號は再たび行動を起して海岸に沿つて緩慢に進行し初めたが、夜の七時になつて、再び停止した。その晩は暗かつたし、海上は靄につゝまれ、雨が吹きつけられた。今夜は出迎えの蒸氣船が來ると云ふ話であつた。

九時になつてボートが來たと知らせがあつた。蒸氣船までこれに乘つて行くのだつた。蒸氣船は來てゐるが、この天候なので、傍まで來られないと云ふのである。

空は暴風雨になつてゐた。浪も高く、梯子の下に來てゐるボートは恐ろしい勢で宙へ投げ上げられてゐた。そこに横附けになつてゐるのさへ大變だつたのだ。そこで私も飛び込むよりほかはなかつた。その拍子に脚をひどく舷側へ當てゝ、かなりの傷を受けた。ボートは豪雨の中を漕いで行つた。

いよ〱陸だと強く感じてゐたばかりでなく、軀の芯まで濡れた寒さに、ひどい熱が出るし齒はかち〱鳴つた。泡立つてゐる海に揉まれて漸くに蒸氣船へ着いた。私は兩脚の怪我が痛んで、梯子を昇るのもやつとであつた。

ずつと私は口をきかずにゐた。

蒸氣船は走り出したが、間もなく停つた。こゝはどこか、私はまつたく知らなかつたのだ。誰れも一言も說明してくれる者がなかつたのだ。一時間か二時間待つて、ボートへ乘れと云はれた。

出て見ると、夜は更に眞暗たつたし、豪雨はいよ〱勢ひを逞しくしてゐた。たゞ海が靜かだつたのは、どこか港へ入つたからだと考へられた。

眞夜中の二時すこし過ぎに、私は陸へ上つた。こゝがブルターニュ州のブーリガン港だつたらうとは後になつてわかつたので、その時はまつたくどこへ來たのか想像も出來なかつた。

上陸すると直ぐに四輪馬車へ乘せられた。憲兵三人とである。馬車は私を乘せて停車場まで行つた。兩側を兵士が圍んで行くのだつた。停車場へ着くと、私は相變らずの連れと汽車に乘せられた。その間もこの人々は私と一語話すのではなかつた。汽車は二時間か三時間走つて、ほかの或る停車場へ私を降ろした。そこにもまた四輪馬車が待つてゐて、どこかわからない町を疾走して通り抜けることになつた。馬車が停つて降ろされた。

こゝはランヌの衞戍監獄の中庭であつた。時間は朝の六時であつ

た。』

ドレフユスが妻のリユシイに面會を許されたのは七月一日であつた。場所は監房の隣りの部屋で、無論士官が立會の上のことであつた。

夫婦は、五年目にお互ひの顔を見るのであつた。どちらの顔も、その間の苦痛の刻印をいたましく受けて、十年も二十年も老けて見えた。夫は、髪がまつたく白くなつてゐて、腦天と顳顬のところが禿げてゐたし、物に吃驚した人を見るやうに不自然に目が大きくなつてゐた。妻も人が違ふかと思はれるくらゐ違つてゐた。

しかし、こんなにも愛し合つてゐる夫婦もまた珍らしいのだつた。平凡でゐて、まつたくの天上の夫と妻とであつた。

その後この夫婦の面會は、一日に一時間を限つて許されることになつた。同時に、リユシイやマチウの選んだラボリ辯護士とドウマンヂユ辯護士が、身神ともに疲れてゐるドレフユスをいたはりながら、事件の經過を呑込ませ、やがて開かれる軍法會議に備へることゝ成つた。

佛蘭西全國だけではなく全歐羅巴の視聽を集めて、軍法會議は八月七日からランヌの中學校の講堂で開廷されることになつた。

軍部、軍國主義、復古主義、猶太人排斥同盟、愛國同盟を中心とする反動派の陣營では、まつたく國の興廢をこの一擧に賭けてゐたのである。そのために大審院の判事等が國賊呼ばりされてゐたのであるが、法律的には最早身動きが出來なくなつてゐた彼等である。お手のものゝ暴力が、段々幅を利かして來てゐた。この傾向は、ルーベ大統領が六月四日にオーツイユの競馬場で暴漢に杖で頭を殴られたことにも看取される。倖ひに帽子が潰れただけであつたが、その前後に、愛國黨と巡査と小ぜり合が起り、逮捕された者が三十人もあつたくらゐであつた。新内閣は、共和黨のヴアルデツク・ルツソオが組織したもので、一般に「ドレフユス内閣」と惡口せられてゐたくらゐで、ルーベの意志と通ずるところのある進步的の傾向が顯著であつた。反動派が一層躍起になつてゐたのは、そのせいである。反動派の不安に感じてゐたところは、ドレフユスの味方には期待となつた。政府は、左右の注目を受けながら、軍法會議の進行に對しては大統領と同樣に白紙を以て臨むかに見えてゐた。

軍法會議の判士は、判士長のジユオー大佐が工兵士官だつたのを除き、全部砲兵隊の將校が任命された。檢察官の首席は退役憲兵のカリエールと云ふひとである。このひとは六十四才になつてから法律の勉强を初めたことで、有名であつた。

起訴狀は、法律に順つて、千八百九十四年のまゝであつたが、會議が求められた答申はドレフュスが「明細書」に掲げてある書類を某國に渡したかどうかの事實についてゞあつた。若しこれに從へば、證人の喚問についても右の範圍に限定され、その他の問題については大審院の審理の結果を引用すべきものと見られるのである。現に内閣の意向はそれだつた。

然しながら、會議では、これが最初から、無視されてゐた。ジュオー判士長は會議が他の裁判權の決定を斟酌する理由はないと聲明した。事件はまつたく發端に溯つて、新しく研究せられるので、これまでの證人も今一度出廷することになつた。

總て、やりなほすのはよいとして、軍部から喚問されて來た證人の態度は昔のまゝであつた。殊に將軍と云はれる人たちは、戰場に出るやうな烈しい氣色で出て來るのであつた。指導者は、最早退役してゐるメルシエ將軍であつた。將軍は事件の發生當時の陸軍大臣で、無效とされた軍法會議の仕事には責任があり、今度の再審の成行について個人的にも重大な關心を持つてゐたとしても不思議はない。熱心なこの名將に率ゐられて、幾人もの將軍たちが堂々と居並んで、敵と同時に判士席を威嚇し、口を噤んでゐても絶えず法廷を壓倒してゐるのだつた。

これに對して、被告のドレフュスはあまりと云へば烈しい相違を呈してゐた。衰へた老人のやうにみすぼらしく、力なく見えるばかりでなく、絶えず昂奮して、卒倒もしかねまじき姿であつた。たゞ、彼は、自分の信頼してゐる上官たちが何をしたか初めて知り、自分の現在の立場をも現實に明瞭にさとつたのだ。金モールにも勳章の光にも、おびえてゐてはならぬのだ。

それにしてもドレフュスの聲は、低くて力がなかつた。舌もよく廻らないやうだつた。しかし、八月十三日の土曜日にメルシエ將軍が證言を與へて後に、「今もなほ自分はドレフュスの有罪について一點の疑ひも持つてゐない、些かでもさう感じたら、自分こそ第一に彼のところへ行き、心ならず誤つてゐたと詫びるつもりである」と陳述した時に、ドレフュスは突然に氣が狂つたやうに席に躍上つて

『今それを云へ！』

と、思ひがけず癇高く、鋭く叫んだ。

守衞が躍掛つて、兩腕を抑えたのでそれ以上動けなかつたが、なほ獸のやうに身をかゞめ白髪頭を振り片腕を振つてメルシエを睨み、泣くとも怒るともつかぬ聲で叫び續けてゐるのだつた。

メルシエは、將軍にふさはしい冷たい威嚴を失はずに立つてゐて、

『それを自分が第一にしたらうと云ふのだ。』

と、静かな聲で繰返した。

ドレフュスは身を揉み切齒して云つた。

「さうなさい！　あなたの義務だ！」

メルシエはひやゝかに笑つて席に戻つた。

四

これが土曜日のことであつた。次の日、八月十四日には、ラボリ辯護士がメルシエ將軍に質問することになつた。

誰れの目にも、この日が審問の勝敗の分岐點だと感じられてゐた。ラボリの雄辯と、機を見るに敏捷な明快な頭腦の働きとは、被告側の何よりも力としてゐたものだつたし、事實これまでの經驗から云つても、彗星のやうに勇將を並べた原告側の堅陣に向つてジュピターの電光を放つやうな鋭い論法で斬込んで、敵を狼狽させ顔色なからしめるだらうとは、一般の觀測で、ドレフュスの味方が心頼みにしてゐたところだつた。ラボリの覺悟もそれである。確信を以てメルシエを叩きつけるつもりであつた。

その日は來た。

ラボリ辯護士は、早朝に家を出た。當時ランヌの郊外に借家してゐたのである。ピカール大佐と他に一人の紳士が迎ひに來てくれたので夫人も連れて、門を出たが、夫人が法廷の入場券を置き忘れたのを思ひ出して取りに引返したので、男たち三人は歩調を緩めながら垣根に沿つて歩いてゐた。三人は誰れか後から歩いて來たのを知つてゐた。それが卑怯な刺客だつたのだ。突然に聞こえた拳銃の音の中にラボリは往來へ倒れた。

ピカール大佐等は兇漢の走り去るのと、勞働者風の男が後を追つて行くのを見て、いそいで、ラボリの手當てにかゝつた。

傷は背中だつたし、重態だつた。氣丈なラボリは、上着の懐へ手を入れて、書類がそこに入れてあることを知らせた。夫人が驅けて來て、地面へ座りラボリの頭を膝へのせた。

「大丈夫だらう」

と、ラボリは云つた。しかし、すこしづゝ失神して行くやうだつた。更になほ敵の襲撃が考へられたので男たちがラボリを守り、夫人が醫者を呼びに行つた。

かうして、法廷へ出る筈だつたラボリが、逆に、醫師の不安らしい注意の下に家へ擔ひ込まれることになつた。

事件の知らせは、法廷を驚愕させた。當然にその日の審理は延期せられるものと信じられた。

しかし、判士長ジュオー大佐は、この事件に關り合なく、會議を

行させることにした。ラボリがする筈であつた辯論は一切ドウマンジュ辯護士が代つてすることになつた。ドウマンジュは戰友の負傷を憂ひながら熱心にこの大任に當つて、メルシエを追及し、メルシエが擧げた證據を完膚なく論破した。それにしてもラボリが出られなくなつたことは、被告側には精神的に大きい打擊であつた。更に、ラボリを襲つた兇漢が逮捕を免れて、何人とも全く見當がつかなくなつたことなども、正義を守らうとする小數の人々に、前途を不安に感じさせることであつた。

五

メルシエ將軍が法廷へ出て隱然と會議を支配してゐることに變化はなかつた。將軍は印刷した供述を判士一同に配布までした。供述と云ふより要求と云ふのにふさはしく感じられるやうなものだし、擧げてある事實などは、「信ずべき」墺地利の外交官シユナイダーがドレフユスは有罪と「信じられる」と物語つたと云ふやうな、多愛のないものだつたし、事實を擧げるのが目的ではなかつたやうである。

セルビア人でチエルニユツキイと云ふ怪人物が、ジユオー大佐の紹介で舞台へ出て來た。この男は、中央歐羅巴の某國の參謀本部の者からドレフユスがその國が佛蘭西へ入れてゐる四人のスパイの中の一人だと聞いたと證言するのであつた。

なほ病床にあるラボリ辯護士は、敵が怪しげな外國人を證人に出したのを見て、問題の火元の獨逸大使官附武官シユワルツコツペンの證言を聞くように請求した。ジユオー大佐はこれを拒絕した。

シユワルツコツペン大佐は伯林に歸つてゐたが、自分の證言が役立つならば、いつでもその方法を採ると聲明し、獨逸政府もまた、少し以前の官報で、ドレフユスと獨逸の外交官とが絕對に交通のなかつたことを明白に聲明してゐるのだつた。ラボリは、たゞ怪しげな外人を連れ出して來た軍部の小刀細工を彌次つて、世間の注意を向けさせただけなのである。

このラボリは遭難してから十二日目に法廷へあらはれた。その日の被告側は蘇つたやうに活氣づいた。ラボリは病床をはなれたばかりで顏色こそ惡かつたが、見上るやうに大きい體格を搖り上げ辯護士席に立上つて、靜かに論じ初めた。聲は段々大きくなつて、いつもの力のこもつた朗々たるものになつた。演說は見事なものであつた。全然法廷が征服せられた感じだつた。原告側に居並んだ將軍たちは硬くなつて沈默してゐるだけである。ラボリが出ると、この牙營は、守備兵の逃げたあとの砲台のやうに空虛で無力に、體まで小さくなつたやうに見えるのだつた。ラボリはドレフユスの罪に全く證據のないこと

を説いて、所謂證據を土器を槌で碎くやうに片つ端から粉碎して見せた。誰れが聞いてもこれが眞實と頷かずにはゐられない論理と、熱のある辯論であつた。廊下にゐた衞兵までが戸口の外に重なり合つて息を殺して聞いてゐるのだつた。

ドレフユスのやつれた顏に初めて微笑の影が動いた。目はうるんでゐる。椅子に凝として居られないやうな感情を抑へるのに、兩膝の上に腕を突張つてゐるのだつた。

これが八月二十八日のことである。九月八日は判決の日だつた。ドウマンジユ辯護士の演説があり續いてドレフユスが立つて簡單に次の言葉を述べた。

『祖國と軍隊の前に立つて、私は自分が無罪であると申します。この五ケ年に受けた怖ろしい苦患を我慢してまゐつたのも、自分の名と私の子供たちの名前にもかゝる不名譽を雪がうと思ふ一念からでありました。この目的は今日この席で皆さまの御盡力で必ず達し得られるものと心得てをります。』

一時間後にドレフユスは判決を聞いた。

『二票に對する五票、アルフレッド・ドレフユスは有罪なり。』

ドレフユスは血の氣を失つて化石したやうに立つてゐるだけだつた。まつたく、生きてゐる人間の姿とは思はれないのだつた。

裁判長に向いて讀み上げた。

『但し情狀の酌量すべきを認む。』

宣告せられた刑は正に十年間の禁錮であつた。斷じて聞き損じではなかつたのである。既に再審と定つた時に將軍の一人が『大審院が最後の宣告をするわけのものではないのだ。』と公言した。まことに、そのとほりだつた最後の最終の言葉が、則ちこれだつたわけである。

（次號完結）

（巴里の武林夫人からゾラの家族の署名の寄せ書を、同じ巴里にゐる同窓の松木君からは今年四月獨逸で初めて出版されたシユワルツコツペン大佐（今月號にもあらはれてゐる）のドレフユス事件に關する手記の飜譯を、それから内海幽水氏からは僕の探しあぐんでゐたドレフユスの肖像を送つて頂いた。併せてこゝでお禮申上げます。たほ内海氏が送つて下さつた新聞の記事では、ドレフユスはほんとうの老人になつて、今も巴里に、マチウと一緒に達者でゐるらしい。佛蘭西にゐられる讀者で調べてくださる方があると難有いと思ふのです。）

高野山

齋藤茂吉

ひとときに雨すぎしかば赭くなりて高野の山に水おちたぎつ

紀の川の流かくろふところほひに槇立つ山に雲ぞうごける

高野山あかつきがたの鉾杉に狭霧は立ちぬ秋といはぬに

三成が悲母の菩提のねがひもて此處にのぼり來し時をしぞおもふ

秋づきしおまつ光か目のもとの苔を照らしてつひにかげりぬ

鳥がねはこよひ聞こえずあかあかと高野の山に月照りにけり

疾き雨とほりゆきける鉾杉の木の下闇にしづくは落ちつ

空海の四十二歳の像こそ見欲しかりけれ黒きを見れば

紀伊のくに高野の山をとりよろふ群山のうへにゐる雲もなし

ここに啼く鳥かぞふれば幾つ居む山の中こそあはれなりけれ

紀伊のくに高野の山の月あかししづむ光を見つつ寐にける

われひとり歩み來りておもほえずこの山谷に鳥さはに啼く

新刊批評

駒井卓博士の『生物學叢話』を讀む

石川千代松

二三日前信州輕井澤に居る孫の處へ行く往復汽車中で此書を讀んだが近頃稀に見る良書で、生物學者の他の人に或は斯んなに面白くて、又遺傳其他に就き最新の事實や學說を通俗的に書かれた書物がある事を知らないものもあるかと思ひ、一寸紹介して置き度いのである。

此書は駒井君も云はれる樣に色々の新聞や雜誌に出されたものを集められたものであるが、全篇が一六の論文から成り、其第一は昨年陛下が京大の臨海實驗所へ御臨幸遊ばされた時の模樣を委しく書かれ尊き御身で在らせられ乍ら如何に御熱心に生物の御研究を遊ばされたかを謹んで記されたのである。誠に恐多い事である。第二は同臨海實驗所の記載で、第三と四とは日本特產の珍しい動物を誰れが讀んでも解り易く書かれたのである。夫れから第五から第十二迄は主として遺傳に關する事實と學說で、人間の遺傳にはメンデル法則から說き始め人體に現はるる色々の優劣形質疾病の遺傳、血淸の事や、體長體重、左利から精神的の遺傳等を說かれ、天才、低能其他の遺傳に關する知識を與へられ結核癩病は遺傳でなくて病原菌の感染である事を說き、それ等の病氣が遺傳する樣に思はれるのは、病氣に罹り易い素質に依るもので此素質が遺傳するので病氣其物が遺傳するのではない事を說明して居られる。夫れから音樂の素質の遺傳二た子の遺傳を說き、近親結婚の利害に於ては近親の者には優劣兩方の素質に同じ樣なものがあり易いから、良いものが重なれば良い者が出來惡いものが重なれば惡いものが出來る事を澤山の事實に就いて證明せられて居る。次ぎの雜婚と雜種もそれに似たもので、種類が餘り遠くなければ良い結果を來たす事もあるが、餘り遠くなると夫れが不可能となる理由を擧げられ、動物の雜種と同樣人間でも良い形質が重なれば良いものが出來惡い形質が重なれば惡いものが出來る理由が書かれて居る。それもそれ丈けでは別に大した事はないが、著者は幾等もの事實を擧げられて、誰れにも解り易い樣に說明して居られるのは我々が敬服する處である。次ぎの第一〇は身體に受けた變化の遺傳でそれに關する事實も學說は全體に云ふと今日でもまだ五十年も前の往時ワイスマンが議論して居た時と餘り變りない事を教へて居られる。それから第一一は米國で有名な惡い系統のジューク一族とそれに類似する地の二三のものに就いての委しい記載である。それ等の事實を擧げら

れてから終りに各國で今日盛んに唱へられて居る優生學の研究を說かれ、日本にも其設備が必要である事を力說して居られる。

之れ等が生物學一般に渉る博士の叢話であるが、それに付け加へてダーウヰン、ハックスレー、ベートリン等名高い生物學者の小傳を叙せられ、終りに本邦の學問に最大の功績があり且つ又最善の親日家であつたモース先生に著者がセーラムで會はれた時の話を書かれ駒井博士が先生と博士の奧さんとを一緒に寫された寫眞で日米が如何に睦しいかを示された後『サレムの町の人は永久に翁を記憶するであらふ。日本人も亦翁を永く覺へねばならぬ』と結んで居られる。(東京市芝區愛宕下町・改造社發行・定價貳圓五十錢)

楢六郎氏著

「中小商工農は沒落か？更生か？」

久保寺三郎氏著

「プロレタリアと日本の財政」

大森義太郎

中・小產業の問題は今日の日本經濟において最大の注意を拂はれてゐるもの丶ひとつである。政府は、產業合理化における『企業の統制』を云ふ際に、なによりも中・小產業を目標にしてゐる。近くは、中・小產業への資金融通のためにいろいろな方策に腐心してゐる、——その多くがごまかしであるにせよ、それは政府が中・小產業の問題をいかに重視してゐるかを示すにおいて變りはない。實際に中・小產業の問題は重大である。わが經濟において中・小產業は、量においても、質においても(輸出產業)、非常な意義をもつてゐる。こ丶に帝國主義日本の眞の特殊性のひとつが、橫つてゐる。中・小產業がどうなるかは日本資本主義にとつて決定的ですらある。

しかもその中・小產業について充分な且つ正確な知識をもつことは最も困難である。體系的に、全般的に知るといふやうなことは從來ほとんど不可能であつた。

そこへ楢六郎氏がこの問題に關して堂々五百頁に近い著述を我々に提供されたといふことは、月並な言葉ではあるが、我々の最大の喜びでなければならぬ。私はいま堂々と云つた。これは決して單なる修辭のためではない。楢氏は中・小產業がどういふ方面から壓迫され、どのやうな沒落の過程をたどりつ丶あるかを、まづ中・小產業一般について共通的に明かにし進んで、工・商・農業のそれぞれについて具さに檢討してゐられる(本書、中編)。次に、『中・小業者はいかにして救はれるか』を訊ねる。(後篇)こ丶で中・小產業を救ふと稱するブルジョア救濟策を批評して、その無力を指摘しその欺瞞を曝露する。そして、もし中・小產業者がその絕對に望みのない境地から脫しようとするならば、その『夢

を棄てゝ』『反資本主義戰線への動員』に聽じて金融資本の暴壓と戰ふにある、といふのが著書の結論である。

本書の內容はこれだけではない、——そしてこの點に本書の大きな特色がある。中・小產業のごとき問題は、これを切離してそれだけで觀察したのでは決してわからない。少くも、現狀の敍述はできるとしても、それが將來どうなるかの質問に答へることはできない。どうしても、これを資本主義の本質と結びつけて、日本資本主義の全體の動向を背景として考察しなければならぬ。本書の前編『日本資本主義の現狀』は實にこれに當てられてゐる。この編において檜氏は、資本主義の本質から說き起し、日本資本主義の發展史を略述し、金解禁と產業合理化を說いてその『最近の諸相』を明かにする。

かうして、本書は中・小產業の問題を我々の前に浮彫りにして見せてくれる。のみならず、敍述の技術についていへば、檜氏の筆はまことに平明暢達である。そしていかにも生彩に富んでゐる。我々はこの大册を終始興味をもつて讀むことができる。

私はこの問題に獻げられた最初の著作たる本書に當然な私の不滿（しかも極く僅かな）を述べる必要はない。最近私が最も多くの興味と示唆とを與られた本はこの書であることを云へばいゝと思ふ。（東京芝櫻田鍛冶町三友ビル・大衆公論社・定價一圓六十錢）

同じく私が最近興味をもつて讀んだものに久保寺三郎氏の『プロレタリアと日本の財政』がある。財政の知識といふのは我々にとつて極めて必要である。例へば、前に述べた中・小產業の融資問題について、政府はさきごろ預金部の金をもつて二千萬圓融通することを決定した。また、つい近く簡易保險積立金運用委員會は中・小商工業への低資融通を決定してゐる（六月四日）。これらは中・小產業の問題に對して重要なことであるが、この場合大藏省預金部とはどんなものか、簡易保險はいつたいどのくらゐあるかゞ問題となる。『プロレタリアと日本の財政』はかういふ事柄に對して答へてくれる。例へばいまの問題は本書の一五四以下および一五八頁といふやうに。

これはほんの一端にすぎない。本書は、繁雜をもつて埋められた從つて一般の人々には最もわかりにくい日本の財政組織を明かにする。豫算、租稅、公債、地方財政、植民地財政、このやうに本書の主なる內容を擧げただけでも、この本が一般の人々にとつて興味ある、のみならず必讀の價値あるものであることは明かであらう。しかもこれをこの著者は前の檜氏と同樣にわかり易く、そして二五〇頁ばかりのうちに手際よく、說き盡してゐる。

この書の立場がプロレタリア的であることを氣にする人があらうか。私は敢て云ふ、この立場のみが事實の眞の姿を、何ものにも囚はれずに明かにしうるのだ。私はこの書をも讀者に推薦したく思ふ。（東京市本鄉區弓町一ノ二五、一元社發行・定價一圓三十錢）

瀧本誠一博士の「日本封建經濟史」を讀む

幸田成友

本書は瀧本博士の舊著「日本經濟史」の改訂版である。溯つた一部の日本經濟史として、同書が眞先に出版せられ、經濟史研究の趣味を普遍ならしめたことは、今更いふまでもな。さうして爾後數年間に同書は幾回か版を重ね、その都度多少はともあれ增訂を加へられ、遂に今回の新版となつたので、之を初版と比較すると少からざる相違を見るに至つた。博士の不斷の努力に對し、自分等は先づ敬意を表せねばならぬ。

「日本經濟史」は副題に『德川封建制度の經濟的說明』とあつたが、自分等はこの副題の方が內容に適當したものと考へた。日本經濟史といへば、その取扱ふ時代は日本の全時代に亙らねばならぬのに、博士の「日本經濟史」は大體に於て德川時代を取扱つて居られるのだから、名實相添はぬ感があつた。今度副題を廢し、書名を「日本封建經濟史」と改められたは甚だ適當な改正である。

博士が多年日本經濟史に關する史料を蒐集し、且それを公刊せられたは周知の事實である。原稿の撰擇整理から校正出版までには、同一の史料を反復熟讀するのが必然の經路であるから、博士が讀まれた日本經濟史々料の分量と回數とに於ては、何人も追求し能はざるものがあると思ふ。その結果は本書に現はれ、到る處意の如くに參考書を引用して、敍述及び論斷に資せられて居る。之が本書の强味である。但し數十百部の引用書中、自分が贊成しかねるものが一二無いでは無い。附錄第二にある御遺狀御寶蔵入百箇條、本文一五七に引用されたる秘庫器錄等がそれです。前者については別段議論も無いと考へるが、後者については少しく自分の意見を述べて見ませう。

博士は秘庫器錄卷三を引用し、それによつて三貨鑄造の濫觴に記述して居られるが、その引用文を見ると、秘府略の本文を擧げて、之に案文を加へたものである。さうして秘庫器錄も秘府略も佚書であるといふ所から、博士はその略解題を揭げ、撰者の氏名撰述の年代冊數等を擧げて居られる。然るに日本の古い書籍目錄に秘府略はあるが、秘庫器錄はない。古く撰まれた秘府略があつて、新しく撰ばれた秘庫器錄が出てゐないのは第一の不審です。博士は秘庫器錄は今日より約一千年前參議左大辨從四位上兼行讚岐守源朝臣恒が勅を奉じて撰んだといはれる。今から約千年前なら醍醐天皇の御代に當るが、醍醐天皇の御代の公卿補任を通覽しても、源恒といふ人は出て來ません。類似な人名として延長三年の條に參議從四位上源悅（七十）左大辨正月三十日兼讚岐守とあるのが見當つただけで、これが第二の不審です。秘府略は千卷ある、それを引用するのに卷數を書いてないのが、第三の不審です。疑つて見れば秘庫器錄

の作者は秘府略の本文まで勝手に作つたと思へます。秘府略は卷八百六十四百穀部中と卷八百六十八布帛部三とが現存して、續群書類從の中にあります。前者は黍・稷・粟等に關し、又後者は繡・錦に關し、支那の古典から數行乃至數十行の文章を抄出したもので、日本の書籍は一部も引用してありません。秘庫器錄に引用した秘府略の文章は、應仁天皇十七年云々、反正天皇二年云々といふ記事で、現存の秘府略二卷とは全く體裁が違ふ。これが第四の不審です。若し是等の不審が解けず、秘庫記錄が僞作であるとすれば、それを證據とした博士の議論は自ら破れる譯です。

僞書でなくとも記載の事項中取捨を要すべきは勿論です。地方落穗集卷一に八幡太郎義家が下野の顯谷の長者の家屋敷を沒收した話がある。本書六八頁に之を載せ、「世上の傳說によれば」と斷はつてある位だから、勿論博士も之を事實と認められないのであらう。事實と認められない傳說なら削除をすべきが當然では無からうか。

博士の著述は一種の魅力があつて、人を牽付ける。それは事實の見方にしても、議論の立て方にしても、尋常で無い所が多いからと思ふ。奇警といふ語を使用しては或は當らぬかも知れぬが、戰でいへば博士は正面攻擊に出でずして好んで奇襲を用ひられる傾がある。例へば「武家法度の空文」といふ題目があるが、本文を讀めば、武家法度の中、參勤交代の件・城廓築造禁止の件・徒黨誓約禁止の件等は、幕府極力之を勵行したとある。「忠興の買收金二百兩」とある題目に驚異して本文を讀むと、細川忠興が家康の好意で關白秀次から借用した二百兩を返却することが出來た。それを德とし、德川家に何事か生じたら身命を拋つて盡くさうといつたといふ藩翰譜の話が載つてる。この話の眞僞についても自分は疑をもつてゐるが、それは兎に角經濟史といふ地味な學問に對し、研究に於ても敍述に於ても、自分はなるべく尋常平凡な方法を取つて行きたいと思ふ。

尙書きたいことは色々あるが、與へられた紙面を既に超過したから之で擱筆します。自分は年來博士を知つて居る。月並の批評するより、假令一ヶ條なりと違つた意見を呈した方が、却て博士に悅ばれると思つて、この一文を草しました。（昭和五年八月）（東京市日本橋區通二丁目丸善書店・定價四圓八十錢）

新刊紹介

◇**The Little Oxford Dictionary**　一九三〇年新刊の小辭典、簡約牛津英辭典を基準として作り、新鑄活字を以てせる清麗な字組、米國式英語や新語を網羅せしめ、携帶に便で廉價。（東京日本橋丸善書店發賣・價學生版八十五錢・濃青クロス製一圓）

◇**滿洲讀本**　滿洲の地理風俗から產業貿易その他對外國關係等に亘りルビ付で讀本の名に適はしく親切に滿洲を紹介してある。（東京麴町丸ノ内二ノ二東亞經濟調査局編・定價一圓）

◇**トーマス・ヒル・グリーンの思想體系（上卷）**

河合榮治郎著・論理學者としてのグリーンの名を聞くは日本でも古いが本書は英國社會思想研究の一部として英國理想主義運動の代表的學徒としてのグリーンの全思想體系の研究業績であつて本書を以て英國の社會思想研究は一段落がついたと著者はいつてゐる。（東京麴町丸ノ內昭和ビル日本評論社・定價四圓）

文藝時評

作家の世界

十一谷義三郎

1　文學冬扇

——予が俳諧は夏爐冬扇の如し。衆にさかひて用いるところなし——

古いと嗤はれるかも知れん。僕には、然し、この芭蕉の「柴門辭」の中の言葉が、痛切にひゞく。

（古くして、常に新しきが古典である。新しくして、忽ち古びるものは——あゝ、それは云ふまい。徒に、僕自身を責める鞭打の音を聽くだけだから——）

假りに現代の作家で、自己の文學を目して、夏爐冬扇と云ひ切り得る者があるなら、僕は、彼を尊敬する。

人は彼を、消極獨善と呼ぶかも知れん。時代遲れの個人主義と嗤ふかも知れん。

僕は、その「消極獨善」の裡に、ありがたい精進の志を認める。

芭蕉を祖述した門弟はかく云ふ——

——俳諧は、萬人にかなへんことは易し。一人にかなへんことは難し。人の爲の俳諧ならば、成しよからん——

さうだ、さうだと、僕は思ふ。

否、僕は、芭蕉の謙虚な言葉の裡に、素晴しい氣負ひと自信の包藏されてあることを感じる。

——人來れば無用の辨あり。出ては他の家業を妨ぐ——

さう彼は「閉關之說」の中で云つてゐる。

作家にしても、こゝまで來れば、偉いもんだと思ふ。

自分の藝術が、毒にも藥にもならぬものなら、かうは云へまい。

自分の藝術に、確乎たる信念が無ければ、こんなに、はつきりとした言葉は、出て來ない。

社會と、人生と、自己の藝術と、凡てが、しつかりと掴めてゐなければ、かうは、云ひ切れないのだ。

與間から生れた言葉ではない。パンの爲に云ふ、道聽途說的な文學論ぢやむろんない。精進に瘦せた詩骨が、自から鳴つて、われらの耳朶をうつひゞきだ。

大衆の爲の文學。

階級の爲の文學。

理窟は、よくわかる。

何故か、しかし、芭蕉の、夏爐冬扇說ほど、僕には、ぴんと來ない。

——人の爲の文學ならば、成しょからん——

2　文學缺乏

——ちかごろ、暴露的なモデル小說が盛んなやうですが、あれは、どう云ふんですか——

工業俱樂部の座談會に招かれた時、同席のある重役から、さう訊かれた。

僕は、言下に答へた。

——あれは、文學の墮落だと思ひます。

——はゝん。

——要するに、文學の缺乏です。

話題は、それつきり、僕に、私見を開陳せしめる餘裕を與へずに、他へ移つたが、これだけでは、お座なりめいて不愉快である。

僕は思ふ——

社會惡を、暴露的に扱つた作品で、しかも傑作の名を擅まゝにしてゐる作品は、文學史上、隨分數多くある。

また、見方によつては、作家ほど、社會惡に敏感な人間は、存在しない。

だから、その作家が、その社會惡を剔抉することに對しては、僕は、非難も輕蔑もしようとは思はぬ。

たゞ、今日の所謂暴露小說には、流行のハンデイキヤツプが多分に認められはしないか。流行に媚びる甘さが、潜んでゐはしないか。空想の缺乏と、創造力の無力を、末流新聞の三面記事的興味に依つて糊塗してゐる點は無いであらうか。

作家は、常に、その取材に於て、その扱ひ方に於て、その洞察と、その空想に於て、ファスト・ハンドであらねばならぬ。今日の所謂暴露小說は、果してかゝる點に於て、ファスト・ハンドであるか。

次に——

僕は、それを疑ふ。

ちかごろの「改造」にしても、「中央公論」にしても、ひところのや

うに、その創作欄に依つて讀者を吸引することが、殆ど問題でなくなつたと云ふ。

これは、何を意味するか。

文學の缺乏だ。

作家道の沈衰だ。

人は、或は、云はう、階級文學の叢書や、暴露小說の叢書の、あの素晴しい實行を見たまへと——

だが、それを云へば、今日の所謂大衆文學の方が、もつとよく賣れてゐるのだ。

また、人は云ふであらう、今日は、もう「所謂文學」の時代ではないと——

しかし、僕は、文學を信じる。

今日、時代が文學を蹂躙し、時代が文學を忘却し去らんとするかに見えるのは、文學の所爲ではなくて、文學者の所爲だ。

つまり——文學が顧みられぬのではなくして、文學それ自身が缺乏してゐるのだ——換言すれば、作家が、流行と大衆の迷妄に墮してゐるのだ。

×

暴露小說が流行るからと云つて、單なる流行心理から成される作品に、大した價値のないのは、あたりまへだ。

暴露小說は、作家のうちに、社會惡に對する「ファスト・ハンドの公憤」が烈々たる焰となつて燃えあがり、それが、彼の巧緻なる創造の手を經て、一個の作品となつた時、そこに初めて、文學としての價値を持つ。諷刺小說、傾向小說等々、みな同じ理屈だが、しかも、その上々の佳作に於てすら、われらは、次の如き事實を、看取せねばならぬ。

たとへば、諷刺小說の古典——ドン・キホーテや、ガリヴァ旅行記だが、今日、それらを讀むと、われらは、そこに、躍動せる空想の世界と特異な性格の創造を感じる。お伽噺の興味と、お伽噺の退屈を感じる。しかも、肝心の諷刺の一點に至つては、遂に時代の霞に隔てられて、之を痛切に感得することが出來ない。

實際、ドン・キホーテを正しく讀むためには、われらは、十六世紀の西班牙の、人情、風俗、社會等を詳かに知らねばならぬ。ガリヴァ旅行記のためには、十八世紀の英吉利を心得てゐねばならぬ。それらを知悉して、初めて、われらは、この二つの古典の痛烈なる諷刺の價値を知るのだ。さうして、むろん、これは、特別の讀書人で無い限り、一般の讀者には、到底緣の遠い話である。

つまり——諷刺小說等々の中で、古典の域に達するやうな佳作も、

先づその後人に訴へる點は、諷刺的、暴露的價値に非ずして、それが「所謂文學」である點だ。

むろん、諷刺とか暴露とか、作品の傾向的なるものは、凡て、その作品の當代を特に問題にしたもので、時代を經れば、その點の價値が薄れてゆくのは、今更云ふまでもない――

しかし、それを云へば、いかなる文學も、結局は、「時代の鏡」である。

つまり、文學に於て、その當代の生命と同時に、その後代への生命をも持つところのものは、常に、それが「文學」である點だ。

幾多の古典が、それを證明してゐる。

徒に當代の現象的事實に曳き摺られて、人間と、社會と、時代への洞察の眼に、深さと、大きさと、自信と自覺とを持ち得ないのは、末流的態度であらう。

×

イブセンが「人形の家」等々を書いた。ストックホルムの新しい婦人連が、一夜彼の爲に招宴を開いた。さうして、婦人解放運動の先驅者としての彼の功績を謳歌した。

彼は、不愉快さうに放言した――

予は、未だ曾て、婦人解放など云ふ問題を考へて、芝居を書いた覺えは無い。予は、予の詩をうたつただけだ――

それだ、と、僕は思ふ。

今日、彼の劇を舞臺に見て、われらの感得するものは、何か。すなはち、彼の、その「詩」だ。彼の「文學」だ。

初演當時、あれほど大衆の亢奮と戰慄とを煽つた彼のテーマは、今日では、既に既にカビ臭いものになつてしまつた。

3　大衆開眼

イブセンの言葉と共に、想起するのは、先年亡くなつた英吉利のジヨセフ・コンラッドの云つた言葉である。

彼は云ふ――

――わたしの仕事は、文字に依つて、諸君に聽かせることだ。諸君に感じさせることだ。何よりも先づ、諸君の眼を開くことだ。これが一切で、これ以外には無い。もしこれが成功すれば、諸君は、わたしの仕事から、激勵と慰籍と恐怖と魅惑と――諸君の要求する凡てを得るであらう、同時に、多分また、諸君が覓めることを忘れてゐるところの「眞理」を發見するであらう……

所謂文學の作用や、その價値批判の標準は、このコンラッドの――

Make you see──の一語に盡きてゐる。讀者開眼だ。

×

われらは、器用な、アラ・モオドの小說を數多く持つ。そこには、「イツト」がある。そこには「朗らかさ」がある。そこには、個人生活への無關心がある。

しかし、われらは、そこに、何の慰藉も、何の恐怖も、何の魅惑も、また、豫期せざる何の眞理をも、感得しない。

われらは、眼を瞑つたまゝで、これを讀む。さうして、そこに、ただ、イージ・ゴウイングな、たゞ徒なる、一部の流行の反覆を看取する。

われらは、また、數多くのプロパガンダ的物語を持つ。われらは、はじめ、そこに、取材の廣さを見た。體驗の生々しさを見た。大きな子供が、廻らぬ舌で、母を呼ぶやうな、眞情を認めた。しかしそれも、今日では、生可臭い、文學的メーキ・アップが板について、純情が感じられぬ。眼を瞑つたつて、讀める作品である。耳を掩ふたつて聽える言說である。われらは、既に、そこに、何のおどろきも、何の魅惑も、また、何の新しい眞理をも見出さぬ。われらの感じることは、たゞこれらの物語作者が、自己のハンデイキヤップに甘へてゐる姿だ。

×

流行に甘へ、社會に甘へ、階級に甘へてゐる者の仕事は、要するに、反覆に過ぎぬ。

作家の生命は、反覆を輕蔑する點にある。

作家の精進は、常に、自己の仕事が、ハンデイキヤップ的反覆で無いやうに自戒する點にある。

×

イプセンは同時代の哲人キエルケゴオルトの哲學を通じて、「七萬尋の大水に小舟を浮べた」やうな孤獨の人となつて精進した。

「閉關之說」の芭蕉は、夥しい門弟と名聲をよそに、常に孤獨な旅に出て、精進した。

文學に依る大衆開眼は、作家のかゝる態度によつて、はじめて可能となるのだ──

4　キネ魔

ゴオズン・クレイグが、「英吉利評論」に寄せた、キネマを罵しるないゝぐり背きの一節──

──キネマの「劇」は、「民衆から成り立ち、民衆の手に依つて制作

され、民衆自身の爲にものされる」と主張されてゐる。

――すなはちキネマは、新しき衣を着た古き暴君の所産だ。

――大衆の俗趣味と、懶怠心と、好奇心と、少數者の智慧（資本家のポケット）とにアピールしながら、しかも「大衆の爲に」と云つた顔をしてゐるのが、キネマだ。

――キネマは、正しくアップ・ツウ・デイトだ。他の一切のアップ・ツウ・デイトなものゝ持つ痲醉力を備へてゐる。民衆を痲痺させ、民衆を盲從させ、民衆を惰落させるところの痲醉力を備へてゐる。

――要するにキネマは、われらが、相率ゐて墮落の谷へ下る、その道しるべに過ぎぬ………

――これは、クレイグの持つ「文學」の聲である――妥協の隙の無い藝術本道をゆく彼の叫びである。

今日、キネマの力が、素晴しい勢ひを持つて、創作と創作家へ浸潤しつゝある事實を考へて、わざとこゝに引用した。

キネマは、キネ魔だ。

×

われらは、「アップ・ツウ・デイトであるもの」に眩惑されてはならぬ。

アップ・ツウ・デイトは、常に大衆とともにある。

大衆は、われらにとつて、「新しき衣を着た古き暴君だ」

×

われらは、考へねばならぬ――

――大衆の向上は、大衆自身の手に依つて成されるのではなくして、その大衆の俛具に依つて結びついた個人の力によつて、はじめて成し遂げられると云ふことを。

×

われらにとつて、「新」は常に「眞」であるべきだ。

古典の意義と價値は、こゝに存する。

アップ・ツウ・デイトは、この意味での「新」ではない。

しからば、われらは、なにも、アップ・ツウ・デイトの作品をものしたり、アップ・ツウ・デイトの作家たらんとすることに汲々たる必要は、毫末も無いではないか。

以上――貶められるまゝに、吃者の唾を吐いた。意餘つて、言葉の足らぬ點が多いと思ふ。諒焉。

海岸から山上へ

正宗白鳥

「英米佛蘭聯合艦隊、幕末海戰記」といふ、當時のフランス海軍大主計アルフレッドルサンの見聞記を、安藤、大井兩氏の新譯によつて讀んだ。維新前後の日本の國情が外人の目にいかに映じたかが明かにされて、讀者の興味をそそるのであるが、そのうちに、瀬戸内海の風光を讃美したところがあつた。眞夏の數十日を内海の一隅で過した私は、このあたりの眺めが、そんなに傑れてゐるのであらうかと疑つた。この佛人は叙述して曰はく、「横濱へ歸還の航路は、内海航路を取つた。二十一日の午後、我々は内海の西部を航し終つて、日本島四國及びその附近の島嶼の間に、大阪灣と内海とを連絡してゐる水道に差しかかつた。其處の美しい風景は實に筆舌に盡し難く、我々は始終甲板上に立盡して眼を見張り魅惑されてゐた。海峽は或時は兩岸の岬の間に忽ち狹く、或時は又豁然として深淵と成り擴がりつつ、急激な潮流に運ばれてゐる我々の目に、斷えず新らしく恍惚と思ひもかけぬ景色を現はすのであつた。海邊まで鬱蒼と緑に包まれてゐる丘陵、多くの村落、村落の上の寺院、小高い所に聳えてゐる繪畫的な城、海上に釣をしたり漕いだりしてゐる無數の小舟、水平線上に見える險峻な高い山脈、等々、日沒は此等の景色の最後に紫色の反映を着せた。夜の帷が下りて來ても、まだ我々の目はその闇を通して美しい自然の景色を求めた。遙か灣の奥の方に、三原城の櫓と壁とを見分けることが出來た。やがてその附近で夜を過すために錨を下ろすのであつた。」

先月の中央公論所載の「海門號の秘密」といふ、日露戰爭當時のロンドンタイムス通信員の觀戰記のうちにも、「極東列強以

來、私は始めて此不思議な、そして人心を恍惚たらしむるやうな國土の美しい風光を眺めることが出來た。私等の船は、瀬戸内海を通過して前後四日間の航海をしたのであるが、それは私の審美慾に對して、間斷なき滿悦を與へて呉れた。至る所に驚くべきほど無數の風光絶佳な島や、岩や、入江や、岬を持つて居るこんな美術的な國民が、事もあらうに、現代的戰爭のやうな俗惡な非美術的なことをやるなんて、私には殆んど信じられなかつた」と、激讃してゐる。これ等の讃辭は、觀光客の有振れたお世辭とはちがつて、彼等の實感の現はれなのだ。

瀬戸内海はそんなに美しいのであらうか。私は有島武郎氏にはじめて會つた時に「世界で何處が一番美しいか」と訊くと、氏は、ノルウエーの海岸と、瀬戸内海と、もう一つ何處かの海岸との三つを擧げた。どれも海であつたのを私は變に思つた。ノルウエーの海岸は奇勝に富んでゐるらしく、夏季には、贅澤な遊覽船が英國から出掛けることを、私はロンドン滯在中に聞いた。瀬戸内海にも早晩遊覽船が計劃されるであらう。しかし、内海の沿岸がそんなに美しいのであらうか。

私一箇に取つては、神戸を離れて、須磨舞子あたりから平板無味な攝州平野に入ると、いつも氣が滅入り込むのを例としてゐる。近來あまりたびく歸省してゐるためか、故郷には魅力を感じなくなつた。油を流したやうな夕凪の海面に、漁船の帆がだらりと垂れてゐるところに、繪畫的の妙味はあるが、九十度以上の毎日の暑さと、蚊が多いので、少くも銷夏に適した土地とは思はれない。私は關西の海よりも關東の山を好む。外遊中屢々思出したのは、輕井澤であつた。日光であつた。東京の借家で生れたものは、故郷といふ感じが乏しいさうであるが、私は、自分がいゝ土地に生れ落ちたとは思はれない。昔小杉天外氏が私に向つて「小說家は田舍生れの方がいゝ。田舍だと、村の人々の父祖代々の生活經路がよく分るが、都會では、それが分らない」といふ意味の話をしたことがあつた。氏は當時ゾラに私淑して、遺傳の力などに注意してゐたゝめに、ことにさう思つてゐたのであらう。小說家となるには、田舍育ちがいゝか、都會育ちがいゝか、疑問であるが、私は、生きた人世に關係した知識は、この見窄らしい故郷から案外多く學んでゐるのに、不斷氣づかないでゐたのであつた。私は、歸省しても、村人の誰れと往來するでもなく、牢獄に居るやうに、祖家の中に

籠居してゐるのだが、それでも、一家の運命や一商人の成行がよく分る。一言聞いても一目見ても、炬火の光で暗黒の洞穴を覗いたくらゐに、世相が明かになることがある。どうせ色の世界であり慾の世界であることは、何處も同じだが、田舍は萬事奇麗事でないので、こんな材料を暴露小說にしたつて、讀者には喜ばれないに極つてゐる。細田君の「眞理の春」だつて、資產階級の、金と色とに關する暴露をしたからこそ、讀者の興味を惹くのだ。小杉天外氏の昔の寫實小說だつて「コブシ」とか「魔風戀風」とか「長者星」とか、その他、小說好きに歡迎されたものは、みな、都會生活を取扱つたものであつた。德富蘆花その他の作者の田園描寫の喜ばれたのは、それが詩のやうに繪のやうに書かれてゐたゝめで、作者は決して現實の直寫を試みてゐたのではなかつた。私の少年時代に、宮崎湖處子の「歸省」といふ小說が、非常に文壇の高評を得て、我々も愛讀したのであつたが、それは、一回每に、陶淵明やウヲズオースの詩を引用してゐるによつても察せられる如く、全篇が實生活を離れた詩であつた。田山花袋氏の「ふる鄕」だつてさうであつた。陶淵明の「歸去來」にしても、田舍生活の風流が唄はれてゐるが、私など、故鄕に歸るたびに、「歸去來」の詩趣なんか全く感じたことがない。農村の疲弊は、この頃盛んに說かれてゐるが、昔から田舍の疲弊してゐなかつた時代があつたか知らんと思はれる。德川時代には、各地の大名が田舍から搾取した富を江戶へ持つて行つて、播散らしたので、宵越しの金を使はないなんていふ、氣取つた江戶氣性は、田舍者が犧牲になつたお蔭である。明治政府が學問を奬勵すると、田舍の人間は、田舍の金を學資にして、子女を都會の學校へ送つて、その子女は卒業しても、故鄕へ富を持つて歸ることはない。錦衣故鄕へ歸るのは、自己の出世を鄕黨に見せびらかすためだけなのだ。小作料を掻集めて東京へ持つて行つて、學問した地主の子息を、「若旦那は大變御出世なすつて」なんて、心から感歎するなんか、小作人は愚直である。この頃は、地主の子息でも、農民の疲弊を問題にして、社會の不公平を、論文で說き演說で表はしたりして、農民の味方らしくなつたものも、續々現はれるやうだが、それがどれだけ實際的に田舍の人間の足しになるのではない。彼等は田舍に腰を据ゑて、農民と同樣に艱苦を嘗めるのではない。農民問題を材料として、賣名と原稿料稼ぎをして、御當

人は、都會生活を享樂してゐるやうである。

瀨戸內海が通りすがりの西洋人の目に美しく見える如く、私は、英吉利や佛蘭西の田園を繪のやうに美しく見た。しかし、そこに生活してゐる人々の生活は繪でも詩でもないだらうと思はれる。農村のことばかりではない、人間の生活は、それが繪になり、小說になる時には、現實の眞の味はひを失ふのであるが、そこに、人間の要求する藝術の價値があるのであらう。ボカッチョーの「デカメロン」の中に、「こんな貴婦人のお氣に入る物語を書續けるよりは、パンを得る術でも書いた方がよからう」と、揶揄されたことが書かれてあるが、色の世界を面白可笑しく語つたボカッチョーの「物語」は、當時に持囃されたばかりでなく、今日でも廣く讀まれてゐる。それ等の物語にも、數百年前の伊太利の社會の實相が現はれてゐるのであらうが、この作者は自から認めてゐる如く、人を面白がらせようと心掛けてゐたことと、西鶴と同樣であつた。伊太利のその頃だつて、金があつて美しい未亡人と才氣のある美しい青年との變化ある戀愛沙汰がさうザラにあつた譯ではあるまいし、有振れたものは、醜男醜女の凡庸な色慾の交渉であつたのだと推察される。

近來大衆文學が巾を利かせてゐるが、大衆は決して大衆自身現實暴露文學を喜ぶものではないのである。本當の現實暴露を敢てする作家があつたら、讀者よりも作者自身が堪へがたくなるであらう。

私は、故鄕を出て、六甲山へ登つて、そこのホテルに泊つた。山の風は涼しい。蚊もゐない、蠅もゐない。地獄から天國へ上つたやうである。現實廻避の快さが感ぜられた。神戸とか大阪とか云ふやうな大都會から、僅か一時間足らずのドライブで、こんな淸涼な山上へ運ばれるのは、世界の都會で珍らしいことであると、ある外人は云つてゐた。

山莊に惡疫を避けた人々が、互ひに色さま〴〵た浮世の情話をして、笑ひ興じて浮世を忘れようとしてゐたのが、デカメロン作中の光景であつたが、私は、この下界の苦熱の襲來しない六甲の山莊でも、そこに集まつた人々が自分々々の心に宿つてゐる悲喜哀歡の物語をし合つたら、日本の十日物語が製作される譯であると、小說作家らしい空想を起した。しかし、廣間の椅子に凭れて、殊に夜に見てゐると、昔物語に出てゐたやうな美しい婦人はゐなかつた。聞いてゐても面白い話もなさゝうだ

つた。

「私は、若い時分から、年中働き通しで、避暑といふものはしたことがなかつた。近年やうやく、夏のうちは涼しい所で静養することにしましたが、これは天もお許しになる特權だと思つて居ります」と、ある話好きの老人は云つてゐた。

「あなたのやうに長壽を保つた方は、若い時分に働いて、年を取つてから樂をするのが、筋道の立つた處生法だとお思ひになるでせうが、働くばかりで若死する人間は詰りませんね。」と、ある青年は云つてゐた。

勞働と享樂との價値の比較は閑問題であるが、全力を盡くして勞働しなかつた人に勞働の眞味が分らないやうに、心身を捧げた享樂を經驗しなかつた人には、享樂の眞味は分らないのだらうと思はれる。私など、過去を回顧して、無我無中の悅樂の經驗なんか、どうしても思出されない。それで、金錢慾でも鬪爭慾でも、遊蕩慾でも、身を燒亡ぼすまでに猛烈である人間を見ると、多少羨望の思ひに襲はれることがある。人類の歷史が賢哲の徒によつて導かれたくらゐな程度には、慾念強烈な人間によつて進步して來たのであらう。これは珍らしい說でも何でもないが、氣力の衰へた私は、山上に於てことにそれを感じてゐた。私の心の中に、老や死や衰滅に對して反抗せんとする生存慾がはげしく動いてゐる證據である。食卓で傍人が盛んに料理の皿を重ねてゐるのを、胃の弱い私などが見て、「下すつぽい奴だ」とか「はじめて洋食を食べたやうにガツ〳〵してゐるやうで見つともない」とか思ふのは、負惜しみであつて、實は羨ましいのである。

人間が人間製造者から與へられた慘刻な賜物の一つは、百パーセント死の幸福を信じながら、それを斷行し得ない迷妄の心理である。「こんなにして生きてるよりは早く死んだ方がいゝ」と、常人も思ひ、傍の者も思つてゐながら、さういふ人も、生き甲斐のない命を一日づゝ延ばすことに努めるのだ。箱根のホテルで自殺したSといふ外交官や、瀨戶內海に投身した生田春月君などの實際の心事はどうだつたか知らないが、未知の人であつただけに、私は、この二氏の光風霽月のやうな心境をよく想像した。

慾念強烈を望む心と、自我滅却に安じる心と、この相反した心理は、物を見るにつけ書を讀むにつけ、私の心に動いてゐ

る。私は、さういふ自分の心を自分で見てゐることが多いが、われと我が身を傍觀してゐられる間は、そこに餘裕があり、小說的趣味がある譯である。しかし、もつと老いて、心身がもつと衰へたなら、そんな小說的傍觀趣味なんか失はれて、傍人の保護に手頼り、傍人の甘言に縋り、見じめに、喘ぎ〲生きてゐるやうになるのであらう。

「私など、先が短かくなつたのですから今のうちにせい〲面白い者を見たり聞いたりして、冥土の土産話にしときたいと思ひます」と、かの老人が云つてゐたが、この平凡な感想は、多くの老人に共鳴されさうである。

ところが、私の知つてゐる故鄕の或老人は、可成りの財産を有つてゐながら、つねに生活の不安に怯えてゐたらしかつた。それで一錢半錢の消費をも惜んで、電燈代をも出し澁るので點燈を停止された。彼れは、蠟燭の光で夜を過した。食物も、煮干以外の贅澤な物は食べなかつた。老いてから迎へた妻君も、食物さへ滿足に與へられないので、逃出した。そして、彼れは、豐かな財布を殘して、先頃死んださうである。

また、ある老人は、老さきの迫つてゐるのを達觀して、資產を子孫に分配して、安易な氣持になつてゐたところが、この老人は案外に長生きをした。それで、彼れは、讀んだことのない「リア王」の氣持を經驗したさうである。身體の肉が落ちて骨つぽくなつたから、絹布夜具に寢たいと思つたが、「そんな贅澤な者をつくるつてことがあるものか」と、彼れは若い者に叱られて、泣寢入りにならなければならぬ有樣だつた。

先が短かいから、せい〲面白い者を見たり聞いたりしてゐると云ふ老人は幸福であるが、さういふ太平樂の境地にゐられる老人は、實際は少いのである。

私は、涼しい山上で、蚊や蠅の多い、暑くるしい內海地方を想像してゐると、そこには、湖處子の「歸省」や、淵明の「歸去來」とは、似ても似つかぬものが思浮べられた。ホテルの廣間で貴族語で會話を交換してゐる婦人達は、汗は出ないだらうのに、頻りに衣裳を着替えてゐた。婦人の粧飾慾は强烈な本能で、そのために世の中が美しくもなるのだが、男子の負擔は容易ならぬことであらうと察せられた。「十二三の少女を騙して、遠方の町の妓樓へ連れて行つて、賣飛ばして、泣いて縋りつく少女に目もくれないで歸つて來た」といふ田舍の最近の噂が連

想された。昔の芝居では、税金滞納のために水牢に入れられてゐる父親を救ふための身賣であつたりして、劇的情味を起すのであり、今のプロレタリア小說だと、社會制度不完全の一例となつて、作家の義憤がほとばしるのである。しかし、この少女を賣つたのは、養父母でもなく、誘拐者でもなく、實の兩親であつた。生活が極度に逼迫してゐたのでもなかつた。賣つた金で飮んだり食つたりしたのだと云はれてゐた。

この山の一角に、六甲最初の開拓者の碑が立つてゐる。それは日本人ではない。何十年か前にある外人が、獨りパイプを啣へて、ノッソリと、道のない山上を漫步して、地相を檢した後、良好な區域を選んで避暑を企てた。外人村と今でも唱へられてゐる別莊地が造られたが、この頃は、日本人が頻りに來るやうになつたので、外人村も名ばかりになつたさうだ。「西洋人は日本人に浸入されるのをいやがるのです」と、その話をした人が云つてゐた。瀨戶內海でも輕井澤でも六甲山でも、白人は日本の山海の風光を讚美してゐるが、日本人の生活は嫌つてゐる。日本人は明治以來こんなに西洋文明の模倣を心掛けてゐるのに、彼等はまだ快よく日本と融和する氣はないのである。落末の開闢は、どうしても止むを得ない運命であつたが、「彼が勝つか、我れ勝つか」といふ殺氣味の悲い開闢が、そこに描出されてゐるやうに、私には思はれる。私が最近讀んだ佛人の一篇「幕末海戰記」は、ある史劇の初幕であつて、大詰の幕はまだ書かれてゐないやうに思はれる。

このホテルに、ある朝、有名な喜劇役者の顏が見えた。かの話好きの老人とは懇意な間柄なのか、一しきり元氣のいゝ話を交換してゐた。

「ここへ着いたのが、夜中の二時でした。人間は嘘を吐かなきや世が渡れまへんな。昨夕も何だ彼だと忙しくて、暑いのにたまりませんから、便所へ行くと云つて、宴會の席を逃出して、圓タクで此方へ來ました。運轉手は來たことがないと云ふので、山道が凄つたです。」

「それは大變でしたね。……しかし、あなたの芝居は、この暑さにも御繁昌で結構です」

「昨日はS市で、市の催しでやりましたが、定員千五百人の小屋へ二千五百人の見物を容れましたから茹るやうでした。それに、私を側へ置いて、市長さんが、一時間も演說せられた時か

こたへましたな。側に立つて、いろ〳〵に褒められてばかり居るのはやりきりません。泣きも笑へも怒りも出來ず、妙な氣味だすた。まだしも惡く云はれた方が、此方が昂奮して仕末がいゝくらゐなものです」

贅澤なことを云つてゐると、私は傍で思つてゐた。賞讃の的のうるさゝ、宴會攻めのうるさゝ、大抵の人間の求めるところは、そんなことなのだ。あちらからもこちらからも「やいのやいの」と云はれて煩くてならない。「色男には誰れがなる。」藝人、文學者など、若い頃多少でもさういふ得意な經驗をしたものは、年を取ると、世に忘れられることが、一しほ骨身にこたへるのである。

その喜劇役者は、一時頃には早くも山を下るべく出立した。急用のない私も、有馬から寶塚を經て大阪へ向ふべくホテルを出立した。

改造社出版圖書目錄

（一）政治・法律

書名	著（譯）者名	版數	體裁・頁數	定價・送料
家族制度と婦人問題	法學博士 河田嗣郎著	8版	四六判上製 三五二頁	二・〇〇 ・二〇
婚姻の基調	京大教授 宮本英雄著	5版	四六判上製 二〇八頁	一・五〇 ・一八
現代法律思想の研究	法學博士 高柳賢三著	4版	菊判上製 七九九頁	四・八〇 內・二七
小作法と自作農創定法	澤村康著	3版	菊判上製 七八五頁	四・八〇 內・二七
（附 [illegible]）普通選擧法要綱	阪 內務事務官 三宅 司法書記官 著	10版	菊判並製 二七六頁	・六〇 ・一六
法と宗教と社會生活	法學博士 田中耕太郎著	8版	四六判上製 四〇八頁	二・五〇 ・二四
私法學序說	帝大助教授 廣濱嘉雄著	4版	菊判上製 四六〇頁	三・〇〇 ・二六
ソヴイエト・ロシアの民法と勞働法	京大教授 末川博著	4版	四六判上製 四〇二頁	二・五〇 ・二二
法窓閑話	法學博士 末弘嚴太郎著	27版	四六判上製 四一二頁	二・五〇 ・二二
噓の効用	法學博士 末弘嚴太郎著	49版	四六判上製 四五四頁	二・六〇 ・二二

書名	著（譯）者名	版數	體裁・頁數	定價・送料
法律に於ける階級鬪爭	帝大助教授 平野義太郎著	11版	菊判上製 三四二頁	二・[illegible]〇 ・一六
法制講話	法學博士 森莊三郎著	9版	四六判上製 四三四頁	[illegible] ・二二
現代日本の政治過程	大山郁夫著	5版	四六判上製 三五四頁	[illegible] ・二二
大衆に呼びかける	大山郁夫著	20版	四六判並製 一〇二頁	[illegible] ・〇四
勞働法總論	商大教授 孫田秀春著	7版	菊判上製 三四〇頁	二・六〇 ・二六
勞働政黨と勞働組合	ジノヴィエフ原著 富士辰馬譯	4版	四六判並製 一六四頁	・九〇 ・一四
農村法律問題	法學博士 末弘嚴太郎著	27版	四六判上製 四一八頁	二・五〇 ・二二
露國共產黨『內訌』錄	「プラウダ」紙所載 近藤榮藏譯編	4版	四六判 三九五頁	一・五〇 ・一八
勞働法研究	法學博士 末弘嚴太郎著	15版	四六判上製 五四一頁	[illegible] ・一四
市町村法律必携	奈良正路著	新刊	三六判上製 九六八頁	三・〇〇 ・一四
政治地理學	東京高師教授 飯本信之著	新刊	四六判上製 四四四頁	三・五〇 ・二四

（2） 經濟・社會

書名	著者	版	體裁	定價・送料
社會運動と勞銀制度	法學博士 福田德三著	16版	四六判上製 四二〇頁	二・五〇 ・二〇
改譯 資本論解說	カール・カウツキー著 高畠素之譯	75版	四六判特製 四六判並製 三〇八頁	一・二〇 一・〇〇 ・一八
社會主義と進化論	高畠素之著	8版	四六判並製 二七二頁	一・〇〇 ・一八
社會主義社會學	アーサー・レウヰス著 高畠素之譯	7版	四六判並製 二四八頁	一・〇〇 ・一六
國家思想の研究	口田康信著	8版	四大判上製 三四四頁	二・〇〇 ・二〇
社會問題綱要	法學博士 河田嗣郎著	5版	菊判上製 六四四頁	四・五〇 内・二七
學生と政治	森戸辰男著	9刊	四六判並製 六四頁	・三五 ・〇四
帝國主義研究	猪俣津南雄著	8版	四六判並製 五〇二頁	一・〇〇 ・一八
近世封建社會の研究	經濟學博士 本庄榮治郎著	5版	四六判上製 三一六頁	二・〇〇 ・二二
日本社會史	經濟學博士 本庄榮治郎著	30版	菊判上製 二九六頁	二・五〇 ・二四
資本主義末期の研究	高橋龜吉著	6版	四六判上製 五三八頁	二・五〇 ・二四
石油帝國主義	ルイズ・フイスシヤー著 荒畑寒村譯	4版	四六判上製 二九〇頁	一・五〇 ・二〇
封建社會の統制と鬪爭	帝大教授 黑正巖著	3版	菊判上製 五一〇頁	三・五〇 ・三〇
日本社會經濟編年史	吉田英雄著	2版	菊判上製 六八四頁	八・〇〇 内・二七
日本財政史	經濟學博士 本庄榮治郎著	7版	菊判上製 三一六頁	二・五〇 ・二二
英國資本主義成立史	慶大教授 野村兼太郎著	3版	菊判上製 六五〇頁	四・五〇 内・二七
世界經濟論	ブハーリン原著 富士辰馬譯	4版	四六判上製 三五六頁	二・〇〇 ・二二
日本殖民地經濟論	持地六三郎著	4版	菊判上製 三一〇頁	二・八〇 ・二四
國際經濟總論	法學博士 堀江歸一著	5版	菊判上製 四一七頁	三・三〇 ・二八
貨幣・銀行・外國爲替（卷上）	法學博士 堀江歸一著	8版	菊判上製 三八四頁	三・〇〇 ・二六
貨幣・銀行・外國爲替（卷下）	法學博士 堀江歸一著	6版	菊判上製 五一一頁	四・〇〇 ・三〇
金貨本位制の興廢	法學博士 堀江歸一著	4版	四六判上製 二二二頁	一・〇〇 ・一八
英國預金銀行論	法學博士 堀江歸一著	4版	四大判上製 二八〇頁	一・〇〇 ・一八
中世寺院法と經濟思想	京大講師 山口正太郎著	4版	四六判上製 二三二頁	一・五〇 ・一八
近世商業史	慶大教授 野村兼太郎著	5版	菊判上製 三五四頁	三・〇〇 ・二六
明治維新經濟史	猪谷善一著	4版	菊判上製 三四〇頁	二・五〇 ・二六
唯物史觀經濟史出立點の再吟味（前册）	法學博士 福田德三著	4版	菊判上製 二七四頁	二・五〇 ・二六

書名	著者	版	體裁	定價	送料
マルクス學解説	高畠素之著	15版	四六判並製 三八二頁	一・〇〇	・一八
現代英國經濟研究	奥村愼次著	新刊	四六判上製 二九四頁	一・五〇	・二二
英米投資銀行と投資證券	法學士 高平隆雄著	新刊	菊判上製 二八二頁	二・五〇	・二四
經濟學入門	ミハレフスキー著 荒川實藏譯	新刊	四六判並製 四〇八頁	一・五〇	・二〇
日本交通史の研究	京大教授・經濟學博士 本庄榮治郎著	新刊	菊判上製 五二九頁	三・五〇	・二六
現代日本研究	猪俣津南雄著	新刊	四六判上製 六〇八頁	二・八〇	・二四
中歐諸國の土地制度及土地政策	澤村康著	新刊	菊判上製 七一〇頁	五・〇〇	・二六
經濟小書	武藤山治著	新刊	菊判並製 二〇二頁	・八〇	・二〇
マルサスと彼の業績	ボナア著 堀・吉田共譯	新刊	菊判上製 六〇五頁	四・五〇	・二六
憲政の原理と其運用	京都帝大教授 森口繁治著	5版	菊判上製 四六四頁	三・五〇	・三〇
明治大正産業發達史	高橋龜吉著	3版	菊判上製 七七六頁	六・〇〇	・三六

（3）勞働・農村

書名	著者	版	體裁	定價	送料
勞働問題原理	渡邊一郎著	3版	四六判上製 三九〇頁	二・〇〇	・二二
女工哀史	細井和喜藏著	28版	四六判並製 四五八頁	二・〇〇	・二〇
野田大勞働爭議	松岡駒吉著	4版	四六判並製 四一三頁	一・〇〇	・一八
農政四十三講	法學博士 河田嗣郎著	4版	四六判上製 三九八頁	二・五〇	・二二
農村問題と對策	法學博士 河田嗣郎著	19版	四六判上製 三四四頁	二・〇〇	・二〇
農業問題研究	河西太一郎著	5版	四六判上製 四三三頁	二・三〇	・二二
土地問題論	W・ワーグネヒト著 河西太一郎譯	4版	四六判上製 三三二頁	一・五〇	・二〇
農村研究講話	農學博士 小野武夫著	7版	四六判上製 二二八頁	一・五〇	・一八
日本農民史語彙	農學博士 小野武夫著	3版	四六判上製 四九二頁	三・五〇	・二四
近世農村問題史論	經濟學博士 本庄榮治郎著	6版	四六判上製 三六〇頁	二・三〇	・二二

（4）哲學・宗教・科學

書名	著者	版	體裁	定價	送料
生存競爭の哲學	賀川豐彦著	13版	四六判上製 三六〇頁	二・〇〇	・二二
心理學講話	文學博士 松本亦太郎著	51版	四六判上製 五四六頁	三・五〇	・二四
ヴントの民族心理學	文學博士 桑田芳藏著	7版	四六判上製 五一六頁	三・五〇	・二四
哲學思想の史的考察	ウンターマン著 森宰一譯	3版	菊判上製 二四二頁	二・〇〇	・二二
實踐哲學研究	錦田義富著	2版	菊判上製 五九〇頁	五・〇〇	・二七

書名	著者	版	體裁・頁數	定價・送料
學校兒童心理學	東洋大學教授 關寬之著	3版	四六判上製 四七二頁	二・七〇 ・二二
經濟哲學	ブルガコフ著 島野三郎譯	2版	四六判上製 四三〇頁	二・五〇 ・二二
日本道德論	廣島高師教授 清原貞雄著	5版	菊判上製 五六四頁	四・五〇 ・三〇
現代教育哲學の根本問題	廣島高師教授 長田新著	8版	菊判上製 三九二頁	三・〇〇 ・二四
體驗宗教の研究	佐藤繁彥著	4版	四六判上製 三三六頁	二・〇〇 ・二〇
自我經	スティルネル著 辻潤譯	8版	四六判上製 六六八頁	二・八〇 ・二二
校註 切支丹鮮血遺書	松崎實編	11版	四六判上製 六六二頁	三・五〇 ・二八
老子の研究	東北大教授 武内義雄著	4版	菊判上製 五〇〇頁	三・五〇 ・二八
物理學と認識	理學博士 桑木彧雄著	6版	四六判上製 二三四頁	一・五〇 ・一八
電子說から見た世界	中澤臨川著	品切	四六判上製 四七二頁	一・八〇 ・一八
遺傳學概論	エム・シー・コルター著 長尾正人譯	3版	四六判上製 二九八頁	一・八〇 ・二〇
婦人の健康の爲に	醫學博士 樋口繁次著	8版	四六判上製 三一〇頁	一・〇〇 ・一八
近代物理學概觀	佐藤充 庄司彥六 共著	4版	菊判上製 二三四頁	三・〇〇 ・二四
智能心理學	文學博士 松本亦太郎著	2版	四六判上製 一〇三六頁	五・〇〇 ・三〇

書名	著者	版	體裁・頁數	定價・送料
自殺學	高田義一郎著	新刊	四六判上製 三二一頁	一・五〇 ・二二

(5) 文學・評論・文明批評・研究

書名	著者	版	體裁・頁數	定價・送料
文學と革命	トロツキイ著 茂森唯士譯	4版	四六判上製 三六六頁	二・〇〇 ・二〇
苦悶の象徵	文學博士 厨川白村著	53版	四六判上製 二一四頁	一・八〇 ・二〇
愛する人々へ	有島武郎著	15版	四六判上製 五〇四頁	三・〇〇 ・二四
近代文明と藝術	吉江喬松著	5版	四六判上製 三三四頁	二・〇〇 ・二〇
文藝管見	里見弴著	6版	四六判上製 一九八頁	一・二〇 ・一八
藝術論鈔	帝大教授 阿部次郎著	6版	四六判上製 四一二頁	二・二〇 ・二〇
ゆかり	祖佛文學會編	2版	四六判上製 四四六頁	特六・〇〇 上三・五〇 ・二二
吉利支丹文學抄	東北大學教授 村岡典嗣著	5版	菊判上製 三六二頁	三・五〇 ・二六
文學に志す人へ	武者小路實篤著	8版	四六判上製 二六六頁	一・三〇 ・一八
ロマンチク時代	京大助教授 太宰施門著	3版	四六判上製 二六八頁	二・〇〇 ・二〇
文藝當座帳	菊池寛著	8版	四六判上製 二七四頁	一・五〇 ・一八
文藝評論	正宗白鳥著	5版	四六判上製 三七二頁	一・八〇 ・二[illegible]

文藝叢書 天草本伊曾保物語	新村出校註	4版	四六判上製 三九四頁	三・〇〇 ・二四
革命後のロシヤ文學	昇曙夢著	3版	四六判上製 三四八頁	二・〇〇 ・二〇
文藝一夕話	佐藤春夫著	3版	四六判上製 二八二頁	一・八〇 ・一八
日本演劇の研究	文學博士 高野辰之著	4版	菊判上製 四一一頁	四・〇〇 ・三〇
日本演劇の研究(第二集)	文學博士 高野辰之著	3版	菊判上製 五〇〇頁	五・〇〇 ・二七
近代の戀愛觀	文學博士 厨川白村著	126版	四六判上製 三七〇頁	二・五〇 ・二二
戀愛價値論	理學博士 石原純著	8版	四六判上製 二八二頁	一・六〇 ・一八
大衆時代の解剖 ―文明の沒落第三部―	室伏高信著	新刊	四六判並製 三二六頁	一・〇〇 ・一六
萬葉漫筆	文學博士 佐々木信綱著	6版	四六判上製 三八〇頁	二・〇〇 ・二〇
硯友社と紅葉	江見水蔭著	5版	四六判上製 二一四頁	一・五〇 ・一八
空中征服	賀川豊彦著	5版	四六判並製 二五四頁	一・〇〇 ・一六
先立ちて來るもの	ロマン・ローラン著 大澤章譯	3版	四六判上製 二九六頁	一・五〇 ・一六
疾風怒濤時代と現代獨逸文學	成瀬無極著	4版	菊判上製 三二一頁	二・五〇 ・二四
饒舌録	谷崎潤一郎著	4版	四六判並製 三〇三頁	一・二〇 ・二〇

現代文藝評論	正宗白鳥著	4版	四六判上製 四九六頁	二・五〇 ・二四
緑の觸角	北原白秋著	4版	四六判上製 四二九頁	二・五〇 ・二二
文藝と法律	法學博士 勝本正晃著	4版	四六判上製 四九八頁	二・八〇 ・二四
十年	志賀直哉・里見弴 佐藤春夫・梅原龍三郎・岸田劉生共編	2版	菊判上製 九〇〇頁	九・〇〇 ・三六
藝術と無産階級	藏原惟人著	6版	四六判並製 三一六頁	一・二〇 ・二〇
藝術に關する走り書的覺え書	中野重治著	6版	四六判並製 三二九頁	一・二〇 ・二〇

(6) 小說

壽々	志賀直哉著	6版	四六判上製 四一二頁	二・五〇 ・二二
雨蛙	志賀直哉著	6版	四六判上製 四一二頁	二・五〇 ・二二
沙羅の花	芥川龍之介著	8版	四六判上製 四七八頁	二・八〇 ・二二
改版 直輔の夢	里見弴著	10版	四六判上製 二七四頁	一・五〇 ・二〇
第三の隱者の運命	武者小路實篤著	1刷	四六判上製 三九〇頁	一・九〇 ・二〇
東東へ	藤森成吉著	4版	四六判上製 三七〇頁	二・三〇 ・二〇
惱み笑ふ	藤森成吉著	5版	四六判上製 三〇〇頁	一・三〇 ・一六

書名	著者	版	體裁	定價	送料
故郷	藤森成吉著	4版	四六判上製 二八二頁	一・五〇	・一八
脂粉の顔	藤村千代著	4版	四六判上製 三五二頁	二・三〇	・二二
海神丸 其他	野上彌生子著	3版	四六判上製 二四〇頁	一・三〇	・二〇
佗しすぎる	佐藤春夫著	品切	四六判上製 二七六頁	一・六〇	・一八
窓展く	佐藤春夫著	6版	四六判上製 三四六頁	二・〇〇	・二〇
長篇小説 結婚禮讃	武林無想庵著	11版	四六判上製 三八六頁	二・三〇	・二〇
文明病患者	武林無想庵著	5版	四六判上製 四〇六頁	二・三〇	・二〇
青銅の基督	長與善郎著	5版	四六判上製 三三六頁	二・〇〇	・二〇
工場	細井和喜藏著	26版	四六判並製 四二七頁	二・〇〇	・二〇
奴隷	細井和喜藏著	12版	四六判並製 四六四頁	二・〇〇	・二〇
無限の鐘	細井和喜藏著	9版	四六判並製 四二〇頁	二・〇〇	・一八
農夫喜兵衛の死	中西伊之助著	品切	四六判上製 二九八頁	一・七〇	・一八
哀しき父	葛西善藏著	5版	四六判並製 三四四頁	一・〇〇	・一八
縁談	里見弴著	6版	四六判上製 四三八頁	二・三〇	・二二
二人の獨り者	近松秋江著	4版	四六判上製 三一二頁	二・〇〇	・一八
一つの時代	犬養健著	5版	四六判上製 三六六頁	二・五〇	・二二
則天武后	柳原燁子著	4版	四六判上製 二四六頁	一・六〇	・一八
啓吉物語	菊池寛著	7版	四六判上製 四六九頁	一・〇〇	・一八
長篇小説 第二の接吻	菊池寛著	52版	四六判上製 三九八頁	二・〇〇	・二〇
長篇小説 奔流	三宅やす子著	8版	四六判上製 四五四頁	二・三〇	・二〇
或兵卒の記録	細田民樹著	4版	四六判上製 四五八頁	二・五〇	・二二
番町夜講	泉鏡花著	4版	四六判上製 三三〇頁	二・〇〇	・二〇
新選谷崎潤一郎集	谷崎潤一郎著	4版	四五判上製 一一一〇頁	五・五〇	内・二七
痴人の愛	谷崎潤一郎著	55版	四六判上製 三九八頁	二・〇〇	・二二
長篇小説 鮫人	谷崎潤一郎著	26版	四六判上製 三一四頁	二・〇〇	・二〇
赤い屋根	谷崎潤一郎著	10版	四六判上製 三九六頁	二・〇〇	・二二
運命の秋	吉田絃二郎著	11版	四六判上製 三二六頁	二・〇〇	・二〇
父	吉田絃二郎著	13版	四六判上製 三二五頁	一・九〇	・二〇

ダビデと子たち	吉田絃二郎著	10版	四六判上製 三八六頁	一・八〇	・二〇
芭蕉	吉田絃二郎著	16版	四六判上製 二四六頁	一・六〇	・一八
一人歩む	吉田絃二郎著	5版	四六判上製 四〇四頁	一・八〇	・二二
秋の一夜	廣津和郎著	4版	四六判上製 二九四頁	一・六〇	・一八
蛇精	田中貢太郎著	4版	四六判上製 三四二頁	一・九〇	・二〇
綱の上の少女	片岡鐵兵著	4版	四六判上製 四三二頁	二・〇〇	・一八
山科の記憶	志賀直哉著	4版	四六判上製 二二四頁	一・五〇	・一八
旅人	吉田絃二郎著	4版	四六判上製 三七四頁	一・八〇	・二〇
恐ろしき私	中河與一著	6版	四六判上製 二八〇頁	一・八〇	・一八
木靴	久米正雄著	4版	四六判上製 三六八頁	二・〇〇	・二二
大道無門	里見弴著	9版	四六判上製 四一〇頁	二・〇〇	・二二
無限抱擁	瀧井孝作著	4版	四六判上製 三五一頁	二・〇〇	・二二
母と子	武者小路實篤著	6版	四六判上製 五五八頁	二・〇〇	・二二
海村	有島生馬著	3版	和本函入 上下二冊	二・五〇	・二二

小説六つ	野上彌生子著	品切	四六判上製	二・七〇	・二二
盲魚	眞山青果著	4版	四六判上製 三五〇頁	一・八〇	・二〇
伸子	中條百合子著	3版	四六判上製 五七〇頁	二・〇〇	・二四
南京の皿	佐々木茂索著	4版	四六判上製 三八〇頁	二・〇〇	・二二
橋	黒島傳治著	6版	四六判並製 二八九頁	一・[illegible]〇	・一八
世紀の假面	山川亮著	4版	四六判 二八二頁	一・[illegible]〇	・一八
過ぎ行く日	徳田秋聲著	4版	四六判上製 三二四頁	一・八〇	・二〇
海に生くる人々	葉山嘉樹著	4版	四六判並製 三一〇頁	一・五〇	・一八
春は馬車に乘つて	横光利一著	7版	四六判上製 三二〇頁	一・八〇	・二〇
死線を越えて(上)	賀川豊彦著	48版	四六判上製 三〇七頁	一・[illegible]〇	・二〇
死線を越えて(中)太陽を射るもの	賀川豊彦著	38版	四六判上製 二四五頁	一・[illegible]〇	・二〇
死線を越えて(下)壁の聲きく時	賀川豊彦著	38版	四六判上製 二七七頁	一・〇〇	・二〇
果樹	水上瀧太郎著	4版	四六判上製 四二五頁	二・〇〇	・二四
怪談全集(現代篇)	田中貢太郎著	16版	四六判並製 五四一頁	一・五〇	・一八

書名	著者	版	體裁・頁數	定價・送料
怪談全集(歴史篇)	田中貢太郎著	18版	四六判並製 五五八頁	一・五〇 ・一八
劍俠受難	國枝史郎著	7版	四六判並製 二三〇頁	一・〇〇 ・一八
奇談全集(現代篇)	田中貢太郎著	10版	四六判並製 五〇〇頁	一・五〇 ・二〇
奇談全集(歴史篇)	田中貢太郎著	10版	四六判並製 五〇〇頁	一・五〇 ・二〇
昭和新集	泉鏡花著	6版	四六判上製 七一五頁	二・八〇 ・二四
赤穗浪士(上巻)	大佛次郎著	112版	四六判上製 五九二頁	一・五〇 ・二四
赤穗浪士(中巻)	大佛次郎著	102版	四六判上製 五五四頁	一・五〇 ・二四
赤穗浪士(下巻)	大佛次郎著	100版	四六判上製 三五二頁	一・五〇 ・二四
ごろつき船(上)	大佛次郎著	40版	四六判上製 五六九頁	一・八〇 ・二四
ごろつき船(下)	大佛次郎著	30版	四六判上製 六三〇頁	二・〇〇 ・二四
からす組(前)	大佛次郎著	20版	四六判上製 四三六頁	一・五〇 ・二二
からす組(後)	大佛次郎著	20版	四六判上製 四六九頁	一・五〇 ・二二
蓼喰ふ蟲	谷崎潤一郎著	5版	菊判上製 三九一頁	二・五〇 ・二四
愛の十字街	宮地嘉六著	15版	四六判上製 四六八頁	一・五〇 ・二二

書名	著者	版	體裁・頁數	定價・送料
戰影	水野廣德著	6版	四六判上製 四〇九頁	二・八〇 ・二四
毆る	平林たい子著	6版	四六判並製 三四四頁	一・五〇 ・二〇
鐵	岩藤雪夫著	7版	四六判並製 三七八頁	一・五〇 ・二〇
惡漢と風景	前田河廣一郎著	4版	四六判並製 三二五頁	一・二〇 ・一八
アパートの女達と僕と	龍膽寺雄著	新刊	四六判上製 五六〇頁	二・〇〇 ・二四
(7) 戯曲				
愛慾	武者小路實篤著	21版	四六判上製 二七二頁	一・六〇 ・一八
ある心の影	正宗白鳥著	4版	四六判上製 二八六頁	一・六〇 ・一八
安土の春	正宗白鳥著	5版	四六判上製 一九七頁	一・三〇 ・一六
歡迎されぬ男	正宗白鳥著	5版	四六判上製 二六二頁	一・五〇 ・一八
嬰兒殺し	山本有三著	10版	四六判上製 五〇八頁	二・〇〇 ・二〇
戀愛病患者	菊池寛著	14版	四六判上製 二七六頁	一・五〇 ・一八
愛憎篇	長田秀雄著	4版	四六判上製 二六六頁	一・六〇 ・一八
愛すればこそ	谷崎潤一郎著	106版	四六判上製 二八二頁	一・六〇 ・一八

愛なき人々	谷崎潤一郎著	35版	四六判上製 三四四頁	二・〇〇	・二〇
森有禮	小山内薫著	4版	四六判上製 二〇〇頁	一・三〇	・一八
麺麭屋文六の思案	岸田國士著	4版	四六判上製 二一六頁	一・五〇	・一八
江戸ッ子の死	岡本綺堂著	4版	四六判上製 三三二頁	一・八〇	・二〇
何が彼女をそうさせたか？	藤森成吉著	50版	四六判並製 一六〇頁	・五〇	・一四
縮刷廉價版 愛すればこそ 愛なき人々	谷崎潤一郎著	27版	四六判並製 二六八頁	一・〇〇	・一六
生きて行く	廣津和郎著	4版	四六判上製 二二四頁	一・五〇	・一八
鼠小僧次郎吉 桃中軒雲右衛門	眞山青果著	4版	四六判上製 三二六頁	一・八〇	・二〇
橘・おらんだ人形	池谷信三郎著	4版	四六判並製 四一六頁	一・八〇	・一八
西郷と大久保	山本有三著	5版	四六判上製 二六〇頁	一・五〇	・一八
日蓮	武者小路實篤著	5版	四六判上製 二五九頁	一・二〇	・二〇

（8）飜譯（小説・戯曲）

血と砂	イバニエス著 鈴木厚譯	10版	四六判上製 五三八頁	二・六〇	・二二
鬼火の踊り	ウヨルヴユ・サンド著 田沼利男譯	4版	四六判上製 二四四頁	一・八〇	・一八
みつけもの	ビルドラック著 鈴木斐子譯	3版	四六判上製 二二四頁	一・五〇	・一八
一週間	ロベイデンスキイ著 池谷信三郎譯	4版	四六判上製 三一五頁	一・八〇	・一八
運命のヂユード	トマス・ハイデイ著 内多精一譯	4版	四六判上製 七〇八頁	三・二〇	・二四
義人ジミー	アプトン・シンクレア著 前田河廣一郎譯	4版	四六判上製 四五〇頁	二・〇〇	・二〇
寡婦マルタ	オルゼシユコ著 濟見陸郎譯	4版	四六判並製 二二四頁	一・〇〇	・一六
クリッペン事件	フイルソン・ヤング編 村上常太郎譯	3版	四六判上製 三四六頁	二・〇〇	・二〇
空氣饅頭	ペ・ロマショーフ著 昇曙夢譯	4版	四六判上製 一八〇頁	一・二〇	・一八
ボストン	アプトン・シンクレア著 前田河廣一郎譯	11版	四六判並製 四七〇頁	一・五〇	・二二
ゾラ叢書 獣人	エミル・ゾラ著 三上於菟吉譯	新刊	四六判上製 五五二頁	二・〇〇	・二二
ゾラ叢書 アベ・ムウレの罪	エミル・ゾラ著 松本泰譯	新刊	四六判上製 四二八頁	二・〇〇	・二二
禁行 ドストイエフスキイ書簡集	笠間杲雄譯	新刊	四六判上製 二五八頁	一・五〇	・二〇

（9）詩歌

歌集 屋上の土	古泉千樫著	3版	四六判 三九八頁	二・五〇	・二四
勞農ロシア詩集	尾瀬敬止編譯	5版	四六判上製 二九〇頁	二・〇〇	・一八

詩集 亂舞する焰	加藤一夫著	4版	菊半截上製 三〇八頁	二・〇〇	・一二
霧島の歌	與謝野寛 與謝野晶子 共著	新刊	四六判上製 二三五頁	一・八〇	・一八
わが最終歌集	岡本かの子著	新刊	四六判上製 四一五頁	二・五〇	・二二
牝鷄の視野	深尾須磨子著	新刊	四六判上製 二五六頁	二・〇〇	・二三

(10) 隨筆・紀行

庭を造る人	室生犀星著	4版	四六判上製 三四〇頁	二・〇〇	・二三
北郊雜記	帝大教授 阿部次郎著	19版	菊半截上製 五〇二頁	一・九〇	・一八
超克	倉田百三著	31版	四六判上製 三九二頁	二・二〇	・二〇
星より星への通路	賀川豊彦著	49版	四六判上製 三七八頁	二・〇〇	・二〇
樹木とその葉	若山牧水著	4版	四六判上製 三六七頁	二・〇〇	・二三
南蠻更紗	文學博士 新村出著	18版	四六判上製 四〇〇頁	二・五〇	・二〇
先驅者の言葉	野口米次郎著	4版	四六判上製 三二〇頁	一・八〇	・一六
坐る人間の評論	野口米次郎著	4版	四六判上製 二一八頁	二・〇〇	・一八
溪仙八十一話	冨田溪仙著 下店靜市編	4版	菊判上製 三〇二頁	三・〇〇	・二六
言葉・言葉・言葉	岸田國士著	5版	四六判上製 二五〇頁	一・八〇	・一八
幽祕記	文學博士 幸田露伴著	5版	菊判上製 三四六頁	二・五〇	・二四
龍姿蛇姿	文學博士 幸田露伴著	4版	四六判上製 三二八頁	二・五〇	・二〇
鶚軒遊戲	醫學博士 土肥慶藏著	3版	四六判上製 四六〇頁	三・〇〇	・二六
からたちの實	藤原義江著	6版	四六判上製 二五六頁	一・八〇	・二〇
樂天囚人	堺利彦著	5版	四六判並製 一五三頁	・五〇	・一六
最後の日記	有島武郎著	6版	四六判上製 一三一頁 其他五二頁	二・〇〇	・二〇
當なし行脚	堺利彦著	6版	四六判並製 一四〇頁	・五〇	・一四
山行	槇有恒著	6版	菊判上製 二七二頁	三・二〇	・二二
オリンピアへの旅	野口源三郎著	4版	四六判上製 四〇八頁	二・五〇	・二〇
印象と傾向	室伏高信著	3版	四六判上製 四三〇頁	二・〇〇	・二〇
支那游記	芥川龍之介著	19版	四六判上製 二七六頁	二・〇〇	・二二
雲水遍路	賀川豊彦著	14版	四六判上製 五二六頁	三・〇〇	・二六
在歐通信	帝大教授 河合榮治郎著	5版	四六判上製 三二二頁	二・〇〇	・一八

書名	著者	版	體裁	定價・送料
天馬の脚	室生犀星著	4版	四六判上製 四七二頁	一・五〇 ・二四
外遊心境	土岐善麿著	4版	ノート判 二五〇頁	二・五〇 ・二四
雲島紀行	吉田絃二郎著	7版	四六判上製 二八六頁	一・五〇 ・二二
隨緣抄	古泉千樫著	3版	四六判上製 五九二頁	二・八〇 ・二四
文人畫概論	文學博士 瀧精一著	切品	菊判上製 本文六九頁 繪畫一一五	二・〇〇 ・二〇
美術史論集 表現と背景	板垣鷹穗著	3版	菊判上製 一九八頁	三・八〇 ・二二
圖畫教育論	岸田劉生著	4版	菊判上製 一二八頁	三・五〇 ・二二
太陽を慕ふ者	矢代幸雄著	6版	四六判上製 二一四頁	一・五〇 ・一八
支那南北記	醫學博士 木下杢太郎著	8版	四六判上製 五八六頁	三・〇〇 ・二四

(12) 歷史・傳記（人物評傳 自叙傳）

書名	著者	版	體裁	定價・送料
大正大震火災誌	改造社編	3版	四六倍上製 八六四頁	一五・〇〇 内・四五
ツタンカーメン生涯と時代	ビシャラ・ナハス著 高瀨毅譯	4版	四六判上製 一六二頁	一・八〇 ・一六
近世名匠列傳	村松梢風著	4版	四六判上製 三六六頁	二・三〇 ・二〇
改版 レーニンとトロツキイ	山川均著	11版	四六判上製 二六八頁	一・五〇 ・一八
自叙傳	大杉榮著	24版	四六判上製 三四四頁	一・〇〇 ・二〇
蒲生氏郷 平將門	文學博士 幸田露伴著	7版	菊判上製 二六二頁	二・〇〇 ・二二
賴朝・爲朝	文學博士 幸田露伴著	5版	菊判上製 二五八頁	二・〇〇 ・二〇
ジャン・ジョレス	柳澤健著	3版	四六判上製 二三二頁	一・五〇 ・一八
堺利彦傳	堺利彦著	5版	四六判上製 三四四頁	一・九〇 ・二〇
ヘンリー・フォード —人及びその事業	有川治助著	54版	四六判並製 三二六頁	一・〇〇 ・一八
天狗騷ぎ	橫瀨夜雨著	新刊	四六判上製 六八二頁	三・五〇 ・二八
漱石の思ひ出	夏目鏡子述 松岡讓筆錄	4版	四六判上製 五一三頁	二・〇〇 ・二四
ハーバート・フーバー 大統領となるまで	加藤三郎補譯	20版	四六判並製 四二五頁	一・〇〇 ・一八
啄木を繞る人々	吉田孤羊著	26版	四六判上製 頁	一・〇〇 ・二二
ジョン・ワナメーカ	有川治助著	50版	四六判並製 四一七頁	一・五〇 ・二二
マーシャル・フイールド	加藤三郎譯補	20版	四六判並製 三五四頁	一・五〇 ・二二
西鄉南洲先生傳	南洲神社五十年祭讃會編	20版	菊判上製 二五三頁	一・五〇 ・二二
アルセエヌ・リユパン	モオリス・ルブラン著 佐々木茂索譯	20版	四六判上製 六六四頁	一・五〇 ・二四

(13) 童話

書名	著者	版	體裁	定價・送料
ピノチオ	佐藤春夫著	6版	四六判上製 二九六頁	一・八〇 ・一八
蝗の大旅行	佐藤春夫著	3版	菊判上製 二八六頁	三・五〇 ・二二
三つの寶	芥川龍之介著	1版	菊判上製 一六二頁	五・〇〇 ・三〇

新刊・近刊

書名	著者		體裁	定價・送料
維新農民蜂起譚	小野武夫著	新刊	菊判上製 四五〇頁	三・八〇 ・二四
琅玕記	新村出著	新刊	菊判上製 七〇〇頁	三・五〇 ・二六
農村問題講話	中澤辨次郎著	新刊	四六判上製 四六八頁	一・八〇 ・二二
濁流に泳ぐ	麻生久著	新刊	四六判並製 二七四頁	一・〇〇 ・二〇
諸民族の藝術	文學博士 松本亦太郎新	新刊	菊判上製 六二八頁	七・〇〇 ・三六
改訂增補 西陣研究	經濟學博士 本庄榮治郎著	新刊	菊判上製 三九八頁	三・五〇 ・二四
愛染地獄	今東光著	新刊	四六判上製 七一四頁	二・五〇 ・二二
孤島の鬼	江戸川亂歩著	新刊	四六判並製 三三二頁	一・〇〇 ・二〇
寒川鼠骨集	寒川鼠骨著	近刊	四六判並製 七五四頁	一・五〇 ・二二

書名	著者		體裁	定價・送料
恥以上	倉田百三著	新刊	四六判上製 四四六頁	二・〇〇 ・二二
支那	前田河廣一郎著	近刊	四六判上製 六五六頁	二・五〇 ・二四
ボストン(下)	アプトン・シンクレア著 前田河廣一郎譯	近刊	四六判並製 四八三頁	一・五〇 ・二二

新鋭文學叢書 定價三十錢 四六判各册 約二五〇頁

書名	著者	
放浪時代	龍膽寺雄著	新刊
ボール紙の皇帝萬歳	久野豐彦著	新刊
隕石の寢床	中村正常著	新刊
なつかしき現實	井伏鱒二著	新刊
僞だらけの歌	藤澤桓夫著	新刊
反逆の呂律	武田麟太郎著	新刊
情報	立野信之著	新刊
浮動する地價	黒島傳治著	新刊
耕地	平林たい子著	新刊
屍の海	岩藤雪夫著	新刊
鬪ひ	中本たか子著	新刊
放浪記	林芙美子著	新刊
正子とその職業	岡田禎子著	新刊
ブルジョア	芹澤光治良著	新刊
研究室挿話	窪川いね子著	新刊
不器用な天使	堀辰雄著	新刊

改造文庫

布裝上製
百頁拾錢

□此の文庫は、內容嚴選と最低の廉價とを以て第一義とし、專ら大衆普及を目的として刊行す。
□此文庫に收容するものは、東西古今百般の書に亙り、校訂、註釋、飜譯、總て典據たるべきを期す。
□此文庫は、社會、經濟、政治、哲學、思想、歷史、文學、藝術　美術等百般に及ぶ。
□表紙上の番號は單に發行順を示すものなれど、將來檢索上の便宜を考慮に容れて之を示す。
□一冊の分量は約百頁以上五百頁とし定價は約百頁を單位として拾錢としその冊子の頁に應じて二十錢、三十錢、四十錢、五十錢とす。但、地圖附錄等挿入の場合は、必らずしもこの例に依らず。
□表紙意匠中、1は十錢を、2は二十錢を、3は三十錢を示す。以下之に倣ふ。
□定價及び送料左表の如し。

表紙背の符號	1	2	3	4	5	6	7	8
定價(錢)	一〇	二〇	三〇	四〇	五〇	六〇	七〇	八〇
送料(錢)	二	四	六	八	一〇	一二	一四	一六

改造文庫第一部目錄

第四四篇 近世封建社會の研究　本庄榮治郎著　2
第四五篇 我國近世の農村問題　本庄榮治郎著　3
第四六篇 マルクスの歴史、社會並に國家理論(上卷)　ハインリッヒ・クノー著　廣海森谷横島共譯　(近刊)
第四七篇 マルクスの歴史、社會並に國家理論(下卷)　ハインリッヒ・クノー著　廣海森谷横島共譯　7
第四八篇 マルキシズム國家觀　マックス・アドラー著　山本琴譯　5
第四九篇 マルクス主義經濟學　河上肇著　3
第五〇篇 哲學概説　桑木嚴翼著　3
第五一篇 現代哲學思潮　桑木嚴翼著　3
第五九篇 政治心理學　ウォーラス著　板倉進譯　(近刊)
第六〇篇 唯物史觀概説　ゴルテル著　堺利彦譯　(近刊)
第六一篇 無政府主義と社會主義　プレカアノフ著　百瀨二郎譯　2
第六二篇 財産進化論　ラファルグ著　荒畑寒村譯　2
第六三篇 帝國主義論　レーニン著　岡田宗司譯　(近刊)
第六四篇 帝國主義論　ホブソン著　(近刊)
第六五篇 勞働價値説の擁護　ヒルファディング著　塚本三吉譯　2
第六六篇 經濟地理概論　プレブス・リーグ編　菊川忠雄譯　3

(以下續刊)

改造文庫第二部目錄

第一篇 古事記　澤瀉久孝校訂　(近刊)
第二篇 萬葉集(上卷)　折口信夫校訂　(近刊)
第三篇 萬葉集(下卷)　折口信夫校訂　(近刊)
第四篇 古今集　吉澤義則校註　(近刊)
第五篇 新古今集　吉澤義則校註　(近刊)
第六篇 新譯源氏物語(上卷)　折口信夫校註　(近刊)
第七篇 新譯源氏物語(下卷)　折口信夫校註　(近刊)
第八篇 枕草紙　山岸德平校訂　(近刊)
第九篇 金槐集　幸田露伴校註　(近刊)
第一〇篇 平家物語　(近刊)
第一一篇 雨月物語　山口剛校訂　(近刊)
第一二篇 山家集　齋藤茂吉校註　(近刊)
第一三篇 俳諧七部集　萩原蘿月校訂　3
第一四篇 蕪村七部集　萩原蘿月校訂　2
第一五篇 伊勢物語　久松潛一校訂　(近刊)
第一六篇 神皇正統記　宮地直一校註　3
第一七篇 奥の細道・芭蕉文集　萩原蘿月校訂　3
第一八篇 曾根崎心中・女殺油地獄　黒木勘藏校註　(近刊)
第一九篇 心中天網島・冥途飛脚　黒木勘藏校註　(近刊)
第二〇篇 國姓爺合戰　黒木勘藏校註　(近刊)
第二一篇 槍權三重帷子・夕霧阿波鳴門　黒木勘藏校註　(近刊)
第二二篇 心中重井筒・丹波與作　黒木勘藏校註　(近刊)
第二三篇 山崎與次兵衞壽門松・心中宵庚申　黒木勘藏校註　(近刊)
第二四篇 傾城反魂香　黒木勘藏校註　(近刊)
第二五篇 淀鯉出世瀧德・長町女腹切　黒木勘藏校註　(近刊)
第二六篇 堀川波鼓・博多小女郎波枕　黒木勘藏校註　(近刊)
第二七篇 五十年忌歌念佛・大經師昔暦　黒木勘藏校註　(近刊)
第二八篇 菅原傳受手習鑑・假名手本忠臣藏　黒木勘藏校註　(近刊)
第二九篇 八百屋お七歌祭文・お染久松袂の白絞り　黒木勘藏校註　(近刊)
第三〇篇 伊賀越道中双六・一谷嫩軍記　黒木勘藏校註　(近刊)
第三一篇 大鏡　吉澤義則校註　(近刊)
第三二篇 徒然草　吉澤義則校註　(近刊)
第三三篇 日蓮上人集　(近刊)
第三四篇 親鸞上人集　(近刊)
第三五篇 北村透谷選集　島崎藤村編　1
第三六篇 樋口一葉選集　樋口一葉著　1
第三七篇 平凡　二葉亭主人著　1
第三八篇 子規俳話　正岡子規著　3
第三九篇 子規歌話　正岡子規著　(近刊)
第四〇篇 坊つちやん　夏目漱石著　2
第四一篇 草枕　夏目漱石著　2
第四二篇 それから　夏目漱石著　3
第四三篇 一握の砂・悲しき玩具　石川啄木著　2
第四四篇 我等の一團と彼・雲は天才である　石川啄木著　1

第四五篇 山陰土產その他 島崎藤村著 2
第四六篇 作曲白秋 民謠集 北原白秋著 2
第四七篇 獄中記 オスカア・ワイルド著 神近市子譯 2
第四八篇 厭世家の誕生日 佐藤春夫著 1
第四九篇 日輪 橫光利一著 1
第五〇篇 勞働者の居ない船 葉山嘉樹著 1
第五一篇 海に生くる人々 葉山嘉樹著 2
第五二篇 小公子 バアネット著 若松賤子譯 2
第五三篇 ホワイト・ファング 堺利彥譯 3
第五四篇 はやり唄 小杉天外著 (近刊)
第五五篇 自選歌集 朝の螢 齋藤茂吉著 2
第五六篇 自選歌集 十年 島木赤彥著 (近刊)
第五七篇 自選歌集 川のほとり 古泉千樫著 2
第五八篇 自選歌集 松の芽 中村憲吉著 2
第五九篇 自選歌集 海やまのあひだ 釋迢空著 4
第六〇篇 自選歌集 立春 木下利玄著 2
第六一篇 自選歌集 花樫 北原白秋著 (近刊)
第六二篇 自選歌集 人間往來 與謝野晶子著 2
第六三篇 自選歌集 槻の木 窪田空穗著 2
第六四篇 自選歌集 野原の郭公 若山牧水著 2
第六五篇 自選歌集 原生林 前田夕暮著 3
第六六篇 自選歌集 空を仰ぐ 土岐善麿著 2

第六七篇 作曲白秋 童謠集 北原白秋著 2
第六八篇 作曲白秋 國民歌謠集 北原白秋著 2
第六九篇 作曲白秋 舞踊阿集 北原白秋著 2
第七〇篇 背德者 アンドレ・ジッド著 石川淳譯 2
第七一篇 チェホフ書簡集 內山賢次譯 5
第七六篇 赤彥歌集 齋藤茂吉編 (近刊)
第七七篇 芭蕉遺語集 荻原井泉水校訂 (近刊)
第七八篇 七番日記(上卷) 荻原井泉水校訂 (近刊)
第七九篇 七番日記(下卷) 荻原井泉水校訂 (近刊)
第八〇篇 おらが春 荻原井泉水校訂 (近刊)
第八二篇 新花つみ(蕪村日記) 荻原井泉水編 (近刊)
第八八篇 寡婦マルタ エリイザ・オルゼシュコ著 清見陸郎譯 3
第八九篇 句集虛子 高濱虛子著 6
第九〇篇 井泉水句集 荻原井泉水著 5
第九一篇 サニン アルツィバーセフ著 武林無想庵譯 6
第九二篇 一青年の告白 ジョージ・ムーア著 辻潤譯 3
第九三篇 一週間 リベディンスキー著 池谷信三郎譯 2
第九四篇 室生犀星詩集 室生犀星著 5
第九五篇 千家元麿詩集 千家元麿著 3
第九六篇 橫瀨夜雨詩集 橫瀨夜雨著 5
第九七篇 修禪寺物語 岡本綺堂著 3

第九八篇 少年の悲哀 國木田獨步著 2
第九九篇 運命論者 國木田獨步著 (近刊)
第一〇六篇 佛蘭西家庭童話集 ボーモン夫人著 長松實一譯 3
第一一二篇 奈落の人々 ジャック・ロンドン著 和氣律次郎譯 3
第一一四篇 爭鬪 ジョン・ゴルスワオシイ著 和氣律次郎譯 2
第一一五篇 短篇小說篇(現代物1) 菊池寛著 (近刊)
第一一六篇 短篇小說篇(現代物2) 菊池寛著 4
第一一七篇 短篇小說篇(時代物) 菊池寛著 5
第一一八篇 短篇小說集 菊池寛著 (近刊)
第一一九篇 戲曲篇(現代物) 菊池寛著 5
第一二〇篇 戲曲篇(時代物) 菊池寛著 5
第一二一篇 眞珠夫人 菊池寛著 (近刊)
第一二二篇 慈悲心鳥 菊池寛著 4
第一二四篇 火華 菊池寛著 4
第一三〇篇 第二の接吻 菊池寛著 (近刊)
第一五一篇 ハイネ詩集(1) ハイネ著 生田春月譯 (近刊)
第一五二篇 ハイネ詩集(2) ハイネ著 生田春月譯 (近刊)
第一五三篇 ハイネ詩集(3) ハイネ著 生田春月譯 (近刊)
第一五六篇 洋服簞笥 トーマス・マン著 六笠武生譯 2

(以下續刊)

¥1.20

泡立つしやぼん湧き出る微笑

快適無比の剃ごこち

剃刀で研器を棄れ一枚の刃が半年使へる

バレー自働研安全剃刀

"VALET" Auto-Strop Safety Razor

B型　一・三・五〇以上各種

C型　一・二〇　一・七〇　三・三〇　四・八〇

替刃利用ナイフ（刃一枚附）・八〇

販賣所 取次所　大百貨店著名洋物雜貨金物店等



Athena the Pen

能率第一、實質第一
優良第一の國產品

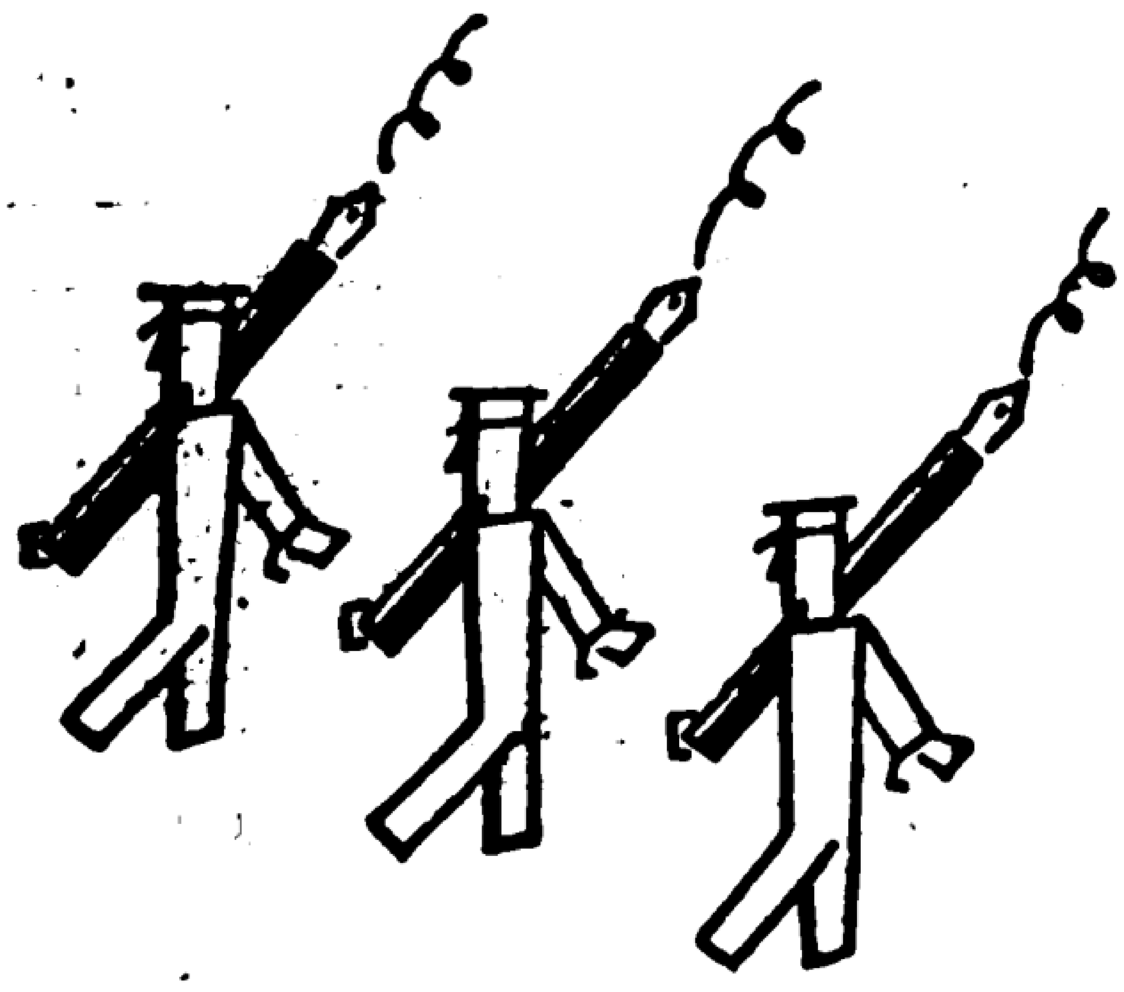
使へば使ふ程書きよくなる

アテナ萬年筆　参圓五拾錢以上

オノト萬年筆　七圓五拾錢以上

萬年筆には國產優良インキアテナを御使用下さい

送料各十八錢（カタログ進呈）

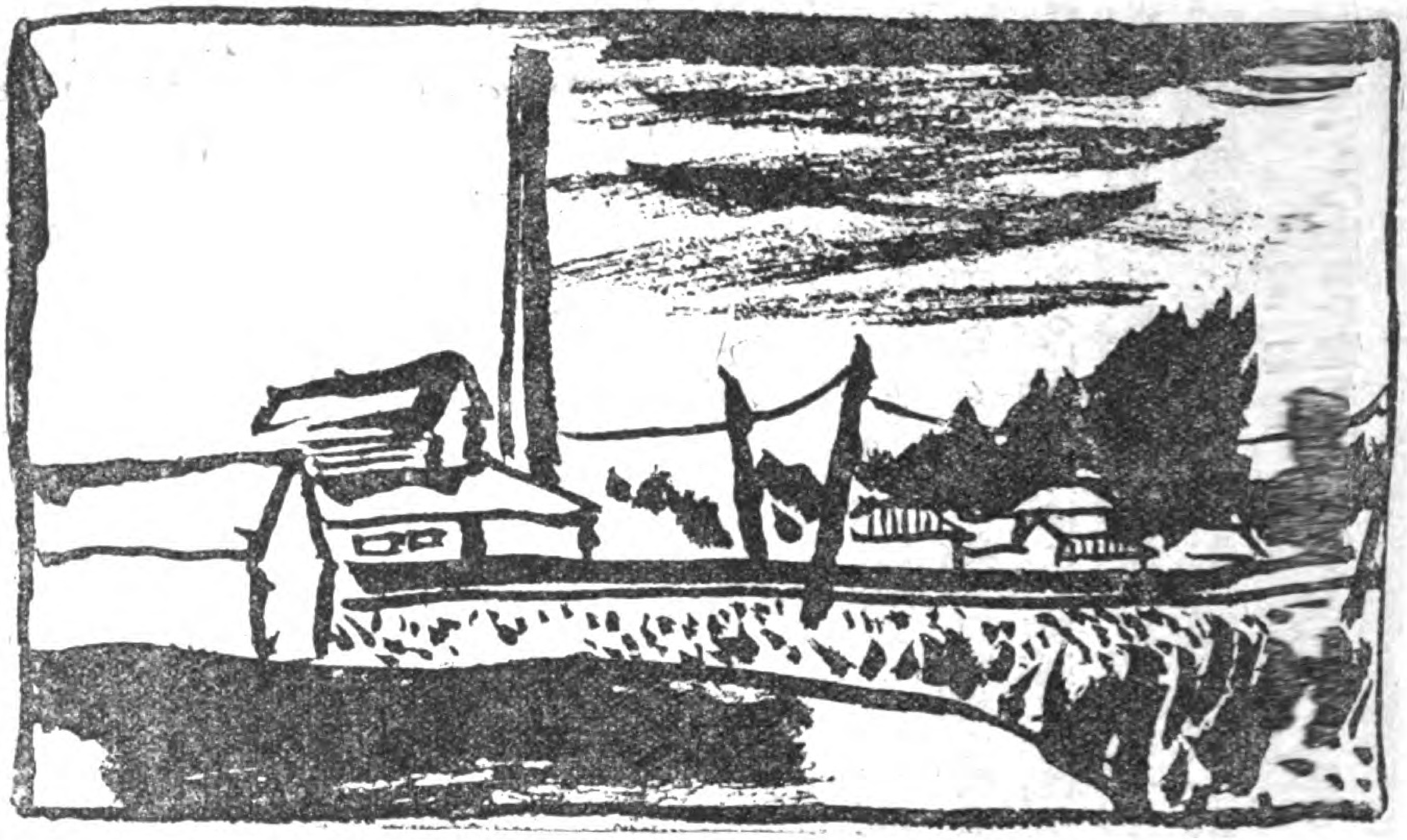


東京日本橋通

丸善株式會社

大阪　神戸　京都　名古屋　横濱　福岡　仙臺　札幌

東京＝神田・芝三田・早稻田・丸ビル



機械

横光利一

初めの間は私は私の家の主人が狂人ではないのかとときどき思つた。觀察してゐるとまだ三つにもならない彼の子供が彼をいやがるからと云つて親父をいやがる法があるかと云つて怒つてゐる。疊の上をよちよち歩いてゐるその子供がぱつたり倒れるといきなり自分の細君を毆りつけながらお前が番をしてゐて子供を倒すと云ふことがあるかと云ふ。見てゐるとまるで喜劇だが本人がそれで正氣だから反對にこれは狂人ではないのかと思ふのだ。少し子供が泣きやむともう直ぐ子供を抱きかかへて部屋の中を馳け廻つてゐる四十男。此の主人はそんなに子供のことばかりにかけてさうかと云ふとさうではなく、凡そ何事にでもそれほどな無邪氣さを持つてゐるので自然に細君が此の家の中心になつて來てゐるのだ。家の中の運轉が細君を中心にして來ると細君系の人々がそれだけのびのびとなつて來るのももつともなことなのだ。從つてどちらかと云ふと主人の方に關係のある私は此の家の仕事のうちで一番人のいやがることばかり

を引き受けねばならぬ結果になつていく。いやな仕事、それは全くいやな仕事で然もそのいやな部分を誰か一人がいつもしてゐなければ家全體の生活が廻らぬと云ふ中心的な部分に私がゐるので實は家の中心が細君にはなく私にあるのだがそんなことを云つたつていやな仕事をする奴は使ひ道のない奴だからこそだとばかり思つてゐる人間の集りだから默つてゐるより仕方がないと思つてゐた。全く使ひ道のない人間と云ふものは誰にも出來かねる箇所だけに不思議に使ひ道のあるもので、此のネームプレート製造所でもいろいろな藥品を使用せねばならぬ仕事の中で私の仕事だけは特に劇藥ばかりで滿ちてゐて、わざわざ使ひ道のない人間を落し込む穴のやうに出來上つてゐるのである。此の穴へ落ち込むと金屬を腐蝕させる鹽化鐵で衣類や皮膚がだんだん役に立たなくなり、臭素の刺戟で咽喉を破壞し夜の睡眠がとれなくなるばかりではなく頭腦の組織が變化して來て視力さへも薄れて來る。こんな危險な穴の中へは有用な人間が落ち込む筈がないのであるが、此の家の主人も若いときに人の出來ないこの仕事を覺え込んだのも恐らく私のやうに使ひ道のない人間だつたからにちがひないのだ。しかし、私とてもいつまでもここで片輪になるために愚圖ついてゐたのでは勿論ない。實は私は九州の造船所から出て來たのだがふと途中の汽車の中で一人の婦人に逢つたのがこの生活の初めなのだ。婦人はもう五十歲あまりになつてゐて主人に死なれ家もなければ子供もないので東京の親戚の所で暫く厄介になつてから下宿屋でも初めるのだと云ふ。それなら私も職でも見つかればあなたの下宿へ厄介になりたいと冗談のつもりで云ふと、それでは自分のこれから行く親戚へ自分といつてそこの仕事を手傳はないかとすすめてくれた。私もまだどこへ勤めるあてとてもないときだしひとつはその婦人の上品な言葉や姿を信用する氣になつてそのままふらりと婦人と一緒にここの仕事場へ流れ込んで來たのである。すると、ここの仕事は初めは見た目は樂だがだんだん藥品が勞働力を根柢から奪つていくと云ふことに氣がついた。それで明日は出やう今日は出やうと思つてゐるうちにふと今迄辛抱したからにはそれではひとつここの仕事の急所を全部覺え込んでからにしやうと云ふ氣にもなつて來て自分で危險な仕事の部分に近づくことに興味を持たうとつとめ出した。ところが私と一緒に働いてゐるここの職人の輕部は私が此の家の仕事の

秘密を盗みに這入つて來たどこかの間者だと思ひ込んだのだ。彼は主人の研究の實驗の隣家から來てゐる男なので何事にでも自由がきくだけにそれだけ主家が第一で、よくある忠實な下僕になりすましてみることが道樂なのだ。彼は私が棚の毒藥を手に取つて眺めてゐるともう眼を光らせて私を見詰めてゐる。私が暗室の前をうろついてゐるともうかたかたと音を立てて自分がここから見てゐるぞと知らせてくれる。全く私にとつては馬鹿馬鹿しいことだが、それでも幹部にしては眞劍なんだから無氣味である。彼にとつては活動寫眞が人生最高の教科書で從つて探偵劇が彼には現實とどこも變らぬものに見えてゐるので、此のふらりと這入つて來た私がさう云ふ彼にはまた好箇の探偵物の材料になつて迫つてゐるのも事實なのだ。殊に幹部は一生此の家に勤める決心なばかりではない。此處の分家としてやがては一人でネームプレート製造所を起さうと思つてゐるだけに自分よりさきに主人の考案した赤色プレート製法の秘密を私に奪はれてしまふことは本望ではないにちがひない。しかし、私にしてみればただ此の仕事を覺え込んでおくだけそれで生涯の活計を立てやうなどとは謀んでゐるのでは決してないのだが、そんなことをやつたつて幹部には分るものでもないし、またたとひ此の仕事を覺え込んで了つたならあるひはひよつとしてそれで生計を立てていかぬとも限らぬし、いづれにしても幹部なんかが何を思はふとただ彼をいらいらさせてみるのも彼に人間修養をさせてやるだけだとぐらゐに思つてをればそれで良ろしい、さう思つた私はまるで幹部を眼中におかずにゐると、その間に彼の私に對する敵意は急速な調子で進んでゐて此の馬鹿がと思つてゐたのも實は馬鹿なればこそこれは案外馬鹿にはならぬと思はしめるやうにまでなつて來た。人間は敵でもないのに人から敵だと思はれることはその期間相手を馬鹿にしてゐられるだけ何となく樂しみなものであるが、その樂しみが實はこちらの空隙になつてゐることにはなかなか氣付かぬもので私が何の氣もなく椅子を動かしたり斷裁機を廻したりしかけると不意に金槌が頭の上から落つて來たり、地金の眞鍮板が積み重つたまま足もとへ崩れて來たり安全なニスとエーテルの混合液のザボンがいつの間にか危險な重クロムサンの酸液と入れ換へられてゐたりしてゐるのが、初めの間はこちらの過失だとばかり思つてゐたのにそれが盡く幹部の爲業だと氣付いたときには考へれば考

へるほどこれは油断をしてゐると生命まで狙はれてゐるのではないかと思はれて來てひやりとさせられるやうにまでなつて來た。殊に輕部は馬鹿は馬鹿でも私よりも先輩で劇藥の調合にかけては腕があり、お茶に入れておいた重クロム酸アンモニアを相手が飲んで死んでも自殺になるぐらゐのことは知つてゐるのだ。私は御飯を食べるときでもそれから當分の間は黄色なものが眼につくとそれが重クロムサンではないかと思はれて箸がその方へ動かなかつたが、私のそんな警戒心も暫くすると自分ながら滑稽になつて來てさう手容く殺されるものなら殺されてもみやうと思ふやうにもなり、自然に輕部のことなどはまた私の頭から去つていつた。

或る日私は仕事場で仕事をしてゐると主婦が來て主人が地金を買ひにいくのだから私も一緒について行つて主人の金錢を絶えず私が持つてゐてくれるやうにと云ふ。それは主人は金錢を持つと殆ど必ず途中で落して了ふので主婦の氣使ひは主人に金錢を渡さぬことが第一であつたのだ。いままでの此の家の悲劇の大部分も實に此の馬鹿げたことばかりなんだがそれにしてもどうしてこんなにここの主人は金錢を落すのか誰にも分らない。落して了つたものはいくら叱つたつて嚇したつて返つて來るものでもなし、それだからつて汗水たらして皆が働いたものを一人の神經の弛みのために盡く水の泡にされて了つてそのまゝ泣き寢入に默つてゐるわけにもいかず、それが一度や二度ならともかく始終持つたら落すと云ふことの方が確實だと云ふのだから此の家の活動も自然に鍛練のされ方が普通の家とはどこか違つて生長して來てゐるにちがひないのだ。いつたい私達は金錢を持つたら落すと云ふ四十男をそんなに想像することは出來ない。譬へば財布を細君が紐でしつかり首から懷へ吊しておいてもそれでも中の金錢だけはちやんといつも落してあると云ふのであるが、それなら主人は金を財布から出すときか入れるときかに落すにちがひないとしてみてもそれにしても第一さう度々落す以上は今度は落すかもしれぬからと三度に一度は出すときや入れるときに氣附く筈だ。それを氣附けば事實はそんなにも落さないのではないかと思はれて考へやうによつてはこれは或ひは金錢の支拂ひを延ばすための細君の手ではないかとも一度は思ふが、しかし間もなくあまりにも變つてゐる主人の擧動のために細君の宣傳もいつの間にか事實だと思つてしま

はねばならぬほど、とにかく、主人は變つてゐる。金を金とも思はぬと云ふ言葉は富者に對する形容だが此處の主人の貧しさは五錢の白銅を握つて錢湯の暖簾をくぐる程度に拘らず、困つてゐるものには自分の家の地金を買ふ金錢まで遣つてしまつて忘れてゐる。から云ふのをこそ昔は仙人と云つたのであらう。しかし、仙人と一緒にゐるものは絶えずはらはらして生きていかねばならぬのだ。家のことを何一つ任かしておけないばかりではない、一人で濟ませる用事も二人がかりで出かけたりその一人のゐるために周圍の者の勞力がどれほど無駄に費されてゐるか分らぬのだが、しかしそれはさうにちがひないとしても此の主人のゐるゐないによつて得意先の此の家に對する人氣の相異は格段の變化を生じて來る。恐らく此處の家は主人のために人から憎まれたことがないにちがひなく主人を縛る細君の締りがたとひ惡評を立てたとしたところでそんなにも好人物の主人が細君に縛られて小さく忍んでゐる樣子と云ふものはまた自然に滑稽な風味があつて喜ばれ勝ちなものでもあり、その細君の睨みの留守に脫兎のごとく脫け出してはすつかり金錢を振り撒いて歸つて來る男と云ふのもこれまた一層の人氣を立てる材料になるばかりなのだ。

そんな風に考へると此の家の中心は矢張り細君にもなく私や輕部にもない自ら主人にあると云はねばならなくなつて來て私の傭人根性が丸出しになり出すのだが、どこから見たつて主人が私には好きなんだから仕樣がない。實際私の家の主人はせいぜい五になつた男の子をそのまま四十に持つて來た所を想像すると浮んで來る。私たちはそんな男を思ふと全く馬鹿馬鹿しくて輕蔑したくなりさうなものにも拘らずそれが見てゐて輕蔑出來ぬと云ふのも、つまりはあんまり自分のいつの間にか成長して來た年齡の醜さが逆に鮮かに浮んで來てその自身の姿に打たれるからだ。こんな自分への反射は私に限らず輕部にだつて常に同じ作用をしてゐたと見えて、後で氣付いたことだが、輕部が私への反感も所詮は此の主人を守らうとする輕部の善良な心の部分の働きからであつたのだ。私が此處の家から放れがたなく感じるのも主人のその此の上もない善良さからであり、輕部が私の頭の上から金槌を落したりするのも主人のその善良さのためだとすると、善良なんて云ふことは昔から案外良い働きをして來なかつたにちがひない。

さてその日主人と私は地金を買ひにいつて戻つて來るとその途中主人は私に今日はから云ふ話があつたと云つて云ふには自分の家の赤色プレートの製法を五萬圓で賣つてくれと云ふのだが賣つて良いものかどうだらうかと訊くので、私もそれには答へられずに默つてゐると赤色プレートもいつまでも誰れにも考案されないものならともかくもう仲間達が必死にこつそり研究してゐるので製法を賣るなら今の中だと云ふ。それもさうだらうと思つても主人の長い苦心の結果の研究を私がとやかく云ふ權利もなしさうかと云つて主人ひとりに負しておいては主人はいつの間にか細君の云ふままになりさうだし、細君と云ふものはまた目さきのことだけより考へないに定つてゐるのを思ふと私もどうかして主人のためになるやうにとそればかりがそれからの不思議に私の興味の中心になつて來た。家にゐても家の中の動きや物品が盡く私の整理を待たねばならぬかのやうに映り出して來て輕部までがまるで私の家來のやうに見えて來たのは良いとしても、暇さへあれば覺えて來た辯士の聲色ばかり唸つてゐる彼の樣子までがうるさくなつた。しかし、それから間もなく反對に輕部の眼がまた激しく私の動作に敏感になつて來て仕事場にゐるときは殆ど私から眼を放さなくなつたのを感じ出した。思ふに輕部は主人の仕事の最近の經過や赤色プレートの特許權に關する話を主婦から聞かされたにちがひないのだが、主婦まで輕部に私を監視せよと云ひつけたのかどうかは私には分らなかつた。しかし、私までが主婦や輕部がいまにもしかするとこつそり主人の仕事の秘密を盜み出して賣るのではないかと思はれて幾分の監視さへする氣持ちになつたところから見てさへも、主婦や輕部が私を同樣に疑ふ氣持ちはそんなに誤魔化してゐられるものではない。そこで私もそれらの疑ひを抱く視線に見られると不快は不快でも何となく面白くひとつどうすることか鬪々しくこちらも逆に監視を續けてやらうと云ふ氣になつて來て困り出した。丁度さう云ふときまた主人は私に主人の續けてゐる新しい研究の話をして云ふには、自分は地金を鹽化鐵で腐蝕させずにそのまま黑色を出す方法を長らく研究してゐるのだがいまだに思はしくいかないのでお前も暇なとき自分と一緒にやつてみてくれないかと云ふのである。私はいかに主人がお人好しだからと云つてそんな重大なことを他人に洩して良いものであらうかどうかと思ひながらも、全く私が根から

犠牲されたこのことに對しては感謝をせずにはをれないのだ。
いつたい人と云ふものは信用されて了つたらもうこちらの負けで、だから主人はいつでも周圍の者に勝ち續けてゐるのであらうと一度は思つてみても、さう主人のやうに底拔けな馬鹿さにはなかなかなれるものではなく、そこがつまりは主人の豪いと云ふ理由になるのであらうと思つて私も主人の研究の手助けなら出來るだけのことはさせて貰ひたいと心底から禮を述べたのだが、人に心底から禮を述べさせると云ふことを一度でもしてみたいと思ふやうになつたのもそのときからだ。だが、私の主人は他人にどうかうされやうなどとそんなけちな考へなどはないのだからまた一層私の頭を下げさせるのだ。つまり私は暗示にかかつた信徒みたいに主人の肉體から出て來る光りに射拔かれてしまつたわけだ。奇蹟などと云ふものは向うが奇蹟を行ふのではなく自身の醜さが奇蹟を行ふのにちがひない。それからと云ふものは全く私も輕部のやうに何より主人が第一になり始め、主人を左右してゐる細君の何に彼に反感をさへ感じて來て、どうしてから云ふ婦人が此の立派な主人を獨專して良いものか疑はしくなつたばかりではなく出來ることなら此の主人から細君を追放してみたく思ふことさへときどきあるのを覺へても輕部が私に虐くあたつてくる氣持ちが手にとるやうに分つて來て、彼を見てゐると自然に自分を見てゐるやうでますますたそんなことにまで興味が湧いて來るのである。
或る日主人が私を暗室へ呼び込んだので這入つていくと、アニリンをかけた眞鍮の地金をアルコールランプの上で熱しながらいきなり説明して云ふには、プレートの色を變化させるには何んでも熱するときの變化に一番注意しなければならない、いまは此の地金は紫色をしてゐるがこれが黑褐色となりやがて黑色となるともうすでに此の地金が次の試練の場合に腐化鐵に敗けて役に立たなくなる約束をしてゐるのだから、着色の工夫は總て色の變化の中段においてなさるべきだと敎へておいて、私にその場でバーニングの試驗を出來る限り多くの藥品を使用してやつてみよと云ふ。それからの私は化合物と元素の有機關係を驗べることにますます興味を向けていつたのだが、これは興味を持てば持つほど今迄知らなかつた無機物内の微妙な有機的運動の急所を讀みとることが出來て來て、いかなる小さなことにも機械のやうな法則が係數となつて無數を計つてゐること

に氣附き出した私の唯心的な眼醒めの第一歩となつて來た。しかし輕部は前まで誰も這入ることを許されなかつた暗室の中へ自由に這入り出した私に氣がつくと、私を見る顏色までが變つて來た。あんなに早くから一にも主人二にも主人と思つて來た輕部にも拘らず新參の私に許されたことが彼に許されないのだからいままでの私への彼の警戒も何の役にも立たなくなつたばかりではない、うつかりすると彼の地位さへ私が自由に左右し出すのかもしれぬと思つたにちがゐないのだ。だから私は幾分彼に遠慮すべきだと云ふことぐらゐは分つてゐても何もさういちいち輕部輕部と彼の眼の色ばかりを氣使はねばならぬほどの人でもなし、いつものやうに輕部の奴いつたいいまにどんなことをし出すかとそんなことの方が却つて興味が出て來てなかなか同情なんかする氣にもなれないので、そのまゝ頭から見降ろすやうに知らぬ顏を續けてゐた。すると、よくよく輕部も腹が立つたと見えてあるとき輕部の使つてゐた穴ほぎ用のペルスを私が使はふとすると急に見えなくなつたので君がいまさきまで使つてゐたではないかと云ふと、使つてゐたつてなくなるものはなくなるのだ、なければ見附かるまで自分で搜せば良いではないかと輕部は云ふ。それもさうだと思つて、私はペルスを自分で搜し續けたのだがどうしても見附からないのでそこでふと私は輕部のポケットを見るとそこにちやんとあつたので默つて取り出さうとすると、他人のポケットへ無斷で手を入れる奴があるかと云ふ。他人のポケットはポケットでも此の作業場にゐる間は誰のポケットだつて同じことだと云ふと、さう云ふ考へを持つてゐる奴だからこそ主人の仕事だつて圖々しく盜めるのだと云ふ。いつたい主人の仕事をいつ盜んだか、主人の仕事を手傳ふと云ふことが主人の仕事を盜むことなら君だつて主人の仕事を盜んでゐるのではないかと云つてやると、彼は暫く默つてぶるぶる脣を慄はせゐてから急に私に此の家を出ていけと迫り出した。それで私も出るには出るがもう暫く主人の研究が進んでからでも出ないと主人に對してすまないと云ふと、それなら自分が先きに出ると云ふ。それでは君は主人を困らせるばかりで何にもならぬから私が出るまで出ないやうにするべきだと云つてきかせてやつても、それでも頑固に出ると云ふ。それでは仕方がないから出ていくやう、後は私が二人分を引き受けやうと云ふと、いきなり輕部は傍にあつたカルシユームの粉末

を私の顏に投げつけた。實は私は自分が惡いと云ふとを百も承知をしてるのだが惡と云ふものは何と云つたつて面白い。輕部の善良な心がいらだちながら慄へてゐるのをそんなにもまざまざと眼前で見せつけられると、私はますます舌舐めずりをして落ちついて來るのである。これではならぬと思ひながら輕部の心の少しでも休まるやうにと仕向けてはみるのだが、だいいち初めから輕部を相手にしてゐなかつたのが惡いので彼が怒れば怒るほどこちらが恐わさうにびくびくしていくと云ふことは餘程の人物でなければ出來るものではない。どうもつまらぬ人間ほど相手を怒らすことに骨を折るもので、私も輕部が怒れば怒るほど自分のつまらなさを計つてゐるやうな氣がして來て終ひには自分の感情の置き場がなくなつて來始め、ますます輕部にはどうして良いのか分らなくなつて來た。全く私は此のときほどはつきりと自分を持てあましたことはない。まるで心は肉體と一緒にぴつたりとくつついたまま存在とはよくも名付けたと思へるほど心がただ默々と身體の大きさに從つて存在してゐるだけなのだ。暫くして私はそのまま暗室へ這入ると仕かけておいた着色用のビスムチルを沈澱さすため、試驗管をとつてクロム酸加里を燒き始めたのだが輕部にとつてはそれがまたいけなかつたのだ。私が自由に暗室へ這入ると云ふことがすでに輕部の怨みを買つた原因だつたのにさんざん彼を怒らせた揚げ句の果に直ぐまた私が暗室へ這入つたのだから彼の逆上したのも尤もなことである。彼は暗室のドアを開けると私の首を持つたまま引き摺り出して床の上へ投げつけた。私は投げつけられたやうにして殆ど自分から倒れる氣持ちで倒れたのだが、私のやうなものを困らせるのには全くそのやうに暴力だけよりないのであらう。輕部は私が試驗管の中のクロム酸加里がこぼれたかどうかと見てゐる間、どうしたものか一度周章てて部屋の中を驅け廻つてそれからまた私の前へ戻つて來ると、驅け廻つたことが何の役にもたたなかつたと見えてただ彼は私を睨みつけてゐるだけなのである。しかしもし私が少しでも動けば彼は手持ち無沙汰のため私を蹴りつけるにちがひないと思つたので私はそのままいつまでも倒れてゐたのだが、切迫したいくらかの時間でもいつたい自分は何をしてゐるのだと思つたが最後もうぼんやりと間の脫けて了ふもので、ましてこちらは相手を一度思ふさま怒らさねば駄目だと思つてゐるときとてもう相手もすつか

り氣の向くまで怒つて了つた頃であらうと思ふとつひ私も落ちついてやれやれと云ふ氣になり、どれほど輕部の奴がさきから暴れたのかと思つてあたりを見廻すと一番ひどく暴されてゐるのは私の顏でカルシユウムがざらざらしたまま唇から口へまで這入つてゐるのに氣がついた。が、さて私はいつ起き上つて良いものかそれが分らぬ。私は斷裁機からこぼれて私の鼻の先にうず高く積み上つてゐるアルミニユームの輝いた斷面を眺めながらよくまア三日の間にこれだけの仕事が自分に出來たと驚いた。それで輕部にもうつまらぬ爭ひはやめて早くニユームにザボンを塗らうではないかと云ふと、輕部はもうそんな仕事はしたくはないのだ、それよりお前の顏を磨いてやらうと云つて横たはつてゐる私の顏をアルミニユームの切片で埋め出し、その上から私の頭を洗ふやうに揺り續けるのだが、街に並んだ家々の戸口に番號をつけて貼りつけられたあの小さなネームプレートの山で磨かれてゐる自分の顏を想像すると、所詮は何が恐ろしいと云つて暴力ほど恐るべきものはないと思つた。ニユームの角が揺れる度に顏面の皺や窪んだ骨に刺さつてちくちくするだけではない。乾いたばかりの漆が顏にへばりついたまま放れないのだからやがて顏も腫れ上るにちがひないのだ。私ももうこれだけの暴力を默つて受けてをれば輕部への義務も果したやうに思つたので起き上るとまた暗室の中へ這入らうとした。すると輕部はまた私のその腕を持つて背中へ捻ぢ上げ、窓の傍まで押して來ると私の頭を窓硝子へぶちあてながら顏をガラスの突片で切らうとした。もうやめるであらうと思つてゐるのに豫想とは反對にそんな風にいつまでも追つて來られると、今度はこの暴力がいつまで續くのであらうかと思ひ出していくものだ。しかしさうなればこちらもたとへ惡いとは思つても謝罪する氣なんかはなくなるばかりでいままで隙があれば仲直りをしやうと思つてゐた表情さへますます苦々しくふくれて來て更に次の暴力を誘ふ動因を作り出すだけとなつた。が、實は輕部ももう怒る氣はそんなになくただ仕方がないので怒つてゐるだけだと云ふことは分つてゐるのだ。それで私は輕部が私を窓の傍から劇藥の這入つてゐる腐蝕用のバットの傍まで連れていくと、急に輕部の方へ向き返つて、君は私をそんなに虐めるのは君の勝手だが私がいままで暗室の中でしてゐた實驗は他人のまだしたことのない實驗なので、もし成功すれば主人がどれほど

利益を得るかしれないのだ。君はそれも私にさせないばかりか苦心の末に作つたビスムチルの溶液までこぼしてしまつたではないか、拾へ、と云ふと輕部はそれなら何ぜ自分にもそれを一緒にさせないのだと云ふ。させるもさせないもないだいたい化學方程式さへ讀めない者に實驗を手傳はせたつて邪魔になるだけなのだが、そんなことも云へないので少しいやみだと思つたが暗室へ連れていつて化學方程式を細く書いたノートを見せて說明し、これらの數字に從つて元素を組み合せてはやり直してばかりゐる仕事が君に面白いならこれから何日でも私に變つてして貰はふと云ふと、輕部は初めてそれから私に負け始めた。

輕部との爭ひも當分の間は起らなくなつて私もいくらか前よりゐやすくなると暫くして、仕事が急激に輕部と私に增して來た。ある市役所からその全町のネームプレート五萬枚を十日の間にせよと云つて來たので喜んだのは主婦だが私たちはそのため殆ど夜さへ眠れなくなるのは分つてゐるのだ。それで主人は同業の友人の製作所から手のすいた職人を一人借りて來て私たちの中へ混へながら仕事を始めることにした。初めの間は私たちは何の氣もなくただ仕事の量に壓倒されてしまつて働いてゐたのだが、そのうちに新しく這入つて來た職人の屋敷と云ふ男の樣子が何となく私の注意をひき始めた。無器用な手つきといひ人を見るときの鋭い眼つきといひ職人らしくはしてゐるがこれは職人ではなくてもしかしたら製作所の秘密を盜みに來た廻し者ではないかと思つたのだ。しかし、そんなことを口にでも出して饒舌つたら輕部は屋敷をどんな目に逢はすかしれないので暫く默つて彼の樣子を見てゐることにしてゐると、屋敷の注意はいつも輕部の槽の搖り方にそそがれてゐるのを私は發見した。屋敷の仕事は眞鍮の地金をカセイソーダの溶液中に入れて輕部のすませて來た鹽化鐵の腐蝕藥と一緒にそのとき用ひたニスやグリユーを洗ひ落す役目なのだが、輕部の仕事の部分は此處の製作所の二番目の特長の部分なので、他の製作所では眞似することは出來ないのだからそこに見入る屋敷とて當然なことは當然だとしても疑つてゐるときのこととてその當然なことがなほ一層疑はしい原因になるのである。しかし、輕部は屋敷に見入られてゐるとますます得意になつて調子をとりつつ槽の中の鹽化鐵の溶液を搖するのだ。いつものことなら私を疑り出したやうに輕部とて一應は屋敷を疑はねばならぬ筈だのにそれが事も

あらうか輕部は屋敷に槽の搖り方を說明して、地金に書かれた文字と云ふものはいつもかうしてうつ伏せにするもので、すべて金屬と云ふものは金屬それ自身の重みのために負けるのだから文字以外の部分はそれだけ早く鹽化鐵に侵されて腐つていくのだと誰に聞いたものやらむつかしい口調で說明して屋敷に一度バットを搖すつてみよとまで云ふ。私は初めはひやひやしながら默つて輕部の饒舌つてゐることを聞いてゐたのだがしまひには私は私で誰がどんな仕事の秘密を知らうと知らせるだけ良いのではないかと思ひ出し、それからはもう屋敷への警戒もしないことに定めて了つたが、すべて秘密と云ふものはその部分に働く者の慢心から洩れるのだと氣がついたのはそのときの何よりの私の收穫であつたであらう。それにしても輕部がそんなにうまく秘密を饒舌つたのも彼のそのときの調子に乘つた慢心だけではない、確に彼にそんなにも饒舌らせた屋敷の風丰が輕部の心をそのとき浮き上らせてしまつたのにちがひないのだ。屋敷の眼光は鋭いがそれが柔ぐと相手の心を分裂させてしまふ不思議な魅力を持つてゐるのである。その彼の魅力は絶えず私へも言葉を云ふ度に迫つて來るのだが何にせよ私はあまりに急がしくて朝早くから瓦斯で熱した眞鍮へ漆を塗りつけては乾かしたり重クロムサンアンモニアで塗りつめた金屬板を日光に曝して感光させたりアニリンをかけてみたり、その他バーニングから炭とぎからアモアピカルから斷裁までくるくる廻つてし續けねばならぬので屋敷の魅力も何もあつたものではないのである。すると五日目頃の夜中になつてふと私が眼を醒すとまだ夜業を續けてゐた筈の屋敷が暗室から出て來て主婦の部屋の方へ這入つていつた。今頃主婦の部屋へ何の用があるのであらうと思つてゐるうちに惜しいことにはもう私は仕事の疲れで眠つて了つた。翌朝また眼を醒すと私に浮んで來た第一のことは昨夜の屋敷の樣子であつた。しかし、困つたとには考へてゐるうちにそれは私の夢であつたのか現實であつたのか全く分らなくなつて來たことだ。疲れてゐるときには今までとてもときどき私にはそんなことがあつたのでなほ此度の屋敷のことも私の夢かもしれないと思へるのだ。しかし、屋敷が暗室へ這入つた彼の理由は想像出來なくはないが主婦の部屋へ這入つていつた彼の理由は私には分らない。まさか屋敷と主婦とが私たちには分らぬ深い所で前から交渉を持ち續けてゐたとは思へないのだしこれは夢

だと思つてゐる方が確實であらうと思つてゐると、その日の正午になつて不意に主人が細君に夕夜何か變つたことがなかつたかと笑ひながら訊ね出した。すると細君は、お金をとつたのはあなたぐらゐのことはいくら寢坊の私だつて知つてゐるのだ。盗るのならもつと上手にとつて貰ひたいと澄まして云ふと主人は一層大きな聲で面白さうに笑ひ續けた。それでは夕夜主婦の部屋へ這入つていつたのは屋敷ではなく主人だつたのかと氣がついたのだがいくらいつも金錢を持たされないからと云つて夜中自分の細君の枕もとの財布を狙つて忍び込む主人も主人だと思ひながら私もをかしくなり、暗室から出て來たのもそれではあなたかと主人に訊くと、いやそれは知らぬと主人は云ふ。では暗室から出て來たのだけは矢張り屋敷であらうかそれともその部分だけは夢なのであらうかとまた私は迷ひ出した。しかし、主婦の部屋へ這入り込んだ男が屋敷でなくて主人だと云ふことだけは確に現實だつたのだから暗室から出て來た屋敷の姿も全然夢だとばかりも思へなくなつて來て、一度消えた屋敷への疑ひも反對にまただんだん深くすすんで來た。しかし、さう云ふ疑ひと云ふものはひとり疑つてゐたのでは結局自分自身を疑つていくだけなので何の役にもたたなくなるのは分つてゐるのだ。それより直接屋敷に訊ねて見れば分るのだが、もし訊ねてそれが本當に屋敷だつたら屋敷の困るのも定つてゐる。此の場合私が屋敷を困らしてみたところで別に私の得になるではなしと云つて捨てゝおくには事件は興味があり過ぎて惜しいのだ。だいいち暗室の中には私の苦心を重ねた蒼鉛と硅酸ジルコニウムの化合物や、主人の得意とする無定形セレニウムの赤色塗の秘法が化學方程式となつて隱されてゐるのである。それを知られてしまへば此處の製作所にとつては莫大な損失であるばかりではない、私にしたつていままでの秘密は秘密ではなくなつて生活の面白さがなくなるのだ。向うが秘密を盗まふとするならこちらはそれを隱したつてかまはぬであらう。と思ふと私は屋敷を一途に賊のやうに疑つていつてみやうと決心した。前には私は輕部からそのやうに疑はれたのだが今度は自分が他人を疑ふ番になつたのを感じると、あのとき輕部をその間馬鹿にしてゐた面白さを思ひ出してやがては私も屋敷に絶えずあんな面白さを感じさすのであらうかとそんなことまで考へながら、一度は人から馬鹿にされてもみたければとも思ひ直したり

していよいよ屋敷へ注意をそそいでいつた。ところが屋敷は屋敷で私の眼が光り出したと氣附いたのであらうか、それから殆ど私と視線を合さなくてすませる方向ばかりに向き始めた。あまり今から窮屈な思ひをさせては却つて今の中に屋敷を逃がしてしまひさうだしするので、なるだけのんきにしなければならぬと柔いでみるのだが眼と云ふものは不思議なもので、同じ認識の高さでうろついてゐる視線と云ふものは一度合すると底まで同時に貫き合ふのだ。そこで私はアモアピカルで眞鍮を磨きながらよもやまの話をすすめ、眼だけで彼にも方程式は盗んだかと訊いてみると向うは向うでまだまだと應へるかのやうに光つて來る。それでは早く盗めば良いではないかと云ふとお前にそれを知られては時間がかかつてしやうがないと云ふ。ところが俺の方程式は今の所まだ間違ひだらけで盗つたつて何の役にも立たぬぞといふとそれなら俺が見て直してやらうと云ふ。さう云ふ風に暫く屋敷と私は仕事をしながら私自身の頭の中で默つて會話を續けてゐるうちにだんだん私は一家のうちの誰よりも屋敷に親しみを感じ出した。前に輕部を有頂點にさせて秘密を饒舌らせてしまつた彼の魅力が私へも次第に乘り移つて來始めたのだ。私は屋敷と新聞を分け合つて讀んでゐても共通の話題になると意見がいつも一致して進んでいく。化學の話になつても理解の速度や遲度が拮抗しながら滑めらかに進つていく。政治に關する見識でも社會に對する希望でも同じである。ただ私と彼との相違してゐる所は他人の發明を盗み込まふとする不道德な行爲に關しての見解だけだ。だが、それとて彼には彼の解釋の仕方があつて發明方法を盗むと云ふことは文化の進歩にとつては別に不道德なことではないと思つてゐるにちがひない。實際、方法を盗むと云ふことは盗まぬ者より良い行爲をしてゐるのかもしれぬのだ。現に主人の發明方法を暗室の中で隱さうと努力してゐる私と盗まふと努力してゐる屋敷とを比較してみると屋敷の行爲の方がそれだけ社會にとつては役立つことをしてゐる結果になつていく。それを思ふとさうしてそんな風に私に思はしめて來た屋敷を思ふと、なほますます私には屋敷が親しく見え出すのだが、さうかと云つて私は主人の創始した無定形セレニウムに關する染色方法だけは知らしたくはないのである。それ故絶えず一番屋敷と仲良くなつた私が屋敷の邪魔もまた自然に誰より一番し續けてゐるわけにもなつてゐるの

だ。

あるとき私は屋敷に自分がここへ這入つて來た當時輕部から間者だと疑はれて危險な目に逢はされたことを話してみた。すると屋敷はそれなら輕部が自分にさう云ふことをまだしない所から察すると多分君を疑つて懲り懲りしたからであらうと笑ひながら云つて、しかしそれだから君は僕を早くから疑ふ習慣をつけたのだと彼は揶揄つた。それでは君は私から疑はれたとそれほど早く氣附くからには君も這入つて來るなり私から疑はれることに對してそれほど警戒する練習が出來てゐたわけだと私が云ふと、それはさうだと彼は云つた。しかし、彼がそれはさうだと云つたのは自分は方法を盗みに來たのが目的だと云つたのと同樣なのにも拘らず、それをさう云ふ大膽さには私とて驚かざるを得ないのだ。もしかすると彼は私を見拔いてゐて、彼がさう云へば私は驚いて了つて彼を忽ち尊敬するにちがひないと思つてゐるのではないかと思はれて、此奴、と暫く屋敷を見詰めてゐたのだが、屋敷は屋敷でもう次の表情に移つて了つて上から逆に冠さつて來ながら、こんな製作所へかう云ふ風に這入つて來るとよく自分たちは腹に一物あつての仕事のやうに思はれ勝ちなものであるが君も勿論知つてのとほりそんなことなんかなかなかわれわれには出來るものではなく、しかし辯解がましいことを云ひ出してはこれはまた一層をかしくなつて困るので仕方がないから人々の思ふやうに思はせて働くばかりだと云つて、一番困るのは君のやうに痛くもない所を刺して來る眼つきの人のゐることだと私をひやかした。さう云はれると私だつてもう彼から痛い所を刺されてゐるので彼も丁度いつも今の私のやうに私から絶えずちくちくやられたのであらうと同情しながら、さう云ふことをいつも云つてゐなければならぬ仕事なんかさぞ面白くはなからうと私が云ふと、屋敷は急に雁首を立てたやうに私を見詰めてからふッふと笑つて自分の顏を濁してしまつた。それから私はもう屋敷が何を謀んでゐやうと捨てておいた。多分屋敷ほどの男のことだから他人の家の暗室へ一度這入れば見る必要のある重要なことはすつかり見て了つたにちがひないのだし、見て了つた以上は殺害することも出來ない限り見られ損になるだけでどうしやうも追つつくものではないのである。私としてはただ今はかう云ふ優れた男と偶然こんな所で出逢つたと云ふことを寧ろ感謝すべきなのであらう。いや、

それより私も彼のやうに出來得る限り主人の愛情を利用して今の中に仕事の秘密を盗み込んでしまう方が良いのであらうとまで思ひ出した。それで私は彼にあるときもう自分もここに長くゐるつもりはないのだがここを出てからどこか良い口はないかと訊ねてみた。すると彼はそれは自分の訊ねたいことだがそんなことまで君と自分とが似てゐるやうでは君だつて豪さうなことも云つてゐられないではないかと云ふ。それで私は君がさう云ふのも尤もだがこれは何も君をひつかけてとやからうと君の心理を捆り出すためではなく、却つて私は君を尊敬してゐるのでこれから實は弟子にでもして貰ふつもりで頼むのだと云ふと、弟子かと彼は一言いつて輕蔑したやうに苦笑してゐたが、俄に眞面目になると一度私に、周圍が一町四方全く草木の枯れてゐる鹽化鐵の工場へ行つて見て來るやう萬事がそれからだと云ふ。何がそれからなのか私には分らないが屋敷が私を見た最初から私を馬鹿にしてゐた彼の態度の原因がちらりとそこから見えたやうに思はれると、いつたい此の男はどこまで私を馬鹿にしてゐたのか底が見えなくなつて來てだんだん彼が無氣味になると同時に、それなら屋敷をひとつこちらから輕蔑してかかつてやらうとも思ひ出したのだが、それがなかなか一度彼に魅せられてしまつてからはどうも思ふやうに薬がきかなくただ滑稽になるだけで、優れた男の前に出るとかうもこつちが慘めにぢりぢり修業をさせられるものかと歎かはしくなつてくるばかりなのである。ところが、急がしい市役所の仕事が漸く片附きかけた頃のこと、或る日輕部は急に屋敷を仕事場の斷裁機の下へ捻ぢ伏せてしきりに白狀せよ白狀せよと迫つてゐるのだ。思ふに屋敷はこつそり暗室へ這入つたところを輕部に見附けられたのであらうが私が仕事場へ這入つていつたときは丁度輕部が押しつけた屋敷の上へ馬乗りになつて後頭部を殴りつけてゐるところであつた。とうとうやられたなと私は思つたが別に屋敷を助けてやらうと云ふ氣が起らないばかりではない。日頃尊敬してゐた男が暴力に逢ふとどんな態度をとるものかとまるでユダのやうな好奇心が湧いて來て冷膽にぢつと歪む屋敷の顔を眺めてゐた。屋敷は床の上へ流れ出したニスの中へ片頬を浸したまま起き上らうとして慄へてゐるのだが、輕部の膝骨が屋敷の背の捲れあがつた太つた赤裸の兩足を不恰好に床の上で藻掻かせ

てゐるだけなのだ。私は屋敷が輕部に少なからず抵抗してゐるのを見ると馬鹿馬鹿しくなつたがそれより尊敬してゐる男が苦痛のために醜い顏をしてゐるのは心の醜さを表してゐるのと同樣なやうに思はれて不快になつて困り出した。私が輕部の暴力を腹立たしく感じたのもつまりはわざわざ他人にそんな醜い顏をさせる無識さに對してなので、實は輕部の腕力に對してではない。しかし、輕部は相手が醜い顏をしやうがしまいがそんなことに頓着してゐるものではなくますます上から首を締めつけて毆り續けるのである。私はしまひに默つて他人の苦痛を傍で見てゐると云ふ自身の行爲が正當なものかどうかと疑ひ出したが、そのぢつとしてゐる私の位置から少しでも動いてどちらかへ私が荷擔をすればなほ私の正當さはなくなるやうにも思はれるのだ。それにしてもあれほど醜い顏をし續けながらまだ白狀しない屋敷を思ふといつたい屋敷は暗室から何か確實に盜みとつたのであらうかどうかと思はれて、今度は屋敷の混亂してゐる顏面の皺から彼の秘密を讀みとることに苦心し始めた。彼は突つ伏しながらも時々私の顏を見るのだが彼と視線を合はす度に私は彼へだんだん勢力を與へるためにやにや輕蔑したやうに笑つてやると、彼もそれには參つたらしく急に忿然とし始めて輕部を上から轉がさうとするのだが輕部の強いと云ふことにはどうしやうもない、ただ屋敷は忿然とする度に強くどしどし毆られていくだけなのだ。しかし、私から見てゐると私に笑はれて忿然とするやうな屋敷がだいいちもうぼろを見せたので困つたどん詰りと云ふものは人は動けば動くほどぼろを出すものらしく、屋敷を見ながら笑ふ私もいつの間にかすつかり彼を輕蔑してしまつて笑ふことも出來なくなつたのもつまりは彼が何の役にも立たぬときに動いたからなのだ。それで私は屋敷とて別にわれわれと變つた人物でもなく平凡な男だと知ると、輕部にもう毆ることなんかやめて口で云へば足りるではないかと云つてやると、輕部は私を埋めたときのやうにまた屋敷の頭の上から眞鍮板の切片をひつ冠せて一蹴り蹴りつけながら、立てといふ。屋敷は立ち上るとまだ何か輕部にせられるものと思つたのか恐わさうにぢりぢり後方の壁へ背中をつけて輕部の姿勢を防ぎながら、暗室へ這入つたのは地金の裏のグリユーがカセイソーダでは取れなかつたからアンモニアを搜しにいつたのだと早口に云ふ。しかし、アンモニアが入用なら何ぜ云はぬか、

ネームプレート製作所にとつて暗室ほど大切な所はないことぐらゐ誰だつて知つてゐるではないかと云つてまた輕部は毆り出した。私は屋敷の辯解が出鱈目だとは分つてゐたが毆る輕部の掌の音があまり激しいのでもう毆るのだけはやめるが良いと云ふと、輕部は急に私の方を振り返つて、それでは二人は共謀かと云ふ。だいたい共謀かどうかから云ふことは考へれば分るではないかと私は云はふとしてふと考へると、なるほどこれは共謀だと思はれないことはないばかりではなくひよつとすると事實は共謀でなくとも共謀と同じ行爲であることに氣がついた。全く屋敷に悠々と暗室へなど入れさしておいて主人の仕事の秘密を盜まぬ自身の方が却つて惡い行爲をしてゐると思つてゐる私である以上は共謀と同じ行爲であるにちがひないので、幾分どきりと胸を刺された思ひになりかけたのをわざと圖太く構へ共謀であらうとなからうとそれだけ人を毆ればもう充分であらうと云ふと今度は輕部は私にかかつて來て、私の顎を突き突きそれでは貴樣が屋敷を暗室へ入れたのであらうと云ふ。私は最早や輕部がどんなに私を毆らうとそんなことよりも今まで毆られてゐた屋敷の眼前で彼の罪を引き受けて毆られてやる方が屋敷にこれを見よと云ふかのやうで全く晴れ晴れとして氣持ちが良いのだ。しかし私はさうして輕部に毆られてゐるうちに今度は不思議にも輕部と私とが示し合せて彼に毆らせてでもゐるやうでまるで反對に輕部と私とが共謀して打つた芝居みたいに思はれだすと、却つてこんなにも毆られて平然としてゐては屋敷に共謀だと思はれはすまいかと懸念され始め、ふと屋敷の方を見ると彼は毆られたものが二人であることに滿足したものらしく急に元氣になつて、君、毆れ、と云ふと同時に輕部の背後から彼の頭を續けさまに毆り出した。すると、私も別に腹は立ててはゐないのだが今迄毆られてゐた痛さのために毆り返す運動が愉快になつてぽかぽかと輕部の頭を毆つてみた。輕部は前後から毆り出されると主力を屋敷に向けて彼を蹴りつけやうとしたので私は輕部を背後へ引いて邪魔をすると、その股に屋敷は輕部を押し倒して馬乘りになつてまた毆り續けた。私は屋敷のそんなにも元氣になつたのに驚いたが幾分私が理由もなく毆られたので私が腹を立てて彼と一緒に輕部に向つてかかつていくにちがひないと思つたからであらう。しかし、私はもうそれ以上は輕部に復歸する用もないのでまた默つて毆られてゐる輕部を

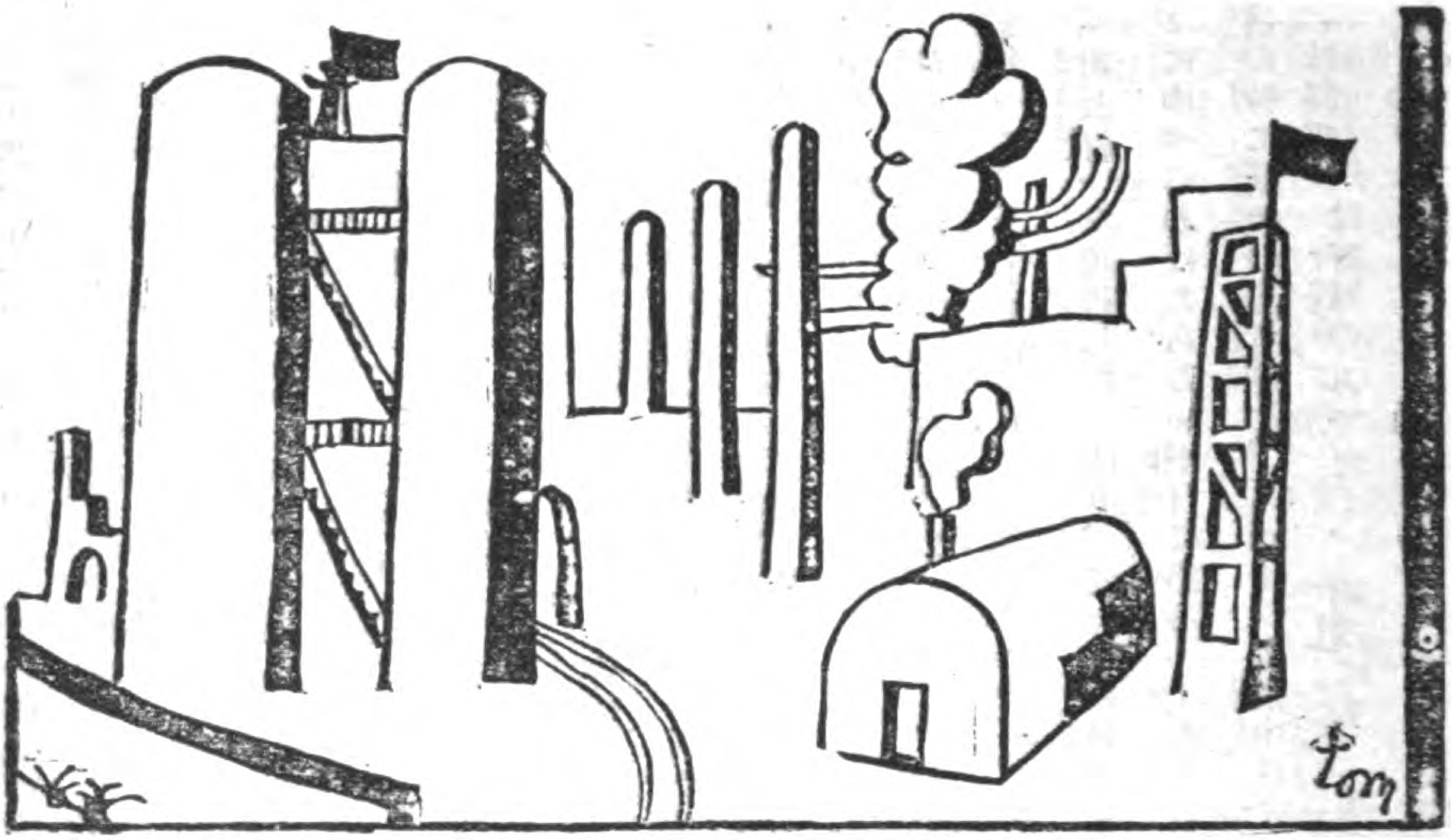
見てゐると輕部は直ぐ苦もなく屋敷をひつくり返して上になつて反對に彼を前より一層激しく毆り出した。さうなると屋敷は一番最初と同じことでどうすることも出來ないのだ。だが、輕部は暫く屋敷を毆つてゐてから私が背後から彼を襲ふだらうと思つたのか急に立上ると私に向つて突つかゝつて來た。輕部と一人同志の毆り合ひなら私が負けるに定つてゐるのでまた私は默つて屋敷の起き上つて來るまで毆らせてゐてやると、起き上つて來た屋敷は不意に輕部を毆らずに私を毆り出した。一人でも困るのに二人一緒に來られては私ももう仕方がないので床の上に倒れたまま二人のするままにさせてやつたが、しかし私はさきからそれほどもいつたい惡行をして來たのであらうか。私は兩腕で頭をかかへてまん丸くなりながら私のしたことが二人から毆られねばならぬそれほども惡いかどうか考へた。なるほど私は事件の起り始めたときから二人にとつては意表外の行爲ばかりをし續けてゐたにちがひない。しかし、私以外の二人も私にとつては意外なことばかりをしたではないか。だいいち私は屋敷から毆られる理由はない。たとへ私が屋敷と一緒に輕部にかからなかつたからとは云へ私をもそんなときにかからせてやらうたと思つた屋敷自身が馬鹿なのだ。さう思つてはみても結局二人から、同時に毆られなかつたのは屋敷だけで一層毆られるべき責任のある筈の彼が一番うまいことをしたのだから私も彼を一度毆り返すぐらゐのことはしても良いのだがとにかくもうそのときはぐつたり私たちは疲れてゐた。實際私たちの此の馬鹿馬鹿しい格鬪も原因は屋敷が暗室へ這入つたことからだとは云へ五萬枚のネームプレートを短時日の間に仕上げた疲勞がより大きな原因になつてゐたに定つてゐるのだ。殊に眞鍮を腐蝕させるときの鹽化鐵の臭素はそれが多量に續いて出れば出るほど神經を疲勞させるばかりではなく人間の理性をさへ混亂させてしまふのだ。その獰本能だけはますます身體の中で明瞭に性質を表して來るのだから此のネームプレート製作所で起る事件に腹を立てたりしてゐてはきりがないのだがそれにしても屋敷に毆られたことだけは相手が屋敷であるだけに私は忘れることは出來ない。私を毆つた屋敷は私にどう云ふ態度をとるであらうか。彼の出方でひとつ彼を赤面させてやらうと思つてゐるといつ終つたとも分らずに終つた事件の後で屋敷が云ふにはどうもあのとき君を毆つたのは惡いと思つたが君をあのとき

殴らなければいつまで輕部に自分が殴られるかもしれなかつたから事件に終りをつけるために君を殴らせて貰つたのだ、赦してくれと云ふ。實際私も氣附かなかつたのだがあのとき一番悪くない私が二人から殴られなかつたなら事件はまだまだ續いてゐたにちがひないのだ。それでは私はまだ矢つ張りこんなときにも屋敷の盗みを守つてゐたのかと思つて苦笑するより仕方がなくなりせつかく屋敷を赤面させてやらうと思つてゐた樂しみも失つてしまつてますます屋敷の優れた智謀に驚かされるばかりとなつたので、私も忌々しくなつて來て屋敷にそんなにうまく君が私を使つたからには暗室の方も定めしうまくいつたのであらうと云ふと、彼は彼で手馴れたもので君までそんなことを云ふやうでは輕部が私を殴るのだつて當然だ、輕部に火を點けたのは君ではないのかと云つて笑つてのけるのだ。なるほどさう云はれれば輕部に火を點けたのは私だと思はれたつて辯解の仕様もないのでこれはひよつとすると屋敷が私を殴つたのも私と輕部が共謀したからだと思つたのではなからうかとも思はれ出し、いつたい本當はどちらがどんな風に私を思つてゐるのかますます私には分らなくなり出した。しかし事實がそんなに不明瞭な中で屋敷も輕部も二人ながらそれぞれ私を疑つてゐると云ふことだけは明瞭なのだ。だが此の私ひとりにとつて明瞭なこともどこまでが現實として明瞭なことなのかどこでどうして計ることが出來るのであらう。それにも拘らず私たちの間には一切が明瞭に分つてゐるかのごとき見えざる機械が絶えず私たちを計つてゐてその計つたままにまた私たちを押し進めてくれてゐるのである。さうして私達は互に疑ひ合ひながらも翌日になれば全部の仕事が出來上つて樂々となることを豫想し、その仕上げた賃金を貰ふことの樂しみのためにもう疲勞も爭ひも忘れてその日の仕事を終へて了ふと、いよいよ翌日となつてまた誰もが全く豫想しなかつた新しい出來事に逢はねばならなかつた。それは主人が私たちの仕上げた製作品とひき換へに受け取つて來た金額全部を歸りの途に落してしまつたことである。全く私たちの夜の目もろくろく眠らずにした勞力は何の役にも立たなくなつたのだ。然も金を受け取りにいつた主人と一緒に私を此の家へ紹介してくれた主人の姉があらかじめ主人が金を落すであらうと豫想してついていつたと云ふのだから、このことだけは豫想に違はず事件は進行してゐたのにちがひないが、ふ

と久し振りに大金を儲けた樂しさからたとへ一瞬の間でも良い儲けた金額を持つてみたいと主人が云つたのでつひ油斷をして同情してしまひ、主人に暫くの間その金を持たしたのだと云ふ。その間に一つの缺陷がこれも確實な機械のやうに働いてゐたのである。勿論落した金額がもう一度出て來るなどと思つてゐる者はゐないから警察へ屆けはしたものの一家はもう青ざめ切つて了つて言葉など云ふものは誰もなく、私たちは私たちで賃金も貰ふことが出來ないのだから一時に疲れが出て來て仕事場に寢そべつたまま動かうともしないのだ。輕部は手當り次第に乾板をぶち挘いて投げつけると急に私に向つて何ぜお前はにやにやしてゐるのかと突きかかつて來た。私は別ににやにやしてゐたと思はないのだがそれがそんなに輕部に見えたのなら或ひは笑つてゐたのかしれない。確にあんまり主人の頭は奇怪だからだ。それは鹽化鐵の長年の作用の結果なのかもしれないと思つでみても頭の缺陷ほど恐るべきものはないではないか。さうしてその主人の缺陷がまた私たちをひき附けてゐて怒ることも出來ない原因になつてゐると云ふことはこれは何と云ふ珍稀な構造の廻り方なのであらう。しかし、私はそんなことを輕部に聞かせてやつても仕方がないので默つてゐると突然私を睨みつけてゐた輕部が手を打つて、よしツ酒を飲まふと云ひ出すと立ち上つた。丁度それは輕部が云はなくても私たちの中の誰かがもう直ぐ云ひ出さねばならない瞬間に偶然輕部が云つただけなので、何の不自然さもなく直ぐすらすらと私たちの氣分は酒の方へ向つていつたのだ。實際さう云ふ時には若者達は酒でも飲むより仕方のないときなのだがそれが此の酒のために屋敷の生命までが亡くならうとは屋敷だつて思はなかつたにちがひない。

その夜私たち三人は仕事場でそのまゝ車座になつて十二時過ぎまで飲み續けたのだが、眼が醒めると三人の中の屋敷が重クロム酸アンモニアの殘つた溶液を水と間違へて土瓶の口から飲んで死んでゐたのである。私は彼を此の家へ送つた製作所の者達が云ふやうに輕部が屋敷を殺したのだとは今でも思はない。勿論私が屋敷の飲んだ重クロム酸アンモニアを使用するべきグリユー引きの部分にその日も働いてゐたとは云へ、彼に酒を飲ましたのが私でない以上は私よりも一應輕部の方がより多く疑はれるのは當然であるが、それにしても輕部が故意に酒を飲ましてまで屋敷を殺さうなどと深い謀みの起らうほど前から私た

ちは酒を飲みたくなつてゐたのではないのである。酒を飲みたくなつたときより私が重クロムサンアンモニアを造つておいた時間の方が前なのだから疑ひ得られるとすると私なのにも拘らず、それが輕部が疑はれたと云ふのも輕部の先づひと目で誰からも暴力を好むことを見破られる逞しい相貌から來てゐるのであらう。しかし、私とても勿論輕部が全然屋敷を殺したのではないと斷言するのではない。私の知り得られる程度のことは彼が屋敷を殺したのではないと云ひ得られるほどのことであるより仕方がないのだ。もともと輕部は屋敷が暗室へ忍び込んだのを見てゐるからは、彼を殺害する以外に彼に秘密を知られぬ方法はないと一度は私のやうに思つたであらうから。さうして私が屋敷を殺害するのなら酒を飲ましておいてその上重クロム酸アンモニアを飲ますより仕方がないと思つたことさへあることから考へても、彼もそのやうに一度は思つたにちがひないであらうから。だが、酒に醉つてゐたのは私と屋敷だけではなくて輕部とて同樣に醉つてゐたのだから彼がその劇藥を屋敷に飲まさうなどとしたのではないであらう。よしたとへ日頃考へてゐたことが無意識に醉の中に働いて彼が屋敷に重クロム酸アンモニアを飲ましたのだとするならそれなら或ひは屋敷にそれを飲ましたのは同樣な理由によつて私かもしれないのだ。いや、全く私とて彼を殺さなかつたとどうして斷言することが出來るであらう。輕部より誰よりもいつも一番屋敷を恐れたものは私ではなかつたか。日夜彼のゐる限り彼の暗室へ忍び込むのを一番注意して眺めてゐたのは私ではなかつたか。いやそれより私の發見しつゝある亞鉛と硅酸ジルコニウムの化合物に關する方程式を盜まれたと思ひ込みいつも一番激しく屋敷を怨んでゐたのは私ではなかつたか。さうだ。もしかすると屋敷を殺害したのは私かもしれぬのだ。私は重クロム酸アンモニアの置き場を一番良く心得てゐたのである。私は醉ひの廻らぬまでは屋敷が明日からどこへいつてどんなことをするのか彼の自由になつてからの行動ばかりが氣になつてならなかつたのである。しかも彼を生かしておいて損をするのは輕部よりも私ではなかつたか。いや、もう私の頭もいつの間にか主人の頭のやうに早や鹽化鐵に侵されて了つてゐるのではなからうか。私はもう私が分らなくなつて來た。私はたゞ近づいて來る機械の鋭い先尖がちりちり私を狙つてゐるのを感じるだけだ。誰かもう私に代つて私を審いてくれ。私が何をして來たかそんなことを私に聞いたつて私の知つてゐやう筈がないのだから。



赤色スポーツ

―「太陽のない街」近況―

徳永直

1

「ボール」

球審がどなる。

「ちえつ、も一本……」

ツバサとマークをいれたユニフォームの投手は、輪轉課の勇次郎といふ若者――弓なりに、ツンと身體が延びると、瞬間、球は直線に飛ぶ――。

「いいとこ」

ハヅンだ聲と一緒に、やんわりミットをふせた捕手は、おそろしく腰がガッちりしてるが、その筈、この青年は、電氣鉛版部のブラシはたきだ。

K印刷工場の空地は、いま正午の休憩時間だ。眞夏の太陽を浴びて、空地をとりまく鋸形の煉瓦建物の陽かげは、一寸だつて落ちてない。

幾十組のキャッチボール、女工達の繩飛びやフットボール、人輪をつくつた相撲——幾百の、若い男女工達は、悲鳴や、怒聲や、笑ひ聲を一緒くたにブチまけながら、直線の太陽の下で、燃えあがる陽炎とともに、はげしく飛び跳ねてゐる。

二千の從業員を有するこの大工場で、最近は目にたつて、ユニフオム姿が増えた。作業服より輕快で、女工にもてた。そして、ユニフオムのマークの幾種もある中で、ツバサとサヾナミが、權威をもつてゐた。ツバサは、輪轉、平版、ミーレー、平臺、其他印刷諸部門及び附屬工場を代表し、サヾナミは、活版、寫眞、凸版、モノタイプ其他整版諸部門を代表したオール・チームであつた。

秋の試合が近づいてゐた。サヾナミは、春の「關東實業野球大會」に、オールK印として出場したが、ツバサは、九月の「社長杯」を獲得しない限り、またこの秋にも出場權をサヾナミにゆづらねばならない羽目にある——かうした事實が、從業員の特に精鋭の若者達を、スポーツに熱中させた。

「社長杯」は野球のみでなく、相撲にも、柔道にも、それから、將棋クラブにも、釣遊會にもあつた。K印刷會社は、これらのために一昨年來、百坪の建物を「太陽のない街」の長屋部落に建てゝくれたのだ。

「いくぞ」

ジツトリ汗の滲んだ、荒くれた掌の中から、力の籠つたボールが、直線に飛ぶ。縱に、横に、斜めに、前に、うしろに——若者達の、精氣の一切が、球にこもつて、激しく飛び交つてゐる。

——十二社協定による賃銀の値下、深夜業の割増撤廢、工場協議會における從業員代表の骨抜き、勞働組合員たることの絶對彈壓、健康保險法による功妙な馘首法——一切の新らしい搾取の重壓が——榮ある吾等の「社長杯」——に取り換へられてゐる。二千の從業員の先頭にたつべき青年達は、食後の卅分を、夜を、日曜を——搾られ殘りの一切の精力を、野球、相撲、柔道等々を通じて、「社長杯」に動員されてゐた。

——われらのK印

——われらのサヾナミ

フレ！ フレ！ フレ！

血の氣の多い、若い女工達は、これら有頂天のブルジョアスポーツ闘士のために、頬を赤くして、應援歌を唄つた。
「榮ある社長杯」のために、うれしき彼女の喜悦のために、青年達は、絞められてゆく首輪のなかで夢中だつたのだ。

……………

「一寸待つてくれ、影山」
　食堂から、飯粒を嚙み嚙み飛び出してきた喜イ公は、呼びとめられて、慌てて振りかへつた。
「一寸、相談があるンだが……」
　呼び止めた男は四邊を見廻しながら、低い聲で云つた。色の白い、インテリ出らしい坊つちやんのやうな顏立の男は、平臺印刷室の雜役夫で、秘密にもぐつてゐるS勞働のオルグ、狭山と云ふ名だ。
「う――ん、と」
　喜イ公は、マヅい顏をした。ツバサの第一投手であるこの輪轉課の印刷工は、いま投げるつもりで、空地へ向つて飛び出して來たとこなンだ。
「…………」
　狭山は相手の樣子を、シブい顏つきでじつと見てゐた。狭山の家でやる「工場委員會」に獲得されて、まだ間もない青年だが、狭山はこの頑固さうな男に、望をかけてゐた。
「手傳つて貰ひたいことがあるンだが、ダメかね？」
「…………」
　しかし、喜イ公の心は、工場空地に飛んでゐた。二人がたつてゐる廊下の腰板をこえて、第二投手勇次郎が、汗みづくになつて練習してゐるのが、ツイ鼻ツ先に見えてゐる。
「ぢや、いいよ」
　狭山はあきらめた。一人でも欲しいンだが、××な仕事だ、自分達だけでやらう。
「だが、今家の會合には、必ず出てくれよ」
「ん」
　大きな口と、仰向いた鼻、それに太かい頭をガクンとうなづかした喜イ公は、廊下の腰板に手をかけると、一またぎに飛び

越えて、空地の方へ駈け出していつた。

「勇公、代らう」

喜イ公が、グラブを嵌めると、捕手もしまつてかまへた。綱飛びしてゐた女工や、少年工達が寄つてきた。

「たのむよ、喜イちやん」

「いいとこ、一本ね」

狭山は、喜イ公を見送つて、暗い顔をしてゐた。

「會社ぢや、産業合理化で、大量馘首をはじめようとしてるのに……」まるで、かんじんの若者たちは、ブルジョアスポーツで夢中なンだ。

狭山は腕時計を見た。もう十一分だ！　組合から連絡つけてある黨の同志は、××××××、モウすぐに飛び込ンで來る時刻だのに――、大衆は斯も、のンきなものか――。

この十幾棟の工場、二千の從業員中で、S勞働および×の影響下にあるものは、ホンの廿人足らずだつた。これだけの若い大衆がゐながら、搾取の重壓に苦しんでゐながら、この廿名がいつかうに擴がらないのだ、增えないのだ、たつた廿名が、固い岩層の中で、秘密にやつと保たれてゐるきりだ。

「叫んでも怒鳴つても聞えない大衆……」

狭山は、空地の若者達を、じつと見入りながら、しみじみと、英雄的孤獨を感じた。いつさらはれるかわからない自分達、××も×××も覺悟してゐるこの悲壯な氣持を、のんきな大衆よ、いつ理解してくれるといふのだ。――感傷的な、熱いかたまりが、グッと咽喉元までつつぱつて來ると、彼はやがて痩せた肩をそびやかして、ツイと廊下の腰板をはなれたが、ふと向うから歩いて來る三人の洋服をめつけると、クルリと方向を變へた。

「糞ツ、社長の山羊ひげめ……」

向うから歩いて來た三人の洋服は、食堂の中をのぞいたり、そこらで、赤ン坊におつぱいをふくませてゐる女工達の、いんぎんな禮を受けながら、ゆつくりと、空地の見える廊下のところまで歩いて來た。

「なかなか、旺んだね」

野羊ひげの社長は、空地の方を見て足をとめた。溫情主義を看板にする社長の習慣は、きまつて、お正午時間に、各工場を巡視することであつた。

社長の背後に、專務と、守衛長が從いてゐた。加瀨といふ刑事上りの守衛長は、野球其他、各競技團體の總監督で、柔道二段の男だ。

「向うの人だかりは何だかね、相撲？」

守衛長がこたへた。

「さうです、今夜は土曜で、大會だもんですからね」

「ホ、ホ、なるほど」

社長は、うなづきながら、歩き出した。

「いや、結構ぢや、結構ぢや」

2

廊下のタ、キには、多くは世帶持の職工達が、シャツ一枚か、或はズボン一つきりの裸でしやがんでゐた。社長は、廊下を、笑顏をふり撒きながら通りすぎた。

「ちよつとおめえ、松の野郎は馘首だつて話だよ。ほら……」

社長の縞ズボンが見えなくなつてから、十人あまりでつくつてゐる輪の中へ今迄、廊下で立話してゐた男が加はつて來て云つた。

「どう？」

傍の二三人が振りかへると、別れて向うに歩いてゆく、浴衣がけの病人の後姿が見えた。

「ナニ、馘首だ？」

輪の眞ン中には、整版ゲラでつくつた將棋盤がある。手の中でコマをいぢくりながら、脊中に黃色いシミのあるシャツの親爺が、馘首だときいて、皆と一緒に振り向いた。

「松は肺だつけな？」

一人がさう誰にとなく云つたが、皆だまつて、その浴衣の後姿を見送つた。悲慘がいつも足許から湧いた。そして、工場ぐらしの永い世帶持達は、持病の痛みを撫でるやうに、その「悲慘」を默つて見送ることに馴れてゐた。

「王手だツ」

それまで考へこんでゐた相手が、ガチリとコマをうつた。シヤツの親爺は慌てゝ振りかへつた。

「仕樣がねえ、いちかばちかだ」

向う鉢卷の相手の男は、うつたコマをも一度みてニヤリとした。皆もすぐ、そつちへ注意をうばはれた。

「ちくしやう、こいつはひでえ！」
シヤツの親爺は、盤面を睨んで呻つた。
とりまきの皆も、モウ「松の野郎」を忘れてゐた。
「うーむ、いい桂打だ」
「凌ぎがつくかな」
馘首の話は、そのまゝ消えた。

……………………

浴衣がけの、健康保險患者は、二三間さきの、タ、キにしやがんで、新聞を讀んでゐた親爺と話してゐる。
「まア、さう心配したもンでもあるめえ、そンときあ、ソンときでどうにか……」
新聞讀ンでゐた親爺は、氣休めを云つてゐる。アト一週間で、會社と緣切れになることを宣告された。このヒヨロ〳〵した肺患者が、アト七日で仕事が出來るやうにならないことは判りきつた話だ。どうにかなることは、十年以來の工場から、骨と皮だけの身體を、女房子供をノシつけて、ほり出されることだけのことだ。
健康保險法は、大工場では、その手切金を半分だけ職工に積立させるといふ重寶な役割をしてゐるのだ。この「浴衣」の患者も、規定の三ケ月では、「海綿」みたいになつてしまつた肺病を治すことは出來なかつた。
「……」
健康保險患者は、だまつて其邊を離れた。彼が嘗て、同僚の「悲慘」を默つて見送つたやうに、いまは、自分が、見送られてゐる——。
重石にひきづられ「悲慘」に、カドのすれた世帶持たちは、却々起ち上らない——。
そンなときに、この新聞を讀ンでゐた親爺は、あはてゝ波のとばツちりを喰つて、いそいで殼に逃げこむやどかりのやうに、きまつて、己れ一人の「秘密」を考へる。
「郵便貯金が、三百と十五圓。今日迄の十一年間の退職手當が、四百廿圓と——。」
それから、新聞をたゝんで、
「それで、えゝと、郷里へひつこむか、それとも一膳めしやで

もやるか――」

自分のことだけを、自分の灯明りだけを、しつかと抱いて離すまいとしてゐた。そして、波がしだいにヒドクぶつつかつて來て灯明りがかき消されさうになると、暗い顔で呟く。

「あゝ、俺も永いことぢやねえに……」

………………

「あたい、よんべ「東京行進曲」を見て來た……」

「アラ、隨分時代おくれね、いまごろ」

「でも、あたいすつかり共鳴しちやつたわ、ホラ、あの藤村の坊つちやん良樹がさ、藝者になつた道代をたづねてゆくところがあんでせう……」

お洒落な女工が二人、廊下つゞきの洗面所で、顔ぢうを、石けんの泡だらけにして喋べつてゐる――。

「ね、時計の針ばかり見てさ、いゝ待ちアグんでゐるとこなンか、もうあたし……」

「ん、ん」

抱いてる方の七三頭髪は、手拭に顔をうづめて泣きじやくりするやうにうなづく。喋べつてる方の銀杏返しは石鹸の泡の中で、眼を赤くしてゐる。

「すつかり泣いちやつたわ」

すると、手拭から顔を出した七三頭髪が、

「でもさ」

「なアに」

「あの夏川と瀧花が、印刷女工になるとこがあつたでせう」

「ん」

「あそこンとこ變ぢやなかつた？」

「さう、さう、あたいくすぐつたかつたわ」

「いえさ、あンな、ノンキな印刷工場なンてありやしないわ――

「そりやあ「かつどう」だもン……」

「だつて、あたい達本職だけに、バカにしてると思つたわ」

だが、彼女達は「女工」から藝者に、藝者から奥樣に、モグンで、金持の坊つちやんにおつかけられるといふ「道代」や「澄江」を、「馬鹿」にしてるとは思はなかつたのだ。彼女達はブルアヂテーター×××と一緒に、コケた青い鉛毒の顔つべた

に安白粉をぬつて「夢」の世界に醉うては、現實をぬかしてゐたのだ——。

………………

「なンだ、そのざまは……」

ツヌケて、太かい坊主つくりの男が、汗だらけになつて取つくンでゐる、二つの裸ン坊の脊を、いやといふほどどやしつけた。

「ちやンと、四つに組ンでみろ！」

工場空地の一ばん隅ツこ、ズボン一つつきりの裸ン坊の青年達が、三四十も脊中をならべて輪をつくつてる——。

「もつと、左を深くさしこんで……」

怒鳴つてる太かい、眞ツ黒氣な、脣の厚い男は、相撲名からして「印度虎」といふ、最近世帶持たての男だ。

ハア、ハア息をきらしながら、取つ組んでる裸ん坊は、四つに組んだまゝもう絕え入りさうだ。

「なんて、だらしのねえへツピリ腰だ、蹴飛ばすぞツ」

土曜の今夜は、K印クラブで、東西の相撲大會——西の橫綱「印度虎」は、いま西軍のコーチをしてるところだ。

東軍の橫綱は、柔道二段の守衛長加瀨——しかし、柔道では加瀨に强味があつたが、相撲では印度虎のものだつた。「社長杯」は、こゝ二年を、西軍が保持しつゞけてゐる。

「突つ張つて、ウンと突つ張つて、ゑ、バカヤロ、腰を落して仰向に反るンだ、間拔めッ」

丁度その時刻だつた……。

まはりの若いやつらが立上つたので、印度虎も、何氣なしにそつちを見た。

廊下の向うから、學生みたいな男が、逃げるやうに駈けて來る。そして駈けながら、赤いビラを、パツ、パツと粉雪のやうに撒き散らしながら走つて來る——。

見てゐると、食堂の方からも、もう一人新聞配達みたいな恰好したのが、廊下から、工場空地へ飛出して來た。そしてこれも同じやうに、赤い小さいビラを投げつけ、投げつけ駈けて來る。

「何んだ、社會主義者か」

そつちを見てゐる若い奴の四五人が、好奇心だけで云つた。女工達も、キャッチボールをやつてる青年達も、べつに遊びごとを止めはしなかつた。ビラの舞ひ落るとこだけが道を開けて、他人らしく見送つた。

しかし、突嗟の間に、どう嗅ぎつけたか、七八人の金筋の守衛達が、その「學生」と「新聞配達夫」を捕まへやうと飛出して來たので、空地の皆は、遊びごとを止めた。

「そいつを捕へろ!」

「ビラを拾つちやいかん」

守衛達は、不意の闖入者を追つかけながら、口々に怒鳴つた。

「學生」は製本工場の方へ驅け込ンだ。空地を追ひつめられた「新聞配達夫」は鳴ツこの「印度虎」達の方へ向つて走つて來た。勇敢な「新聞配達」見たいな若い男は、信ずべき味方に、大衆の中へ飛び込んで來ようとした。

「バカッ、つかまへるぞッ」

おお、眞つ黒氣な大男は、いきなり、行手に大手をひろげたのだ!

新聞配達は、ころげさうに踏みとまつた。おどろきで眼を剝いたやうに黒眼鏡がいかつた。

突嗟にきびすをめぐらして、空地の外柵の方へかけていつた。そして間一髮、彼の片足だけが、外柵にひつかゝつてゐるとこを、守衛の數十本の手がつかンだ。

蒼白にひつつた顔色の「新聞配達夫」は、守衛詰所にひかれていつた。

「どら……」

別に興味もなささうに、若いやつが持つてる赤いビラをひつたくつて、印度虎は讀んでゐたがすぐ止めた。

「なンだ、産業合理化だの、大量馘首だのつて、嘘八百を……」

チンと鼻汁をかンで足許に棄てた。

「××のいふことナンかアテになるもンか……」

印度虎は、本氣にさう考へてゐた。

「さア、みないいか、今夜はウンとガンばるンだぞ」

3

夏の日が、すつかり暮れると、モウ八時だ。緣臺將棊や、腰

卷一つの女房たちやが涼んでゐる狹い二番長屋の路次を、K印工場の若い者達が、こつそりと、狹山の家へあつまつて來た。狹山と、整版の田中といふ頭髮を長くした男とが、十五六人集つたうちの中心をつくつてゐた。暑いのに外方に向つた障子をしめてあつた。

喜イ公は隅の方で、默つて座つてゐた。この中では一番新米だつた。

「お——」

突出し窓の裏口から、によきりと、白い顔が浮いた。喜イ公はハッとした。これは晝間工場へ飛び込んで來た「學生服」の男だ。

湯上りを着て、ゴマかしてるその晝間の男は、S勞働の常任で、村越と名乘つてゐた。あたりを見廻してから、窓から忍び込むとジロリと皆の方へ鋭い眼で會釋した。

それが、よけい室ン中を緊張さした。「獲得」されて、まだ間もない喜イ公は、何よりもさきに、不馴れな、緊張した空氣を怖く感じた。

顔が揃ふと、まづ一番に、狹山が云つた。

「晝間の、ビラの効果はどうだつたかね？　各職場では？」

村越の眼が、また鋭く皆を見廻した。

「第三整版では……」

文選工らしい出齒の若いのが云つた——地域的に離れてるせいか、一枚も持ち込まれなかつた——

出齒の若いのは、心の中で呟いてゐた——事實は少し持込まれたが、殆んど馬鹿にされてしまつたのだ——。

「君の方は？」

製本工場の雜役夫は、長い頭髮を撫でながら、憤激した口調で云つた。

「俺の方は女工ばかりだから始末にいけねえ、おまけに今夜相撲大會だといふんで、皆そつちへ逆上せてゐやがつて——」

「君の方は？」

各職場の情勢は——狹山は齒ぎしりした——大して反響がないのだ——。

村越はガツカリしたやうに、眼を俯せた。

——まだ大量馘首が、表面にあらはれないからといふせいはゐるにしても——。村越は眼をつぶる。

——守衛につかまつた同僚は、空しく犬死したのか——。

「おやぢども仲間ぢや、コソコソS勞働の噂なンかしてる奴もあるけどね、×××といふ名を聞くと、皆慣つちまいやがンダ」

狹山は默つて、さう語る男の方を見あげる——。

「おまけに若い奴らは皆、野球や、相撲なンぞに夢中になつてやがるしね」

室ン中の皆も、工場ン中では、周圍の從業員達とは、壁みたいな空氣の中にゐるので、一緒に寄ると、自然陰謀的な昂奮に驅られた。

村越はバットに火を點けて、烟りの間から、室ぢうの皆を見廻してゐた。——この文學青年みたいのや、お天氣らしい少數の勞働者が、帝國第三期に於ける重要産業中の最も智識的な印刷勞働者の、しかも東洋一を誇るK印工場の精鋭なのか!? 過去に三度のストライキの經驗をもつ、K印工場の精鋭なのか!?

村越は解せなかつた。

社會民主々義的な組合や、無産黨の影響すら、ごく稀薄な二千の從業員!

左翼的な組合及び×への組織率は、よし、彈壓のためにまれて少數であるとしても、それを求めやうとする力、壓力、二千のうち三十才以下の青年が七十パーセントを占むるこのK印工場の、青年男女工達の、眞實への、自由への、階級的な叫びは、その巨大であるべき壓力は、いつたい、どこへ解消されてゐるのか!?

「おまけに若いやつらは……野球や相撲に……夢中に……」

それをきいたとき、村越はいま更らのやうにハツとした。

「さうだ、俺達は、あのブルジョアスポーツの反動團體をぶつつぶさなくてはならないんだ」

そして村越のその考へが、そのとき云ひ出した狹山の言葉と一致した。

「諸君、俺達は記憶しとかなくてはいけない。今日、工場で、捕まつた同志が、何故に逃げおほせなかつたか知つてるか?」

皆は默つて狹山の口許を見た。

「あの「相撲團」の反動野郎「印度虎」のおせつかいによつて捕へられたのだ!」

皆のうちで、喜イ公が一等おどろいた。喜イ公は「印度虎」

とは親戚であり、「印度虎」の紹介で工場に入つてるのだ

「印度虎だけぢやねえ」

村越が口を挟んだ。

「野球團のサヾナミのキャプテン松岡も、釣遊會の幹事「のんべ熊」も、みな、ブルスポーツを牛耳つてる奴ぁ、會社の「内意」を受けてンだ、俺達は、この一聯の反動をぶつつぶさなくてはならぬ。」

村越は、一つの光明がひらけて來たやうに、眼をかゞやかせて云つた。

「特に、「印度虎」は、同志を敵の手に渡したといふだけでも、俺達は相當の××をなすべきだ」

村越は遠慮なく云つた。室ぢうの一致した憎惡が、「印度虎」に向けられた。喜イ公は室の隅で考へこんだ。

「やらう！」

出ッ歯の田中が、悲壯な決心を顏に現はして云つた。

「よし！」

異常に緊張した空氣が、室中の氣持をすぐ一緒にさせた。皆はひたいをあつめた。

喜イ公はそつと便所にたつた。同志を賣つたと云ふ「印度虎」を庇ふといふ氣は更にないが、果して村越の云ふやうに、印度虎にしても松岡にしても、「のんべ熊」にしても、心底の反動だらうか？　喜イ公は印度虎を熟く知つてゐた。

「あいつあお人好しで頑固な勞働者だ、たゞ誑されてるだけなンだ、知らないだけなンだ」

しかし、それを連中に云つたところで今の場合無駄だ、またうまく話せもしない。それで、喜イ公は、便所の傍から、こつそり下駄をさぐつて戸外へ出た。

多分、相撲のハネを待つて、襲ふらしい皆の相談を背後にききながら、喜イ公は默つて家へかへつた。

4

「醉つたか、こら」

白洋服が、でかい男の肩へ、ヒョロヒョロと突つかゝる。

「な、なんのこれッぽつちに……」

社長邸の裏から「太陽のない街」に降りてる狹い阪道を、したゝかに醉つた足どりは印度虎と、守衛長の加瀬——。

「だが悪くねえ、勝利の酒つてやつはなア、畜生！」
「おまけに、社長の振舞酒ぢや尚更だらう」
守衛長は悪酔して、變にからんで來る。
「きさまア」
印度虎は、ヒョロつく足を踏ン止まつて、
「きさまア負けたンで口惜しいのか、え！」
今年も西軍が「社長杯」を獲得した。二人は相撲のハネ後、社長邸で出た酒一樽に酔ひつぶれて、いまかへるところだ。
「口、口惜しいなンて贅澤だぜ、あンなにきれいに負けりやおめえ、ゲープ……と、双差しでよ、グーッと押しきられりやおめえ、何も文句はねえ筈だ、ウーイと」
印度虎は先になつて降りて來る。
「畜生、今のうちに嬉しがつてろ、その代りこんどの柔道試合にあ、地獄の一丁目をのぞかしてやるから覺えとけ！」
いつものズルい守衛長にも似合ず、ムキになるほど、これも醉つてゐる。
「なにを、そらアこつちで云ふことだ」
グラグラと、狭い阪道をいつぱいになりながら二人は降りて來た。そのとき、前にたつて歩いてゐた印度虎が、どうしたはづみか、ひよいとへたばつてしまつた。
坂の西側の路次から、黒い影が、バラバラ飛出して來た。そして四五人は印度虎の方に、アトの半分は守衛長の方へ飛びかゝつて來た。
「い、いてえッ、どこの野郎共だッ」
不意に足をすくはれた印度虎は、×××毆られながら、怒鳴つてゐる。帽子を眼深に冠つたり、手拭で頬冠りしたりしてゐる輩は、無言で毆りつゞけるのだ。
隙をめつけて、守衛長の阪上の方へ逃げ出してゆくのが見た。
「ひきあげろ！」
頬冠りの一人が合圖すると、皆バラバラ逃げ出した。
「畜生ッ」
毆るだけ毆つて逃げ出さうとする中の一人を、足をつかんで引き倒した。頬冠りの男は、印度虎の顔の上に落ちて來た。
「おや、貴樣は？」
頬冠りの下から覗いた白い顔を見て、印度虎は最初の瞬間、顔の見覺えで名を思ひ出さうとしたが、醉つてる頭は名前まで

判別出來かねた。頰冠りの男はバネのやうに、印度虎の手を振りもぎつて逃げ出した。

「畜生、待てッ」

泥んこになつて起き上ると、印度虎は、殴られたいたみにヒヨロつきながら、頰冠りの男を追ひかけた。

頰冠りの男は、グルグル路次を廻つて、長屋の方へ逃げていつた。そして印度虎がヒョロつく足で、頰冠りの男を見失つたとき、つい眼前に、歸りの遲いのを氣づかつてゐる彼の女房が赤ン坊を抱いて立つてゐた。

「あんたはまた喧嘩して來たんだね！」

「……」

印度虎は狐につまゝれたやうにキョトンとした。

「みつともない、口から×をふいてさ、着物もなにもすつかり泥ぢやないかね」

馴れてる女房は、赤ン坊を家ン中へほり出すと、印度虎を臺所につれてつて、着物を脱がしてから、頭や顔に三つも四つもある××を洗つてくれた。

「止しなよ。ホンとにいゝ加減の年齢をしてさ、いつまでも喧嘩をする馬鹿があるもんかね」

まだしたゝかに醉つてフラフラしてゐる亭主を、女房は赤ちやけた蚊帳のなかに押し込んだ。

「ガアガア云ふな。糞ッたれ阿女ア」

大の字にフン反りかへつて、ぼんやりした記憶をたどらうとすればするほど、その憎い頰冠りの白い顔はわからなくなつてくる。

「たしかに工場の野郎だが……」

女房がガアガア怒鳴りたてる、赤ン坊が泣きわめく、彼の醉つてる頭は、ますますもうろうとしてゐる。

到々、そのうちに、傷のいたみも忘れて、睡つてしまつた。

5

夜半に、ひどく咽喉がかはいて來たので、印度虎は、眼がさめた。

「水だ、やかんは――こら」

手を伸ばしてとなりに眠つてゐる女房の肩を押しゆすぶつたが、赤ン坊と一緒に、だらしなく眠りこけてゐる女房は眼がさ

めないーー。

「チッ、糞つたれ！」

ふらふら起きあがると、臺所へ一跨ぎに首をツン出して、ひしやくごと口へ持つていつた。

「フーーッ」

と、大きな吐息をして、ひしやくをほり出すと、そのまゝ蚊帳の中へもぐりこまうとしたが、フイと、變な物音を聞きつけた。

「おや？」

ゴツリ、チヤラ、チヤラーー。

音は臺所の外方、たしたに靴音と佩劍のぶつつかるひゞきだ。

「…………」

印度虎は、臺所のながしへ、足を踏んまへて、そつと、戸前に顏をよせながら。

「だれだ？」

と怒鳴らうとしたが、咽喉にかすれて、大きな聲にならなかつた。それでも一度、怒鳴らうとすると、そのとき、靴音が五つも六つも一度に起つて、駈け出すやうに戸前を離れてゆくのだーー

印度虎は、いそいで、戸前の栓錠をガチガチひねつて戸を引きあけたが、その途端、筋向ひの長屋で、けたゝましい叫びがおこつた。

「なにをするッ」

「バカッ」

「抵抗するかッ」

入口の戸がひんめくられて、狹い長屋路次に、電燈の灯をいつぱいに投げ出してるのは、同じ工場につとめてる狹山の家だ。二三人の私服と、五六人の正服が、その家ン中で土足のままでハネ廻つてゐるのだ。

「何だらう？」

出てゆかうとしたが、巡査がゐるのに丸裸だ。

「こら、着物もつてこい」

物音に眼をさました妻君が、赤ン坊だいて飛び出して來た。兩隣りも、向ひ側も、近所の家でもおどろいて戸を細目にあけた。そして、すさまじい活劇を、怖は怖はのぞいてゐる。

ガチヤン、チヤリツ、ガツといふ器物のこわれる音、電燈に

もぶつつかるらしく灯明りが、暗い路次を、ななめに大きくゆれる――。

「生意氣な……」

「さつさと歩けッ」

左右に腕を捻ぢあげられて、路次へ出て來たのは狹山だ、蒼白な顏が、灯明りの影になつてゐてもよくわかる。

「お――」

印度虎は、そんときやつと氣がついた。――畜生ッ、昨夜俺をひどい目に逢はせやがつたのは、こいつだ――。

「畜生め！」

かねてから虫の好かねえ書生ッぽ野郎――印度虎は、ハダシのまゝそつちへ近づかうとすると、とりまいてゐる巡査が、ドンと胸を突き飛ばした。

「傍へ寄つちやいかン」

とたんに、それを聞きつけた狹山の蒼白な顏が、印度虎の方を振り向いて、血走つた眼で睨んだ。

「は、反動め、少しあこたへたか……」

「ナニを？」

巡査を押しのけて、印度虎はなぐりかゝらうとしたが、そンときハッとして、譯なしに手を下ろした。

狹山の兩手に嵌つた、黑く光る手錠――。

「ち、畜生め！」

私服や巡査に押し距てられて、ぼんやり手をつかねながら、印度虎は口惜しさうに怒鳴つた。

「こ、こんどめつかつたら畜生、首根つこひきぬいてやるから……」

6

翌朝、印度虎は工場で、頭から顏の半分ばかりを繃帶してゐる守衞長と顏を逢はせた。

「おめえの方がひどかつたな」

印度虎は、若い野郎にきまりの惡い、額の膏藥張りを撫でながら、

「あれからどうした？」

「どうつて……」

守衞長は、ドンドン從業員が出勤して來るタイムレコダーの

かけで、紫色の腫れの見える頬をぴくつかせながら、ブッブッ云つた。

「あれから××署へ飛び込んだんだ」

「警察へ……」

印度虎は可笑しくなりながら、

「柔道二段にも似合ねえぢやねえか」

すると、守衛長は、白くかさばつた頭部を振りながら、

「イヤ、少し考へがあつたからだ」

「ハア？」

印度虎にも、日頃あまり口も利かない狭山なぞが、何で自分を覘つたかゞわからなかつた。始業のベルが鳴り出したので、そのまゝ辨當を抱へて職場にゆかうとすると、守衛長が呼びとめた。

「あとでね、事務所の俺の室まで來てくれ」

印度虎は、輪轉印刷室の、第三號機の擔當者、五人組長といふのだ。三號輪轉機のそばへ來ると、若い連中が眞黑氣になつて掃除してゐた。スヰツチを入れ、調子を合し、インキの具合を見てから、工長から渡された今日の生産豫定表どほりいひつけて、それから、事務所の方へ出かけていつた。

「一寸、待つてくれ、外で……」

守衛室に入つてゆくと、意外にも、こんな朝早く社長の顔が見えた。傍に、ユニフオム姿の男が二人ゐた。守衛長が手をあげて止めたので、ドアの外へ立つてると、十分ばかりして、ユニフオムの二人が出て來た。一人はサヽナミのキャプテンで、第二整版の植字工松岡、一人はツバサのキャプテンで平整室の遠藤といふ男だ――。

「お早うございます」

印度虎は室ン中へ入ると、そこにゐる社長へ挨拶してから守衛長の方へ向いた。

「大變なことが出來たんだ」

守衛長は、おごそかな顔付で云つた。

「この會社に、×××がゐるンだ！」

「ハ……」

「僕たちを、昨夜なぐつた奴らだ……」

印度虎は、×××はまるで、狂犬みたいだと思つた。

「まア君等は、會社の柱石だから、打割つて云ふか……」

守衛長は、社長のやうなことを云つた。
「これを見たまへ、昨夜、警察で知らして貰つたんだがネ」
テエブルの上におかれて小さいノートに、鉛筆でかゝれた文字が、二段にならんでゐる――。
一番先頭に、狭山や田中などの名があつた。印度虎は、昨夜の狭山のフン捕つた一件を憶ひ出しながら、目を通してゆくと、終りの方に「影山喜三郎」といふ名前をめつけて、びつくりした。
「この男も、×××ですか?」
印度虎の指先がふるへてゐた。守衛長はすぐ氣がついた。
「その男は、君の乾分かね?」
「イヤ、俺の嬶の弟です」
守衛長は、いさゝか拙いといつた顔をしたが、
「ま、そのへんは大して怖くもあるまいから、何とか君の顔をたてる方法もあらうぢやないか」
振り返ると、社長がニコニコしてゐた。しかし、印度虎はすぐ云つた。
「イヤ、×××なら仕樣ありません、たとへ弟でも、俺ア命ごひなンかしません」
キツパリ――と、印度虎は嘘ツ氣なく云つた。印度虎の頭腦も、他の大衆と同じに、×××は、泥棒、放火より惡いもンだと、新聞やなンかで教へられてゐた。
惡人であるならば、たとへ親の首へでも、繩をかけねばならぬ。印度虎はこの氣持で、決心してゐた。
「まア、それはそれとして……」
守衛長は話をすゝめた。
「それで、今日は警察から來て、工場から×××を引ツぱるかも知れないんだがね、そンとき……」
かんじんのとこだといふ風に、守衛長も、社長も心持顔を寄せた。
「はたの從業員がさわぐとこまる。それで、君は、君の方の「相撲團」の有力者を通じて、輕擧妄動せんやう、注意し、警戒してくれたまへ――」
「ハ……」
「妄動すれば、いやでも處分しなければならんし、スポーツ精神の美風をほこる本工場の趣旨に對しても甚だ遺憾だし……」

「わかりました」

用件はそれだけであつた。ドアの外へ出ると、おつぎの、釣遊會幹事である製本工の「のんべ熊」が入れ代りに、はいつていつた――。

7

午前十時ごろ、××署から來た、私服と正服が廿人あまり……

……工場の裏口から、事務所の守衛長室へ入つていつた。

そして、すぐ三人一組の私服が事務所の給仕に案内されて、三階の第二整版工場、文撰場へあがつていつた。

ケエスの陰で、他の從業員と一緒に田中は仕事してゐた。今朝、眞夜半に狹山がヤラれたことも、まだ知らなかつた。

「君、田中君かね」

肥つた眼の小さい私服が、ニヤリとしながら近づいた。聲にふりかへつた田中の顏が、瞬間ハツとしたらしく青ざめた。

「抵抗するかツ」

ひよろ高い口ヒゲのある私服が、背後から、田中の腕を捻ぢあげた。

ケエスがゆらぎ、文選箱がはげしい音をたてて、ひつくりかへつた。

「歩け！」

田中の背後にまはされた腕首に繩がかゝつてゐる――。

他の從業員達、仲間はあッけにとられて見てゐた。ボンヤリ――と、泥棒か放火かゞ捕まるのを見てるやうに――、階段を、ひつぱられて降りてゆく同僚の後姿を、あつけにとられて、或はヒドク怖は怖はと、或は物めづらしさうに――彼等は見送つてゐたのだ。

…………

輪轉機室からも、一人持つてゆかれた。第二整版の出ッ齒の男も持つてゆかれた。

作業現場から、或は、一度、事務所の守衛長室へ呼び出して、解雇を云ひ渡し、歸つてゆくところをそのまゝ警察へ――。

最初の日が四人、次の日が三人――毎日つゞいた。ちびりちびりと、ひつこぬかれて、工場の裏口から、こつそりと連れ出された。そして再び工場には歸つて來なかつた。

みな知らぬか、でなければ默つてゐた。

まだ檢擧され殘りのS勞働組合員達は、何かしなければならぬと焦せつた。窒息させられるやうな狀態を何とかしなければと踠いた。

しかし駄目だつた。手も足も出なかつた。周圍は皆他人であり、青年達は依然スポーツに夢中であつた。

さしのべてくれる手がなかつた。かくしてくれる隙がなかつた。枝や葉ッパがなかつた。××のための運動者に、××は××だつたのだ。何故か？

丁度それは、敵に追はれた落人が、草原をはしつてるやうなものだつた。落人が逃げ込んで來ると、草は左右へさつと飛び開いた。敵の銃先は、間違ひなく覘ひがつけられたのだ――。

8

×××狩りが毎日つゞいた。事務所へ何氣なく呼出されて、こつそり工場裏から、警察へ持つてゆかれた。

モウ、その數が四五十を超えた。××を持つてゐたとの××で、或は「戰旗」の讀者だと云ふ××で――××にならない××で――モウ十日あまりもつゞいた。

喜イ公は、まだ職場に殘つてゐた。

職場で働きながら、平常て無口な男が、よけい無口になつてゐた。狹山の家の「工場委員會」に集つてゐたうちでは、他に誰一人殘つてゐなかつた。何で自分だけが殘されてるのかわからなかつた。事によると保證人の印度虎のお陰で、馘首にならないのかも知れなかつた。「よけいな事をする」と思つた。同じ職場で顏を合しても、どつちも口を利かなかつた。

從業員たちは皆默つて働いてゐた。陰でブツブツ話し合ふ世帶持もあつたが、面となると、そんなどこでなかつた。若い者は相變らず野球や、相撲に熱中してゐた。

「×××と××はなぜ××だらう？」

喜イ公は毎日そればかり考へた。事件以來野球も止して考へてゐた。――會社は×××狩りの名にかくれて、大量馘首をやつてるのだ――。

「喜イ、一寸來い！」

お正午の時間に、ボンヤリ、空地の方を見て立つてると、背後で印度虎が呼んだ。默つて食堂へついてゆくと、印度虎は、人氣の少ないとこへいつて腰を下ろした。

脚の一本かけた、黒い食卓の上に、飯ツブや醤油のシミがあつた。

二人とも頑固に默つてゐた。

とうとう印度虎が口を切つた。

「おめえ、×××か？」

喜イ公は、じろりと相手を上眼に見たが、そのまゝ視線を外らした。

「オイ」

節くれた印度虎の腕が、強情な喜イ公の顔を、押し向けた。

「いんや」

喜イ公は、少しばかり首を振つた。

「だつて、おめえの名が、ちやンと警察の帳面にのつかつてるぞ」

喜イ公は、また默つてしまつた。

「何かの間違かも知れねえが……」

印度虎の力が我を折つた。

「おめえ、これからつまらねえ眞似しねえだらうなア、え？」

「……」

ところだけ——

まだ默つてゐる——。

「實は、俺の首を一緒にかけて、おめえの首をつなひで貰つたンだ」

すると、醤油のシミと、飯ツブから顔をあげた喜イ公が云つた。

「止してくれ……」

「ナニ？」

印度虎はおどろいた。強情な奴だことは、こいつの姉である女房の性質からでもわかるが——その強情が印度虎の好きなところでもあつたが——これは大それた、×××に肩を持ちやがる——。

「てめえ、利いた風なことを……」

印度虎はカッとして、喜イ公の首根つこをつかんだ。

「も一度云つてみろ！」

抵抗はしないが、痛みにヒンまげた唇のあたりに、飽迄つつぱつたものがある。

「義兄貴……」

と嗄れた聲で、喜イ公が云つた。印度虎は手をゆるめなかつた。

「おめえ、おめえが、會社に訛されてんだ」

おどろいて印度虎は手はゆるめたが、

「バカな、俺が……」

二人とも中腰だつた。

「さうだよ、會社は×××の××くつつけて、人減らしをやつてンだよ」

「でたらめを云ふなツ」

「でたらめぢやないよ、だつて會社ぢや何のかのと理屈をつけて、モウ五十人あまり馘首にしたぢやねえか」

「五十？」

「でたらめなら、會社へきいてみろ！」

印度虎は言句につまつた。喜イ公の言ふ五十が眞實とすれば、たしかに彼は會社にだまされたのだ！だつて、警察の帳面にあつた名前は、ちやンと見た眼で廿人足らずだつたのだ——。

印度虎は光つた眼を、喜イ公の顔から外らすと、いそぎ足に食堂を出て行つた。

9

短氣な印度虎は、その足で、ツカツカと事務所の守衛長室に入つていつた。

「おい加瀬さん」

傍に見馴れない刑事らしい男や、事務なぞゐたが、印度虎は所を嫌はなかつた。

「いつたい、會社は何人馘首にするンだね？」

おどろいた室ぢうの顔が、この馬鹿々々しい質問に振り向いた。守衛長は、「場所柄でないよ」と云ふことを眼つきで知らせたが、印度虎はかまはず訊ねた。

「××××をくつつけて、もう五十人も馘首にしたつて云ふぢやないか」

刑事達の眼が、一度に鋭く、印度虎にあつまつた。慌てた守衛長が立上つた。

「まア、君、外方へ出たまへ」

室外へ連れ出されると、印度虎はじつと守衛長を見た。

「君ア、それをきいて何にするんだね？」

守衛長は吸ひかけの煙草を口に持つてゆきながら、ずるい眼を光らせた。

印度虎は、ぢれつたさうに

「いま、その……俺の云つたことはほんとかね、これは……」

守衛長は、印度虎の顔を見い見い云つた。

「ま、嘘ぢやないがね」

「え？」

印度虎は、足許がぐらついたやうだつた。

「君達には會社の事情も諒解して貰はんければね、いづれ一段落したら、詳しく社長からも話があるだらうが」

「……………」

默つてうつむいてゐる印度虎の肩をかるくたゝきながら守衛長は、おだてた。

「それまでは、君達にしつかりしてもらはなくては困るわけなンだ」

子供をダマスやうに守衛長は會社の腹を打明けた。

機械を減らさずに人間を減らさねばならない事、生産單價を引下げねば大會社の發展が不可能な事――守衛長は印度虎の顔色みいみい喋べつた。しかし、印度虎は[illegible]なかつた。そして、ぼんやり職場へかへつてきたが、それきり石のやうに默りこくつて考へ込んでしまつた。

「畜生！　だまされた！」

10

「影山君」

三番長屋の喜イ公の家へ、どこを逃げ廻つてゐたのか、ヒョツクリ、村越がやつてきた。

暗い外方を見廻してから、コッソリ、上へあがると、低い聲で喜イ公に云つた。

「君が、まだ職場に殘つてるつて情報をきいたもンだから………」

「……………」

「どんな風だね、工場は？」

村越は、例の黒眼鏡をはづして、眼をパチパチしながら、喜イ公の顔を見た。相手はまだ默つてゐる。

「ワイてるだらう、あれだけ××者が出たんだから……」

喜イ公は、俯目に考へ込んでゐたが、そのとき頭を振つた。

「駄目だ！」

村越はおどろいた。

「な、何故？」

そンな筈はない。賃銀は下る一方、馘首はやる。それで従業員が黙つてる譯はない。——畜生、この男は×××がついたのか——

「可笑しいな」

村越は相手をジッと見たが——しかし、丸つこい顔の、ヒドク頑固さうななかに、賢い眼をもつた若者は、別にビクビクしてる様子でもなかつた。

村越や、狭山は、この青年に望みをかけてゐた。まだ組合に首を突込ンで日が淺い故か、ひつこぬかれ残りのこの若者に、組合としては「工場委員會」再建の任務を脊負はせる方針であつた。

「いつたい……」

ポツリと、喜イ公が云ひ出した。

「組合や、×××は、何故、皆とあゝ××だらう？」

「え？」

村越は眼をクリクリさした。喜イ公は、自分自身にも質問ねてゐるやうに……。

「だつて、工場の皆は、××者が出ても、知らん顔してゐる。なにか泥棒でもつかまつたやうな面付きでゐる——」

「こりやおめえ」

何を云ふんだといふ風に、村越は笑ひを含んで云つた。

「××××からさ、しかし、勇敢な若い青年分子はさうでねえ筈だ」

しかし、相手はうごかなかつた。

「わからん！」

と云つて首を振つた。

「ぢや、君はどう思ふ？」

村越は少し、きつく、たゝみかけた。すると案外に、この無口な勞働者は、石を積みかさねるやうに、ポツリ、ポツリ云ひ出した。

「青年だつて××××××、たゞ、モウロク親爺どもよりや、他人の「不幸」にも、自分の「苦しみ」にも、馴れつこに

なつてねえだけだ！」

京イ公は顔をあげた。

「だいいち、おめえさん達の考へるやうに、勞働者は、理屈だけぢやうごかねえンだ。ビラでも讀んだら、カッと逆上せるだらうなンて考へてるンなら、そりや見當ちがひぢやねえか」

「………」

村越の顔を、狼狽に似たものが、サッと通り過ぎた。

「どういたしまして、俺らの「生活」にや、何千年の長い傳統と、十重二十重の重石がぶら下つてる、ビラ位ゐで、ホイと逆上るほどお手輕に出來てねえ」

そのつもりではないが、すぐ口が惡くなる。村越は、それでも怒りはしなかつた。熱心に聽いてゐた。

「第一おめえさん達にや、俺きるほど本を讀んで、××××××××××××、わかつてるだらうけども、かんじんの皆は、あつさり云つて、おさきまつくらなンだ。少々のことぢや動かれねえ、馘首だと知つても、足場がなきア眼をつぶつて押しいされるンだ。」

「一寸、一寸……」

ここンとこで、村越は口を出さうとしたが、[illegible]げておさへた。

「待つてくれ、考へてゐたゞけを、一通り云はしてくれ」

村越はうなづいて默つた。

「それで、その「足場」といふのが、皆の「生活」をほかにして出來つこねえ。皆はいくら給料が下り、食ふに困つてるからつて、朝から晩迄、憤つてばかりゐたり、泣ツ面ばかりしてる譯でねえ、死かけてる病人だつて小便するやうに、皆も安直なことなら、何だつてやつてる、相撲でも、野球でも、淺草のレビユウでも、菊池寛の小説でも、活動寫眞でも、將棋でも、釣でも——たゞ惡いと云はれたゞけぢや無理だ、だつて、そりや皆の生活だもの」

「………」

「惡いといふからにや、いいと云ふものを、代りのものを與へてくれなきあ無理だ、いまゝでの「工場委員會」がさうだつた。野球をやるやつには「ブルジョアスポーツ」と非難した。少し頑固な奴には「反動」の折紙をつけた。そして「優良分子」ばかり探した。冗談ぢやねえ「優良分子」とはどンな天才かしら

ねえが、そンな奴は、、、、、えてして、大衆とは緣の遠い野郎なンだ！」

村越は、じつと一つ所に眼を据ゑてゐた。

「かう云つたからつて、俺あ、これつぽつちでも、狹山君達××者を、惡く云つてる譯ぢやねえ、それは飽迄××してゐる。誤解しないでくれ」

「いや、わかつた」

しばらくしてから、村越は立ち上つた。

「俺一存ぢや不可ねえ、一應歸つて組合へ相談してまた明晩來る」

それきりで、村越は、かへつてしまつた。そして翌々晩、また×××××やつて來た——。

「君、いいことを云つてくれた！」

村越は率直に云つた。

「で、組合としては、「工場委員會」の方針をこンな風に樹てゝ來たのだ」

村越は低い聲で話し出した。

一、K印工場、一切のスポーツ、或は、工場内にある同人雜誌見たいなものまで集團の一切を含めて、「對策委員會」を持つこと。

二、組合本部は「K印對策委員會」をおき、同工場の事情に應じて、指令を出すこと。

「しめ！　さうでなくちやいけねえ」

喜イ公は、決心を仄見せながら、村越に云つた。

「明日の晩から、各スポーツ團の、幹部達を訪問するから、おめえも一緒に來てくれ！」

11

「ちよつと、あンた」

女房は、大の字にひつくりかへつてゐる印度虎をゆすぶつた。

「あンた、隣りのお内儀さんが來てるわよ」

入口に、隣りのお内儀が、暗い顏して立つてゐた。このお内儀の亭主は、同じ工場のルラー場に勤めてゐたのだが、病氣中に解雇になつてしまつたのだ。

「うるせえ」

女房の手をハネのけて、印度虎は大きな図體を、ゴロリと向うむきになつてしまつた。

「お内儀さん心配して相談に來たンぢやないか、おまへでわかるンなら、相談になつてあげなよ」

この二番長屋で、印度虎は顔利きであつた。こまかい出來事なら、今迄、たいてい相談に乘つてきた。

「うるせえツてのに、俺らにもわからねえンだ、ばかツ」

酒くさい息で、ドナリつけると、またゴロリと寝返りうつた。

隣りのお内儀は、すごすごと歸つていつた。どうしたのか、いつになく今日は工場を休ンで、朝ツぱから、酒に醉つぱらつてゐる亭主の樣子が、女房には合點がゆかなかつた。

この長屋でも馘首になつたものが三人ある。そして、會社は、機械を増して人間を減らすと云ふ――。

印度虎にはわからなかつた。いつもならわからないまゝですごす。しかし、今の場合喜イ公の言葉が、つゝかゝつて來る。畜生ツ、小づら憎い守衛長の顔がちらつく――。

「だまされた！」

一克者が石にぶつつかつたのだ。印度虎は「フー」と吐息しては、寝返りをうつ――隣りのお内儀にだつて、いゝ加減のヨマ化しの挨拶は云へねえ――。

今迄は、誰か馘首になつて相談に來れば、仲間から餞別金を集めるとか、一寸、工長を通じて、歎願してみるとか位ですました。それを當然と思つてやつて來た。――しかし、それは會社にも理があると思つたからだ。今度はそれが無かつた。「無いよ」と、喜イ公の頑固なツラが頑張つてゐた。

その證據には、守衛長が、俺をおだてゝだました！

印度虎は、また「フー」と吐息する。

「いつたい何だね」

女房は、赤ン坊をゆすりあげて、夕飯をこさへながら心配してゐる。

「喧嘩犬みたいに、フーフーばかり云つてさ」

「利いた風なことを吐かすな、阿女なンか默つてすつこんでろ」

印度虎は、昨夜工場から歸つて來てから、怒つてばかりゐ

た。
「うるせえ、酒でも買つて來い」
　女房も、とう〳〵業を煮やした。
「飲みたけりや、トツトと、自分で買つて來やがれ」
「ナニを？」
　しかし、印度虎は立上りはしなかつた。それよりか「考へ」の方が、身體を重くしてゐた。
「こんばんは……」
　戸外で聲がした。誰も返事しなかつた。
　喜イ公と、すつかり勞働者みたいな恰好になつた村越が入つて來た。
「病氣かね？」
　喜イ公の顏を見ると、印度虎は、ムクリと起きあがつた。
「今日も、四五人馘首になつたよ」
　ボツリと喜イ公が云つた。印度虎は自分が責められてるやうに外ツぽむいた。
「それで、皆相變らず默つてるんだ」
「…………」
「今日、會社の時間があつてね」
　喜イ公は、一人で喋べつた。
「柔道大會が、明後日の晩、ツバサとサヽナミの試合が、その翌日の日曜だつてさ――そして、今年は「社長杯」に金一封がつくと云ふンで、皆は馘首の話より、そつちに夢中なんだ……」
「…………」
　印度虎は、腕拱みしたまゝ默つてゐる。
「ねえ」
　喜イ公が、少し膝を寄せて云つた。
「義兄貴だつて、俺らだつて、野球だとか、相撲だとかで、會社にダシにつかはれてンだよ。」
　印度虎が顏をあげた。
「それで、こんどは反對に、俺達の相撲や野球にしようぢやねえか」
「俺たちの？」
「ん、勞働者のスポーツだ。會社のぢやねえ、俺らが、俺らのためにやる……」
　ぢつと喜イ公は、印度虎の顏を見た。印度虎の顏を、瞬間、

ピクピクうごいて、錯雑したものが通りすぎた。

「あの……」

村越が傍から、簡單すぎる喜イ公の言葉を足さうとした、喜イ公が眼で止めた。——大丈夫だ、この男は馬鹿ぢやねえ——。

印度虎は默つてうつむいたきりである。女房の脊で、赤ン坊が泣きわめくのだけで、二人とも、息ぐるしくだまつてゐた。

喜イ公が、頃合をはかつて、とびとびのことを云つた。

「S労働組合のことだつて、×××のことだつて、よく考へてくれりやわかるンだ」

急所を、ドキつとつかれて、印度虎のツニ口が、みるみる歪んだ。そしてグイと顔をあげると、だしぬけに怒鳴つた。

「けえれ！」

村越はびつくりして喜イ公の顔を見た。喜イ公は落付いてゐた。

「あ、けえる！」

別に悪い顔もせずに、喜イ公がさきに立ち上つた。

「うるせえ、早くけえれ！」

云ふなり印度虎は、またごろりとひつくりかへつた。

「矢張り、あいつあ××だよ」

外方へ出ると、村越がさゝやいた。

しかし、喜イ公は確信をもつてゐた。

「あれでいいんだよ、あいつあ、今、たゝきつけられためめずみてえに苦しんでやがんンだ」

労働者の氣持は、労働者にはよくわかる——。

「大丈夫、あいつあ××な男ぢやねえから——まあ見てゐろ、きつと前方へ出る！」

12

幾々晩、長屋部落の眞ン中にある、平屋建のKクラブは、内も外も、人だかりでいつぱいだつた。

喜イ公と、村越は、裏口から、鈴生りになつてゐる窓の上の人々を押しわけて内部に入つていつた。

内部は人いきれでムンムンしてゐた。そしていやに靜しゆくだつた。頭と頭の隙間からはげしい叫びと一緒に、柔道衣の逆手逆の姿がチラチラ見えた。

正面に、銀製の大きな「社長杯」が光つてゐて、それを抱く

やうにして、事務の禿頭があり、左右に、各課工長なぞ事務所の連中がならんでゐた。

試合はモウ殆ンど終りに近づいてゐた。事務所の特等席の背後に、いつも豪い政治家や、坊さんや、社會政策家が來て說教するときに用ふ黑板に、紅軍と白軍の成績が貼出されてあつた。そして勝越してゐた紅軍は、白軍の大將、守衛長の柔道二段に出られて、モウ最後の、紅軍の大將「印度虎」一人をあますところまで來てゐた。

喜イ公も、村越も、グリグリ、頭で、人の脊中を押しのけながら前方へ出た――。

喜イ公は、印度虎を眼で探した。紅軍選手席の背後の方へ、石のやうに無表情な印度虎が坐つてゐた。

「何か、ありさうだね」

印度虎の眼附を見て、村越がさゝやいた。

「わからん」

喜イ公は、首を振つたが、心では何かを期待してゐた。

「あいつはいつも口で云ふよりやる方がさきなンだから――」

場内は緊張し、靜しゆくだつた。選手達は精魂をしぼつて、しめられながら、相手を絞めてゐる。一呼吸を一秒ながくつゞけば、「死」から「生」へ轉ずるのだ。相手を斃せるのだ。人々は呼吸をのみ、頰を硬ばらしてゐる。

「一本」

しかし、袴の股立ちをとつた審判の聲がきこえると、緊張は急に、陽氣なブルジョアスポーツの精神にかへる、扇子や、ハンカチがうごき出し、ゆるぎなき、盤石の、ブルジョアスポーツの「平和」が、觀衆を、そして選手を「××主義」への屈服へと驅りたてる――。

「館山虎太郎君！」

審判が「印度虎」の名を讀んだ。扇子やハンカチのうごきがとまり、印度虎ビイキの觀衆が拍手した。一本勝負、紅軍と白軍の勝敗も、「社長杯」の獲得も、これによつて決せられるのだ。

「印度虎あ――」

「黑ちやん、たのむよウ――」

觀衆は從業員だけに、守衛長より仲間の印度虎に、感情的にも勝たせたかつた。しかし、角力とちがつて、柔道では守衛長

に勝味があつた。

印度虎が出て來た。ベルが鳴つた。大將同志がぐつと近づいて型通り目禮すると、ツと立ち上つた。

兩軍の選手達も膝小僧をつつたてるやうに前こゞみになつた。喜イ公は、立ちあがつた瞬間の、印度虎の眼色を見た——たゞごとでねえ——。

パツと音がした。守衞長がキラつて印度虎の手をハネたのだ。立つて組ンでは、强力でかなはなかつた。放れて業を打つか、寢てしめるか——守衞長の作戰は、素早く、疊を蹴つて逃げる態度でゝもわかつた。

印度虎は踏み込んだ。——畜生ツ——松根つこのやうな腕がふるへてゐる——また踏み込む——。

印度虎に作戰なぞなかつた。勝敗もなかつた。燃える眼の色が捨身になつてゐた。「平和」なブルジョアスポーツではなかつた。守衞長の足がまた逃げた。うすうす相手の眼色に感じたのだ。氣魄におされながら逃げた、逃げながら、隙だけを覘つてゐた。

選手達も應援團も、觀衆も、みンなウナされてゐた。怖ろしい印度虎の氣魄が、いまゝでの試合とすつかり違つてゐた。

「おー」

短かい叫びが、守衞長の口から出た。選手のたまりまで追ひつめられた守衞長が、瞬間に、印度虎の浮いた左腰をねらつて飛びこむと、素早く印度虎の左手をたぐつて、そのまゝ「卷込」にゆかうとしたのだ。ホンの瞬間、印度虎の體が仰向に外つた。岩のやうな腰がくづれかゝつた。モロくも斜めになつた。審判が駈け寄つた。

「チツ、畜生！」

腰が落ちたら、深く入つた敵の左肩が、盤石になるのだ！

「チツ、チツ」

印度虎は喰ひしばつた齒の根から、血泡を吐くやうな聲を絞つて、瞬間をさゝへた。

誰一人、呼吸してなかつた。

「印度虎ア——」

觀衆の中で、ひいきの女工達の泣聲がきこえる——。

が、何といふ腰のつよさだ。くづれて落ちなかつた。相手は焦つて、腕をもつと深くしぼらうとしたが、そのまゝパツと飛

び退いた。印度虎の右手が、首にのびて來たからだ。

「うぬッ」

飛び退かれても、今度は、左手が相手の上袖をつかんでゐる。逃げられ、引き摺られながら印度虎は執拗に離さない。審判が規定の時間で、ベルを鳴らさうとした。が、こんどは印度虎が、ウオッと叫んだ。

強引にたぐつた相手の片腕を、そのまゝ深く入つたハネ腰にひつかつぐと、たすきにかゝつた一本背負ひ！　相手の身體が疊に落ちたとき、印度虎の眞黒な毛ズネが、その首根つこをおさへてゐた。

「一本ッ」

審判が怒鳴つたが、どうしたのか、下敷になつてゐる守衛長は、ひくゝうめいた。斜めにしごかれた彼の腕が、印度虎の股のつけ根あたりで、×××！　××××××××××——。

審判は顔色變へて慌てた。選手も、應援團も、正面にならんだ事務所の連中もさわぎ出した。

「××、いまのは！」

「たしかに××だ！」

白軍の選手達は、顔色を變へて、肩で息をしながら、凄い眼つきで突立つてゐる印度虎の方へ詰寄つて來た。それはスポーツの精神に、×××××してゐる！

「バ、馬鹿野郎ッ」

印度虎は嚙みつくやうに怒鳴りつけた。印度虎に怒鳴られると紅軍の選手たちもアトしざりした。印度虎は傍で、審判に蘇生さして貰つてる守衛長を尻目にかけながら、荒い息づかひで云つた。

「俺アいまたしかに××××××××。だがこいつや、ホラ向うにゐる（事務達の席を指して）あいつらに、俺らの仲間は、何十人、×××××××、てめたちにやわからねえか」

「さうだ、間違ひねえ」

喜イ公が駈け寄つて、印度虎を庇ひながら叫んだ。

「印度虎の云ふことは眞實だ、嘘だと思ふなら皆のまはりを氣をつけてみろ！」

しかし、觀衆はそれをしまひまで聽かれなかつた。そのとき背後から投げられた×××××××落ちて來たからだ。

スポーツを俺等のものにしろ！

従業員諸君！會社は、俺達青年を、ブルジョアスポーツで、×××にさせてゐる。「×××」欲しさのため、俺達は、俺達の背後で、×××××××××××××遂はされとるかもわからないのだ！

俺達のやるスポーツは、あくまで、勞働者のスポーツでなくてはならぬ。

野球も、角力も、柔道も、釣遊會も、賢母の會も、映畫交友會も、將棋天狗會も、俺らのやる俺らのスポーツからは、一切合切、會社×××をハネのけろ！

「×××」×××××！

ブルスポーツ××を、プロスポーツ××に取換へろ！

俺達の「××スポーツ」を確立しろ！

沸きたつ觀衆の中を、呆氣にとられて、手の出しやうのない事務所の連中や、受取り手のない「社長杯」を尻目にかけて、紅軍の選手や、喜イ公達は、印度虎を中心にして、場外へ押し出した。

「印度虎、バンさあい」

「×××××、ばンさあい」

13

明けて日曜日の朝早く、工場ウラ空地には、昨夜の柔道大會より、五六倍もの多數の従業員が押しかけて來た。

刷かれた白線を中心に、サヾナミ側は一壘側に、ツバサ側は、三壘側に、觀衆全部が應援團であつた。作業部門の聯絡によつて、彼等はその近い方へ味方し應援した。

しかし、觀衆の中には、昨夜の柔道大會を見に來てゐた從業員が多數あつた。それが昨夜の出來事の噂をひろめた。

選手が入場して來た。サヾナミ側も、ツバサ側も、兩方の選手が一緒になつて入場してきた。

「おそろしく、仲がええなア」

「ふンとだ」

觀衆達は總立ちになりながら拍手した。先頭に、サヾナミのキャプテン松岡や、人氣男のツバサ投手喜イ公や勇次郎なぞもまぢつて、元氣よくまるでメーデーのデモみたいに入場して來た。

そして観衆達は、も一度おどろいた。選手團のすぐ次に、相撲團、柔道團の選手達にかこまれて、一本の竹の先にひらめかせた寒冷紗の旗が、ひるがへりながら入つて來る。

「な、なンだ」

「――印度虎、を、クビにするな！　ホウ!!」

しかも、その先頭に、當人の印度虎が、坊主つくりの眞黑氣な大きな圖體で歩いて來た。皆、譯がわかつたやうな、わからないやうな顔付で――しかし、とにかく、彼等の親愛なる印度虎へ喝采した。

昨夜の一件の噂が、また皆の間を野火のやうに擴がつた。

――印度虎を馘首にするな！

旗はひるがへりながら場内を一廻する選手團にかこまれてめぐつた。

皆は少しづゝ譯がわかつた。そして一樣に、ネット裏の、天幕張りの事務所席を見たが、事務所の誰もゐなかつた。この特等席には、近所の長屋の女房や、アセモだらけのガキ共が、いつぱいになつて占領してゐる。

日よけもない、工場ウラ空地は、煉瓦の建物にかこまれて、太陽が直射してゐる。紅い着物や、黄色くなつたカンカン帽やが、左右にゆれながら、やがて、一側から應援歌が歌ひ出された。

文化のさきがけ
御國の柱
アジアにほこる
大（K）印工場

これは會社制定の應援歌だ。調子が早くなつて、女工達は絵傘を、男工達は帽子を振る――。

われらのK印
われらのサヾナミ
フレー、フレー、フレー

試合開始だ！　サヾナミの先攻!!

印度虎や村越と、ネットのうらで話してゐた喜イ公が、ソン

とき駈け出していつた。

　昨夜以來、印度虎も喜イ公も、村越やそれに柔道の選手團も雜ざつて今朝方まで、各スポーツ團體の幹部のうちを訪問して一晩のうちに、K印の各競技團體は、一致して『印度虎の馘首を護る！』までに漕ぎつけたのだ。

　會社は先手を打たれた。これには、逆宣傳が利かなかつた。ゴマ化しが出來なかつた。おまけに團體であり、青年分子であつた。燃えつかせるだけの火力があれば——そして燃えつけば、カンタンに引つこぬく譯にもゆかなかつた。各スポーツ團體は、從業員全體への影響力を持つてるのだ——そして、S勞働のこまかい配慮と、喜イ公や村越の努力と、各スポーツ團きつての勢力家、印度虎が五十幾名の角力および柔道の選手をひきゐての踏ンばりに、燃えつかぬ譯はない！

　印度虎は、サヽナミとツバサの兩方の委員と聯絡をとるために駈け廻り、村越は、小さい紙片を觀衆のうしろから配つてあるいた。

　サヽナミ側は釣遊會幹事の「のんべ熊」が應援團長、ツバサ側は「印度虎」……。そして各選手が前列へ出て一緒に音頭をとつてゐる——。

　球審が、白い球をツバサの第一投手喜イ公に渡した。

「よウ、喜イ公ツ」

「たのむわよウ」

　ニコニコしながら、ボックスに立つと喜イ公は、力を籠めた最初の一球をおくつた。

「ストライクワン！」

　ドツと喊聲がツバサ側に上る。そして觀衆の中に、また一本の新らしい長旗が突立つた——。

——××××萬歲!!

　ばんざあい！　ワケなしに觀衆はそれに應じた。火は燃え擴がりつゝあつた。

　そして、逆上してまだはつきりしない觀衆を、不調和な騷音がかきみだした。應援團長が音頭をとつて、前列の方が唄つてゐる文句は調子が違ふのだ!!

「にくしみのるつぼに
　赤くやくる」

馬鹿に調子ッぱづれに、まちまちに、——しかし、印度虎は諸肌おしぬいで、大きな腕をふりまはしながら音頭をとつてゐる。皆はさつきくばられた小さい紙片をとり出した。

「鐵のつるぎを
　うちきたへよう」

サヽナミ側でも唄つてゐる。歌聲は少しづゝ、ひろがつていつた。そしてしだいに「會社の歌」を揉み消した。

「屈辱の歴史
　この日閉づる」

急に、皆は、ブルジョアスポーツの陽氣さから轉落した。へんテコな歌の調子が、しだいに己れの現實へ誘つた。バットのひゞきも、守備軍の態度も、一樣に場内の空氣に支配されて來た。

「そウら、モ一丁ッ」

印度虎が、大きな腕を振る……。

太陽の熱氣はしだいにつよく、若い男女工も、長屋の女房やガキ共までが、涙のやうに汗を流しながら唄つた。

「鐵のつるぎを
　うちきたへよ」

皆の頭に×がうまれた——非現實的な夢の、ヒツさらはれた眼前に、巨大な×がたつてゐるのを見た。

——印度虎を馘首にするな!—

そして今度はまた、外野の眞ン中に、十四五人の馘首者、或は××××××××たちに護られて、大きな旗が押したてられた。

——大量馘首に反對せよ、××的S勞働組合に參加せよ!

支へてたつてゐる人々は、觀衆にとつてツイ昨日までの仲間だつた。觀衆は、いま改めて、馘首された犧牲者達を見た。そしてそれは先日、一人と一人で默つて見おくつたそのときとはすつかり違つてゐた。大衆は、いま自分達の足場を知り、×を

知つた。

皆は、拍手が出來なかつた。喝采が出來なかつた。犠牲者達の顔を見て、ゴクリと唾を呑ンだ。眞夏の太陽より熱いものが腹の底で沸いた。

「ガンばつて、も一丁」

印度虎が、また音頭をとる――。

「屈辱の歴史

この日閉づる」

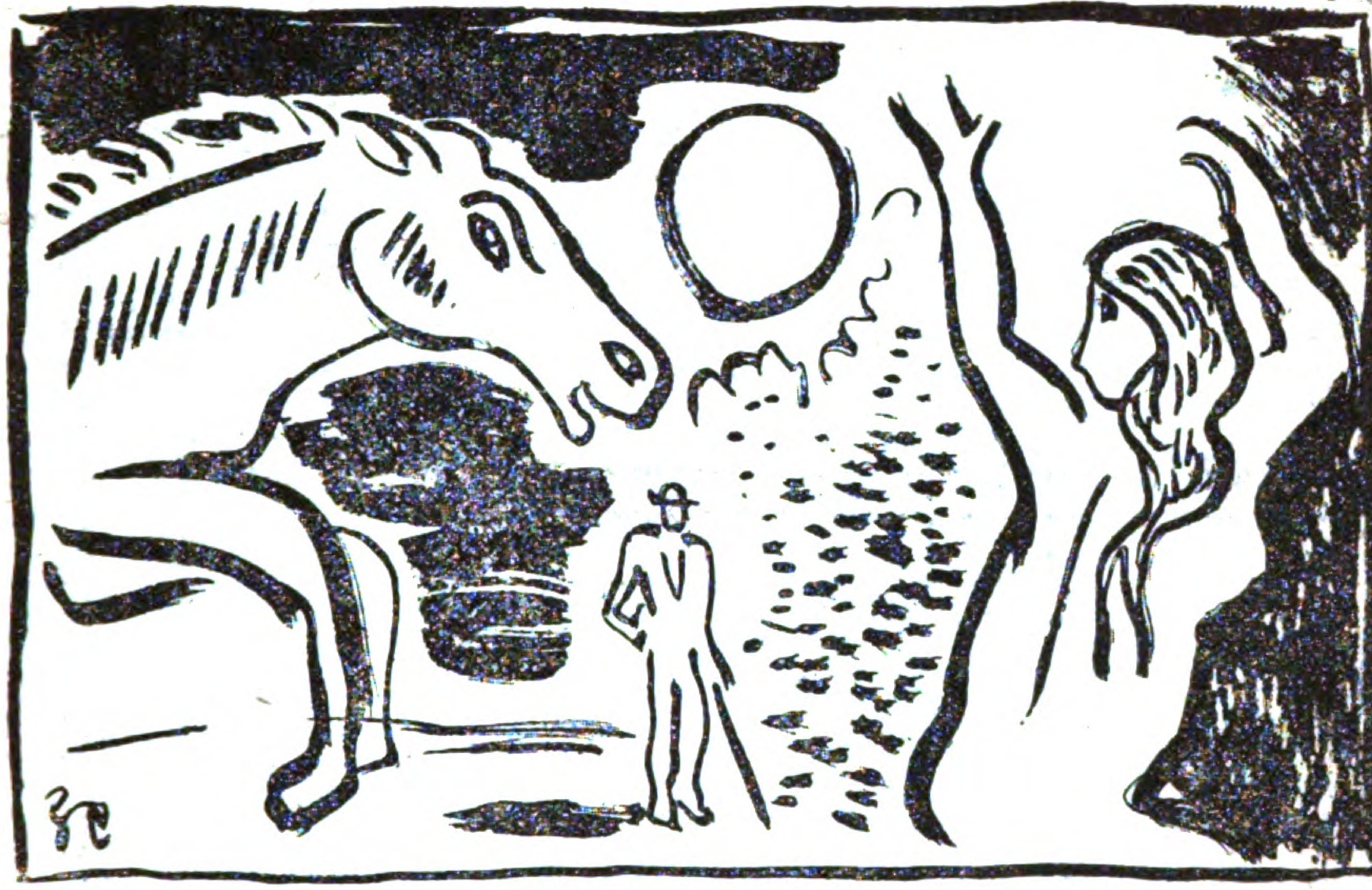
火が點いた。イブリながら、モミ消されやうとしながら、いま急所に燃えついた。會社が動員した、選りすぐつた精鋭に、集團に、そつくりそのまゝ底から火が點いた。

眞赤な太陽の下で、カゲラウと一緒に、音をたてながら、火となつて燃えついたのだ。

「最後の戰ひを、

戰ひぬかん」

(一九三〇・八・五)



淺草紅團

川端康成

一

前科七十何犯──牛込の横寺町、旗本の娘と生れた身が、淺草公園の淡島さまの奥で、のたれ死にするまでにだ。

淺草の名物女「土手のお金」といへば、あゝ、あれかと、その醉つぱらひ姿を思ひ出す諸君も少くないだらう。──人だかりの眞中へ仰向けにぶつ倒れて、毒々しい啖呵を切つた婆さんだ。

例へば、近頃のレヴイウを見せると、淺草の土地つ子は笑ひながら、

「日露戰爭の頃でせうか、（海女の水潛り）といふ見世物がござんした。あれから見ると、海水着姿のダンスなんか、お上品なもんでさ。」

大きい水槽であつた。海草を植ゑ、深い底には貝殼が光つてゐた。水中眼鏡に赤い褌よけ一つの海女が、水の中に髪を振りみだして、歌麿の描く鮑取りの女よろしく、底の貝殼を拾ふのだ。水中ダンスだ。「人魚のお松」とかいふ花形が出來やうといふものだ。

しかし、そんな土地つ子の昔話を聞くまでもない。土手のお金が六十二歳で死んだのは、あの肉襦袢の玉乘娘が淺草に見られなくなつたよりも、もつと後のことなのだ。

明治十七年から建つはずでいつまでも建ちさうにない。雷門——この淺草の表門さへ、紙屑問屋のおぎんといふ娘のために燒けた淺草である。昔をいへばきりがない淺草の女だ。

水茶屋の茶汲女のはじまりが二百年前だ。次が楊枝屋の女だ。楊弓屋の矢取女だ。もう明治だ。銘酒屋の元祖だ。そして、新聞縱覽所の女だ。碁會所の女だ。麥とろ屋の女だ。射的屋の女だ。造花屋の女だ。——十二階下の銘酒屋だ。もう大正だ。「大正藝者」だ。大地震だ。十二階の塔といつしよに、いろんな女が消えたのだ。

しかしまた、嘉永年間、輪王寺宮お出入の植木師森田六三郎が宮家から賜つた庭園——なんていふ、今日の淺草の見世物小屋で一番古い由緒つきの花屋敷、それかあらぬか、今だつてあやつり人形だとか、山雀の曲藝だとか、また人形師の名人安本龜八の菊人形花やかなりし頃を、微かに思ひ出させる活人形だとか、昔なつかしいものを見せてはゐるが、

——花やしき 納涼 晝夜開園芝居 ヤマガラ アヤツリ

レヴイウとダンス

諸君、「電光ニユウス」なのだ。やはり電光で描いた象と猿とが、これらの文字をひつぱつて、入口の上を歩いてゐるのだ。ネオン・サインで表を飾つた小屋は殖えてゆくが、花屋敷の電光ニユウスは、一九三〇年の夏淺草の「斷然トツプを切つた」のだ。

最も古風な花屋敷がこれだ。消えたいろんな女のかはりに、この「電光ニユース」まがひの女が、淺草に現れてゐるにちがひない。さういふ女達も、追々と私は諸君の前に拾ひ上げてみよう。

だからといつて、その昔の「不良文士」、蜀山人こと太田南畝なんかの亞流と、私が思はれるならば殘念だ。

——銀杏稻荷問於笠森稻荷曰 盍聞君地有阿仙者 孰與吾家阿藤

蜀山人の「阿仙阿藤優劣辨」だ。

當世は、レヴイウの踊子の評判を立てたりする文士、例へば水族館に出入りする文士のことを、淺草の喫茶店やミルク・ホ

オテルに根を張つてゐる青年達は、この頃「不良文化」と呼びならはしてゐるのだ。

とにかく、笠森お仙と艶をきそつたお藤は、二代目瀨川路考が市村座でお藤に扮した時の衣裳、濃い茶色が路考茶といふ名で流行した、あのお藤だ。本柳屋仁平治といふ楊枝屋の娘だ。店は觀音堂裏の相生銀杏の下にあつた。呼賣りにも歌はれた。勿論、彼女の錦繪も賣れた。

錦繪が今のブロマイドだが、田原町の紙屑問屋の娘おぎんも、一枚繪に描かれたほどの小町娘だつたのだ。その繪姿を見たのが病みつきで、やがてはいひなづけの新吉からおぎんを奪つたのが、本所三笠町の岸上良太郎といふ、一千石の旗本の次男坊だ。婚禮の夜に新吉のつけた火が、雷門も燒いたのだ。

それは一八六五年の慶應元年、もう明治が足もとに迫つた世の中だが、紙屑問屋の娘や親にとつては、直參の旗本といふものが、まだ眩しい魅力であつたにちがひない。土手のお金もその旗本の娘だつたのだ。

2

お金は十六で川越へ酌婦に賣られた。旗本が明治維新で落ちぶれたのだ。川越を振出しに浮草だ。そして、明治二十年頃、三十一で東京へ舞ひ戻つたのだ。吉原土手の銘酒屋だ。酒亂と、前科と――「土手のお金」の名が高くなつた。

しかし、五十に近くなると、彼女はもう街に立つて、木賃宿を渡り歩くよりしかたがない。

「公園は今だめですぜ。」と、自轉車の銀公が私にいつたことがある。

「芥溜さがしみたいに物好きな道樂者には、吉原の外まはりが一番で、それから田中町あたりだね。木賃宿の町でさ。二十くらゐの女が三人で立つてるのがありますよ。三人一組で二階を借りてるんですが、例の月六妻といふのもやつてね、それがなんでも、一度が×××錢にあたるつて話さ。これなんか年は若いし、まあ上の部だね。」

それだつた土手のお金も、六十が近くなつては、物かけで稼がねばならなくなつたのだ。土の上のおきふしだ。「シキ」から「ソトシキ」へだ。相手がたいてい浮浪者だからだ。六十二でのたれ死したのは、お金のせめてもの死花だつたのだ。死ぬまで女として働いたからだ。ツブやタイガラまで落ちずにすんだ

からだ。酔つぱらつて喧嘩が切れたからだ。

浮浪人のそのまたどん底の浮浪人は——といつても、決して浮浪するわけではなく、さうだ、いはば風化した人間の姿、いや、朝から夜まで同じベンチに座つてゐる、翌る日もまだ座つてゐる、だから風化するのももつともだが、諸君は明公の言葉を思ひ出してくれるだらうか。

「分つた? あれもさんぎりお何の一人。たいていあんなものよ。浅草の底ね。だけどまだ、走るだけ女の冥加や。浮浪人は決して走りやしないから。」

そしてまた、風化したほどの彼等はしやべらないのだ。盛り場の眞中で言葉なしに暮すのだ。

「レデイ・バアドつて、毛唐はいふでせう。」

これもある朝公園で弓子の言葉だ。

「レデイ・バアド?」

「てんたう虫のことをよ。女の鳥ですつて。支那では紅の娘。——女もおてんたうさまの下で、朝化粧するやうになつちや、もうちよいと浮べないわね。」

植込みの圍ひの鎖に腰をかけて、若い女が二人コンパクトで、朝化粧してゐるのだ。帯のうしろが皺になり、夜の土がついてゐる。

共同便所の手洗ひの水道栓にゴム管をつけて、ある食べもの屋が食用の水を汲んでゐる。

野鼠が二三匹、ベンチからぶら下つた露宿者の足の、古いゴム足袋を嚙つてゐる。——この鼠は浅草の朝で最も私を驚かせたものだ。昆虫館の裏で見たのだ。

化粧をすませて、彼女等は歸つて行く。昨夜は「ソトシキ」だつたのだ。

水茶屋、楊枝屋、楊弓屋、新聞縦覧所——この流れの下のもう一つの流れを、諸君は聞いたことがあるにちがひない。けころ、提げ重、勧進比丘尼、夜鷹、それから今のゴウカイヤだ。宿なしお勝、稲妻のお玉、阿呆のお幸、すが目のお久——その名が活字になつてゐるゴウカイヤも多いが、土手のお金は断髪のおよしのやうに乞食の子供でもなければ、馬鹿のお清のやうに生れつきの薄のろでもないだけに、尚更女の階段を底まで下りた典型なのだ。

そこで、お金より二年も早く稼ぎはじめた龍泉寺の少女はど

うなるか。
また諸君は、弓子の姉のお千代が「おてんたうさまの下で朝化粧する女」であることを知つてゐる。

3

鉛の板をしきつめたやうなアスフアルトが、桃色に染つて光つてゐる。と、まだ目覺めない街に散らばつた赤い色が、なんと鮮かに浮び上つてゐることだ。電車の響きのさやけさが、午前五時だ。
言問橋を染めた桃色の朝日の中には、昨晩の尿のあとがだんだら模樣だ。しかし隅田公園は自然に描いた設計圖のやうに、裝飾が少く、清潔なHだ。つまり、向島堤と淺草河岸との二本の直線の眞中を、言問橋が結んでゐるのだ。
隅田川の流れは、日が射せば黄色く、日がかげれば泥色だしかし、橋の面には輕い檣のやうな欄干と、鉛筆のやうな照明の柱のほかに、何の鐵骨構造もないので、一枚の力強い、單純な鐵板の直線の晴れ晴れしさだ。秩父や筑波の山々の見える晴れは珍らしいが、橋の上に立つと、どこからとなく關東平野の廣々しさが流れて來るのだ。
一五八・五〇メエトルの長さだ。ゆるやかな弧線を描いてゐるが、隅田川の新しい六大橋のうちで、清洲橋が曲線の美しさとすれば、言問橋は直線の美しさなのだ。清洲は女だ。言問は男だ。
だから、夏子は欄干の鐵に頬をぴつたり載せて、
「おお、冷い。」
彼女はいつも厚化粧して、十六だ。しかし、唇を唇で舐める癖がある。だからよく、濃い口紅を唇の外へにぢませてゐることがある。そこを甘く見てひつかかるのだ。
勿論口紅は昨夜にぢんだままだ。
「橋に霧がついてるよ、チビ、遠くを見るとまだ降つてんのが分るわ。」
「さうかい。」
「眠いわね。」
「今夜から縛りつけて寢てくんないかな、千代ちやんの體とお前と、紐かなんかで。」
「頬ぺたに霧がくつついちやつた。」
右頬の白粉が吸ひ取られたやうにむらだ。

「霧だか露だか分んのかい。」

拾ひ屋の箱車が本所から淺草へ桔梗色の羽織の女を乘せた圓タクが本所から淺草へ。支那そば屋の歸りが淺草から本所へ、青年野球隊が本所から淺草へ、マラソン選手が淺草から本所へ、また拾ひ屋が本所から淺草へ、白い砂のやうに體がすつかり見える洋服の女が、靴下なしの下駄ばきで淺草から本所へ——明るくなつたので格好が取れないといふ急ぎ足だが、なぜ裸のやうな薄物なのか、全く分らない。そのほかには勞働者が三四人きりで、まだ空自動車も通らない。

「大晦日の夜中はひどい霧だつたわね。霧のお蔭で弓子が命拾ひをしたわね。」

「ようつ。」と、船チビは板草履を兩手に持つて、もう橋の欄干の上に突つ立つてゐた。

そのまま綱渡りのやうなちよこちよこ走りだ。欄干は大人の乳の高さだ。親指と小指を擴げた幅だ。

「ちえつ、馬鹿にするな。」と、夏子は一散に走り出した。

洲崎埋立地の塵芥燒却場の大煙突のてつぺんから、避雷針の白金を盜んだ少年があつたといふ。

淺草の五重塔の上に少年が巣食つてゐたといふ話もある。團十郎の劔の柄を盜んだのも少年だつた。

さういふ放れ業はとにかく、例へば瓢簞池の東岸、花屋敷の前の築山の腹を割つて共同便所が出來たが、そのコンクリイトの屋上庭園、そこは涼み臺ともなり、寢臺ともなるのだが、欄干はやはり言問橋と幾らもちがはない幅だ。その欄干の上へ仰向けに眠つてゐる男を、諸君は見かけたことはないか。脊が兩方へ食み出して、足を兩側へぶら下げてだ。

言問橋の欄干を歩く子供を、私はもう二三人見てゐるのだ。いつも朝だ。

「あれでやつと眼が覺めたよ。」と、隅田公園へ階段を下りると、いきなり橋の下へ走り込むと、腹一ぱいの聲で叫び續けた。

「馬鹿あ。馬鹿あ。馬鹿あ。」

それが鋼鐵のこだまだ。

4

——この公園はまだ工事中で、特に芝生は養成中ですから、

それより私も彼のやうに出來得る限り主人の愛情を利用して今の中に仕事の秘密を盗み込んでしまう方が良いのであらうとまで思ひ出した。それで私は彼にあるときもう自分もここに長くゐるつもりはないのだがここを出てからどこか良い口はないかと訊ねてみた。すると彼はそれは自分の訊ねたいことだがそんなことまで君と自分とが似てゐるやうでは君だつて豪さうなことも云つてゐられないではないかと云ふ。それで私は君がさう云ふのも尤もだがこれは何も君をひつかけてとやかうと君の心理を掘り出すためではなく、却つて私は君を尊敬してゐるのでこれから實は弟子にでもして貰ふつもりで頼むのだと云ふと、弟子かと彼は一言いつて輕蔑したやうに苦笑してゐたが、俄に眞面目になると一度私に、周圍が一町四方全く草木の枯れてゐる鹽化鐵の工場へ行つて見て來るやう萬事がそれからだと云ふ。何がそれからなのか私には分らないが屋敷が私を見た最初から私を馬鹿にしてゐた彼の態度の原因がちらりとそこから見えたやうに思はれると、いつたい此の男はどこまで私を馬鹿にしてゐたのか底が見えなくなつて來てだんだん彼が無氣味になると同時に、それなら屋敷をひとつこちらから輕蔑してかかつてやらうとも思ひ出したのだが、それがなかなか一度彼に魅せられてしまつてからはどうも思ふやうに藥がきかなくただ滑稽になるだけで、優れた男の前に出るとかうもこつちが惨めにぢりぢり修業をさせられるものかと歎かはしくなつてくるばかりなのである。ところが、急がしい市役所の仕事が漸く片附きかけた頃のこと、或る日輕部は急に屋敷を仕事場の斷截機の下へ捻ぢ伏せてしきりに白狀せよ白狀せよと迫つてゐるのだ。思ふに屋敷はこつそり暗室へ這入つたところを輕部に見附けられたのであらうが私が仕事場へ這入つていつたときは丁度輕部が押しつけた屋敷の上へ馬乘りになつて後頭部を殴りつけてゐるところであつた。とうとうやられたなと私は思つたが別に屋敷を助けてやらうと云ふ氣が起らないばかりではない。日頃尊敬してゐた男が暴力に逢ふとどんな態度をとるものかとまるでユダのやうな好奇心が湧いて來て冷靜にぢつと歪む屋敷の顔を眺めてゐた。屋敷は床の上へ流れ出したニスの中へ片頬を浸したまま起き上らうとして慄へてゐるのだが、輕部の膝骨が屋敷の背中を突き伏せる度毎にまた直ぐべたべたと崩れてしまつて着物の捲れあがつた太つた赤裸の兩足を不恰好に床の上で藻掻かせ

てゐるだけなのだ。私は屋敷が輕部に少なからず抵抗してゐるのを見ると馬鹿馬鹿しくなつたがそれより尊敬してゐる男が苦痛のために醜い顔をしてゐるのは心の醜さを表してゐるのと同様なやうに思はれて不快になつて困り出した。私が輕部の暴力を腹立たしく感じたのもつまりはわざわざ他人にそんな醜い顔をさせる無禮さに對してなので、實は輕部の腕力に對してではない。しかし、輕部は相手が醜い顔をしやうがしまいがそんなことに頓着してゐるものではなくますます上から首を締めつけて毆り續けるのである。私はしまひに默つて他人の苦痛を傍で見てゐると云ふ自身の行爲が正當なものかどうかと疑ひ出したが、そのぢつとしてゐる私の位置から少しでも動いてどちらかへ私が荷擔をすればなほ私の正當さはなくなるやうにも思はれるのだ。それにしてもあれほど醜い顔をし續けながらまだ白狀しない屋敷を思ふといつたい屋敷は暗室から何か確實に盗みとつたのであらうかどうかと思はれて、今度は屋敷の混亂してゐる顔面の皺から彼の秘密を讀みとることに苦心し始めた。彼は突つ伏しながらも時々私の顔を見るのだが彼と視線を合はす度に私は彼へだんだん勢力を與へるためにやにや輕蔑したやうに笑つてやると、彼もそれには參つたらしく急に悄然として始めて輕部を上から轉がさうとするのだが輕部の強いと云ふことにはどうしやうもない、ただ屋敷は奮然とする度に強くどしどし毆られていくだけなのだ。しかし、私から見てゐると私に笑はれて奮然とするやうな屋敷がだいいちもうぼろを見せたので困つたどん詰りと云ふものは人は動けば動くほどぼろを出すものらしく、屋敷を見ながら笑ふ私もいつの間にかすつかり彼を輕蔑してしまつて笑ふことも出來なくなつたのもつまりは彼が何の役にも立たぬときに動いたからなのだ。それで私は屋敷とて別にわれわれと變つた人物でもなく平凡な男だと知ると、輕部にもう毆ることなんかやめて口で云へば足りるではないかと云つてやると、輕部は私を埋めたときのやうにまた屋敷の頭の上から眞鍮板の切片をひつ冠せて一蹴り蹴りつけながら、立てといふ。屋敷は立ち上るとまだ何か輕部にせられるものと思つたのか恐わさうにぢりぢり後方の壁へ背中をつけて輕部の姿勢を防ぎながら、暗室へ這入つたのは地金の裏のグリューがカセイソーダでは取れなかつたからアンモニアを捜しにいつたのだと早口に云ふ。しかし、アンモニアが入用なら何ぜ云はぬか、

ネームプレート製作所にとつて暗室ほど大切な所はないことぐらゐ誰だつて知つてゐるではないかと云つてまた輕部は毆り出した。私は屋敷の辯解が出鱈目だとは分つてゐたが毆る輕部の掌の音があまり激しいのでもう毆るのだけはやめるが良いと云ふと、輕部は急に私の方を振り返つて、それでは二人は共謀かと云ふ。だいたい共謀かどうかから云ふことは考へれば分るではないかと私は云はふとしてふと考へると、なるほどこれは共謀だと思はれないことはないばかりではなくひよつとすると事實は共謀でなくとも共謀と同じ行爲であることに氣がついた。全く屋敷に悠々と暗室へなど入れさしておいて主人の仕事の秘密を盜まぬ自身の方が却つて惡い行爲をしてゐると思つてゐる私である以上は共謀と同じ行爲であるにちがひないので、幾分どきりと胸を刺された思ひになりかけたのをわざと圖太く構へ共謀であらうとなからうとそれだけ人を毆ればもう充分であらうと云ふと今度は輕部は私にかかつて來て、私の顎を突き突きそれでは貴樣が屋敷を暗室へ入れたのであらうと云ふ。私は最早や輕部がどんなに私を毆らうとそんなことよりも今まで毆られてゐた屋敷の眼前で彼の罪を引き受けて毆られてやる方が屋敷にこれを見よと云ふかのやうで全く晴れ晴れとして氣持ちが良いのだ。しかし私はさうして輕部に毆られてゐるうちに今度は不思議にも輕部と私とが示し合せて彼に毆らせてでもゐるやうでまるで反對に輕部と私とが共謀して打つた芝居みたいに思はれだすと、却つてこんなにも毆られて平然としてゐては屋敷に共謀だと思はれはすまいかと懸念され始め、ふと屋敷の方を見ると彼は毆られたものが二人であることに滿足したものらしく急に元氣になつて、君、毆れ、と云ふと同時に輕部の背後から彼の頭を續けさまに毆り出した。すると、私も別に腹は立ててはゐないのだが今迄毆られてゐた痛さのために毆り返す運動が愉快になつてぽかぽかと輕部の頭を毆つてみた。輕部は前後から毆り出されると主力を屋敷に向けて彼を蹴りつけやうとしたので私は輕部を背後へ引いて邪魔をすると、その暇に屋敷は輕部を押し倒して馬乘りになつてまた毆り續けた。私は屋敷のそんなにも元氣になつたのに驚いたが幾分私が理由もなく毆られたので私が腹を立てて彼と一緒に輕部に向つてかかつていくにちがひないと思つたからであらう。しかし、私はもうそれ以上は輕部に復讐する用もないのでまた默つて毆られてゐる輕部を

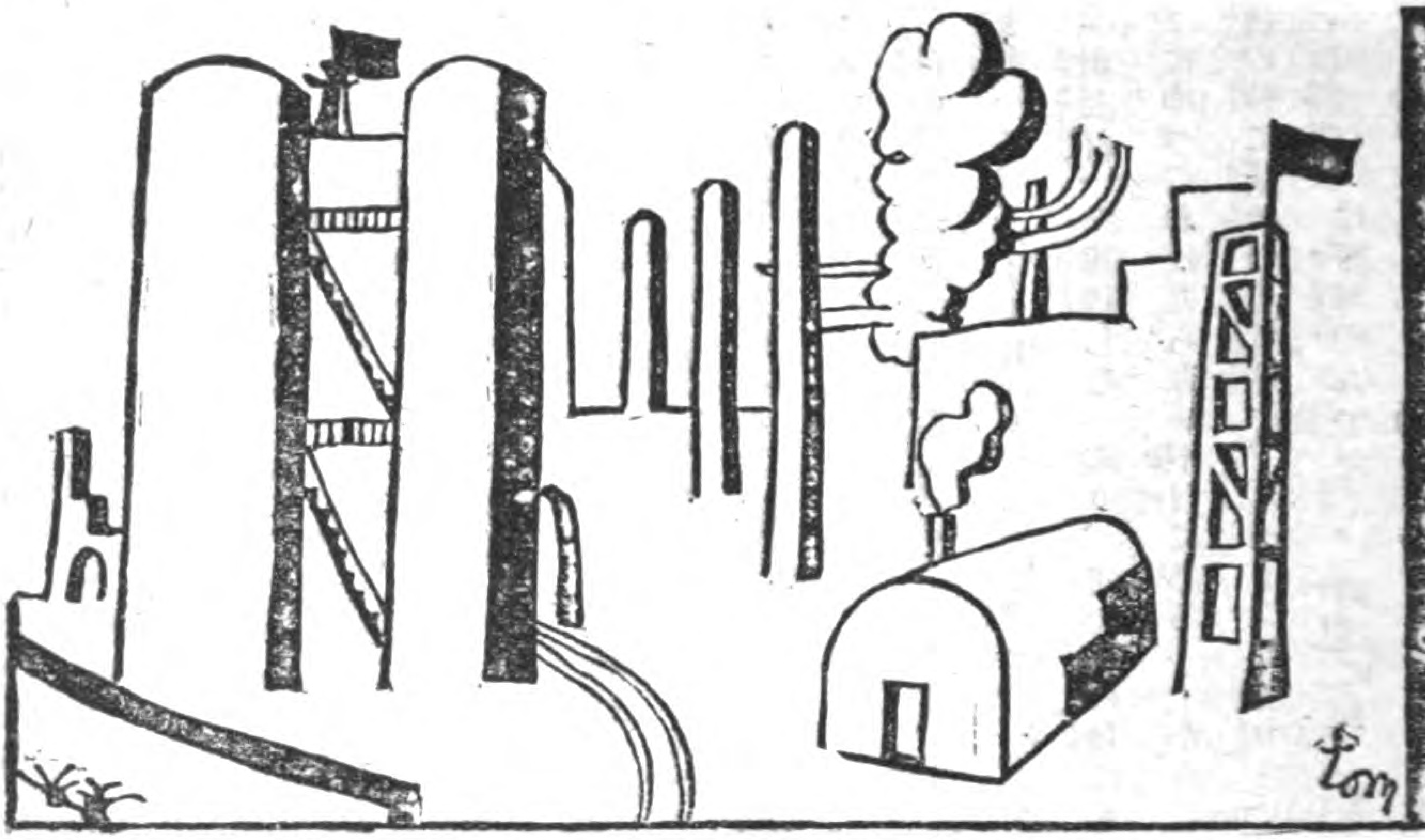
見てゐると輕部は直ぐ苦もなく屋敷をひつくり返して上になつて反對に彼を前より一層激しく毆り出した。さうなると屋敷は一番最初と同じことでどうすることも出來ないのだ。だが、輕部は暫く屋敷を毆つてゐてから私が背後から彼を襲ふだらうと思つたのか急に立上ると私に向つて突つかゝつて來た。輕部と一人同志の毆り合ひなら私が負けるに定つてゐるのでまた私は默つて屋敷の起き上つて來るまで毆らせてゐてやると、起き上つて來た屋敷は不意に輕部を毆らずに私を毆り出した。一人でも困るのに二人一緒に來られては私ももう仕方がないので床の上に倒れたまま二人のするままにさせてやつたが、しかし私はさきからそれほどもいつたい惡行をして來たのであらうか。私は兩腕で頭をかかへてまん丸くなりながら私のしたことが二人から毆られねばならぬそれほども惡いかどうか考へた。なるほど私は事件の起り始めたときから二人にとつては意表外の行爲ばかりをし續けてゐたにちがひない。しかし、私以外の二人も私にとつては意外なことばかりをしたではないか。だいいち私は屋敷から毆られる理由はない。たとへ私が屋敷と一緒に輕部にかからなかつたからとは云へ私をもそんなときにかからせてやらうなどと思つた屋敷自身が馬鹿なのだ。さう思つてはみても結局二人から、同時に毆られなかつたのは屋敷だけで一層毆られるべき責任のある筈の彼が一番うまいことをしたのだから私も彼を一度毆り返すぐらゐのことはしても良いのだがとにかくもうそのときはぐつたり私たちは疲れてゐた。實際私たちの此の馬鹿馬鹿しい格鬪も原因は屋敷が暗室へ這入つたことからだとは云へ五六枚のネームプレートを短時日の間に仕上げた疲勞がより大きな原因になつてゐたに定つてゐるのだ。殊に眞鍮を腐蝕させるときの鹽化鐵の鹽素はそれが多量に續いて出れば出るほど神經を疲勞させるばかりではなく人間の理性をさへ混亂させてしまふのだ。その獸本能だけはますます身體の中で明瞭に性質を表して來るのだから此のネームプレート製作所で起る事件に腹を立てたりしてゐてはきりがないのだがそれにしても屋敷に毆られたことだけは相手が屋敷であるだけに私は忘れることは出來ない。私を毆つた屋敷は私にどう云ふ態度をとるであらうか、彼の出方でひとつ彼を赤面させてやらうと思つてゐるといつ終つたとも分らずに終つた事件の後で屋敷が云ふにはどうもあのとき君を毆つたのは惡いと思つたが君をあのとき

毆らなければいつまで輕部に自分が毆られるかもしれなかつたから事件に終りをつけるために君を毆らせて貰つたのだ、赦してくれと云ふ。實際私も氣附かなかつたのだがあのとき一番惡くない私が二人から毆られなかつたなら事件はまだまだ續いてゐたにちがひないのだ。それでは私はまだ矢つ張りこんなときにも屋敷の盜みを守つてゐたのかと思つて苦笑するより仕方がなくなりせつかく屋敷を赤面させてやらうと思つてゐた樂しみも失つてしまつてますます屋敷の優れた智謀に驚かされるばかりとなつたので、私も忌々しくなつて來て屋敷にそんなにうまく君が私を使つたからには暗室の方も定めしうまくいつたのであらうと云ふと、彼は彼で手馴れたもので君までそんなことを云ふやうでは輕部が私を毆るのだつて當然だ、輕部に火を點けたのは君ではないのかと云つて笑つてのけるのだ。なるほどさう云はれれば輕部に火を點けたのは私だと思はれたつて辯解の仕樣もないのでこれはひよつとすると屋敷が私を毆つたのも私と輕部が共謀したからだと思つたのではなからうかとも思はれ出し、いつたい本當はどちらがどんな風に私を思つてゐるのかますます私には分らなくなり出した。しかし事實がそんなに不明瞭な中で屋敷も輕部も二人ながらそれぞれ私を疑つてゐると云ふことだけは明瞭なのだ。だが此の私ひとりにとつて明瞭なこともどこまでが現實として明瞭なことなのかどこでどうして計ることが出來るのであらう。それにも拘らず私たちの間には一切が明瞭に分つてゐるかのごとき見えざる機械が絶えず私たちを計つてゐてその計つたままにまた私たちを押し進めてくれてゐるのである。さうして私達は互に疑ひ合ひながらも翌日になれば全部の仕事が出來上つて樂々となることを豫想し、その仕上げた賃金を貰ふことの樂しみのためにもう疲勞も爭ひも忘れてその日の仕事を終へて了ふと、いよいよ翌日となつてまた誰もが全く豫想しなかつた新しい出來事に逢はねばならなかつた。それは主人が私たちの仕上げた製作品とひき換へに受け取つて來た金額全部を歸りの途に落してしまつたことである。全く私たちの夜の目もろくろく眠らずにした勞力は何の役にも立たなくなつたのだ。然も金を受け取りにいつた主人と一緒に私を此の家へ紹介してくれた主人の姉があらかじめ主人が金を落すであらうと豫想してついていつたと云ふのだから、このことだけは豫想に違はず事件は進行してゐたのにちがひないが、ふ

と久し振りに大金を儲けた嬉しさからたとへ一瞬の間でも良い儲けた金額を持つてみたいと主人が云つたのでつひ油斷をして同情してしまひ、主人に暫くの間その金を持たしたのだと云ふ。その間に一つの缺陷がこれも確實な機械のやうに働いてゐたのである。勿論落した金額がもう一度出て來るなどと思つてゐる者はゐないから警察へ屆けはしたものの一家はもう青ざめ切つて了つて言葉など云ふものは誰もなく、私たちは私たちで賃金も貰ふことが出來ないのだから一時に疲れが出て來て仕事場に寢そべつたまま動かうともしないのだ。輕部は手當り次第に乾板をぶちまいて投げつけると急に私に向つて何ぜお前はにやにやしてゐるのかと突きかかつて來た。私は別ににやにやしてゐたと思はないのだがそれがそんなに輕部に見えたのなら或ひは笑つてゐたのかしれない。確にあんまり主人の頭は奇怪だからだ。それは鹽化鐵の長年の作用の結果なのかもしれないと思つてみても頭の缺陷ほど恐るべきものはないではないか。さうしてその主人の缺陷がまた私たちをひき附けてゐて怒ることも出來ない原因になつてゐると云ふことはこれは何と云ふ珍稀な構造の廻り方なのであらう。しかし、私はそんなことを輕部に聞かせてやつても仕方がないので默つてゐると突然私を睨みつけてゐた輕部が手を打つて、よしッ酒を飲まふと云ひ出すと立ち上つた。丁度それは輕部が云はなくても私たちの中の誰かがもう直ぐ云ひ出さねばならない瞬間に偶然輕部が云つただけなので、何の不自然さもなく直ぐすらすらと私たちの氣分は酒の方へ向つていつたのだ。實際さう云ふ時には若者達は酒でも飲むより仕方のないときなのだがそれが此の酒のために屋敷の生命までが亡くならうとは屋敷だつて思はなかつたにちがひない。

その夜私たち三人は仕事場でそのまゝ車座になつて十二時過ぎまで飲み續けたのだが、眼が醒めると三人の中の屋敷が重クロム酸アンモニアの殘つた溶液を水と間違へて土瓶の口から飲んで死んでゐたのである。私は彼を此の家へ送つた製作所の者達が云ふやうに輕部が屋敷を殺したのだとは今でも思はない。勿論私が屋敷の飲んだ重クロム酸アンモニアを使用するべきグリユー引きの部分にその日も働いてゐたとは云へ、彼に酒を飲ましたのが私でない以上は私よりも一應輕部の方がより多く疑はれるのは當然であるが、それにしても輕部が故意に酒を飲ましてまで屋敷を殺さうなどと深い謀みの起らうほど前から私た

ちは酒を飲みたくなつてゐたのではないのである。酒を飲みたくなつたときより私が重クロムサンアンモニアを造つておいた時間の方が前なのだから疑ひ得られるとすると私なのにも拘らず、それが輕部が疑はれたと云ふのも輕部の先づひと目で誰からも暴力を好むことを見破られる逞しい相貌から來てゐるのであらう。しかし、私とても勿論輕部が全然屋敷を殺したのではないと斷言するのではない。私の知り得られる程度のことは彼が屋敷を殺したのではないと云ひ得られるほどのことであるより仕方がないのだ。もともと輕部は屋敷が暗室へ忍び込んだのを見てゐるからは、彼を殺害する以外に彼に秘密を知られぬ方法はないと一度は私のやうに思つたであらうから。さうして私が屋敷を殺害するのなら酒を飲ましておいてその上重クロム酸アンモニアを飲ますより仕方がないと思つたことさへあることから考へても、彼もそのやうに一度は思つたにちがひないであらうから。だが、酒に醉つてゐたのは私と屋敷だけではなくて輕部とて同樣に醉つてゐたのだから彼がその劇藥を屋敷に飲まさうなどとしたのではないであらう。よしたとへ日頃考へてゐたことが無意識に醉の中に働いて彼が屋敷に重クロム酸アンモニアを飲ましたのだとするならそれなら或ひは屋敷にそれを飲ましたのは同樣な理由によつて私かもしれないのだ。いや、全く私とて彼を殺さなかつたとどうして斷言することが出來るであらう。輕部より誰よりもいつも一番屋敷を恐れたものは私ではなかつたか。日夜彼のゐる限り彼の暗室へ忍び込むのを一番注意して眺めてゐたのは私ではなかつたか。いやそれより私の發見しつゝある蒼鉛と珪酸ジルコニウムの化合物に關する方程式を盜まれたと思ひ込みいつも一番激しく屋敷を怨んでゐたのは私ではなかつたか。さうだ。もしかすると屋敷を殺害したのは私かもしれぬのだ。私は重クロム酸アンモニアの置き場を一番良く心得てゐたのである。私は醉ひの廻らぬまでは屋敷が明日からどこへいつてどんなことをするのか彼の自由になつてからの行動ばかりが氣になつてならなかつたのである。しかも彼を生かしておいて損をするのは輕部よりも私ではなかつたか。いや、もう私の頭もいつの間にか主人の頭のやうに早や鹽化鐵に侵されて了つてゐるのではなからうか。私はもう私が分らなくなつて來た。私はたゞ近づいて來る機械の鋭い先尖がぢりぢり私を狙つてゐるのを感じるだけだ。誰かもう私に代つて私を審いてくれ。私が何をして來たかそんなことを私に聞いたつて私の知つてゐるやうな筈がないのだから。



赤色スポーツ

——「太陽のない街」近況——

徳永直

1

「ボール」

球審がどなる。

「ちえつ、も一本……」

ツバサとマークをいれたユニフォームの投手は、輪轉課の勇次郎といふ若者——弓なりに、ツンと身體が延びると、瞬間、球は直線に飛ぶ——。

「いいとこ」

ハヅンだ聲と一緒に、やんわりミツトをふせた捕手は、おそろしく腰がガツちりしてるが、その筈、この青年は、電氣鉛版部のブラシはたきだ。

K印刷工場の空地は、いま正午の休憩時間だ。眞夏の太陽を浴びて、空地をとりまく鋸形の煉瓦建物の陽かげは、一寸だつて落ちてない。

幾十組のキャッチボール、女工達の繩飛びやフットボール、人輪をつくつた相撲——幾百の、若い男女工達は、悲鳴や、怒聲や、笑ひ聲を一緒くたにブチまけながら、直線の太陽の下で、燃えあがる陽炎とともに、はげしく飛び跳ねてゐる。

二千の從業員を有するこの大工場で、最近は目にたつて、ユニフオム姿が增えた。作業服より輕快で、女工にもてた。そして、ユニフオムのマークの幾種もある中で、ツバサとサヾナミが、權威をもつてゐた。ツバサは、輪轉、平版、ミーレー、平臺、其他印刷諸部門及び附屬工場を代表し、サヾナミは、活版、寫眞、凸版、モノタイプ其他整版諸部門を代表したオール・チームであつた。

秋の試合が近づいてゐた。サヾナミは、春の「關東實業野球大會」に、オールK印として出場したが、ツバサは、九月の「社長杯」を獲得しない限り、またこの秋にも出場權をサヾナミにゆづらねばならない羽目にある——かうした事實が、從業員の特に精鋭の若者達を、スポーツに熱中させた。

「社長杯」は野球のみでなく、相撲にも、柔道にも、それから、將棋クラブにも、釣遊會にもあつた。K印刷會社は、これらのために一昨年來、百坪の建物を、「太陽のない街」の長屋部落に建てゝくれたのだ。

「いくぞ」

ジツトリ汗の滲んだ、荒くれた掌の中から、力の籠つたボールが、直線に飛ぶ。縱に、橫に、斜めに、前に、うしろに——
——若者達の、精氣の一切が、球にこもつて、激しく飛び交つてゐる。

——十二社協定による賃銀の値下、深夜業の割增撤廢、工場協議會における從業員代表の骨拔き、勞働組合員たることの絕對彈壓、健康保險法による巧妙な馘首法——一切の新らしい搾取の重壓が——榮ある吾等の「社長杯」——に取り換へられてゐる。二千の從業員の先頭にたつべき青年達は、食後の卅分を、夜を、日曜を——搾られ殘りの一切の精力を、野球、相撲、柔道等々々を通じて、「社長杯」に動員されてゐた。

——われらのK印
——われらのサヾナミ
フレ！ フレ！ フレー

血の氣の多い、若い女工達は、これら有頂天のブルジョアスポーツ鬪士のために、頬を赤くして、應援歌を唄つた。「榮ある社長杯」のために、うれしき彼女の喜悅のために、青年達は、絞められてゆく首輪のなかで夢中だつたのだ。

…………

「一寸待つてくれ、影山」

食堂から、飯粒を嚙み嚙み飛び出してきた喜イ公は、呼びとめられて、慌てて振りかへつた。

「一寸、相談があるンだが……」

呼び止めた男は四邊を見廻しながら、低い聲で云つた。色の白い、インテリ出らしい坊つちやんのやうな顏立の男は、平臺印刷室の雜役夫で、秘密にもぐつてゐるS勞働のオルグ、狹山と云ふ名だ。

「う――ん、と」

喜イ公は、マヅい顏をした。ツバサの第一投手であるこの輪轉課の印刷工は、いま投げるつもりで、空地へ向つて飛び出して來たとこなンだ。

「……………」

狹山は相手の樣子を、シブい顏つきでじつと見てゐた。狹山の家でやる「工場委員會」に獲得されて、まだ間もない青年だが、狹山はこの頑固さうな男に、望をかけてゐた。

「手傳つて貰ひたいことがあるンだが、ダメかね？」

「……………」

しかし、喜イ公の心は、工場空地に飛んでゐた。二人がたつてゐる廊下の腰板をこえて、第二投手勇次郎が、汗みづくになつて練習してゐるのが、ツイ鼻ツ先に見えてゐる。

「ぢや、いいよ」

狹山はあきらめた。一人でも欲しいンだが、××な仕事だ、自分達だけでやらう。

「だが、今家の會合には、必ず出てくれよ」

「ん」

大きな口と、仰向いた鼻、それに太かい頭をガクンとうなづかした喜イ公は、廊下の腰板に手をかけると、一またぎに飛び

越えて、空地の方へ駈け出していつた。

「勇公、代らう」

喜イ公が、グラブを欲めると、捕手もしまつてかまへた。綱飛びしてゐた女工や、少年工達が寄つてきた。

「たのむよ、喜イちやん」

「いいとこ、一本ね」

狹山は、喜イ公を見送つて、暗い顏をしてゐた。

「會社ぢや、産業合理化で、大量馘首をはじめようとしてるのに……」まるで、かんじんの若者たちは、ブルジョアスポーツで夢中なンだ。

狹山は腕時計を見た。もう十一分だ！　組合から連絡つけてある黨の同志は、××××××、モウすぐに飛び込ンで來る時刻だのに――、大衆は斯も、のンきなものか――。

この十幾棟の工場、二千の從業員中で、S勞働および×の影響下にあるものは、ホンの廿人足らずだつた。これだけの若い大衆がゐながら、搾取の重壓に苦しんでゐながら、この廿名がいつかうに擴がらないのだ、增えないのだ、たつた廿名が、固い岩層の中で、秘密にやつと保たれてゐるきりだ。

「叫んでも怒鳴つても聞えない大衆……」

狹山は、空地の若者達を、じつと見入りながら、しみじみと、英雄的孤獨を感じた。いつさらはれるかわからない自分達、××も×××も覺悟してゐるこの悲壯な氣持を、のんきな大衆よ、いつ理解してくれろといふのだ。――感傷的な、熱いかたまりが、グッと咽喉元までつつぱつて來ると、彼はやがて瘦せた肩をそびやかして、ツイと廊下の腰板をはなれたが、ふと向うから步いて來る三人の洋服をめつけると、クルリと方向を變へた。

「糞ッ、社長の山羊ひげめ……」

向うから步いて來た三人の洋服は、食堂の中をのぞいたり、そこらで、赤ン坊におつぱいをふくませてゐる女工達の、いんぎんな禮を受けながら、ゆつくりと、空地の見える廊下のところまで步いて來た。

「なかなか、旺んだね」

野羊ひげの社長は、空地の方を見て足をとめた。溫情主義を看板にする社長の習慣は、きまつて、お正午時間に、各工場を巡視することであつた。

社長の背後に、事務と、守衛長が從いてゐた。事務といふ刑事上りの守衛長は、野球其他、各競技團體の總監督で、柔道二段の男だ。

「向うの人だかりは何かね、相撲？」

守衛長がこたへた。

「さうです、今夜は土曜で、大會だもんですからね」

「ホ、ホ、なるほど」

社長は、うなづきながら、歩き出した。

「いや、結構ぢや、結構ぢや」

2

廊下のタヽキには、多くは世帶持の職工達が、シャツ一枚か、或はズボン一つきりの裸でしやがんでゐた。社長は、廊下を、笑顏をふり撒きながら通りすぎた。

「ちよつとおめえ、松の野郎は馘首だつて話だよ。ほら……」

社長の縞ズボンが見えなくなつてから、十人あまりでつくつてゐる輪の中へ今迄、廊下で立話してゐた男が加はつて來て云つた。

「どうだ？」

傍の二三人が振りかへると、離れて向うに歩いてゆく、浴衣がけの病人の後姿が見えた。

「ナニ、馘首だ？」

輪の眞ン中には、整版ゲラでつくつた將棋盤がある。手の中でコマをいぢくりながら、背中に黄色いシミのあるシャツの親爺が、馘首だときいて、皆と一緒に振り向いた。

「松は肺だつけな？」

一人がさう誰にとなく云つたが、皆だまつて、その浴衣の後姿を見送つた。悲慘がいつも足許から湧いた。そして、工場ぐらしの永い世帶持達は、持病の痛みを撫でるやうに、その「悲慘」を默つて見送ることに馴れてゐた。

「王手だッ」

それまで考へこんでゐた相手が、ガチリとコマをうつた。シヤツの親爺は慌てゝ振りかへつた。

「仕樣がねえ、いちかばちかだ」

向う鉢卷の相手の男は、うつたコマをも一度みてニヤリとした。皆もすぐ、そつちへ注意をうばはれた。

「ちくしやう、こいつはひでえ！」

シヤツの親爺は、盤面を睨んで呻つた。

とりまきの皆も、モウ「松の野郎」を忘れてゐた。

「うーむ、いい桂打だ」

「凌ぎがつくかな」

馘首の話は、そのまゝ消えた。

………………

浴衣がけの、健康保險患者は、二三間さきの、タ、キにしやがんで、新聞を讀んでゐた親爺と話してゐる。

「まア、さう心配したもンでもあるめえ、そンときあ、ソンときでどうにか……」

新聞讀ンでゐた親爺は、氣休めを云つてゐる。アト一週間で、會社と縁切れになることを宣告された。このヒヨロ〳〵した肺患者が、アト七日で仕事が出來るやうにならないことは判りきつた話だ、どうにかなることは、十年以來の工場から、骨と皮だけの身體を、女房子供をノシつけて、ほり出されることだけのことだ。

健康保險法は、大工場では、その手切金を半分だけ職工に積立させるといふ重寶な役割をしてゐるのだ。この「浴衣」の患者も、規定の三ケ月では、「海綿」みたいになつてしまつた肺病を治すことは出來なかつた。

「……」

健康保險患者は、だまつて其邊を離れた。彼が嘗て、同僚の「悲慘」を默つて見送つたやうに、いまは、自分が、見送られてゐる——。

重石にひきづられ「悲慘」に、カドのすれた世帶持たちは、却々起ち上らない——。

そンなときに、この新聞を讀ンでゐた親爺は、あはてゝ波のとばツちりを喰つて、いそいで殼に逃げこむやどかりのやうに、きまつて、己れ一人の「祕密」を考へる。

「郵便貯金が、三百と十五圓。今日迄の十一年間の退職手當が、四百廿圓と——。」

それから、新聞をたゝんで、

「それで、えゝと、鄕里へひつこむか、それとも一膳めしやで

もやるか——」
自分のことだけを、自分の灯明りだけを、しつかと抱いて離すまいとしてゐた。そして、波がしだいにヒドクぶつつかつて來て灯明りがかき消されさうになると、暗い顔で呟く。
「あゝ、俺も永いことぢやねえに……」

………………

「あたい、よんべ「東京行進曲」を見て來た……」
「アラ、隨分時代おくれね、いまごろ」
「でも、あたいすつかり共鳴しちやつたわ、ホラ、あの藤村の坊つちやん良樹がさ、藝者になつた道代をたづねてゆくところがあんでせう……」
お洒落な女工が二人、廊下つゞきの洗面所で、顔ぢうを、石けんの泡だらけにして喋べつてゐる——。
「ね、時計の針ばかり見てさ、から待ちアグんでゐるとこなンか、もうあたし……」
「ん、ん」
聽いてる方の七三頭髪は、手拭に顔をうづめて泣きじやくりするやうにうなづく。喋べつてる方の銀杏返しは石鹸の泡の中で、眼を赤くしてゐる。
「すつかり泣いちやつたわ」
すると、手拭から顔を出した七三頭髪が、
「でもさ」
「なアに」
「あの夏川と瀧花が、印刷女工になるとこがあつたでせう」
「ん」
「あそこンとこ變ぢやなかつた？」
「さう、さう、あたいくすぐつたかつたわ」
「いえさ、あンな、ノンキな印刷工場なンてありやしないわ」
「そりやあ「かつどう」だもン……」
「だつて、あたい達本職だけに、バカにしてると思つたわ」
だが、彼女達は「女工」から藝者に、藝者から奥様に、モダンで、金持の坊つちやんにおつかけられるといふ「道代」や「澄江」を「馬鹿」にしてるとは思はなかつたのだ。彼女達はブルアヂテーター×××と一緒に、コケた青い鉛筆の頰つぺた

に安白粉をぬつて、「夢」の世界に醉うては、現實をぬかしてゐたのだ――。

……………

「なんだ、そのざまは……」

ヅヌケて、太かい坊主つくりの男が、汗だらけになつて取つくンでゐる、二つの裸ン坊の脊を、いやといふほどどやしつけた。

「ちやンと、四つに組ンでみろ!」

工場空地の一ばん隅ツこ、ズボン一つつきりの裸ン坊の青年達が、三四十も脊中をならべて輪をつくつてる――。

「もつと、左を深くさしこんで……」

怒鳴つてる太かい、眞ツ黒氣な、唇の厚い男は、相撲名からして、「印度虎」といふ、最近世帶持たての男だ。

ハア、ハア息をきらしながら、取つ組んでる裸ん坊は、四つに組んだまゝもう絶え入りさうだ。

「なんて、だらしのねえへツピリ腰だ、蹴飛ばすぞツ」

土曜の今夜は、K印クラブで、東西の相撲大會――西の横綱「印度虎」は、いま西軍のコーチをしてるところだ。

東軍の横綱は、柔道二段の守衞長加瀨――しかし、柔道では加瀨に強味があつたが、相撲では印度虎のものだつた。「社長杯」は、こゝ二年を、西軍が保持しつゞけてゐる。

「突つ張つて、ウンと突つ張つて、え、バカヤロ、腰を落して仰向に反るンだ、間拔め」

丁度その時刻だつた……。

まはりの若いやつらが立上つたので、印度虎も、何氣なしにそつちを見た。

廊下の向うから、學生みたいな男が、逃げるやうに駈けて來る。そして駈けながら、赤いビラを、パツ、パツと粉雪のやうに撒き散らしながら走つて來る――。

見てゐると、食堂の方からも、も一人新聞配達みたいな恰好したのが、廊下から、工場空地へ飛出して來た。そしてこれも同じやうに、赤い小さいビラを投げつけ、投げつけ駈けて來る。

「何だ、社會主義者か」

そつちを見てゐる若い奴の四五人が、好奇心だけで云つた。
女工達も、キャッチボールをやつてる青年達も、べつに遊びごとを止めはしなかつた。ビラの舞ひ落るとこだけが道を開けて、他人らしく見送つた。
しかし、突嗟の間に、どう嗅ぎつけたか、七八人の警備の守衛達が、その「學生」と「新聞配達夫」を捕まへやうと飛出して來たので、空地の皆は、遊びごとを止めた。
「そいつを捕へろ！」
「ビラを拾つちやいかん」
守衛達は、不意の闖入者を追つかけながら、口々に怒鳴つた。
「學生」は製本工場の方へ駈け込んだ。空地を追ひつめられた「新聞配達夫」は隅ッこの「印度虎」達の方へ向つて走つて來た。勇敢な「新聞配達」見たいな若い男は、信ずべき味方に、大衆の中へ飛び込んで來ようとした。
「バカッ、つかまへるぞッ」
おゝ、眞つ黒氣な大男は、いきなり、行手に大手をひろげたのだ！
新聞配達は、ころげさうに踏みとまつた。おどろきに眼を剝いたやうに黑眼鏡がいかつた。
突嗟にきびすをめぐらして、空地の外柵の方へかけていつた。そして間一髪、彼の片足だけが、外柵にひつかゝつてゐるとこを、守衛の數十本の手がつかンだ。
蒼白にひつつた顔色の「新聞配達夫」は、守衛詰所にひかれていつた。
「どら……」
別に興味もなささうに、若いやつが持つてる赤いビラをひつたくつて、印度虎は讀んでゐたがすぐ止めた。
「なンだ、産業合理化だの、大量馘首だのつて、嘘八百を……」
チンと鼻汁をかンで足許に棄てた。
「×××のいふことナンかアテになるもンか……」
印度虎は、本氣にさう考へてゐた。
「さア、みないいか、今夜はウンとガンばるンだぞ」

3

夏の日が、すつかり暮れると、モウ八時だ。緣臺將棋や、腰

卷一つの女房たちやが涼んでゐる狹い二番長屋の路次を、K印工場の若い者達が、こつそりと、狹山の家へあつまつて來た。

　狹山と、整版の田中といふ頭髮を長くした男とが、十五六人集つたうちの中心をつくつてゐた。暑いのに外方に向つた障子をしめてあつた。

　喜イ公は隅の方で、默つて座つてゐた。この中では一番新米だつた。

「お——」

　突出し窓の裏口から、にょきりと、白い顏が浮いた。喜イ公はハッとした。それは晝間工場へ飛び込んで來た「學生服」の男だ。

　湯上りを着て、ゴマかしてるその晝間の男は、S勞働の常任で、村越と名乘つてゐた。あたりを見廻してから、窓から忍び込むとジロリと皆の方へ銳い眼で會釋した。

　それが、よけい室ン中を緊張さした。「獲得」されて、まだ間もない喜イ公は、何よりもさきに、不馴れな、緊張した空氣を怖く感じた。

　顏が揃ふと、まづ一番に、狹山が云つた。

「晝間の、ビラの効果はどうだつたかね？　各職場では？」

　村越の眼が、また銳く皆を見廻した。

「第二整版では……」

　文選工らしい出齒の若いのが云つた——地域的に離れてるせいか、一枚も持ち込まれなかつた——

　出齒の若いのは、心の中で呟いてゐた——事實は少し持込まれたが、殆んど馬鹿にされてしまつたのだ——。

「君の方は？」

　製本工場の雜役夫は、長い頭髮を撫でながら、憤激した口調で云つた。

「俺の方は女工ばかりだから始末にいけねえ、おまけに今夜相撲大會だといふんで、皆そつちへ逆上せてゐやがつて——」

「君の方は？」

　各職場の情勢は——狹山は齒ぎしりした——大して反響がないのだ——。

　村越はガッカリしたやうに、眼を俯せた。

　——まだ大量馘首が、表面にあらはれないからといふせいはゐるにしても——。村越は眼をつぶる。

——守衛につかまつた同僚は、容しく[illegible]死したのか。

「おやぢども仲間ぢや、コソコソS勞働の噂なンかしてる奴もあるけどね、×××といふ名を聞くと、皆憤つちまいやがンダ」

狹山は默つて、さう語る男の方を見あげる——。

「おまけに若い奴らは皆、野球や、相撲なンぞに夢中になつてやがるしね」

室ン中の皆も、工場ン中では、周圍の從業員達とは、壁みたいな空氣の中にゐるので、一緒に寄ると、自然陰謀的な昂奮に驅られた。

村越はバットに火を點けて、烟りの間から、室ぢうの皆を見廻してゐた。——この文學青年みたいのや、お天氣らしい少數の勞働者が、帝國第三期に於ける重要産業中の最も智識的な印刷勞働者の、しかも東洋一を誇るK印工場の精鋭なのか!? 過去に三度のストライキの經驗をもつ、K印工場の精鋭なのか!?

村越は解せなかつた。

社會民主々義的な組合や、無産黨の影響すら、ごく稀薄な二千の從業員!

左翼的な組合及び×への[illegible]は、よし、[illegible]のために、まれて少數であるとしても、これを求めやうとする力、壓力、二千のうち三十才以下の青年が七十パーセントを占むるこのK印工場の、青年男女工達の、眞實への、自由への、階級的な叫びは、その巨大であるべき壓力は、いつたい、どこへ解消されてゐるのか!?

「おまけに若いやつらは……野球や相撲に……夢中に……」

それをきいたとき、村越はいま更らのやうにハツとした。

「さうだ、俺達は、あのブルジョアスポーツの反動團體をぶつつぶさなくてはならないんだ」

そして村越のその考へが、そのとき云ひ出した狹山の言葉と一致した。

「諸君、俺達は記憶しとかなくてはいけない。今日、工場で、捕まつた同志が、何故に逃げおほせなかつたか知つてるか?」

皆は默つて狹山の口許を見た。

「あの「相撲團」の反動野郎「印度虎」のおせつかいによつて捕へられたのだ!」

皆のうちで、喜イ公が一等おどろいた。喜イ公は「印度虎」

とは親戚であり「印度虎」の紹介で工場に入つてるのだ
「印度虎だけぢやねえ」
村越が口を挟んだ。
「野球團のサヾナミのキヤプテン松岡も、釣遊會の幹事「のんべ熊」も、みな、ブルスポーツを牛耳つてる奴あ、會社の「内意」を受けてンだ、俺達は、この一聯の反動をぶつつぶさなくてはならぬ。」
村越は、一つの光明がひらけて來たやうに、眼をかゞやかせて云つた。
「特に「印度虎」は、同志を敵の手に渡したといふだけでも、俺達は相當の××をなすべきだ」
村越は遠慮なく云つた。室ぢうの一致した憎悪が、「印度虎」に向けられた。喜イ公は室の隅で考へこんだ。
「やらう！」
出ツ歯の田中が、悲壯な決心を顏に現はして云つた。
「よし！」
異常に緊張した空氣が、室中の氣持をすぐ一緒にさせた。皆はひたいをあつめた。

喜イ公はそつと便所にたつた。同志を賣つたと云ふ「印度虎」を庇ふといふ氣は更にないが、果して村越の云ふやうに、印度虎にしても松岡にしても、「のんべ熊」にしても、心底の反動だらうか？　喜イ公は印度虎を熟く知つてゐた。
「あいつあお人好しで頑固な勞働者だ、たゞ誑されてるだけなンだ、知らないだけなンだ」
しかし、それを連中に云つたところで今の場合無駄だ、またうまく話せもしない。それで、喜イ公は、便所の傍から、こつそり下駄をさぐつて戸外へ出た。
多分、相撲のハネを待つて、襲ふらしい皆の相談を背後にききながら、喜イ公は默つて家へかへつた。

4

「醉つたか、こら」
白洋服が、でかい男の肩へ、ヒヨロヒヨロと突つかゝる。
「な、なんのこれッぽつちに……」
社長邸の裏から「太陽のない街」に降りてる狹い阪道を、したゝかに醉つた足どりは印度虎と、守衛長の加瀨——。

「だが惡くねえ、勝負の酒つてやつはなア、畜生！」
「おまけに、社長の振舞酒ちや尚更だらう」
守衞長は惡醉して、變にからんで來る。
「きさまア」
印度虎は、ヒヨロつく足を踏ン止まつて、
「きさまア負けたンで口惜しいのか、え！」
今年も西軍が「社長杯」を獲得した。二人は相撲のハネ後、社長邸で出た酒一樽に醉ひつぶれて、いまかへるところだ。
「口、口惜しいなンて贅澤だぜ、あンなにきれいに負けりやおめえ、ゲープ……と、双差しでよ、グーッと押しきられりやおめえ、何も文句はねえ筈だ、ウーイと」
印度虎は先になつて降りて來る。
「畜生、今のうちに嬉しがつてろ、その代りこんどの柔道試合にあ、地獄の一丁目をのぞかしてやるから覺えとけ！」
いつものズルい守衞長にも似合ず、ムキになるほど、これも醉つてゐる。
「なにを、そらアこつちで云ふことだ」
グラグラと、狹い阪道をいつぱいになりながら二人は降りて來た。そのとき、前になつて歩いてゐた印度虎が、どうしたはづみか、ひよいとへたばつてしまつた。
坂の西側の路次から、黒い影が、バラバラ飛出して來た。そして四五人は印度虎の方に、アトの半分は守衞長の方へ飛びかゝつて來た。
「い、いてえッ、どこの野郎共だッ」
不意に足をすくはれた印度虎は、×××毆られながら、怒鳴つてゐる。帽子を眼深に冠つたり、手拭で頰冠りしたりしてゐる輩は、無言で毆りつゞけるのだ。
隙をめつけて、守衞長の阪上の方へ逃げ出してゆくのが見た。
「ひきあげろ！」
頰冠りの一人が合圖すると、皆バラバラ逃げ出した。
「畜生ッ」
毆るだけ毆つて逃げ出さうとする中の一人を、足をつかんで引き倒した。頰冠りの男は、印度虎の顏の上に落ちて來た。
「おや、貴樣は？」
頰冠りの下から覗いた白い顏を見て、印度虎は最初の瞬間、顏の見覺えで名を思ひ出さうとしたが、醉つてる頭は名前まで

判別出來かねた。頰冠りの男はバネのやうに、印度虎の手を振りもぎつて逃げ出した。

「畜生、待てッ」

泥んこになつて起き上ると、印度虎は、毆られたいたみにヒヨロつきながら、頰冠りの男を追ひかけた。

頰冠りの男は、グルグル路次を廻つて、長屋の方へ逃げていつた。そして印度虎がヒヨロつく足で、頰冠りの男を見失つたとき、つい眼前に、歸りの遲いのを氣づかつてゐる彼の女房が赤ン坊を抱いて立つてゐた。

「あんたはまた喧嘩して來たんだね！」

「……」

印度虎は狐につまゝれたやうにキヨトンとした。

「みつともない、口から×をふいてさ、着物もなにもすつかり泥ちやないかね」

慣れてる女房は、赤ン坊を家ン中へほり出すと、印度虎を臺所につれてつて、着物を脱がしてから、頭や顏に三つも四つもある××を洗つてくれた。

「止しなよ。ホンとにいゝ加減の年齡をしてさ、いつまでも喧嘩をする馬鹿があるもんかね」

まだしたゝかに醉つてフラフラしてゐる亭主を、女房は赤ちやけた蚊帳のなかに押し込んだ。

「ガアガア云ふな。糞ツたれ阿女ア」

大の字にフン反りかへつて、ぼんやりした記憶をたどらうとすればするほど、その憎い頰冠りの白い顏はわからなくなつてくる。

「たしかに工場の野郎だが……」

女房がガアガア怒鳴りたてる、赤ン坊が泣きわめく、彼の醉つてる頭は、ますますもうらうとしてゐる。

到々、そのうちに、傷のいたみも忘れて、睡つてしまつた。

5

夜半に、ひどく咽喉がかはいて來たので、印度虎は、眼がさめた。

「水だ、やかんは——こら」

手を伸ばしてとなりに眠つてゐる女房の肩を押しゆすぶつたが、赤ン坊と一緒に、だらしなく眠りこけてゐる女房は眼がさ

めない――。

「チツ、糞つたれ！」

ふらふら起きあがると、臺所へ一跨ぎに首をツン出して、ひしやくごと口へ持つていつた。

「フーーツ」

と、大きな吐息をして、ひしやくをほり出すと、そのまゝ蚊帳の中へもぐりこまうとしたが、フイと、變な物音を聞きつけた。

「おや？」

ゴツリ、チヤラ、チヤラ――。

音は臺所の外方、たしたに靴音と佩劍のぶつつかるひゞきだ。

「………」

印度虎は、臺所のながしへ、足を踏んまへて、そつと、戸前に顔をよせながら。

「だれだ？」

と怒鳴らうとしたが、咽喉にかすれて、大きな聲にならなかつた。それでも一度、怒鳴らうとすると、そのとき、靴音が五つも六つも一度に起つて、驅け出すやうに戸前を離れてゆくのだ――

印度虎は、いそいで、戸前の棒錠をガチガチひねつて戸を引きあけたが、その途端、筋向ひの長屋で、けたゝましい叫びがおこつた。

「なにをするツ」

「バカツ」

「抵抗するかツ」

入口の戸がひんめくられて、狹い長屋路次に、電燈の灯をいつぱいに投げ出してるのは、同じ工場につとめてる狹山の家だ。二三人の私服と、五六人の正服が、その家ン中で土足のままでハネ廻つてゐるのだ。

「何だらう？」

出てゆかうとしたが、巡査がゐるのに丸裸だ。

「こら、着物もつてこい」

物音に眼をさました妻君が、赤ン坊だいて飛び出して來た。兩隣りも、向ひ側も、近所の家でもおどろいて戸を細目にあけた。そして、すさまじい活劇を、怖は怖はのぞいてゐる。

ガチヤン、チヤリツ、ガツといふ器物のこわれる音、電燈に

もぶつつかるらしく灯明りが、暗い路次を、ななめに大きくゆれる——。

「生意氣な……」

「さつさと歩けツ」

左右に腕を捻ぢあげられて、路次へ出て來たのは狹山だ、蒼白な顔が、灯明りの影になつてゐてもよくわかる。

「お——」

印度虎は、そんときやつと氣がついた。——畜生ツ、昨夜俺をひどい目に逢はせやがつたのは、こいつだ——。

「畜生め！」

かねてから虫の好かねえ書生ツぽ野郎——印度虎は、ハダシのまゝそつちへ近づかうとすると、とりまいてゐる巡査が、ドンと胸を突き飛ばした。

「傍へ寄つちやいかン」

とたんに、それを聞きつけた狹山の蒼白な顔が、印度虎の方を振り向いて、血走つた眼で睨んだ。

「は、反動め、少しあこたへたか……」

「ナニを？」

巡査を押しのけて、印度虎はなぐりかゝらうとしたが、そンときハツとして、譯なしに手を下ろした。

狹山の兩手に篏つた、黑く光る手錠——。

「ち、畜生め！」

私服や巡査に押し距てられて、ぼんやり手をつかねながら、印度虎は口惜しさうに怒鳴つた。

「こ、こんどめつかつたら畜生、首根つこひきぬいてやるから……」

6

翌朝、印度虎は工場で、頭から顔の半分ばかりを繃帶してゐる守衞長と顏を逢はせた。

「おめえの方がひどかつたな」

印度虎は、若い野郎にきまりの惡い、頰の膏藥張りを撫でながら、

「あれからどうした？」

「どうつて……」

守衞長は、ドンドン從業員が出勤して來るタイムレコダーの

かけで、紫色の腫れの見える瞼をぴくつかせながら、ブウブツ云つた。

「あれから××署へ飛び込んだんだ」

「警察へ……」

印度虎は可笑しくなりながら、

「柔道二段にも似合ねえぢやねえか」

すると、守衛長は、白くかさばつた頭部を振りながら、

「イヤ、少し考へがあつたからだ」

「ハア?」

印度虎にも、日頃あまり口も利かない狭山なぞが、何で自分を覘つたかどうかわからなかつた。始業のベルが鳴り出したので、そのまゝ辨當を抱へて職場にゆかうとすると、守衛長が呼びとめた。

「あとでね、事務所の俺の室まで來てくれ」

印度虎は、輪轉印刷室の、第三號機の擔當者、五人組長といふのだ。三號輪轉機のそばへ來ると、若い連中が眞黒氣になつて掃除してゐた。スヰツチを入れ、調子を合し、インキの具合を見てから、工長から渡された今日の生産豫定表どほりいひつけて、それから、事務所の方へ出かけていつた。

「一寸、待つてくれ、外で……」

守衛室に入つてゆくと、意外にも、こんな朝早く社長の顔が見えた。傍に、ユニフオム姿の男が二人ゐた。守衛長が手をあげて止めたので、ドアの外へ立つてると、十分ばかりして、ユニフオムの二人が出て來た。一人はサヽナミのキヤプテンで、第二整版の植字工松岡、一人はツバサのキヤプテンで平臺室の森といふ男だ――。

「お早うございます」

印度虎は室ン中へ入ると、そこにゐる社長へ挨拶してから守衛長の方へ向いた。

「大變なことが出來たんだ」

守衛長は、おごそかな顔付で云つた。

「この會社に、×××がゐるンだ!」

「ハ……」

「僕たちを、昨夜なぐつた奴らだ……」

印度虎は、×××はまるで、狂犬みたいだと思つた。

「まア君等は、會社の柱石だから、打割つて云ふが……」

守衛長は、社長のやうなことを云つた。

「これを見たまへ、昨夜、警察で知らして貰つたんだがネ」

テエブルの上におかれて小さいノートに、鉛筆でかゝれた文字が、二段にならんでゐる——。

一番先頭に、狭山や田中などの名があつた。印度虎は、昨夜の狭山のフン捕つた一件を憶ひ出しながら、目を通してゆくと、終りの方に「影山喜三郎」といふ名前をめつけて、びつくりした。

「この男も、×××ですか？」

印度虎の指先がふるへてゐた。守衛長はすぐ氣がついた。

「その男は、君の乾分かね？」

「イヤ、俺の嬶の弟です」

守衛長は、いさゝか拙いといつた顔をしたが、

「ま、そのへんは大して赤くもあるまいから、何とか君の顔をたてる方法もあらうぢやないか」

振り返ると、社長がニコニコしてゐた。しかし、印度虎はすぐ云つた。

「イヤ、×××なら仕方ありません、たとへ弟でも、俺ア命ごひなンかしません」

キツパリ——と、印度虎は嘘ツ氣なく云つた。印度虎の頭も、他の大衆と同じに、×××は、泥棒、放火より悪いもンだと、新聞やなンかで教へられてゐた。

悪人であるならば、たとへ親の首へでも、繩をかけねばならぬ。印度虎はこの氣持で、決心してゐた。

「まア、それはそれとして……」

守衛長は話をすゝめた。

「それで、今日は警察から來て、工場から×××を引ツぱるかも知れないんだがね、そンとき……」

かんじんのとこだといふ風に、守衛長も、社長も心持顔を寄せた。

「はたの從業員がさわぐとこまる。それで、君は、君の方の「相撲團」の有力者を通じて、軽挙妄動せんやう、注意し、警戒してくれたまへ——」

「ハ……」

「妄動すれば、いやでも處分しなければならんし、スポーツ精神の美風をほこる本工場の趣旨に對しても甚だ遺憾だし……」

「わかりました」
用件はそれだけであつた。ドアの外へ出ると、おつぎの、釣遊會幹事である製本工の「のんべ熊」が入れ代りに、はいつていつた——。

7

午前十時ごろ、××署から來た、私服と正服が廿人あまり……工場の裏口から、事務所の守衛長室へ入つていつた。
そして、すぐ三人一組の私服が事務所の給仕に案内されて、三階の第二整版工場、文撰場へあがつていつた。
ケエスの蔭で、他の從業員と一緒に田中は仕事してゐた。今朝、眞夜中に狹山がヤラれたことも、まだ知らなかつた。
「君、田中君かね」
肥つた眼の小さい私服が、ニヤリとしながら近づいた。聲にふりかへつた田中の顏が、瞬間ハツとしたらしく青ざめた。
「抵抗するかツ」
ひよろ高い口ヒゲのある私服が、背後から、田中の腕を捻ぢあげた。
ケエスがゆらぎ、文撰箱がはげしい音をたてゝひつくりかへつた。
「歩け！」
田中の背後にまはされた腕首に繩がかゝつてゐる——。
他の從業員達、仲間はあツけにとられて見てゐた。ボンヤリ——と、泥棒か放火かゞ捕まるのを見てるやうに——、階段を、ひつぱられて降りてゆく同僚の後姿を、あつけにとられて、或はヒドク怖は怖はと、或は物めづらしさうに——彼等は見送つてゐたのだ。

…………

輪轉機室からも、一人持つてゆかれた。第三整版の出ツ齒の男も持つてゆかれた。
作業現場から、或は、一度、事務所の守衛長室へ呼び出して、解雇を云ひ渡し、歸つてゆくところをそのまゝ警察へ——。
最初の日が四人、次の日が三人——何日つゞいた。ちびりちびりと、ひつこぬかれて、工場の裏口から、こつそりと連れ出された。そして再び工場には歸つて來なかつた。
みな知らぬか、でなければ默つてゐた。

まだ檢擧され殘りのS勞働組合員達は、何かしなければならぬと焦せつた。窒息させられるやうな狀態を何とかしなければと踠いた。

しかし駄目だつた。手も足も出なかつた。周圍は皆他人であり、靑年達は依然スポーツに夢中であつた。

さしのべてくれる手がなかつた。かくしてくれる壁がなかつた。枝や葉ツパがなかつた。××のための運動者に、××は××だつたのだ。何故か？

丁度それは、敵に追はれた落人が、草原をはしつてるやうなものだつた。落人が逃げ込んで來ると、草は左右へさつと飛び開いた。敵の銃先は、間違ひなく覘ひがつけられたのだ——。

8

×××狩りが每日つゞいた。事務所へ何氣なく呼出されて、こつそり工場裏から、警察へ持つてゆかれた。

モウ、その數が四五十を超えた。××を持つてゐたとの××で、或は「戰旗」の讀者だと云ふ××で——××にならない××で——モウ十日あまりもつゞいた。

喜イ公は、まだ職場に殘つてゐた。

職場で働きながら、平常て無口な男が、よけい無口になつてゐた。狹山の家の「工場委員會」に集つてゐたうちでは、他に誰一人殘つてゐなかつた。何で自分だけが殘されてるのかわからなかつた。事によると保證人の印度虎のお陰で、馘首にならないのかも知れなかつた。「よけいな事をする」と思つた。同じ職場で顏を合しても、どつちも口を利かなかつた。

從業員たちは皆默つて働いてゐた。陰でブツブツ話し合ふ世帶持もあつたが、面となると、そんなどこでなかつた。若い者は相變らず野球や、相撲に熱中してゐた。

「×××と××はなぜ××だらう？」

喜イ公は每日それればかり考へた。事件以來野球も止して考へてゐた。——會社は×××狩りの名にかくれて、大量馘首をやつてるのだ——。

「喜イ、一寸來い！」

お正午の時間に、ボンヤリ、空地の方を見て立つてると、背後で印度虎が呼んだ。默つて食堂へついてゆくと、印度虎は、人氣の少ないとこへいつて腰を下ろした。

向ひあつて腰かけた、長い飯台机の上に、飯ツブや醤油のシミがあつた。

二人とも頑固に黙つてゐた。

とうとう印度虎が口を切つた。

「おめえ、×××か?」

京イ公は、じろりと相手を上眼に見たが、そのまゝ視線を外らした。

「オイ」

節くれた印度虎の腕が、強情な京イ公の顔を、押し向けた。

「いんや」

京イ公は、少しばかり首を振つた。

「だつて、おめえの名が、ちやンと警察の帳面にのつかつてるぞ」

京イ公は、また黙つてしまつた。

「何かの間違かも知れねえが……」

印度虎の方が我を折つた。

「おめえ、これからつまらねえ眞似しねえだらうなア、え?」

「……」

「どうだナ」

まだ黙つてゐる——。

「實は、俺の首を一緒にかけて、おめえの首をつなひで貰つたンだ」

すると、醤油のシミと、飯ツブから顔をあげた京イ公が云つた。

「止してくれ……」

「ナニ?」

印度虎はおどろいた。強情な奴だことは、こいつの姉である女房の性質からでもわかるが——その強情が印度虎の好きなところでもあつたが——これは大それた、×××に肩を持ちやがる——。

「てめえ、利いた風なことを……」

印度虎はカツとして、京イ公の首根つこをつかんだ。

「も一度云つてみろ!」

抵抗はしないが、痛みにヒンまげた唇のあたりに、飽迄つつぱつたものがある。

「義兄貴……」

と嗄れた聲で、喜イ公が云つた。印度虎は手をゆるめなかつた。

「おめえ、おめえが、會社に詭されてんだ」

おどろいて印度虎は手はゆるめたが、

「バカな、俺が……」

二人とも中腰だつた。

「さうだよ、會社は××の××くつつけて、人減らしをやつてンだよ」

「でたらめを云ふなッ」

「でたらめぢやないよ、だつて會社ぢや何のかのと理屈をつけて、モウ五十人あまり馘首にしたぢやねえか」

「五十？」

「でたらめなら、會社へきいてみろ！」

印度虎は言句につまつた。喜イ公の言ふ五十が眞實とすれば、たしかに彼は會社にだまされたのだ！だつて、警察の帳面にあつた名前は、ちやンと見た眼で廿人足らずだつたのだ——。

印度虎は光つた眼を、喜イ公の顔から外らすと、いそぎ足に食堂を出て行つた。

9

短氣な印度虎は、その足で、ツカツカと事務所の守衛長室に入つていつた。

「おい加瀬さん」

傍に見馴れない刑事らしい男や、專務なぞゐたが、印度虎は所を嫌はなかつた。

「いつたい、會社は何人馘首にするンだね？」

おどろいた室ぢうの顔が、この馬鹿々々しい質問に振り向いた。守衛長は「場所柄でないよ」と云ふことを眼つきで知らせたが、印度虎はかまはず訊ねた。

「××××をくつつけて、もう五十人も馘首にしたつて云ふぢやないか」

刑事達の眼が、一度に鋭く、印度虎にあつまつた。慌てた守衛長が立上つた。

「まア、君、外方へ出たまへ」

室外へ連れ出されると、印度虎はじつと守衛長を見た。

「君ア、それをきいて何にするんだね？」

守衛長は吸ひかけの煙草を口に持つてゆきながら、するい眼を光らせた。

印度虎は、ぢれつたさうに

「いま、その……俺の云つたことはほんとかね、これは……」

守衛長は、印度虎の顔を見い見い云つた。

「ま、嘘ぢやないがね」

「え？」

印度虎は、足許がぐらついたやうだつた。

「君達には會社の事情も諒解して貰はんければね、いづれ一段落したら、詳しく社長からも話があるだらうが」

「…………」

默つてうつむいてゐる印度虎の肩をかるくたゝきながら守衛長はおだてた。

「それまでは、君達にしつかりしてもらはなくては困るわけなンだ」

子供をダマスやうに守衛長は會社の腹を打明けた。

機械を減らさずに人間を減らさねばならない事、生産單價を引下げねば大會社の發展が不可能な事——守衛長は印度虎の顔色みいみい喋べつた。しかし、印度虎は話はロク、ロク耳に入らなかつた。そして、ぼんやり職場へかへつてきたが、それきり石のやうに默りこくつて考へ込んでしまつた。

「畜生！　だまされた！」

10

「影山君」

三番長屋の喜イ公の家へ、どこを逃げ廻つてゐたのか、ヒョックリ、村越がやつてきた。

暗い外方を見廻してから、コッソリ、上へあがると、低い聲で喜イ公に云つた。

「君が、まだ職場に殘つてるつて情報をきいたもンだから…………」

「…………」

「どんな風だね、工場は？」

村越は、例の黑眼鏡をはづして、眼をパチパチしながら、喜イ公の顏を見た。相手はまだ默つてゐる。

「ワイてるだらう、あれだけ××者が出たんだから……」

喜イ公は、俯目に考へ込んでゐたが、そのとき頭を振つた。

「駄目だ！」

村越はおどろいた。

「な、何故？」

そンな筈はない。賃銀は下る一方、馘首はやる。それで従業員が黙つてる譯はない。――畜生、この男は×××がついたのか――

「可笑しいな」

村越は相手をジッと見たが――しかし、丸つこい顔の、ヒドク頑固さうななかに、賢い眼をもつた若者は、別にビクビクしてる様子でもなかつた。

村越や、狹山は、この青年に望みをかけてゐた。まだ組合に首を突込ンで日が淺い故か、ひつこぬかれ残りのこの若者に、組合としては「工場委員會」再建の任務を荷はせる方針であつた。

「いつたい……」

ポツリと、喜イ公が云ひ出した。

「組合や、×××は、何故、皆とあゝ××だらう？」

「え？」

村越は眼をクリクリさした。喜イ公は、自分自身にも質問ねてゐるやうに……。

「だつて、工場の皆は、××者が出ても、知らん顔してゐる。なにか泥棒でもつかまつたやうな面付きでゐる――」

「そりやおめえ」

何を云ふんだといふ風に、村越は笑ひを含んで云つた。

「××××からさ、しかし、勇敢な若い青年分子はさうでねえ筈だ」

しかし、相手はうごかなかつた。

「わからん！」

と云つて首を振つた。

「ぢや、君はどう思ふ？」

村越は少し、きつく、たゝみかけた。すると案外に、この無口な勞働者は、石を積みかさねるやうに、ポツリ、ポツリ云ひ出した。

「青年だつて××××××、たゞ、モウロク親爺どもよりや、他人の「不幸」にも、自分の「苦しみ」にも、馴れつこに

なつてねえだけだ！」

喜イ公は顔をあげた。

「だいいち、おめえさん達の考へるやうに、勞働者は、理屈だけぢやうごかねえンだ。ビラでも讀んだら、カツと逆上せるだらうなンて考へてるンなら、そりや見當ちがひぢやねえか」

「………」

村越の顔を、狼狽に似たものが、サツと通り過ぎた。

「どういたしまして、俺らの「生活」にや、何千年の長い傳統と、十重二十重の重石がぶら下つてる、ビラ位ゐで、ホイと逆上るほどお手輕に出來てねえ」

そのつもりではないが、すぐ口が惡くなる。村越は、それでも怒りはしなかつた。熱心に聽いてゐた。

「第一おめえさん達にや、飽きるほど本を讀んで、×××××××××××××、わかつてるだらうけども、かんじんの皆は、あつさり云つて、おさきまつくらなンだ。少々のことぢや動かれねえ、馘首だと知つても、足場がなきア眼をつぶつて押しされるンだ。」

「一、一寸……」

そこンとこで、村越が口を挾まうとしたが、喜イ公は手をあげておさへた。

「待つてくれ、考へてゐたゞけを、一通り云はしてくれ」

村越はうなづいて默つた。

「それで、その「足場」といふのが、皆の「生活」をほかにして出來つこねえ。皆はいくら給料が下り、食ふに困つてるからつて、朝から晩迄、憤つてばかりゐたり、泣ツ面ばかりしてる譯でねえ、死かけてる病人だつて小便するやうに、皆も安直なことなら、何だつてやつてる、相撲でも、野球でも、淺草のレビユウでも、菊池寛の小説でも、活動寫眞でも、將棋でも、釣でも——たゞ惡いと云はれたゞけぢや無理だ、だつて、そりや皆の生活だもの」

「………」

「惡いといふからにや、いいと云ふものを、代りのものを與へてくれなきあ無理だ、いまゝでの「工場委員會」がさうだつた。野球をやるやつには「ブルジョアスポーツ」と非難した。少し頑固な奴には「反動」の折紙をつけた。そして「優良分子」ばかり探した。冗談ぢやねえ「優良分子」とはどンな天才かしら

ねえが、そンな奴は、、、、、えてして、大衆とは緣の遠い野郎なンだ！」

村越は、じつと一つ所に眼を据ゑてゐた。

「かう云つたからつて、俺あ、これつぽつちでも、狹山君達××者を、惡く云つてる譯ぢやねえ、それは飽迄××してゐる。誤解しないでくれ」

「いや、わかつた」

しばらくしてから、村越は立ち上つた。

「俺一存ぢや不可ねえ、一應歸つて組合へ相談してまた明晩來る」

それきりで、村越は、かへつてしまつた。そして翌々晩、また××××××やつて來た――。

「君、いいことを云つてくれた！」

村越は率直に云つた。

「で、組合としては、「工場委員會」の方針をこンな風に樹てゝ來たのだ」

村越は低い聲で話し出した。

一、K印工場、一切のスポーツ、或は、工場内にある同人雜誌見たいなものまで集團の一切を含めて、「對策委員會」を持つこと。

二、組合本部は「K印對策委員會」をおき、同工場の事情に應じて、指令を出すこと。

「しめ！　さうでなくちやいけねえ」

寄イ公は、決心を仄見せながら、村越に云つた。

「明日の晩から、各スポーーツ團の、幹部達を訪問するから、おめえも一緒に來てくれ！」

11

「ちよつと、あんた」

女房は、大の字にひつくりかへつてゐる印度虎をゆすぶつた。

「あんた、隣りのお內儀さんが來てるわよ」

入口に、隣りのお內儀が、暗い顏して立つてゐた。このお內儀の亭主は、同じ工場のルラー場に勤めてゐたのだが、病氣中に解雇になつてしまつたのだ。

「うるせえ」

女房の手を、ハネのけて、印度虎は大きな図體を、ゴロリと向うむきになつてしまつた。

「お内儀さん心配して相談に來たンぢやないか、おまへでわかるンなら、相談になつてあげなよ」

この二番長屋で、印度虎は顔利きであつた。こまかい出來事なら、今迄、たいてい相談に乗つてきた。

「うるせえツてのに、俺らにもわからねえンだ、ばかツ」

酒くさい息で、ドナリつけると、またゴロリと寢返りうつた。

隣りのお内儀は、すごすごと歸つていつた。どうしたのか、いつになく今日は工場を休ンで、朝ツぱから、酒に醉つぱらつてゐる亭主の様子が、女房には合點がゆかなかつた。

この長屋でも馘首になつたものが三人ある。そして、會社は、機械を増して人間を減らすと云ふ――。

印度虎にはわからなかつた。いつもならわからないまゝですごす。しかし、今の場合喜イ公の言葉が、つゝ掛ゝつて來る。舌打ツ、小づら憎い守衛長の顔がちらつく――。

「だまされた！」

一克者が石にぶつつかつたのだ。印度虎は「フー」と吐息して、寢返りをうつ――隣りのお内儀にだつて、いゝ加減のゴマ化しの挨拶は云へねえ――。

今迄は、誰か馘首になつて相談に來れば、仲間から餞別金を集めるとか、一寸、工長を通じて、歎願してみるとか位ですました。それを當然と思つてやつて來た。――しかし、それは會社にも理があると思つたからだ。今度はそれが無かつた。「無いよ」と、喜イ公の頑固なツラが頑張つてゐた。

その證據には、守衛長が、俺をおだてゝだましたー

印度虎は、また「フー」と吐息する。

「いつたい何だね」

女房は、赤ン坊をゆすりあげて、夕飯をこさへながら心配してゐる。

「喧嘩犬みたいに、フーフーばかり云つてさ」

「利いた風なことを吐かすな、阿女なンか默つてすつこんでろ」

印度虎は、昨夜工場から歸つて來てから、怒つてばか

た。
「うるせえ、酒でも買つて來い」
女房も、とう〱業を煮やした。
「飲みたけりや、トットと、自分で買つて來やがれ」
「ナニを？」
しかし、印度虎は立上りはしなかつた。それよりか「考へ」の方が、身體を重くしてゐた。
「こんばんは……」
戸外で聲がした。誰も返事しなかつた。
喜イ公と、すつかり勞働者みたいな恰好になつた村越が入つて來た。
「病氣かね？」
喜イ公の顏を見ると、印度虎は、ムクリと起きあがつた。
「今日も、四五人馘首になつたよ」
ポツリと喜イ公が云つた。印度虎は自分が責められてるやうに外ツぽむいた。
「それで、皆相變らず默つてるんだ」
「……………」
「今日、會社の貼出しがあつてね」
喜イ公は、一人で喋べつた。
「柔道大會が、明後日の晩、ツバサとサヽナミの試合が、その翌日の日曜だつてさ――そして、今年は「社長杯」に金一封がつくと云ふンで、皆は馘首の話より、そつちに夢中なんだ……」
「……………」
印度虎は、腕拱みしたまゝ默つてゐる。
「ねえ」
喜イ公が、少し膝を寄せて云つた。
「義兄貴だつて、俺らだつて、野球だとか、相撲だとかで、會社にダシにつかはれてンだよ。」
印度虎が顏をあげた。
「それで、こんどは反對に、俺達の相撲や野球にしようぢやねえか」
「俺たちの？」
「ん、勞働者のスポーツだ。會社のぢやねえ、俺らが、俺らのためにやる……」
ちつと喜イ公は、印度虎の顏を見た。印度虎の顏を、瞬間、

ピクピクうごいて、錯雑したものが通りすぎた。
「あの……」
村越が傍から、簡単すぎる喜イ公の言葉を足さうとした、喜イ公が眼で止めた。――大丈夫だ、この男は馬鹿ぢやねえ――。
印度虎は黙つてうつむいたきりである。女房の脊で、赤ン坊が泣きわめくのだけで、二人とも、息ぐるしくだまつてゐた。
喜イ公が、頃合をはかつて、とびとびのことを云つた。
「S労働組合のことだつて、×××のことだつて、よく考へてくれりやわかるンだ」
急所を、ドキつとつかれて、印度虎のワニ口が、みるみる歪んだ。そしてグイと顔をあげると、だしぬけに怒鳴つた。
「けえれ！」
村越はびつくりして喜イ公の顔を見た。喜イ公は落付いてゐた。
「あ、けえる！」
別に悪い顔もせずに、喜イ公がさきに立ち上つた。
「うるせえ、早くけえれ！」
云ふなり印度虎は、またごろりとひつくりかへつた。
「矢張り、あいつあ××だよ」
外方へ出ると、村越がさゝやいた。
しかし、喜イ公は確信をもつてゐた。
「あれでいいんだよ、あいつあ、今、たゝきつけられためめずみてえに苦しんでやがんンだ」
労働者の氣持は、労働者にはよくわかる――。
「大丈夫、あいつあ××な男ぢやねえから――まあ見てゐろ、きつと前方へ出る！」

12

翌々晩、長屋部落の眞ン中にある、小屋建のKクラブは、内も外も、人だかりでいつぱいだつた。
喜イ公と、村越は、裏口から、鈴生りになつてゐる窓の上の人々を押しわけて内部に入つていつた。
内部は人いきれでムンムンしてゐた。そしていやに靜しゆくだつた。頭と頭の隙間からはげしい叫びと一緒に、柔道衣の選手達の姿がチラチラ見えた。
正面に、銀製の大きな「社長杯」が光つてゐて、それを抱く

やうにして、事務の禿頭があり、左右に、各課課長なぞ事務所の連中がならんでゐた。

試合はモウ殆ンど終りに近づいてゐた。事務所の特等席の背後に、いつも豪い政治家や、坊さんや、社會政策家が來て説教するときに用ふ黒板に、紅軍と白軍の成績が貼出されてあつた。そして勝越してゐた紅軍は、白軍の大將、守衛長の柔道二段に出られて、モウ最後の、紅軍の大將「印度虎」一人をあますところまで來てゐた。

宮イ公も、村越も、グリグリ、頭で、人の脊中を押しのけながら前方へ出た――。

宮イ公は、印度虎を眼で探した。紅軍選手席の背後の方へ、石のやうに無表情な印度虎が坐つてゐた。

「何か、ありさうだね」

印度虎の眼附を見て、村越がさゝやいた。

「わからん」

宮イ公は、首を振つたが、心では何かを期待してゐた。

「あいつはいつも口で云ふよりやる方がさきなンだから――」

場内は緊張し、靜しゆくだつた。選手達は精魂をしぼつて、しめられながら、相手を絞めてゐる。一呼吸を一秒ながくつゞけば、「死」から「生」へ轉ずるのだ。相手を斃せるのだ。人々は呼吸をのみ、頬を硬ばらしてゐる。

「一本」・

しかし、袴の股立ちをとつた審判の聲がきこえると、緊張は急に、陽氣なブルジョアスポーツの精神にかへる、扇子や、ハンカチがうごき出し、ゆるぎなき、盤石の、ブルジョアスポーツの「平和」が、觀衆を、そして選手を「××主義」への威服へと驅りたてる――。

「館山虎太郎君！」

審判が「印度虎」の名を讀んだ。扇子やハンカチのうごきがとまり、印度虎ビイキの觀衆が拍手した。一本勝負、紅軍と白軍の勝敗も、「社長杯」の獲得も、これによつて決せられるのだ。

「印度虎あ――」

「黒ちやん、たのむよウ――」

觀衆は從業員だけに、守衛長より仲間の印度虎に、感情的にも勝たせたかつた。しかし、角力とちがつて、柔道では守衛長

に勝味があつた。

印度虎が出て來た。ベルが鳴つた。大將同志がぐつと近づいて型通り目禮すると、ツと立ち上つた。

兩軍の選手達も膝小僧をつつたてるやうに前こゞみになつた。喜イ公は、立ちあがつた瞬間の、印度虎の眼色を見た――たゞごとでねえ――。

バツと音がした。守衞長がキラつて印度虎の手をハネたのだ。立つて組ンでは、强力でかなはなかつた。放れて業を打つか、寢てしめるか――守衞長の作戰は、素早く、疊を蹴つて逃げる態度でゝもわかつた。

印度虎は踏み込んだ。――畜生ッ――松根つこのやうな腕がふるへてゐる――また踏み込む――。

印度虎に作戰なぞなかつた。勝敗もなかつた。燃える眼の色が捨身になつてゐた。「平和」なブルジョアスポーツではなかつた。守衞長の足がまた逃げた。うすうす相手の眼色に感じたのだ。氣魄におされながら逃げた、逃げながら、隙だけを覗つてゐた。

選手達も應援團も、觀衆も、みンなツナされてゐた。怖ろしい印度虎の氣魄が、いまゝでの試合とすつかり違つてゐた。

「お」

短かい叫びが、守衞長の口から出た。選手のたまりまで追ひつめられた守衞長が、瞬間に、印度虎の浮いた左腰をねらつて飛びこむと、素早く印度虎の左手をたぐつて、そのまゝ「呑込」にゆかうとしたのだ。ホンの瞬間、印度虎の體が仰向に外つた。岩のやうな腰がくづれかゝつた。モロくも斜めになつた。審判が駈け寄つた。

「チツ、畜生！」

腰が落ちたら、深く入つた敵の左肩が、盤石になるのだ！

「チツ、チツ」

印度虎は喰ひしばつた歯の根から、血泡を吐くやうな聲を絞つて、瞬間をさゝへた。

誰一人、呼吸してなかつた。

「印度虎ア――」

觀衆の中で、ひいきの女工達の泣聲がきこえる――。

が、何といふ腰のつよさだ。くづれて落ちなかつた。相手は焦つて、腕をもつと深くしぼらうとしたが、そのまゝパツと

び退いた。印度虎の右手が、首にのびて來たからだ。

「うぬッ」

飛び退かれても、今度は、左手が相手の上袖をつかんでゐる。逃げられ、引き摺られながら印度虎は執拗に離さない。審判が規定の時間で、ベルを鳴らさうとした。が、こんどは印度虎が、ウオッと叫んだ。

强引にたぐつた相手の片腕を、そのまゝ深く入つたハネ腰にひつかつぐと、たすきにかゝつた一本背負ひ！ 相手の身體が疊に落ちたとき、印度虎の眞黑な毛ズネが、その首根つこをおさへてゐた。

「一本ッ」

審判が怒鳴つたが、どうしたのか、下敷になつてゐる守衛長は、ひくゝうめいた。斜めにしごかれた彼の腕が、印度虎の股のつけ根あたりで、×××！ ××××××××××××××――。

審判は顔色變へて慌てた。選手も、應援團も、正面にならんだ事務所の連中もさわぎ出した。

「××、いまのは！」

「たしかに××だ！」

白軍の選手達は、顔色を變へて、肩で息をしながら、凄い眼つきで突立つてゐる印度虎の方へ詰寄つて來た。それはスポーツの精神に、×××××してゐる！

「バ、馬鹿野郎ッ」

印度虎は嚙みつくやうに怒鳴りつけた。印度虎に怒鳴られると紅軍の選手たちもアトしさりした。印度虎は傍で、審判に蘇生さして貰つてる守衛長を尻目にかけながら、荒い息づかひで云つた。

「俺アいまたしかに×××××××。だがこいつや、ホラ向うにゐる（事務達の席を指して）あいつらに、俺らの仲間は、何十人、××××××××、てめたちにやわからねえか」

「さうだ、間違ひねえ」

喜イ公が駈け寄つて、印度虎を庇ひながら叫んだ。

「印度虎の云ふことは眞實だ、嘘だと思ふなら皆のまはりを氣をつけてみろ！」

しかし、觀衆はそれをしまひまで聽かれなかつた。そのとき背後から投げられた×××××××××落ちて來たからだ。

スポーツを俺等のものにしろ！

從業員諸君！會社は、俺達青年を、ブルジョアスポーツで、×××にさせてゐる。「×××」欲しさのため、俺達は、俺達の背後で、××××××××××逢はされとるかもわからないのだ！

俺達のやるスポーツは、あくまで、勞働者のスポーツでなくてはならぬ。

野球も、角力も、柔道も、釣遊會も、賢母の會も、映畫交友會も、將棋天狗會も、俺らのやる俺らのスポーツからは、一切合切、會社×××をハネのけろ！

「×××」×××××！

ブルスポーツ××を、プロスポーツ××に取換へろ！

俺達の「××スポーツ」を確立しろ！

沸きたつ觀衆の中を、呆氣にとられて、手の出しやうのない事務所の連中や、受取り手のない「社長杯」を尻目にかけて、紅軍の選手や、喜イ公達は、印度虎を中心にして、場外へ押し出した。

「印度虎、バンざあい」

13

「××××××、ばンざあい」

明けて日曜日の朝早く、工場ウラ空地には、昨夜の柔道大會より、五六倍もの多數の從業員が押しかけて來た。

刷かれた白線を中心に、サヾナミ側は一壘側に、ツバサ側は、三壘側に、觀衆全部が應援團であつた。作業部門の聯絡によつて、彼等はその近い方へ味方し應援した。

しかし、觀衆の中には、昨夜の柔道大會を見に來てゐた從業員が多數あつた。それが昨夜の出來事の噂をひろめた。

選手が入場して來た。サヾナミ側も、ツバサ側も、兩方の選手が一緒になつて入場してきた。

「おそろしく、仲がええなア」

「ふンとだ」

觀衆達は總立ちになりながら拍手した。先頭に、サヾナミのキャプテン松岡や、人氣男のツバサ投手喜イ公や勇次郎なぞもまぢつて、元氣よくまるでメーデーのデモみたいに入場して來た。

そして觀衆達は、も一度おどろいた。選手團のすぐ次に、相撲團、柔道團の選手達にかこまれて、一本の竹の先にひらめかせた寒冷紗の旗が、ひるがへりながら入つて來る。

「な、なンだ」

「——印度虎、を、クビにするな！　ホウ！！」

しかも、その先頭に、當人の印度虎が、坊主つくりの眞黑氣な大きな圖體で歩いて來た。皆、譯がわかつたやうな、わからないやうな顔付で——しかし、とにかく、彼等の親愛なる印度虎へ喝采した。

昨夜の一件の噂が、また皆の間を野火のやうに擴がつた。

——印度虎を馘首にするな！

旗はひるがへりながら場内を一廻する選手團にかこまれてめぐつた。

皆は少しづゝ譯がわかつた。そして一樣に、ネツト裏の、天幕張りの事務所席を見たが、事務所の誰もゐなかつた。この特等席には、近所の長屋の女房や、アセモだらけのガキ共が、いつぱいになつて占領してゐる。

日よけもない、工場ウラ空地は、煉瓦の建物にかこまれて、太陽が直射してゐる。紅い洋傘や、黄色くなつたカンカン帽やが、左右にゆれながら、やがて、一壘側から應援歌が歌ひ出された。

文化のさきがけ
御國の柱
アジアにほこる
大（K）印工場

これは會社制定の應援歌だ。調子が早くなつて、女工達は傘を、男工達は帽子を振る——。

われらのK印
われらのサヽナミ
フレー、フレー、フレー

試合開始だ！　サヽナミの先攻！！

印度虎や村越と、ネツトのうらで話してゐた喜イ公が、ソン

とき駈け出していつた。

　昨夜以來、印度虎も喜イ公も、村越やそれに柔道の選手團も雜ざつて今朝方まで、各スポーツ團體の幹部のうちを訪問して一晩のうちに、K印の各競技團體は、一致して『印度虎の馘首を護る!』までに漕ぎつけたのだ。

　會社は先手を打たれた。これには、逆宣傳が利かなかつた。ゴマ化しが出來なかつた。おまけに團體であり、青年分子であつた。燃えつかせるだけの火力があれば——そして燃えつけば、カンタンに引つこぬく譯にもゆかなかつた。各スポーツ團體は、從業員全體への影響力を持つてるのだ——そして、S勞働のこまかい配慮と、喜イ公や村越の努力と、各スポーツ團きつての勢力家、印度虎が五十幾名の角力および柔道の選手をひきゐての踏ンばりに、燃えつかぬ譯はない!

　印度虎は、サヽナミとツバサの兩方の委員と聯絡をとるために駈け廻り、村越は、小さい紙片を觀衆のうしろから配つてあるいた。

　サヽナミ側は釣遊會幹事の「のんべ熊」が應援團長、ツバサ側は「印度虎」……。そして各選手が前列へ出て一緒に音頭をとつてゐる—。

　球審が、白い球をツバサの第一投手喜イ公に渡した。

「よウ、喜イ公ッ」

「たのむわよウ」

　ニコニコしながら、ボックスに立つと喜イ公は、力を籠めた最初の一球をおくつた。

「ストライクワン!」

　ドッと喊聲がツバサ側に上る。そして觀衆の中に、また一本の新らしい長旗が突立つた——。

——××××萬歳!!

　ばんざあい! ワケなしに觀衆はそれに應じた。火は燃え擴がりつゝあつた。

　そして、逆上してまだはつきりしない觀衆を、不調和な騷音がかきみだした。應援團長が音頭をとつて、前列の方が唄つてゐる文句は調子が違ふのだ!!

「にくしみのるつぼに
　赤くやくる」

馬鹿に調子ッぱづれに、まちまちに、——しかし、印度虎は兩肌おしぬいで、大きな腕をふりまはしながら音頭をとつてゐる。皆はさつきくばられた小さい紙片をとり出した。

「鐵のつるぎを
　　うちきたへよう」

サヽナミ側でも唄つてゐる。歌聲は少しづゝ、ひろがつていつた。そしてしだいに「會社の歌」を揉み消した。

「屈辱の歴史
　　この日閉づる」

急に、皆は、ブルジョアスポーツの陽氣さから轉落した。へんテコな歌の調子が、しだいに己れの現實へ誘つた。バットのひゞきも、守備軍の態度も、一様に場內の本氣に支配されて來た。

「そうら、モ一丁ッ」

印度虎が、大きな腕を振る……。

太陽の熱氣はしだいにつよく、若い男女工も、長屋の女房やガキ共までが、涙のやうに汗を流しながら唄つた。

「鐵のつるぎを
　　うちきたへよ」

皆の頭に×がうまれた——非現實的な夢の、ヒッさらはれた眼前に、巨大な×がたつてゐるのを見た。

——印度虎を馘首にするな!!

そして今度はまた、外野の眞ン中に、十四五人の馘首者、或は×××××××たちに護られて、大きな旗が押したてられた。

——大量馘首に反對せよ、××的S勞働組合に參加せよ!

支へてたつてゐる人々は、觀衆にとつてツイ昨日までの仲間だつた。觀衆は、いま改めて、馘首された犧牲者達を見た。そしてそれは先日、一人と一人で默つて見おくつたそのときとはすつかり違つてゐた。大衆は、いま自分達の足場を知り、×を

知つた。

皆は、拍手が出來なかつた。喝采が出來なかつた。犧牲者達の顏を見て、ゴクリと唾を吞んだ。眞夏の太陽より熱いものが腹の底で沸いた。

「ガンばつて、もう一丁」

印度虎が、また音頭をとる——。

「屈辱の歴史
この日閉づる」

火が點いた。イブリながら、モミ消されやうとしながら、いま急所に燃えついた。會社が動員した、選りすぐつた精鋭に、集團に、そつくりそのまゝ底から火が點いた。

眞赤な太陽の下で、カゲラウと一緒に、音をたてながら、火となつて燃えついたのだ。

「最後の戰ひを、
戰ひぬかん」

（一九三〇・八・五）



淺草紅團

川端康成

一

前科七十何犯——牛込の横寺町、旗本の娘と生れた身が、淺草公園の淡島さまの奥で、のたれ死にするまでにだ。

淺草の名物女「土手のお金」といへば、あゝ、あれかと、その醉つぱらひ姿を思ひ出す諸君も少くないだらう。——人だかりの眞中へ仰向けにぶつ倒れて、毒々しい啖呵を切つた婆さんだ。

例へば、近頃のレヴイウを見せると、淺草の土地つ子は笑ひながら、

「日露戰爭の頃でせうか、(海女の水潜り)といふ見世物がござんした。あれから見ると、海水着姿のダンスなんか、お上品なもんでさ。」

大きい水槽であつた。海草を植ゑ、深い底には貝殼が光つてゐた。水中眼鏡に赤い褌よけ一つの海女が、水の中に髪を振りみだして、歌麿の描く鮑取りの女よろしく、底の貝殼を拾ふのだ。水中ダンスだ。「人魚のお松」とかいふ花形が出來やうといふものだ。

しかし、そんな土地つ子の昔話を聞くまでもない。土手のお金が六十二歳で死んだのは、あの肉襦袢の玉乘娘が淺草に見られなくなつたよりも、もつと後のことなのだ。

明治十七年から建つはずでいつまでも建ちさうにない。雷門――この淺草の表門さへ、紙屑問屋のおぎんといふ娘のために燒けた淺草である。昔をいへばきりがない淺草の女だ。

水茶屋の茶汲女のはじまりが二百年前だ。次が楊枝屋の女だ。楊弓屋の矢取女だ。もう明治だ。銘酒屋の元祖だ。そして、新聞縱覽所の女だ。碁會所の女だ。麥とろ屋の女だ。射的屋の女だ。造花屋の女だ。――十二階下の銘酒屋だ。もう大正だ。「大正藝者」だ。大地震だ。十二階の塔といつしよに、いろんな女が消えたのだ。

しかしまた、寬永年間、輪王寺宮お出入の植木師森田六三郎が宮家から賜つた庭園――なんていふ、今日の淺草の見世物小屋で一番古い由緒つきの花屋敷、それかあらぬか、今だつてあやつり人形だとか、山雀の曲藝だとか、また人形師の名人安本龜八の菊人形花やかなりし頃を、微かに思ひ出させる活人形だとか、昔なつかしいものを見せてはゐるが、

――花やしき　納涼　晝夜開演芝居　ヤマガラ　アヤツリ
レヴイウとダンス

諸君、「電光ニユウス」なのだ。やはり電光で描いた象と猿とが、これらの文字をひつぱつて、入口の上を歩いてゐるのだ。ネオン・サインで表を飾つた小屋は殖えてゆくが、花屋敷の電光ニユウスは、一九三〇年の夏淺草の「斷然トツプを切つた」のだ。

最も古風な花屋敷がこれだ。消えたいろんな女のかはりに、この「電光ニユース」まがひの女が、淺草に現れてゐるにちがひない。さういふ女達も、追々と私は諸君の前に拾ひ上げてみよう。

だからといつて、その昔の「不良文士」、蜀山人こと太田南畝なんかの亞流と、私が思はれるならば殘念だ。

――銀杏稻荷問於笠森稻荷曰　盍聞君地有阿仙者　孰與吾家
阿藤

蜀山人の「阿仙阿藤優劣辨」だ。

當世は、レヴイウの踊子の評判を立てたりする文士、例へば水族館に出入りする文士のことを、淺草の喫茶店やミルク・ホ

オールに根を張つてゐる青年達は、この頃「不良文士」と呼びならはしてゐるのだ。

とにかく、笠森お仙と艶をきそつたお藤は、二代目瀬川路考が市村座でお藤に扮した時の衣裳、濃い茶色が路考茶といふ名で流行した、あのお藤だ。本柳屋仁平治といふ楊枝屋の娘だ。店は觀音堂裏の相生銀杏の下にあつた。呼賣りにも歌はれた。勿論、彼女の錦繪も賣れた。

錦繪が今のブロマイドだが、田原町の紙屑問屋の娘おぎんも、一枚繪に描かれたほどの小町娘だつたのだ。その繪姿を見たのが病みつきで、やがてはいひなづけの新吉からおぎんを奪つたのが、本所三笠町の岸上良太郎といふ、一千石の旗本の次男坊だ。婚禮の夜に新吉のつけた火が、雷門も燒いたのだ。

それは一八六五年の慶應元年、もう明治が足もとに迫つた世の中だが、紙屑問屋の娘や親にとつては、直參の旗本といふものが、まだ眩しい魅力であつたにちがひない。土手のお金もその旗本の娘だつたのだ。

2

お金は十六で川越へ酌婦に賣られた。旗本が明治維新で落ちぶれたのだ。川越を振出しに浮草だ。そして、明治三十年頃、三十一で東京へ舞ひ戻つたのだ。吉原土手の銘酒屋だ。酒亂と、前科と──「土手のお金」の名が高くなつた。

しかし、五十に近くなると、彼女はもう街に立つて、木賃宿を渡り歩くよりしかたがない。

「公園は今だめですぜ。」と、自轉車の銀公が私にいつたことがある。

「芥溜さがしみたいに物好きな道樂者には、吉原の外まはりが一番で、それから田中町あたりだね。木賃宿の町でさ。二十くらゐの女が三人で立つてるのがありますよ。三人一組で二階を借りてるんですが、例の月六妻といふのもやつてね、それがなんでも、一度が×××錢にあたるつて話さ。これなんか年は若いし、まあ上の部だね。」

それだつた土手のお金も、六十が近くなつては、物かけで稼がねばならなくなつたのだ。土の上のおきふしだ。「シキ」から「ソトシキ」へだ。相手がたいてい浮浪者だからだ。六十二でのたれ死したのは、お金のせめてもの死花だつたのだ。死ぬまで女として働いたからだ。ツブやタイガラまで落ちずにすんだ

からだ。酔つぱらつて啖呵が切れたからだ。

浮浪人のそのまたどん底の浮浪人は――といつても、決して浮浪するわけではなく、さうだ、いはば風化した人間の姿、いや、朝から夜まで同じベンチに座つてゐる、翌る日もまだ座つてゐる、だから風化するのももつともだが、諸君は明公の言葉を思ひ出してくれるだらうか。

「分つた？　あれもさんぎりお何の一人。たいていあんなものよ。淺草の底ね。だけどまだ、走るだけ女の冥加や。浮浪人は決して走りやしないから。」

　そしてまた、風化したほどの彼等はしやべらないのだ。盛り場の眞中で言葉なしに暮すのだ。

「レデイ・バアドつて、毛唐はいふでせう。」

　これもある朝公園で弓子の言葉だ。

「レデイ・バアド？」

「てんたう虫のことをよ。女の鳥ですつて。支那では紅の娘。――女もおてんたうさまの下で、朝化粧するやうになつちや、もうちよいと浮べないわね。」

　植込みの圍ひの鎖に腰をかけて、若い女が二人コンパクトで、朝化粧してゐるのだ。帶のうしろが皺になり、夜の土がついてゐる。

　共同便所の手洗ひの水道栓にゴム管をつけて、ある食べもの屋が食用の水を汲んでゐる。

　野鼠が二三匹、ベンチからぶら下つた露宿者の足の、古いゴム足袋を噛つてゐる。――この鼠は淺草の朝で最も私を驚かせたものだ。昆虫館の裏で見たのだ。

　化粧をすませて、彼女等は歸つて行く。昨夜は「ソトシキ」だつたのだ。

　水茶屋、楊枝屋、楊弓屋、新聞縦覧所――この流れの下のもう一つの流れを、諸君は聞いたことがあるにちがひない。けころ、提げ重、勸進比丘尼、夜鷹、それから今のゴウカイヤだ。宿なしお勝、稲妻のお玉、阿呆のお幸、すが目のお久――その名が活字になつてゐるゴウカイヤも多いが、土手のお金は斷髪のおよしのやうに乞食の子供でもなければ、馬鹿のお清のやうに生れつきの薄のろでもないだけに、尙更女の階段を底まで下りた典型なのだ。

　そこで、お金より二年も早く稼ぎはじめた龍泉寺の少女はど

うなるか。

また諸君は、弓子の姉のお千代が「おてんたうさまの下で朝化粧する女」であることを知つてゐる。

3

鉛の板をしきつめたやうなアスファルトが、桃色に染つて光つてゐる。と、まだ目覺めない街に散らばつた赤い色が、なんと鮮かに浮び上つてゐることだ。電車の響きのさやけさが、午前五時だ。

言問橋を染めた桃色の朝日の中には、昨晩の屍のあとがだんだら模様だ。しかし隅田公園は自然に描いた設計圖のやうに、裝飾が少く、清潔なHだ。つまり、向島堤と淺草河岸との二本の直線の眞中を、言問橋が結んでゐるのだ。

隅田川の流れは、日が射せば黄色く、日がかげれば泥色だ

しかし、橋の面には輕い櫛のやうな欄干と、鉛筆のやうな照明の柱のほかに、何の鐵骨構造もないので、一枚の力強い、單純な鐵板の直線の晴れ晴れしさだ。秩父や筑波の山々の見える晴れは珍らしいが、橋の上に立つと、どこからとなく關東平野の廣々しさが流れて來るのだ。

一五八・五〇メエトルの長さだ。ゆるやかな弧線を描いてゐるが、隅田川の新しい六大橋のうちで、清洲橋が曲線の美しさとすれば、言問橋は直線の美しさなのだ。清洲は女だ。言問は男だ。

だから、夏子は欄干の鐵に頬をぴつたり載せて、

「おお、冷い。」

彼女はいつも厚化粧して、十六だ。しかし、唇を唇で舐める癖がある。だからよく、濃い口紅を唇の外へにぢませてゐることがある。そこを甘く見てひつかかるのだ。

勿論口紅は昨夜にぢんだままだ。

「橋に霧がついてるよ、チビ、遠くを見るとまだ降つてんのが分るわ。」

「さうかい。」

「眠いわね。」

「今夜から縛りつけて寝てくんないかな、千代ちやんの鼬とお前と、紐かなんかで。」

「頬ぺたに霧がくつついちやつた。」

右頬の白粉が吸ひ取られたやうにむらだ。

「霧だか露だか分んのかい。」

拾ひ屋の箱車が本所から淺草へ桔梗色の羽織の女を乘せた圓タクが本所から淺草へ。支那そば屋の歸りが淺草から本所へ、青年野球隊が本所から淺草へ、マラソン選手が淺草から本所へ、また拾ひ屋が本所から淺草へ、白い砂のやうに體がすつかり見える洋服の女が、靴下なしの下駄ばきで淺草から本所へ——明るくなつたので格好が取れないといふ急ぎ足だが、なぜ裸のやうな薄物なのか、全く分らない。そのほかには勞働者が三四人きりで、まだ空自動車も通らない。

「大晦日の夜中はひどい霧だつたわね。霧のお蔭で弓子が命拾ひをしたわね。」

「ようつ。」と、船チビは板草履を兩手に持つて、もう橋の欄干の上に突つ立つてゐた。

そのまま綱渡りのやうなちよこちよこ走りだ。欄干は大人の乳の高さだ。親指と小指を擴げた幅だ。

「ちえつ、馬鹿にするな。」と、夏子は一散に走り出した。

洲崎埋立地の塵芥燒却場の大煙突のてつぺんから、避雷針の白金を盜んだ少年があつたといふ。

淺草の五重塔の上に少年が巢食つてゐたといふ話もある。

團十郎の刄の柄を盜んだのも少年だつた。

さういふ放れ業はとにかく、例へば瓢簞池の東岸、花屋敷の前の築山の腹を割つて共同便所が出來たが、そのコンクリイトの屋上庭園、そこは涼み臺ともなり、寢臺ともなるのだが、欄干はやはり言問橋と幾らもちがはない幅だ。その欄干の上へ仰向けに眠つてゐる男を、諸君は見かけたことはないか。脊が兩方へ食み出して、足を兩側へぶら下げてだ。

言問橋の欄干を歩く子供を、私はもう二三人見てゐるのだ。いつも朝だ。

「あれでやつと眼が覺めたよ。」と、隅田公園へ階段を下りると、いきなり橋の下へ走り込むと、腹一ぱいの聲で叫び續けた。

「馬鹿あ。馬鹿あ。馬鹿あ。」

それが鋼鐵のこだまだ。

4

——この公園はまだ工事中で、特に芝生は養成中ですから、

踏み荒さぬやう御注意下さい。

開園時間、午前八時より、午后七時まで。水戸屋敷跡の入口の立札の前に、お夏は待つてゐた。

橋の下のベンチから、乞食達が頭を上げた。鋼鐵のこだまで眠りが破れたのだ。

鐵の屋根と、コンクリイトの壁と、河風が吹き通しで、ここは夏向きの寢臺だが――ついこの間の七月の中頃に、乞食共の奇妙な祭のあつたことを、諸君は新聞で見ただらう。

古バケツを叩きながら、ぼろ布を旗のやうに振りながら、乞食の群が醉つぱらつて、歌つて、踊つたのだ。餘りに貰ひが少い不景氣の世を直さうとする、やけ半分の、彼等の祈禱であつたといふ。

「誰がなんといつたつて僕は、淺草の奥山にうろついてゐる犬が、どのぶちとどの白と戀中で、どの赤がどの黑に瓢簞池のほとりでひぢ鐵をくつたかと、ちやんと心得てゐるお兄いさんだ。」といふ、淺草通の佐藤八郎さんは「東京獵奇座談會」といふものに出席して、開口一番、

「不良少年も食へなくなりました。」

それかあらぬか、「腕」はすたつて、美しい少女を團長にいただくことが、近頃のはやりであるといふ。

「馬鹿あ。馬鹿あ。」

いかにも鋼鐵のこだまを喜ぶ子供のやうにどなつておいて、乞食達が起き上つたのをびつくりしたと見せかけて、船チビは一散に逃げて來た。

水戸屋敷跡は廣々と綠だ。花は夾竹桃がほんの少しだけだ。眞中に日本風な林泉があるが、芝生が眞青な西洋の朝だ。

「ほうら、やつぱり霧だわよ。」

青の上を白いものが流れてゐる。足を洗はれる爽かさだ。八時開園だが、子供や犬をつれた近所の人が、眼覺しに歩いてゐる。

落葉松にかこはれた半圓の芝生に、娘とセパアドが坐つてゐた。異國人描く日本のやうに、娘は清潔に整つた風景に似合はない亂れた姿だ。

犬が飛んで來て、夏子の肩へ足をかけたが、

「テス、テス、さう？ お前が一緒だつたら迎へに來なくともよかつたわね。」と、口のまはりを撫でてやつた毛が冷く、夏子

の字に血だ。
「あら。」と、娘を鋭く見て、
「千代ちやん、テスがどうかしたの」
「ええ、喧嘩をしてね。」と、お千代は笑つてゐる。
「よその犬と？」
「乞食みたいな人よ。」
「人間？」
「あら、をかしい。乞食が人間かつて？」
「じやうだんぢやないわよ、千代ちやん。きちがひだつて女だわよ。氣をつけたがいいわ。」と、夏子は千代子を立たせて、じろじろ眺めながら、
「霧で浴衣がこんなに濡れてるわ。昨夜深い霧だつたわね。こんなところで寝てたの？」
「ここぢやない。」
「どこさ。」
お千代は默つて歩き出した。
「その乞食みたいなのに、テスが嚙みついたの？」
「おしやれの三吉かい。」と、船チビが口笛の合間にいつた。
「三吉つて、觀音さまの裏の噴水でいつも行水してる？」
「知らないの？ 千代ちやんの後をしつつこくつけて歩いてるんだ。昔のお蝶にかんこみたいに、お千代三吉・三吉お千代つて、淺草中歌つて歩くよ。」
白い朝霧が芝生から薄れて行つた。緑は燃えるやうに地面から浮き上つた。
鯛模様の浴衣に、小意氣な白地の博多の一重帶で、お千代は垢抜けた下町だが、どことなく體に、新しい垢がつきはじめてゐる。浮浪者の土の匂ひだ。夜も晝も見さかひはない。目を離せば、ふらりと公園へ行つてしまふのだ。
「あすこにゐたのよ。」と、アスファルトの河岸へ出ようとするところで、彼女は松並木の陰のベンチを指さすのだ。
「あすこつて？ ああ、昨夜のこと？ 一人で寝たの？」
「四人で來たわ。その男が三人とも、テスにやられちやつた。」
と、お千代はけろりとしたものだ。

5

ワシントンのポトマック河、ロンドンのテエムス河、パリイ

のセエヌ河、ブダペストのダニユウブ河、ミユンヘンのイザア河──世界の都市の河岸公園にくらべても、水の量、眺めの廣さ、それから櫻の並木、風景ではひけを取らないと、復興局や庭園協會が自慢する隅田公園は、五萬六千八百七十二坪、向島側の長さが六百五十間──ちやうどその南の端、東武鐵道の鐵橋の傍から、夏子等は河上を眺めてゐるのだが、言問橋の向ふは朝の色に霞んで、アスフアルトの濕つた光の平面だ。

　河、柳の堤、歩道、櫻並木、歩道、櫻並木、車道、櫻並木、歩道、櫻並木──これが平面圖だが、櫻並木は短册形の芝生の四列縱隊だ。柳の堤も芝生だ。

「磯臭いと思つたら、道理でこんなものがあるわ。」

「なんだい、こんなもの。」

「内務省向島驗潮舍」といふ字が、船チビは讀めないのだ。

　河向ふの淺草河岸は、今日は日曜なのだらうか、吾妻橋際から橋場まで白いユニフオウム姿が一ぱい、それぞれネットを張つて、素人野球だ。

　船チビは犬と走り出した。うしろから夏子が犬を呼んだ。また、チビが呼んだ。犬が大きい波を描いて、アスフアルトを行き歸りしてゐる間に、お千代はベンチの上で居眠りをはじめた。

「新聞、新聞、職業案内つきの朝刊いかがです。」と、淺草公園のベンチへ、もう新聞賣子が廻つてゐる頃だらう。

　白服の巡査が大勢で、露宿者を調べ歩く頃だらう。

　小僧が目をこすりながら、連れの男の身元を説明してゐることもある。

「兵隊さんです。」

　巡査に揺すぶられても、隣りの男はなかなか起きない。ぽんやり眼を覺すと、

「ちよつと來い。」だ。

　男はあわてて、うしろの植込みから陸軍の軍帽と上衣とを拾ひ上げ、奉公袋をぶら下げて、小僧と一緒に交番へ行く。露宿の常連はそんなことを見向きもしない。

　朝參りの客をねらつて、兩側の店が眠つてゐる間をぬすんで、仲見世にはもうテキ屋が、朝の一稼ぎのコロピ店を擴げる頃だらう。

　地圖、空氣枕、二十日鼠、習字寶典、香水、パイプ、靴下、「

笄、粘土面型、十二支の腰さげ、牛蒡、生きた龜の子、二品十五錢屋、子供服、新かんぺう、盆石、下駄鼻緒、柚子の實、根つきの水蓮、リボン、小型水撒き車、花立臺、扇、簪、ゴム人形、蘇鐵の苗、ハンカチ、新煮干し、スカアト、指環、まむし黒燒、細紐、計算器つき手帳、古本、鳴く虫、寢冷え知らず、鏡、運世曆、箒、切花、帽子、桐の小箱、苗木、ズボン吊り、シヤツ、下駄、財布、げんのしようこ――これは七月のある朝、私が見た仲見世の露店だ。

言問橋の上にもう、一ぱい二錢、三ばい五錢の冷しコオヒや、靴下止めや、梨や、帽子洗濯や、五目並べや、詰め將棋や、水瓜の切賣りの店が出はじめるだらう。

しかし、セパアド種の犬だけが朝らしく、夏子も船チビも眠いのだ。

弓子に頼まれて、駒田が彼の叔父の家から盗んで來た犬だ。お千代のために弓子が、その小犬を訓練したのだ。

駒田といふのは、地下鐵の塔から望遠鏡で紅丸を見てゐた男だが、お春の戀人――それには、お春の身元を洗ひたててみないと分らない。

千葉の船形の宿屋の女中、十五六のお春は、東京の藝者町の髪結ひが、一生の望みだつたのだ。世話してやらうといふ避暑客があつた。嘘ではなかつた。旅費にと預けた金は卷きあげられたが、淺草の髪結ひの梳子に入れてくれた。今の昭和座の横の通り、有竹鳥獸店の近くにあつた髪結ひだ。

しかし、いつのまにか、ゐながらにして、自分が男から男へ賣られてゐやうとは、田舍娘に分らうはずがない。

6

「親切なおばさん。」――よくあるやつだ。

初めての客だといふが、調子のいい話し振りだ。四五人の梳子のうち、お春に特別目をかけてくれる。房州の生れかと聞く。言葉の訛りで分るといふ。

「房州には私、船形つてところへ一夏行つてたことがありますよ。」

「まあ?」

「あら、あの近くなの、春ちやん?――いいえ、私はとてもそんな贅澤な身分ぢやないけれどね、妹の子供が泳ぎに行つて

て。まあお守役でね。」

お湯屋で二度も三度も會ふ。色白の肌を褒めそやしながら、黒い首を糠袋で洗つてくれる。その歸りにしるこ屋だ。芝居の切符をそつとくれる。行つてみると、いつのまにかおばさんが隣りへ來て座る。若い男づれだ。おばさんの二階を借りて、大學へ通つてゐる書生さんだ。

「もつと切符を澤山貰へるといいんだけれどね、私が幾らあんたのひいきだつて、春ちやんばかりにあげるのは、ほかの桃子さんに春ちやんがねたまれることになるわ。だからさ、この次から春ちやんの休みの日に、私ん抄へ誘ひに來てくれるといいわ。」

「ええ、でも――。」

「いいのよ。あら、いいのよつたつて、春ちやん私の家を知らないのね。今日歸りに教へとくわ。寄つてつてもいいでせう。」

その家は駒形だ。

駒形からなぜわざ〱公園の錢湯へ來るか。――お春がそれに氣がつけばよかつたのだ。

お春は茶の間へ引つぱり上げられる。おばさんが大學生の花やかな未來を、彼自身に向つて話して聞かせる。大學生は迷惑さうにはにかんでゐる。しかし、お春は女髪結ひが一生の望みの田舍宿の女中だつたのだ。花やかな夢には誘はれない。さつさと歸つてしまふ。だが、次の休みの日には、おばさんを誘ひに行く。

そして、一月ばかり後だ。夜の九時過ぎに、腕一ぱいの紙包みを抱へて、髪を結ひに來る。

「私上野の親戚へ行く途中なんだけれど、考へてみると歸りには遲くなると思つて、買物をしたら、大變な嵩なのさ。」

「なんでしたら、置いてらつしやいまし。」

「ありがたう。車賃を儉約させてやると思つてね、後でちよいと一走り、春ちやんにでも、うちへ屆けてもらへませんかしら。」

「ようござんすとも。」

翌る朝、おばさんの家の二階で目を覺すと、お春は寢床の中に××だつた。驚いて腰に手をやつたが、やつぱり×だ。×はゐない。飛び起きて電燈をつけると、鏡臺の中に白い裸が立つてゐる。掛蒲團を剝つてみたが、昨夜の敷布もなくなつてゐ

る。押入れをあけると、空だ。彼女の身につけるものは、×××××見當らない。彼女はあわてて蒲團にもぐり込んだ。自分の×に手を觸れるのが恐しやうな恥しさで、彼女は膝を折り縮めながらがたがた顫へた。泣いてゐるのが、自分で分らなかつた。

しかしぢつとしてゐられない。また起き上つたが、身の置きどころがない。鏡臺の前へ坐つて、鏡の中の×を見ると、反つてはじめて落ちついた。自分の×が、なぜか不思議なものに見えた。ふと泣き止んだほどだ。梯子段の下をそつとうかがつてから、鏡の前でぐるぐる廻りながら、彼女は××彼女を眺めた。それからまた、梯子段の下を覗いて、這つて歸ると、彼女は女の奇怪な姿をぢつと寫して――横倒れに突つ伏すと、彼女は泣くつもりで笑ひ出した。別の女の誕生だ。

さうして五日間、××××お春はその二階の寢床にもぐりこんでゐたのだ。

7

一、營業時間は日の出より午後十二時限りとす。

二、華客にして酩酊の御方と認むる時は遊技を謝絶す。

三、通行人を猥りに呼び入れざる事。

四、公安風俗を紊さざる事。

五、主人及び雇人の外、銃臺内へ入る事、堅く謝絶する事。

六、其筋の注意有之、招待券及び祝儀等を受けざる事。

勿論、射的屋が銃臺の横に掲げてゐる規約だが――しめ飾りのやうに、正面へつるした「紙切り」の敷島。その下の二段の壇は上が敷島やバット、下が人形や菓子、一間ほどの板の間を距てて銃臺、銃臺にはエナメル塗の玉容れと鐵砲、芝居の舞臺風な幕の壁飾りで、銃臺の横に鏡がかかつてゐて、昔も今も變らぬ店で、銀杏返しの女が、

「いくら時世後れの遊びだつても、今更麻雀倶樂部に變つてしまふわけにもゆきませんわ。あんなものも一時のはやりですわ。こちらはこれでも永い傳統のある商賣ですわ。」

「先づねえさん達の風俗から改めるんですね。桃割を斷髮にでも。」とでもいつてやりたくなるが、しかし、公園劇場や電氣館や淺草劇場の裏、つまり六區第一號と第二號の裏に軒並みの一

劇が本場で、次が六區の西側、東京館の裏や、淺草興行組合の横、もう一ところ、これは餘りに忙しく、花屋敷の裏塀に、とにかく今でも四十軒足らず殘つてゐる——その「玉音の街」へ、お春は洋裝の姿を現したのだ。おばさんの二階の××の寢床からだ。射的屋が彼女の淺草暮しの振り出しだつたのだ。

それはまだ地廻りの「打ち込み」があつた頃だ。射的競技會が盛んだつた頃だ。百回百五十回と打つ客が珍しくなく、玉の音を聞かないと寢られない人間が多かつたのだ。大川といふ片腕の不自由な男は、櫻田の店にずぼりこんで動かないものだから、その射的屋の主人が金をくれて旅へ出してやると、上方で立派な役者になるのだと勇んで行つたが、翌る日にはちやんと隣りの店で、ぼんぼんやつてゐた——その頃の射的の魅力のいい例だ。

左利きの彦、洗髮のお糸、それに私、この三人がお春に連れられて、つい先達ての晩、射的屋へ行つたことがあつた。

繪馬倶樂部には藝人の下つぱがゐるから、射的屋へ出入してゐるかもしれないといふので、その聞き込みにだ。私にはまた、喜樂亭のねえさんは小說のネタをどつさり持つてゐるから紹介するとのことだ。

喜樂亭は公園劇場の樂屋の前だ。樂屋口に大道具の連中が涼んでゐた。樂屋の窓からも、裸の役者が私達を見てゐるのだ。

お春は鐵砲を持たうともせずに、銀杏返しの女と昔話ばかりしてゐる。

「フランス人形みたいに可愛いかつたわ、お春さんのお嫁さん姿が、今でも目に浮ぶやうよ。あの人どうしたのよ。——お春さんが店へ來ると、樂屋の窓に人だかりで、芝居の幕があかないつて、よくいつたわね。洋裝が珍らしかつたわね。」

「十年前とちつとも變らないねえさんの方が珍らしいわ。」

「小十年前なんか知らないでせう。」

後でお春が話したところによると——喜樂のねえさんは、生れ落ちると直ぐに田舍へ養女にやられた。父は浪花節語りだつたのだ。この店から公園の寄席へ通つてゐたのだ。彼女が十八の時に、父のところへ遊びに來て、射的屋の手傳ひをしてゐるうちに、そのまま落ちついてしまつたのだ。

それが十二三年前のことだが、今でも彼女は二十二三にしか見えない。その間に店をすつかり自分のものにして、實父には

乾物屋を出させてゐる。そして、養父母も田舍から呼び寄せて養つてゐる。

お春の射的屋通ひは、六七年前のことだ。その頃の玉代の十分の一も今はむつかしく、一日四五圓止りだといふ。

「春ちやんのままごとの花嫁の時分が、うちの商賣も花だつたわ。」といふのも道理だが、その花の時代だつたからこそ、お春は射的場で駒田が拾へたのだ。

8

お春を東京へ連れ出したのは、いふまでもなく、避暑地荒しの不良少年で、髮結ひへ入れてくれたのも、實は贓品を一時安全なところへ預けたくらゐのつもりだ。

お春の知らない間に、彼は仲間の一人へ、彼女を手に入れて賣り飛ばす一切の「權利」を、賣り渡してしまつたのだ。それを買つたのが、おばさんの家の二階の男だ。おばさんから見れば、甘い小僧の寺坂だ。

おばさんの家は「素人待合」だ。おばさんは女衒だ。

つまり、寺坂は買つた品物を、おばさんに介から持ち出してもらはうとしたのだ。おばさんの方からいへば、寺坂達を手先に使つてゐるのだ。たとへあの晩、お春が逃げ出したところで、おばさんは上野の親戚とやらに泊つてゐたのだ。涼しいものだ。

××にするのは、逃がさないためのお得意の手だ。

寺坂がおばさんの二階を借りてゐるなんて、勿論嘘だ。

床の間の盆石と、それから鏡臺と赤い衣桁——寺坂に二階へ誘ひ上げられると直ぐ、お春にもこの嘘が分つた。おばさんの荷物の紙を破つてみると、中は古座蒲團三枚だ。

「後になつてどう考へても私には、あの時×を鏡に寫して見た氣持が分らないのよ。」とお春はいふが、とにかく×の五日間に、彼女は激しく寺坂を愛し出したのだ。彼を氣ちがひのやうに愛することで、第二の危險をのがれよう——とまではつきりではないが、實におどおどして、實に素敵な度胸が据つて、洗ふやうな美しくなり方が、反つて寺坂をまごつかせた。

賣られるどころか、彼女は男に洋服を買はせたのだ。

寺坂の花嫁として、射的屋通ひをはじめたのだ。そして仲間に出合つても、つんとそつぽを向くだけだ。髮結ひの梳子

寺坂の一派は公園の行き歸りに射的屋へ寄るのが、仲間の禮儀作法のやうになつてゐた。金車亭の向ひのバットといふ店が、彼等の巣だつた。爺さんと息子と、そこへ爺さんの兄が居候してゐてゐて、珍らしく女を使つてゐない店だつた。

敷島四個積――玉四發で落し取り、二十五錢。
敷島三個積――玉四發で落し取り、十八錢。
敷島紙切り――玉三發で落し取り、十八錢。
敷島上猫落し――玉三發で猫を落す度に敷島一個、十八錢。
バット三個積――玉三發で全部落し朝日一個、七錢。
バット四個積――玉四發で落し取り、十八錢。
上人形落し――玉三發で落し取り、二十錢。
並人形落し――玉五發で落し取り、十錢。
文字合せ玉ころがし――玉五個十八錢。

今はこの十通りだが、その頃とも變りはないだらう。

しかし十通りあつても、淺草の常連は昔からバットの三個積ときまつてゐる。敷島の三個積や、敷島紙切りを打つ人を、たまに見かけるくらゐのものだ。

しかも、寺坂のやうな百發百中の名人は、勿論バット三個積つみ專門だが、一回二錢の「玉代」しか拂はない。煙草はくれては商賣にならないから、二錢で遊んでもらふのだ。

だから「追分」とか「ワリ」とか「ヒネリ」とか「山越し」とか、ただ落し方の技巧を弄ぶだけで、眞劍に打つのが競技會だ。

ところがその頃、このバットの店へ毎日射的に來る、十五六の少年があつた。晝の一時間ばかり遊んで、夜また一時間ばかり遊んで行くのだ。

それがある日、晝から爺さんの兄に鮨や酒を取つてやつて遊んでゐたが、夜が更けても歸らうともしないのだ。

9

バット三個積の臺のうしろの端に、バットを三個を横に立て、その間にマッチ箱を二個挾む。三發の玉でバットを全部落して、マッチだけを殘すのだ。

二番目には、敷島の臺のうしろの隅にバットを二個倒して置く。それを一發で落すのだ。

三番目には、敷島の臺にバットを六個斜め向きに立てる。三

發で全部落すのだ。

これはその夜の「競技煙草」——バットの爺さんの積んだ煙草が公園中で一等落しにくいといふのと、女氣がないことで、「射的道」の見榮で集つてゐる常連の遊びだ。一たい射的競技會といふものは、射的屋を廻つて小遣錢をもらつてゐたやうな男が、一軒の店の主催の名を借りて、合羽橋あたりの貸席に、月一回くらゐ同好者を集めたのだ。しかし、例へばその夜のバットのやうに、店をしまつてから、天狗連中が競技をはじめることもあるのだ。

終つたのが一時近くだ。

「なあんだ、あんちやん、今までぼんやり見てたのか。もう店をしまふからな明日またおいでよ。」

「ええ。」と、少年は寂しさうに店の隅を動かないのだ。

それを見たお春は走り寄ると、いきなり少年の肩に手をかけて、

「あんちやん、あたいと一緒に歸らうよ。あたいの家へ遊びに來ない？」

「ええ。」と、大人のやうな美しい洋裝の少女に、突然やさしくされて、少年は頬を染めた。

「ねえ、いいでせう。なんなら泊つたつていいのよ。」

向島の宿下宿へ歸ると、お春は少年のうしろから柔かく抱くやうに彼女の浴衣を着せてやりながら、少年のズボンをふと抑へて、

「あら、あんちやんずゐぶんお金持ちね。子供があんまり澤山お金を持つてるといけないことよ。あたい達が預つといたげてもいいわ。あんちやんずつとここに泊つてもいいのよ。」

「このほかにも今朝、射的屋の爺さんに三十圓預けたんだよ。爺さんも子供が澤山金を持つてるといけないつていふんだけれど、皆出すと怪しまれると思つてね。」と、少年がお春に渡した紙入れには、二百五十圓ばかりの金だ。

今までにがり切つてゐた寺坂は、あつけにとられてお春の顏を見るばかりだ。

「ほうね。——闇屋でせう。」といふお春だ。×を鏡に寫して一月だ。

「あんちやん、こんな金をどこから持つて來た。なんか悪いこと——。」

「馬鹿ねえ、お巡りさんぢやあるまいし。心配せずに寢ましようよ、あんちやん、晩いわ。」

寢床は一つだ。寺坂は直ぐに眠つた。

少年は叔父の家の金庫から持ち出して來たのだ。その前から毎日二三圓づつごまかしては、淺草へ來てゐたのだ。

なんといふことはない。淺草の不思議な魅力に誘はれてだ。叔父の家は神田の小川町だ。小僧のやうに使はれてゐたのだ。

さういふことを聞き出したお春は、少年の首にそつと手を廻して、頭を指先でぽたぽた叩いてやりながら、

「金庫つて、大きな金庫？」

「店の金庫は小さいんだよ。それに鍵の入つてるところを知つてるんだ。」

「ねえ、あんちやん、スポオツ・シヤツに白ズボンきりなんて、恰好が惡いわ。」

「いつもこんなりでお使ひに行くんだよ。」

「ええ、だから、明日あのお金で洋服か着物を買つて上げるわね。」

「洋服がいい。」

「それからね、今日からあんちやんは、あたい達の弟になんのよ。どこへ行つても、あたい達のことを、兄さん、姉さんつて、いはなゝちやだめよ。

「うん。」

「さう、さう、明日あんちやんの洋服を買ふ時に、あたいも一つ買つてほしいわ。」

お春は少年より一つ年上だ。

10

お千代のためにセパアドの小犬を盜んで來た駒田が、六七年前のこの少年なのだ。

洋服二着と蓄音機を買つただけだつた。殘りの金で三人が遊び歩いたのだ。射的屋へ三十圓を取戻しに行くと、

「直ぐ使つちまつたよ。なあんだ、あんちやんはくれるつていつたぢやないか。」

金がなくなれば、少年は邪魔だ。

「どうにもしかたがない。叔父さんとこへ歸つてもらはう。」

「金がなくなつたらつまらないね。僕もう一ぺん持つて來る

よ。」と、しんからこはれた少年の悲しみを見ると、お春が智慧をつけた。その金で彼女を寺坂から買ひ取れといふのだ。

それから、赤帶會、黑帶會、紅團――とにかく五六年の間、駒田はお春につきまとつて、淺草を渡つて來たのだが、お春自身にいはせると、彼女はもうからつきし意氣地がなくなつた。だらしがなくなつた。

だが、駒田は今もやつぱり、そこはかとないものの魅力に誘はれて、ぼうつと夢を見てゐる。心に張りのあるいい娘ともう一度暮させてやりたいと、お春は思ふのだ。そのことを弓子に頼むのだ。

「私がその娘だつていふの？　またはさういふ娘を私に捜せつていふの？」と、弓子は叩きつけるやうに笑ふだけだ。

ところで諸君、その弓子だが――このあたりまで書いて來た時に、私は奇怪な姿の弓子に會つたのだ。そこで、この小説も急に航路を變へなければならなくなつたのだ。

小説を船にたとへたが、全く船なのだ。――隅田川汽船株式會社、例の一錢蒸汽の乘合なのだ。

私は濱町河岸から吾妻橋行に乘り込んだのだ。

大島の油賣りの娘が、瞳を上瞼へつり上げて、ぢいつと私を睨むのだ。

あらい紺がすりの腰までの筒袖、紫の前掛け、紺の脚絆、ゴム足袋、膝に大きい黑木綿の風呂敷包みの荷物、それに油紙、横に竹の皮張りのまんぢゆう笠――髪はひつつめだが、額に切つた毛を垂れ、日燒けした顔に薄化粧して、まことに都會じみた田舍の花だ。古ぼけた乘合船に餘りに似つかはしい姿だ。裾からめりんすの腰卷が下つてゐる。

その娘のきびしい顔が、ぷつと吹き出して、

「大島の椿油一ついかがです。奧さんのお土産に。」

弓子なのだ。

「どうも、どつかで見たと思つても、まさかね。」

「毛の濃くなる、珊瑚の根や昆布の根、油かすの髪洗粉もございますよ。」

「相變らずお道樂が過ぎる。」

「あんたこそ、どうしてこんな船に乘つてらつしやるの。」

「紅丸から君が白いモオタア・ボートへさらはれた――あすこの續きを書くんで、大河筋の風景を見て廻つてるんだ。」

「油賣りのことは書かないやうにしましようよ。」
「油賣り娘に身をやつして——どういふことにしようかな。」
「人を搜してゐる。」
「いつだつて君は人を搜してるんだね。」
「嘘よ、そんなこと。——かうでもして稼がないと、なあんて。」
「そんなものまで貸衣裳屋にあるのかね。」
「まさか。——油賣りの娘さんに借りたの。」
「だつて、その娘さんは？」
「今頃は淺草で、萬歳でも聞いてるでせう。——でなくつたつて、よく樂屋口なんかで、油賣りが油を賣つてるわ。油を賣るつて、あのことよ。」
　船が吾妻橋に着いて、弓子がまんぢゆう笠をかぶりながら、
「いよいよ私だつてことが分らないでせう。」と立ち上ると、短い紺がすりの尻が割つてあるのだ。



我入道

芹澤光治良

一

部落にも生命があるのか。

西風が飛沫を吹きかける頃になると、部落は萎れる。

「端れ（屋號）のお母さん、出掛けませうか」

向ひの妻君が、夕闇の中でそつと叩く。抱へた包を質屋へ持つて行かうと云ふのだ。然し、質物のある家は幸ひだ。隣でも其隣でも、洗つたお櫃を、終日、取り込まなかつた。

秋鯖や鰯漁が終れば、西風の吹くことは、祖先代々變りがない。正月が濟む頃、蓄の乏しくなる事も、毎年同じであるのに、其爲に備へることは、西風が海を荒す限り不可能だ。駿河灣の一隅に流れ込む魚族は、田畑に實る稻や麥と同じく、亂れない周期を持つて居る。從つて豐作もあらうが、それは全く自然の氣紛れに依るもので、奇蹟の行はれない今日、期待してはならない事で

る。

狩野川岸には處々、漁師の自然に集る場所がある。何百隻も並んで繋いだ小舟は、風に揺られて舷を摩擦する。それを防ぐ爲に多くの綱を八方に走らせなくてはならない。夕方河岸に出る男達は、お山（富士）に懸る雲行きで、天候をトする。黒ずんだ伊豆の空が燒けて、波頭を染める夕は、次の日の凪を約束するが、翌日は又午後に風が出る。それだのに冬の漁は夜釣だ。——待つてはならない次の夜に、かくして漁師達は希望を置いて行く。そして何日も、風の無い海を遠くから待つ。三月の末には待たずとも凪ぎるのに——勿論それを百も承知して、唯待つのだ。祖先からの習慣、一つの本能であらう。自然に逆らはない、——これこそ、海の人々の叡智だらうが、その爲に、家庭の米櫃は空になる。其間、街に仕事を探したらばと、考へるだらうが、海の人々は陸では働けない。それに街にも其頃には仕事が無いのだ。

偶さかに風の來ぬ夕は、川は廢々とする。總ての小舟が出拂つて、村の湯屋も早く火を消す。女達も落着いて暗い電燈を圍んで、仕事を抽出す。其儘女が安眠出來る翌朝は、二箱位の鯖や鯵を、どの舟も積んで來る。收獲時の賑さ。女もそれを擔いで町へ、兒は泣く、男は元氣な裸脚とはじまき。四人で釣つた魚が二圓にならなくても、久振りに儲ける金は、貴く有難い。

風は雲を動かさずに斷ることがある。冬の夜の海空は、深くて凍る。星の碎ける音も身に滲みる。漁師の耳は、釣糸をかけた指先よりも尖る。海を渡る風音を捕へなくてはならないからだ。——地平線が苛立つたと見ると、何でも棄てゝ篝火を消す。三挺の櫓にしがみつく。風に追ひ付かれぬ前に、河口に達しなくてはことだ。

松にからむ風を聞けば、何時でも村は覺める。皆は岸に立つて河口を見守る。千本濱に波が亂れゝば、女達の胸も騷ぐ。河口は一關門だ。無事に通れば、家庭が待つて居る。然し難船の危險を冒すことになる。河口を避けて牛臥濱に行けと、我入道濱に提灯を搖つて、合圖する。が、舟は一直線に河口を滑らうとする。それが近道であり、又舟人の誇だ。

「だ・せ・ん（難船）だ・よお——」

濱から眞直に、村の肚を通つて、若い者が驅けて行く。

「だせんだよお——」

(其聲で、私の祖父は壽命が縮ると良く云つた、村の若い足は全部、叫聲に應じて濱に走らなくてはならない。村は動員令の下りた騷ぎだ。難船で命を喪くさないと、誰が保證出來よう。命を拾つても、唯一の持物である道具を喪くす。

實に冬の西風は、嬶天下よりも、我入道には苦手だ。

「はづれ」の息子の一太郎は大學生だ。

男子は小學校の卒るのを待てないで沖に引立てられて行く漁村で、而も貧乏な家の彼が、どうして、町で三人目と云ふ帝大に入つたのか?「はづれ」で留守居を預る濱の別莊に、東京から御主人、石井が來ると、母は女中代りをする。そして母は美人だ。一太郎はその石井の鼻と目を持つて産れたが、妻の子は、夫三吉には可愛いゝ長男であり、母でさへ、其高い鼻に氣が付かなかつた。一太郎は、漁師の教育を受けたが、成長するにつれて、波に醉つて舟を厭つた。父の嘆き、母の驚きの中で、子は漁師でない血に動いて行つた。町へ子僧にと祖父達が相談し始めた頃、彼は石井に頼つて、中學校に通ひ出した。それからずつと秀才?「はづれ」一家も、部落民と共に此青年を誇りとして、出世を待つてゐる。

「お父さん。魚の來るのを待つて居ないで、こつちから探しに出掛けたらどうです」

一太郎は、飢ゑさうな村に生活して、漁業の改革を、長く考へて冬の休暇に歸つて來た。父は爐邊で網をすく手を休めて、偉い我子の顏を仰いだが、其意味が解らなかつた。

「發動機船を造つて、駿河灣の外に出るんです」

「燒津の人等の眞似かな」

其夏は良く、鰹船が發動機の音を曳いて狩野川を上つて行つた。櫓を漕がない漁業が、其時から村人に、宿命を變へる明い希望を閃かした。櫓は漁師を全部若死にさせる過勞である。

「そんな時世が來たら、乞食が大名だがな」

長吉伯父も、夢見る目を硬張つた顏の中にしばだたいた。明日の大根を煮込んでゐる母は「偉い」子の口を凝視めた。

「鰹が難しい漁なら、鯖を續けても良いでせう。鯖の通路さへ解れば――」

「田子の瀬が鯖の巣だと、爺さん達からの云ひ傳へだが」

それは木の葉の樣な小舟には餘り遠かつた。下川岬と遠州御前崎との直線の中點に在る。さうかとて、發動機船を所有することは、百姓が田地を買ふよりも覺束ない。明日の食に氣を奪はれてゐる職工に、工場主になれと云つても相手にはしまい。

「千兩箱を二つ積むことだからな」

父は無造作に網の目を數へた。西風は締り惡い戸を外しさうに搖つた。從兄の悅治は若いから、一太郎の話が解つた。

「もう魚も内海にはやつて來なくなつたし、此儘では漁師はあがつたりだ」

魚獲上の技術から、發動機船さへ出來れば、村の漁業にも光明が來ることを語つた。唯金だ。

それから十日許りして、一太郎は二千圓の紙幣を父の前に積んだ。

呆れてゐる父に云つた——

「直に船、機械の註文にかゝり、誰か運轉の見習をさせて。…………裏の伯父、向うの叔父、うちと三軒で共同にしたらどうです。裏の悅治君は、淸水港へ註文に今日でも出掛けて、共儘運轉を習ふのに殘るさうです」

「だけんどお前、誰の金だな」

「出所なんてどこだつて良いでせう。皆に寄つて貰つて相談したら、……この位の西風は發動機船なら大丈夫ださうですから、早く始めたら」

「漁師のことはお前にや解らんから、そんな[illegible]法なことをたくらむなんて、なお前——」

「だから漁のことはお父さんに委せて置きますよ。速く準備にかゝるですね」

「だけんど二千兩と云ふ大金をお前」

「金は出來たからいゝぢやありませんか。私がみんなに話して見ませう」

「お前、あれ、石井さんのぢやないかえ」裏へ出ようとすると、母がそつと訊いた。

默頭いた。母は默つて釜に松葉を焚き續けた。

父や伯父は、子や從弟に引ずられて動くものである。旅をしない人々が汽車に乘つた。淸水港に何度も往復した。悅治の菜葉服が川岸に立つやうになつた。

岸の集會所は、發動機のニュースで持切つた。噂は岸を傳はつて部落全體に擴つた。どんな種類でも、革命は囂々の批判を巻き起こすが、青年の胸を一杯にし、目の色をも變へる。

十二馬力の發動機を持つ、新しい大型の八噸の漁船は、處女漁に出る前に、狩野川を何度も上下した。其爆音は二月の寒空に響いて、村中をひつくり返へした。青年は勿論、女も老人も岸に走り集つた。

舟の舳には、山宮丸と染め抜いた長旗が搖れ、二十一人の乗組員は、元氣に白いシャツ一枚で舷に並んだ。櫓も無く走る船の雄々しい姿。俺等の發動機船。青年達はぢつとして居られない。ぼうと涙。手を無茶に振る。

「おーい」

「おーい」

船は祝の蜜柑を岸に投げて、西の風に向ひ、大どかに河口を出て行つた。

其日も其夜も、我入道は焦慮に過ごした。骰子を投げた瞬間だ。西風は凪ぎなかつた。

湯屋でも、八幡前の詰所でも、人々は興奮した。翌日は朝から、人々は岸に集つた。河口の向うには、白く泡立つた海が晴空の下に覗く丈。

不安な午前。

「はづれ」一族は天理教の信者。神樣にお願ひして！

機關に故障が起きたのか。人々は晝食を取らなかつた。

然し、夕近く機械の音を聞きつけた時、村は凱旋の叫びを擧げた。人々は驅け廻つた。誰とも言葉を掛け合つた。船は川に入ると、舳に旗を立つた。大漁のしるし。陸の人々は、舟脚で、積んだ魚の量を計つた。鯖か、鯛か、鰆か、口論も始まつた。

「おーい。漁はなんだーあ」

船は勢良く沼津に川を上る。陸でも走る。村中の人々は、「はづれ」の家を一杯にし、小字東向に溢れた。一晩の鯖漁が百二十貫と聞いて、村中が茹つた。

百二十貫つて、俺達小舟の五十倍ぢやないか。次の川子の潮の漁は二百貫！ 強制的失業期に、一夜二百貫の漁。お天道さんがお山（富士は北に在り）から昇ると云ふものだ。

かうして、村は、數軒づつ共同して發動機船を用ふる機運に向つた。

二

「…………」

「十三人連れて來たが、みんな粒が揃つてる。値もいゝが。うちの松（松雄）なんて三圓だつたがな。何んでも高くなつたもんさ」

「うちの番はまだかね」

「みんな先約だつてこんだが、矢つ張り手金を握らせて置かなくちや、いかんやうだ」

隣の話。

狹い部屋に一杯な三月の陽をたのしんでゐる一太郎の耳には、近所の生活が遠慮なく潛り込む。家がくつつき合つて、裏の狹い桃畑に滿開の花が、不調和に見える。

「はづれでも貰ふらしい」

漁村では男の頭數が入用だ。漁の上りは雜費を差引いて後、乘組員に等分する。船は二人又は三人に數へる。沖に出た者は、十五以下は半代（半分）、以上は一代（一人分）、釣の熟練、働きの如何を問はずに、皆分前を受ける。從つて家庭では、一人でも多くの男を船に載せようとする。特に、四五軒共同の發動機船が出來てからは——。

昔から、男を待つので、出産が喜ばれた。女が出來れば、多くは床下に葬つたが、今日の治世では、女も大切な子寶だ。其埋合せに、幾時からか男の養子が流行し始めたが、大正五六年頃から、周旋者が、毎年男兒を集めて來る樣になつた。汽車賃、日當位を支拂つて、全く厚意で行はれた事が、次第に商賣になつて、男兒に價格が付いて來た。

買はれた子供は、丁年迄、買主に一代稼す生きた機具だ。壞さぬ程度に大切に取扱はれる。二十一才過ぎれば、大抵、一年間「稼ぎどく」（儲を全部貰ふこと）して、それをもとに獨立の漁師になる。（かうした養子は現在六七百人はあらうと云ふ。

「うちでも貰ひ子するんですか」

非難の響が母にはする。

「父さんは年取つたしね、お前でも漁師して呉れりや良いが、

次郎一人ちや稼ぎも少くて」
　母は一太郎に遠慮し乍ら愚痴をこぼす。
「どこのうちでも、一人や二人貰つてるだから、お前だつて此前の樣に反對しまいつて、父さんも云つてたよ」
　貧しい者も、より弱い者を搾取する。
　父母に此事で反對しても何になる。
「貰はれて來る子だつて、お前、仕合せだよ。家に居れば食ふか食はずで、人間にもならないが、かうして來れば、自分の子と同じに育てられるし、立派な漁師になれるものね」
　母は眼鏡を外して、縫針を休めた。
「お母さんは樂天家ですから」
「いやさ、次郎をご覧、小學校を卒へるからずつと沖に行く。そして漁師になる。貰つた子の運と、お前、どう違ふかね」
「次郎は海が好きだから良いですが」
「好き嫌ひで商賣をきめるなんて、誰にも出來る事ぢやないよ。お前は學校ができたから仕合せだつたけれど。うちに産れたつて、貰はれて來たつて、どつちみち同じだらう。學問したお前にはさう思へんかね」

「――――」
「晝過ぎに迎へに行くんだが、お前も見て呉れんかね」
「一人で早く行つてらつしやい。良い子を撰られて了ひますよ」
「捜いてゐる子が來るんだから……」
　藤枝、燒津方面には赤貧者が多い。周旋業者の出生地の關係もあつたらうが、其方面から男兒が主として集つた。然し間も無く品切れになつて、甲州、信州が目を付けられた。其機織地方では、男兒が漁村の女兒の地位にあるのだから。――毎日魚を食へる、活動寫眞を見れる、學校に行ける、適齢には家を貰へる、男兒に餌を閃かせて、商人は富士川を下り、我入道に十人位づゝ釣つて來るのだ。
「もう此三人になりました」
　大きい荘一は燒津、十三、私生兒、お袋は片付くし、家は樂、が十二指腸病者。
　小さい富藏は甲州子、誰の馬の骨だか解らないが、入籍の方法がなくて面倒。

そちらの米三も甲州、一年小學校にやるので厄介。

こんな風に、太い肚を出し乍ら、燒津から來た男は說明した。其男とビールの相手をして居る村の周旋屋が、小聲で一太郞の母に價格を傳へた。

賣買として、良いものを撰らうとしても、選び甲斐の無い殘品だつた。母は四十圓と汽車賃とを拂つて、青ぶくれの子を引取つた。病氣を神樣のお力で助けてやらう、よそに行つたら死んで了ふだらう。人助けと云ふ考が起るのだから母の心には賣買であるものか。

「莊一、俺の恩を忘れるな。俺が死んだら葬式には來いよ」厚い唇は、紫色。

三

春。

西風も凪いだ。

村全體ほつと溜息をする。

四隻の發動機船が我入道のものとなつた。共同する事は常に力だ。發動機船を共有した者は、豐になつた。此事は漁業に希望を繋がせる。魚の來るのを待たずに進んで探しに出れば、一夜二三百貫の漁があるのだ。

然し如何なる進步でも、それに與し得ない者がある。其上、發動機船を持つと云ふ事は、數軒共同しても、空腹に米俵を負ふよりも重荷である。そして村は依然飢ゑさうだ。

春は然し希望を孕んでゐる。——夏が近い。春から夏には色色の魚類が紛れ込む。三十貫の旗魚から、一尾三錢の鰯、こゝわ迄。潮の關係で、一夜に小魚が內海を充すことがある。釣糸について來るもの〻變化で之を知るが、こんな時漁村は息をつく。

其年は烏賊が——小さくて美味しい麥烏賊が、河口を出ると直、千本濱沖を埋めた。狩野川岸は洗はれた樣に、小舟は出拂つた。老人も子供も皆出掛けた。日の暮から夜中迄。危險の無い易い漁だ。海はアセチリン瓦斯の火で一杯。千本松原の別莊の客は、座敷から酒の肴に眺めるだらうが、我入道の男達は短い時間に出來る丈釣上げる爲に、一人が二三本の釣竿を使つて、烏賊の運動に從つて舟を流して行く。どの舟も三四百釣

上げて、翌朝には嬶達も燥ぎ廻る程の大漁だ。村は活氣立つて來た。

「篝火ハ漁業規則ニ依リ五月三十日迄嚴禁セラル、本晩ヨリ本規則ニ違反スル者ハ、容赦ナク處罰スベシ、四月五日」

警察署の告示が、村の告知板に貼られた。

然し晝寢て夜働く漁夫は、これを讀む時間がなかつた。女達は又一人として告知板などに注意する者が無い。

「六月迄篝火を焚いちやいけないつてよ」

學校歸りの子供が母親に告げる。

忙しい母は子供の顏に浮く笑には注意しない。

「何を馬鹿をぬかす！」

「だつて、先生が云つてたよ」

「まごまごしてないで、道具を運ぶんだよ」

子供達は、家から舟に釣道具の運び手である。父親はてぐすを舐めながら道具の手入れ。

「いくらおふれだつて、まだ三晩釣つた切りだのに、止めてたまるものか。烏賊はいつ迄も待つてるぢやなし、月夜にでもなつて見ろ、漁師は又日乾しだ」

どの舟もアセチリン瓦斯の用意して出て行つた。星の光が出る前に、內海には旣に火がついた。今夜も穩かで烏賊があがる（釣れる）。靜な村の留守居達は早く寢た。

其時、桃郷の巡査が自轉車で、組長の家へ驅け付けた。沼津からの警官も加はつた。——巡査の靴の音は、御用邸に高貴の方々の御滯在中、衞生注意を村に持つて來るか、滅多に無い不凶の知らせなので、其踏付ける特長のある足音で、道路に沿つた家の人々は、事件の到來に慄えた。

「追舟の用意して貰ひ度い」

組長は三人の巡査の前で首を横に振つた。

「私は沖にもう出ません」

「誰か探して貰ひ度い」

「川には一隻も居りません」

「三四十隻は殘つてゐる筈だ」

「みんな廢船です」

「——」

「よし誰か居ても、村の仲間を捕まへに旦那衆を載せて行く漁師は、此土地には一人だつてありません」

狩野川口の左岸に寄り添つた千軒の此部落は、此處丈で一世界をなしてゐる。一田甫渡つた隣り字でも「世間」と云つて、排撃する慣習がある。風と波とにさいなまれ乍ら、互に助け合つて世紀を越えて來た傳統は、部落が成長し、脹れた今日にも、生きて働くのであらう。

巡査が去ると、組長は、四小字の組頭を集めた。古老も加はつた。——「追舟」は、靜浦か沼津から必ず出るであらう。靜浦は今夜には遠過ぎる。沼津から。其時は、此の川を下つて海に出る。……

早速見張りを岸に立てた。舟の下るのを待つて第二段の作戰へ。

女達も襟を合せ乍ら出て來た。鷄も夜鳴する。(犬は一尾も飼つてない。そんな不生産的な贅澤が出來ないのだ)

チヤカチヤカ小蒸氣船が下つて行く。

夜の十時。

女達は歯が喰ひしばれない。寒い。」

「なんてことになつたんだ」

組長は決心して、我入道濱に三ヶ所、狼烟を擧げた。風の無い濱で、藁は焔を高く昂せた。

「十時になれば、宵釣は濟んでゐらア！」

狼煙を合圖に、篝火は點々と消えて行く。三十分も經つと、こ内海は全く暗黒。春の波が惰る氣に岸に這ひ上るだけ。

大事件が有る時に限つてあがる狼煙。五年に一度も昇らない煙。赴任して年を經ない巡査達はそれを知らなかつた。そして小蒸氣船は闇夜の海に突入したが、氣障なカチヤカチヤを鳴らして、隱れる漁船に警戒を與へることに終つた。

翌日の午后、四軒の組頭の家に、漁師の寄合ひが開かれた。然し普段漁師は沈默家だ。

彼等の相手は常に深い海、海は偉人の樣に威力をのし掛けて來る。頭を垂れて服して行く——これこそ海が漁師に與へた態度である。それに漁師は寢不足だ。

「今晩からは宵から追舟に出ると云ふが、篝火を焚かなけりや漁は出來ないし」

組頭の話に答へる者が無い。

漁の火を消せと云ふことだ。漁師に喰ふなと云ふことだ。憤つても口には出さない。凪を待つ時の我慢をする。

「カチヤカチヤを聞いたら燈を消すさ」

「捕まつたら捕まる迄だ」

囁き合ふ。

出漁時刻が來ると、默つて散じ、瓦斯道具を載せて岸を離れて了つた。辨當箱に、妻君は、力一杯飯を詰め込んで、持たせて見送る。

海は穩。烏賊は釣られるのを待つてゐる。

星もまどろむ。それだのに、今夜は、泥棒する樣だ。內海は先祖から股にかけた俺達のものだ。魚は天下の授り物。それだのに、巡査が踏み込むとは。

空巢狙ひの樣な焦慮はどうだ。

チヤカチヤカ音がする。

折角、舟に烏賊がついたのに燈を消すのか。

何の爲に作られた規則か。

捕はれた舟は篝火道具を沒收せられた。警官の心證を害した舟は、其儘汽船に引かれた。曉近く、珠數つなぎに引かれた十雙餘の舟の重みに、汽船は喘ぎ乍ら川を上つた。其舟脚の遲々たる態。岸に馳け出た女達も立腹した。忌々しい示威運動。——

長く連らなる小舟の尾。

茶目な子供が舟の上から手を振る。

誰が答へるものか。

沼津警察署は內も外もぎつしり漁師で詰つた。庭に櫻は滿開なのに、寢不足の男達の血走つた目。漁衣（都人は襤褸と思はう）に裸足。默々と庭を埋めて居る。拂つても動かない。

漁師を返へせ！

規則を撤回しろ！

「拘留に處せられるらしい」

囁が頭を撫でて行く。組頭は、漁師の代表者として警察の內に消えた。

署長は留守。次席が四人の代表者を、嚴めしく引見した。

——即時放免して下さい。

——出來ない。

——道具を返へして下さい。
——六月一日に返へす。
——規則の撤回に盡力して下さい。
——我々の權限外だ。

こんな風な取扱に、四人は腹を立てた。奥の手を閃かすに限る。

「署長さんに云つて下さい。即時放免しなければ、漁師達にも肚がある。河口に難船があつても、仲間の船でなければ、救難事業に手を染めません。其時どんな大事件が起るか、貴方も良く知つてませう」「我入道の青年は、其救難事業で年二人は死んでゐるぞ。而も其事業が公認されぬとか何とか云はれて、今迄死者は報いられもしないぞ」(他の一人、勘作が涙聲で註)「まあ默つて。其他、我々消防組は、沼津組合を脱退すると、青年は云つてます」「拘留するのはお爲になりませんぞ」

「———」

「我々は此儘引上げても良いのですが、それでは事件が紛糾しますから、御返事の頂ける迄、外で待つことにしませう」「署長に、隠れたりするのは卑怯だ、と傳へて下さい」(勘作)

「漁師には生きるか死ぬか、瀬戸際ですからな」

庭では皆坐り込んだ。漁師の妻君達は辨當を持つて馳けつけたが、門は巡査で堅められた。柵の外から大聲で應援し乍ら、握り飯の包を柵の隙間から入れた。

「歸される迄、みんな待つてゝおくんな」

拘留もなく皆歸へされた。然し規則の改正は警察權の外に在つた。

今夜から、かとて、疊の上に寢て居られるものか。烏賊が海一杯だ。瓦斯器具は没收されるには高價だ。皆古い石油ランプの塵を拂ふ。松の根を割つて松明の用意。

警官と根比べだ。部落全體の鬪だ。

静浦、内浦地方の定地漁業保護の規則だと云ふ。所が六月一日迄の篝火禁止が定地漁業に必要か、地許の漁師も疑問にして居る。法規の廢止に共同戰線を張らう。だが、差當り×××××、此春の豐年を取り逃がしてはならない。

四

一つの善例は多くの模倣を招く。
岸には二十六隻の發動機船が繋がれた。
機械が生活に入つてから、村も生意氣になつた。漁師も變つた。噸數と馬力に、競爭が始つた。若い衆は、菜葉服を喜んで着る。町の活動常設館に走る。夕相撲も、石擔の競技も、魅力を喪した。「ゴー」「バック」「ストップ」機關部の用語が、無精に青年を躍らせた。彼等の心は、新しいものでなくては充たされない。唯、風の夜若い娘とたのしむことが、親の代と變らない——

田子の瀬に集る鯖の量にも限りがあるらしい。然し一日內海を越えれば、海は果てしがない。伊豆七島にも往復した。鳥島にも出掛けた。御前崎の燈臺の幽に閃く光が、北斗星と一點に見える線上を、南に南にと下つた。

一夜の漁で歸れなくなつた。三四百貫の氷を積んで、三四晝夜の（遠洋？）漁業に出掛ける。櫓も櫂がなくなつたが、陸の無い海に置かれた果敢ない姿は、漁師の心臓を冷く毆り付ける。運命的な漁業の顏に覗き込まれるからだ。訴へる波の音。闇夜に星を手賴りに舵を握つて居れば、一太郎の父三吉でさへ、胸が重くなる。板ごの下には疲れ切つた若者の軀が重り合つて居る。單調な機關の音。飛沫が時々頰冠りした顏を撫でて行く。

今日の漁は荒れだつた。

急に立つた龍卷が、舟を卷き上げるかと思つた。皆平伏して抱き合つた。其風は直ぐ雷雨を呼んだ。浪を招いた。海が倒樣に墜ちた。雷光が目を射る。命物は板ごの下に投げ込め。舟は波の上を踊る。轉げ乍らも釣糸を離すな。一生漁師した者でも反吐を吐く。でも釣らねばならない。喰ひしばつた口が歪む。顏中涙。海は血だけら。魚と格鬪。

終れば濡れた上に皆坐つて了ふ。聲も出さない。舵手は忙いで舟を北に向ける。機關はフルスピード。

かうして歸り着けば、其日の夕には又海へ！　是が陸の生物の正しい生活であらうか。一太郎の父は、漁師を厭つた我子を、初めて理解出來る氣がする。——先祖の職を棄てる親不孝者と責めた子を。

「莊一が居ない」

朝烟の中にお山が浮び、一連の松原が滲み、牛臥山が見え出すと、暖な血が皆の體に廻り出す。

「莊一が居ない」誰か叫んだ。

「本當か」

「寢る時は確に俺の横に居た」

寢て居る者は起き出した。

「浪に浚はれたかな」

「寢る時は浪は無かつた」

「糞に起きて、手を外しちやつたんだ。漁に馴れなかつたからな」

(便所の無い舟で用をたすのは、熟練を要する技術だ)

三吉は舟を一廻轉した。然し一時間引返へしたが、海は陸路ではない。

「はづれの父さん、力を落しなさんな。折角五十圓出したんだが、諦めるだ」

三吉は妙に仲間に腹を立てた。

原因も解らず、村に歸り着いて姿の無かつた者は、發動機船になつてから、村で六人目だつた。

それから二三回目の復路。

月が良かつた。波も無い。空も海も澄んだ水。宇宙に張り切つた布を一裂にする小舟。賴母しい機械の音。船底に積んだ四五百貫の魚。寢ずに舵を持つても、三吉は疲れなかつた。舷を叩いて、一色の心を踊らせようとした。手を舵に置いてさへ居れば、五六時間後には家内の顏が見れるんだ。

出し拔けに、機械の音が止んだ。水底に沈んだかと思つた。

彈ける樣な沈默。

「悦次どうした」

舵を握り締めて立上り、三吉は機關室を呼んだ。

「動かない」

再び沈默。

「まだか」

「どうしても駄目だ」

勢ひ込んだ聲が出て來た。性急に助手を起す樣子。機關部に雜多な音が、聲と一緒になつた。

「しまつた！　クランクが折れてるぞ」

悦次の突拍子もない聲。
「みんな起きろ。大事件だ」
助手が次の部室と甲板を怒鳴つた。
「修繕が出來ない、伯父さん」
「慌てるな。潮はどつちに流れてる。皆飯を喰つてかゝれ」
三吉は、事の重大を知つて、戸惑ひした船內に命令した。
「潮は無い」
糸を垂れた男が叫んだ。
「よし、其儘氣を付けてろ。南が少し吹く。四時半だな、灣からさう出ては居ない。此儘なら外に餘り流されないぞ。其內には、船が通りかゝる。」
三吉は神を念じ乍ら、努めて落ち着かうと、坐り直した。
「どうにかならんか」
割に簡單な機械ではあるが、他の漁師には手に負へぬ代物だ。機關室には澤山の頭が覗き込む。悦次は興奮して叫んだ。
「クランクだから駄目だ。みんな船の通るのを注意しろ」
「船を流すな。此通路から出ちまへば、お陀佛だぞ」
見渡す限りの太洋。砂漠の眞中で方向を失つた蟻の樣な小舟。若い者は甲板に立つて、目を皿にする。

漁が多ければ、魚の價が下る。經濟學上の原則だけれど、それが解せない。價格は、需要供給の關係で決まるのではなく、魚商人が勝手に決めるらしい。沼津の下川原の魚市場に、毎朝發動機船は魚を委せる。船は到着順に魚の價格決定を待つが、第一の船と第三のとは、譯もなく、異る價格に從はねばならない。而も兩者の魚は、一緒くたに、同一の氷樽で東京に送られるではないか。其價の差額は、商人が不當に儲けるのではなからうか。——三吉はぼんやり考へるやうになつた。

此夏の或日、內海がめじの大群で雨喰つた時小舟で晝の二時迄に二百七十も釣上げて、船を沈めて市場に運び、それから再び沖に出て、百足らずの漁をした時——何十年にない大漁だと喜こんだのに、第二の漁に急いで價を決めなかつた爲に、一尾六十錢だと後で通知を受けたではないか。二貫目近いめじが六十錢だとは、お天道樣でも笑はうが、漁師は抗議の持つてき場が無い。

馬鹿を漁師に喩へたと云ふが、本當だ。

村は發動機船が出來てから、飢えずに濟んだが、それよりも市場の商人の金廻りの良くなつたのはどうだ。沼津の魚市場は、主として我入道の魚を取扱つて居る。昨今は、市場は經濟的基礎が定まつて、强固な組合組織にしようとして居る——と三吉も噂を聞いた。

それだのに、偶な時化日に魚代を取りに行けば、商人共は辭を左右にして一日でも拂ひを延ばさうとする。陸で暮らせる僅な日を、お饒舌な、嘘の多い商人を相手に常に過すとは、魚を賣つたのか、買つたのか。一二合の酒を飲まされて返へされて了ふ。——どの漁師からも三吉は不平を聞いた。

一艘の發動機船が一回五六百貫の氷を必要とする樣になつてから、魚市場は氷の專賣權を握つて、價格を上げて行く。そして氷の積載量の尠い船の魚には、唯其故に安い價をつける。

「俺達は魚商人の云ふなりだ。畜生！」

「俺達が命を的に釣つて來たものを二束三文にしやがる」

三吉は「偉い息子」に手紙を書いた。——東京の魚河岸に行つて、魚問屋に直接取引する方法を研究して吳れと。東京を沼津に毛の生えた町位にしか考へない父は、子の當惑を知らなかつた。大學生たら何事も爲し得ると考へる父は、商人から搾取されてゐる狀態から、此子に依つて、脫出しようと無意識的に思つたのであらう。

五

一太郎は、手紙を見ると直に歸省した。兩親を避けて、從弟の悦次と夜遲く迄話すことが多かつた。悦次は青年會長をして居るので、多くの仲間を集めた。

昔から團結して來た村の傳統を、一層强固にし度い。解體しさうな村の團結を、再び締めて行き度い。——こんな抽象的な言葉は、漁師には馬の耳に念佛だ。敵を前にしなくては、團結は形を取らない。然し我入道には資本と勞働の對立がない。雇主と被傭者との對立が無い。檀那衆と自己とを識別する一線は、漁師の心に嚴存して居ても、それは對立ではない。

魚商人は漁師を搾取して居ると、念には念を入れて說く、それなら直に對抗的に出れるか。魚は腐敗し易いのに、爭つて其儘に賣買の機會を失したら、と氣を病む。

「村全體で組合を組織するのです」
然し漁師は踊らない。
村全體が一漁業組合を作つてゐるが、(縣の奬勵で)其爲に利益したことがあるか。組合なんて犬に喰はれろ。
「組合が魚の販賣をするのです」
漁師は默さだ。——俺達が商人の眞似をするんだつて、閑人の譫語さ。
——いゝえ、自分で商人の仕事をするのではありません。手取り早く云へば、村全體で魚市場の會社を作るのです。漁師が株主になつて、仕事は魚の仲買人がするのです。今でも沼津の魚市場で、皆賣上の一割を刎ねられてゐます。其一割を會社の收入とし、年末には、それを皆に配當するのです。さうすれば、會社は漁師のものであり、又仲買商を監督しますから、魚の價は今日の樣に、商人の肚を肥す爲に、矢鱈に下げられることはありません。——漁業組合が厭なら、會社にするのです。漁師の會社を作るんです……
　神武天皇祭前の村の寄り合ひ(會合)で、一太郎は説いた。
三吉及び數人の船主の他は、此青年の發案が、切實な問題に感じられなかつた。
　一太郎は作戰を變へた。此一二年來、發動機船漁になつてから、死亡率、危險率が斷然增加したが、個人も村もそれに備へて居ない爲に、遺族の困窮は見るに忍びない。然るに明日は誰の順番でもあり得るのだ。其不幸に備へなくては！　一太郎は喪中の村の心臟を叩いた。
　恰度其數日前に、一雙の發動機船は、一番値(最初に到着した船の魚の値が最も高い)で賣らうとして、スピードを出し過ぎた爲に(十八、九浬)大瀨崎近くして走つた儘轉覆した。かめの中に寢て居た十八人の漁師は、其儘死骸となつて出て來た。
　漁師達は、一太郎の言葉を聞き乍ら、其眞近い遭難を見た。冒した無數の危險と死亡者とを數へて見た。——一年の遭難死亡者は、過去五十ケ年のそれに匹敵するではないか。發動機船漁の景氣に盲して、漁師に覆ひ被さる死の影を見なかつたのだつた。
「クランクの折れた時、六時間後に歸りの船に見出されなかつ

たなら……」三吉も坐り直した。
「さうだ、其不幸に備へなくては――」
集つて居た村の重立つた二三十人は、一斉に云つた。
「然し、個人の力は弱い。生命保險を掛ける事は、皆さんには重荷です。村全體で何か共同基金を作らなくては駄目です」
村で死亡者のある時、各家庭から五錢づゝ集める古い慣習があるが、先祖達はかうして相互扶助をしたのであらう。其心は村の心臟となつて、何處かに今も脈打つてゐる筈である。死と向き合つて、其脈搏が感じられないだらうか。
「さうだ。村で基金を作らなくては駄目だな」
誰かゞ、其の男に云ひ掛ける。其男が肯いて、其前の男に意見を求める。かうして寄り合ひの意志が産れる。
「それにはどうしたらいゝか」
皆豐になつたと云ふものゝ、大抵發動機船の製造費の借金を負つてゐる。從つて、各戸で醵出するなんて考へるのは、漁師を知らないものである。現金として懐に入つた金は、體の一部分の樣に大切だ。
「沼津の魚市場は、賣上げの一割頭をはねるが、其中の一分位、此の基金に毎年納めてもいゝ筈だ。市場は俺達漁師があつてこそ行き立つのだから」硬骨組頭の勘作は云つた。
「市場は金が餘つて困つてるつて噂だ」(誰かの註)。一太郎は悦次の横に坐つて、果實を拾はうとする。
「どうでせう。組頭にお委せして、お祭の休みに魚市場に交渉して貰つたら」
「お前は學校へ歸つた方がいゝぜ」
其翌日、三吉は一太郎に云つた。
「事件が落着する迄は、居ようと思ひます」
「お前に關係ある事なのかな」
「だつて、是から私が必要です。沼津の市場で斷つたらば、其時こそ村全體で市場を作らなくてはならないから」
父は子の顔を見詰めた。
「村はお前なんかに用は無いんだ」
「――?」
「漁師が嫌ひで東京に行つた者なんか、惡い事は云はん、早く歸るんだな」

「あんた、だつて學校は休みですよ」

祭の御馳走を作つてる母は、言葉を挾んだ。

「學校があつても、僕は歸りません」

「村の事に口出ししないが良いぞ」

「何是ですか」

「お前は村の事が解るかい。村は俺達でやる。お前は好きな道で偉くなるさ」

父と子の目が會つた。目と目。反映したものは時代の相違ではなかつた。村と「世間」の距りであつた。漁師仲間と檀那衆との距りであつた。

「——」

「いゝや、お前にも云ひ分があらう。わしは組頭として云ふんだ」

「貴方は何か誤解して居ます。私は村の青年として、村の爲に……」

父親は聞かうとせずに立上つて、縁側から外へ行つて了つた。

「父さんが何と云つても、氣にしてはいかんよ」

母の慰めの言葉。彼は仰向けに寢た。開け放つた障子近くに、春の空が覗いてゐた。春は若い心を蘇らせる。

「僕は段々村の人に、他人になつて行く樣ですね。お辭儀する人はあつても、話し掛け手が無くなつた——」

「お前が偉くなつたからさ」

「そんな考へ方は恥です」

不氣嫌に起き上つた。默つて裏の悅次の處へ行く。

「東京へ歸つた方が矢張りいゝな」

悅次は尊敬する從兄に、ぶつきら棒に答へた。

「君も。君迄さう思ふのかね」

「——」

「これからが僕のすべき事だと思はんかね」

「漁師は曲りなりにも自分でやらなけりや氣が濟まないから」

「僕も漁師の仲間の心算だけれど」

從弟はそれには答へず、一太郎の希望する樣な組合を漁師は作るだらう、外來者が誰でもそれに加はつて動けば、其爲に却つて此氣運を壞して了ふであらう、と加へた。

「漁師つてそんなもんです」

「外來者」一太郎は、そつと唇に載せた。

「さうです。規則（定款）を作る時には、あんたに見て貰ひます」

違つた世界の彼等だつたのか。

神武天皇祭は、海の神、大瀬明神の祭を兼ねて居る。裝ひを凝らした舟が何隻となく、狩野川を下り、內海を越えて、大瀬崎に至り、歸りは桃郷の御用邸下に集る。舟には太鼓と馬鹿踊り。夜は寄宿舍で大漁踊り。

然し此年は、馬鹿騒ぎの代りに、組頭會、組寄合ひ、村民大會と、會合が續いた。

其會合で、組頭と沼津の魚市場との交涉が報告された。――町の魚商の代表者は、組頭の提案を眞劍に取扱はなかつた。輕笑で迎へた。商人有つての漁師ぢやありませんか。昔から漁師に何か出來た例があるか、商人は肚の中を透けて見せた。

「漁師の力を見せてやらう」

「良し、下河原（沼津魚市場の所在地名）の舟が難船したつて、出てやるな」

「俺達を呑んで掛つて居やあがる」

「外來者」の居ない會合は暴風雨となつた。

「要するに我々の要求は、足で蹴られた。第二段として、どうするか、皆で相談して、今日にでも當り度いと思ひます」

勘作は立上つて、他の組頭に目を置き乍ら叫んだ。それに續いて色々の言葉が場內を飛んだ。

「かうなつた以上、我々の手で魚市場を作り、經營するより他ない。此肚をきめて今日の午後、最後に今一度當つて見ることにしたらどうだらう」勘作は續けた。

「贊成」いくつもの叫聲。

「それには先づ、魚市場をやる肚を決めて與れ！」

「解つた」「決めるぞ」

「此決心が無かつたら、我々組頭は次の交涉が出來ない」

個人の老は集合に潰されて、組頭の作つて置いた軌道の上を、皆興奮に押しのめされて進んだ。

「此夜も亦村民大會ださうだ」

祭の夕食の膳について、漁師は妻君に話すが、一人になつて見ると、何を叫んだか思出せない者が多かつた。

沼津の魚市場では、第二回の交渉を益々輕蔑した。立腹もした。漁師が魚市場を組織するつて！　町へ來ては、ろくに對話さへ出來ないではないか。何百年海を相手にした人々が、一刻を爭ふ生物の市場を經營するなんて、冗談も休み休み云ふもんだ。生活が多少樂になつたからとて、調にのるもんじやない。漁師は漁師、商人は商人、持ちつもたれつの世の中だ。難くせつけるのも、いゝかげんにして貰ひ度い。

「村へ歸つて傳へて貰ひませう。好きなようにおやんなさい、が俺達に難題を持ち込むのは是でお了ひにしてくんさいつて」

四月三日の夜。最後通牒を受けた村民大會。

「下河原の奴等に負けるものか」

「村が潰ぶれる迄やるぞ」

「よし、火事があつても行くな」（註、火事は沼津の名物）

始めから暴風だつた。あらゆる言葉が吹き飛んだ。沈默の渦も時に怒濤となる。漁夫の心にも激浪はこみあがる。

「皆さん、大體の事を此處で決めて、後は組頭と委員に委せて下さい」溫厚な三吉が立つと、拍手する者があつた。

「讀み上げます。贊成ならば立上つて下さい。一、村全體で市場を組織し、舟の所有者は其株主たることを要す」皆立上つた。

「二、村の漁船は全部此組合市場に、魚を賣る事。沼津の商人に賣つた者は、村はちぶとする事」全部起立。

「三、組合の利益は、村の救濟基金に當てる事」同じ運動。

「一人の反對者もありません。追つて定款は村民大會の承認を經て、一ケ月以内に、市場の開設を致し度いものです」

八幡前の寄場は興奮した人々が詰めかけた。青年は萬歳を唱へた。お祭の賑ひは此處に移つた。休憩後其他の組頭が立つた。

「基本金二十萬圓、四千口。先二圓五十錢拂込み。小舟の所有者は、必ず一口以上持つこと。舟を所持しない者も希望の口數を所有し得ること。申込みは三日以内に組頭が取り纏め、殘りの口數は發動機船が平等に負擔すること」

直に可決。

「約二十戸の純農者は、組合から排除すること」可決。

「縣の奬勵に依る漁業組合の現會長に贊成を求むるの可否」

會長は村の唯一の富豪、眞島氏であるが、村の平和上その贊成を得て、同時に漁業組合(假令名義上の存在に止るにしろ)と提携することを老人は主張し、青年は氏が網持ちではあるが、現に漁業に從事しない故に排撃す可きだと反對して、爭つた。

漁は續いて、魚は沼津の市場に運ばれた。漁師に何が出來るものか。強く出れば良いんだ——搾取階級らしい微笑を、商人はした。

然し組頭外委員六名は、出漁せずに村民大會の決議の實行にかかつた。川に臨んだ三百坪が買收された。全村千二百戸、各戸平均一株。小舟八百隻、一株。他は發動機船が負擔して第一の拂込みも濟んだ。定款通り役員も選出された。村に在つた小賣商人が仲買人の役を買つて出た。五月一日を期して、村は新生の第一歩を踏まうとした。

我入道の團結を見くびつた町の商人達も、事の面倒を感じ出した。救濟基金に賣上高の二分を(漁師の申出は一分であつたのに)提供して、組合の解體を要求した。

波瀾に遭つて乘切ることが、漁師の職業的本能だ。其誘惑も最早魅力がなくなつた。組合は既に進水を終つたのだ。五月一日を待つてるのだ。(メーデーを選んだと考えてはいけない。そんな洒落氣を出すのは、漁師の柄ではない。それに新聞購讀も贅澤とされてゐる)

村端れの川岸に、新しい市場は、トタン屋根を陽に反映してゐる。旭日旗が高々と揺れてゐる。魚市場が開かれて小學校の運動會のようだ。組頭は椅子に掛けてゐる。(兒は先生のようだいと批評する)三人の急造仲買人は、勢よく馳けたり、叫んだり、耳に挾んだ筆を落したり。舟が着く度に野生的言葉が飛び廻る。鯖の新しい山。役員、菜葉服、はちまき、嬶、餓鬼達、身動きも出來やしない。

どうせ長續きのしない組合市場だと、沼津の魚商人は高を括つてゐたけれど、市場は圓滑に運轉して、商人の胴卷は、それ

につれて嶮しくなる。我入道の市場を崩さなくては！ 商人は一勢に攻撃に出た。發動機船を新造する時の資金の大部分は、此商人達から出たのだつた。魚を賣らなければ、負債を返えせ。是は漁師の團結力を弱めるてだ。返濟しなければ訴訟する。「お上」を怖れる慣習上、訴訟の聲で漁師は、慄えて魚を持ち込む。それで市場は崩れて行かう……その他、商人は魚の値を上げた。迎舟を出して魚を買取らうと始めた。迎舟は何隻となく川口に待つて、狩野川に歸る漁船に絡みつき高價で、板子下（かめ）の魚を釣らうと努める。

「我入道の市場では、今朝五十掛け（一貫目、五十錢）だが、六十五掛で引取らう」叫ぶ。

發動機船は、勢よく「俺達の市場」に一直線に滑り込む。が小魚釣りの小舟には、迎舟は大きい誘惑だつた。發動機船の並んだ中に、昔の儘の小舟を挾んで、僅二三貫の收獲を市場の山に加へることは、進歩に遲れた氣辱さもあり、少しでも儲かる機會を掴み度い…… 小舟がたて込んで歸る時は互の目を怖れるが、川口の外で他の舟の見えない時には、迎舟に魚を渡すのは手輕だ。かくて村の市場に備付けた帖簿に、出漁しても魚を持込まぬ小舟の分は白く澤山殘つて來た。借金の催促も漁師の妻君達の心を村の市場から離さうとして來た。

我等の組合市場を救へ、護れ。悦次は青年會で強調した。難船のある時救助船を出すように、川口の外に裏切船の捕獲を、數人で青年會の名で始めた。六月の漁は岸近い晝のうずわであつた。漁船に扮して商人の迎舟は漁船の中を縫り廻り魚を集めた。大たもで一渡しすれば、取引が終る。他に知られない簡單さ。そして商人共は舌を出して、村の市場前を、舟脚重く川を上つて町へ行く。悦次達の船は、ドンの鳴る迄に三隻の裏切りを捕へて引上げ、組合の役員に、村はちぶの處罰を請求した。

村はちぶ、名稱はあつたが、嘗て行はれなかつた制裁に、部落は青くなつた。部落の商人は取引を中止。村人は挨拶もしてはならない。部落の敵として、制裁は嚴守された。これに對する恐怖は、組合市場を死守しなくてはならない狀態に、部落全體を導いた。

他力組合市場は、頭がないと危ぶまれたが、其活動は魚の取引に止まらなかつた。沼津の商人の漁師に對する債收を、代つ

て辨濟した。發動機船の新造、改造に資金を提供した。篝火の規則改正の運動の任を引受けた。避難基金を設けた。冷藏用の氷を共同販賣した。かくして、部落の經濟を沼津から獨立させた。

　重ねて云ふ。弱い者も團結すれば、何物かをなし得る。そして一の成功は他の模倣者を呼ぶ。買はれて來た子供達の心に、此敎訓が何をも殘さなかつたらうか。

七

　九月上旬。夏漁と秋漁との間の休養日が續く。内海の小魚は水が澄んで去り、田子の瀬の鯖には間がある。靑年に戀愛の夜が續く。——愛し合ふ。結果が目立つたら、知人の家に二人で隱れる。知人は其の子が嫡子となる迄の盡力をする。簡單なことだ。處が簡單に終らない例が起つた。「彼」が買はれた男であり、彼女が村の娘であつたから。その知人の努力も効がなかつた。村もはじめて「彼」を非難した。養家も遂に「彼」を國許へ送り返へした。此の事件は「彼等」の心に或る形を作らせた。

　九月九日の夜、沼津驛内の待合室に、三吉夫婦は一時間も前から來てゐる。一太郞が夜の特急で西下するのだ。一太郞は外交官補として渡佛する。然し村に寄つて別離を惜しむことを不可能にするものが、其の心にあつた。成り上り過ぎる姿を仲間に晒してはすまない。三吉夫婦も亦裏の家にも告げずに、控へ目に出て來た。

「あの子供は近所の貰子ぢやないかね」

　廣間の入口に十四五の兒が五人、ためらひ乍ら入つて來た。黃色な電燈の下におず〳〵した態度、十人足らずの客の中に、村の人を見付けて速に外に消えた。

「勘作さんとこの子もゐたようだが」

「又逃げるのだな」

　からして組をなして逃走するのがはやり出した。小さい乍ら團結すれば、單調な海の生活を脫することができる。陸には映畫で見る人生が轉げてゐる(？)どうせ村に止れば貰子だ！

　二人は外に出て見た。子供等は暗い羽目板に寄り添つて、跼んでゐる。

「何してる？」

「——」

「早く我入道に歸りた」

皆默つた塊。

「俺たちと一緒に歸らうな」

「うゝん。おら漁師はやだ。みんな横須賀へ行くだ」

「惡い量見を出しちやいかん。巡査に見付つたらどうする」

「ね、私と一緒に村に歸らうね」

其時、汽車が構内に飛込んだ。二人はプラツトホームに急ぎ出した。二人とも言葉が尠なかつた。周圍が餘り「世間」過ぎた。

「お前は波に弱かつたが、四十日も船では」

「船つて一萬噸ですから陸と同じです」

母は子に護符を渡した。子は父に支度金の殘額を。

「うちも今は樂だ。世間に出りや金がたよりだ」

父は拒んだが、短い停車で、汽車は急いで立つて了つた。

「漁師が嫌いで困つた子だつたが」父は獨言した。構外に出ると五人を連れ歸る氣を喪した。二人は人脚の稀な夜の街を通つて田圃に出た。それから小一里。星の夜は澄んでゐた。

「あんたも、そろそろ隱居する方がいゝね」

「わしも沖に飽きた」

牛臥山は行手に黑く臥してゐる。既に村は眠つてゐる。眠りかけた村の息が暖い。六七人の女が急いでやつて來た。裸足の者もある。

「まあ、はづれのお母さん、うちの富に會ひませんでしたか」

母は夫を見た。

「誰にも」

「五六人組で、又逃げたのだが。停車場へ行つちやゐまいか」

「今停車場から歸る處だが」

「一太郎を見送つて」

「すると汽船場かね」女逹は右に曲つた。

子供には好きなようにさせてやる可きだと、三吉ははつきり感じた。

（附記。皆さん、沼津市を訪れる機會がありましたら、千本松原から渡船で我入道に行つて御覽なさい。私の主人公一太郎は三年振りで本年歸り、故郷の村がすつかり名實共に沼津市の一部となつてゐるのに驚きました。全村火災にあつて、貧しかつた家の姿もなくなり、市區は改正せられ、全くの街となり、陸には自動車が驅け廻り、川には舊式な櫓は見度くもなくなりました。此發展が一に組合市場の經濟的援助に依るものであることを、誰でも語ります。漁火規則も望んだように改正されました。養子問題は其儘ですが、貰子しなくても喰える時世になつたと云つてゐます）

（三〇年七月）

編輯だより

◇現在の我國が不景氣のドン底にあるのは確な事實だ。勿論濱口内閣の消極政策の結果のみとは斷じ難いが、不景氣に對する濱口内閣は思ひ切つたる對應策を樹立せずんばたいへんな事になるだらふ。彼の帝都近くの熊谷附近が電燈よりランプに逆戻りしつつあるのは文明より暗黒への感じがする。そしてそれが全國的に波及しつつある。

◇否々、それのみでなく町村吏員小學教員の俸給減額俸給不拂、納税の不拂等々の事實が續々と出てくる。

◇そして見積歳入が激減し豫算編成は困難に陷り、いかにしてその辻褄を合はせるかに四苦八苦しているのが大藏當局である。既成政黨の政治家や政策で現時の失業對策や、經濟難の突破ができるであらふかとすべての民衆が眞劍に心配しだしてきた。

◇政友會も具體的の對策を以て國民に當らずんばもう何等の效果もないであらふ。

◇これが反面には藥價半減！の問題もおきてきた。できるなら何品でも半減、三分の一減になることを切望する。麥酒なぞは半價にすることは何でもないらしい。牛乳もその通り。

◇そして東京でも大阪でも馬鹿高い日本料理屋がだんだん形を潜めかけて來た。待合からカッフエーへ！淘汰さるるものは必ずこの不景氣時代で根こそぎに淘汰されよう。

◇一面以上の如くであるかと思ふと今日このごろ山岳熱スポーツ熱の昂揚はかかる悲慘なる事實を吹き飛ばしてしまふ。その對象について何と批判してよいか。

◇『乙號』一等國のイタリーは今回の大震災について自稱三大強國と呼號する我日本側の援助申出を斷然刎ねつけた。ムッソリニは反動と云はれても慥に一つの見識は有つている。左顧右眄せないところに男子としての信念が讀める。

◇貴族院で尤も人望があり、且つ才學に於ても優秀第一と稱せられた大河内正敏君突然政界を引退す。令息の關係から責任を明にしたものだそうな。罪九族に及ぶ我慣習はあまりに酷なところが多い。

◇殘暑がまだきつい「石の間に砂をゆるがし湧く水の清しきかなや我は見つるに」一誦涼味油然として湧く。

◇この頃の創作壇に潮の如く殺到しつつあるプロレタリア文學がもつと藝術的に、もつとスケールが大きくなることを衷心から祈る。

◇我社の新鋭文學叢書が最近讀書界での王座を占めておることは誰も否めない現象だ。

◇『現代日本文學全集』は『德富蘇峰集』を、『經濟學全集』は『統計總論・數理統計・人口統計』を配本した。前者は蘇峰學人、五十年に亘る文筆生活を象徴するエキスだ。統計學は、經濟現象の科學的研究の緊要に迫まられてゐる昨今、寔に機宜に適した讀物と稱してよい。一見無味に見える數の表現が、諸權威の達筆によつて、如何に興味深く讀まれ、また如何に多く示唆を與へられるか。

◇長らく本誌に連載せられて讀者の喝采を得てゐた河上博士の『第二貧乏物語』は、約三分の一以上の追錄を加へて、本月下旬、單行本として我社より出版される。難解なマルキシズムを一々卑近な例證を擧げつゝ、平易に判りやすく說き去り說き來る所、博士の獨壇場。今秋随一の讀物。

改造定價

册數	定價	郵税
壹册	五拾錢	參錢
半ヶ年	參圓	郵税不要
壹ヶ年	六圓	郵税不要

註文の注意

▲御註文は凡て前金に申受く前金切の時は發送を停止す

▲增大號其他定價變更に依る前金拂込不足の時は御拂込を待つて雜誌を發送す

▲外國よりの御註文は郵税實費を申受く

▲見本御請求の向は振替又は郵券にて定價通り御拂込ありたし但し郵券代用は一割增の事

▲御拂込は振替によらるゝを最も便利とす

昭和五年八月十八日 印刷納本
昭和五年九月一日 發行

(定價五拾錢)
(郵税三錢)

編輯兼發行兼印刷人 東京市芝區愛宕下町四ノ四〇 山本三生

印刷所 東京市牛込區市谷加賀町一ノ一二 秀英舍

發行所 東京芝區愛宕下町四ノ四〇 改造社
振替東京 八四〇二
電話芝(43) 一一二一 一一二三 一一二二 一一二四

『德富蘇峰集』成る！

（現代日本文學全集第四篇・八月配本）

（總內容）

新日本の青年（全部）
將來之日本（全部）
時務一家言（全部）
吉田松陰（全部）

『國民叢書』篇（上）

〔人物管見〕明治の二先生
〔靜思餘錄〕インスピレーション　故鄕　幽寂
〔文學斷片〕近來流行の政治小說を評す　歸省を讀む　梅花道人詩集に題す　文學者の新題目　熱海たより　文學社會の現狀
〔天然と人〕阿蘇の煙　東海道旅行記　日金山登臨　相模洋の月色
〔第二靜思餘錄〕品格
〔經世小策〕平民主義第二着の勝利
〔單刀直入錄〕勉强と怠惰　職業と天職　科學の將來　社會と言論の自由　六十二日間世界一週　金滿家と社會主義

〔寸鐵集〕櫻花の時節　綠陰幽艸　菊花　冬の景色　文學と世間　平民的文學　小說　所謂小說家　文學先生　文學者と生活　製本の時代　少年文學　俚歌　不レ破二樓蘭一終不レ還　飜譯難　社會黨の卵　ヴォルガ河の風光　日明

『國民叢書』篇（下）

〔文學漫錄〕文人　新聞記者　題目と主張　歷史小說　海舟先生と詩經を讀む　螢雪餘錄　漫興　葭草　梅花　逗子だより　東京の天然
〔漫興雜記〕德川幕府の外交　福地櫻癡　福澤翁　中江兆民　田口鼎軒　森田思軒　碌堂と矧川　內村と植村　吾友浮田　湖處子　蘇峰一夕話　めさまし艸　新俳句
〔世間と人間〕山路愛山に與ふ
〔社會と人物〕職工組合　光明寺三郎氏
〔日曜講壇〕文學と人生
〔人物偶評〕瘠我慢の說を讀む　大西操山　惠廡遜
〔第五日曜講壇〕偶然
〔讀書餘錄〕『蘭學事始』を讀む

『敬宇文集』を讀む　『一年有半』外より見たる日本人
〔第二天然と人〕豐公墓畔の花　北海道平原の秋　舞子濱の落日　天下第一の花
〔第八日曜講壇〕本年の花
〔第三天然と人〕郊行雜感

『蘇峰叢書』篇

〔名山遊記〕富士見臺詩碑建立の記
〔好書品題〕『思ひ出す人々』を讀む　朝の一時間　羽翼ある珍客　吾家の木蓮　庭上の木蓮花　春雨落花　山百合花
〔人物偶錄〕屑屋の籠
〔言志小錄〕修史述懷　即位禮參列の記
〔讀書と散步〕東京に對する愛憎　烟草と魔力

故舊篇

追憶一片　撫往相來　故洪水先生夫人　吾母の大祥忌　德富淇熊君の靈に諗ぐ　陳言一則　一日如夢の記　弔德富健次郎辭

雜纂

〔國民之友〕嗟呼國民之友生れたり
〔環球偶筆〕トルストイ翁を訪ふ
〔七十八日遊記〕長江の本流に入る　長江の雨景　落日江南江北山　漢口より長沙に向ふ　洞庭湖の村落的大筏　水碧沙明兩岸苔　宛然鄕國の好風光　岳麓山と岳麓書院　望湘亭の風景　洞庭湖の雙眼　白銀盤裡一靑螺　有望なる漢口　武昌の黃鶴樓　南京の歷史的感興　江天小、坐二英雄一　予は長江に心醉したり　長江の落日
〔山水隨緣記〕耶馬溪の記
〔烟霞勝遊記〕トラピストを訪ふの記
〔蘇峰隨筆〕秋
〔第二蘇峰隨筆〕萩
〔第一人物隨錄〕耶馬溪に於ける昔譚
〔野史亭獨語〕英國文豪と吉田松陰
○照影　○筆蹟　○年譜

大蘇峰の全貌！　明治大正文化の鳥瞰圖！

世界大衆文學全集 第二次增卷（各冊五十錢）

本全集を完成せしめる意味に於て、世界文學史上に光耀する黄金篇十四卷を選擇增卷する事に決し、新秋九月から配本する。斯て本全集は名實共に全大衆の讀物として、讀書界の王座を占むるに至つた。愛讀を期待する。

55	冬來なば	（ハツチンソン）	木村毅
56	クオ・ヴアヂス	（シエンキウイツチ）	直木三十五
57	ラ・バタイユ	（フアレール）	高橋邦太郎
58	千一夜物語	（戀愛篇）	森田草平
59	愛の學校	（アミーチス）	前田晁
60	ソーンダイク博士	（フリーマン）	水野泰舜
61	ヂエイン・エア（卷上）	（ブロンテイ）	遠藤壽
62	ヂエイン・エア（卷下）	（ブロンテイ）	遠藤壽
63	ウオタア・ベビ	（キングスレ）	阿部知二
64	沙翁物語（ラム） ワグネル物語（マツクスパデン）		菊池重三郎
65	女人出征	（サンデス）	千葉龜雄
66	聊齋志異	（蒲松齡）	田中貢太郎
67	西遊記	（邱處機）	弓館小鰐
68	八犬傳	（馬琴）	内田魯庵

世界大衆文學全集

第三十三回配本　二冊（九月上旬）

ブロンテイ女史作・遠藤壽譯

ヂェイン・エア（上下）

＝第二次增卷の第六十一卷・第六十二卷＝

嘗て英文壇に見ぬ特異な小説――パッションを自由奔放に表現した――「ヂェイン・エア」は倫敦の一書肆から出版されるや、歐洲文壇に一大センセーションを捲き起すと共に、一般讀者を魅了し、激讃嘆賞、重版に重版した問題の作品である。全篇を構成する生活闘爭と戀愛闘爭の二大脈搏は、著者ブロンテイ女史が女主人公ヂェインの生涯を借りた赤裸々の告白であり、哀訴である。故に躍如として漲る實感は、讀者の胸奥に犇々と迫つて行く。

激情家で而も冒し難い道念を持つ、薄倖の孤兒ヂェインは、幼時から社會の冷酷な苦汗を嘗めて、常に彼女の身邊に附纏ふ暗い影を友として成長した。かうした苦しい試煉に生きる彼女は、刺戟ある雄々しい生活に憧れてゐた。しかし、彼女も情の血に燃ゆる女である。或る日ヂェインは青年富豪ロチエスターを知つた。金力で購はれる快樂をし盡し、純眞の愛に飢ゑ、焦躁するロチエスターは、彼女の愛を得て甦生の歡びを感じ、遂に結婚した。が、彼女にとつては余りに果敢ない初戀の夢でしかなかつた。懊惱沈思の末、彼女は敢然意を決してロチエスターと別れ、放浪の旅をつゞけた。或る日飢ゑと疲勞の體を引ずつて、曠原を漂ふ半死のヂェインは、白皙美男の若い牧師セント・ヂョンの溫い腕に救はれた。果して彼女の第二の戀は幸福を齎したであらうか？　噫彼女の生涯は？

發行所　東京芝區愛宕下町　改造社　振替東京八四〇二

現代短歌全集（全二十卷）

第十二回配本（九月下旬）

（第十三卷）
伊藤左千夫集
岡麓集

配本濟

2 宮廷歌人七人集
3 落合直文・佐佐木信綱集
4 正岡子規・長塚節集
5 與謝野寛・與謝野晶子集
9 北原白秋・吉井勇集
10 石川啄木・土岐善麿集
11 若山牧水・前田夕暮集
12 齋藤茂吉・島木赤彥集
13 千樫・迢空・純集
17 女流歌人五人集

別卷
明治天皇御製集
昭憲皇太后御歌集

小酒井不木全集

＝第十五回配本（八月下旬）＝

第十五卷 鬪病餘談及斷片

〔內容一斑〕

鬪病餘談

○私の體驗を通しての肺病療養法○肺病患者の夫婦生活○夏季の不快感○肉體の不安○女性と早老○一時間健康法○病弱の青年に與ふる書。等々。

醫談

○双生兒は如何して生れるか○頭腦の體操○朴烈文子怪寫眞の醫學的觀察。等々。

犯罪隨筆

○空想の毒藥○墮胎國○ぎくりとする話○夜行列車の恐怖。等々。

其の他少年教訓小說十篇を收め名古屋見物・小酒井不木氏を懷ふ（諸名士執筆）を附す。

前回配本 第十四卷 探偵小說集

好色破邪顯正。綠柱石の寶冠。蜀江の錦。指紋研究家。眞夏の慘劇〔[illegible]〕

發行所 東京芝區愛宕下町 改造社 振替東京八四〇二

新鋭文學叢書

各冊 三十錢 送料各六錢

現文壇に清新潑剌の意氣を示す各派新鋭作家の全陣容だ!! 果然、此の旋風的賣行！ 澎湃たる大衆のかゝる支持は本叢書の眞價を裏付けるもの。装幀の新らしき典雅、我社ならでは成し得ぬ此の絶對廉價、正に叢書界空前の窮極廉價版だ！

各冊平均約三百五十頁 古賀春江氏劃期的装幀

東京芝區愛宕下町 改造社 振替東京八四〇二

- 黒島傳治著 浮動する地價
- 井伏鱒二著 なつかしき現實
- 平林たい子著 耕地
- 中村正常著 隕石の寝床
- 林芙美子著 放浪記
- 久野豐彦著 ボール紙の皇帝萬歳
- 岩藤雪夫著 屍の海
- 岡田禎子著 正子とその職業
- 龍膽寺雄著 放浪時代
- 立野信之著 情報
- 芹澤光治良著 ブルジョア
- 武田麟太郎著 反逆の呂律
- 窪川いね子著 研究會挿話
- 藤澤桓夫著 傷だらけの歌
- 中本たか子著 闘ひ
- 堀辰雄著 不器用な天使

古本販賣標準價

山川八郎著 日本甲冑の新研究	全2冊	參拾圓
東京帝國大學編 古文書時代鑑	全1冊	參拾八圓
同刊行會編 國書刊行會叢書	全230冊	七百五拾圓
同刊行會編 群書類從 正續編	全79冊	貳百六拾圓
井上通泰著 萬葉集新考	全8冊	貳拾圓
モリソン著 日本繪畫史 Morrison (A.): The Painters of Japan. in 2 vols.	全2冊	八拾圓
春陽堂版 逍遙全集	全15冊	貳拾五圓
早稻田大學編 早稻田文學	大1、2、3期揃	貳百五拾圓
伊原敏郎編 舞臺の團十郎	全1冊	貳拾五圓
法書會藏版 書苑	全100冊	八拾圓
平凡社版 世界美術全集	正自1至33卷	拾五圓
白揚社版 レーニン著作集	全10冊	八圓
上野書店版 マルクス主義講座	全13冊	拾圓
アルス版 大杉榮全集	全10冊	拾貳圓

…●●古本の販賣と買入●●…

古書の御註文は先づ在庫品の豐富な弊店へ——親切勉強迅速の御客樣本位です
註文蒐輯の爲錦繪和漢洋書寫本絕版稀覯書其他何んでも充分高價に買受けます

巖松堂書店古典部

地方にお住ひの方の爲御便宜を計り小包郵便で古本買入を行ひ着本次第送金し
ます。大量の部數御處分の節は書籍目錄を拜見し大體評價の上店員出張します

東京神田中猿樂町・神保町電停前・振替東京三八八九・電話九段二二六一

美術書買入標準價

國華社編 國華	初號以上500號迄揃	千五百圓
眞美協會編 眞美大觀	全20帙	參百圓
眞美書院編 日本名畫百選	全2帙	五拾五圓
住友家藏版 泉屋清賞	全6帙	貳百五拾圓
東京美術學校藏版 法隆寺大鏡	全64冊	壹百圓
審美書院編 東瀛珠光 正倉院御物圖錄	全6帙	貳百圓
國華社編 圓山四條畫鑑	全1帙	貳拾五圓
國華社編 南畫集	全3冊	貳拾五圓
審美書院編 東洋美術大觀	全15帙 特製	七百五拾圓
	並製	六百五拾圓
審美書院編 長春閣鑑賞	全6帙	百貳拾圓
井上清秀編 支那南畫集成	全36冊	貳拾五圓
大村西崖編 支那美術史 彫塑篇 圖共	全2冊	五拾圓
內務省藏版 特別保護 建造物及國寶帖	全3帙	百五拾圓
岩崎常正編 本草圖譜	全95冊	百六拾圓

ヴァン・ダイン作・武田晃譯（最新刊）

四六判四三五頁
定價壹圓五拾錢
送料貳拾錢

僧正殺人事件

全米を震駭させた
大虐殺事件の描破

一九三〇年度の全アメリカを震駭せしめた大虐殺史出づ。（かのクリッペン事件、ジャック・ゼ・リッパー事件、狼人事件以來、かく迄戰慄を齎したものは無い。最近、最尖鋭の獵奇冒險悲劇）この犯罪は科學が生んだ悲劇だ。全科學を綜合せる一九三〇年代の白晝夢だ。見よ、（マザー・グースの童謠が何故に人を殺したか?!弓と將棋が何故に殺人に累りありや?!相對性理論、非ゆうくりつど幾何が何故に犯罪に結び付くか?!天文學と殺人。新惑星の發見。ユーモアの精神分析そして何故にかくも多數の人々が死ななければならなかつたか??）犯罪研究の大家フイロ・ヴァンスはこの渦巻く事件、相續ぐ虐殺の眞中に身を投じ、いかに闘ひ、いかに解決したか？（コロンビヤ大學助教授アーネッスン氏、世界的理論物理學の大家デイラード教授、チエスの名手パーデー定石の創始者パーデー氏、アインスタイン理論の補正者スペルリング氏、全米弓術選手權保持者等はいかに活躍したか?）作者S・S・ヴァン・ダインはアメリカに於ける最高作家、氏の麗筆は今や全世界の讀書界を風靡壓倒してゐる。本書に來れ！一九三〇年の新鋭文學の最新飜譯出づ!!!

發行所 東京芝區愛宕下町 改造社 振替東京八四〇二

THE KAIZO, A MONTHLY REVIEW OF POLITICS, LITERATURE, SOCIAL AFFAIRS, ETC.
PRICE: FIFTY SEN A COPY, SIX YEN A YEAR
OFFICE: KAIZOSHA, ATAGOSHITA-MACHI SHIBA-KU, TOKIO.